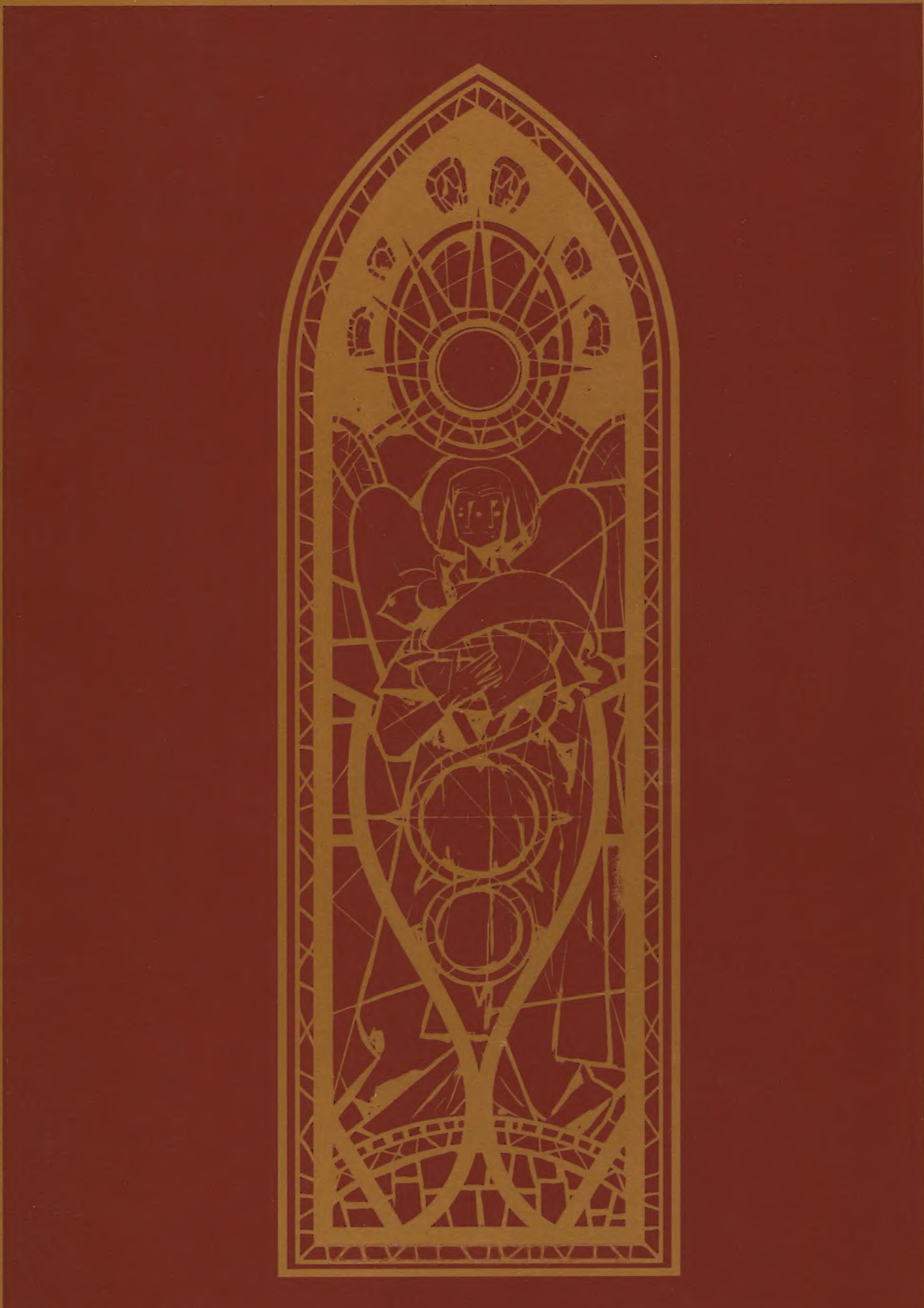
SQUARE ENIX

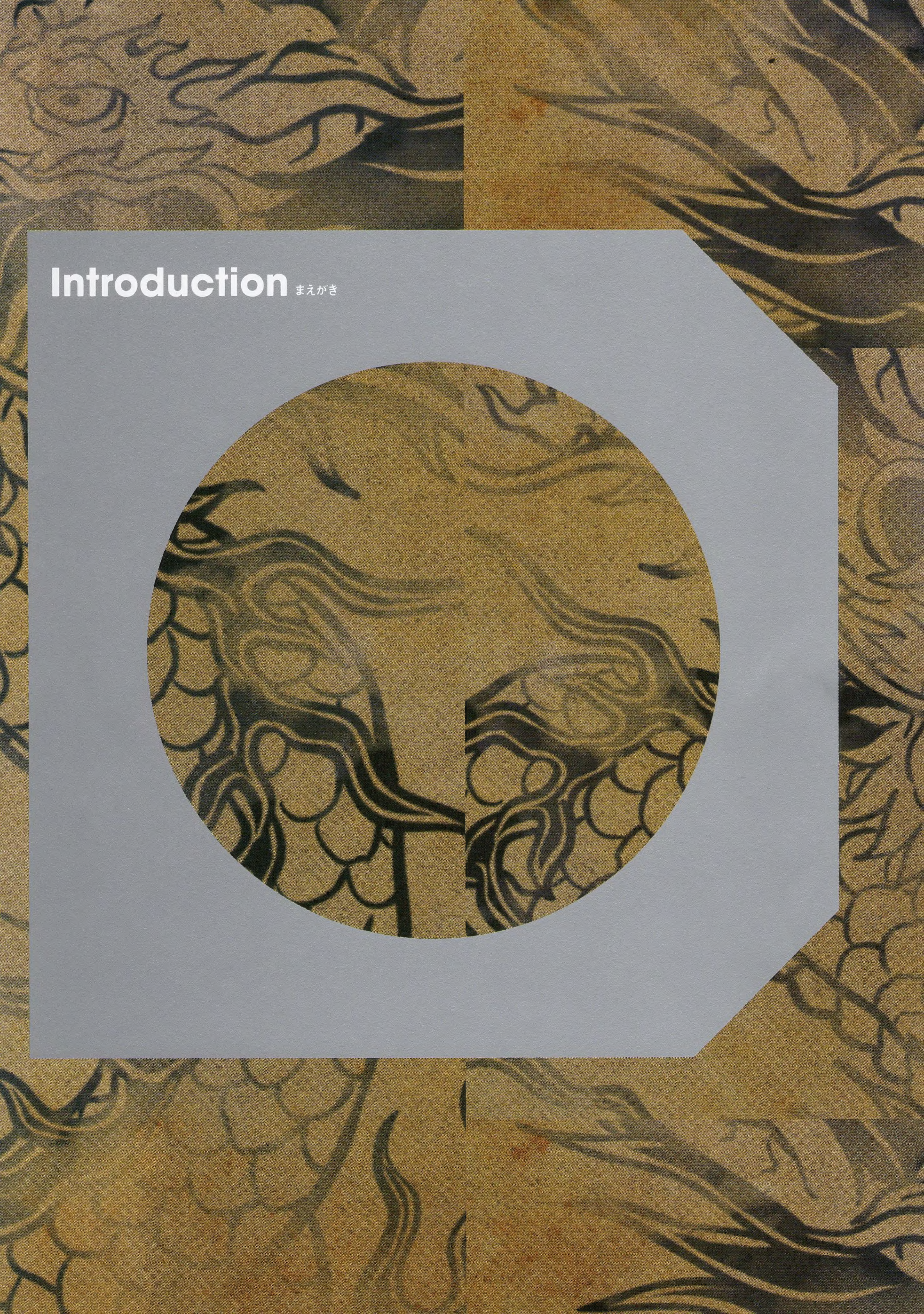




DRAG-ON DRAGOON

Since 2003

Introduction まえがき



「ドラゴン」と『ドラゴン』

『ドラッグ オン ドラグーン』、『ニーア レプリカント(ニーア ゲシュタルト)』、そして最新作である『ドラッグ オン ドラグーン3』において、ディレクターを務めたヨコオタロウ氏。彼は、『ドラッグ オン ドラグーン』を「ドラゴン」と略して呼ぶ。これを初めて耳にした人は、さぞかし驚かれたことだろう。ゲームのタイトルを指して、多くの場合最強のモンスターを指す名詞「ドラゴン」と称するのは、氏ならではの大胆さだ。もちろん、シリーズの全作品において、ドラゴンは重要な役割を担っている(一見関係のないようにも見える『ニーア レプリカント(ニーア ゲシュタルト)』においては、物語の起源とも言える「白塩化症候群」と呼ばれる病に大きく関わっている)。そこで、まずはこのシリーズを紐解く前に、「ドラゴン」について知っておきたい。

ドラゴンとは、神話や伝承の世界に生きる幻獣であり、多くの場合は恐怖、畏怖、そして混沌の象徴である。とりわけビデオゲームにおけるRPGというジャンルには、記号としてしばしば登場する強敵だ。そしてモンスターと呼ばれる敵のなかでは、大抵最強の部類。その身体的特徴を生物学的に分類するならば、やはり爬虫類なのだろうか。まるで巨大なトカゲを彷彿とさせる体からは、長い首と尾、そして太い足がにょっきりと生えている。しかし、手はやや小ぶりで、背にはコウモリのような翼がある。また、長い首の先には角の生えた頭があり、鋭い牙がずらりと並んだ口からは火、冷気、毒ガスといった息(ブレス)を吐くことができる。なお、吐く息や体の色は地、水、火、風の四大エレメントなどと関係しており、赤ならば火、黒ならば闇というように、そのエレメントを彷彿させるようなものと強く結びついている。さらにもうひとつドラゴンに言えること。それは、総じて知能が高く、人語を解し、魔法が使える者もいるということ。ドラゴンとは、まさに文武両道の生物なのである。

これらドラゴンに関する神話や伝承は、ご存じのとおり世界中に広まっていると言っていいだろう。西アジアからヨーロッパにかけて伝わる「Dragon(ドラゴン)」こそが所謂「ドラゴン」であるが、南アジアから東南アジアの「Naga(ナーガ)」、東南アジアから東アジアの「竜(龍)」も、文明の交流がある以上、無関係とは言い切れない。ただし身体的特徴は異なっていて、「ナーガ」や「竜(龍)」はともに胴の長いドラゴンとして知られている。また、西洋の「Dragon(ドラゴン)」という英語の名称の起源は、ギリシア語で「蛇」を意味する「Dracon(ドラコーン)」だと言われている。ドイツで「ドラゴン」を指す言葉は「Dracon(ドラコーン)」を語源とする「Drache(ドラッヘ)」と、ゲルマン語を語源とする「Lindworm(リントヴルム)」だ。なお、ドラッヘはトカゲ型のドラゴン、リントヴルムは蛇型のドラゴンである。また、イギリスには「Wyvern(ワイヴァーン)」と呼ばれる、手の部分が鳥のように翼と一体になった種類のドラゴンも存在する。このワイヴァーンの語源はフランス語の「Vivre(ヴィーヴル)」で、さらにこの語源は蛇の「マムシ」であるとされている。

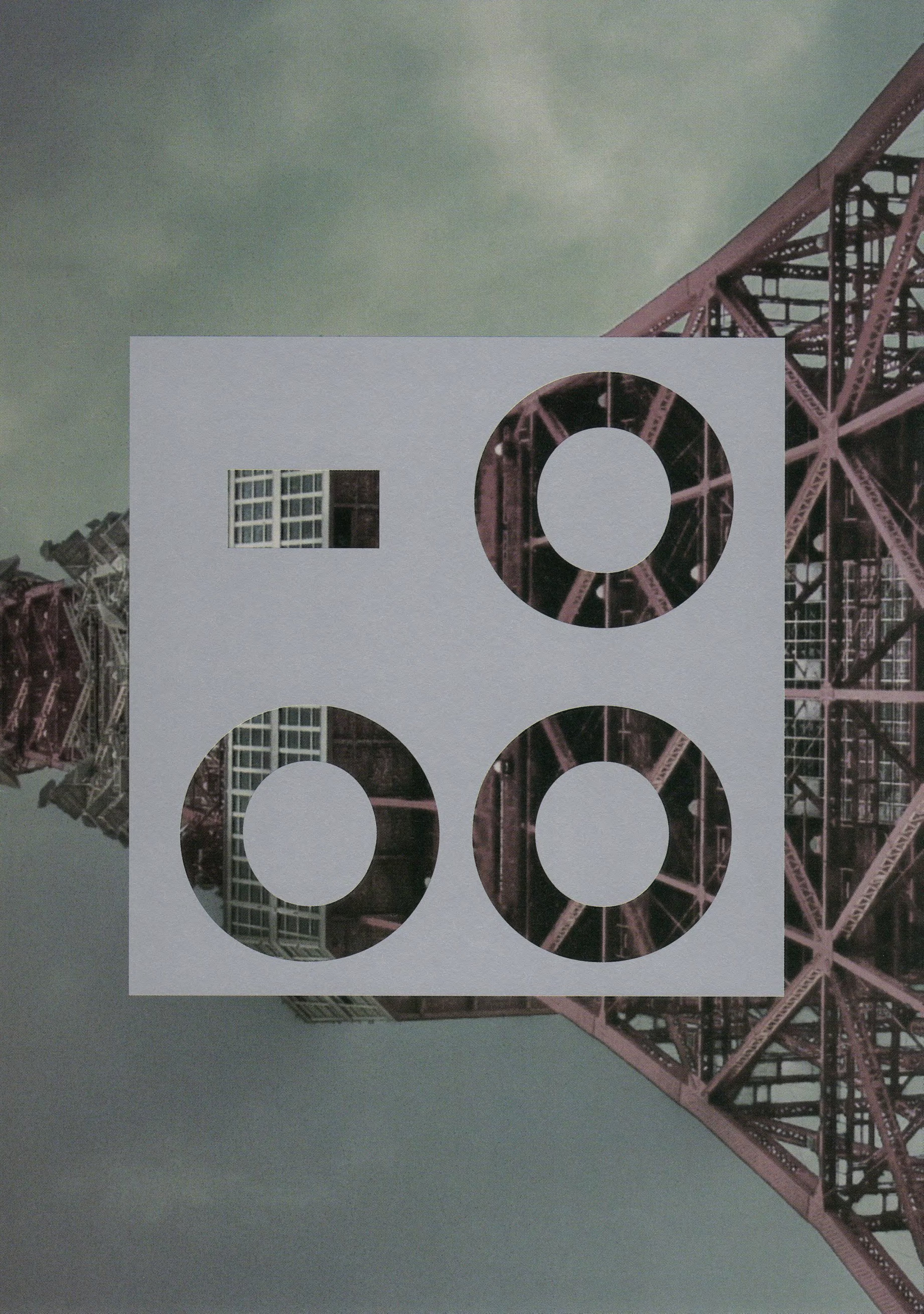
一般的に、西洋におけるこれらのドラゴンは「人に倒される者」として認識されている。これには、ほかの神々の存在を認めようとしなかったキリスト教の存在が大きく関係していて、彼らが異教徒の信じる神や自然の精霊を「悪魔」や「ドラゴン」として物語に組み込んできたためであると言われている。

一方、東洋の「竜(龍)」は、自然を象徴する者であり、「人と共存する者」である。どちらかと言うと、西洋のドラゴンの特徴を持った『ドラッグ オン ドラグーン』シリーズの「ドラゴン」は、本来であれば……ある時は財宝を守る守護者として、またある時は主人公の行く手を阻む強敵として、目の前に立ちふさがる「側」である。しかし、まるで東洋の竜(龍)のように、人間と手を組んでともに戦う。その間柄には「契約」という取り決めによってドライに線引きされてはいるものの、しかし仲がいいのである。それはある意味、「ドラゴン」の型破りだ。

しかし考えてもみてほしい。一説によれば、紀元前30年、あるいはそれ以前からの歴史を持つその最強生物は、多様な解釈がなされて数多の神話や伝承となっているではないか。たとえば「竜殺し」の異名を持つ英雄・ジークフリートと戦ったドラゴン・ファーブニルが、その血を全身に浴びた者に鋼のような何でも跳ね返せる強い力を与えたように。たとえば叙事詩『ベーオウルフ』に描かれたドラゴンが、死闘の末に倒れながらも対峙したゲーアスタス族の王・ベーオウルフを葬り去ったように。たとえは、英雄・ペルセウスが持ち帰ったメデューサの首からしたたり落ちた血液の中に、猛毒を持つドラゴン・バジリスクが生まれたように。たとえは、海の魔物・レヴィアタンとロバのあいだに生まれたドラゴン・タラスクスが聖女・マルタに聖水を振りかけられ、十字架を突きつけられたように。たとえば、ドラゴンに丸呑みされた聖マルガレータがドラゴンの体内にいながらも祈り続け、不思議な力でその腹を張り裂けさせたように。たとえば、聖ドナトゥスがドラゴンの口に唾を吐きかけただけで、そのドラゴンを死に至らしめたように。たとえば、台風神・テュポーンと怪物・エキドナの子にあたるドラゴン(またはガイアが自分だけで生んだ子供という説もある)・ラードーンが、ゼウスの宝物である黄金の林檎を守り続けたように。たとえば、翼を持つ蛇・ケツァルコアトルが、かつてトウモロコシの栽培方法や酒の造りかた、神々の儀式での崇拝の仕方などを人間たちに教えたように——。

赤き竜・アンヘルはカイムと契約を交わし、やがて恋に落ちた。黒竜・レグナは、兵器として利用するために真人類であるノウェを育てた。異次元よりやって来た赤き竜は巨人と戦い、病を蔓延させる要因となった——。そのいずれもが、数千年の時を経て新たに生まれた「ドラゴン」と、人との関わりの物語。そして、また新たな「ドラゴン」の物語がひとつ——。

そう考えると、ヨコオタロウ氏が『ドラッグ オン ドラグーン』を「ドラゴン」と略して呼ぶのは、当たり前のことなのかもしれない。



2003

◉1月10日　北朝鮮が核拡散防止条約(NPT)脱退を宣言。◉1月14日　小泉元首相が靖国神社を参拝。◉1月20日　第65代横綱・貴乃花が引退。◉1月27日　成田国際空港にて、全日本空輸のボーイング767型機による「全日空機成田空港オーバーラン事故」が発生。◉1月29日　朝青龍が第68代横綱に昇進し、モンゴル人初の横綱が誕生。◉2月1日　アメリカ航空宇宙局(NASA)のスペースシャトル・コロンビア号が、帰還のため大気圏に突入。その際、テキサス州の上空で空中分解し墜落。7名の宇宙飛行士は全員死亡。◉2月1日　2000年12月11日にニースで開かれた欧州理事会において合意された、ニース条約が発効。◉2月5日　1992年から存続していたバルカン半島中部の連邦国家・ユーゴスラビア連邦共和国がセルビア・モンテネグロに改称。◉2月18日　韓国大邱広域市にて地下鉄列車への放火事件「大邱地下鉄放火事件」が発生し、192人が死亡。◉2月24日　アメリカのピアノ弾き語りジャズ歌手であり、女優としても知られるノラ・ジョーンズが、第45回グラミー賞の主要4部門を含む8部門で受賞(ただし現地時間は2月23日)。◉2月24日　北朝鮮が、地対艦ミサイルを日本海に向けて発射。◉3月3日　大和銀行とあさひ銀行が合併し、りそな銀行が発足。ただしあさひ銀行の埼玉県内の店舗は、埼玉りそな銀行として分離。◉3月5日　アイドルグループSMAPの35枚目のシングル、「世界に一つだけの花」が発売。のちにダブルミリオンヒットを達成。◉3月10日　2月24日に続き、北朝鮮が地対艦ミサイルを日本海に向けて発射。◉3月12日　映画監督・深作欣二が前立腺癌により死去。◉3月17日　わかしお銀行が親会社である三井住友銀行と逆さ合併し、三井住友銀行が発足。◉3月19日　アメリカが主体となった有志連合が、イラク武装解除問題の進展義務違反を理由としてイラク侵攻を開始し、イラク戦争が開戦。◉3月19日　営団半蔵門線の水天宮前駅～押上駅間が開通。東急田園都市線～東武伊勢崎線・東武日光線の相互直通運転開始。◉3月24日　宮崎駿監督のアニメ映画「千と千尋の神隠し」が、第75回アカデミー賞長編アニメ映画賞を受賞。◉3月28日　宇宙開発事業団(NASDA)が種子島宇宙センターから通信放送技術衛星「かけはし」を搭載したH-IIロケット5号機を打ち上げる。◉3月30日　徳島県鳴門市から香川県を経由し、愛媛県四国中央市へつながる高速道路、高松自動車道が全線開通。◉3月30日　兵庫県西宮市にあった遊園地、阪神パーク甲子園住宅遊園が営業を終了。◉4月1日　旧郵政事業庁が日本郵政公社となり営業を開始。◉4月1日　さいたま市が法定人口50万以上であることを示す政令指定都市に移行。◉4月1日　香港出身、カナダ国籍の映画俳優・歌手、レスリー・チャンが自殺により死去。◉4月1日　株式会社スクウェアと株式会社エニックスが合併し、株式会社スクウェア・エニックスとなる。◉4月4日　新型肺炎のSARS(重症急性呼吸器症候群)が新感染症に指定され、7月の終息宣言までに32ヵ国で患者774人が死亡。◉4月7日　手塚治虫によるSF漫画「鉄腕アトム」のアトムが誕生したと設定されている日。◉4月11日　鹿児島市の花火工場にて原因不明の爆発事故が発生し、死者が10人にのぼる。◉4月13日　第15回統一地方選挙の前半選である都道県知事選挙、道府県議会選挙、政令指定都市市長選挙、市議選の投票が行われ、東京都では石原慎太郎都知事が大差で圧勝。◉4月14日　1953年のDNAの二重らせん構造の発見から50年、ヒトゲノムの全塩基配列を解析するプロジェクト「国際ヒトゲノム計画」により、ヒトゲノム解読の全作業が完了。◉4月15日　千葉県浦安市にあるディズニーキャラクターのテーマパーク、東京ディズニーランドが開園20周年を迎える。◉4月25日　東京・六本木にある複合施設、六本木ヒルズがグランドオープン。◉4月27日　第15回統一地方選挙の後半選である市区町村長選挙、市区町村議会選挙の投票日。◉4月28日　岐阜県の山奥にて、パナウェーブ研究所と名乗る白装束の集団がワゴン車などを停めて林道を占拠。◉4月28日　アップルが運営する音楽ダウンロード販売サービス「iTunes Music Store」がスタート。◉4月28日　日経平均株価が1982年来の安値水準である7607円88銭の大底を記録。◉5月1日　ヨルダンのアンマン国際空港にて、毎日新聞の記者が記念に持ち帰ろうとしたロケット砲のクラスター子弾が爆発。空港職員1人が死亡。◉5月6日　霊能力者として知られた宜保愛子が胃がんのため死去。◉5月9日　宇宙科学研究所(ISAS)が内之浦宇宙空間観測所にてM-Vロケット5号機とともに小惑星探査機「はやぶさ」を打ち上げ(2010年6月13日、地球に帰還)。◉5月10日～11日　リトアニアで欧州連合(EU)加盟をめぐる国民投票が実施され、投票者の91.1%が欧州連合加盟を支持(翌年5月にEU加盟国入りを果たす)。◉5月19日　弥生時代の始まりを、これまでより500年早い紀元前1000年頃からとする説を国立歴史民俗博物館が発表。◉5月22日　プロスキーヤーの三浦雄一郎が、世界最高齢である70歳でエベレストの登頂に成功。◉5月23日　個人情報保護法が、参議院本会議で可決されて成立。◉5月26日　宮城県沖にて地震が発生。最大震度6弱を記録。◉6月6日　戦後初めての有事法制「有事関連三法」が成立。◉6月6日　盧武鉉(ノ・ムヒョン)韓国大統領が国賓として来日し、天皇と会見。◉6月10日　りそなホールディングスに対し政府が1兆9600億円の公的資金注入を決定。◉6月11日　日本の長期金利がこれまでの過去最低の0.43%を記録。◉7月2日　プラハにて開かれた第115回IOC総会において、2010年の冬季オリンピック開催地がバンクーバーに決定。◉7月7日　石川県の能登半島にある地方管理空港、能登空港が開港。◉7月8日　プロ野球・セリーグの阪神タイガースに、18年ぶりにリーグ優勝へのマジックナンバー49が点灯。◉7月12日　初めて存命中の元米大統領の名が命名された原子力空母「ロナルド・レーガン」が就役。◉7月13日　アメリカ軍による統治後、初のイラク人によるイラクの暫定統治機関「イラク統治評議会」が設置。◉7月15日　家庭用ゲーム機、ファミリーコンピュータが発売されてから20周年を迎える。◉7月18日　元衆議院議員の辻元清美が、秘書給与詐欺容疑により逮捕。◉7月19日　映画「踊る大捜査線 THE MOVIE 2 レインボーブリッジを封鎖せよ!」が公開。日本映画ではこの年最高の興行成績を記録。◉7月20日　九州地方で集中豪雨が発生。死者23人。◉7月21日　世界水泳選手権100m平泳ぎで北島康介が世界新記録を樹立。7月24日には200m平泳ぎでも世界新記録で優勝し、2冠を達成。◉7月26日　イラクの復興支援への自衛隊派遣を合法化するための法律、イラク復興支援特別措置法が成立。◉7月26日　宮城県北部で震度6クラスの地震が3回発生。負傷者700人以上、およそ5000戸の住宅に被害がおよぶ。◉8月6日　中国・ロシア・ウズベキスタン・キルギスタン・タジキスタンの上海協力機構加盟5ヵ国が、テロ対策を目的とした合同軍事演習を実施。◉8月10日　沖縄に戦後初の鉄道となる沖縄都市モノレール「ゆいレール」が開業。◉8月14日　アメリカ・カナダの東部を中心とした大規模停電「BLACKOUT 2003(2003年北アメリカ大停電)」が発生。◉8月25日　住民基本台帳ネットワークシステム、通称「住基ネット」が本格的に稼働を開始。◉8月29日　フランス全土が記録的な猛暑。死者11000人以上。◉9月3日　国会議事堂に落雷。中央塔屋頂部が破損する。◉9月11日　"プレイステーション 2"用ソフト「ドラッグ オン ドラグーン」発売。◉9月15日　プロ野球・阪神タイガースが18年ぶりにセ・リーグで優勝。◉9月15日　滋賀県琵琶湖の志賀町沖約1.2kmでヨット転覆事故発生。船長とレジャー客11人の計12人が乗ったヨット「ファルコン」が転覆し、船長及び客5人の計6人が死亡、客1人が行方不明。戦後最悪のヨット転覆事故。◉9月16日　賃金の不払いに抗議した男性による事件、名古屋立てこもり放火事件が発生。◉9月16日　自民党総裁再選を受けて、小泉再改造内閣が成立(9月22日に発足)◉9月16日　東海道新幹線の新幹線100系が運行を終了。◉9月20日　先進7ヵ国(G7)財相会議開催。◉9月21日　自民党幹事長に、安倍晋三官房副長官が就任。◉9月26日　北海道釧路沖で地震が発生(2003年十勝沖地震)、死者1人、重軽傷者200人以上。◉9月26日　自由党が野党第1党の民主党へ合流し、新たに「民主党」となる。◉9月26日　プロ野球・読売ジャイアンツの原辰徳監督が辞任。◉9月28日　イタリアにて13時間半にもおよぶ大規模停電が発生。◉9月30日　福岡ダイエーホークス(現福岡ソフトバンクホークス)が、3年ぶりにパ・リーグ優勝を決める(その後、10月27日に4年ぶりの日本一の座に輝く)。◉10月1日　東海道新幹線の東京駅～新横浜駅間に品川駅が開業。◉10月1日　携帯通信事業者のジェイフォンが、世界最大手のボーダフォン(現ソフトバンクモバイル)にブランド名を変更。◉10月4日　TBS・毎日放送系にてアニメ「鋼の錬金術師」が放送開始(2004年10月2日まで)。◉10月7日　カリフォルニア州知事に俳優のアーノルド・シュワルツェネッガーが当選。◉10月10日　衆議院が解散。◉10月10日　1981年以前に捕獲されたトキのうち、最後の日本産トキである「キン」が死亡。◉10月15日　中国が初の有人宇宙船である「神舟5号」の打ち上げに成功。◉10月19日　マザー・テレサがカトリック教会の福者に列せられる。◉10月21日　天皇家の親族を名乗り結婚披露宴の祝儀などをだまし取っていたとして、自称「有栖川識仁」ら3人が詐欺容疑で逮捕。◉10月24日　日本テレビの番組プロデューサーが、自身制作の番組の視聴率が上がるように番組制作費からモニターに金銭を渡し、視聴を依頼する事件が勃発。◉10月28日　第43回衆議院総選挙が公示。◉11月1日　JR西日本が発行する公共交通機関乗車カードであり、電子マネーとしても利用できるICOCAの運用開始。◉11月9日　第43回衆議院総選挙が執行。◉11月15日　第67代横綱・武蔵丸が引退。◉11月19日　第43回衆院選で第2次小泉内閣が発足。◉11月20日　アメリカの歌手・マイケル・ジャクソンが性的虐待の容疑で逮捕される。◉11月23日　旧ソビエト連邦の構成国のひとつ、グルジアでエドゥアルド・シェワルナゼ大統領が辞任。◉11月29日　H-IIAロケット6号機が種子島宇宙センターから打上げられるも、SRB-A(固体ロケットブースタ)の1本が分離しなかったことから失敗。安全のために地上からの指令で爆破される。◉11月29日　地方銀行上位の足利銀行が、特別危機管理銀行の認定を受けて経営破綻し、一時国有化される。◉11月29日　Jリーグ第2ステージ最終節にて、横浜F・マリノスが優勝。◉12月1日　地上のデジタル方式の無線局により行われるテレビ放送「地上デジタルテレビ放送」が東京、大阪、名古屋で開始。◉12月8日　東南アジアスポーツ連盟(SEASF)が主催する総合競技大会「東南アジア競技大会」開催。◉12月11日　女子柔道の田村亮子がプロ野球オリックス・ブルーウェーブ(現オリックス・バファローズ)の谷佳知と結婚。◉12月12日　カナダでポール・マーティンが自由党代表選で対立候補のコップスを破り、第21代首相に就任。◉12月13日　アメリカ軍がイラク元大統領のサッダーム・フセインを、イラク中部ダウルの庭にあった地下穴で拘束。◉12月14日　埼玉県入間市の暴力団事務所で、暴力団組長ら5名が射殺される。別の暴力団組長を逮捕。◉12月15日　女優・広末涼子がモデル兼デザイナー・岡沢高宏と結婚(2008年に離婚)。◉12月19日　テロ支援国家に指定されていたリビアが大量破壊兵器の保有を認め、無条件での破棄を表明。

◉1月11日　青色発光ダイオードの発明対価をめぐる訴訟において、日亜化学工業株式会社と元社員の中村修二教授との和解が成立。発明者に対して8億4391万円を支払うことで決着。◉1月14日　アメリカ航空宇宙局(NASA)と欧州宇宙機関(ESA)によって開発され、1997年に打上げられた土星探査機「カッシーニ」に搭載されていた小探査機「ホイヘンス」が、衛星タイタンの地表に着陸。◉1月20日　ジョージ・W・ブッシュが、2000年の大統領選挙当選に続き、2期目のアメリカ合衆国大統領に就任。◉1月28日　プロ野球・福岡ソフトバンクホークスが正式に発足。王貞治監督が副社長とゼネラルマネージャーを兼任。◉2月15日　日本航空インターナショナル(現日本航空)が、東京国際空港などで全国初のICチェックインサービスを開始。◉2月17日　愛知県常滑市沖の伊勢湾海上の人工島に、中部国際空港(愛称：セントレア)が開港。◉2月26日　競馬騎手の武豊が、史上初の中央競馬重賞レース200勝を達成。◉2月26日　宇宙航空研究開発機構(JAXA)が種子島宇宙センターから国土交通省航空局・気象庁の衛星「運輸多目的衛星新1号」(MTSAT-1R)を搭載し、打ち上げた。のちに運輸多目的衛星新1号は「ひまわり6号」と命名される。◉2月28日　知的障害者の参加による国際的なスポーツ大会、スペシャルオリンピックス日本長野大会が開幕。◉3月6日　愛知高速交通東部丘陵線(愛称：Linimo=リニモ)が、日本初の浮上式リニアモーターカーの旅客線として開業。◉3月8日　「サンバの日」にちなんで、俳優・歌手の松平健がコンサート『マツケンサンバⅡin東京ドーム』を公演。◉3月14日　中国の第10期全国人民代表大会第3回大会にて、台湾海峡両岸関係に関する法律「反国家分裂法」が採択。◉3月19日　女優・仲間由紀恵が高校教師役を演じた学園ドラマ『ごくせん』の第2シリーズが最終回を迎え、シリーズの最高視聴率32.5%を記録。◉3月25日　2005年日本国際博覧会(愛知万博)「愛・地球博」が開幕(9月25日まで開催)。◉3月28日　インドネシア、スマトラ島沖でM8.6の地震「2005年スマトラ島沖地震」が発生。震源地付近では1000〜2000人が死亡。◉4月1日　2003年に成立した個人情報の保護に関する法律が全面施行。◉4月1日　ペイオフ（預金保護）完全施行。◉4月2日　第264代ローマ教皇、ヨハネ・パウロ2世が、敗血性ショックにより死去(4月8日に行われた葬儀には約400万人の人々が集まり、世界最大規模となった)。◉4月11日　2年以上にわたり大音量の音楽を鳴らし続けた奈良県の主婦が、近隣の住民に対し精神的、身体的な被害を与えたとして傷害容疑で奈良県警に逮捕される。◉4月15日　アニメ『ドラえもん』が声優陣を筆頭に全面リニューアルされ、その第1回目が放送。◉4月15日　黒人差別にあたるとされ絶版となっていた絵本「ちびくろ・さんぼ」が瑞雲舎より復刊。◉4月19日　コンクラーベ(教皇選挙)によってドイツ人枢機卿ヨーゼフ・ラッツィンガーが選出され、第265代ローマ教皇・ベネディクト16世となる。◉4月22日　「指パッチン」で人気を博したタレント・コメディアンのポール牧死去。◉4月25日　JR西日本の福知山線(JR宝塚線)、塚口駅〜尼崎駅間で脱線事故が発生。運転士と乗客合わせて107人が死亡。◉4月30日　ベトナム戦争(第二次インドシナ戦争)終結30周年。◉5月1日　北朝鮮が日本海に向けて新型の短距離弾道ミサイルを発射。日本海に墜落したため、本土に被害はなかった。◉5月1日　2004年11月20日から公開されたスタジオジブリ制作のアニメ映画『ハウルの動く城』が、この日までに観客動員数1500万人を記録。興行収入は196億円に達し、2004年と2005年の興行成績第1位となった。◉5月6日　プロ野球公式戦初のセ・リーグとパ・リーグの交流戦（インターリーグ）開幕。◉5月13日　プロゴルファーのタイガー・ウッズが、PGAツアーのバイロン・ネルソン・クラシックで予選落ちし、自身の持つ連続予選通過世界記録が142でストップ。◉5月15日　アメリカにてSF映画『スター・ウォーズ エピソード3／シスの復讐』公開(5月19日にイギリス、7月9日に日本でも公開)。◉5月30日　日本相撲協会事業部長の貴ノ花利彰(二子山満)が、口腔底癌により死去。◉6月8日　サッカー日本代表がFIFAワールドカップアジア最終予選で北朝鮮代表を下し、3大会連続で出場権を獲得。◉6月13日　児童性的虐待疑惑の米歌手、マイケル・ジャクソンの裁判に無罪判決。◉6月15日〜29日　FIFAワールドカップ・ドイツ大会のプレ大会、FIFAコンフェデレーションズカップ2005開幕。◉6月16日　“プレイステーション 2”用ソフト『ドラッグ オン ドラグーン2 -封印の紅、背徳の黒-』発売。◉6月26日　茨城県水海道市(現常総市)の養鶏場にて、国内初のH5N2型鳥インフルエンザが検出される。◉6月27日　柔道・谷亮子が妊娠。それに伴い、世界柔道選手権出場辞退を発表。◉6月28日　リリー・フランキー著の小説『東京タワー ～オカンとボクと、時々、オトン～』(扶桑社)発売。初版は3万部だったが、2006年10月31日には200万部を越えるベストセラーとなった◉7月4日　アメリカ航空宇宙局(NASA)の探査機ディープ・インパクトが、周期彗星であるテンペル第1彗星の核に衝突体を打ち込んだ。◉7月6日　シンガポールで行われた国際オリンピック委員会総会「第117次IOC総会」にて、2012年の夏季オリンピックの開催地がロンドンに決定(7月8日、野球・ソフトボールの競技除外が決定)。◉7月7日　イギリス・ロンドンにて、ほぼ同時に地下鉄の3か所、その約1時間後にバスが爆破される同時爆破事件が発生。死者56人、負傷者1000人以上。◉7月11日　プロレスラーの橋本真也が滞在先にて脳幹出血で倒れ、搬送先の病院にて死去。◉7月17日　アメリカ・カリフォルニア州のディズニーランドが開園50周年を迎える。◉7月26日　アメリカ・フロリダ州にあるケネディ宇宙センターにて、日本人宇宙飛行士・野口聡一が搭乗したスペースシャトル「ディスカバリー」の打ち上げに成功。(2週間のミッションを終え8月9日に地球に帰還)。　◉7月29日　アメリカ航空宇宙局(NASA)は、のちに準惑星エリスと命名される太陽系第10番目の惑星を発見したと発表。◉8月4日　アップルが日本国内で「iTunes Music Store」のサービスを開始。◉8月8日　郵政民営化関連法案が参議院で否決。第2次小泉改造内閣が衆議院の解散を決め、同日解散。◉8月12日　アメリカ航空宇宙局（NASA）が開発した火星探査機、マーズ・リコネッサンス・オービター打ち上げ。◉8月24日　首都圏新都市鉄道つくばエクスプレス線(東京・秋葉原駅〜茨城・つくば駅間)が開通。◉8月26日　ハリケーン「カトリーナ」が米国フロリダ州に上陸(8月29日にルイジアナ州ニューオーリンズに再上陸)。◉9月7日　メジャーリーグ、ニューヨーク・ヤンキースの松井秀喜外野手が日米通算400本塁打を達成。◉9月8日〜9月11日　エジプト・カイロにて世界柔道選手権が開催。◉9月11日　第44回衆議院議員総選挙の投票日。投票率は67%を超え、前回を大幅に上回った。◉9月12日　香港ディズニーランドが開業。◉9月12日　宇宙科学研究所(ISAS)が打ち上げた小惑星探査機「はやぶさ」が、小惑星「イトカワ」の軌道に到達(11月26日にはイトカワへの着陸と微粒子の採取に成功)。◉9月13日　任天堂が日本で携帯ゲーム機「ゲームボーイミクロ」を発売(9月19日に北米、11月4日に欧州でも発売)。◉9月18日　ドイツ連邦議会の総選挙実施。連立与党と野党・保守連合のいずれも過半数を獲得できなかった。◉9月21日　第163回特別国会召集。小泉純一郎自民党総裁が第89代内閣総理大臣に指名され、第3次小泉内閣が発足。◉9月24日　米国南部に最盛期の強さで「カトリーナ」を上回るハリケーン「リタ」が上陸。◉9月25日　大相撲九月場所にて横綱朝青龍が優勝を果たし、6場所連続優勝を達成。◉9月26日　メジャーリーグ、シカゴ・ホワイトソックスの井口資仁内野手が、日米通算1000本安打を達成。◉9月28日　プロ野球・パ・リーグがレギュラーシーズンを終了し、福岡ソフトバンクホークスが1位。新規参入の東北楽天ゴールデンイーグルスは最下位で1年目を終えた(38勝97敗1分)。◉9月29日　プロ野球・セ・リーグ、阪神タイガースが2年ぶり5度目のリーグ優勝。◉9月30日　メジャーリーグ、シアトル・マリナーズのイチロー外野手が、デビュー以来5年連続200本安打を達成(メジャーリーグでは史上初)。◉10月1日　日本とアメリカの両方で年金制度に加入していた者が、不利益を回避できる日米社会保障協定発効。◉10月1日　日本道路公団、首都高速道路公団、阪神高速道路公団、本州四国連絡橋公団の道路関係四公団が民営化。◉10月1日　日本原子力研究所と核燃料サイクル開発機構が統合再編し、日本原子力研究開発機構が発足。◉10月5日　プロ野球・読売ジャイアンツが、堀内恒夫監督の後任として原辰徳前監督の復帰を発表。◉10月8日　パキスタン北東部でマグニチュード7.6の地震が発生。死者はスマトラ島沖地震以来最悪の9万人以上におよんだ。◉10月10日　ドイツにてキリスト教民主同盟と社会民主党による連立政権が樹立。◉10月12日　中国・酒泉衛星発射センターが有人宇宙船「神舟6号」の打ち上げに成功(10月17日には回収に成功)。◉10月14日　第163回特別国会において、郵政民営化関連法案が成立。◉10月17日　プロ野球・パ・リーグ、千葉ロッテマリーンズがプレーオフを制し、31年ぶり5度目のリーグ優勝。◉10月19日　国内ブログサービスの登録者数が473万人、ソーシャルネットワーキングサービスの登録者数が393万人との調査結果を総務省が発表。◉10月22日　プロ野球・第56回日本シリーズが開幕。7回裏、千葉ロッテマリーンズが10-1でリードしたまま濃霧のため試合が中断。史上初の濃霧によるコールドゲームとなった。◉10月23日　競馬・菊花賞にて武豊騎手騎乗のディープインパクトが勝利。21世紀に入って初の3冠馬が誕生。◉10月24日　大西洋北部で史上最低気圧を記録し、「カトリーナ」、「リタ」を上回るハリケーン「ウィルマ」が、アメリカ・フロリダ半島に上陸。◉10月26日　沖縄県・宜野湾市の米軍普天間飛行場移設問題で、名護市の辺野古崎にある米軍キャンプ・シュワブ兵舎地区に建設することで日米の両国が基本合意。◉10月26日　プロ野球・日本シリーズ、千葉ロッテマリーンズが阪神タイガースに4連勝し、31年ぶり3度目の日本一を奪取(ボビー・バレンタイン監督が外国人監督初の日本シリーズ優勝監督となる)。◉11月6日　歌手・ミュージカル女優の本田美奈子.が、白血病により死去。◉11月9日　欧州宇宙機関（ESA）の金星探査機「ビーナス・エクスプレス」打ち上げ。◉11月22日　ドイツにてアンゲラ・メルケルが第8代連邦首相に就任(女性、ならびに旧東ドイツ出身者のドイツ首相就任は初)。◉11月22日　マイクロソフトが家庭用ゲーム機「Xbox 360」を北米にて発売(12月2日に欧州、12月10日に日本でも発売)。◉11月22日　城島健司捕手がメジャーリーグ、シアトル・マリナーズと3年契約を結ぶ事で合意。日本人捕手初のメジャーリーガーとなる。◉11月25日　日本の歌舞伎がユネスコの無形文化遺産に登録されることが決定。◉11月26日　大相撲十一月場所、横綱朝青龍が史上初の7連覇と年間6場所完全制覇を達成。年間84勝したことで、年間最多勝利記録も更新。◉11月30日　大相撲の関脇琴欧州が大関昇進(ヨーロッパ勢初の大関誕生)。◉12月1日　地上デジタルテレビ放送の受信可能範囲が拡大。新たに東北6県で放送開始。◉12月8日　ジュネーブ条約締約国会議にて、「赤十字」、「赤新月」に続く第3の赤十字運動のマーク「赤水晶」が承認。◉12月8日　新規上場した人材派遣業のジェイコム(現ジェイコムホールディングス)の株式を、みずほ証券(旧法人)が誤発注し株式市場を混乱させた。◉12月11日　女子柔道・福岡国際選手権において、日本勢が全8階級制覇を達成。◉12月31日　現行の協定世界時（UTC）23時59分60秒に、うるう秒(1秒)を挿入。




N
R
R
G

2010

◉1月1日　日本年金機構が発足。◉1月1日　フィンランドにて1634年から存在したすべての州が、約375年の歴史に幕を閉じ廃止。最上位の地方行政区画が県となった。◉1月1日　1964年から毎年元旦に放送されてきたフジテレビ『新春かくし芸大会』が、この年放送で47年の歴史に幕を閉じた。◉1月4日　ドバイに世界一の超高層ビル、ブルジュ・ハリファがオープン。全高(尖塔高)は828メートル、160階建て。◉1月4日　東京証券取引所で高速性・信頼性・拡張性を兼ね備えた株式売買システム「アローヘッド」が稼働を開始。◉1月8日　大相撲初場所後の2月1日に行われる日本相撲協会役員改選(理事候補)に、貴乃花親方が所属する二所ノ関一門を離脱して立候補する意思を表明。◉1月12日　ハイチにてマグニチュード7.0の地震が発生。死者は約31万6千人。◉1月12日　羽田空港にて高さ115.7メートルの新管制塔が運用開始。◉1月12日　バドミントン・潮田玲子との「オグシオペア」として活躍した小椋久美子が引退。◉1月17日　第67回ゴールデングローブ賞、映画賞のドラマ部門でCGを駆使した3D映画『アバター』が作品賞を受賞。◉1月27日　小説『ライ麦畑でつかまえて』の作者であるJ・D・サリンジャーが老衰のため死去。◉2月4日　石垣島にて2万年前のものとされる世界最古の人骨発見。◉2月4日　大相撲の横綱・朝青龍明徳が現役を引退(初場所中に暴力沙汰を起こしたとされる件で、横綱審議委員会が引退勧告を決議・責任を取る形で)。◉2月7日　コスタリカで大統領選挙が施行。国民解放党(PLN)のラウラ・チンチジャ元副大統領が当選し、同国初の女性大統領が誕生。◉2月7日　プロボクシング・WBAフライ級タイトルマッチで挑戦者の亀田大毅がチャンピオンのデンカオセーン・カオウィチットを3-0の判定で下し、WBCフライ級王者の亀田興毅と日本初の兄弟世界王者を達成。◉2月12日～28日　バンクーバーオリンピック(冬季)開催。日本は銀メダル3個、銅メダル2個を獲得。◉3月9日　タレント・映画監督の北野武が、フランス芸術文化勲章コマンドゥール章を受章。◉3月12日～21日　バンクーバーパラリンピック(冬期)開催。日本は金メダル3個、銀メダル3個、銅メダル5個を獲得。◉3月15日　東京と大阪の民放ラジオ局13社が、通常の放送と同時にradiko.jpにてインターネットにも番組配信する6ヵ月間の試験放送を開始。◉4月2日　プロ野球・読売ジャイアンツの1軍内野守備走塁コーチである木村拓也が、試合前のシートノック中に突然倒れる。広島大学病院に緊急搬送されてクモ膜下出血と診断され、同月7日に37歳の若さで息を引き取った。◉4月10日　ポーランド空軍ジェット旅客機のTu-154が、ロシア連邦西方スモレンスク州のスモレンスク北飛行場への着陸進入中に墜落。ポーランド大統領のレフ・カチンスキ夫妻をはじめ、ポーランドの政府要人を含む乗員乗客96名が全員死亡。◉4月12日～13日　アメリカのワシントンD.C.にて、第1回核安全サミットが開催。◉4月13日　3月27日のWBC世界フライ級王座統一戦、亀田興毅対ポンサクレック・ウォンジョンカム戦の試合終了後に、亀田興毅の父・亀田史郎が暴言を吐いた問題で、日本ボクシングコミッション(JBC)は亀田史郎のセコンドライセンス取り消し、亀田ジム会長・五十嵐紀行のクラブオーナーライセンスおよびプロモーターライセンスの無期限停止処分を決定。◉4月14日　中国西部、青海省玉樹チベット族自治州玉樹県でマグニチュード7.1の地震が発生。死者は2698人、1万5000軒もの民家が倒壊し、約10万人が住居を失った。◉4月14日　アイスランド南部のエイヤフィヤトラヨークトル火山が噴火。のちにヨーロッパのIFR(計器飛行方式)空域に火山灰が広がり、各国が空港を閉鎖。多くの航空機が欠航し、第二次世界大戦以後、もっともひどいとされる航空運行の混乱が生じた。◉4月22日　"プレイステーション 3"用ソフト『ニーア レプリカント』(NieR Replicant)、Xbox 360用ソフト『ニーア ゲシュタルト』(NieR Gestalt)発売。◉4月27日　歌手の徳永英明がアルバム『VOCALIST 4』で、オリコン週間アルバムチャート初登場1位を獲得。これにより1980年代から2010年代まで10年ごとにアルバムチャートの首位を獲得。男性アーティストとしてはオリコン史上初の快挙となった。◉5月1日～10月31日　中国・上海市にある上海世博園にて、上海国際博覧会が開催。◉5月6日　ダウ平均株価がわずか数分のあいだに1000ドル近くも急落するフラッシュ・クラッシュが発生。市場が一時パニックに陥った。◉5月9日　インドネシア・スマトラ島沖で地震が発生し、マグニチュード7.2を記録。◉5月14日～26日　アメリカ航空宇宙局(NASA)がスペースシャトル・アトランティス号にて、STS-132と呼ばれる国際宇宙ステーション(ISS)利用補給ミッションを敢行。◉5月21日　宇宙航空研究開発機構(JAXA)が、宇宙科学研究所(ISAS)の金星探査機「あかつき」を種子島宇宙センターから打ち上げた。◉5月22日　アラブ首長国連邦のドバイ国際空港を出発したエア・インディアのボーイング737型旅客機が、インド南部のマンガロール空港にて着陸に失敗。墜落・炎上する事故が発生した。乗員乗客166人中158人死亡。◉5月24日　元大相撲力士であり、元プロレスラーとして活躍したラッシャー木村が、腎不全による誤嚥性肺炎のため死去。◉5月29日　アメリカの俳優であり、映画プロデューサーとして知られるデニス・ホッパーが前立腺癌のため死去。◉6月4日　鳩山由紀夫内閣が総辞職し、民主党代表選挙にて第8代民主党代表に菅直人が選出。同日、首班指名選挙で第94代内閣総理大臣に指名される。同月8日、菅内閣が発足。◉6月11日～7月11日　アフリカ大陸で初のワールドカップ・第19回FIFAワールドカップ 南アフリカ大会が開幕。決勝は延長戦の末にスペインがオランダを1対0で下し、13回目の出場で初優勝した。◉6月13日　小惑星探査機「はやぶさ」が60億キロメートルにもおよぶ旅を終え、地球に帰還。大気圏再突入した際に燃え尽きたが、翌日カプセルが回収された。これにより、地球重力圏外にある天体の固体表面に着陸してのサンプルリターン(地球以外の天体や惑星間空間から試料を採取して持ち帰ること)に世界で初めて成功した。◉6月28日　高速道路を無料化した際の、地域経済への効果や環境への影響を把握することを目的として社会実験が開始された。◉7月2日　2003年からドイツ・ニーダーザクセン州の首相を務めていたクリスティアン・ヴルフが、ホルスト・ケーラーの辞任に伴い第10代ドイツ連邦共和国大統領に就任。建国以来最年少(当時51歳)の大統領が誕生した。◉7月5日　2011年7月の地上デジタルテレビ放送の完全移行を前提に、NHKと民間放送地上波テレビ放送局127社が画角16:9サイズでの放送に移行。◉7月6日　日本相撲協会の現役力士・年寄などによる野球賭博問題により、7月11日から始まる大相撲名古屋場所の中継放送をNHKが取りやめることに決定。本場所の中継を取りやめるのはテレビ放送開始以来初。◉7月11日　第22回参院選が実施され自民党が勝利。与党が過半数に届かなかったため、3年ぶりのねじれ国会となった。◉7月20日～23日　1987年に起こった大韓航空機爆破事件の実行犯・金賢姫元工作員が、北朝鮮日本人拉致事件の被害者家族との面会等を目的に来日。◉8月9日　歌手の宇多田ヒカルが、自身の公式ブログにてアーティスト活動を年内で無期限休止する意向を宣言。2012年11月17日には、約2年ぶりに新曲『桜流し』が発表された。◉8月18日　イラクに駐留していた米軍の戦闘部隊が撤退を完了。◉9月7日　尖閣諸島付近の海域をパトロールしていた日本の巡視船「みずき」が、中国籍の不審船を発見。日本領海からの退去勧告を無視して違法操業を続行し、逃走時に巡視船「みずき」と「よなくに」に衝突し破損させた。◉9月11日　俳優であり、コメディアンやトロンボーン奏者としても知られる谷啓が、脳挫傷のため死去。映画『釣りバカ日誌20 ファイナル』(2009年)が遺作となった。◉9月17日　大相撲九月場所の6日目、横綱白鵬が連勝数を53に伸ばし、歴代2位タイの記録を達成。その後26日の千秋楽まで勝ち続けて優勝。連勝記録も62まで伸ばした。◉9月21日　アテネオリンピック、北京オリンピックの女子柔道63kg級金メダリスト・谷本歩実が引退を表明。◉9月21日　プロ野球、パ・リーグで、福岡ソフトバンクホークスが東北楽天ゴールデンイーグルスに敗れたものの、埼玉西武ライオンズが北海道日本ハムファイターズに敗れたため前身の福岡ダイエーホークス以来7年ぶりのリーグ優勝を決めた。◉10月1日　プロ野球、セ・リーグで、阪神タイガースが広島東洋カープに敗れる。これにより、この日試合のなかった中日ドラゴンズが4年ぶりのリーグ優勝を決めた。◉10月2日　尖閣諸島中国漁船衝突事件に端を発した数千人規模の反政府・反中国デモが、日本の30都道府県にて行われた。◉10月2日　大相撲の元大関・千代大海が引退。断髪式では著名人ら360人が参加。それに加え本人の希望で母親が髷に鋏を入れ、最後に師匠である九重親方が大銀杏を切り落とした。翌日3日には元横綱・朝青龍が引退。断髪式に日本国内外の著名人ら380人が参加し、断髪式後は土俵に別れのキスをした。◉10月3日　ブラジルでブラジル連邦共和国大統領選挙および国会議員選挙が施行。同月31日に大統領選挙の決選投票が施行され、ジョゼ・セラを下したジルマ・ルセフが勝利。ブラジル初の女性大統領が誕生した。◉10月8日　アメリカ・ワシントンD.C.にて、G7主要国財務相・中央銀行総裁会議を開催。◉10月15日　2000年シドニー、2004年アテネオリンピックの女子柔道48キロ級金メダリスト・谷亮子が引退を表明。◉10月16日　2004年アテネ、2008年北京オリンピック柔道男子66キロ級金メダリスト・内柴正人が引退を表明。◉10月18日～29日　2010年が国連の定めた「国際生物多様性年」であることにつき、名古屋市で生物多様性条約第10回締約国会議 (COP10) が開催。◉10月21日　東京国際空港(羽田空港)に世界初の人工島と桟橋のハイブリッド滑走路「D滑走路」、新国際線ターミナルが供用開始。同時に東京モノレール羽田線の羽田空港国際線ビル駅、京急空港線の羽田空港国際線ターミナル駅が開業。◉10月22日　G20財務相・中央銀行総裁会議開催。◉10月27日　アイドルグループ・AKB48の18枚目のシングル「Beginner(ビギナー)」が発売。2010年の年間シングルランキング1位を獲得(前作「ヘビーローテーション」は2位)。◉10月28日～29日　欧州連合 (EU) 首脳会議が開催。◉10月30日　声優であり俳優、ナレーターとしても知られる野沢那智が、肺がんのため死去。◉11月2日　アメリカで中間選挙が施行。バラク・オバマ大統領の率いる与党民主党が惨敗し、共和党が上院・下院ともに議席数を伸ばした。◉11月6日　京都府にてAPEC財相会合が開催。◉11月7日　プロ野球・日本シリーズ第7戦、千葉ロッテマリーンズが中日ドラゴンズに延長12回の激闘の末8-7で勝利し、4勝2敗1分けで5年ぶり4度目の日本一を達成。◉11月9日　ミャンマー連邦共和国で20年ぶりに総選挙が施行。37政党が選挙に参加し、連邦団結発展協会(USDA)を母体とした政党軍事政権が支持する与党「連邦団結発展党 (USDP)」が80%の議席を獲得。野党は不正行為があったと非難。◉11月11日～12日　韓国のソウルで第5回20ヵ国・地域(G20)首脳会議が開催。◉11月12日～27日　中国の広州市でアジア版オリンピックと言われる「アジア競技大会」の第16回大会が開催。◉11月13日～14日　横浜市でアジア太平洋経済協力会議 (APEC) の首脳会議が開催。◉11月21日　任天堂の家庭用ゲーム機「スーパーファミコン」が発売20周年を迎える。◉12月7日　金星探査機「あかつき」が金星に到達。◉12月8日～18日　アラブ首長国連邦で第7回目のFIFAクラブワールドカップ「FIFAクラブワールドカップ2010」が開催。イタリアのインテルナツィオナーレ・ミラノがコンゴ民主共和国のTPマゼンベを3-0で下し優勝を飾った。◉12月22日　アテネオリンピックの柔道女子78Kg超級金メダリスト・塚田真希が引退を表明。◉12月24日　NTTドコモがLTE方式の携帯電話・タブレット・データ通信サービス「Xi」のサービスを開始。◉12月25日　オーストラリア北東部のクイーンズランド州に熱帯低気圧「ターシャ」が上陸。経済的な被害額は1兆円相当。◉12月31日　日本文具振興株式会社が発行した有価証券(金券)・文具券の利用と販売が終了。




13

DRAG DRAG World

ド ラ ッ グ オ ン ド ラ グ ー ン


-ON
OON
inside
ワールドインサイド

DoD 018

【ドラッグ オン ドラグーン編】

● 登場人物紹介 Characters 020
- カイム Caim 020
- アンヘル Angel 023
- フリアエ Furies 024
- イウヴァルト Inuart 026
- ブラックドラゴン Black Dragon 026
- ウェルドレ Verdelet 028
- レオナール Leonard 030
- フェアリー Fairy 030
- アリオーシュ Arioch 032
- サラマンダー Salamander 033
- ウンディーネ Undine 033
- セエレ Seere 034
- ゴーレム Golem 034
- マナ Manah 036

● ストーリーライン Story Line 038
- プロローグ 赤と黒と [アカト クロト] 038
- 第一章 源流 [ゲンリュウ] 039
- 第二章 交錯 [コウサク] 040
- 第三章 邂逅 [カイコウ] 041
- 第四章 背反 [ハイハン] 042
- 第五章 破壊 [ハカイ] 043
- 第六章 宿敵 [シュクテキ] 044
- 第七章 悲劇 [ヒゲキ] 045
- 第八章 封印 [フウイン] 046
- 第九章 鎮魂 [チンコン] 047
- 第十章 迷走 [メイソウ] 047
- 第十一章 別離 [ベツリ] 048
- 第十二章 混沌 [コントン] 049
- 第十三章 真実 [シンジツ] 049
- 外伝 レオナールの飢 [レオナール ノ キ] 050
- 外伝 アリオーシュの奇 [アリオーシュ ノ キ] 051
- 外伝 セエレの祈 [セエレ ノ キ] 052
- A-Ending a fallen Angel never smiles 053
- B-Ending flowers for the Bloken spirit 053
- C-Ending an eternal farewell with your Companion 054
- D-Ending the Daffy child's wildest dreams 054
- E-Ending the End of dragon sphere 055

● アートワークス・設定画 Artworks 056

LOOKING BACK 1 ドラッグ オン ドラグーン編 092

Questions and Answers ちょっと気になるあんなことやこんなこと 093



DoD 2 094

【ドラッグ オン ドラグーン 2 －封印の紅、背徳の黒－ 編】

● 登場人物紹介 Characters 096
- ノウェ Nowe 096
- レグナ Legna 099
- マナ Manah 100
- エリス Eris 102
- ユーリック Urick 104
- サンホ Zhangpo 106
- ハンチ Hanch 108
- ヤハ Yaha 110
- ジスモア Gismor 112
- セエレ Seere 114
- オロー Oror 116
- カイム Caim 118
- アンヘル Angel 119

● ストーリーライン Story Line 120
- プロローグ 封印の竜 [フウイン ノ リュウ] 120
- 第一章 前兆 [センチョウ] 121
- 第二章 聖女 [セイジョ] 122
- 第三章 離反 [リハン] 123
- 第四章 逃亡 [トウボウ] 124
- 第五章 仲間 [ナカマ] 125
- 第六章 暗雲 [アンウン] 126
- 第七章 慟哭 [トウコク] 127
- 第八章 覇道 [ハドウ] 128
- 第九章 復活 [フッカツ] 129
- 第十章 崩壊 [ホウカイ] 130
- 第十一章 神話 [シンワ] 131
- 第十二章 終演 [シュウエン] 132
- A-Ending 平穏 [ヘイオン] 133
- B-Ending 天命 [テンメイ] 134
- C-Ending 超越 [チョウエツ] 135

● アートワークス・設定画 Artworks 136

LOOKING BACK 2 ドラッグ オン ドラグーン 2 編 168

Questions and Answers ちょっと気になるあんなことやこんなこと 169



NieR 170

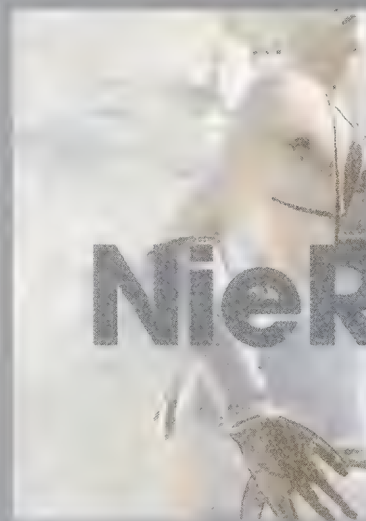
【ニーア レプリカント（ニーア ゲシュタルト）編】

● 登場人物紹介 Characters 172
ニーア（ニーア レプリカント）の主人公 NieR 172
ニーア（ニーア ゲシュタルト）の主人公 NieR 176
白の書 Grimoire Weiss 177
ヨナ Yonah 178
カイネ Kaine 180
テュラン Tyrann 181
エミール Emil 182
デボル&ポポル Devola&Popola 186
仮面の王 Masked King 188
フィーア Fyra 188
魔王 Shadowlord 189
黒の書 Grimoire Noir 189

● ストーリーライン Story Line 190
プロローグ と在る贄 [Nie R] 190
第一章 イニシエの歌 [イニシエ ノ ウタ] 191
第二章 マモノと、マモノ憑きと [マモノ ト マモノツキ ト] 192
第三章 奔戯 [モテアソビ] 193
第四章 仮面の試練 [カメン ノ シレン] 194
第五章 屍に至る言の葉 [シ ニ イタル コト ノ ハ] 195
第六章 光眼 [マカツ マナコ] 196
第七章 果たされる約束 [ハタサレル ヤクソク] 197
第八章 白雪計画 [プラン スノーホワイト] 198
第九章 月の涙 [ツキ ノ ナミダ] 199
第十章 石の守護神 [イシ ノ シュゴシン] 200
第十一章 記憶する樹 [キオク スル キ] 201
第十二章 機械の理 [キカイ ノ コトワリ] 201
第十三章 忠誠のケルベロス [チュウセイ ノ ケルベロス] 202
第十四章 贄 [ニエ] 203
第十五章 双子の円舞曲 [デボル ト ポポル ノ ワルツ] 204
第十六章 ニーア [レプリカント] 205
第十七章 ニーア [ゲシュタルト] ～ A-Ending+B-Ending 206
< No Title > 208
C-Ending Ashes [灰] 209
D-Ending Dreams [夢] 209

● アートワークス（設定画） Artworks 210

LOOKING BACK 3 ニーア レプリカント（ニーア ゲシュタルト）編 240
Questions and Answers ちょっと気になるあんなことやこんなこと 241



Data collection 242

【データ集】

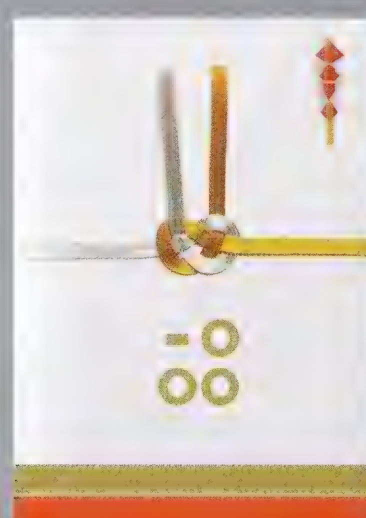
● 年表 Chronology 244
● ウェポンストーリー Weapon Story 252
● 用語解説 Keywords 278



10th Anniversary Special 290

【10周年記念企画】

特別企画❶ 緊急取材 超時空キャラクター交流座談会 in 新宿 292
特別企画❷ 劇場版アニメ三部作鋭意制作中 [illegible]
特別企画❸ 緊急速報 ドラッグ オン ドラグーン 4（仮題） 302
特別企画❹ クリエイターの声 Creator's Voice 304
特別企画❺ 人間の業とゲーム業界の闇 308
特別企画❻-1 書き下ろし小説 1 ドラッグ オン ドラグーン編 14 歳の歌 312
特別企画❻-2 書き下ろし小説 2 ドラッグ オン ドラグーン 2 - 封印の紅、背徳の黒 - 編 光の庭 318
特別企画❻-3 書き下ろし小説 3 ニーアレプリカント編 プロメテウスの火 326




DoD

【ドラッグ オン ドラグーン編】

A pact! There's no other way.

Characters

登場人物紹介

ある者は復讐のために戦い続け、ある者は逃れられぬ運命に葛藤し、ある者は己の弱さから業を背負う。主人公カイムを筆頭に、登場人物はそれぞれ何らかの「絶望」を背負っている。そんな彼らが描く人間模様も、物語に深みを与える大きな魅力となっていることは言うまでもないだろう。





[カイム] 声：池畑慎之介☆

Caim

大陸東部にある小国・カールレオンの王家に生まれる。カイム18歳の誕生日、久々に訪れた家族水入らずの団欒の場で悲劇は起きた。ブラックドラゴンの急襲である。折悪しく、父王・ガアプが衛兵達に休暇を与えており、王宮内の警備は手薄であった。ブラックドラゴンはカイムと妹・フリアエの目の前で国王夫妻を惨殺し、何処へともなく飛び去った。

父王の死後、カイムはフリアエを伴い旅に出るが、その途上でフリアエの身体に「オシルシ」が出現。たった一人の肉親である妹までもが、封印の女神として召還されてしまう。

祖国カールレオンも、事件後1年を待たずして崩壊。家族も帰る場所も失ったカイムは、連合軍の傭兵として生きる道を選ぶ。ブラックドラゴンとの密接な関わりを噂される帝国軍に、復讐の刃を向けるために。

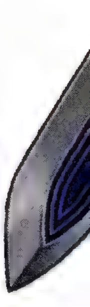
以後、復讐の鬼と化したカイムは、帝国兵を倒すことだけを生き甲斐に戦場を駆け続ける。その大義名分は、両親や祖国に仇を為した者たちへの復讐。だが、実のところ、彼にとって殺戮は己のため、内なる怒りを鎮める手段であった。

事件から6年を経たある日のこと、帝国軍が女神の城を包囲。妹・フリアエを守るために駆けつけたカイムは、帝国軍によって捕らえられたレッドドラゴン・アンヘルと出会い、契約を交わす。両親の仇と同じ竜種ではあるが、深手を負っていたカイムに選択の余地はなかった。

声を代償にして強大な力を得たカイムは、さらなる戦いへと突き進む。その双眸の暗い色は変わらないまま。

Personal Data

性別	男性
年齢	24歳
血液型	AB型
身長	182cm
髪の色	やや茶色がかった黒
瞳の色	灰色がかった濃い青色
契約モンスター	レッドドラゴン
契約の代償	声
紋章の位置	舌







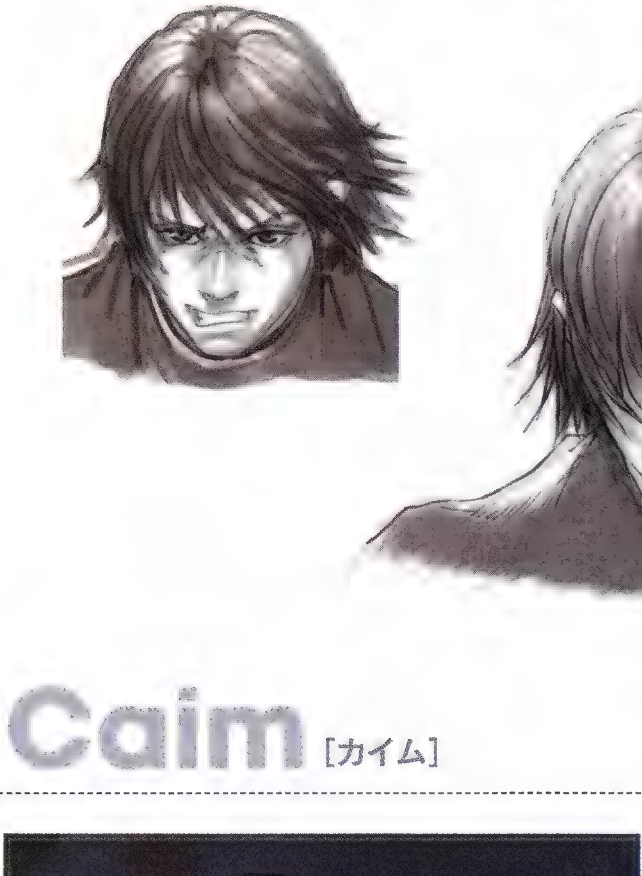






Caim ［カイム］









第１形態

第２形態



第３形態



カオス形態

[アンヘル] 声：ピーター

Angel

ドラゴンはこの世界で最強の生物とされ、高い知能と強い生命力を誇る。また、環境や経験に応じて己を進化させることも可能。「神の遣い」としての矜持も高く、とりわけ「神の失敗作」である人間に対しては、常に見下した言動を示す。レッドドラゴンは、その中でもオーソドックスな種。人語を理解し、意志疎通は可能であるものの、基本的に人間と交わることを好まない。

アンヘルもまた、人間に対して冷淡かつ無関心であったが、例外的にカイムと契約を交わした。カイムの帝国に対する異様なまでの憎悪、そのための生への執着といった強烈な「負の心」に惹かれたのである。それは、帝国軍に捕らえられ、殺されるのは時間の問題という危機的状況以上に、このドラゴンの心を揺さぶった。

恋心にも似た強い感情に突き動かされての契約。1万歳もの齢を重ねてきた誇り高いアンヘル自身にも、想定外の出来事だったに違いない。

Personal Data

性別	不明
年齢	10000歳（正確には不明）
血液型	不明
全長	5.8m／25.4m（形態進化により変動）
身体の色	紅
瞳の色	蒼みがかった黄色

追記：各ドラゴンの性別については議論が分かれている。過去の記録によると「性別ナシ」「雌（単一性）」など、記録者と記録された年代によってまちまちで確定が出来ない。本誌では全て「不明」と表記しておく。



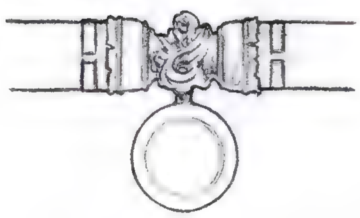












[フリアエ] 声：初音映莉子

Furies



カイムの実の妹。元許婚のイウヴァルトとは幼なじみで、兄妹同然の間柄だった。小国とはいえ、カールレオンの王女として何不自由なく暮らしていたが、ブラックドラゴンに両親を惨殺された瞬間から、その運命は大きく狂い出す。両親の死と祖国の崩壊という立て続けの不幸に見舞われた彼女に、追い打ちをかけるかのように、封印の女神としての証「オシルシ」が現れたのである。

最愛の兄・カイムとも引き離され、女神の城に幽閉されたとき、フリアエはわずか14歳。年端の行かない少女にとって、女神としての生はあまりにも過酷だった。

オシルシがもたらす痛みは絶え間なく続き、掟に縛られた生活には心を慰めるものなど何ひとつない。13歳までの恵まれた暮らしとはおよそ正反対の日々。

己の運命を呪い、すべてを奪っていった世界を恨みながらも、女神としての立場上、決してそれを表に出すわけにはいかない。そんな彼女にできたことといえば、すべてを諦め、「なかったもの」と見なすことだけだった。

苦しみばかりを強いる世界への憎しみ、救いの手をさしのべてもくれない周囲の人々への恨み、そんな醜い感情など自分の中にあるはずがない、と。幸せだった思い出なんて、最初からなかったことにすればいい。そうすれば、諦められる。何もかも。……兄に対する許されざる思いも。

希望も、生への執着もなくしたフリアエは、女神の形をした抜け殻となって、ただ淡々とその任を務めている。

Personal Data

性別	女性
年齢	19歳
血液型	B型
身長	165cm
髪の色	赤みがかった栗色
瞳の色	鮮やかな藍色







[イウヴァルト] 声：唐沢寿明

Inuart

Personal Data

性別	男性
年齢	20歳
血液型	A型
身長	190cm
髪の色	茶色がかった暗い赤色
瞳の色	濃い赤茶色
契約モンスター	ブラックドラゴン
契約の代償	歌
紋章の位置	首



カールレオンの貴族であり、重臣でもあったイブリスの息子。カイム、フリアエとは幼なじみ。ガアプ王とイブリスとが極めて親密な間柄であったことから、イウヴァルトはカイム達と実の兄弟も同然に育てられた。剣の仕込みも、カイムの父ガアプ王の直伝。

しかし、分け隔てなく剣の手ほどきをした王の好意が裏目に出て、イウヴァルトはカイムに対する劣等感を抱きつつ成長する。どれほど練習を重ねても、剣術でカイムに勝つことはできなかった。カイム自身の素質に加えて、4歳という年齢差は越えられない壁となってイウヴァルトを苦しめた。

やがて、イウヴァルトはフリアエの許婚となったが、それが幼なじみ3人の関係に微妙な影を落とす。フリアエを独占したいイウヴァルトに対して、変わらずに兄と3人の関係を望むフリアエ。一切に無頓着なまま、友と妹の幸せを願うカイム。こうした齟齬を誰よりも過敏に嗅ぎ取り、誰よりも苛立ちを募らせたのは他ならぬイウヴァルトであった。

その苛立ちは、剣の練習時にイウヴァルトがカイムに怪我を負わせるという形で噴出。兄を傷つけたと怒るフリアエと、あくまで友を気遣おうとするカイムに、イウヴァルトはかえって自尊心を傷つけられ、無言でその場を去る。ブラックドラゴンの襲撃による悲劇は、その翌日のことであった。

国王夫妻の死後、フリアエが許婚の自分ではなく、兄のカイムと旅に出る選択をしたことで、イウヴァルトの劣等感は決定的な敗北感となって胸に残った。







Black Dragon

[ブラックドラゴン]

Personal Data

性別	不明
年齢	10000歳(正確には不明)
血液型	不明
全長	5.3m／21.5m(形態進化により変動)
身体の色	黒
瞳の色	鮮やかな赤





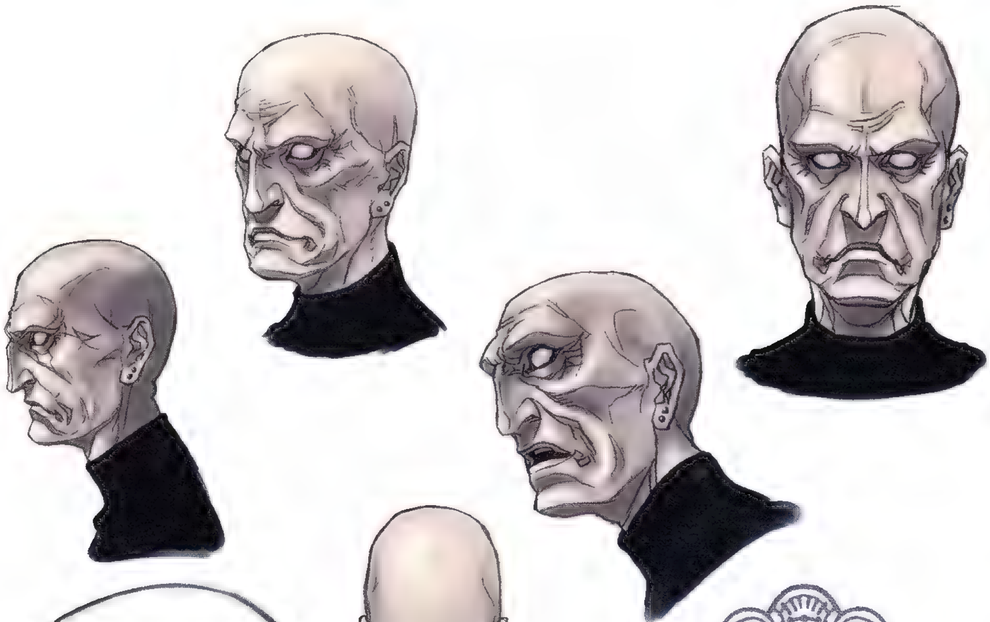
ドラゴンの中では最も凶暴かつ好戦的とされている種族。その能力はレッドドラゴンにも匹敵すると言われているが、性格は極めて残忍で、人間を好んで捕食するという点で異なっている。カールレオンを襲撃し、カイムとフリアエの両親を惨殺した一方、ノウェの"竜の父"であるレグナ(→ P.099)と同一個体である。

ブラックドラゴンもほかの一族と同様、基本的には人間と関わることを嫌うが、ある時期から謎の教団「天使の教会」と密接な関係を持つようになった。詳細は謎に包まれているが、一部では「天使の教会の背後には神の存在がある」と囁かれていた。となれば、「神の遣い」と言われるドラゴンが、その陰にいることも何ら不思議ではない。

その後「天使の教会」の洗脳を受けたイウヴァルトは、聴く者を癒やし、フリアエをも魅了した美しい歌声と引き換えに、このブラックドラゴンと契約を結ぶに至った。



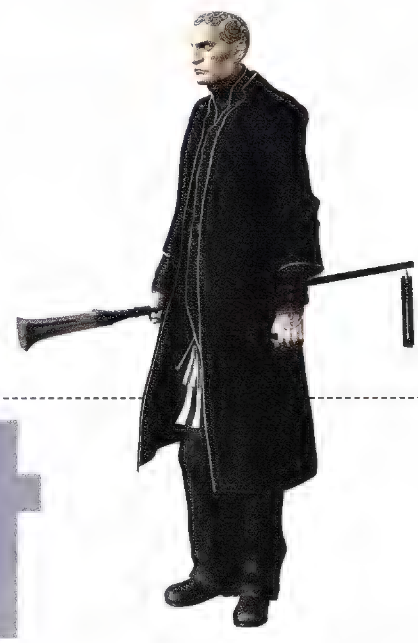












[ヴェルドレ] 声：家弓家正

Verdelet

封印を守る職に就く神官達の長。連合軍の総司令官という立場ではあるものの、陣頭に立つことはなく、戦場からは離れたところにいる実力者。最終封印である女神の安全を確保するのが職務である。また、女神は神官長以外の者との接触が禁じられていることから、身の回りの世話や話し相手も、神官長であるヴェルドレが担っている。

人々の尊敬を集め、絶大な権力と影響力を持っているヴェルドレだが、その絶大な権力ゆえに対等に話せる相手がいないという孤独な立場にある。女神にとって神官長は唯一、接触を許された相手であるが、神官長にとっての女神もまた、数少ない対等な話し相手と言える。

カイム同様、契約者であるが、その経緯については黙して語ろうとしない。契約相手のエンシェントドラゴンもすでに石化しているため、彼らが如何なるやり取りの上で契約に至ったのかは謎に包まれている。

契約時の相手が石化寸前で、得られる力も強大とは言い難かったためか、ヴェルドレの契約の代償は「毛」のみで、他の契約者に比べれば格段に軽い。

普段は聖職者らしく良識的な態度と行動を示すヴェルドレだが、根は小心で、安全が脅かされる状況になると、なりふり構わず保身に走る俗物的な面も併せ持つ。心の弱さや、死や滅びへの恐怖は極めて人間らしい一面ではあるが、それが垣間見えるがために、聖職者としての彼の言葉は「きれいごと」に終始してしまっている。

Personal Data

性別	男性
年齢	72歳
血液型	O型
身長	178cm
髪の色	なし(かつては金色)
瞳の色	水色を帯びた白に近い灰色
契約モンスター	エンシェントドラゴン(石化済)
契約の代償	毛
紋章の位置	頭部





[レオナール] 声：山寺宏一

Leonard



礼儀正しく、常識的で、穏やかな性格の人物。かつては隠者としての道を選び、家族とも離れて森でひっそりと暮らしていた。戦いを嫌うあまり、というのは表向きの理由で、本当の理由は別のところにあった。

それは、自らの性癖を恥じてのもの。レオナールが性愛の対象としていたのは、年端の行かない少年達であった。自分は他人と嗜好を少々異にするだけ、と開き直り、割り切るには、彼は潔癖にすぎた。恥ずべき己を罰し、欲望をかき立てる者達から離れるには、人目につかない森の奥へと移り住むしかなかった。

しかし、戦火は容赦なくレオナールから静かな暮らしを奪った。帝国軍によって家を失い、寄る辺をなくした3人の弟たちを引き取り、共に暮らすことになったのである。

実は、レオナールはここに至っても歪んだ性癖を捨てきれずにいた。自らの欲望を抑えられない彼は、家を抜け出しては裏の林で自慰に耽った。幼い弟達は、兄の秘密に気づいていない。

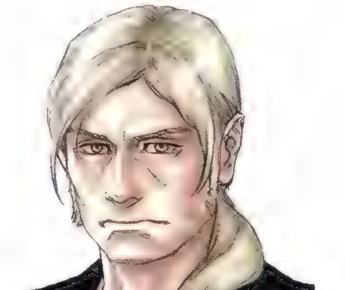
運命の日。レオナールが家を離れて色欲に溺れている間に悲劇は起こった。帝国軍の急襲を受けて、弟達は全員、命を落としてしまう。己の弱さ、浅ましさを悲観して自害しようとしたが死にきれない。そんな彼の絶望を嗅ぎつけてフェアリーが現れ、契約を持ちかけた……。

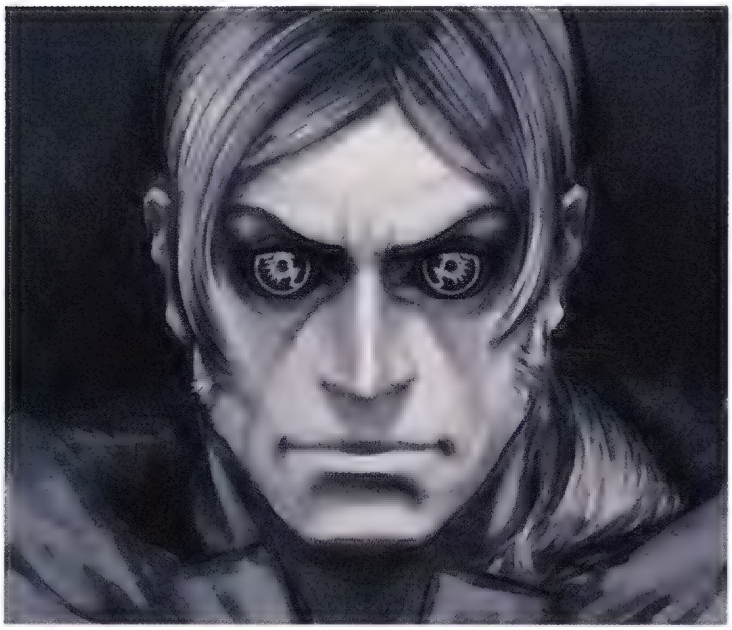
以来、契約の代償に視力を失い、フェアリーに罵倒される日々を、レオナールは己に下された罰として甘受している。

Personal Data

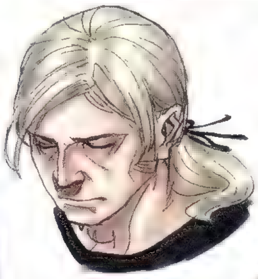
性別	男性
年齢	32歳
血液型	A型
身長	183cm
髪の色	金色
瞳の色	金色
契約モンスター	フェアリー
契約の代償	視力
紋章の位置	眼球

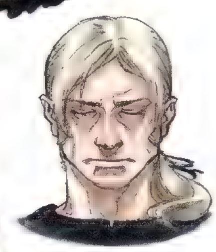


















Fairy

[フェアリー] 声：宮村優子



封印の森に住む種族。まるで人間のような姿をしているが、身長は人間の数十分の一ほどで、高度な飛行能力と強い魔力を備えている。背中からグリーンの光を発することができ、人間の目にそれは羽のようにも映る。遠目には光の玉のように見えるため、フェアリーの集団が木立の中を抜けていく様は「光の雨が降る」と形容されるほどである。

しかし、愛らしい外見とは裏腹に、性格は極めて醜悪かつ残酷で、相手を口汚く罵ることに無上の喜びを覚える。彼らの価値観は「相手をいかに罵倒するか」に偏っているため、敵に対して言葉以外の攻撃に出るという発想がない。レオナールと契約したフェアリーは強力な魔法攻撃を行うが、これは例外的なケースである。

また、彼らは防御という概念にも乏しいため、仮に生命が脅かされるほどの強敵と対峙したとしても、全く逃げようとせず、死ぬまで相手を罵倒し続けるという。

Personal Data

性別	不明
年齢	600歳（正確には不明）
血液型	不明
身長	約5cm
髪の色	白色
瞳の色	黄色がかった濃い緑色





[アリオーシュ] 声：林原めぐみ

Arioch

Personal Data

性別	女性
年齢	24歳
血液型	AB型
身長	175cm
髪の色	赤茶色
瞳の色	栗色
契約モンスター	サラマンダーとウンディーネ
契約の代償	子宮
紋章の位置	下腹部



エルフ族の女性。平凡な主婦であったが、帝国軍に夫と子供を惨殺されたことが原因で、精神を病む。正気を失ったアリオーシュは、幼い子供達を殺しては、その肉を食らうという残虐極まりない行為に走るようになる。

殺人を行う際に「私の赤ちゃん」「かわいい子供達」「私が守る」等々の言葉を口走っていることから、アリオーシュは守れなかった我が子の代わりに、子供たちを自らの体内に入れて守ろうとしているとも解釈できる。が、彼女の精神が完全に崩壊しており、意思の疎通が図れない以上、その真意は定かではない。

恐るべき殺人鬼としてエルフの里とその周辺の町や村を震撼させた後、アリオーシュは帝国軍によって捕縛、監禁された。連合軍の奇襲で収容施設が破壊された際、死に瀕していたところをウンディーネとサラマンダーによって契約者となり、生き延びる。

2体の精霊達はアリオーシュの放つ狂気の匂いに惹かれて契約を持ちかけたのだが、彼女がその意味を理解した上で応じたかどうかは疑わしい。また、契約の代償として子宮を失ったという事実に気づいていたのか、ということも。ひとつだけ確かなことは、良心の呵責を覚えることなく、彼女が殺戮を楽しんでいるらしい、ということ。

精神が崩壊した契約者の危険性にいち早く気づいたヴェルドレによって、アリオーシュは保護され、カイム達と行動を共にするようになった。

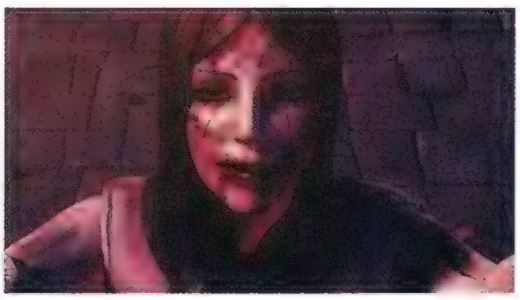














Salamander Undine

[サラマンダーとウンディーネ]





風の精霊・シルフ、地の精霊・ノームと並び、四大元素を司る精霊のうちの2体。サラマンダーは火を、ウンディーネは水を司り、常に2体で行動を共にしている。彼ら精霊は、炎の化身・イフリートや、悪霊と呼ばれるゴースト、レイス、スピリットなどと同類らしい。外見こそ人型であるが、人間や亜人のような確たる肉体を持たず、霊的な存在に近い。

サラマンダーは厳格で男性的な口調、ウンディーネは柔らかで女性的な口調であるが、彼らに性別は存在しないと考えられている。

なお、生殖行為を一切行わない彼らにとって、子供という存在は実に不可解である。その不可解な存在に執着し、同時に殺戮を望む破綻した思考と狂気の匂いは彼らを強く惹きつけた。サラマンダーとウンディーネが一方的とさえ言えるほどの強引さでアリオーシュに契約を持ちかけたのは、そのためである。

Personal Data

性別	サラマンダー、ウンディーネとも不明
年齢	不明
血液型	不明
身長	不明
髪の色	不明
瞳の色	不明

[セエレ]　声：村上想太

Seere



ゴーレムを操る一族の住まう「石の隠れ里」で生まれた双子の兄。母親から過剰なまでの愛情を注がれて育った。対する双子の妹・マナは母親から過度の虐待を受けていた。それを目の当たりにしながらも、セエレは何も言わず、何の行動も起こさず、ただ母親の愛情を独占し続けた。妹を不憫に思い、後ろめたさを感じつつも、自分一人が母親に愛されているという優越感と、その心地よさを手放したくないという身勝手な欲求ゆえに。

ある日、妹のマナが姿を消した。石の谷で迷子になったと、母親は里人達に説明したが、他ならぬ母親がマナを置き去りにしたのだとセエレは気づいていた。それほどまでに、母親のマナに対する憎悪は深かった。

それから程なくして、セエレは妹のマナばかりか、両親をも失ってしまう。帝国軍の襲撃だった。死に瀕したセエレの母は、最愛の息子を守るために一計を案じた。ゴーレムにセエレとの契約を頼んだのである。

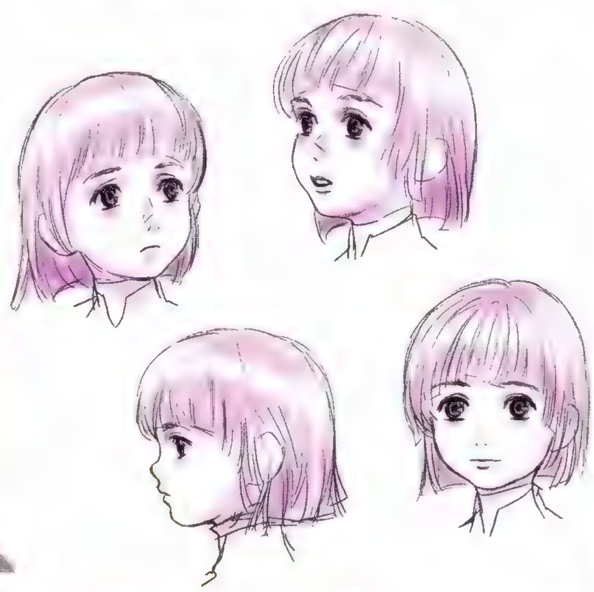
本来、モンスターは強い負の感情を持たない相手には興味を示さない。が、人工的に造られたゴーレムは通常のモンスターに比べて知性や判断力に乏しい。一方、セエレの母は石の隠れ里の住人であり、ゴーレムを使役する力を備えていた。その特殊な条件が重なり、負の感情を持たない幼子でありながら、セエレは契約者となった。

その後、生き別れになった妹のマナを探すために、セエレはカイム達と行動を共にするようになる。

Personal Data

性別	男性
年齢	6歳
血液型	A型
身長	110cm
髪の色	淡い金色
瞳の色	濃い緑色
契約モンスター	ゴーレム
契約の代償	時間
紋章の位置	全身

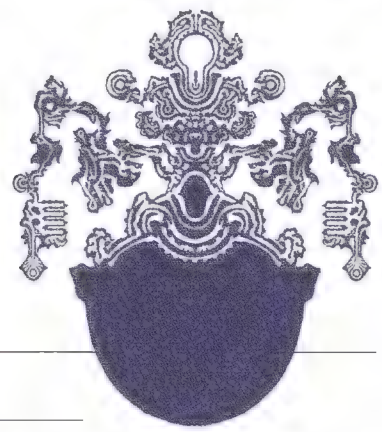












Golem

[ゴーレム]



Personal Data

性別	不明
年齢	3歳（正確には不明）
血液型	不明
身長	約8m（正確には不明）
髪の色	なし
瞳の色	鮮やかな緑色

岩の塊が人型に集合したかのようなモンスター。同種のゴーレムの中には、帝国の付与魔術師によって召喚されるストーンゴーレムやマッドゴーレムもいる。

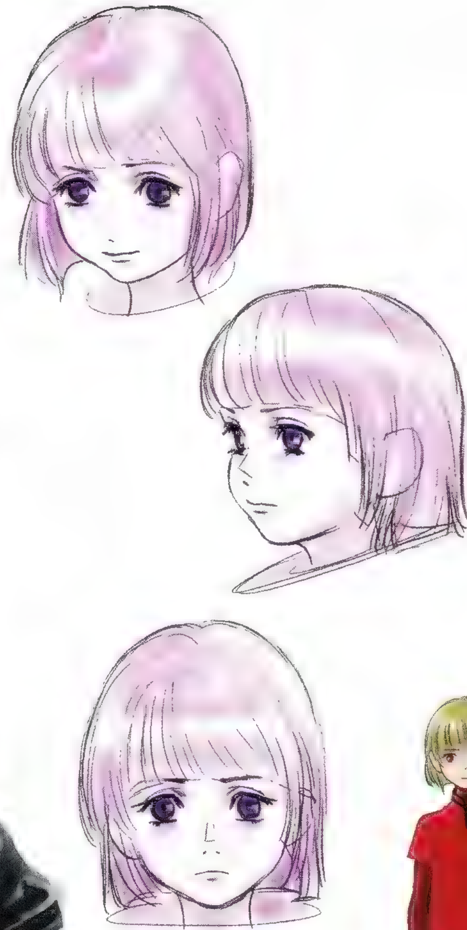
ゴーレムは自然界に存在する生物ではなく、無機物である土塊に疑似生命を与えることで誕生した、人工的な存在である。そのため、通常のモンスターに比べて、知性や思考能力が極めて低く、人間に使役されることへの抵抗感もない。しかしながら、セエレと契約を交わしたゴーレムは、家族を失ったセエレの悲しみに共感し、自由意志に近い感情でセエレを守ろうとした。知性が低いとされるゴーレムが「共感」を覚えるのは極めて稀なことである。

その後、このゴーレムとセエレは、不器用ながらも友情らしきものを育むに至る。セエレは契約相手であるゴーレムを「友達」と言い切り、ゴーレムもまたその身を挺してセエレを守り抜く。

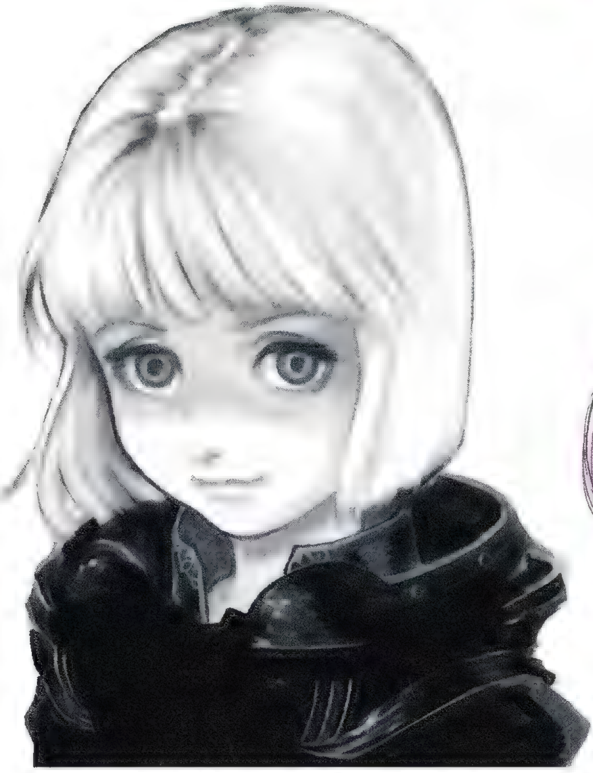














[マナ] 声：山下夏生／郷里大輔

Manah

セエレの双子の妹であり、「天使の教会」の司教であり、すべての元凶とも言える幼女。

マナの母は兄のセエレには過剰なまでの愛情を注ぐ一方で、マナに対しては人が変わったかのように冷淡だった。自分には決して与えられることのない母の愛を、自分そっくりの顔をした別の子供が独占している……。幼子の目にその光景はあまりに残酷である。それでもマナは母の愛を渇望し、同じ強さで兄への憎しみを募らせていく。

やがて、マナの心を決定的に打ち砕く出来事が起きた。他ならぬ母の手によってマナは捨てられたのである。人の心を読む力を持つ我が子を母親は恐れていたのかもしれない。

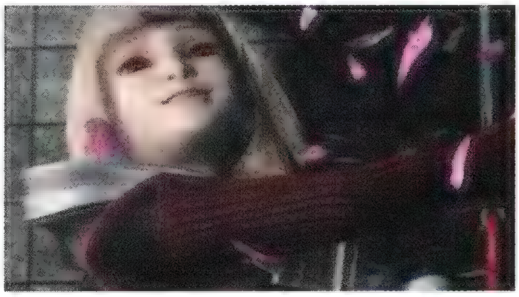
マナが置き去りにされたのは、魔物の跋扈する酷寒の地、石の谷だった。大人でさえ迷い込めば生還は難しいとされている場所、わずか6歳の子供に生き延びる術などあろうはずがない。

しかし、死を待つのみだったマナは、その地で神の啓示を受ける。神の愛を勝ち得れば、母の愛も手に入る、と。

マナは「天使の教会」の関係者によって石の谷から連れ出され、司教の座に就いた。「神の声」が告げるままに帝国軍を率い、虐殺を重ね、封印を破壊する。人の心を読む力を使って、最終封印である女神・フリアエを自殺に追い込み、世界を破滅の淵に導く。

それが神の望みであるならば。神に愛されれば、母の愛が手に入るのだから……。





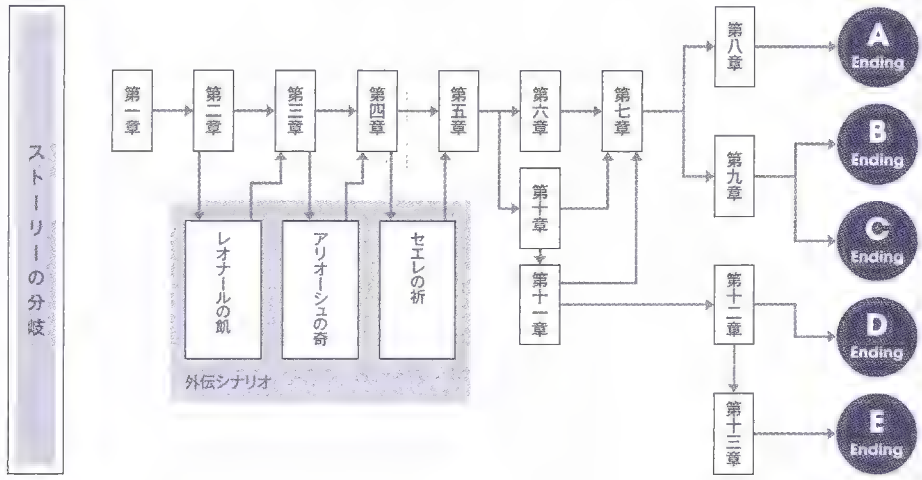


Personal Data

性別	女性
年齢	6歳
血液型	A型
身長	110cm
髪の色	淡い金色
瞳の色	鮮やかな赤色

Story Line
ストーリーライン

『ドラッグ オン ドラグーン』シリーズの物語には、いずれも複数の結末が用意されている。本作にはA～Eの5つのエンディングがあり、これは最初の作品にしてシリーズ最多。初めてのプレイでは必ずAエンディングへと進むが、2周目以降は下図のように分岐していく。それぞれのエンディングを迎えるには特定の分岐を経なければならないのである。



序

その者は、生を受けてから1万年余の時を経て、其処にいた。
真紅の竜。
在るべき空になく、囚われの身を地に伏せる。

赤い目を光らせる、残忍な者。その色は、帝国の牙となった証。
漆黒の竜。
敵を引き裂き、喰らいながら、運命を待つ。

真白き姫君はオシルシを受け、己の運命を呪う。
封印の女神。
一切の望みを絶たれ、ただ、祈る。
“おおいなる時間”と共に。
世界は封印されている。

封印を失い、調和を失った時。
世界は乱れ、尽きる――。



プロローグ　赤と黒と［アカトクロト］

源流

ゲンリュウ

遠い昔。

帝国軍によって、世界は蹂躙されていた。
赤い目を持ち、不気味なまでの団結力と、人間離れした凶暴性を備えた兵士達。どこの国に属し、何者が率いているのか、一切が不明という謎の軍団を、人々は恐れを込めて「帝国」と呼んだ。
旧来の諸国は連合軍を組織し、正体不明の軍団への抵抗を試みたが、その猛攻を食い止めることはできなかった。帝国の圧倒的な兵力を前に、連合軍はただただ後退を余儀なくされるばかり。
ついに帝国軍は、世界を守護する要、封印の女神が住まう城に迫った。途方もない数の帝国軍に包囲され、連合軍は苦戦を強いられる。やがて、城門が破られ、帝国兵達が城内へとなだれ込んだ。落城はもはや時間の問題、女神の命も風前の灯火であった。
その帝国軍の包囲網を突破し、城内へとひた走る傭兵がいた。
男の名はカイム。今は連合軍の一傭兵であり、かつては東の小国・カールレオンの王子であった者。そして、封印の女神・フリアエの兄。
祖国はすでに滅び、両親も亡い。たった一人の肉親、最愛の妹を守るために、カイムは走った。

＊＊＊

深手を負いながらも城の中庭にたどり着いたカイムが見たものは、傷つき、捕縛されたレッドドラゴンの姿であった。
カイムの脳裏に6年前の光景が蘇る。両親をブラックドラゴンに惨殺された、あの日の光景が。父を噛み殺し、母を引き裂いた憎むべき仇。同じ牙と爪を持つ者がここにいる――。
「殺すがよい……」
カイムの憎悪と怒りを察したかのような言葉だった。
「ただ……。我の命は奪えても、魂までは汚せぬぞ」
一度は振り上げた剣を止め、カイムは竜に問う。
「おまえに生きる意思はまだあるのか？」
死に瀕しているのは、自分もドラゴンも同じ。こうしている間にも、四方八方から帝国兵が押し寄せてくる。この窮地を脱する道は、ただひとつ。
「答えろ！　契約か？　死か!?」

契約者となり、新たな力を得る。たとえ相手が憎むべき仇と種を同じくする者であったとしても。
「おぬしにそれほどの資格があるのか？」
ドラゴンは嘲笑う。
「資格などない！　ただ俺は生きたいだけだ！」
復讐のために。殺すために。そのためだけに死を拒み、生きる。その執念に圧倒されたのか、その狂気が導く果てに興味を覚えたのか、ドラゴンは答えた。
「おぬしの生きる意思に誓おう」

＊＊＊

互いの心臓を交換する「契約」を果たし、カイムは生き延びる力を得た。
死の淵から蘇ったドラゴンと共に大空へと舞い上がり、帝国の空中兵器部隊を次々に撃破。竜騎士となったカイムは、城の最上階へと急ぐ。
愛する妹、フリアエを救出するために。

最上階への道を阻む帝国兵を斬り伏せ進むカイムは、そのさなか、己の異変に気づく。
「声を失ったか。へらず口はあって百害。契約の代償としては軽いものよ」
ドラゴンの呼びかけに、カイムは契約が代償を伴うものだと知る。
「案ずるな。我がおぬしの声となろうぞ」
その口調は先刻とは打って変わって淡々としたものだった。揶揄するでもなく、憐れむでもなく。

＊＊＊

救出劇は成功だった。城の最上階で、カイムは生き別れになっていたフリアエと、その許婚であり親友でもあるイウヴァルトとの再会を果たす。
だが、契約の代償として声を失ったカイムは、妹を気遣う言葉も、友の無事を喜ぶ言葉も口にできずにいた。ただ黙って舌に刻まれた紋章を示す以外に、できることなどなかった。

もはや安全とは言えなくなった城を捨て、3人は連合軍の残存兵達と共に「エルフの里」へと向かう。そこが安息の地であることを信じて。









交錯

コウサク





エルフの里は、永世中立地帯として知られている。エルフ達に守られ、戦火を拒む里は、女神を安全に匿うには最適の地と思われた。

しかし、その道中、ドラゴンが告げる。

「エルフの里が襲われた。おそらく……全滅だな」

契約者は遠く離れた場所であっても、“声”を感じ取ることができる。エルフ達の“声”によって、ドラゴンは里の異変を察知した。だが、イウヴァルトはそれを信じようとしない。この目で見たわけでもないものを信じられるものか、と。

イウヴァルトに半ば引きずられるようにして、一行はエルフの里へと向かう。他に安全な場所が見つからない以上、選択肢はなかった。

＊ ＊ ＊

帝国軍の追撃を振り払い、一行はようやく里にたどり着く。しかし、眼前に広がっていたのは、“声”が告げたとおりの惨状だった。

集落は燃えていた。エルフ達は全滅した後なのか、すでに悲鳴も、断末魔の声すらも聞こえない。

為す術もなく立ち尽くすカイム達に、神官長・ヴェルドレの“声”が届く。封印を守る神官達の長であり、連合軍の最高司令官でもある彼は、カイム達に女神の保護を申し出る。

同時に、世界に存在する四つの封印が帝国軍によって危機に瀕していると告げる。四つの封印とは、森の神殿、砂漠の神殿、海の神殿に存在する三つの封印と、最終封印である女神・フリアエ。これらがすべて失われたとき、世界はあるべき姿を失い、破滅の淵に沈むという。

契約者である神官長の許であれば、妹の身は安全であろうと考えたカイムは、イウヴァルトに護衛を任せてフリアエを送り出す。連合軍が守護する砂漠の神殿へ。

＊ ＊ ＊

ドラゴンと共にエルフの里に残ったカイムは、廃墟と化した集落を調べ始めた。しかし、奇妙なことに焼け跡にエルフ達の死体はなかった。つまり、帝国軍はここでエルフ達を虐殺したわけではなく、何処かへ連れ去った上で集落に火を放ったのだ。

何のために？

エルフ達は何処へ連れ去られたのか？

「……なんだ、これは!?」

カイムとドラゴンが発見したのは、地面に書き記された奇妙な血文字だった。

天使を語ってはならない。
天使を描いてはならない。
天使を書いてはならない。
天使を彫ってはならない。
天使を歌ってはならない。
天使の名を呼んではならない。

さらに、カイム達は、里の奥で瀕死のエルフを発見する。里の者達が天使の教会によって拉致されたことを告げると、唯一の生存者は息絶えた。

血文字の「天使」とエルフの告げた「天使」。両者の符合に不気味なものを感じながらも、里の者達が連れ去られた先、里の者達が捕らえられているという谷へと向かった。

しかし、谷にエルフ達の姿はなかった。どうやら、再び別の場所へと運ばれたらしい。

何のために？

エルフ達と天使の教会を巡る謎は深まる。

＊ ＊ ＊

手がかりを探しあぐねていたカイム達の許へ、助けを求める村人が迷い込んできた。聞けば、妖精の谷近くの村が帝国軍に襲われたのだという。

殲滅すべき敵を求めて、急ぎ村へと向かうカイムだったが、その途中、契約者のものと思しき“声”を拾った。

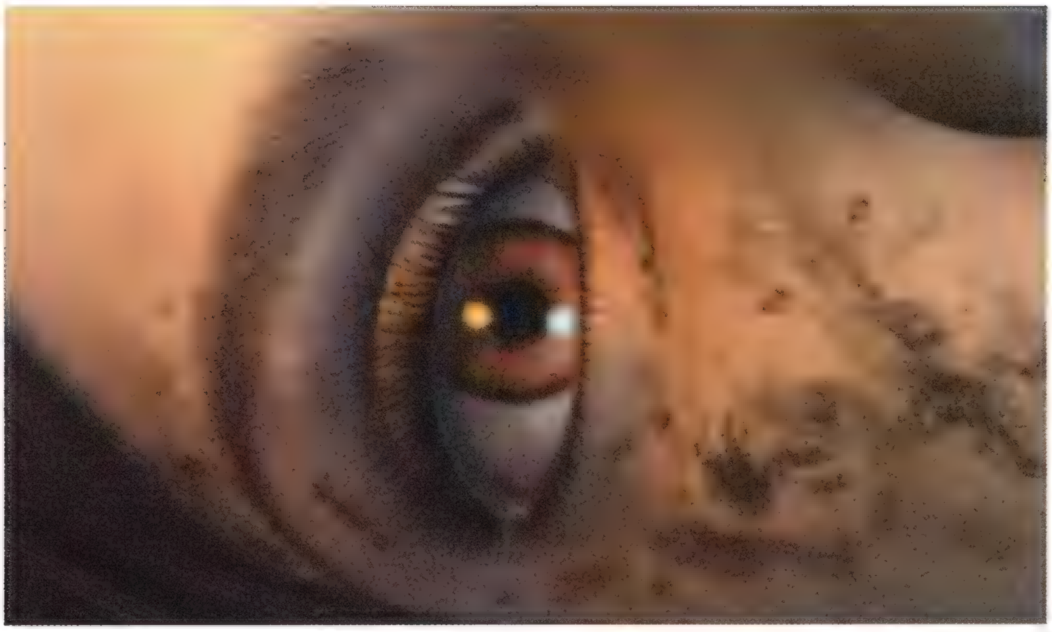
彼の名はレオナール。フェアリーと契約を交わし、その代償として視力を失った者。戦う仲間を得たカイムに、ヴェルドレの“声”が途切れたと、ドラゴンが告げる。

「砂漠へ急ぐがよい。女神にも、危険が迫っておるかも知れぬ」

妹と友の身を案じたカイムは、レオナールと共に砂漠へと向かうのだった。

<レオナールの飢（→P.050）へ派生>





砂漠に駆けつけたカイムは、一人逃げ延び、身を隠していた妹を発見する。神官長・ヴェルドレとイウヴァルトは、フリアエを逃がすために囮となり、帝国軍に捕らえられたという。

彼らを救出するために、カイムはドラゴンに騎乗し、漆黒の空へと舞い上がる。向かう先は、砂漠の何処かにあるという捕虜収容所。

帝国の空中兵器部隊をドラゴンの炎で焼き払いつつ、深い闇の中を飛び続け、カイムはようやく収容所を発見、ヴェルドレを始めとする連合軍関係者の救出に成功する。ただ、イウヴァルトだけは別の場所へと移送された後で、救出は叶わなかった。

ここでヴェルドレは、帝国の真の目的を一行に語る。帝国の目的は単なる聖地破壊ではない。彼らの目論見はその先にある。三つの封印と最終封印である女神の命、それらすべてを破壊した後に出現するという「再生の卵」。彼らはそれを手に入れ、世界を新たに構築し直そうとしているのではないか……。

「“再生の卵”だと？　真実を都合のよい神話に歪めるのは、人間どもの悪い癖だ」

何やら含みを持たせたドラゴンの言葉だったが、それを理解できる者はいなかった。しかし、いずれにしても、聖地破壊は止めねばならない。女神・フリアエの生命を守るためにも。

＊ ＊ ＊

カイム達が砂漠の神殿に向かったのと同じ頃、囚われの身となったイウヴァルトが、天使の教会の司教と対面していた。

『俺に力があれば、フリアエを守れるのに』

司教の囁きが、イウヴァルトの心の奥底を暴く。

『フリアエを守り、俺だけのものにするのに』

その歪んだ愛。

『俺の腕に抱き、誰にも渡さないのに』

執着心と独占欲。

『俺の許婚なのに。俺だけを愛してくれるはずなのに』

そして、カイムへの劣等感。それまで押し隠してきた負の感情が噴出し、彼の心をどす黒く染めた。

「俺に、力があれば……」

ドラゴンと手を結んだカイムのように、いや、カイム以上に強い力が欲しい。

イウヴァルトの双眸には赤い光が宿っていた。

＊ ＊ ＊

砂漠の神殿には、帝国の大軍が迫っていた。封印を守るためにカイム達は奮戦したが、隙をつかれて帝国軍の神殿への侵入を許してしまう。封印は破壊され、ヴェルドレの悲痛な叫びが砂漠を震わせる。

防衛に失敗したカイムとヴェルドレは、フリアエの待つ野営地に戻った。その途中、砂漠の真ん中でカイムはイウヴァルトのハープを拾う。それの意味するところは明らかだった。

重苦しい空気が流れる野営地で、ヴェルドレは謎の“声”を聞く。尋常とは言い難いその“声”を追って、カイム達は再び砂漠の探索に当たった。“声”の持ち主は、美貌のエルフ・アリオーシュ。帝国軍に捕らえられ、砂漠の牢獄に監禁されていた彼女は、火の精霊・サラマンダーと水の精霊・ウンディーネにその狂気を見初められ、契約を結んだ。

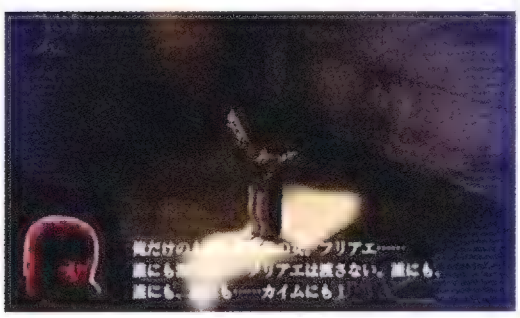
狂気に突き動かされるままに幼子を殺しては、その血肉を喰らい続けてきたアリオーシュは、拘束を解かれて自由の身になるなり、カイムに襲いかかった。ヴェルドレはその狂気を呪文で抑え込み、すんでのところで彼女の暴走は止まった。

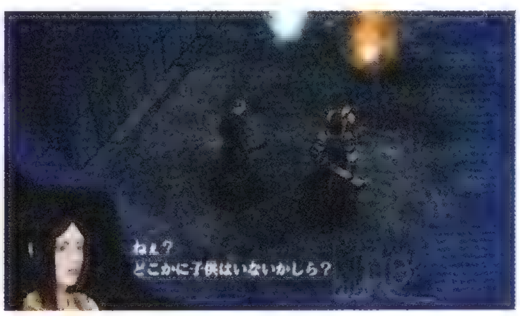
病んだ精神と契約者の強大な力とを併せ持つ者は、放置するには危険すぎる。ヴェルドレの提案により、アリオーシュはカイム達の一行に加わることとなった。

<アリオーシュの奇（→P.051）へ派生>

邂逅

カイコウ









四　背反　ハイハン

次々に封印を破壊され、沈む心を抱えて荒野を進むカイム達一行。野営地で束の間の休息をとっていた彼らの前に、漆黒の竜が舞い降りた。その背に騎乗していたのは、行方不明となっていたイウヴァルトだった。

「フリアエ……俺のもとへおいで」

赤く染まった瞳に気づいたフリアエは後ずさる。幾度となく目にしてきた帝国兵と同じ、赤。

「歌を失くしたものの……俺は強くなったんだ、カイム。だから、安心してフリアエを任せてくれ」

その喉元には浮かび上がっていたのは、紛れもなく契約の紋章だった。イウヴァルトは、その美しい歌声を代償に契約を交わしていたのである。よりにもよって、カイム達の運命を狂わせたブラックドラゴンと。

咄嗟にフリアエを背にかばうカイムに、イウヴァルトは怒りの剣を向ける。

「またその目か……。俺はおまえのその目がずっと嫌だった。俺を蔑み、憐れむその目が!!」

かつての友との死闘が始まった。その傍らでは、真紅の竜と漆黒の竜との戦いが。

しかし、その戦いは予想以上の苦戦となった。やはり友を敵とするには戸惑いが大きすぎたのか、或いは契約相手の力量の差なのか。

そのときだった。カイムは見た。ブラックドラゴンがレッドドラゴンに食らいつくのを。その光景は、カイムの脳裏に忌まわしい記憶を呼び覚ました。目の前で両親を惨殺された、6年前のあの日——。

気がつけばカイムは、イウヴァルトとの戦いの最中であることも忘れ、ブラックドラゴンめがけて斬りつけていた。それを嘲笑うかのように、ブラックドラゴンはその身を反らせた。炎がカイムに襲いかかる。

その直撃からカイムを守ったのは真紅の翼だった。業火に焼かれ倒れるレッドドラゴンと、契約相手であるがゆえに同じ傷を負うカイム。それを後目にイウヴァルトは悠々とフリアエに歩み寄った。それを阻もうとするヴェルドレを難なく斬り払い、イウヴァルトはフリアエを連れ去った。

漆黒の旋風が去った後には、無残に壊れたハープだけが残った。

＊＊＊

レッドドラゴンの傷が癒えた後、カイム達はイウヴァルトを追って帝国領土へと向かった。

その途上、帝国の亜人部隊を発見したカイムは、友への憎しみと己への苛立ちをぶつけるかのように敵を殲滅していく。カイムの内に渦巻く復讐心、止まるところを知らない怒りの源が、同族の仕業にあると知ったレッドドラゴンは、ただ静かに告げる。

「帝国領土へ急げ。女神もきっとそこにいる」

その言葉には、今までにない何かが宿っていた。

雪の荒野を抜けた一行は、複雑に入り組んだ谷に迷い込み、幼い契約者・セエレと出会う。そこはかつて「石の隠れ里」と呼ばれた地で、土の化身・ゴーレムを使役する人々が暮らしていたという。セエレとその家族も里の住人であったが、帝国軍の襲撃により里は壊滅、両親は殺され、妹のマナも連れ去られてしまった。

カイム達の目的地を知ったセエレは叫ぶ。

「天使の教会ってトコロに行くの？　連れてって！」

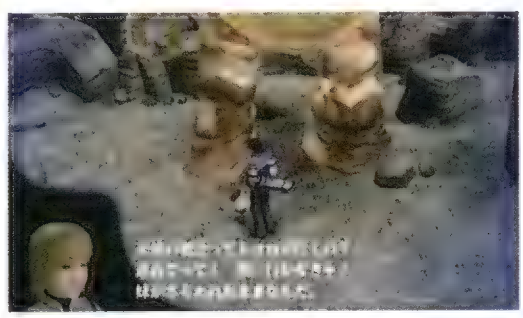
半ば押し切られる形でセエレを一行に加え、彼らは先を急いだ。

それと前後して、レッドドラゴンが封印の森を守るフェアリーの断末魔に気づく。その“声”は、砂漠の神殿と海の神殿に続いて森の神殿までもが破壊されたことを意味していた。残る封印は女神の生命のみ。

暗雲が世界を覆い尽くそうとしていた。

<セエレの祈（→P.052）へ派生>









ついに連合軍と帝国軍の最終決戦が始まった。それは、世界の存亡を賭けた戦いだった。

緒戦は、数の上で勝る連合軍が優勢であった。対する帝国軍は、人造兵器サイクロプスを投入。あまりにも巨大で、禍々しいその姿に、連合軍の兵士達は恐れ慄き、たちまち戦意を喪失した。

しかし、カイムとドラゴンが上空からサイクロプスを攻撃。巨大人造兵器が次々に破壊されていくのを目の当たりにし、兵士達は再び勢いを取り戻す。

戦局は連合軍側へと傾き、帝国軍を圧倒していく。このまま押し切れば、間違いなく連合軍の勝利、と誰もが確信した。ドラゴンだけが、あまりにも早い決着に疑問を差し挟む。

「しかし……容易すぎないか？」

その声が連合軍のあげる勝ち鬨にかき消された瞬間、突如として大地に影が差した。黒い影がみるみる丘陵地帯を覆う。

「裁きがきたぞ！」

帝国兵達の叫びそのままに、天空から巨大な光の塊が落下した。その塊は大地に激突すると、大規模な爆発を引き起こした。爆発の光が視界を奪い、放射される熱が地表を焼き尽くした。それは、帝国軍の空中要塞からの攻撃だった。緑に萌える丘陵地帯は焦熱地獄と化した。

帝国兵の躯は死霊兵となって蘇り、生贄を求めて徘徊を始めた。ヴェルドレは恐慌状態に陥り、狂ったように叫ぶ。

「そうだ！　この惨状は天からの戒め、人類への呪いだ！　女神は天に捧げられたに違いない！」

カイムはヴェルドレを拳で黙らせ、その言葉を否定する。女神の血が流されたなど、カイムにとって、決して起こってはならない事態であった。

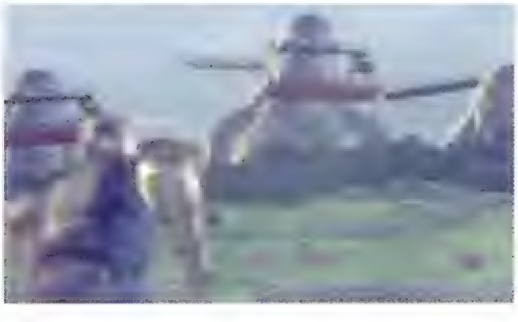
「真実は天のみぞ知る。そこに道があるのならばな」

ドラゴンの言葉で、カイムは冷静さを取り戻した。あの禍々しい力に満ちた光の塊は空から降ってきた。ならば、そこに何がある？

その謎を解き明かすべく、カイムはドラゴンと共に遙か上空を目指す。天空に浮かぶ帝国の空中要塞へ。

五

破壊　ハカイ



六 宿敵

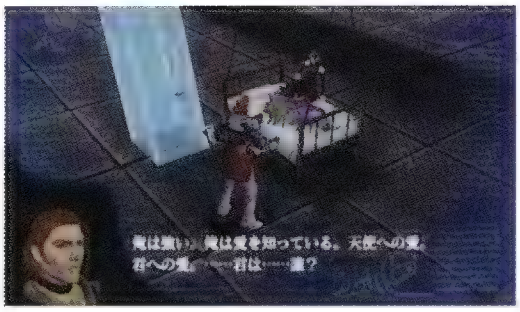
シュクテキ

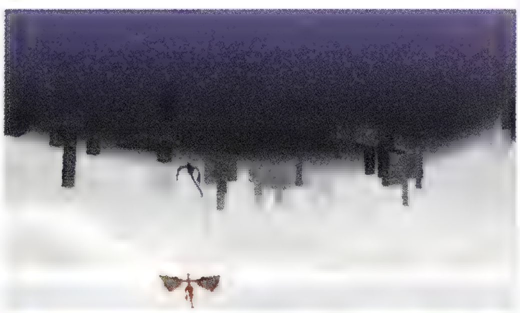
空中要塞内部。祭壇の前では、イウヴァルトが司教の前にひざまずいていた。赤く染まった瞳に狂気の色をたたえ、イウヴァルトはカイムを倒すことを誓う。
かつての許婚を前にしても、彼の心にフリアエという名が蘇ることはない。彼女を守るために、ただ彼女の愛を手に入れるためだけに戦ってきたにも拘わらず。今のイウヴァルトの心にはカイムへの憎悪しかなかった。

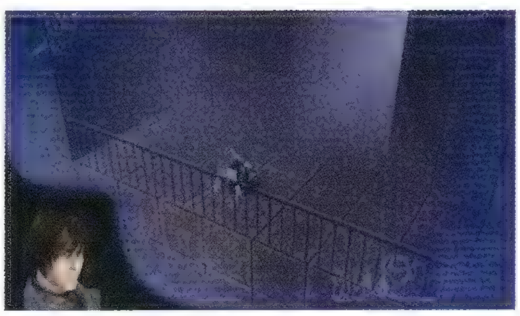
＊＊＊

カイムとレッドドラゴンは、ひたすら上昇を続けていた。巨大な「空飛ぶ貝殻」こと空中要塞を目指して。人知を越えた光を地上に降らせた元凶は、やはり人知を越えた建造物であるのだろう。空中要塞は遠い。
そのとき、漆黒の旋風がカイム達の行く手を阻んだ。イウヴァルトとブラックドラゴンである。赤と黒の竜騎士による一騎打ちが始まった。
憎悪に支配され蝕まれた者と、憎悪さえも糧として戦い続けてきた者とでは、端から勝敗は明らかであった。カイムはかつての友を着実に追いつめていく。
手負いのイウヴァルトはついに空中要塞へと撤退した。カイムと刃を交わすことで思い出したのか、或いは傷の痛みで多少なりとも正気を取り戻したのか、フリアエの名を狂ったように連呼しながら。
その後を追いかけたカイム達は、ついに空中要塞を発見した。侵入者を迎え撃つのは、エンパイア・ドラゴンリーダーの群れと夥しい数の砲台。それらを次々に撃破し、長い通路を上昇し、ようやくドラゴンは要塞の侵入口へと到達した。
「ここからでは何の手助けもしてやれん。おぬしが、やるのだ」
レッドドラゴンをその場に残し、カイムは単身、空中要塞内部へと突入する。
「迷わず突き進め！　その手で己の妹を連れ帰れ！」
ドラゴンの言葉に背中を押され、カイムは通路を帝国兵の群れの中へと斬り込んでいった。

斬り捨てても斬り捨てても現れる帝国兵、迷路のように入り組んだ通路。フリアエの捜索は遅々として進まない。苛立つカイムの許に、女神の危機を告げるドラゴンの“声”が届く。







「女神の“声”が……弱い。弱いぞ。急げ！」
残された時間はあまりにも少ない。

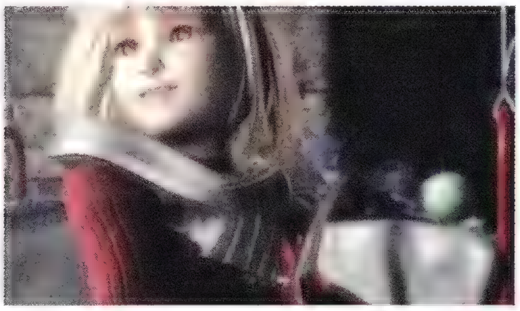
最深部への階段には結界が張られていた。もどかしい思いで発生装置を破壊し、カイムはひたすら走る。やがて、カイムにもフリアエの“声”が聞こえた。近い。が、それは今にも消え入りそうな弱々しさだった。
微かな“声”と己の直感を頼りに、カイムはようやく祭壇の間にたどり着いた。しかし、そこで目にしたものは破壊された最終封印、すでに事切れた妹の姿だった。
声にならない叫びに肩を震わせ、その場に膝をつく。カイムはただ一人の肉親を失ったのである。
そこへドラゴンの“声”が届いた。女神の気配が途切れたのを察したのだろう。
「カイム！　最終封印が解かれたのだな？　早く外に出てこい！　卵が生まれるぞ！」
卵？　再生の卵？　それがどうした？
そんなカイムをドラゴンは強く叱責する。
「しっかりしろ！　次の手を打たねば世界が滅びるのだぞ？　おぬしの妹が耐えて守ってきたことが、すべて無駄になるのだぞ？」
その言葉が再び立ち上がる力を与えた。きつく剣を握りしめ、カイムは祭壇の間を飛び出した。

＊＊＊

祭壇の間には、女神の骸と、いとけない幼女が残された。その瞳は、他の者達と同じく赤い。
赤い花びらをまき散らしながら、彼女は繰り返す。あの謎めいた教義の文言を。あたかも歌い、踊るかのように。

「天使を語ってはならない。
天使を描いてはならない。
天使を書いてはならない。
天使を彫ってはならない。
天使を歌ってはならない。
天使の名を呼んではならない——」







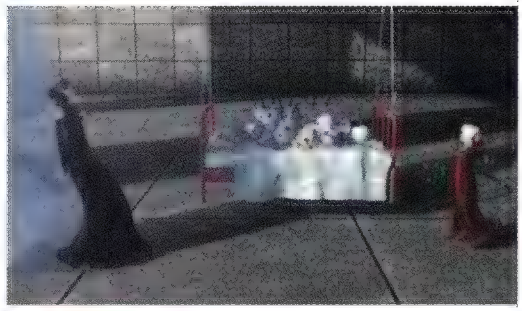
悲劇

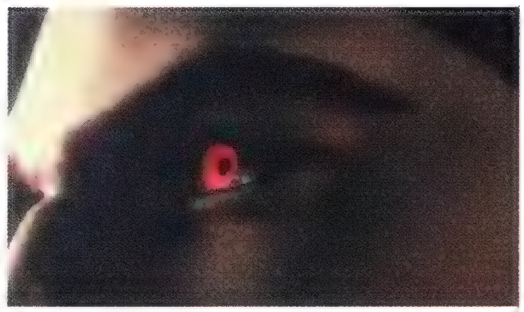
ヒゲキ

七

踊る子供がいた。
　真っ赤な装束に身を包み、真紅の花びらをまき散らし、楽しげに踊る。祭壇の前、居並ぶ赤い目の兵士達の前で。彼らと同じ色の瞳を輝かせながら。
　子供の名はマナ。
　彼女こそが天使の教会の司教であり、帝国軍を率いる者であり、世界を破壊する者であり……すべての元凶であった。

　ある予感に突き動かされて、イウヴァルトは祭壇へと進んでいた。なぜそうするのか、そうしたいのか、何ひとつわからないまま、並み居る兵士達をかき分け、最前列へと進む。
　イウヴァルトの目に、赤い光景が飛び込んでくる。司教の装束の赤、花びらの赤、そして、流れる血の赤。
　イウヴァルトの瞳から赤い色が消える。
「フリアエ……」
　答えはない。フリアエの胸に突き立てられた短剣、足許の血溜まり。かつての許婚の死は、イウヴァルトを一瞬にして狂気から引き戻した。
「フリアエをどうした!?」
　もはや詮無いこととわかっていても、問いつめずにいられなかった。詰め寄るイウヴァルトに、マナは無邪気に言い放つ。
「封印は解けた。もういらない」
　もういらない？　封印さえ消えれば、女神の生死は問わないということか？
　思わず掴みかかろうとしたイウヴァルトの身体が宙に浮いた。床に叩きつけられ、人ならぬ力で跳ね飛ばされたのだと遅れて気づく。
　絶望と無力感とで、イウヴァルトは立ち上がれずにいた。たった今、気づいてしまった。フリアエを女神の任から解放してやりたいと思ったのは、彼女の幸せのためではなかったことに。女神でなくなれば、フリアエは自分の許へ戻ってくる。望んだのはそれだけだ。
　司教の言う「女神の任を降りること」が死を意味していたとは思いもよらずに、手を結んだ。己の望みを手っ取り早く叶えるために。だとすれば。
「……俺が、君を、殺した？」
　床にうつ伏し、嘆くイウヴァルトの横で、マナは無邪気に笑い、歌い、踊り続ける。



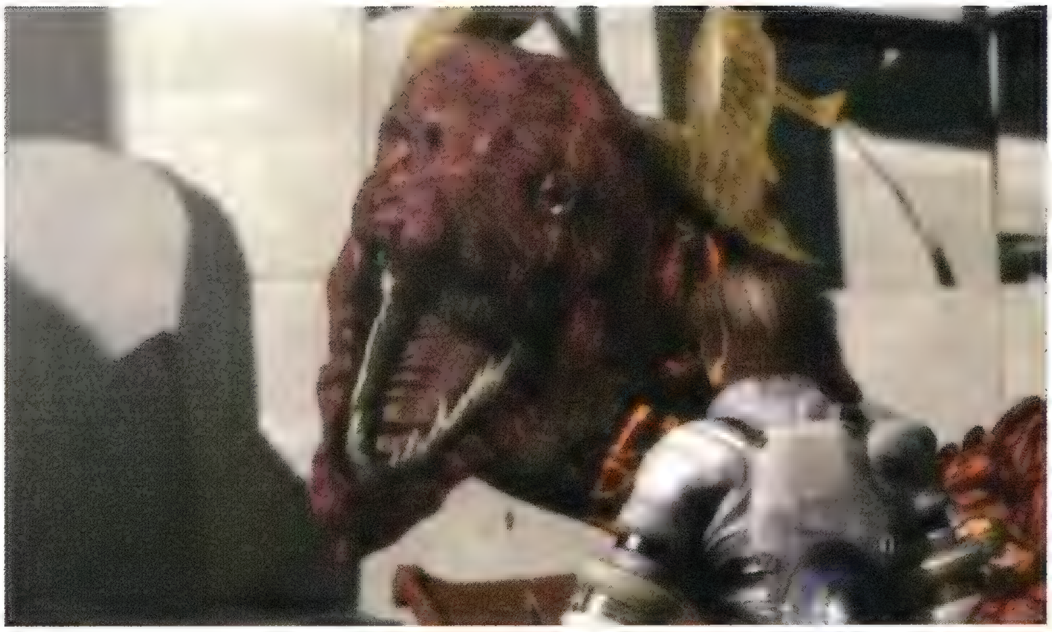


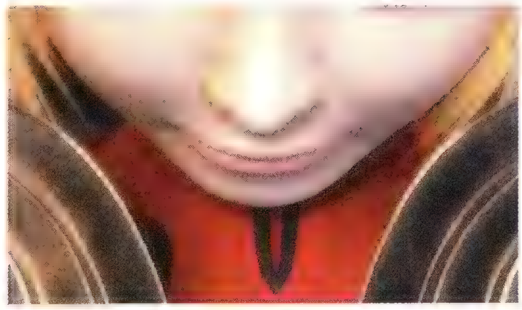
＊＊＊

　フリアエの亡骸を抱き、イウヴァルトは大空をさまよっていた。すべての封印が失われた今、世界は再生の卵によって再構築される。帝国の手先となっていた際に、幾度となく聞かされた話だった。
　再生？
　イウヴァルトの瞳に再び狂気が兆す。卵によって再生するのは世界でなくてもいい。それよりも、もう一度。
「……女神の復活を」
　ブラックドラゴンが翼を鳴らして滑空を始める。目指すは再生の卵。フリアエを蘇らせるために。
　しかし、イウヴァルトとブラックドラゴンを阻む者が現れる。カイムとレッドドラゴンだった。またも激突する真紅の翼と漆黒の翼。
　共に退けない者同士、戦いは長引き、決着はつきそうになかった……。



第七章　悲劇［ヒゲキ］





　マナを追って、カイム達は帝国の本拠地へと向かった。しかし、実際にたどり着いてみると、「帝都」とは名ばかりの荒れ果てた廃墟が広がっている。
　暗い空を漂う亡者や魔物をドラゴンの炎で焼き払い、地上へと降り立とうとしたそのときだった。
「伝説が来おった……」
　そうつぶやくなり、ドラゴンの動きが止まる。上空に現れたのは、古の竜とも聖なる竜とも呼ばれるエンシェントドラゴンだった。
「これ以上……進めぬ」
　竜種にとっての伝説であり、聖なる者を前にレッドドラゴンが怖じ気づいていた。凍り付いたように動こうとしないドラゴンを、カイムは思わず抱きしめる。考えがあってのことではない。ただ、そうせずにはいられなかったのだ。
「は、離れろ！　暖めてどうなるものでも……。全く、どうかしておる！」
　狼狽と咆哮の後、気を取り直したようにドラゴンは翼を動かした。
「伝説も神も善悪も関係ない、酔狂な馬鹿者と契約した身を恨むことにしようぞ」
　覇気を取り戻したドラゴンは、まっすぐに頭を上げて古の竜へと向かっていく。激闘の末に、カイム達はエンシェントドラゴンを倒した。
「……礼を言うぞ、カイム。我は今、我自身を越えられた気がする」
　それは、誇り高きドラゴンが初めて「人間」を認めた瞬間だった。

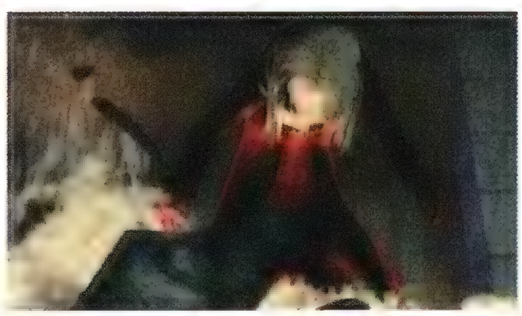
＊　＊　＊

　帝都に降り立ったカイム達は、其処此処に真っ白な球体が出現しているのを目にする。人間の一人や二人、易々と呑み込むであろう大きさ。形容し難い質感。この異様な物体こそが、再生の卵であった。
　それらが点在する廃墟の中、カイムはマナを追って、天使の教会の神殿へと走った。
　神殿の奥深く、祭壇の間にマナはいた。彼女を守る帝国兵や死霊遣い達を斬り捨て、カイムは祭壇に迫る。ついにはマナを追いつめ、捕らえた。
　諸悪の根源を断ち切るべく剣を構えるカイムを静かに制したのは、ヴェルドレであった。
「神官長としての務めを果たさせてくれぬか？」
　たとえ罪がどれほど重かったとしても、その命で償わせるにはあまりに幼い。内に宿る悪意だけを封じ込めれば、ただの無害な子供に戻るとヴェルドレは言う。
　しかし、悪意を封じるための呪文を、マナはさらなる呪詛の言葉で投げ返した。
「人間どもめ……まだ生き延びようとするのか！　醜い……醜いぞ!!」
　幼女のものとは思えない野太い声だった。得体の知れない力によって、マナの身体が途方もない速さで膨れ上がる。神殿の柱と壁を突き崩し、屋根を打ち破って、その身体は巨大化していく。
　巨人と化したマナの身体は、帝都の空を突き破るかに思えた。人ならぬ力で激烈な攻撃を放ってくるマナに、カイムとドラゴンは果敢に立ち向かう。ドラゴンの炎をも弾き返す力に苦戦を強いられるが、それでも彼らは攻撃を緩めなかった。
　気がつけば戦いは終わり、マナは子供の身体に戻っていた。弱く無力な子供にすぎない彼女は、それでも精一杯の虚勢を張り、自らの死を望んだ。
　母親から虐待を受け続けたマナは、憎まれて生きることを何よりも恐れていた。しかし、カイムもヴェルドレもその望みを叶えようとはしなかった。
「カイムはおぬしを一生許さないそうだ。易々と死ねると思ったら大間違いぞ」
　ドラゴンの言葉にマナは怯えて泣き叫ぶ。
「許して、許して、許して、許して……。ごめんなさい。もうしませんしません！」
　マナはただただ泣きじゃくる。
　その一方で、封印を失った世界の崩壊は着実に進みつつあった。

<A-Ending（→P.053）へ続く>

八　封印　フウイン





第八章　封印［フウイン］

九 鎮魂 チンコン

或いは。復讐の鬼と化したカイムの行く末を語ろう。

＊＊＊



夕闇にも似た禍々しい色の空の下、カイム達は帝都に降り立った。巨大な白い球体が点在する廃墟をカイムは走る。妹の亡骸を持ち去った友を捜して。

やがてカイムは、再生の卵の前に佇むイウヴァルトを発見する。狂気に囚われた友の言動は、幼児にまで退行していた。

「フリアエが死んだのは……僕のせいじゃない。僕、悪くないもん！」

再生の卵を使って奇跡を起こす、フリアエを生き返らせる、というイウヴァルトの言葉がカイムには理解できなかった。

再生の卵は明らかに人の領域から外れた存在である。そんなものを使って何をしようというのか。それが如何なる災厄を招くか、知れたものではないというのに。

「俺は……フリアエさえいればいい。フリアエのいない世界など、とっとと潰れたらいいのだ！」

もはや説得は不可能だった。歩み寄る余地はない。カイムとイウヴァルトは互いにドラゴンを駆り、最後の対決に臨んだ。

<B-Ending(→P.053)
C-Ending(→P.054) へ続く>

迷走 メイソウ 十

或いは。別の選択をしたカイムの行く末を語ろう。

＊＊＊

帝国の空中要塞へと向かうべく、カイム達一行が準備を進めていた頃、レオナールが女神の気配を察知した。空からではなく、海から、女神の"声"が聞こえてくるという。

空から海へと進路を変えた一行は、6本の結界塔に守られた巨大な海上要塞を発見する。その周囲を帝国の護衛艦隊が守っている。この周到かつ厳重な防衛体制は、重大な「何か」がそこにあると告げていた。

結界塔を破壊し、カイム達は要塞内に乗り込む。むせ返りそうな潮の匂いが通路に充満している。息苦しさに閉口しながらも、ひたすら奥を目指す一行。

「女神が急に視えなくなりました……」

またもレオナールが不吉な言葉を口にする。

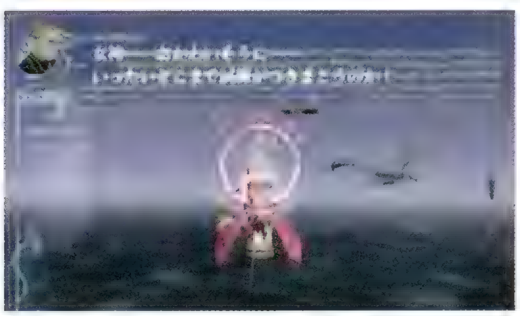
だが、今回も彼の言葉は正しかった。たどり着いた祭壇の間にフリアエの姿はなかった。

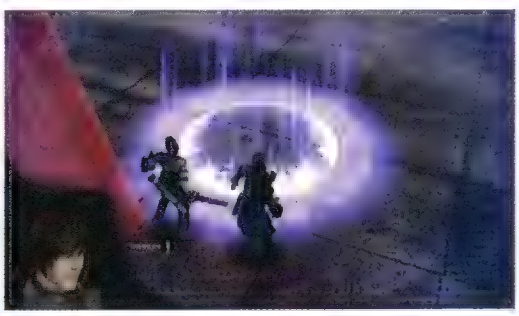
それどころか、天使の教会の司教も、帝国兵達の姿もない。あたかも忽然と消え去ったかのように。

静まりかえった中、床に描かれた魔法陣が強い光を放っている。どうやら、この魔法陣の空間移動によって、女神は別の場所へと連れ去られたらしい。ならば、取るべき行動はひとつ。

カイムは迷うことなく魔法陣へと飛び込んだ。どこへつながっているのかは定かではないが、この先にフリアエがいる。

その直感をカイムは信じていた。





十一

別離　ベツリ



海上要塞の魔法陣は、空中要塞へとつながっていた。女神の“声”はまだ途絶えていない。ただ、それと同時に、邪悪で巨大な「何か」の“声”も感じると、レオナールは言う。

気がつくと、カイムは他の者達からはぐれて、一人、通路を駆けていた。こうしている間にも、フリアエの身に危険が迫っているかと思うと、居ても立ってもいられなかったのである。

次々に扉を開け、フリアエの姿を捜し続けたカイムは、ようやく最後の扉の前にたどり着いた。扉の中からは確かに強い悪意を感じる。おそらく、それこそが天使の教会の司教……。

しかし、扉を開けたカイムが見たものは、思いも寄らない光景だった。祭壇の前にいたのは、司教ではなく、捜し求めていた妹の姿だった。黒いドレスに身を包み、フリアエが跪いている。

思わず駆け寄るカイムを何者かが押し止めた。それは、不自然なまでに自信に満ちた表情を浮かべたイウヴァルトだった。

「俺達は今、新しい世界を生み出そうとしているんだぞ。フリアエも生きられる、新しい世界だ！」

新しい世界？　イウヴァルトはいったい何を言っているのか？

「目を覚ませ、カイム。司教様の教えに賛同しろよ。生き残ろうぜ！」

帝国に寝返った者が今更何を言う。カイムは怒りを禁じ得ない。思わず拳を振り上げようとしたとき、すばやく立ち上がったフリアエが二人の間に割って入った。

「イウヴァルト、こんなところにいてはいけない。自分の場所に戻って」

衰弱した身体で諭すフリアエに、イウヴァルトは叱られた子供のようにおとなしく引き下がった。

イウヴァルトが祭壇の間から立ち去るのと入れ替わりに、柱の陰から子供が顔を覗かせる。マナだった。

「天使は笑わない。天使を起こしてはならない……」

マナは邪悪な笑みを浮かべると、人ならざる者の力でフリアエの身体を柱に張りつけた。

「封印がなんだってんだよ！　私を助けろよ！　役に立たない男どもめ！」

マナの言葉にフリアエが瞠目する。

「わたし、あなたの心が読めるの」

マナは次々にフリアエの心の中を暴き立てていく。なぜ自分だけが苦しまなければならないのか、なぜ誰も助けてくれないのか、こんな世界、滅びてしまえばいいのに……。

そして、最も触れられたくなかった本心が白日の下に晒される。

「お願い。助けて。抱きしめて。お兄ちゃん」

予想だにしなかった真実を突きつけられ、カイムはうろたえた。すがりつくような妹の視線から咄嗟に目を逸らす。ほんの一瞬。受け止めかねて逡巡したのは、わずかな間だった。が、その一瞬の拒絶がフリアエの心を打ち砕いた。

フリアエの手が祭壇にあった短剣へと伸びる。迷いのない動作で彼女はそれを己の胸に突き立てた。これもまた、一瞬の出来事であった。

「私を……見ないで」

絶望の言葉を残して、フリアエは息絶えた。

＊＊＊



空中要塞内部をマナが笑いながら逃げ回っていた。殺意を剥き出しにして追いかけるカイムでさえ、彼女にとっては遊び相手なのか。

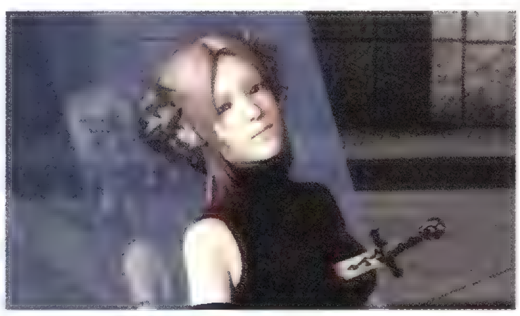
「見つかっちゃった。ラララララ……」

追いつめられてなお、マナは楽しげに歌っている。怒りにまかせて剣を振り下ろそうとしたときだった。

「やめて！　僕の妹をいじめないで!!」

制止の言葉を叫んで飛び込んできたのは、セエレだった。セエレが捜していた生き別れの妹とは、他ならぬマナだったのである。

実の母親に虐待され続けたマナは、心の拠り所を求めて神にすがり、神の繰り人形となった。司教として行った数々の悪行は、ただ神に愛されたい一心での行為。それを理解していたセエレは、必死でマナをかばう。

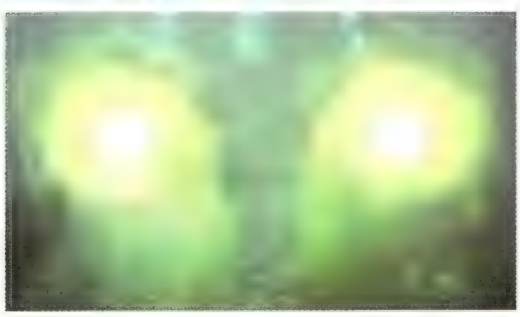


「しっかりして、マナ！　……お母さんは……もう死んじゃったんだよ！」

しかし、その言葉はマナに届かない。セエレなど歯牙にもかけずに、マナは両腕を大きく広げる。

「静粛になさい！　あんた達に私は殺せない。だって、私は愛されているから」

その禍々しい声はマナのものではなかった。もはやマナは自分の知るマナではない……。このまま放置しては、本当にマナは世界を滅ぼしてしまうだろう。



「ごめんね。ごめんね。許して、マナ」

セエレは苦渋の決断を下した。

「助けて……ゴーレム」

セエレを「助ける」ために、ゴーレムはマナに拳を振り下ろした。肉と骨が潰れる音が祭壇の間に響く。

世界に戦乱と破壊とをもたらした天使の教会の司教は、双子の兄の決断によって、その短い生を終えた。

十二 混沌 コントン

司教が死に、帝国を率いる者が消えても、世界の危機は続いていた。
帝都の空から異形の敵が舞い降りた。それは廃墟に残る建物よりも巨大な赤子であった。彼らは、瞬く間に空を埋め尽くしていった。
「司教を倒せば終わり……ではなかったのか？」
ヴェルドレの絶望的なつぶやきと同じことをカイムも、またレオナールも考えていた。
「もはや神の理（ことわり）を超えた世界。どうなっているのか、誰にもわからぬ。……神にもな」
人間を遥かに凌ぐ知識を持つドラゴンにさえ、何が起きているのかわからないという。ただひとつ、わかっているのは戦わねば即座に死がやってくるということ。
カイムは本能のままに剣を振るう。復讐も怒りの念すらも必要ない、殺戮のためだけの殺戮が始まった。
ただ一人、この異様な光景を喜ぶ者がいた。
「ごちそう、いっぱい」
狂ったアリオーシュの目には、この異形の敵すらも、ただの赤子としか映らないらしい。
「ひとつに……なりましょう。わたしの赤ちゃん」
我が子を抱きしめようとするかのように、アリオーシュは両手を差し伸べる。異形の者達が群がった。彼女の望みは叶えられた。赤子達に食いちぎられ、噛み砕かれ……跡形もなく食されることによって。
赤子達がアリオーシュを貪り食っている隙に、一行は先へと進む。しかし、またすぐに道は断たれてしまう。敵の数はそれほどまでに多い。
「さあ！　行ってください！　ここは私が……」



その言葉の意味を察したセエレが、レオナールにしがみつく。
「僕、イヤだ！　もう人が死ぬのはイヤだよ！」
「セエレ。君はとてもいい匂いだ。……大丈夫。私は死にません。さあ、行って！　行くのです！」
仲間達に別れを告げ、レオナールは敵の群れへと、ようやく得た己の死に場所へと走る。
「希望の最期は死にあらず！」
敵達を道連れに、レオナールは壮絶な爆死を遂げた。

＊＊＊

二人の仲間を相次いで失い、それでも進まねばならない一行の前に、一際巨大な敵が現れる。空を埋め尽くした敵達を産み出す者、異形の赤子達の「母」だった。
「アレは……なんだ？　なぜ、“おおいなる時間”を歪める!?」
ヴェルドレが叫ぶのと前後して、セエレが苦しみ始める。あたかも目の前の「母体」に反応するかのように。
「幼な子が失ったものは“時間”。あり得ぬ話ではない」
契約の代償に“時間”を失ったセエレと、“おおいなる時間”を歪める母体。符合する“時間”は偶然なのか、必然なのか。
「僕しか……いないんだ。同じモノを持っているのは、僕しか……」
セエレは目の前の敵と己の関係を、半ば本能的に悟っていた。世界の命運を握る者が他ならぬ自分自身であることも。

<D-Ending（→P.054）へ続く>

十三 真実 シンジツ

或いは。終への道を選んだ人と竜の行く末を語ろう。

＊＊＊

赤子達を産み出した母体は、勢いを増しながら膨張を続けていた。“おおいなる時間”は歪み、世界は常軌を逸した領域に呑み込まれようとしていた。
終末の光景を前に、カイムは目でドラゴンに問いかけた。俺達は何をすべきなのか、と。
「そうさな……虎の子を見つけたくば、虎の巣に入るしかなかろう」
それ以上の言葉は必要なかった。カイムをその背に乗せたドラゴンが母体めがけて飛ぶ。
突撃を試みたからといって、それで何かが変わるとも、何かが得られるとも限らない。まして、その先に何があるのかは……神ですら知り得ないだろう。
母体が眼前に迫る。真紅の翼が、異様に膨れ上がった腹部に到達したかに思えた瞬間。
辺りは真っ白な光に包まれた。

＊＊＊

光の奔流と共に、母体は消えた。異形の赤子達も、そして……カイムとドラゴンも。生き残った者達を残して。



＊＊＊

東京都新宿区新宿、上空。

真っ白な光をくぐり抜けた先には、予想もしなかった光景が広がっていた。灰色の大地に、同じ灰色の巨大建造物がいくつもいくつも建ち並ぶ。そのくすんだ色の中にぽつりと、ドラゴンと同じ色の塔が見える。
そんな奇妙な光景の中、突然、母体が歌い始めた。光と闇が音の波となって織りなすそれは、滅びの歌だった。
ドラゴンの咆哮が、その禍々しい歌を幾度も幾度も打ち消す。やがて母体は力尽き、滅びの歌は止まった。
人と竜が、彼らの領域を超えた力を退けたのである。奇跡、であった。

<E-Ending（→P.055）へ続く>

飢

レオナールの飢

隠者——。レオナールの悲嘆と困惑を語ろう。

＊＊＊

「視えます。森が……燃えている」
フェアリーと契約し、視力を失ったレオナールが察知したのは、帝国軍が森を襲撃する光景だった。
カイム達は、妖精族が守る「封印の森」へと急行するが、時すでに遅し。森は炎に包まれていた。
「人間ってのは迷惑な生きモンだぜ!! くせぇしよぅ」
ここぞとばかりに、フェアリーが人間を罵倒する。愛らしい外見からは想像もつかないほど、悪辣極まりない物言いであった。
「木の陰もちゃんと探せよっ。アレしてるヤツが調子よく生き残ってるかもよっ！ フーヒャハハハッ！」
レオナールの顔が不自然に歪んだ。まるで、その言葉にだけ、傷をえぐる刃が仕込まれていたかのように。

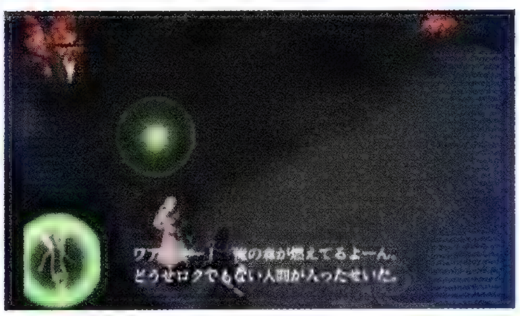
＊＊＊

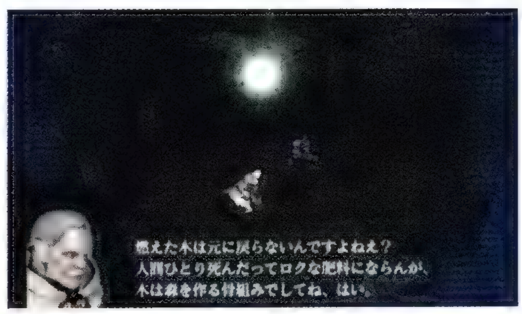
森の中に帝国軍の駐屯地を発見したカイム達は、そこに集められていたのが少年兵ばかりであることを知る。まだ幼い彼らに無慈悲な真似をしてくれるなと懇願するレオナールだったが、カイムはお構いなしに少年兵達を斬り捨てる。カイムにとって、赤い目の兵士は敵。彼らが何歳であろうと、ためらう理由にはならなかった。
やがて、レオナールは折り重なる遺体の中に、まだ息のある者を見つけた。傷を負い、怯える少年はか細い声で助けを求める。
「たす……けて……。僕……僕、こわい……」
どことなく死んだ弟を思い出させる少年だった。もう大丈夫だと、レオナールは優しく声をかけ、少年を抱き起こす。こんなにも幼く、稚い者達に悪意などあるものかとレオナールは思う。
「おぬし、何をやっておる!?」
レオナールが背にかばう者に気づいたドラゴンは声を荒らげた。
「まだほんの子供ではありませんか！」
しかし、そんなレオナールの思いは呆気なく裏切られた。突然、少年は本性を現し、レオナールに襲いかかったのである。邪悪な笑みを浮かべて、死霊を召喚する少年兵。彼は帝国の死霊使いだった。
「なぜ、いらぬ情けをかける!?」
カイムの剣によって少年兵は即座に斬殺されたが、ドラゴンの怒りは鎮まらない。ただただ謝罪の言葉を繰り返し、うなだれるレオナール。フェアリーが笑い転げながら彼の性癖を暴きたてる。
「言えねーよなあ！ フヒャ。少年が可愛かったからとか言えねーよなあ！ 抱きたいなんて……プッ。フヒャヒャハアッハ！」
レオナールの顔に苦悩の色が滲む。
「いっそ……今ここで死なせてくれ……」
「はあ？ 何言ってんのお？ もしもーし？ アナタ死ねなかったんですよねー？ ためらい傷バリバリ！」
レオナールの弟達は彼が家を空けている間に殺された。己を責め、自殺を図ったが死にきれなかった。それにつけ込んで、フェアリーは半ば強引にレオナールと契約を結んだのである。
「やだなぁ。俺と一緒に生きてくれるって約束したじゃないですか、お兄さん。俺、もう一人じゃ生きられない身体なんですよ。契約ね、契約。フヒャヒャヒャ」
以来、レオナールは夜となく昼となく、契約相手に口汚く罵られるという境遇に甘んじている。それが、弟達を守りきれなかった自分への罰だった。

＊＊＊

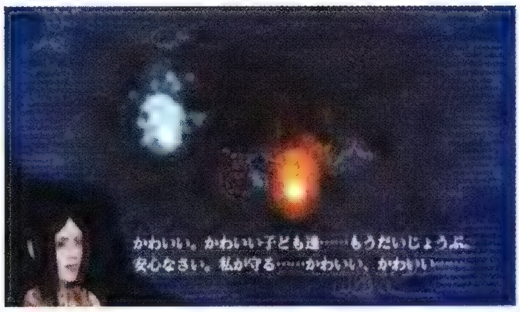
森の奥で、カイム達は封印を守る妖精族の長に出会う。レオナールの契約相手であるフェアリーがそうであるように、その長もまた、聞くに耐えない言葉を並べてたててくる。
「ただ私は臭くて野蛮なあんた達に、これ以上、この森にいてほしくないだけでして。へっへっへっへ。ほぉっほ。こりゃ失敬」
下卑た物言いに、ドラゴンは不快の念を隠さず、「失せよ！」と一喝する。が、妖精王は気にも留めない。
「それはそうと砂漠は暑いですねえ……。死体の腐りも早いでしょうなあ」
何やら含みを持たせた言葉であった。
「砂漠？ 砂漠がどうかしたのですか？」
不安を隠しきれないレオナールに、妖精王は底意地の悪い笑みを浮かべて続ける。
「こりゃ口が滑った。いや、言えませんよ。神官長一行が間抜けヅラ並べてあっさり襲われた、なんてねえ。あんたらのお仲間の無事も定かじゃない。いい気味だなあ！ なんてねえ」
神官長の一行にはフリアエとイウヴァルトがいる。彼らの安否を確認するため、カイム達は急ぎ砂漠へ向かった。その背後では、妖精王の嘲りの声がしつこく木霊していた。
「みんな死ねばいいのに……なんて、とてもとても、めっそうもなくて、言えませんってばあ。へっへっへっへ。ほぉっほ。ほぉっほっほ！」

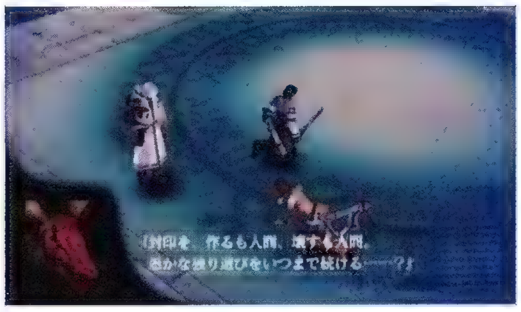






外伝　レオナールの飢 [レオナール ノ キ]





アリオーシュの奇

狂女——。アリオーシュの悲哀と虚無を語ろう。

＊ ＊ ＊

封印を守るべく、海の神殿へと向かうカイム達は、帝国の船団が、エルフの子供達を次々に海に投げ捨てているところを目撃する。

エルフ達は封印を司る神殿の番人である。帝国軍がエルフの里を襲い、里の者達を連れ去ったのは、エルフ族のみが持つ封印番の力を欲したためではないかと、ヴェルドレは言う。

拉致したエルフ達を使って神殿への侵入を可能にした帝国軍は、不要となった子供達を処分した。カイム達が目の当たりにしたのは、その光景だったのだ。

帝国軍の侵入を許してしまった今、一刻も早く海の神殿へと向かい、封印を守らなければならない。それが優先順位というもの。ところが。

「子供……あたしの子供達……。待ってて……。今、行くわ」

アリオーシュが目を輝かせて海中に身を踊らせた。夥しい数の帝国船団をものともせず、アリオーシュはまっしぐらに子供達のほうへと泳いでいく。

＊ ＊ ＊

周辺海域の船団を壊滅させ、飛び交うエンパイア・ドラゴンを焼き払い、ようやくカイム達はアリオーシュに追いついた。

船の上では、アリオーシュが子供達の亡骸を相手に戯れていた。帝国兵は子供達を生きたまま海に投げ込んでいた。投げ捨てられる前には、まだ生きていたはず。つまり、この子供達はアリオーシュの手に掛かって死んだのである。

「かわいい。かわいい子供達……もう大丈夫。安心なさい。私が守る……かわいい、かわいい……」

そうつぶやきながら、アリオーシュは子供達の亡骸を弄んでいる。

これでは帝国の非道と何ら変わりはないと、レオナールは激高する。

「なぜです？　アリオーシュ、あなたに子供はいないのですか!?」

詰め寄るレオナールの前に、アリオーシュを守護するかのように2体の精霊が現れた。

「殺された。帝国軍によって殺され、捨てられた。こんな風に、血の海へと捨てられた」

火の精霊・サラマンダーと、水の精霊・ウンディーネの口から語られたのは、平凡な主婦であったアリオーシュを襲った悲劇とその結末だった。

「そして、この先、子供を持つこともない。我々との契約に“子宮”を使ってしまったから」

サラマンダーとウンディーネは、アリオーシュの狂気に魅せられて契約を結んだ者達だった。

「よって永遠の、狂気と孤独」

精霊達の語るアリオーシュの血塗られた過去に、一同は言葉もなかった。ただ、封印が帝国の脅威に晒されている今、ここで立ち止まっているわけにはいかない。

カイム達は海の神殿へと急ぐ。

＊ ＊ ＊

だが、海の神殿の封印もまた、破壊された後だった。世界の秩序を守る要がまたひとつ失われてしまった。

「封印を、作るも人間、壊すも人間。愚かな独り遊びをいつまで続ける……？」

ドラゴンの言葉に反論できる者はいない。

誰もが落胆と苦渋の色を隠せない中、アリオーシュだけが砕け散った封印のかけらを弄び、無邪気に笑い続けるのだった。

奇

セエレの祈





双子の兄——。セエレの逡巡と韜晦を語ろう。

紅き岩山を進み、帝都へ急ぐカイム達は敢えて険しい谷へと足を踏み入れていた。

最短の道だからではない。セエレの懇願を聞き入れてのことである。険しい岩山の奥にあるという石の谷で、双子の妹が迷子になったのだという。

「みんな、僕の妹をさがすためにここまで来てくれて、ありがとう！」

セエレは全身で喜びを表すかのように、岩から岩へと飛び跳ねてみせた。

「妹のマナは母さんによく叩かれていたよ……マナだけ叩かれていたんだ。いつも……」

生まれ育った里に近いという場所柄か、いつも以上にセエレは饒舌だった。

「僕は母さんに叩かれなかった分、マナの分まで苦しまなくちゃ。ね？」

しかし、セエレは気づいていない。マナの分まで苦しむと言いながら、そうやって「かわいそうな子」を演じることに心地よさを覚えている自分に。それに。

「セエレ……そんなに自分を責めてばかりいては、よくありませんよ」

決まって、レオナールのように慰めてくれる大人がいる。自分自身を責めて、罰して、反省をして、「良い子」を演じていれば、誰かが必ずほめてくれる……。

ただ、ドラゴンだけは違っていた。

「幼子よ。おぬしが胸に抱く悲しみは“偽善”とも呼ばれるのだ。わかるか？」

ドラゴンは、容赦なくセエレのずるさを指摘する。聞き流すも受け入れるも好きにしろ、と言わんばかりに淡々とした口調で。

険しい谷にも帝国軍は兵士や魔術師を送り込んでいた。そこかしこに潜む敵を殲滅しながら、カイム達は石の谷にたどり着いた。だが、そこは予想以上に過酷な場所であった。

「“音”がありませんね。こんなところに……セエレの妹さんはいるのでしょうか？」

レオナールが首を傾げる。カイムは無言であったが、それに同意しているであろうことは表情で知れた。

「マナ！　マナ！　いたら返事をして！」

沈黙に耐えかねて、セエレは叫んで駆け出した。

「僕だよ！　セエレだよ！」

しかし、答える者はない。セエレは焦った。

妹のマナは迷子になったのではなかった。実は母親に捨てられたのだと、セエレは知っていた。だからこそ、マナには生きていてほしかった。

マナは恨んでいるだろう。見て見ぬふりを続けた兄の自分を。もしもマナが死んでいたら、永久に許してもらえない。だから、生きていてほしい。許してもらうために。そう、セエレは自分のためだけにマナを捜していた。その利己的な動機に気づかないまま……。

そのときだった。突如飛来したグリフォンがセエレに襲いかかった。助けてもらおうにも、カイム達とは離れてしまっている。

グリフォンはその鋭い鉤爪でセエレの身体を掴むと、再び空高くに舞い上がった。

セエレの“声”を手がかりに、カイム達は必死でその後を追いかけた。

グリフォンが向かった先は、魔物達の居住区だった。セエレが囚われていたのは、秘境とも言えるこの地には不釣り合いなほど巨大な闘技場。

そこでは、人間を賞品として亜人達が戦うといった異様な光景が、日夜繰り広げられているという。セエレはその賞品としてさらわれたのだった。

アリオーシュが舌なめずりをしながら言う。

「私が助けたら……私のもの？　いただける？」

その言葉に、ふと思いついたようにレオナールもつぶやいた。

「私が助けたら……？　な、何でもありません」

結局のところ、闘技場に乗り込み、セエレ救出のために戦ったのはカイムだった。

「ちょうど良い機会だ。救うために剣を振ることを覚えてこい」

ドラゴンは皮肉混じりに言ってカイムを送り出した。

ゴブリン、オーク、トロル、オーガといった亜人達を次々に撃破し、カイムはセエレを取り戻した。だが、再会を喜ぶのもつかの間、またも封印が破られたことを彼らは知る。

「あぁ……また僕……僕のせいだね？　僕が谷に行きたいなんて頼んだから、余計な回り道を……」

また自虐的な言動に逃げ込もうとするセエレを、ドラゴンは厳しい口調で叱責した。

「反省という名の言い訳ばかりしていても、事態は何も変わらぬぞ」

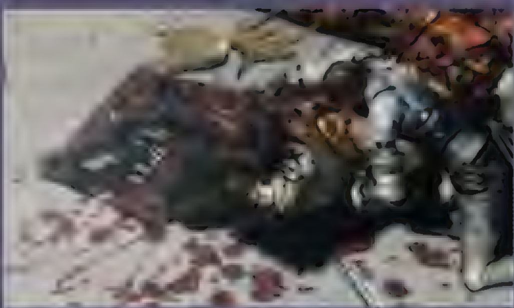
「う、うん。わかった」

セエレは涙を拭いて立ち上がる。ほんの少しだけ、何かが変わったような気がした。

セエレは妹マナの捜索をあきらめ、カイム達は最終決戦の地、帝国領土へと乗り込むことを決めたのだった。

Ending A

一刻の猶予もなかった。
新たな女神を探し出して、再び封印を施さなければ世界の崩壊を食い止めることはできない。神官長ヴェルドレは、苦渋の表情で言う。
「また誰かを犠牲にせねばなりません。私は……さしずめ死刑執行人です」
不意にドラゴンがカイムの許へ歩み寄り、つぶやいた。
「また進めぬようになった。……褒めてくれぬか？」
帝国との戦いが終わった今、どこに進む必要があるのかと、訝りながらもカイムはドラゴンの首に腕を回し、そっとさすった。
「……もう大丈夫だ」
ドラゴンは静かに離れると、ヴェルドレに向き直る。
「我を封印に使うがよい。精神力、生命力、すべてにおいて人間の比ではないぞ」
人間を見下していたはずのドラゴンが、人間のためにその身を犠牲にしようとしていた。
儀式が執り行われ、封印の呪文が鎖のようにドラゴンの身体に巻き付き、眩しい光が溢れる。傍らで見守るカイムは、己の頬を伝わる涙に気づく。
「覚えておいてもらいたい……こと……が……ある」
ドラゴンがゆっくりと首を起こした。
「アンヘル……それが我の名だ。……人間に名乗るのは、最初で…最後だ」
別れの予感にカイムはうつむく。
「さらば……だ、[illegible]……[illegible]……」
ドラゴンの身体が光の粒となって消え去り、世界は新たな封印の女神を迎えた。



a fallen Angel never smiles
A fresh shrine will be built by the hands of the lord
on top of numerous sacrifices.
幾多もの犠牲の上に、主の御手の新たな祠が作られるだろう

イウヴァルトは、再生の卵の前に跪いた。両眼を閉じて、祈りを込めて、フリアエの亡骸を白い球体に近づけていった。卵は待ちかまえていたかのように、するりとそれを呑み込んだ。
やがて卵の表面が揺らぎ、フリアエがゆっくりと姿を現した。開くはずのなかった両の瞳が、確かにイウヴァルトを捉えている。
次の瞬間、イウヴァルトは得体の知れない触手に貫かれ、絶命していた。その触手は卵の中から、フリアエから生えていた。背徳の女神の誕生だった。
イウヴァルトを捕食したフリアエは、次なる獲物を求めて帝都の空へと飛び立った。再生の卵とは、その中に入った者を恐るべき異形生物へと転生させる装置だったのである。

異形の者と化したフリアエを、カイムはドラゴンに騎乗して迎え撃つ。
想像を絶する攻撃を仕掛けてくる敵は、紛れもなく最愛の妹の面影をしていた。躊躇しながらも、カイムは背徳の女神と化したフリアエを屠り去った。
「カイム……我らに結果はないぞ。それでも……お前は戦うのだろう？」
かつて妹であった者の亡骸を抱き、カイムは無言に佇んだ。やがて空を無数の「卵」が埋め尽くした。笑いさざめくいくつもの声。帝都の各所に出現したいくつもの卵が一斉に孵化したのである。
ドラゴンが静かにつぶやいた。
「世界を救う"再生の卵"など……始めからありはしない。人間は決して救われないのだ」



Ending B

flowers for the Bloken spirit
A woman turned into a stake
杭となりし女、発火する皿の上で世界を統べるだろう
will dominate the world on the blazing plate.

フリアエを復活させるべく、再生の卵を目指したイウヴァルトは、その望みを果たせぬまま死んだ。幼い日々を分かち合った友の手によって。
妹を死に追いやり、友を狂わせた者を討つために、カイムは帝都を走る。

・・・

一方、帝都の神殿にたどり着いた司教・マナは、空中の間で再生の卵が孵化するのを、神の使いが出現するその時を待ちわびていた。そして。
「ドラゴン――神の使い――、私のしもべ達よ――」
マナはドラゴンの群れに向かって手を差し伸べる。が、次の瞬間、幼い悲鳴が上がった。

・・・

一足違いで神殿の間に踏み込んだカイムは、討つべき敵がいなくなっていることを知る。神に愛されていた仮の司教は、神の使いによって食い殺されていた。
「卵を前にしたドラゴンに、人間の司教ごときの法術は効かぬ」
その言葉の意味を図りかね、カイムはドラゴンをじっと見つめる。
「カイム……我らの契約はここに終了する」
契約相手たるレッドドラゴンの口から出たのは、あまりに思いもよらない言葉だった。
ドラゴンの存在意義とは、神の意に対する修復機能だけを遂行する役割を担うこと。再生の卵が出現した今、神の失敗作である人間を葬り去らねばならないのだという。そして、契約相手であるカイムも、例外ではなかった。
「許せ!」
ドラゴンが咆哮する。最強の戦友が最悪の敵に変わった瞬間だった。

「カイムよ、生きたいのなら――まず我を倒せ!!」
ドラゴンの吐く炎の先には常に敵がいた。そして、己の剣が向かう先にもまた同じ敵がいた。よもや、それらを互いに向け合う日が来ようとは。
手の内を知り尽くした者同士、戦いは長きに及んだが、ついにカイムの剣が止めの一撃を放った。

「……おぬし、強くなったな」
苦しげに、それでもどこか満足そうにつぶやくと、ドラゴンは息絶えた。

・・・

カイムは祭壇に歩み寄り、剣を一閃させた。安置されていた卵が壊れ、形を失う。
神殿の外から咆哮が聞こえてくる。人間を殲滅させるためにドラゴン達が集結しているのだ。彼らの体当たりを受けて、壁に、柱に亀裂が走る。
カイムは走り出す。戦いの場へと。最後の最後まで、抗い続けるために。
その後ろ姿が光の中へと消えた。



終

Ending C

an eternal farewell with your Companion
When a pitiful child challenges the hands of the lord,
the door would close.
哀れな子が主の御手に挑む時、扉は閉じるだろう

終

Ending D



「僕をあそこまで連れてって」
異形の母体を指し、セエレはドラゴンに訴えた。失われた時間を持つ者と、"おおいなる時間"を止める者とが接触すればどうなるか。似て非なるものを持つ者同士の衝突で、セエレはそれを悟っていた。
「神話において勇者はいつも"希望"だ。……おぬしにも――その血は流れておる」
ドラゴンに勇気づけられ、セエレはカイムと共に母体を目指した。空を覆い尽くす異形の赤子達の間をすり抜け、ドラゴンが飛ぶ。

セエレが母体の額面に飛び降りたその直後、赤子達の群れはついにカイムとドラゴンを捕らえた。ドラゴンの翼が噛み砕かれ、腕が食い破られる。持ち主を失った剣が落下していく。
「これで……許してくれる？　マナ……」
そうつぶやいたセエレの身体から力が抜けた。ゆっくりとその瞳が閉じる。セエレの眠りは、時をも眠りに引き込んだ。
そして、世界の崩壊は止まった。

昔々あるところに、ひとりの勇敢な兵士がおりました。兵士は時の酒を飲み干し、世界の穴で眠っておりました。ずっと、ずっと。若くて強い、そのままの姿で。
けれども、世界が血で染まった時、兵士は目覚めました。
「今こそ、我の命を使う時！」
兵士は戦い、戦い、やがては死にましたが、兵士の永遠の時は、世界に新たな命を作りましたとさ。
おしまい。

the Daffy child's wildest dreams
永遠の孤独を持つ弱き者は、最後に跳ね飛ぶ長針を止めるだろう
A weakling in an eternal solitude will eventually halt
a jumping minute hand.



終

Ending
E

赤い竜が飛行し、咆哮していた。新宿ビル群の頭上に、突如として出現した白い巨人と赤い竜との戦い。それは、竜が勝利して終わったように思われた。

・・・

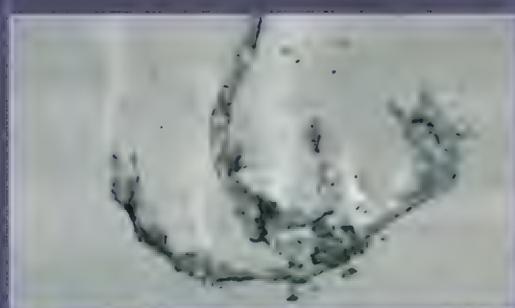
「やったぞ！ ついに――!!」
カイム達の世界に破壊と殺戮をもたらした異形の母体は、異境の地、この奇妙な世界で倒れた。
次の瞬間、閃光と衝撃とがカイム達に襲いかかった。何が起きたのかわからぬまま、カイムとドラゴンは想像を絶する高熱に灼かれ、落下していく。

・・・

スクランブル発進した2機のF15-DJはその任務を遂行した。未確認飛行体は撃墜され、電波塔に激突して止まった。

「こちらスカーフェイス、目標に命中。正体は依然不明。霞ヶ関方面に落下した模様……」

そこは、新宿。
因果が巡る街――。



the End of dragon sphere

失われた世界、私達は―

The world and us who were lost――

Artworks アートワークス・設定画

『ドラッグ オン ドラグーン』が生み出された当時、たくさんのコンセプトアートが描かれた。担当したのは、同作のキャラクターデザイナーである藤坂公彦氏。ここではそれらに加え、氏による初期のキャラクター設定画や、のちに作られたCGビジュアルなどのアートワークを掲載していく。なお、P.080 ～ 082 に掲載したのはアーケードゲーム『ロード オブ ヴァーミリオン』のカードの絵として使用されたもの。P.083 に掲載したのは、『ロード オブ ヴァーミリオン Re:2』のカードの絵として使用されたものである。

































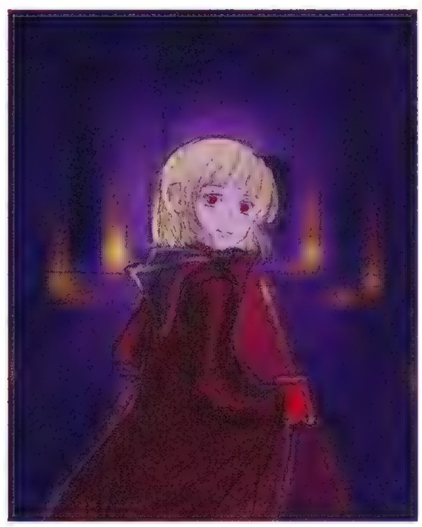


































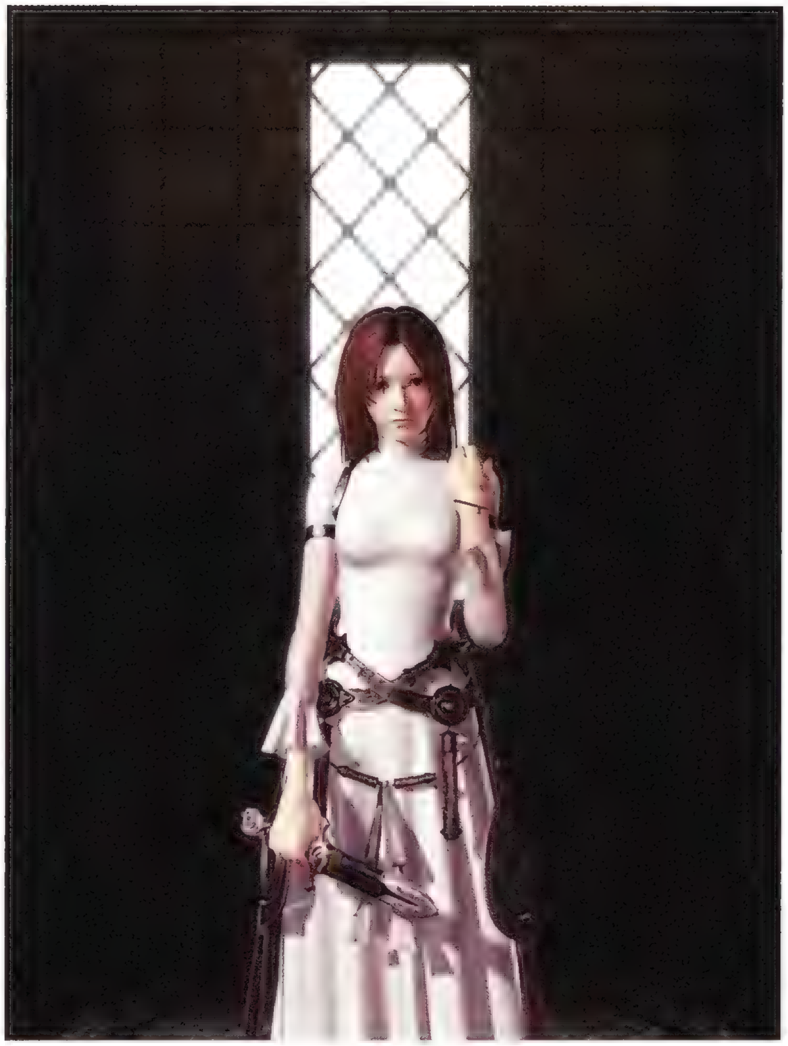

THANKS!



















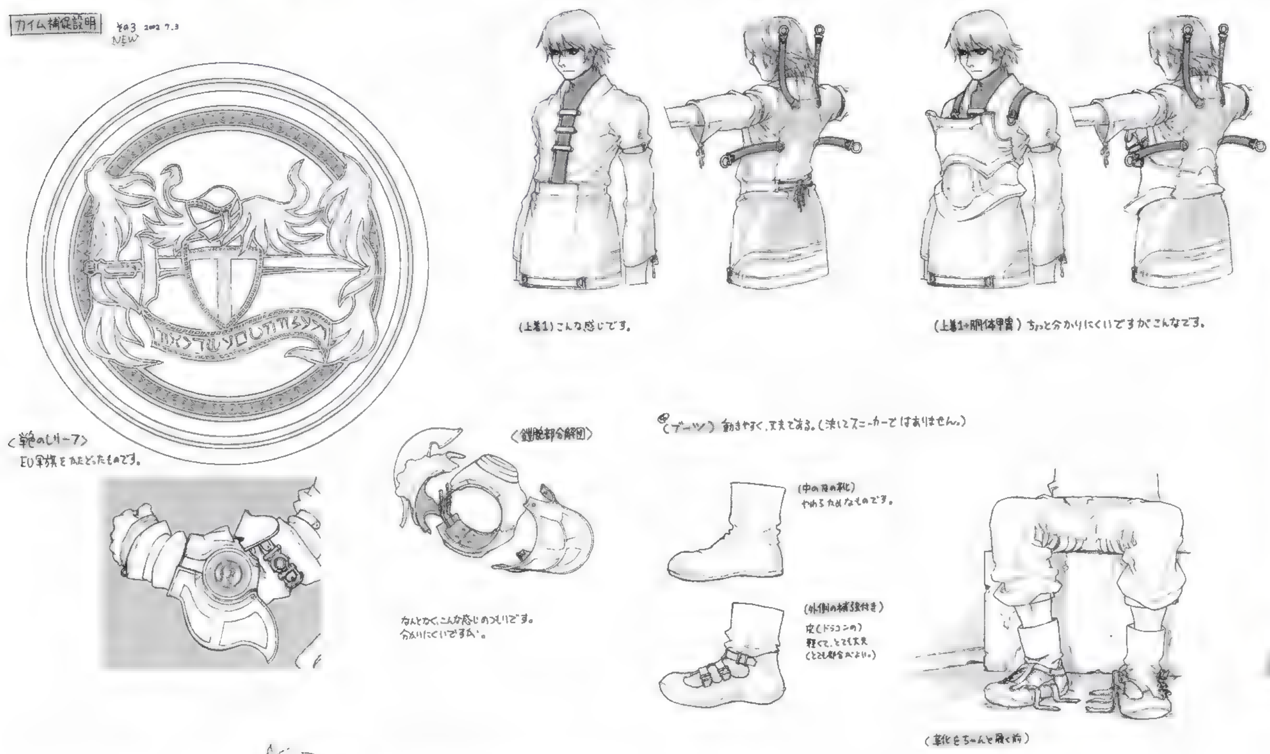














キャラクター設定画 ①



❶カイムの鎧の左腕部分にある、円形パーツのデザイン。ここには、連合軍の軍旗のレリーフが施されている。また、鎧を分解したときの図も描かれており、細かな部分にまでリアルな設定が施されていたことがわかる。この、全身を覆うのではなく、おもに腕を強調したデザインの鎧こそが、カイムの特徴敵なシルエットを決定づけている。❷カイムの上着のデザイン画。背中に4本のベルトがあり、それらを用いて胴体の甲冑部分を固定する仕組みとなっている。❸カイムの足下。スニーカーではなくブーツであり、靴の外側の補強部分には、軽くてとても丈夫なドラゴンの皮が使われているとある。❹第一形態のレッドドラゴン・アンヘルのサイドビュー。ゲーム中に立体化することを想定して設定された、顎や足の関節の仕組み、各部位の断面など。骨格や筋肉の具合まで考慮されているのがおわかりいただけるだろう。❺❻たとえそれが人物ではなくドラゴンであっても、重要度は変わらずさまざまな表情が描かれた。❼生き生きと躍動する全身像。これらの設定画が、実在する生物さながらのリアリティを与えた。❽イウヴァルトの命とも言えるハープの設定画。特徴のある形状を支えるストラップの取り付けかたまでが、詳細に描かれている。❾ブラックドラゴン・レグナの表情。❿この設定画の段階で、すでにレグナには禍々しい空気感がまとわりついているかのよう。⓫フリアエがまとっているドレスを破かれるシーンを描いたもの。⓬ドレスの下着のレースの模様。⓭⓮「再生の卵」で異形の女神となったフリアエの設定画。「子宮から垂れ流れている何か」が何なのかは定かでない。

Inuart & Black Dragon [イウヴァルトとブラックドラゴン]

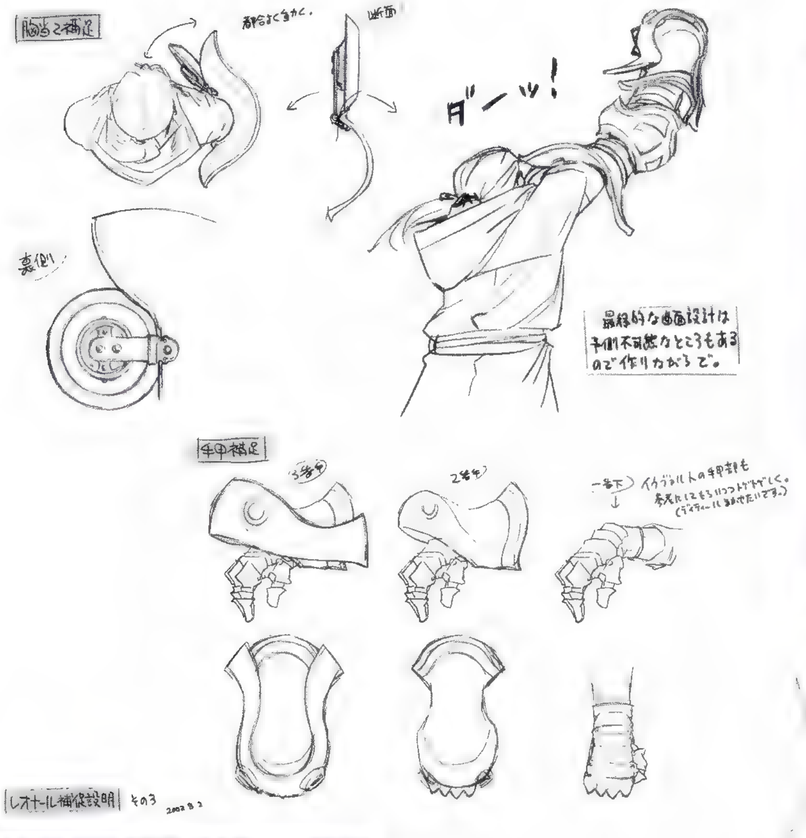


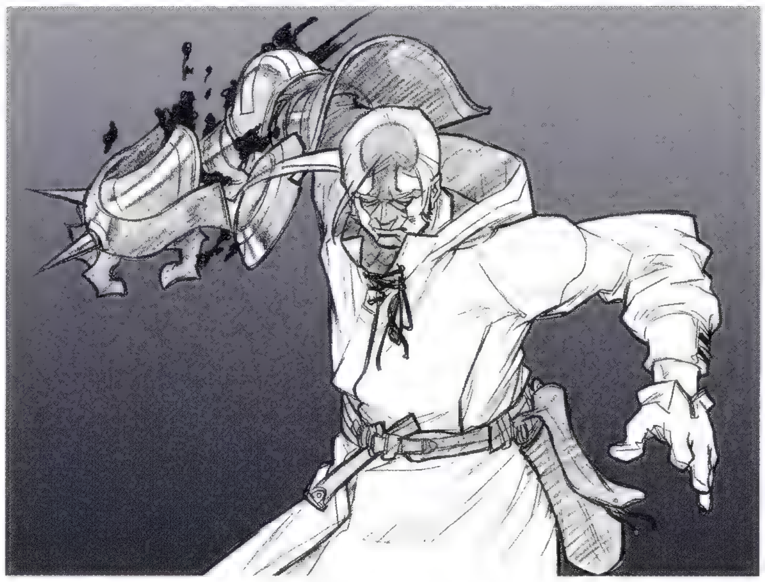
Furies [フリアエ]



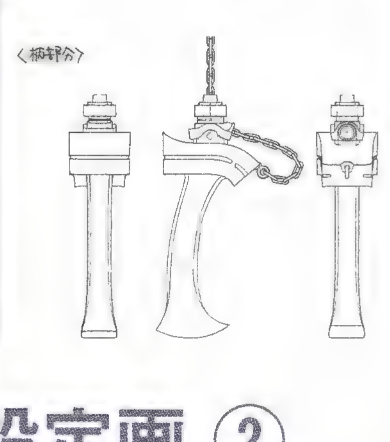
Other Characters [その他のキャラクター]

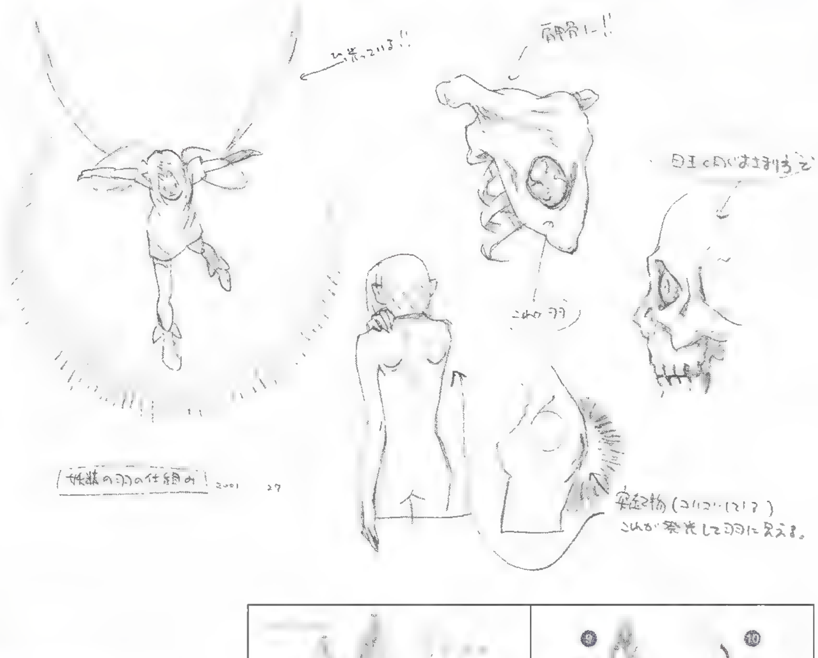






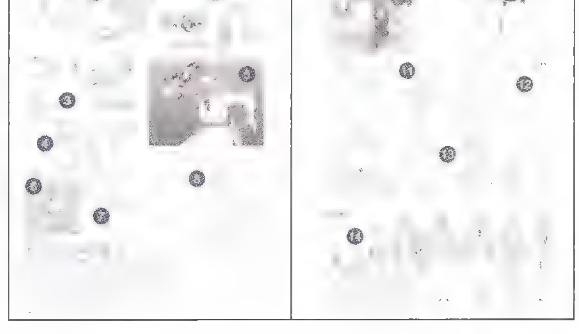




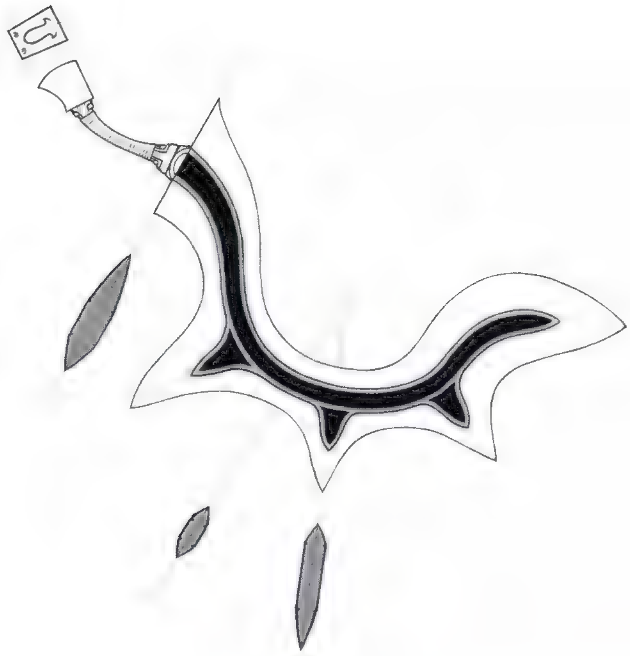


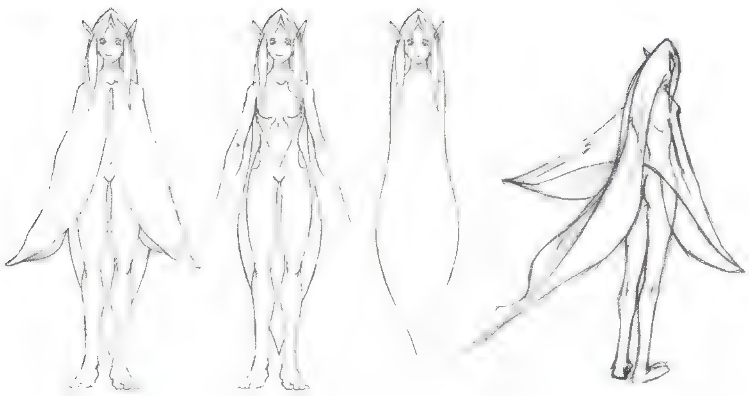
キャラクター設定画 ②

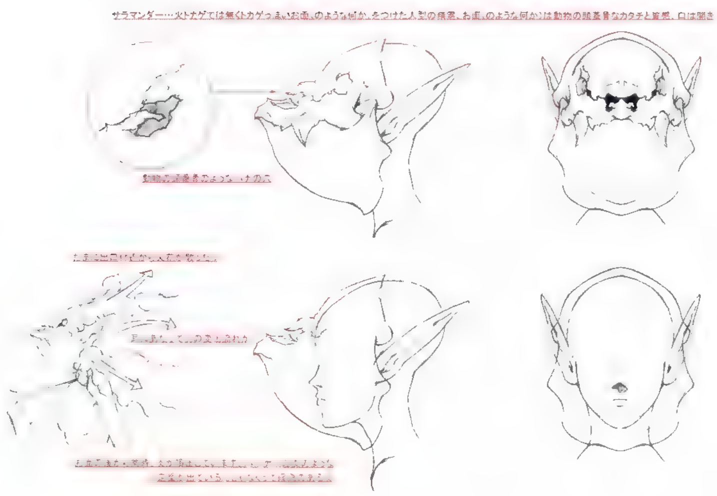
❶ヴェルドレの杖の収納場所と、上着を脱いだ姿に関する設定。体には包帯が巻かれている。❷レオナールの左の腰にぶら下がっている腰袋に関する設定画。2点をベルトに引っかけて留める方式。❸～❺レオナールの特徴的な手甲部の設定画。拷問服のようなカラクリで、その内部ではレオナールの腕にトゲが刺さっている、という初期の設定もあった。のちにその設定はなくなり、デザインとしてのみ残されたようだ。❻❼レオナールが持っている武器のディティール。束付近にあるチェーンをグイッと引っ張ることで、鞭から槍のような形状に変形する。❽フェアリーの背中が発光し、羽のように見える仕組み。人の目玉が頭蓋骨に埋まっているように、肩甲骨に埋まっている突起物が発光し、羽のように見えるとのこと。❾❿アリオーシュの武器に関する詳細。鞘のようなものには収まらない形状のため、むき出しのままベルトに備え付ける方式だ。⓫ウンディーネの全身像。両腕部から伸びる羽のようなもので身を包む様は、実在する海洋生物で、「流氷の天使」と呼ばれるクリオネを彷彿とさせる。⓬サラマンダーの頭部。トカゲのような形状をしているのではなく、トカゲの面を被っている人のようなイメージなのだろう。⓭ゴーレム。スカートから覗く積み石のような箇所はスケールメイル、腕はガントレットのイメージで描かれた。⓮主要な登場人物8人の対比図。こうして並んでいると、どのキャラクターの衣装も直線と曲線の絶妙な組み合わせでデザインされていることがわかる。この１枚だけでも、キャラクターデザインを担当した藤坂公彦氏のこだわりを随所に見ることができる。














メインキャラ対比図
その1
2002.5.27
110
165
190
185
183
175
178

Caim [カイム]







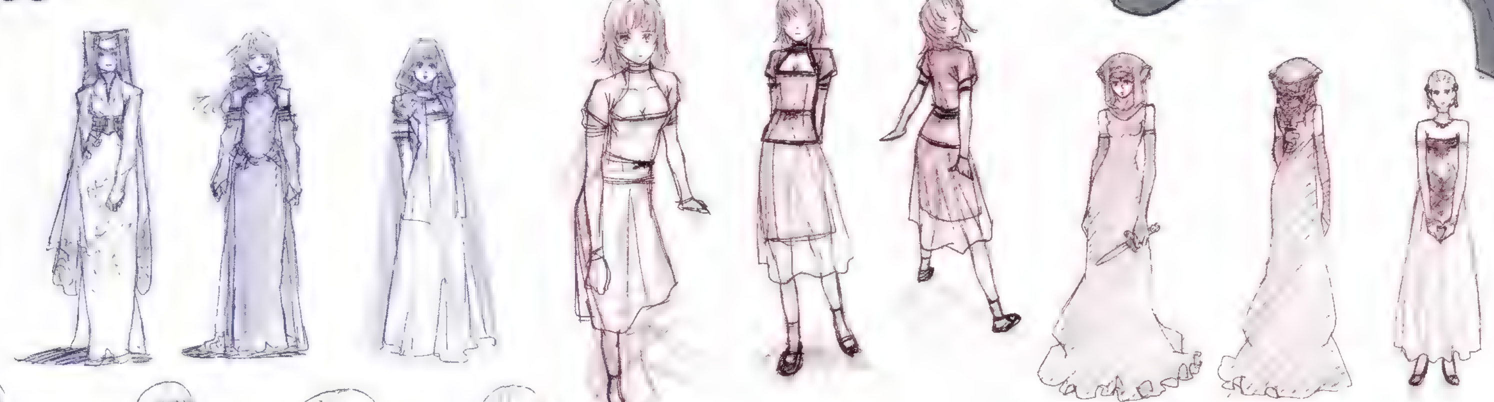


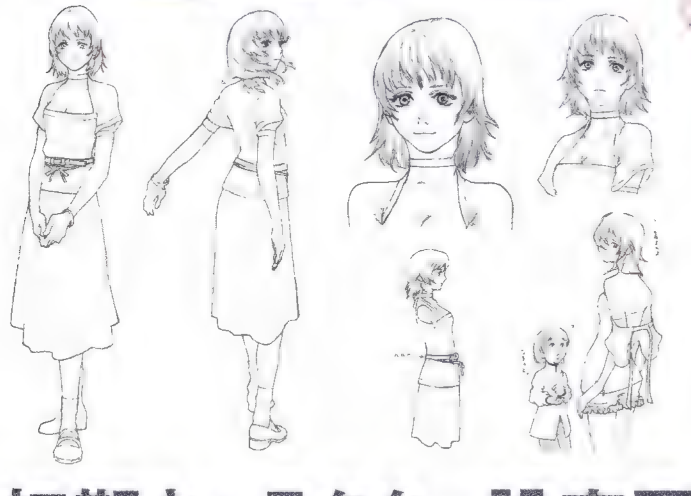


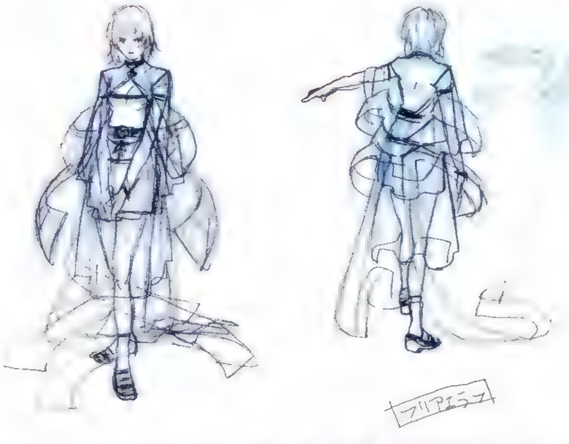




Furies [フリアエ]

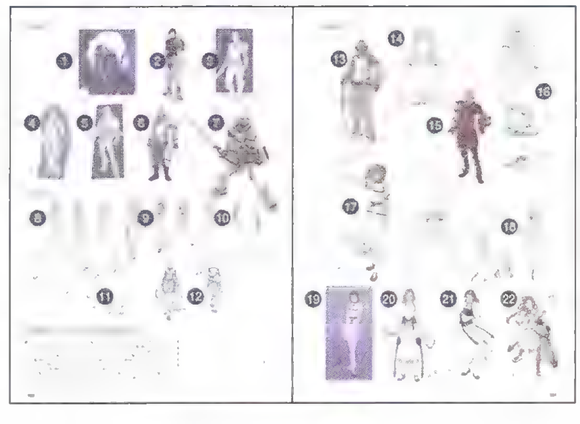






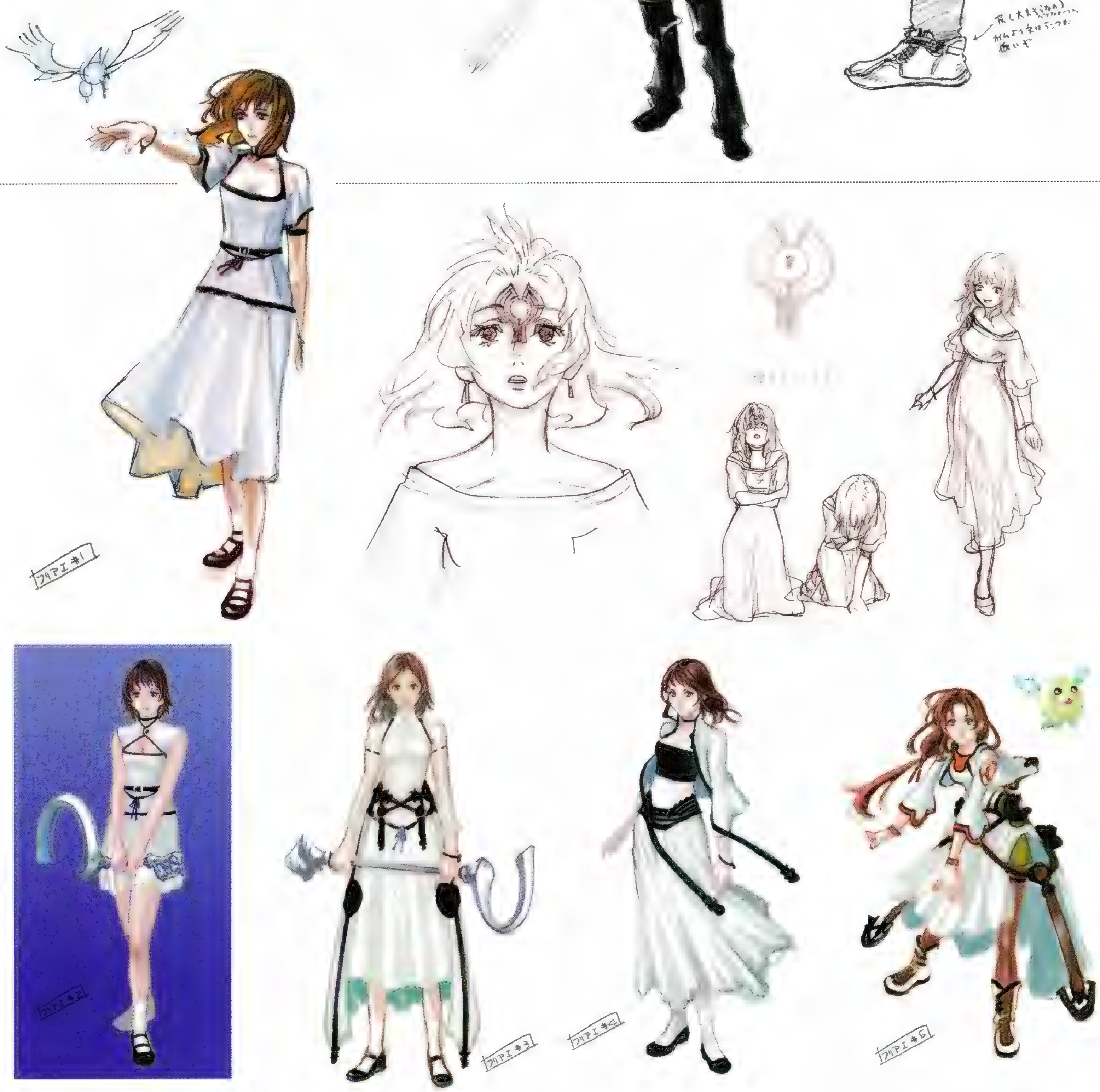
初期キャラクター設定画 ①

❶「主人公イメージラフ」と走り書きされた、最初期のカイム。白髪、褐色の肌、赤い服と、最終的なカイムの姿からはかけ離れていた時期のものである。しかし、その眼光の鋭さとグッと結んだ口元からは、意思の強さを見て取ることができるだろう。❷〜❻最終的なカイムの姿が決まるまでのあいだには、じつにさまざまなカイムが描かれた。衣装やヘアスタイルのバラつきからもわかるように、試行錯誤をしていた段階のものである。しかし、左腕の鎧をはじめとした大まかなシルエットには、この頃から統一感が感じられる。❼ほぼイメージが固まってきた頃のカイム。❽〜⓫初期のフリアエのラフ画。この頃からさまざまな衣装を着ることが決まっていた。⓬幾重にも折り重なった、立体感のあるリボンが特徴の衣装。⓭最初期段階のイウヴァルト。当初は主人公としてデザインされており、のちにそのイメージがイウヴァルトのキャラクターとして流用された。⓮〜⓰衣装を含め、より完成度が高まっていった。⓱翼の生えた謎の生物を従えるフリアエ。その儚げな表情にも注目したい。⓲当時のフリアエは、女神の印が膣ではなく額に浮かぶ設定だったようだ。⓳ミニスカート姿で描かれたフリアエ。⓴短剣ではなく、巨大な杖を持っている。カイムたちとともに冒険し、戦うことも考慮して描かれたのかもしれない。㉑決定稿に近い衣装ではあるが、黒のチューブトップ姿で上着を羽織っているという点が異なる。㉒ひときわカラフルに描かれたフリアエ。このように明るい表情をしたものは珍しい。決定稿と比べると、衣装も各所が誇張されていて、元気な雰囲気が漂っている。いっしょに描かれた謎の生物にも要注目だ。



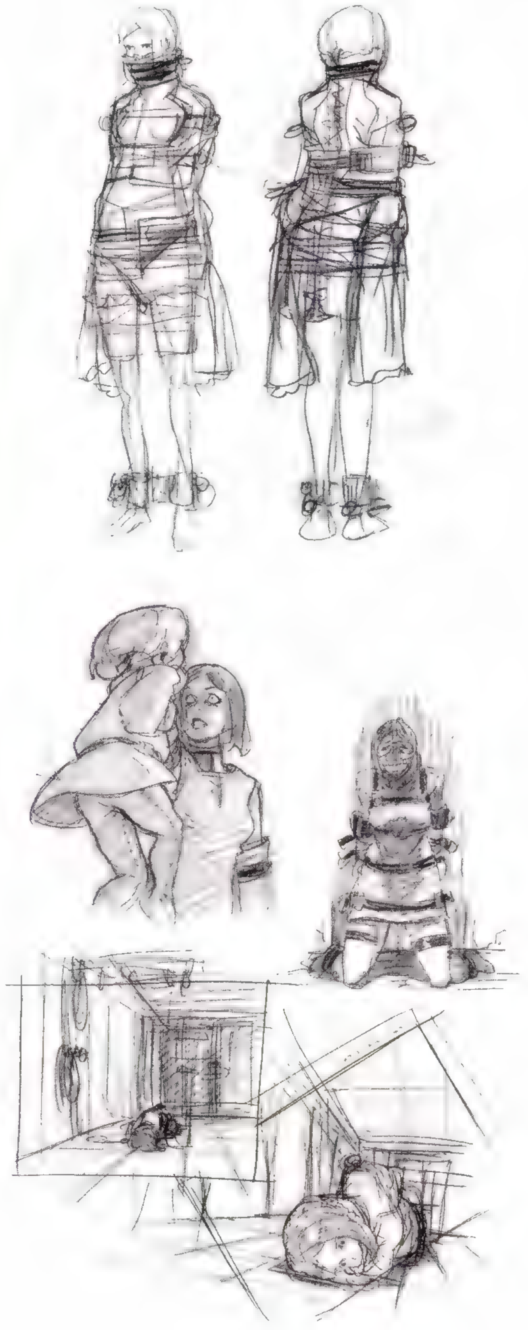
Inuart [イウヴァルト]

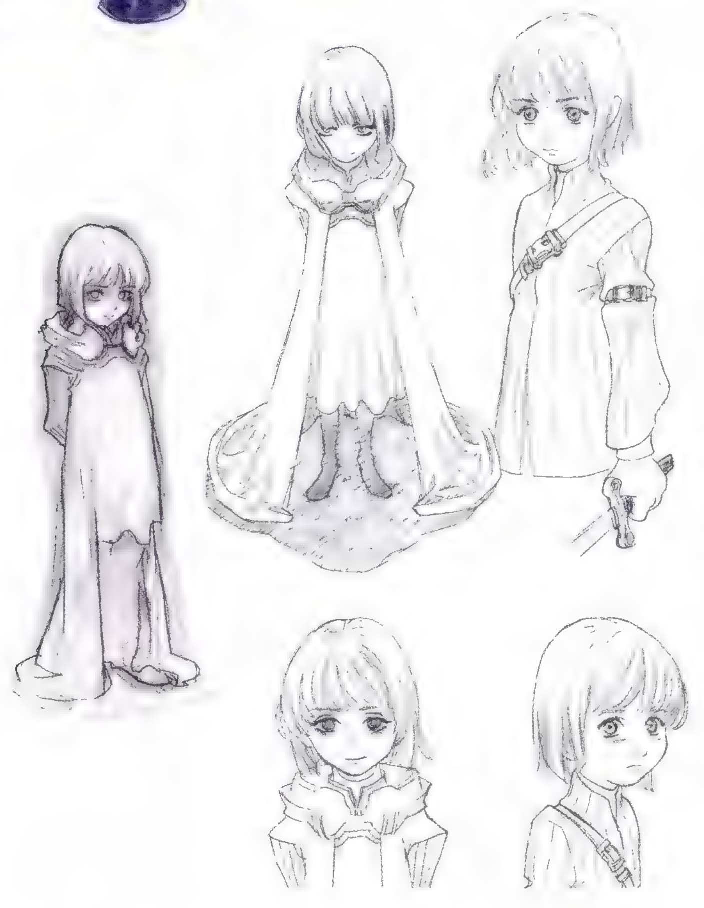






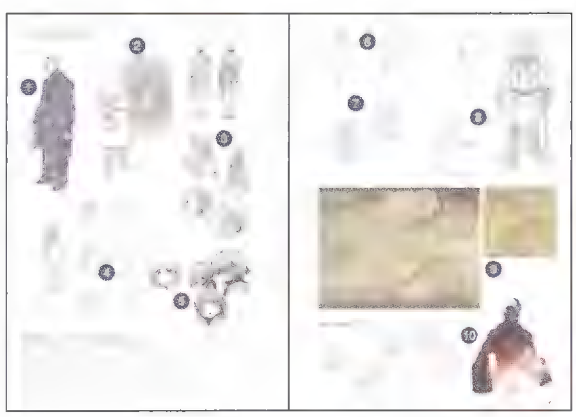








初期キャラクター設定画 ②



❶初期段階のヴェルドレ。もともとヴェルドレは神官長ではなく、敵のボスとして描かれていた。しかし、この頃から猫背気味の立ち姿を含め、すでにヴェルドレそのものだ。❷レオナールの初期設定画。衣装を含め、すでに決定稿のレオナールに近い姿で描かれていたことがわかる。❸アリオーシュのラフ。拘束着の着用図、子供を殺める狂気の表情、投獄されているシーンなど、すでにアリオーシュのイメージは固まっていた様子。❹❺さまざまな表情のセエレ&マナ。一見似ていても、その表情から育ちや性格の違いなどが見てとれる。❻初期のフェアリーは、独特な髪型とサナギのような形状の足下が特徴的で、俄然「妖精然」としていた。徐々に小生意気な人間の少年風の風貌に変化していったようだ。❼翼を持つ赤ん坊そのものの姿で描かれた天使。かくも恐ろしい存在である。❽外伝シナリオ「レオナールの飢」に登場する妖精王。皮肉ばかりをまくし立てるようには見えないほどの威厳を放っている。❾ワールドマップ。よく見ると、現実世界のヨーロッパあたりの地図を、180度回転させたものであることがわかる。❿炎の魔神・イフリート。同じく炎を司るサラマンダーより上位の精霊として描かれた。口から出ている謎の物質が顔を覆い、筋肉は隆々。両手がハンマーのようになっているのが特徴的だ。また、肉体そのものが炎のようなものの中から湧き出ているのか、下半身は曖昧にしか描かれていない。結局本編には未登場だったが、のちに『ドラッグ オン ドラグーン2 −封印の紅、背徳の黒−』にて、ザンポの契約相手として復活・登場した。









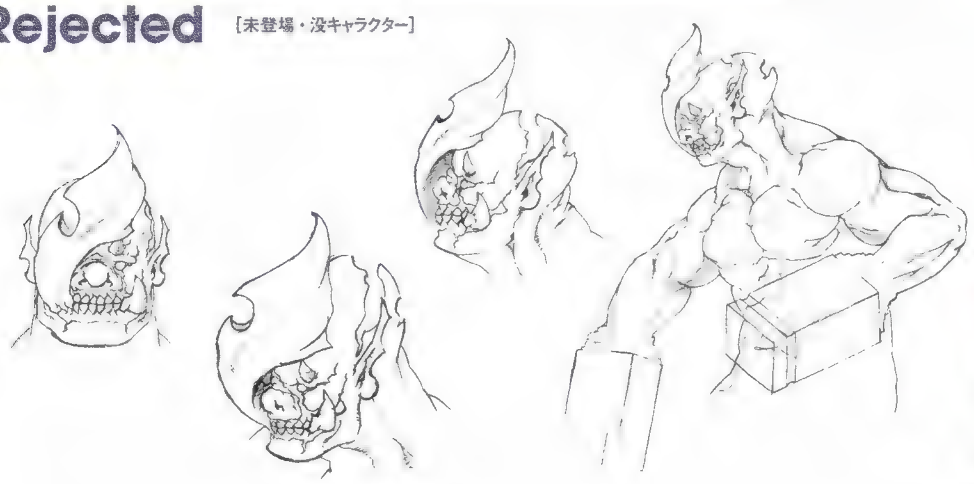






Rejected

［未登場・没キャラクター］





ご注意:「ドラッグ オン ドラグーンを振り返ってみろ」と言われたので振り返ってみたんですが、言われた文字量の倍以上も書いてしまいました。仕方ないので大幅に削っていますが、削った部分は適当に想像しながら読んでいただければと思います。ではどうぞ。

「一緒にゲーム作らない?」
プロデューサーの岩崎さんから電話がかかってきたのはスキー旅行に行ってる最中の事でした。

……や、この出だしだと判りませんね。もう一日前から話しましょうか。

その昔、僕はSCE(株式会社ソニー・コンピュータエンタテインメント)でデザイナーとして働いていました。しかし、自分が所属している部署の部長とソリが合わず、ある日「オマエにはもう仕事は無い」とクビを宣告されたのです。直接「クビだ」と言えないのは大企業らしいリストランテ開店だなと思いつつ当然のように大変ショックを受けた訳ですが翌日は友達とスノーボードに行く約束をしていたのでスノー

(文字数削減の為、中略)

で、まあ岩崎さんに呼ばれてキャビアって会社に行った訳です。その時に作れと言われたのは「上空戦が『エースコンバット』で地上戦が『真・三國無双』、で世界感はファンタジーね!」という「いろんなヒット作の要素を入れてスゴイゲームを作ろう!」という新人プランナーが考えたら先輩にフッ殺されそうな企画内容でした。ついでに予算は一本分です。はい新人死んだ、今殺されました。お金を出してくれるクライアントはエニックス。ドラクエで有名な会社です。プロデューサーは柴さんと言う方で、変な髪型をしていた事しか覚えていません。

僕に与えられた仕事はアートディレクターだったんですが、僕は『真・三國無双』というゲームを遊んだ事がありませんでした。というか三国志をほとんど知らなかったのです。原作がわかんないとゲームを遊んでもわからないだろうと思い本屋に行ったのですが、膨大な三国志関連の本のドレを読めばいいのか皆目見当もつきません。原典はどの本か分からないし、横山光輝版コミックスも大変な量があります。面倒臭くなった僕は本宮ひろ志の『天地を喰らう』を読ん

(文字数削減の為、中略)

で、ディレクターになって開発する訳ですが、早々にエニックス側から降ってきたのは「RPGらしさを出してくれ」というリクエストです。『エースコンバット』『真・三國無双』にさらに「RPG」が足されました。もちろん開発のお値段は一本分。どんどん減

(文字数削減の為、中略)

次は雰囲気を適当に決めます。まず、エニックスにはドラクエがあったので可愛い感じは避けようと考えました。一方で、当時はスクウェアのFFがキラキラしていた時代でもあったので、キラキラしたゲームを作るのもやめます。あのゾーンに行ったら負けるしかないですから。そういう風に他のゲームから逃げ続けて「ここは空いてないな……ここも空いてないな……」とウロウロしているうちにたどり着いたのが「ひたすら暗いゲームにしよう」という場所だったのです。

(文字数削減の為、中略)

実際のシナリオは岩崎さんの紹介で、名取さんという方にお願いする事にしました。名取さんはテイルスシリーズなどを手がけられた元ナムコの方なのですが、僕から「話の筋とかキャラの心情とかテーマとか、どうでもいいです。狂っていればよし」と言われて涙目になったそうです。大変でしたね(ヒトコトみたいに言う)。

当初は、ヒロインのフリアエなんかすぐ殺す予定でしたし、カイムとアンヘルに至っては「ホストと貢ぐオバさん」という説明をしていました。プロデューサーの岩崎さんはイウヴァルトとフリアエを指して「ロミオとジュリエットだ」と言っていましたが、あの二人をロミオとジュリエットに見立てるのは利休レベルじゃないと無

(文字数削減の為、中略)

グラフィックを暗い雰囲気にしようとしたら「空を青空にせよ」という命令が来て無視してたらクビになりそ
(文字数削減の為、中略)

地名をRPGっぽいカタカナ横文字にしろって言われたけど面倒だったので全部日本語のま

(文字数削減の為、中略)

オリジナルの地図作れって言われたけど、ヨーロッパを回転させたた

(文字数削減の為、中略)

そんなこんなで、期間と予算が尽きかける訳です。その時、何を言われたかというと「サブルートとマルチエンディングを削ってボリュームを減らせ」という指令でした。あれだけRPG感を出す為に増やせ増やせと言っていたのが夢、まさにアメリカンドリームのようです。いや、アメリカは関係ないな。この頃になるとディレクターである自分もレベルが上がっており「こんな事もあろうかとサブルートとマルチエンディング『だけ』先に作っていました」というカードを切りました。メインはどこ? どこにあるの? 状態。無茶苦茶な戦略。でもまあ、そうした涙ぐましい努力(?)の結

(文字数削減の為、中略)

実は新宿面にテーマがあって「プレイヤーにとっての本質的な

(文字数削減の為、中略)

ゴッドー

(文字数削減の為、中略)

まさかホストとオバさんのカップルにあれほどの

(文字数削減の為、中略)

世界はコントロールすることは出来ない無意識で溢れていると思う次第です。おわり。

LOOKING BACK 1
ドラッグ オン ドラグーン 編

書いた人:ヨコオタロウ氏
『ドラッグ オン ドラグーン』ディレクター

Questions and Answers.

ちょっと気になるあんなことやこんなこと

答えた人：ヨコオタロウ氏　『ドラッグ オン ドラグーン』ディレクター
名取佐和子氏　『ドラッグ オン ドラグーン』メインシナリオライター

Q なぜカイムの契約の代償は声だったのでしょうか？　また、そのときのカイムの気持ちは？　また、アンヘルにのみ意思の疎通が出来たことは、カイムにとってどんな意味がありましたか？

ヨコオ　「声」を失ったのは、復讐の鬼となりつつある彼にとって声（言葉）がもたらすコミュニケーションが本当は大事だったからだと思います。嗚呼なんというポエム。アンヘルとは喋ってるというより「以心伝心」的なヤツなんじゃないでしょうか。目線や手話みたいな。当初のカイムにとってアンヘルは乗り物に過ぎないので、意思の疎通は「あってもなくてもいい」という気持ちだった気がします。一緒に旅をするウチになんとなく仲良くなって、最後にアンヘルが封印になる時に「ああ、俺にはこいつは大事だったんだ」という気持ちになったんじゃないでしょうか。あと、個人的な想像ですがカイムは本当は死にたかったんだと思います。あれだけ殺した上に、守るべき世界も家族も失ってしまっていたので。そして最後に仲良くなったアンヘルを失い、自らがまだ生きながらえる事が彼への罰だったように思います。

名取　「契約 or 死」だったので、ひとまず生き残れたことにホッとしたのではないでしょうか。何はともあれフリアエを助けなきゃいけない局面でしたから、後悔はなかったと思います。憎しみの塊となったカイムに、他人との対話はすでに必要なかったでしょうし。

Q イウヴァルトは歌が自分にとって大事なものだとちゃんと自覚していましたか？

ヨコオ　「歌声」を失ったのは、それが彼にとってかけがえのないフリアエやカイムとのつながりだったからだと思います。本当は一番捨ててはいけないものを引き替えに、ブラックドラゴンの力を手に入れたに違いありません。そのときの心情は、きっと「いや〜歌えないけど、パワーゲットしたからフリアエにモテるようになるよね！　いやだってホラ、カイムだって歌えないし」という[illegible]

名取　自覚がないから、大変なモノを失ってしまったのでしょうね。フリアエが一番必要としている歌を捨ててしまうなんて……愚かなり。後悔するのは、たぶんフリアエが自殺 or フリアエに食われた瞬間です。不憫なり

Q レオナールは契約の際に視力が代償となりましたが、それはなぜでしょうか？

ヨコオ　視力を失うと、[illegible]を見ながら[illegible]出来ない事がレオナールへの最大の罰だった気がします。「ああ……これで私の穢れた視線で少年達を汚さずに済む……」でも後から思い出しながら●●●●。

名取　[illegible]に萌えても、レオナールは行為に及ぶ人ではなかった。もっぱら自己処理。その時、性的な妄想をするのに一番必要だったのが、視覚によって保存した映像だったのでは？　声や歌[illegible]不便さ[illegible]。何より、新しい[illegible]を保存できないのが痛すぎる、と思ったからこそ、嗅覚が視覚の分まで発達していくわけです。

Q アリオーシュが子宮を失ったのは、新たな子を生み育むための器官である子宮がいちばん大事だったからなのでしょうか？

ヨコオ　アリオーシュのテーマは「本当に狂ってる」ことで、常人には理解出来ないのがテーマポイントです。なので「なぜ子宮が失われたのか」もよくわかりません。「私の赤ちゃん」と頻繁に言ってますが、本当にそう思っていたのかどうかもわかりません。全ての回答は「狂ってしまっているのでわからない」だと思います。

Q セエレは永遠に成長することがなくなりましたが、「不老不死」なのでしょうか？　また、セエレは大人になりたかったのでしょうか？

ヨコオ　放っておけば不老ですが、別に不死じゃなかったと思います。セエレが成長を失ったって事は、永遠の「良い子」であり続けるという事です。その正しさに留まり続ける事で、彼は本当は手に出来るはずの成熟した精神を得られないまま生き続けるのだと思います。でも、本心から「世界のためだったら、僕の代償なんて小さなものです」と思っていますし、そう言ってます。

名取　自分で体を傷つければ死ねる。寿命じゃ死なないよ、みたいな不死[illegible]なので、不死ではないです。早く大人になりたいというか、人並み（よりちょっと優秀）に成長していきたかったのではないかと。セエレにとってこれは苦痛じゃないかな。恨み辛みもあったと思いますよ。

Q ヴェルドレは、頭髪だけでなく全身がツルツルなんでしょうか？

ヨコオ　全身ツルツルです。彼にとって、毛はとても大切なものなのでした。たくさんの契約者のなかで、代償を支払っていちばん後悔しているのは彼です。「おおっ！　勘弁してくれ！　これじゃあ女たちのところに行っても嫌われるじゃないかっ！　話が違うッ」と思ったに違いありません。代償が毛というイージーなパーツだったのは、石化して弱っているドラゴンと契約したためです。もっと強力なモンスターと契約していたら、性器とかほかのパーツを失っていたでしょうね。

名取　若い頃はモテモテの長髪イケメンだったそうです。ギャランドゥとかも大変なことになってそうですね。さぞや、男性フェロモンたっぷりの色男だったんでしょう。契約によって、その自慢のモテ毛を全部失ったのです。「モテたい！　もう一度モテたい！　モテキこい！」と何度も枕を濡らし、寝返りを打ったことでしょう。

Q みんなのどうでもいい些細な特技を教えてください。

名取　以下のとおりです。
カイム……目をあけたまま寝られます。
アンヘル……体がとても柔らかいです。海老反りで飛ぶと、別の生物のようです。
フリアエ……覚醒夢が見られます。夢の中でストレス発散！
イウヴァルト……ガアプ王の物真似。カイムとフリアエのお墨つき！
レオナール……片足で24時間立っていられます。忍耐力&バランス感覚良し
アリオーシュ……耳掃除が上手です。「慈母の膝枕」と呼ばれていたとか、いないとか。
[illegible]……完成度の低い腹話術。「僕セエレ！　声が、遅れて、聞こえるよ！」
ヴェルドレ……口笛で3オクターブ出せます。
[illegible]……花占い。「マジか！」ってくらい当たりません。


DoD
2

【ドラッグ オン ドラグーン2 [illegible] 編】

The flames of war are ablaze once again.

物語を[illegible]した前作から約2年後、2005年に登場したのがこのシリーズ2作目である。そこに描かれたのは、前作から18年後の世界を舞台とした新たな竜騎士の物語。

前作で主人公の両親を[illegible]した竜が、本作では主人公の育ての親。前作で世界を崩壊へと導いた張本人が、本作ではヒロイン。前作で主人公[illegible]カイムが、本作では[illegible]

18年の時は確かに、そして残酷に流れていた。前作に負けず劣らず、心に深い闇を秘めた者たちが躍動する世界。

しかしディレクター・[illegible]氏は、その向かい風に対しきっちりと構え、「明快さ」を基軸とし[illegible]した。[illegible]

それは「封印の紅」ノウェルと「背徳の黒」レグナ、前作から続いた救いのない物語[illegible]完結した――

Characters

登場人物紹介

竜に育てられ、竜語を解し、竜を駆る少年と、かつて世界を滅亡に追い込んだ女性の出会い。権力と力に魅せられた者が率いる「封印騎士団」を中心に、運命に抗う者、運命を受け入れる者、そして散りゆく者が交錯する――。この物語の登場人物たちは、やがて哀しき未来と対峙することとなる。



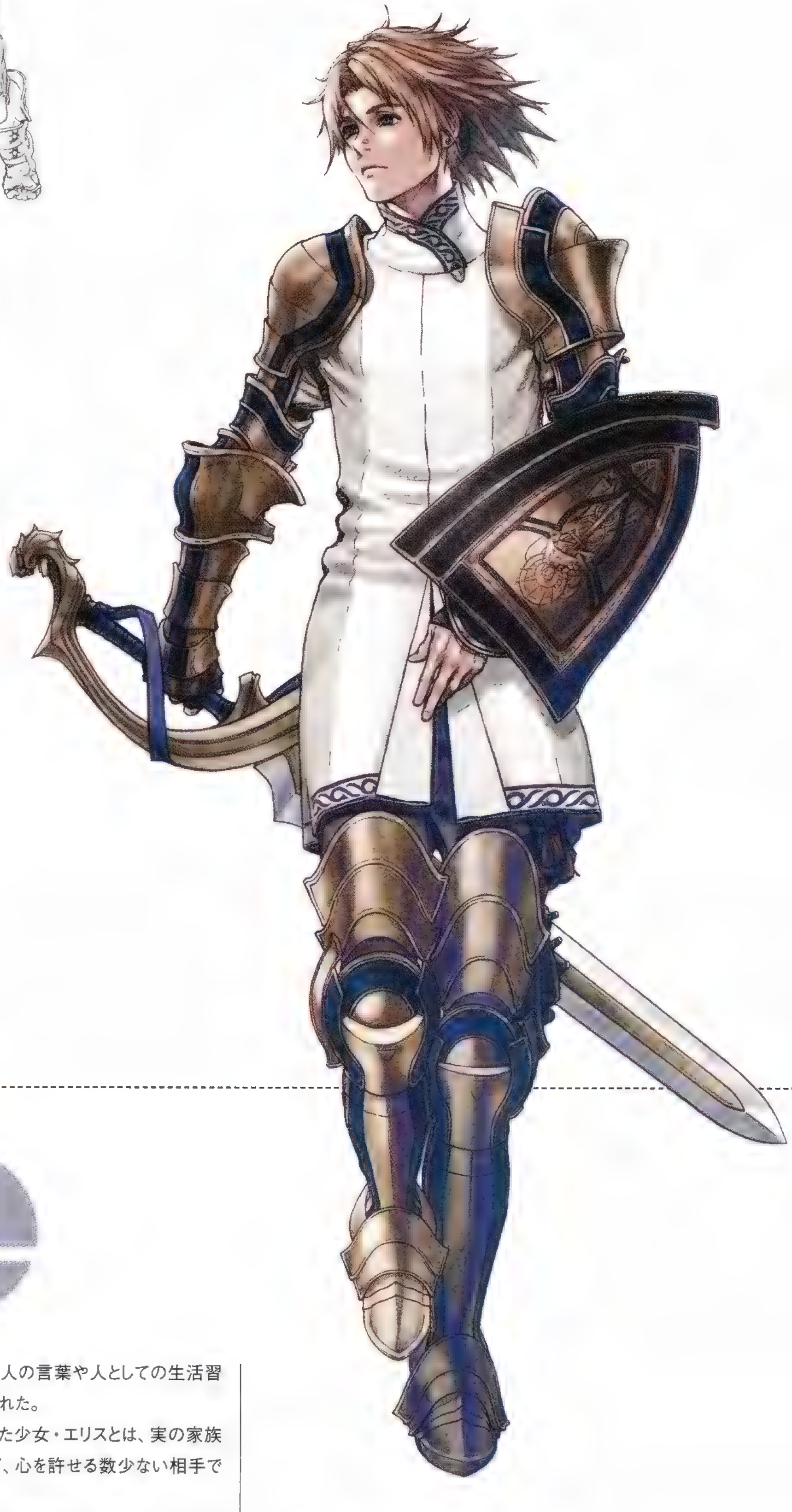












[ノウェ] 声：勝地涼

Nowe

ブラックドラゴン・レグナに育てられた少年。竜の言葉を自在に話すことができる。レグナと共に封印騎士団居住区に暮らしており、戦いに赴く際にも行動を共にしている。

実は、ノウェは普通の人間ではなく、イウヴァルトとフリアエが「再生の卵」で融合したことから生まれた"真人類"であり、彼がつけている装身具にその名残を見ることができる。ピアスはかつてイウヴァルトがつけていたもので、胸元のペンダント・トップは、フリアエのブレスレットと同じもの。

8歳まで「忘れられた遺跡」と呼ばれる渓谷地帯でレグナと共に暮らしていた彼は、当時の神官長であるヴェルドレが組織した封印騎士団に発見され、保護された。

その後は封印騎士団の長を務めるオローの養子となり、剣の手ほどきを受けた。また、人の言葉や人としての生活習慣なども養父・オローに教えられた。

オローが手許に預かっていた少女・エリスとは、実の家族のような間柄。ノウェにとって、心を許せる数少ない相手である。

後の神官長・セエレによって「救世主」と称されたものの、周囲の人々は妬みと恐れを込めて、彼のことを「竜の子」と呼んだ。

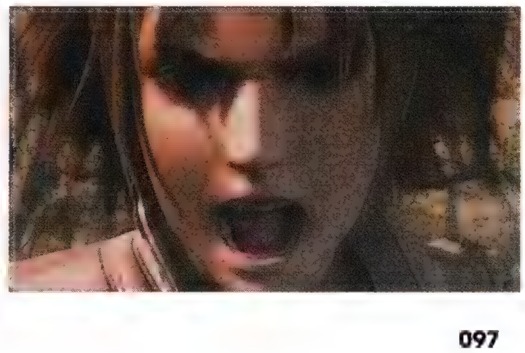
養父・オローが「直轄区襲撃事件」で死去した後は、後任の団長・ジスモアとの折り合いが悪かったことも手伝って、周囲との関係はさらに悪化。孤立状態に陥った。

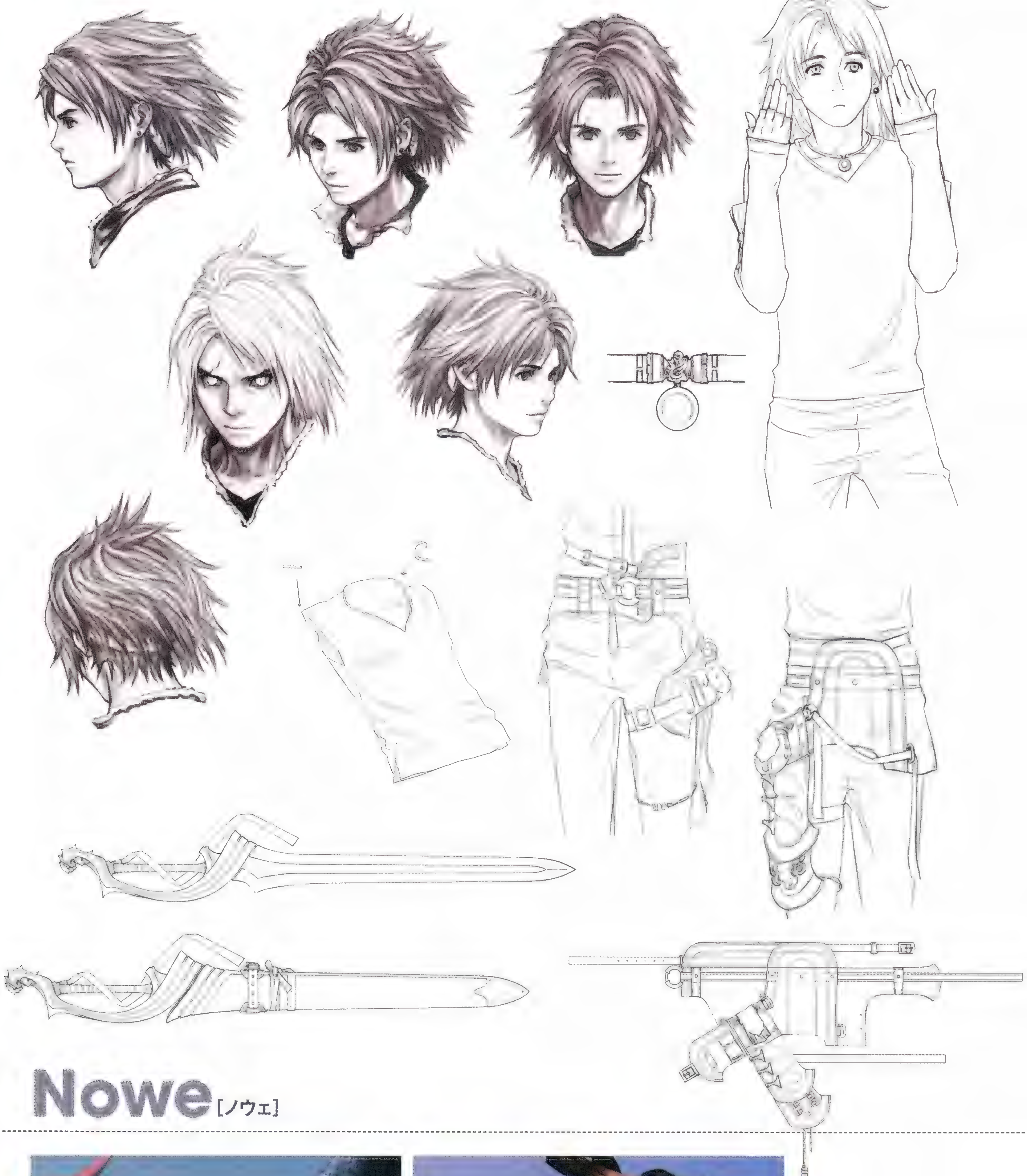
Personal Data

性別	男性
年齢	18歳
血液型	B型
身長	178cm
髪の色	やや灰色がかった栗色
瞳の色	鮮やかな藍色

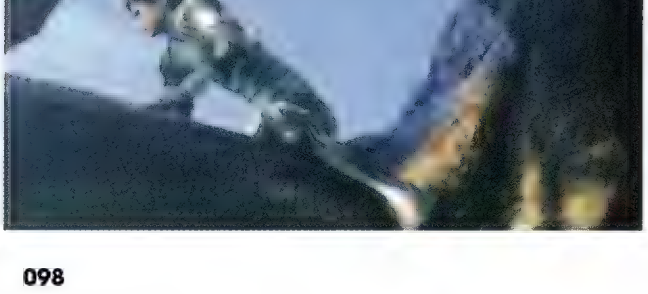


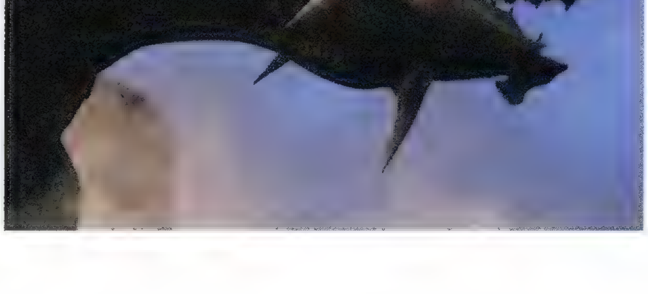






Nowe [ノウェ]





［レグナ］ 声：原田芳雄

Legna

8歳までノウェを育ててきたブラックドラゴン。誇り高い竜種らしく、人間に対しては打ち解けることもなく、尊大な態度を崩さない。しかし、ノウェだけは別で、実の父親のように接しており、常に傍らにいて彼を守っている。

人語を理解し、契約者とは"声"を飛ばして会話をすることも可能。ノウェとの会話では、竜語を使う。

実は、レグナの正体は、18年前にイウヴァルトと契約したブラックドラゴン。竜種としては、極めて獰猛かつ残忍な性質の個体だった。しかし、イウヴァルトがフリアエと共に再生の卵に入って転生した際、「神竜族」としての記憶を取り戻した。世界の理を支配する「名もなき存在」を倒す武器として、"真人類"であるノウェを育てている。

8年前から、ノウェと共に封印騎士団の居住区に暮らしているが、何かにつけて封印騎士団の任務に駆り出される現状を「人間に使役されているようだ」として快く思っていない。



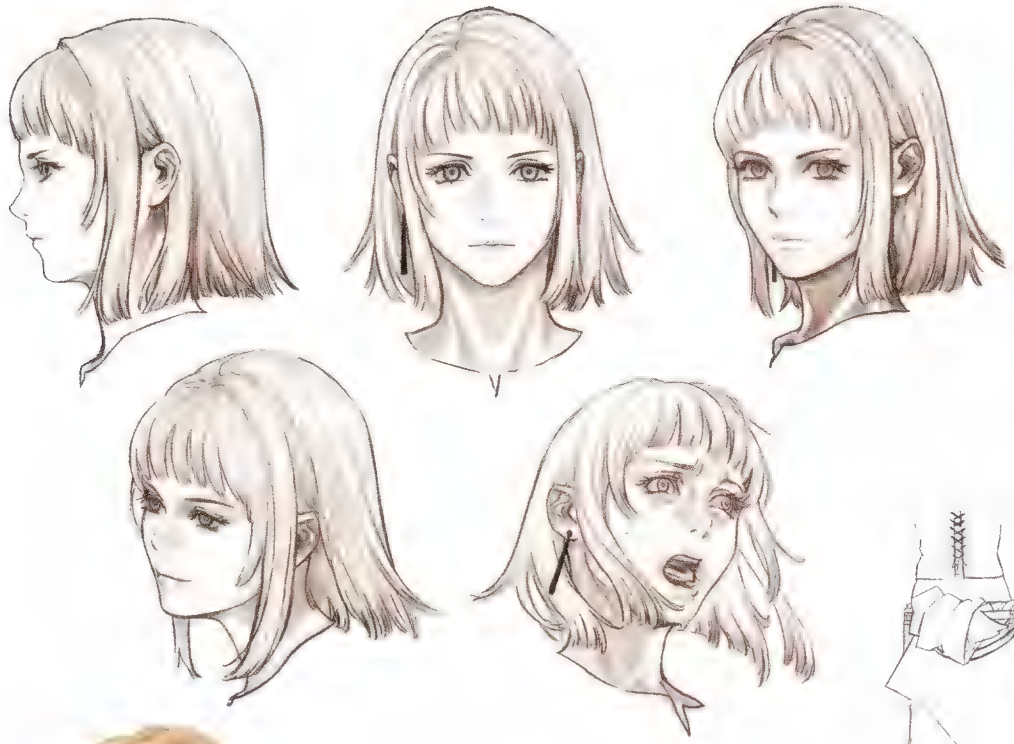
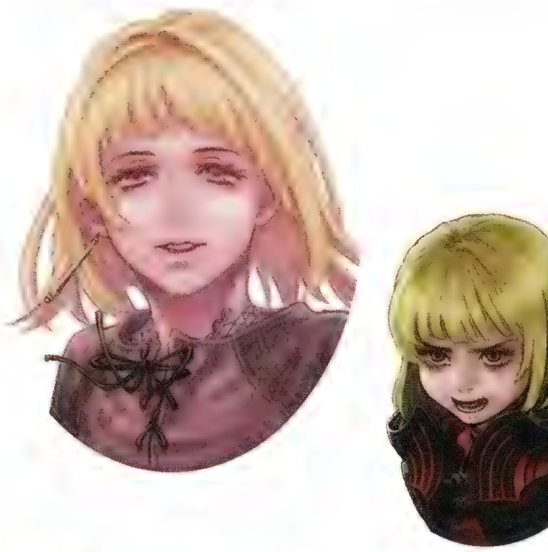
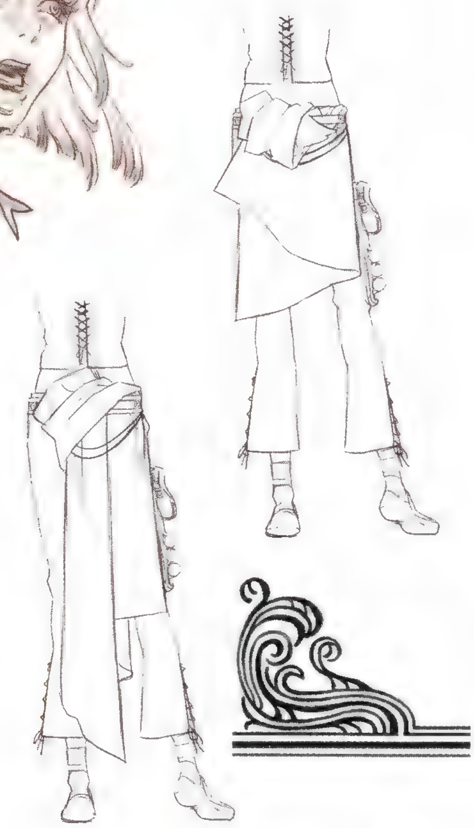
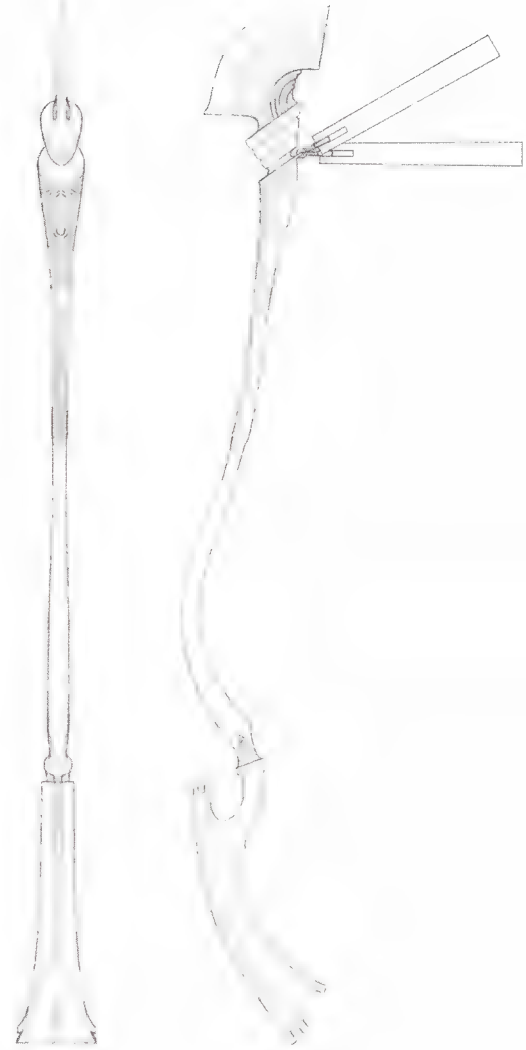
Personal Data

性別	不明
年齢	10000歳（正確には不明）
血液型	不明
全長	5.3m ／ 21.5m（形態進化により変動）
身体の色	蒼
瞳の色	鮮やかな赤色

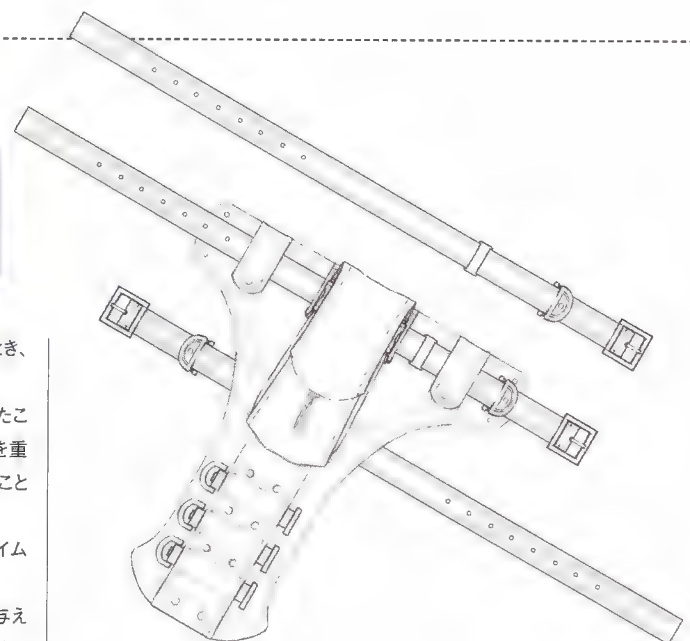






[マナ] 声：小雪



Manah

封印騎士団の圧政に苦しむ人々を解放するために活動をしている女性。その行動から「聖女」とも呼ばれている。強力な魔法の使い手。

その地域に居住する人々に多大な犠牲を強いる「直轄区制度」に疑念を抱いており、その象徴である"鍵"を破壊することで人々を救おうと試みる。ノウェと知り合ったのも、気炎の直轄区襲撃がきっかけである。

実は彼女は18年前、「天使の教会」の司教として帝国軍を率い、世界を戦乱の渦に巻き込み、滅亡寸前にまで追い込んだ張本人。人の心を読む力を持ち、女神・フリアエの心の闇を暴き、彼女を自殺に追い込んだ。

神官長のセエレは双子の兄。幼少期には、母親に溺愛されている兄とは対照的に、虐待されて育った。6歳のとき、母親の手で石の谷に置き去りにされてしまう。

現在の彼女は過去の記憶を失っており、虐待を受けたことも、双子の兄がいたことも、また、司教となって多くの罪を重ねたことも、その後、カイムに連れられて贖罪の旅に出たことも忘れている。

ノウェと行動を共にするようになった後、「錆の町」でカイムと再会し、過去の記憶を取り戻す。

なお、マナが身につけているブレスレットは、カイムから与えられたもの。かつてフリアエも同じ品を身につけており、それをノウェが受け継いだことから、結果的に二人はお揃いの装身具を身につけることとなった。




Personal Data

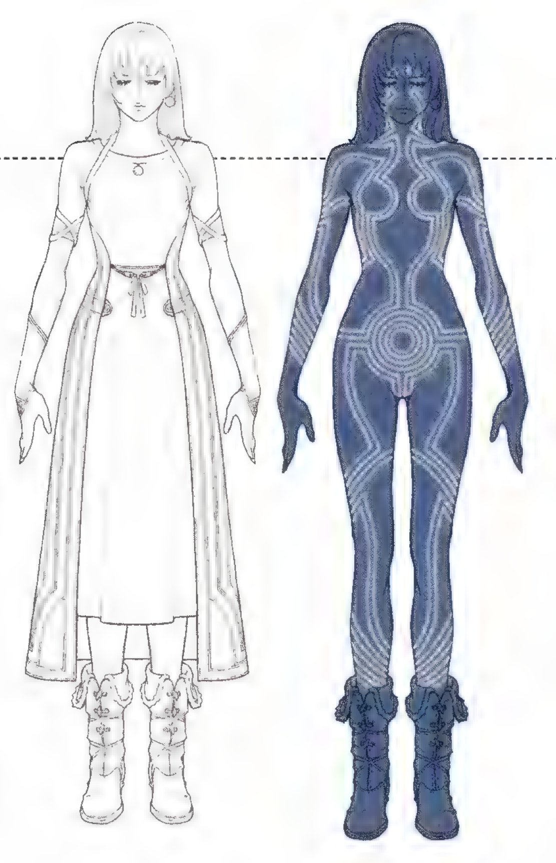
性別	女性
年齢	24歳
血液型	A型
身長	167cm
髪の色	やや灰色がかった金色
瞳の色	明るい赤色





[エリス] 声：相武紗季

Eris



封印騎士団に属する女性騎士。優れた槍の使い手で、魔法にも長ける。7歳の頃から騎士団に属し、数々の最年少就任記録を塗り替えていった。現在は準級騎士。後に上級騎士に昇格し、反逆者ノウェの討伐隊を率いることとなった。

生真面目で、正義感が強く、勝ち気な性格。ただ、生真面目さが災いして、融通が利かないという欠点も。

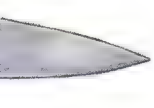
出自は貴族であるが、実は、封印の女神・フリアエが死去した際、次代の女神の適格者だった。しかし、赤き竜・アンヘルが女神の任を肩代わりしたことによって、エリスは一般人としての生活を許された。

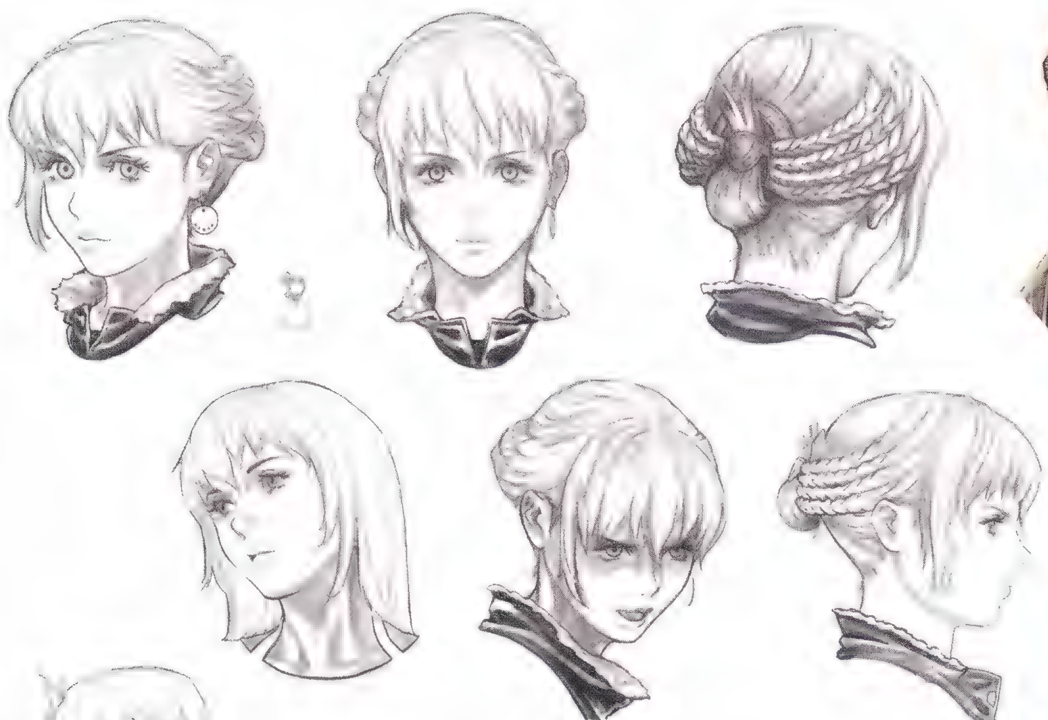
信心深いエリスの母親はそれを潔しとせず、世界を守る者として生きることを娘に望む。母の意向を汲み、エリスはわずか7歳にして封印騎士団入りを決意し、生家を去った。

エリスは自らの入団理由について決して語ろうとせず、また、その経緯を知る者はヴェルドレとセエレだけだったために、様々な憶測を呼んだ。結局のところ、「貴族の気まぐれ」と見なされ、エリスは騎士団内で孤立。それは彼女が目に見える形で実力を発揮するようになるまで続いた。

騎士団長を務めていたオローだけは、事情を詮索することなくエリスを受け入れ、剣術を指南し、何くれとなく世話をした。こうして、団長のオローから手厚い配慮を受けたことによって、エリスは封印騎士団への強い忠誠心を育んでいくこととなった。

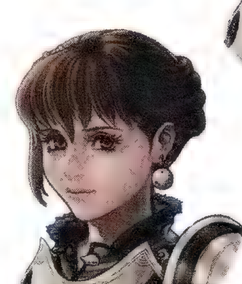
同い年で幼なじみのノウェに対しては、共に切磋琢磨し合って剣の腕を磨いてきたこともあり、仲間意識が強い。また、ノウェが「救世主」と呼ばれ、エリス自身も女神の適格者であることから、手を携えて世界を守ることを望んでいる。ただ、その裏側には、ノウェに対する淡い恋心と、幼い独占欲とが隠されており、エリス本人はそれを表に出すまいと腐心しているらしい。

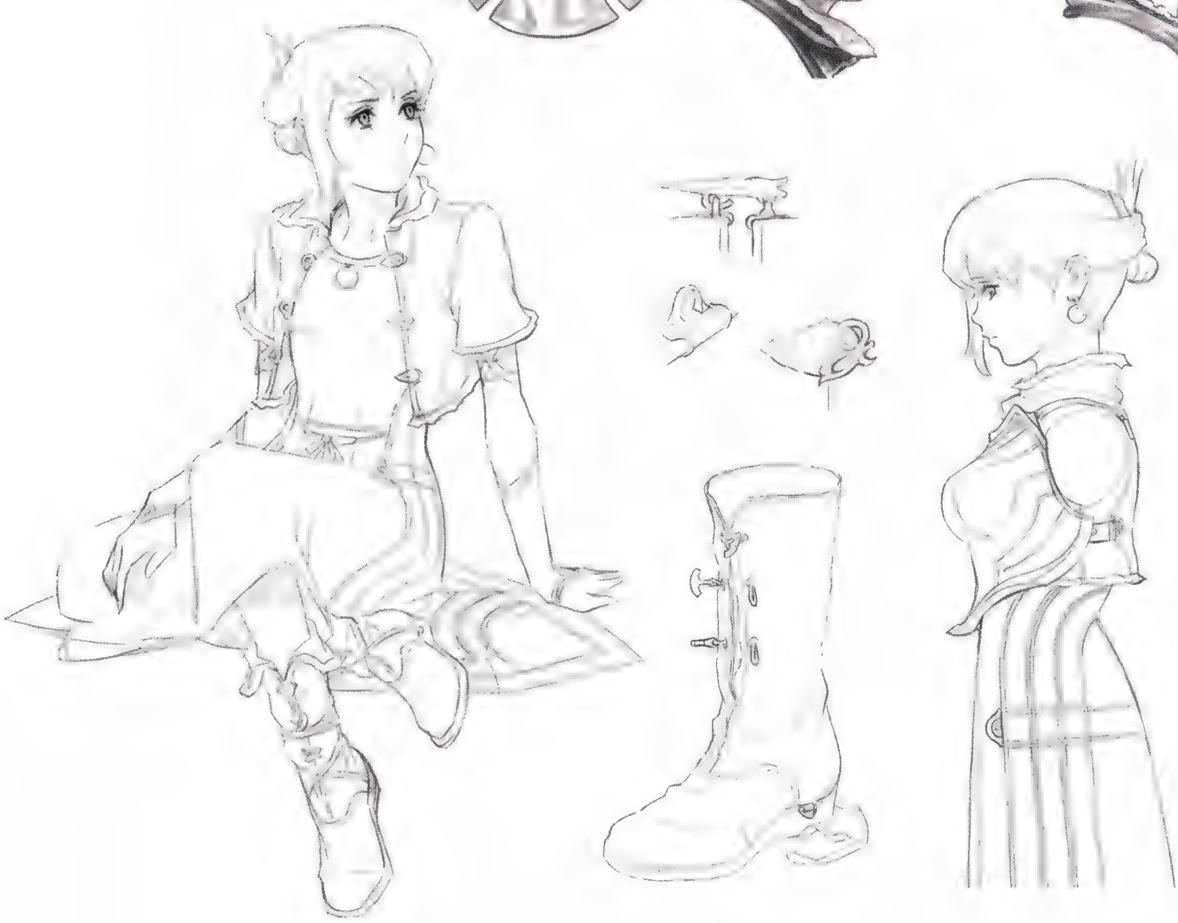










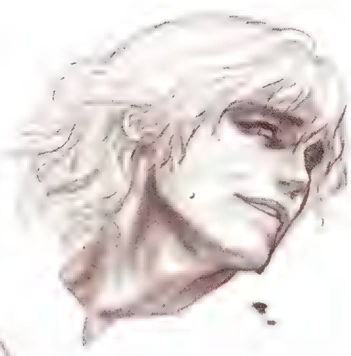


Personal Data

性別	女性
年齢	18歳
血液型	A型
身長	172cm
髪の色	明るい栗色
瞳の色	薄い栗色



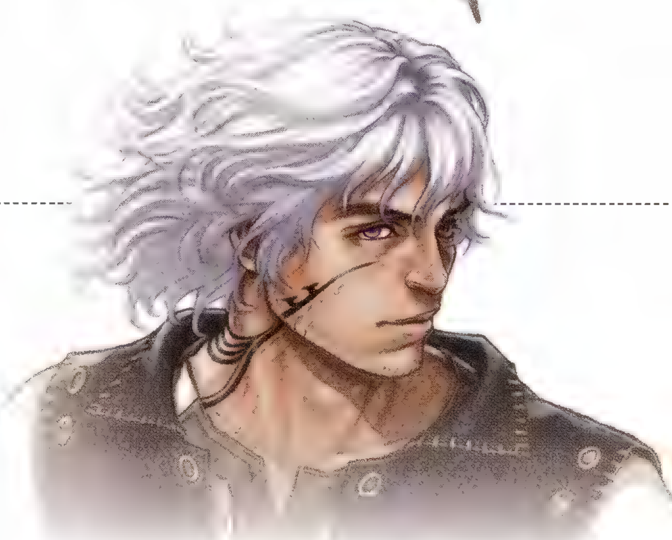




[ユーリック] 声：小山力也

Urick



名を伏せ、顔を隠し、身を潜めるようにして生きている仮面の男。かつては封印騎士団に所属し、当時の封印騎士団長・オローの一番弟子として名を馳せていた。

幼少期を長く孤児院で過ごしたことも手伝って、集団の中での身の処し方が巧み。目上にも目下にも配慮を忘れず、常に場が和やかになるように振る舞う。「お調子者」と呼ばれるほどの明るさと要領の良さを生かし、オローの腹心として、各連隊長との連絡役・調整役を務めた。

騎士団の中で孤立しがちだったノウェの良き理解者でもある。しかし、優秀な戦力であった彼は騎士団の本拠地を離れて各地を転戦しており、幼いノウェやエリスと過ごした時間は意外に短い。

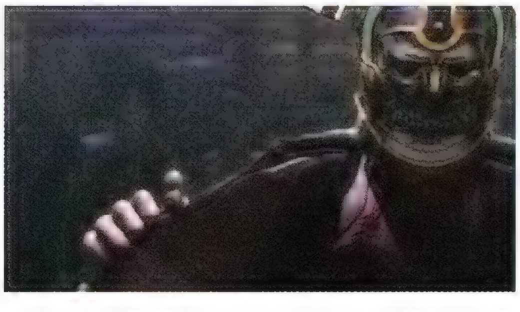
3年前の「直轄区襲撃事件」の際にも、オローと共に現場に赴いており、カイムに斬られて重傷を負った。彼の死に対する強い恐怖と生への執着心が、その地にいた死神を魅了、これと契約を結ぶ。明命の直轄区の守護者となるが、自分をかばってくれたオローを見捨てて逃げ出したことを深く後悔し、封印騎士団を脱退。行方をくらました。

契約の代償は「死」。いわゆる不死身とは異なり、一度死んだ彼を死神が蘇生させることで「死ねない」状態になっている。しかし、死の苦痛が軽減されるわけではないため、彼は以前に増して死を恐れるようになった。

直轄区襲撃の犯人であるカイムの消息を気にかけてはいたものの、具体的な行動は起こせずにいた。が、錆の町でノウェと再会したのを機に、自らの罪と向き合い、過去を清算しようと決意。ノウェと行動を共にする。

Personal Data

性別	男性
年齢	27歳
血液型	O型
身長	189cm
髪の色	紫色がかった銀色
瞳の色	薄い紫色
契約モンスター	死神
契約の代償	死
紋章の位置	絶命したときの傷口











[ザンポ] 声：我修院達也

Zhangpo



封印騎士団の連隊長であり、気炎の直轄区の守護者。

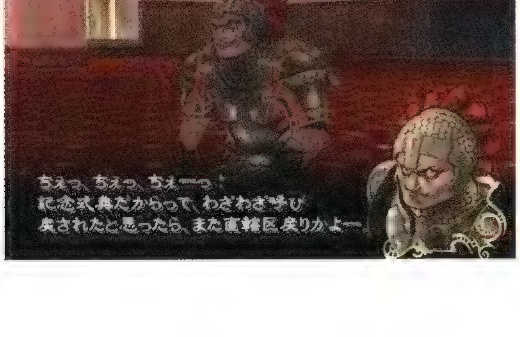
未熟児としてこの世に生を受け、虚弱体質であった彼は、少しでも大きく、強くなりたいと願いながら成長した。そんな彼の最大の興味であり、娯楽は「食べること」。幸か不幸か、彼の生家が裕福であったこと、両親が身体の弱い彼を甘やかしたことから、好きなものを好きなだけ食べるという生活を送ることができた。その代わり、彼は我慢するということを一切覚えずに大人になってしまった。

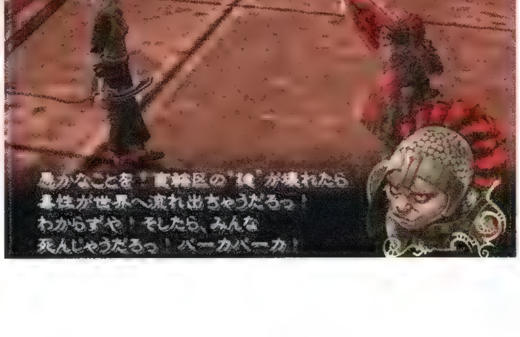
好きなお菓子ばかりを食べ続けたザンポは、一向に強くならないまま、賄賂を使って封印騎士団入りした。もちろん、入団後の階級は最低ランクで、常に雑魚扱い。実力も何もないままに入団したザンポにとって、当然の結果であった。

ある日、視察のために気炎の直轄区に出向いた際、彼の人生に転機が訪れる。突然、火山が噴火し、炎の化身と呼ばれる精霊・イフリートが彼の前に姿を現したのである。契約を交わした途端、彼の貧弱な身体はみるみる筋肉質の身体へと変化し、腕力も常人を遥かに凌ぐものに。ただし、彼は唯一の楽しみであった「食べること」を契約の代償として支払わねばならなかった。

契約者となった後、彼はその能力を高く買われて"鍵"の守護者となり、連隊長の地位と権力を手に入れる。念願の、雑魚からの脱却であった。

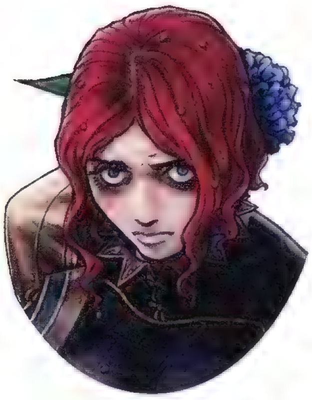
しかし、気炎の直轄区の"鍵"をマナに破壊され、その権勢は呆気なく消え、彼自身の人生も終了してしまった。





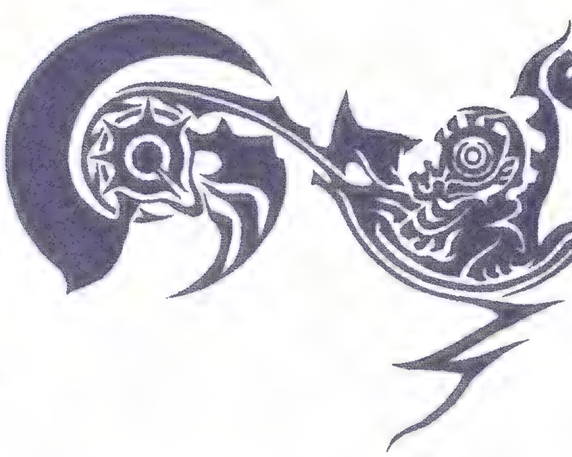
Personal Data

性別	男性
年齢	20歳
血液型	B型
身長	150cm
髪の色	鮮やかな赤色
瞳の色	濃い赤色
契約モンスター	イフリート
契約の代償	食べる行為
紋章の位置	口内

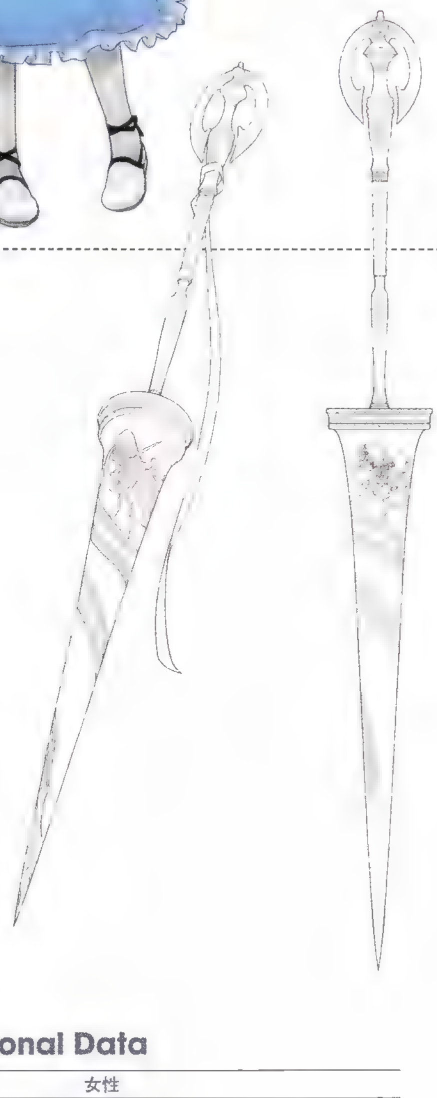






[ハンチ] 声:小島幸子

Hanch



　神水の直轄区の守護者。かつては「太陽の微笑み」と称されるほど、愛くるしい少女だった。

　ある日、姉や友人達と湖へ船遊びに出かけたハンチは、突然の嵐に見舞われ、荒れ狂う水の中に投げ出されてしまう。死と隣り合わせの恐怖の中、彼女は助かりたい一心でケルピーと契約する。ケルピーは、ハンチの心の奥底に潜む姉への嫉妬や羨望といった黒い感情に目をつけ、契約の機会を狙っていたのである。

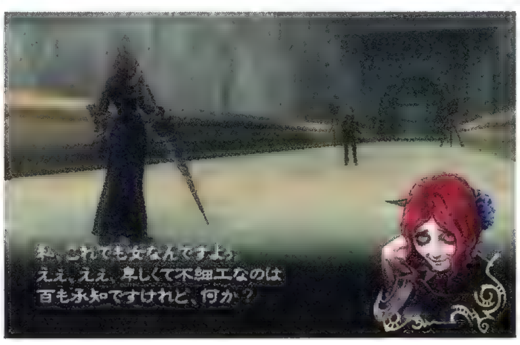
　そうして九死に一生を得たものの、契約の代償として彼女は「魅力」を失い、周囲の誰からも相手にされなくなってしまった。もともと美しい心の持ち主とは言い難かった彼女は、どんどん性格がねじ曲がり、表情や物言いに至るまで卑屈になり、ついには嫌われ者に。誰からも可愛がられた幼少期からは、想像もつかないほどの転落であった。

　契約者であることを買われて入団した封印騎士団でも、彼女の卑屈さ、誰に対しても媚びへつらう態度は嫌われ、疎まれた。そんな中、唯一声をかけてきたのがジスモアだった。彼は自身の地位と権力を維持するために、便利な道具となる者を探していたのである。

　以後、ハンチはジスモアに見捨てられまいと必死で立ち回る。オロー暗殺の片棒を担ぐことさえ厭わなかった。

　なお、同じ連隊長であり、男でありながら妖しい魅力を放つ宝光の直轄区の守護者・ヤハに対しては、嫉妬にも似た複雑な感情を抱いているらしい。



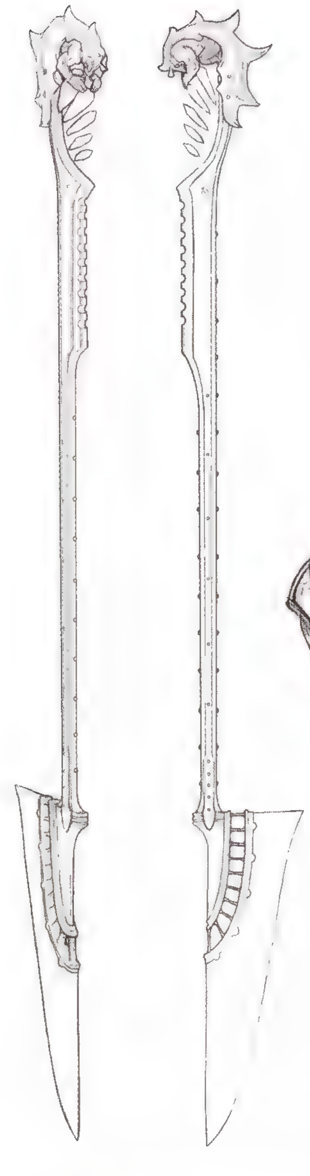


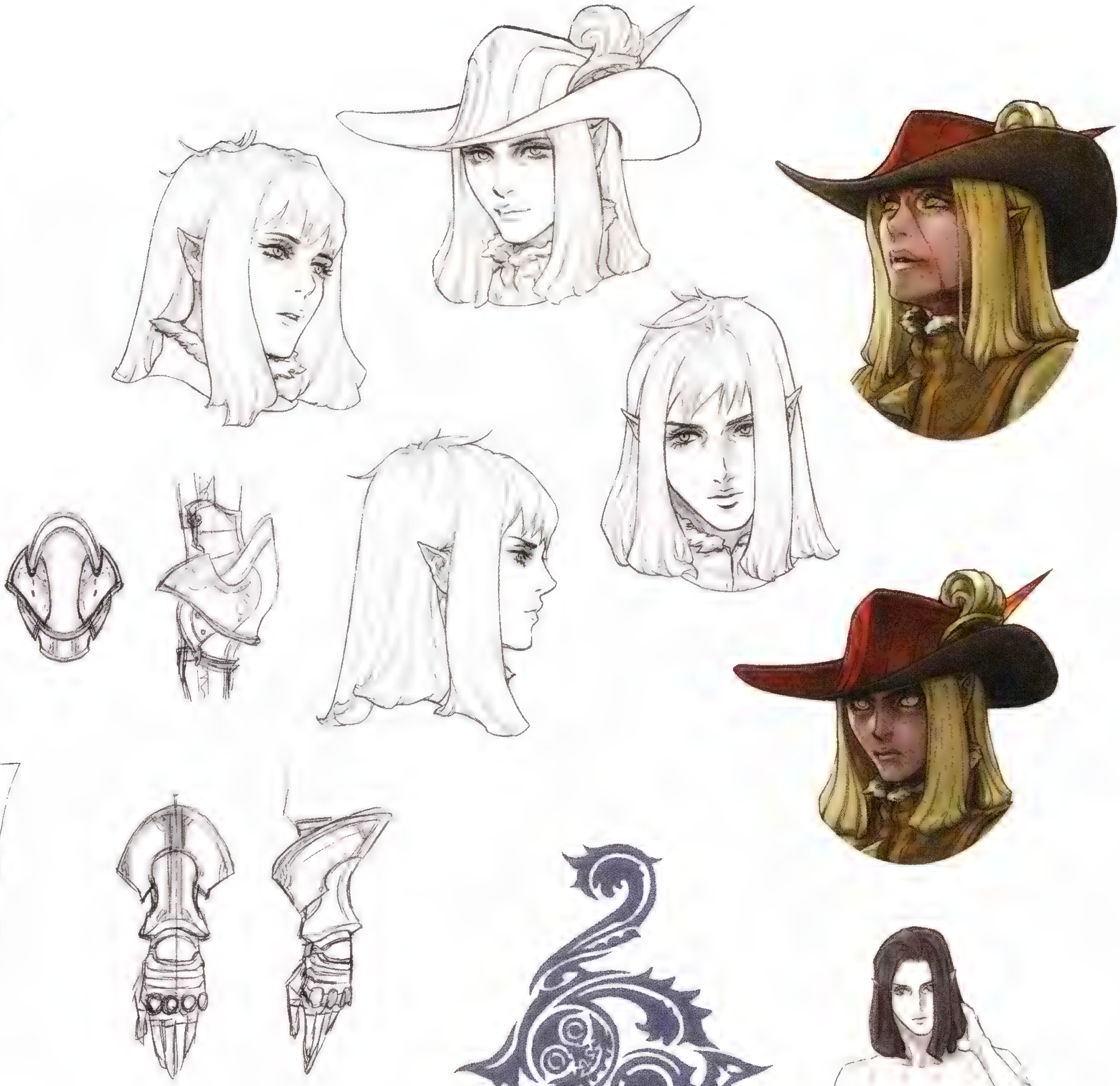
Personal Data

性別	女性
年齢	32歳
血液型	AB型
身長	165cm
髪の色	青みがかった濃い赤色
瞳の色	紫がかった青色
契約モンスター	ケルピー
契約の代償	魅力
紋章の位置	両乳房













[ヤハ] 声：ROLLY

Yaha

宝光の直轄区の守護者。幼少時、両親を帝国兵に殺され、ユーリックと同じ孤児院で育つ。少女と見紛うほどの可憐さと美しさを備えていた彼は、その色香を武器に富裕な者の庇護を得て、孤児院暮らしから抜け出した。

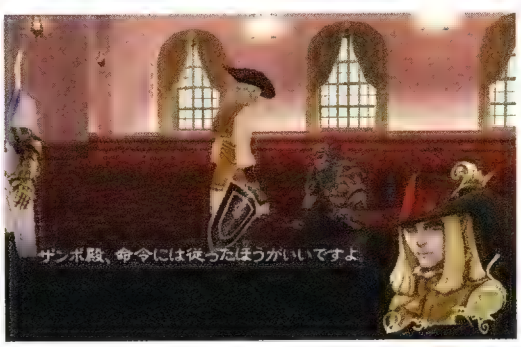
貴族や豪商達の囲われ者となり、湯水の如く金を使わせては捨てる、という暮らしを繰り返すが、やがて、自身の地位や権力を求めて封印騎士団に入団。その美貌と肉体で要職にある者達を片っ端から籠絡し、騎士団内での地位を築き上げていった。彼と関係を持っていない者は、神官長のセエレと団長のオローだけと言われたほどで、前神官長のヴェルドレとの関係さえ噂に上った。

ある日、ヤハは発掘現場で、岩の間に巨大な宝石、聖宝玉を発見する。その美しさに嫉妬を覚えたヤハが剣を向けた瞬間、宝石の中からノームが現れ、契約をせがんだ。ノームは、ヤハの内なる残虐さに魅了されたのである。

契約者となれば破格の出世が望めることから、ヤハはそれを了承。しかし、この契約の代償は「快感」だった。以来、性行為は苦痛でしかなくなり、彼にとっての最大の武器は己をも傷つける諸刃の剣と化してしまった。

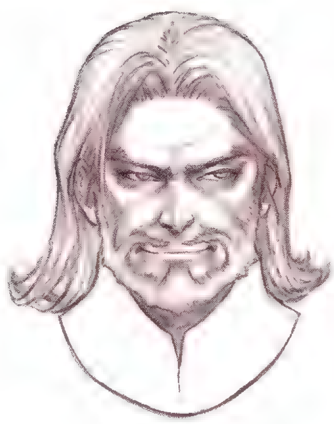
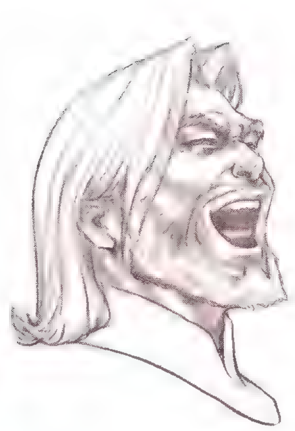
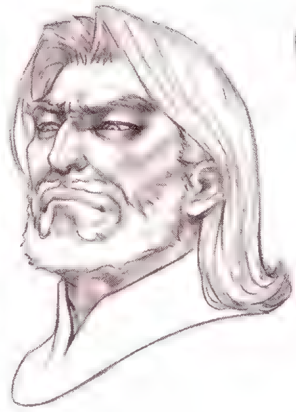
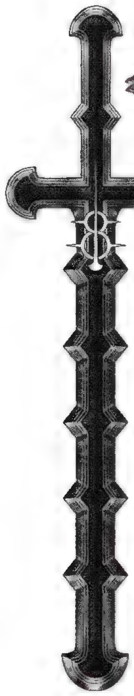
なお、ヤハはその瞳の妖しい光によって、視線を合わせた者を意のままに操れるが、その力はなぜかユーリックには通用しない。ユーリック自身に何らかの耐性があるのか、孤児院時代の親友を操ることにヤハが無意識のうちにためらいを覚えているせいなのか、その辺りは不明である。



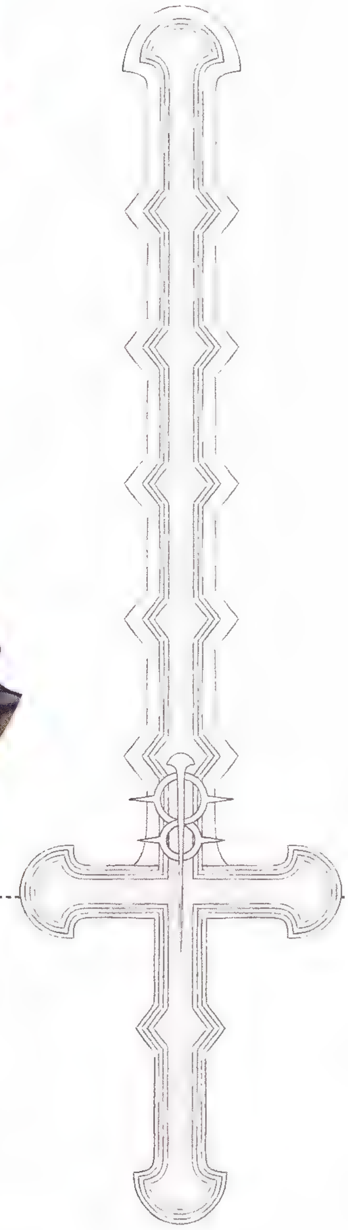


Personal Data

性別	男性
年齢	25歳
血液型	AB型
身長	180cm
髪の色	金色
瞳の色	濃い金色
契約モンスター	ノーム
契約の代償	快感
紋章の位置	陰茎





[ジスモア] 声：立木文彦

Gismor

現封印騎士団長。3年前にオローが死亡するまでは副団長だった。天時の直轄区の守護者であり、闇の精霊・シェイドを契約相手に持つ。代償は彼の肉体そのものだったため、契約の紋章が全身を覆っている。しかし、その紋章の下に実体はなく、彼が物理的な形を保っていられるのは契約者の力によるもの。

18年前の大戦中は帝国軍に属しており、戦争終結後は敗残兵として連合側に捕らえられ、強制労働に駆り出された。奴隷同然の生活に嫌気がさし、後に逃亡。潜伏先で、身寄りのない男を殺害し、彼になりすました。ジスモアの名も本名ではなく、その男のものである。

封印騎士団入りした後は、ありとあらゆる手段を用いて、異例の出世を遂げた。

団長のオローに対して強い嫌悪感を抱いており、表面上は忠実な部下を装いながら、虎視眈々と謀殺の機会を狙う。当時の神官長・ヴェルドレが直轄区制度の新設を巡って対立していたことを利用して、オローの殺害を容認させた。結果的にカイムの乱入によって番狂わせが生じたものの、「直轄区襲撃事件」は本来、ジスモアがオロー暗殺の舞台として仕組んだものだった。

事件後、ジスモアは団長に就任。神官長・ヴェルドレも死亡していたことから、封印騎士団の権力を一手に握る。「力こそがすべて」という信念の下、恐怖政治的な統制を図る。

天時塔の最上階で、自ら鍵「聖砂漏」を破壊して死亡。

Personal Data

性別	男性
年齢	44歳
血液型	O型
身長	194cm
髪の色	青みを帯びた黒色
瞳の色	沈んだ金色
契約モンスター	シェイド
契約の代償	体
紋章の位置	全身（紋章が輪郭を形作っている）







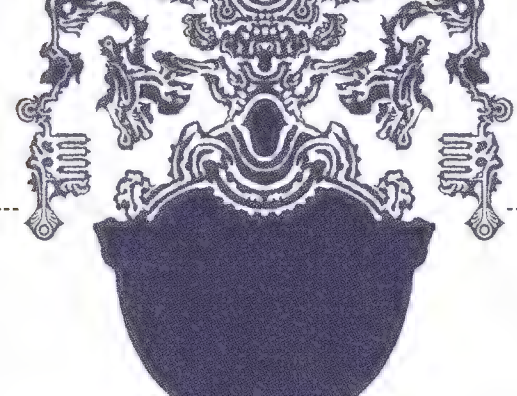


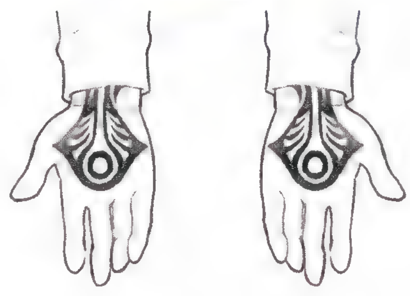




[セエレ]　声：村上想太

Seere





現・神官長で、ゴーレムとの契約者。契約の代償として"時間"を失っている。そのため、契約者となった6歳以後、外見的には成長していない。実年齢は24歳。精神的にはそれなりに成長しているようだが、言動には幼さや甘えが目立つ。

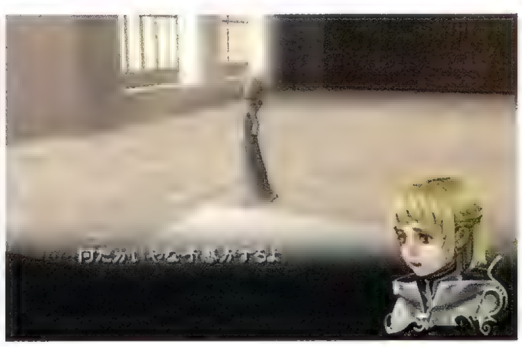
また、悪気はないのに相手を傷つけたり、神経を逆撫でするような発言をしたりすることもしばしば。説明不足から誤解を招くことも少なくない。これは、周囲が彼を子供扱いしてしまい、対等な会話を交わす機会に恵まれなかったためと思われる。

18年前に、「静かな森」の宮殿跡地でヴェルドレに保護され、神官居住区で暮らすようになる。当時から、書庫にこもって古い文献や記録を読み漁ることを好んでいた。後に神官となってからは、本格的な研究生活に入った。ヴェルドレの死後は神官長の職を引き継ぎ、多忙な日々を送っている。

かつて帝国軍を率いた天使の教会の司教であり、今は聖女と呼ばれ人々に敬愛されているマナとは、双子の兄妹。彼らの実母は、兄のセエレだけを溺愛し、妹のマナを虐待し続けた。マナが司教として数々の悪行を重ねるに至ったのは、この虐待に原因があり、それを見て見ぬふりをした自分にも責任の一端があるとセエレは考えている。それを償うために、手を尽くしてマナの消息を追っていたが、彼女とは長い間、生き別れになったままだった。

マナの信頼を得て、行動を共にしているノウェに対して、羨望にも似た複雑な感情を抱いている。



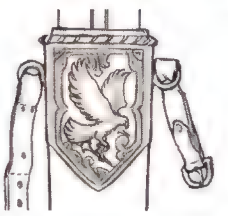


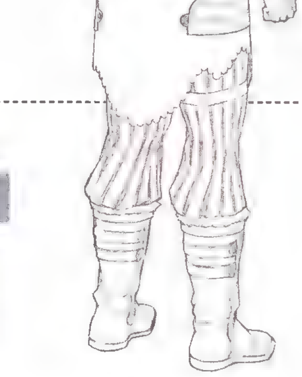
Personal Data

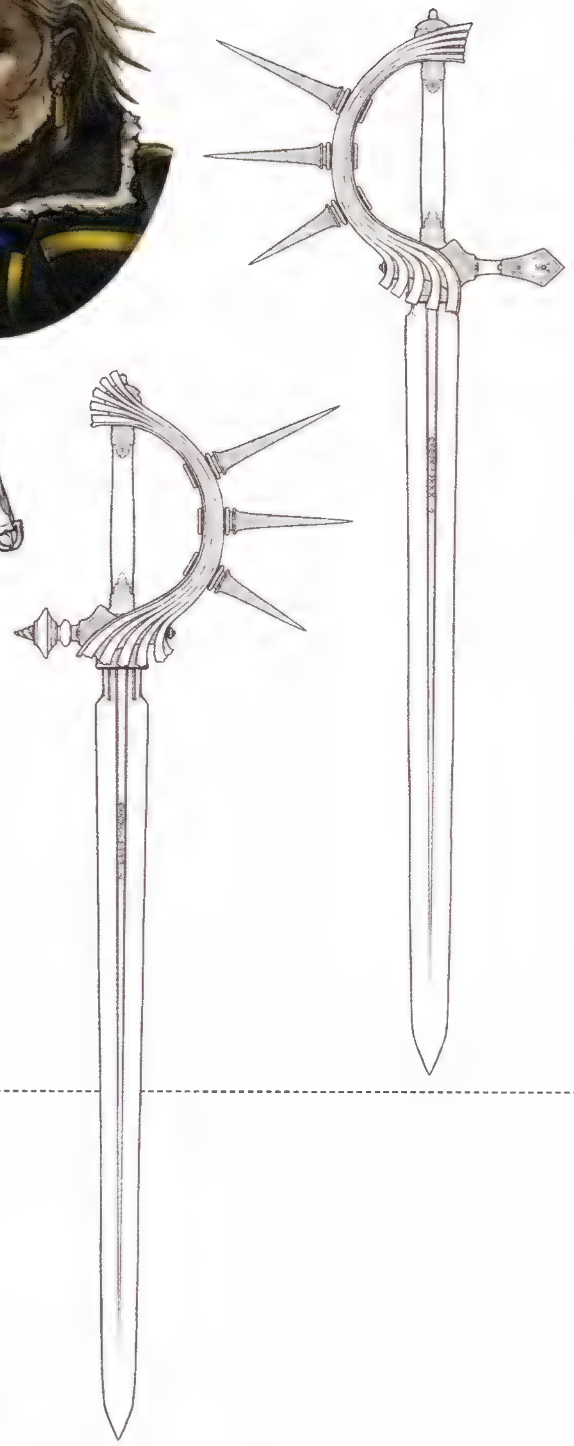
性別	男性
年齢	24歳
血液型	A型
身長	110cm
髪の色	淡い金色
瞳の色	濃い緑色
契約モンスター	ゴーレム
契約の代償	時間
紋章の位置	全身











[オロー]　声：土師孝也

Oror

前封印騎士団長。二振りの剣を自在に操って戦うことから、「双刀の金獅子」の名で知られた連合軍の将。先の大戦が終結した3年後に、かつての部下を率いて封印騎士団に入団。神官長が兼任していた団長職を任される。

セエレの神託に従い、大隊を率いて「忘れられた遺跡」と呼ばれる渓谷地帯を捜索、ブラックドラゴン・レグナに育てられていた子供を発見した。オローは子供を連れ帰り、養子として手許で育てた。この子供こそが神託の救世主であり、ノウェである。

それまで人間と全く接触のなかったノウェに、人間の言葉や習慣を教え、人としての在り方や善悪などあらゆることを教え込んだ。ノウェにとって、レグナが「竜の父」なら、オローは紛れもなく「人間の父」であった。

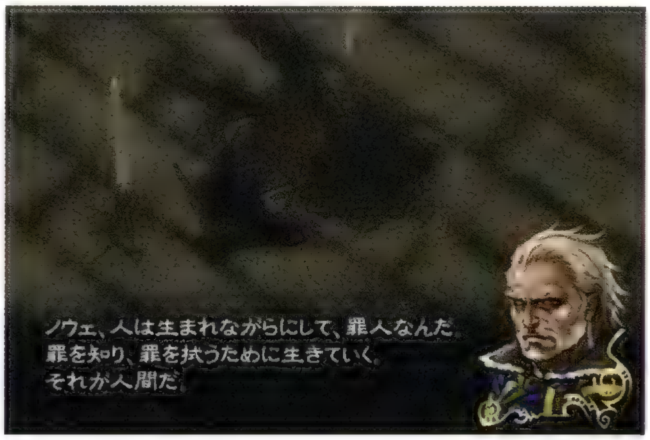
7歳で騎士団入りしたエリスに対しても、事情を詮索することなく一団員として公平に接し、剣術・槍術を指南した。

不正を嫌う清廉な人柄ゆえに、目的のためなら手段を選ばないジスモアとは、意見の衝突を見ることが多かった。また、神官長のヴェルドレに対しても、正しくないことは正しくないと正面切って指摘、とりわけ直轄区制度を巡っては激しく対立したと言われている。

Personal Data

性別	男性
年齢	48歳
血液型	O型
身長	183cm
髪の色	銀色がかった金色
瞳の色	灰色を帯びた薄い青色









[カイム] 声：池畑慎之介☆

Caim





18年前、帝国が引き起こした大戦と、世界の危機に際し、竜との契約者としてひたすら戦い抜いた男。後に「世界を救った英雄」として、その名を知られるようになる。

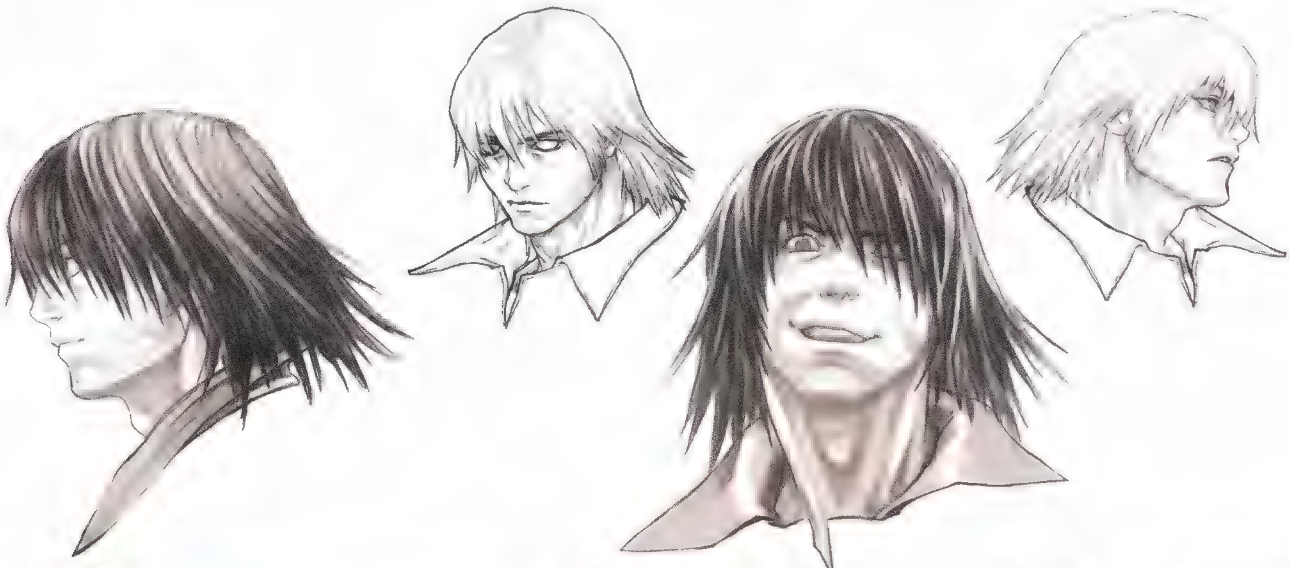
契約相手であるレッドドラゴン・アンヘルが封印の女神となって離れていった後は、マナを連れて各地を旅して回った。その贖罪の旅は数年に及んだ。

復讐心や怒りが鎮まっていくにつれて、それまで憎しみの対象でしかなかったマナに温かい目を向けるようになり、フリアエとお揃いのブレスレットを与えるに至った。しかし、それが裏目に出て、マナはかえって不安を募らせる。

ある日、アンヘルからの"声"で、カイムはヴェルドレが自分たちを裏切ったことを知る。アンヘルは"鍵"によって五感を封じられ、居場所すらわからなくなってしまう。しかも、アンヘルに気を取られている隙をついて、マナまでもが逃走を図った。カイムの片目をつぶした上で。

相次ぐ裏切りに、カイムは再び孤独に陥り、かつてと同じ怒りと憎しみを胸の内に蘇らせる。唯一の拠り所であるアンヘルを救うため、単身、旅に出たカイムだったが、その目には再び狂気が宿っていた。人々は彼を「隻眼の男」と呼んで恐れるようになる。世界を救った「英雄カイム」と同一人物であるとは思いもよらずに。

ノウェ達が"鍵"を破壊した後、カイムはようやくアンヘルとの再会を果たすが、もはや残された時間はなかった。18年前に出会ったのと同じ場所で、彼らは炎の中へと消えた。







Personal Data

性別	男性
年齢	42歳
血液型	AB型
身長	185cm
髪の色	やや茶色がかった黒
瞳の色	灰色がかった濃い青色
契約モンスター	レッドドラゴン
契約の代償	声
紋章の位置	舌

Angel

[アンヘル] 声：ピーター

Personal Data

性別	不明
年齢	10000歳（正確には不明）
血液型	不明
全長	5.8m／25.4m（形態進化により変動）
身体の色	紅
瞳の色	青みがかった黄色



18年前、カイムと契約し、共に戦ったレッドドラゴン。すべての封印を失って破滅へと突き進んでいた世界を救うため、何より契約相手であるカイムの生きる世界を護るために、自らの身を犠牲にして封印の女神となった。本来は女神の苦痛を軽減するために、複数の神殿に封印を設け、女神の身体にかかる負荷を分散していたが、帝国軍によって三つの神殿は壊滅。人間を遥かに凌ぐ体力を持つドラゴンといえども、封印の負荷が集中することによる苦痛は相当なものであった。

さらに、アンヘルが封印を一方的に放棄するのではないかと疑心暗鬼に陥ったヴェルドレが、その五感を霊的に分離し、"鍵"によって封じてしまった。それ以後、アンヘルはいつ果てるとも知れない闇と沈黙の檻に繋がれてしまう。カイムの"声"すら届かない孤独の中、アンヘルは次第に正気を失い、後に、解放されたときには完全に狂気に支配されていた。カイムの呼びかけにすら気づくことができずに暴走したが、死の直前になってようやく正気を取り戻した。

なお、ドラゴンは滅多なことでは人間に名乗ることはないため、アンヘルという名を知る者は少ない。人々は封印の女神への敬意と畏怖の念を込めて、「赤き竜」と呼んでいる。

Story Line
ストーリーライン

『ドラッグ オン ドラグーン2 -封印の紅、背徳の黒-』の物語は、全十二章の物語とA、B、Cの3つのエンディングによって構成されている。第一章から第十二章までは分岐のない一本道で、初めてクリアした時はAエンディング、2周目をクリアした時はBエンディング、3周目をクリアした時はCエンディングにたどり着くのだ。なお、2周目以降は物語に関係なく最初から全キャラクターを使用できたり、武器やレベルなどが引き継がれたりする。ただし敵の攻撃力は1.68倍(3周目は3倍)、体力は1.5倍(3周目は2倍)に跳ね上がるのだ。



序

18年前。世界を二分した大戦の時代。

“おおいなる時間”をつなぎ止め、世界をあるべき姿に保つ「封印」。その破壊を目論む「帝国軍」と、それを阻止せんとする「連合軍」とによって、世界は戦乱のさなかにあった。帝国軍の手によって、神殿の封印はすべて破壊され、連合軍は最終封印である女神を死守すべく、総力を挙げて帝国を迎え撃った。しかし、彼らの奮闘もむなしく、女神は落命、最終封印もまた破壊された。

帝国軍を率いていたのは、「天使の教会」の司教・マナ。“神”の啓示を受けた彼女、わずか6歳の子供によって、世界の調和と秩序は崩れ去った。

すべては“神”の計略であった。

復讐の竜騎士・カイムによって、マナが無力な幼子に戻され、長きにわたる大戦は終結した。赤き竜・アンヘルが新たな封印となり、世界は再び調和と秩序を取り戻したかに見えた。

大戦の英雄である神官長・ヴェルドレは、再び封印が破壊される事態を防ぐため、これを守護する組織「封印騎士団」を創設。初代騎士団長であるオローの下、封印騎士団は平和のために尽力した。

しかし、人ならぬ者である竜の女神に、果たして人と同じ枷が効力を持ち得るのか？ 竜の力によって、封印が一方的に解除される事態に陥ったとしたら？ ヴェルドレは、何よりもそれを危惧していた。その不安を払拭すべく、彼は密かにある企てを進めた。封印の女神・アンヘルをより強く拘束するための“鍵”の設置である。

アンヘルを封じる“鍵”は完成した。が、それと前後して、ヴェルドレとオローは暗殺された。後にいう「直轄区襲撃事件」を境に、封印騎士団は変貌を遂げた。民衆を守る組織から苦しめる組織へと。ジスモアという一人の男によって。
人々の失意と怨嗟の声が地に満ち、再び世界に暗雲が立ちこめようとしていた。

そして、竜眼の救世主と罪深き聖女が出会った——。

プロローグ　封印の竜 [フウイン ノ リュウ]

前兆

ゼンチョウ



第一報は、天覧試合のまさに当日であった。

世界の秩序を守るために施されたという封印。それを守るべく結成されたのが封印騎士団である。

展覧試合は、その封印騎士団に属する兵士達が、日頃の鍛錬の成果を披露するための重要な行事だった。故に大神殿には、神官長・セエレ、騎士団長・ジスモアを始めとする各連隊長達が一堂に会していた。

試合に臨む兵達の中には、「双刀の金獅子」と称された前封印騎士団長・オローの養子であるノウェの姿もあった。8歳まで竜に育てられた彼は、セエレによって「救世主」と名指しされ、騎士団に迎えられた。しかし、それを快く思わない者も少なくない。

オローが存命中であった頃は、せいぜい「竜の子」と陰口を叩き、蔑みの目を向ける程度であったが、オローの死を境にそれらは露骨に、かつ度を超したものとなっていった。幼なじみで、今では直属の上官となったエリスが何くれとなくかばってくれはしたものの、それにも限りがある。この日もノウェは、試合の名を借りた嫌がらせの数々と戦わなければならなかった。

それでも滞りなく試合が終了した直後、その報はもたらされた。明命の直轄区に魔物の一団が出現、と。後になって振り返れば、これがノウェの、そして世界の運命を大きく変えた第一報だった。

＊ ＊ ＊

明命の直轄区は、守護者である連隊長が不在のために、守りが薄くなっているという。直ちに討伐隊が現地へと差し向けられた。上空からは蒼き竜・レグナに騎乗したノウェが、地上からは二個小隊を率いたエリスが。

それは、見習いから正式団員に昇格したノウェにとっての初任務でもあった。

直轄区とは、エリスの説明によれば「毒性を吐き出す忌まわしき地」であり、その危険性ゆえに騎士団が直々に管理している場所である。しかし、直轄区制度が定められたのは前神官長の時代であり、エリスにも詳細は知らされていなかった。

今ひとつはっきりしないエリスの物言いを訝りながらも、ノウェは魔物を掃討しつつ、先へと進む。やがて、二人は明命窟の入り口近くで、必死に助けを求める声を聞いた。

堅く閉ざされた明命窟の門の中から、出してくれと叫ぶ人々。ひどく怯えた様子の彼らは、元帝国兵だった。

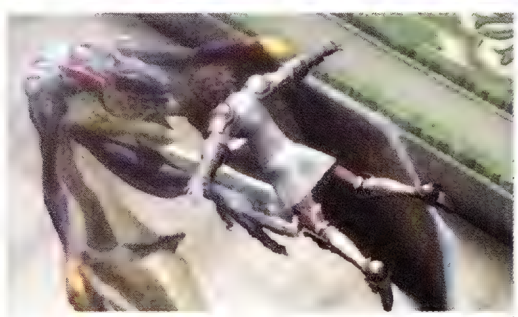
直轄区には、毒性を封じ込めるための供物“鍵”が安置されているという。“鍵”は直轄区ごとに異なる形状をしており、明命の“鍵”は聖花、人の命を吸って咲く花だった。この地の毒性を鎮めるためには聖花が必要であり、聖花を咲かせるためには犠牲となる人々が要る……。エリスの話にノウェは戸惑う。

かつて敵であったという理由で人々を捕縛し、「殉教者」と祭り上げて命を奪う。力で従えて、犠牲を強いる。そんな封印騎士団の在り方に、ノウェは強い違和感と疑念を抱く。

＊ ＊ ＊

魔物掃討の任務を終えて大神殿に戻ったノウェ達に、休む間もなく新たな任務が下された。次の行き先は気炎の直轄区。またしても、直轄区に異変ありとの知らせが届いたのだった。





聖女

セイジョ



気炎の直轄区は、毒性を持つ霧に包まれ、至る所に魔物が出没する土地だった。濃霧は、“鍵”が安置されているという炎洞塁の奥深くにまで立ちこめていた。気炎の連隊長・ザンポは、殉教者達に“鍵”の安全を確かめてくるように命じる。

怯え、渋る殉教者達の前に、一人の女性が現れた。「彼らに代わり、私が奥を見てきましょう。それで文句はありませんね」

凛とした態度の女性の名は、マナ。驚いたことに、それまで躊躇していたことを忘れたかのように、殉教者達はマナの後へと続いた。曰く「マナ様が行くのなら、我々もお供します」と。

マナと殉教者達の一行が炎洞塁の奥へと姿を消して、数時間。不意に大地が激しく鳴動した。濃霧がみるみる晴れていく。炎洞塁の奥で何らかの変事が起きたのは明らかだった。

あわてて奥へと向かうザンポを追って、ノウェとエリスも迷路のような洞窟内へと足を踏み入れた。

その行く手を阻むかのように、ノウェは殉教者達に包囲される。彼らは必死でノウェを足止めしようとしていた。それは、マナがこの洞窟の奥で「何か」を為そうとしていることを意味していた。騎士団にとって好ましくない何か、を。

騎士団員である以上、彼らを排除しなければならない。一人、また一人と殉教者達を斬り捨てながら、ノウェは自らの行為に嫌悪感を覚える。

ノウェとエリスが聖壇の間にたどり着いたときには、気炎の“鍵”である聖火台はマナの魔法によって破壊されていた。同時に、ザンポの肉体も消滅した。直轄区の“鍵”が失われれば、連隊長の命も失われる。それが彼らの守護者たる所以であった。

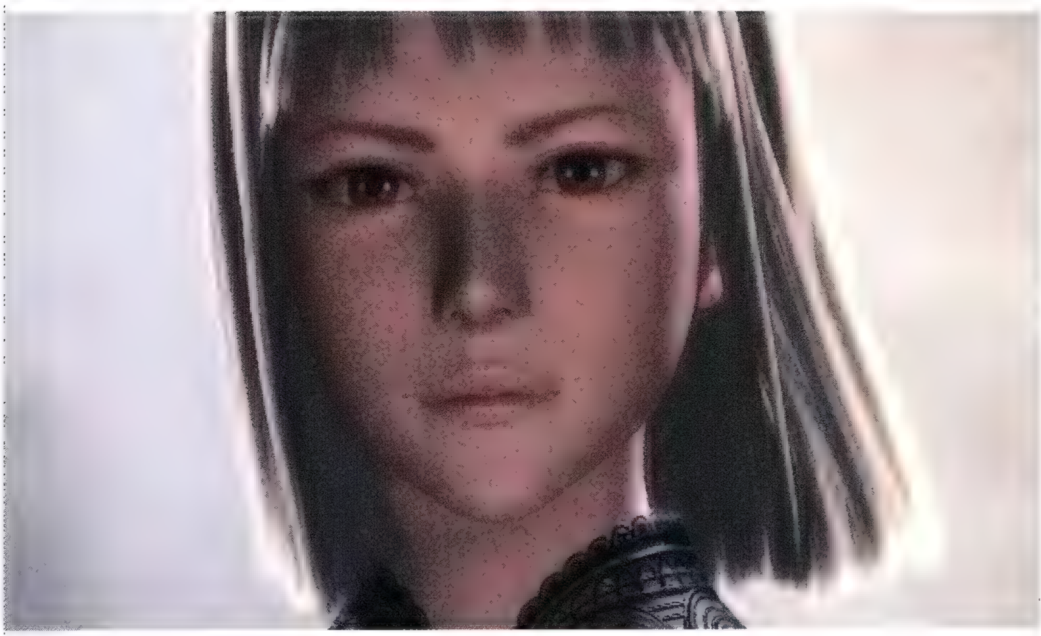
エリスはその場でマナを捕縛した。“鍵”の破壊と守護者殺害の大罪を犯した者として。

その夜。ノウェは、マナが拘禁されている牢を密かに訪ねていた。何故に毒性を封じ込める“鍵”を破壊したのか。何故に守護者殺害という罪を犯したのか。人々が「聖女」と崇める女性と、この大罪とが、ノウェの中ではどうしても結びつかなかったのである。

詰問するノウェに、マナは静かに答えた。直轄区制度こそが人々を苦しめる元凶であり、殉教の名の下に自由を奪われている人々を解放するために“鍵”を破壊したのだ、と。

しかし、マナがどう答えようと、処刑は確定していた。火炙りの刑を自ら選択したマナは、抗う素振りも見せずに火刑台についた。その足許に堆く積まれた薪に、エリスの投じた炎が広がる。

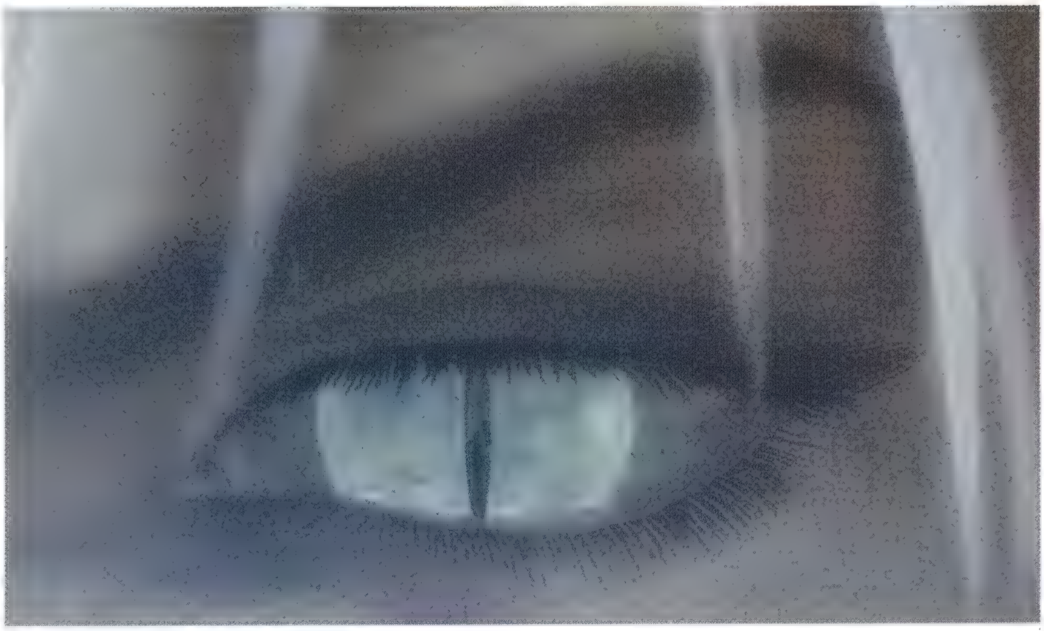
火刑台が炎に包まれようとした瞬間、大地に亀裂が走った。そこから吹き出した真っ白な霧が辺りを覆い隠す。再び視界が戻ったとき、そこにマナの姿はなかった。彼女は殉教者達の手を借りて逃走したのである。





第二章　聖女 [セイジョ]





三

離反

リハン

　気炎の直轄区から帰還したノウェは、その足でジスモアの許へと向かう。急な呼び出しであった。
　直轄区での一連の出来事について報告せよということなのか、或いは、マナに逃走を許したことへの弁解を求めているのか。しかし、ジスモアの用件はそのどちらでもなかった。
　ジスモアに勧められた清水を飲み干したノウェは、にわかに激しい目眩(めまい)に襲われた。ここに至ってようやく気づいた。ノウェに毒を盛ることこそがジスモアの「用件」だったことに。
　しかも、ジスモアは同じ毒を養父・オローにも飲ませたという。3年前の直轄区襲撃事件の黒幕はジスモアだったのだ。毒の回った身体で「隻眼の男」と相対したオローは、あえなく凶刃に倒れた。養父・オローの死は殉職ではなく、いわば謀殺だった……。
　それを聞いた瞬間、ノウェの中を激しい怒りと得体の知れぬ衝動とが交錯した。ろくに動かないはずの足が床を蹴り、痺れた腕が剣を一閃させる。ジスモアの右腕が断ち切られ、床に転がるのを見たと思った。
「こ、これはいったい!?　ノウェ、あなた……」
　エリスの声でノウェは我に返った。自らの内を駆け巡ったあの力は何だったのか？　戸惑い、恐れを覚えながらも、ノウェは言葉を絞り出した。
「……さよなら！」
　呆然と立ち尽くすエリスをその場に残し、ノウェは無我夢中で走った。追いすがる兵士達を幾度となく斬った。反逆者を捕らえよ、という叫びを聞いた。
「俺はもう、ここにはいられない……」
　返り血を浴び、尋常ならざる形相のノウェを見て事情を察したのか、或いは最初からこうなることを予期していたのか、レグナは驚いた様子も見せずにノウェを背に乗せ、飛び立った。
　大空に逃れても、騎士団の空中部隊が執拗に追ってくる。彼らは本気だった。手心を加える気配など微塵も見せずに、ただただ攻撃を繰り返してきた。もはや自分は騎士団員でも、まして救世主でもないと、ノウェは苦い思いを噛みしめる。
　試練の旅の始まりだった。







ノウェとレグナが潜伏先として選んだのは、「忘れられた遺跡」と呼ばれる場所だった。そこは、8歳までノウェがレグナと暮らしていた地で、いわば故郷である。

しかし、かつてレグナが「傀の庭」と呼んだ場所でさえ、もはや安住の地ではなかった。ジスモアが派遣した討伐隊が待ち伏せしていたのである。

空中部隊にレグナの動きを封じられ、ノウェは単身での地上戦を強いられる。多勢に無勢、じりじりとノウェは追いつめられていく。

そのとき、聞き覚えのある声が低く響いた。

「こちらへ！」

ノウェに救いの手を差し伸べてくれたのは、やはり騎士団に追われているマナだった。聞けば、殉教者達と共に、この地に潜伏していたのだという。

マナ達と行動を共にしたノウェは、追撃を振り切り、騎士団の包囲網を脱出する。隠れ家での休息もそこそこに、マナは早くも出立の支度を整えていた。彼女の次なる目的地は、神水の直轄区。気炎と同様、聖壇の“鍵”を破壊するとマナは言う。

「私の目的はいつもそこにあります」

そう微笑むマナに、ノウェは同行を申し出る。戻る場所も向かう先も見失った今、標となるものが欲しかった。人々の解放を掲げて行動するマナは、ノウェの目には極めて真っ当に映る。ならば、彼女について行けば何かが掴めるのではないか。進むべき道を見極めることができるのではないか……。

その直感を信じて、ノウェはマナと共に神水の直轄区へと向かった。

直轄区にほど近い「砂の村」でノウェが見たものは、嘆く声すら出せないほどに疲弊し、無気力になった村人達の姿だった。かつて豊かな水を湛えていたはずの川が干上がり、人々は慢性的な飢えと渇きに悩まされていたのである。

原因は、川の上流に「水城砦」が築かれたためだという。神水の“鍵”である聖瓶は常に清水で満たされていなければならない。その大量の清水を得るために、騎士団は砦と水門を造って川を堰き止めた。明命の“鍵”が人の命を吸って咲くように、神水の“鍵”は人々から水を奪った。

そればかりか、騎士団は村人達がこの地を離れることすら禁じた。人々はこの不毛の地で、ただ死を待つだけの暮らしを強いられている……。

ノウェはついに“鍵”の破壊を決意する。誰に言われたわけでもない。ただ、目の前で苦しむ人々を放っておけなくなったのである。騎士団に追われるノウェを助けてくれたとき、マナは「ただ放っておけなかっただけです」と言った。今、ノウェもまた同じ理由で行動しようとしていた。

水城砦を奥深くに進むと、設えられた聖壇に、神水の“鍵”はあった。マナの言葉どおり、大量の清水に満たされた巨大な水瓶である。

二人がそれを破壊しようとしたとき、神水の守護者・ハンチが現れる。彼女は、この地の人々を苦しめているだけでなく、オローとノウェが飲まされた毒の清水の提供者でもあった。

激闘の末、ハンチとその契約相手であるケルピーを倒し、ノウェとマナは聖瓶を破壊する。“鍵”が壊れると同時に、ハンチの身体も消滅した。気炎の直轄区で見たのと寸分違わぬ光景であった。

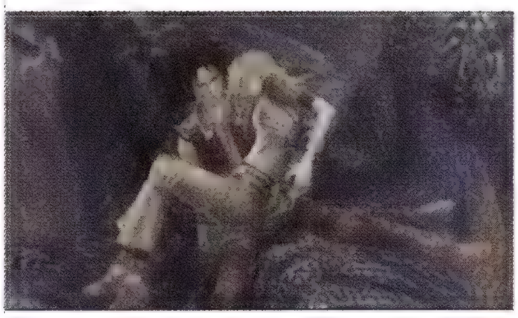
駆けつけたエリスは破壊された聖瓶を見て絶句する。が、すぐに怒りに燃える目でマナを睨みつけ、ノウェを激しく非難した。

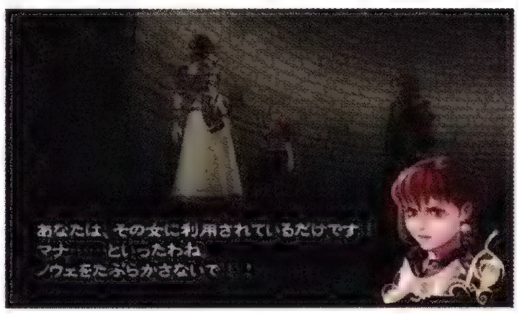
「自分が何をしているのか、わかっているのですか！
あなたは、その女に利用されているだけです！」

しかし、それでもノウェの決意は揺るがない。引き留めるエリスを振り切り、ノウェはマナと共にその場を立ち去るのだった。

逃亡

トウボウ





第四章　逃亡［トウボウ］

五

仲間　ナカマ

川に水が戻り、砂の村の人々は生きる気力と希望を取り戻した。彼らの喜ぶ顔にノウェも喜びを覚える。

そんなノウェに、次なる目的地は「宝光の直轄区」であるとマナは告げる。

ノウェ達はその情報を得るために「錆の町」を訪れた。そこには、かつて封印騎士団に属していた男がいるという。町の人々は彼を「仮面の男」と呼んだ。

しかし、すでに錆の町にも騎士団の手が回っていた。二人は賞金稼ぎの男達に追われ、仮面の男を捜すどころではなくなってしまう。

複雑に入り組んだ裏道を逃げ回った挙げ句、袋小路に追いつめられる二人の前に、捜していた当の本人、仮面の男が現れる。見るからに怪しげな風体の男であったが、彼はノウェ達に味方し、賞金稼ぎ達を追い払ってくれた。それどころか、彼はノウェの顔を知っていた。

「どこの間抜け坊主かと思ったら、ノウェじゃないか。こんなところで会うとはなあ」

聞き覚えのある声と口調。男の素顔を見て、ノウェは驚く。養父・オローのかつての腹心、ユーリックだった。ノウェにとって、封印騎士団の中では心を許せる数少ない相手である。しかし、ユーリックは直轄区襲撃事件の後、行方知れずとなっていたのだった。

再会を喜んだのも束の間、賞金稼ぎ達の通報によって町は騎士団に包囲されてしまう。突破口を求めて北の門へと向かう三人。

そのときだった。不意に包囲網の一部が崩れ始めた。悲鳴が上がる。逃げ惑う兵士達が宙に浮いた。否、彼らは斬り飛ばされたのである。兵士達を肉塊に変え、辺り一面を鮮血に染めながら、何かが近づいてくる。

隻眼の男だった。一振りで数多の命を奪いながら、男は確かに笑っていた。

「嫌……たすけて……」

傍らのマナが怯えた声でつぶやく。見れば、その横顔は血の気を失い、細い肩は小刻みに震えている。マナはいったい何を恐れているのか。

だが、それを問う暇はなかった。隻眼の男によってもたらされた混乱は、この上ない好機である。舞い降りたレグナの背に飛び乗り、三人は町を脱出した。

養父・オローは明命の直轄区で隻眼の男の凶刃に倒れたと聞いている。いわば「父の仇」である相手をみすみす放置することに、忸怩たる思いがなかったわけではない。だが、ノウェは直轄区の解放を優先した。それが自分の進むべき道だと信じた。

「なるほど、最近、直轄区をぶっ壊している連中がいるって聞いていたが、ノウェ達だったのか。そいつはおもしろそうだな……」

どこか含みのある言葉ではあったが、ユーリックはノウェ達の同行者となった。

＊＊＊

光城郭と呼ばれる城塞には、宝光の“鍵”聖宝玉が祀られているという。

「あそこにゃ、やっかいな奴がいるんだよなあ。宝光の守護者、ヤハって奴がな」

ユーリックはヤハを知っているらしい。しかも、単なる顔見知りではないことが、その言葉の端々から感じられた。

ヤハにとってもユーリックは特別な相手なのか、三人が光城郭内に侵入すると、開かないはずの扉が開いた。罠ではないのかと訝るノウェに、ユーリックは冗談とも本気ともつかない口調で答える。

「開かない扉をわざわざ開けてくれたんだ。罠だとしても、行くしかないだろ？」

いくつもの仕掛けと守備隊を突破し、ノウェ達は“鍵”が安置されているという宝光の間へと急ぐ。

ついにノウェ達は、光城郭の奥深くに聖宝玉を探し当てた。それは、怪しい光を放つ巨大な宝石だった。

そのとき、三人の前に宝光の守護者・ヤハが立ちはだかった。契約相手の魔物・ノームを伴って。

「人間を傷つけるのが大好きな子供達ですよ」

ヤハの言葉どおり、ノームは群体だった。おびただしい数のノーム達との乱戦を余儀なくされたノウェ達だったが、何とか“鍵”の破壊に成功した。

「……ユーリック。最後に、そなたに会えて良かった」

その思い出を胸に、と言い残してヤハは消滅した。ユーリックとヤハは、かつて友人同士だった。

「契約者なんかにならなきゃ、友人のままでいられたかもしれないのにな……」

本当はあんな奴じゃなかったのさ、とつぶやくユーリックの横顔は、ひどく寂しげだった。

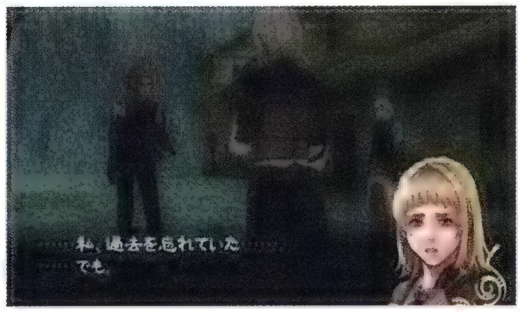


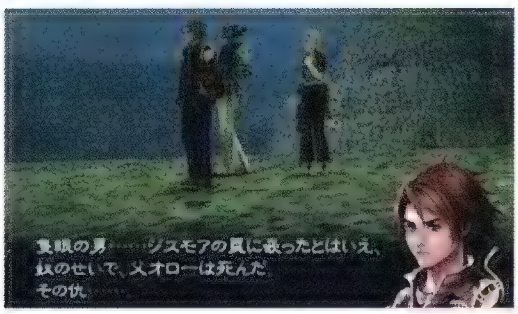


六

暗雲　アンウン







直轄区の情報を持つ者がいるとの情報をノウェ達は掴んだ。その男は直轄区の秘密を知ってしまったために封印騎士団から追われる身となり、「閉じられた地」に逃げ込んだらしい。

ノウェ達は「深遠なる大地」と呼ばれる場所を越えた先、閉じられた地へと急ぐ。その男が騎士団の手に落ちる前に接触を図らなければならない。

錆の町で隻眼の男と遭遇して以来、マナの様子がおかしいことが気がかりではあったが、ノウェはひとまずそれをしまい込み、目的地へと向かった。

閉じられた地は、気炎の直轄区にほど近い、未開の原野だった。切り立った岸壁や鬱蒼と茂った木々が散見されるその地は、身を潜めるには最適であるように思われた。だが、何かがおかしい。

気がつけば、ノウェ達は騎士団の大軍勢に包囲されていた。これらを率いているのは、エリス。情報を持つ男が逃げ込んだ、という話は罠だったのだ。

ユーリックとの再会に動じることもなく、エリスはノウェに投降を命じた。大地と空とを覆い尽くさんばかりの大軍がノウェ達に迫る。

悲鳴は騎士団員の中から上がった。錆の町での出来事が再現されるかのように、軍勢の一画が崩れ始める。隻眼の男が姿を現す。そして、マナが顔面蒼白で立ちすくむ。何もかも、あの夜と同じだった。

「ああ、カイムが……来た」

そのつぶやきに、ノウェは耳を疑った。マナが口にした名を知らぬ者はいない。カイム。18年前、世界を救った英雄の名だった。ノウェは衝撃を隠せない。

養父・オローを殺した隻眼の男が、英雄・カイムと同一人物だというのか。

「嫌……嫌……嫌……来ないで……」

マナはひどく取り乱し、震えている。これでは戦うどころか、自らの身を守ることすら叶いそうにない。ノウェは決断を下した。

「くそっ。仇は後回しだ。ここを離れよう！」

包囲網を掻いくぐり、逃走するノウェ達をエリスが追ってきた。

「ノウェ！　目を覚まして！　その忌まわしき女から離れなさい！」

「忌まわしき？」

「ええ、そうよ。その女が世界を救えるはずがないの」

そして、エリスは18年前の真相を暴き立てる。世界を破滅に導こうとした「天使の教会」の司教、赤い目の幼子がマナであったことを。

辛くもエリスの追撃を振り切って逃げ延びたノウェは、マナを問いただした。エリスの言葉は真実なのか。

マナは否とは言わなかった。おまえの罪を忘れるなとカイムに命じられたこと、にも拘わらず記憶を失い、過去を忘れていたこと……。それがマナの答えだった。

「"鍵"を壊して人々を救っているのは……。罪滅ぼしのつもりだったのか？」

その問いにも答えずに、マナは去っていった。今までありがとう、という言葉だけを残して。

ノウェは混乱していた。何もかもがわからない、そう叫ぶノウェにユーリックは言った。

「じゃあ、何も考えなくていい。頭を空っぽにして俺についてこい。明命の直轄区へ行くんだ。つき合ってくれ」

進むべき道を見失った今となっては、ノウェに選択肢はなかった。

明命の直轄区に降り立ったノウェとユーリック。相変わらず明命の守護者は不在であるのか、門は閉ざされたままである。そんな二人の前に、マナを拉致したカイムが現れる。

マナを取り戻そうとするノウェに先んじて、ユーリックがカイムに戦いを挑む。

「やっと、時が来たようだ。ここで会える日を、俺は長いこと待ってたんだぜ」

どうやら、ユーリックとカイムの間にはノウェの知らない因縁があるらしい。

しかし、二人の戦いに決着はつかなかった。ノウェ達が目を離した隙に、騎士団がマナを拉致したのである。

必死に追いかけるノウェだったが、あと一歩のところでマナを乗せた飛空艇が飛び立ってしまう。ノウェは、ユーリックと共にレグナを駆る。飛空艇は大神殿へと向かっていた。

＊＊＊

大神殿でノウェを待ち受けていたのは、またしてもジスモアだった。

ここでノウェは、ジスモアの激しい憎悪を目の当たりにする。同時に、その裏側には、亡きオローへの嫉妬が隠されていたことも知った。

特別な力があるわけでもなく、契約者でもなく、ただその人柄によって兵士達をまとめ上げ、誰からも尊敬の念と信頼を寄せられていたオロー。

「思い出しても忌々しい……。余はあの男を恨み続けるぞ。その遺志を継ごうとする者もな！」

以前、天覧試合で剣を交えたときとは比較にならないほど、ジスモアは手強かった。それをも凌駕し、ノウェはついにあと一歩のところまでジスモアを追いつめる。

しかし、ジスモアは卑劣な罠を張り巡らせていた。

「今より刻音の鐘が十を打つ時……小娘は処刑される。貴様に止められるか？」

形勢不利と見るや逃げの一手に転じるジスモア。追いかけて止めを刺そうにも、マナの処刑を告げる鐘がノウェの足を止める。ジスモアを追えば、マナを助けることができない……。

ノウェは迷わず地下牢へと走った。

地下牢に囚われていたマナを救い出し、ノウェは改めて彼女と行動を共にすることを決意する。

「俺、マナを信じたい。血の涙を流して、苦しむ人々を救おうとしているのが本当のあなただって信じたい」

そして、再び三人となった一行は明命の直轄区へと向かった。

＊＊＊

明命窟の扉は何者かによってこじ開けられていた。ホブゴブリンの巣と化した洞窟の中を、ノウェ達はひたすら進む。目指すは、聖壇の間。"鍵"である聖花が咲く場所である。

聖壇の間を探し当てた彼らを待っていたのは、カイムだった。カイムは彼ら、否、彼を待っていた。明命の守護者であるユーリックその人を。

3年前、カイムは明命の直轄区を襲撃し、"鍵"を設えるべく儀式を行っていた前神官長・ヴェルドレを殺害した。その際、オローに同行していたユーリックも重傷を負った。死にたくない一心で、ユーリックはこの地に眠っていた死神と契約を交わし、ただ一人、生き延びた。その代償は「死ねない身体」であった。

ここで死なせてくれと頼むユーリックに、ノウェはただただ首を横に振る。

「駄目だ！　俺はユーリックの死など望んじゃいない！」

「俺が死ねば"鍵"も壊れる。おまえ達の進む道はこれしかないんだよ」

明命の"鍵"を壊すこと、それはこれまでの守護者達と同じように、ユーリックが消えてしまうことを意味していた。ノウェは、どうしてもその事実を受け入れることができなかった。

「まずはカイムを倒すんだ。話はそれからだ」

それが子供じみた時間稼ぎにすぎないことくらい、ノウェにもわかっていた。ただ結論を先延ばしにしているだけ……。わかっていても、そうせずにいられない。ノウェは無我夢中でカイムに斬りつけた。

しかし、契約者であるカイムは強く、戦いは長引いた。両者が疲れを隠せなくなるまで剣戟は続く。

そんな中、ノウェは一瞬の隙をつかれて、絶体絶命の窮地に立たされる。カイムが剣を振りかぶり、必殺の一撃を放った。

その瞬間。ユーリックが身を挺してノウェをかばった。カイムの剣はノウェではなく、ユーリックの身体を貫いた。

死神と契約したユーリックが死に至るたったひとつの方法は、その身体もろとも死神を葬り去ること。図らずもカイムはそれを行ったのである。

ユーリックは最後の力を振り絞ってカイムを崖下に突き落とし、ノウェを守った。それは、自分をかばって死んだオローに対する彼なりの償いだったのだろう。

「人間の生きる意味が罪を乗り越えるためだとすれば、俺はもう……十分なんだ……」

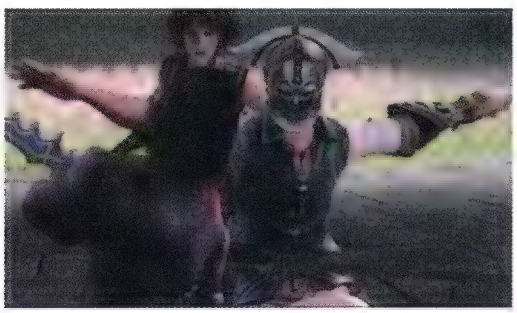
聖花が一瞬にして散った。守護者の命と共に、明命の"鍵"は壊れた。

明命窟の外では、レグナがノウェ達の帰りを待っていた。ユーリックの不在を訝るレグナにマナが答えた。

「ユーリックは亡くなりました。明命の直轄区を解放するために……」

それでもノウェに迷いはなかった。ここで立ち止まっては、ユーリックの死が無駄になる。決意を新たにするノウェに、レグナが告げる。「天時の直轄区へ向かえ」という思念を拾った、と。

そこが最後の直轄区だった。





七

働哭　ドウコク

第七章　慟哭［ドウコク］





レグナが聞いたという謎の「思念」に導かれ、ノウェ達は天時の直轄区へと向かった。

最後の“鍵”が安置される場所だけに、これまで以上に守りが固い。飛空艇が隙間もないほどに空を覆い、地上を見下ろせば武装した兵士達でびっしりと埋め尽くされている。

さらに、天時塔周辺には結界塔や高射砲台塔までもが建てられていた。それらに狙い撃ちにされ、悪いことにレグナが負傷してしまう。

上空からの侵入を断念し、ノウェとマナは地上から天時塔を目指す。地上に配置された精鋭部隊の猛攻を掻いくぐり、二人は天時塔へとひたすら駆ける。

ようやく天時塔の扉を開け放ち、内部に侵入した二人の行く手を阻んだのは、ジスモアとエリスだった。

ノウェの剣がジスモアの鎧を打ち砕く。奇妙な手応えと共に崩れ落ちる鎧……。その下から現れたのは、人型をした黒い陽炎のような「何か」。人間とは到底思えない異形の者と化したジスモアだった。

おぞましいその姿に向けて、ノウェは止めの一撃を放つ。ためらいはなかった。「これ」はもはや人ではないのだから。

しかし、その切っ先がジスモアに届くことはなかった。ノウェの剣はエリスの胸を貫いていた。ジスモアは卑劣にも、エリスを盾にして攻撃を防いだのである。

大切な幼なじみを手に掛けてしまった驚愕と狼狽とで、ノウェは一瞬、戦いを忘れた。倒れるエリスを無我夢中で抱き留める。剣を取ることすら忘れて。それは、ジスモアに逃走を許すに十分な時間だった。

「最後まで使える部下だったな」

高笑いを残して、ジスモアは姿を消した。

「なぜ、わたくしは倒れているの……」

エリスもまた混乱していた。長と仰ぐ人物に裏切られたばかりか、盾にされ、用済みとばかりに打ち捨てられている……。騎士団への忠誠心が人一倍厚かったエリスにとって、受け入れ難い出来事に違いなかった。

「もう喋るな。傷が開く」

それがかつての友にかける、精一杯の言葉だった。

「最後の“鍵”は……この塔の最上階に。聖なる砂時計、聖砂漏が……」

必死で“鍵”の在処を伝えようとしているのだろう、ノウェが制止しても、エリスは話すのをやめなかった。

「お行きなさい、ノウェ。もう止めないわ……」

エリスは微笑んで目を閉じた。

＊＊＊

ノウェ達はひたすら天時塔の最上階を目指した。瀕死のエリスが教えてくれた“鍵”の在処である。

時の聖壇まで間近に迫った二人は、そこで予想外の人物に遭遇する。神官長・セエレだった。

かつてノウェを「救世主」と名指ししたセエレがノウェの顔を知っているのは当然だった。が、驚いたことにセエレはマナにも笑顔を向けたのである。それは紛れもなく、親密な相手に対する笑顔であった。

「生きてた！　マナが生きてた！　ああ、夢みたいだ！　ぼくはこの日をどれだけ待ったことか！」

神官長とマナはいったいどういう間柄なのか。訝るノウェにセエレは答えた。

「マナはぼくの妹です。ぼくらは双子なんだ」

外見的には幼子のセエレだが、それはゴーレムとの契約に際して自らの“時間”を差し出したためだというのが専らの噂だった。どうやら、噂は真実だったらしい。

18年前に生き別れとなって以来、セエレはずっとマナの行方を捜していたのだという。再会を喜ぶセエレと対照的に、マナの表情は冷淡だった。

「私達はこれから“鍵”を壊しにいくのですから。行きましょう、ノウェ」

「待ってよ、マナ！　ぼくの話を聞いてよっ」

セエレは必死で何かを告げようとしてくるが、マナは全く聞く耳を持たない。

「マナ、きみは大きな勘違いをしている。きみのしていることは……」

振り切るように部屋を飛びだしていくマナをノウェは追いかける。セエレの言葉を最後まで聞かなかったことに、微かな後ろめたさを覚えながら。

＊＊＊

ノウェとマナは天時塔の最上階、時の聖壇へとたどり着いた。時を封じ込めた砂時計の周囲に人の姿はない。ノウェ達が不審に思ったそのとき、ジスモアの声が響きわたった。

「守護者なら、ここにおるぞ」

ジスモアこそが天時の守護者、闇の精霊・シェイドとの契約者だったのだ。

宿敵とも呼べる相手との、最後の“鍵”を巡る戦いが始まった。契約者という名の怪物と化したジスモアの攻撃はすさまじく、戦いは熾烈を極めた。

三たびノウェは、ジスモアを追いつめた。が、それでも彼は負けを認めようとはせず、自ら聖砂漏を破壊するという暴挙に及ぶ。

「我が手中に落ちぬ世界なぞ、くれてやろう」

ジスモアの最後の言葉と共に、聖砂漏に封じ込められていた「時」が猛烈な勢いで噴出した。崩壊する天時塔から、間一髪で脱出したノウェ達は、地上でセエレと再び遭遇する。セエレは泣きそうな顔でマナに言った。

「きみが解き放ったのは民衆じゃない。最終封印だよ」

最終封印である「赤き竜」を拘束するために、前神官長・ヴェルドレは“鍵”を設えた。ドラゴンの力を抑え込むほど強力な“鍵”を。そして、それを維持するためには力が、民衆の犠牲が要る。直轄区で犠牲になっていた人々は、まさしく世界を守るための殉教者だった。

かつて“神”の救済を信じて世界を破滅に導いた。マナは、同じ過ちを繰り返してしまった……。

八

覇道　ハドウ

九

復活

フッカツ

18年前、天使の教会によって、最終封印である女神・フリアエは命を落とした。調和を失い、崩壊しようとしていた世界をつなぎ止めたのは、赤き竜であった。人ならぬ身でありながら、人に代わって、人のための封印となる道を選んだ。

しかし、ドラゴンの強大な力を恐れた前神官長・ヴェルドレは、赤き竜から五感を奪い、闇と静寂の檻に封じ込めた。18年。封印の苦痛と孤独とに耐え続けた歳月である。それは赤き竜を狂気の淵に沈めるのに十分すぎる長さだった。

今、すべての"鍵"は破壊され、赤き竜は解き放たれた。正気を失い、憤怒と憎悪の塊となったドラゴンが暴走を始めた。

ノウェとレグナは、赤き竜・アンヘルを止めるため、聖地へと向かう。

「なんて禍々しい姿なんだ……。これが"赤き竜"なのか？」

ノウェは絶句する。レグナと共に暮らしてきたノウェにとって、怒りの咆哮と業火を吐き続けるアンヘルの姿は、同じ竜族と思えないほどだった。

それでも、アンヘルは最終封印である。倒すことなく正気に戻せないものかと、ノウェとレグナは説得を試みる。だが、すでに狂気に支配されているアンヘルに、彼らの言葉は届かなかった。

このままでは世界が火の海に呑まれる。封印をなくして調和を失うより先に、世界は焼き尽くされてしまう。戦うぞ、とレグナがノウェに告げた。

しかし、レグナの力をもってしても、アンヘルの暴走は止められない。

やがて、アンヘルは引き寄せられるかのように、古い城へと舞い降りた。そこは、かつて「女神の城」と呼ばれていたが、今は旧連合軍の亡霊達が巣くう廃墟となっていた。

亡霊を追い払いながら、城内をくまなく調べたノウェは、中庭でアンヘルを見つけ出す。なぜかそこには、明命の直轄区で崖下に転落したはずのカイムの姿もあった。

「おまえの狙いはなんだ？　いったい誰の味方なんだ？」

詰問してみても、返ってくるのは沈黙ばかり。しかし、カイムは再び暴れ出したアンヘルからノウェをかばう。不思議に思いながらも、ノウェはその場を離れた。アンヘルが上空へと飛び立ったのである。

ほどなくしてレグナにカイムからの「伝言」が届く。それによって、ノウェは、カイムがアンヘルの契約者で、契約の代償に声を失っていることを知る。レグナに天時の直轄区についての情報を伝えた「謎の思念」は、カイムのものだった。契約者は"声"と呼ばれる思念を用いて会話を交わすことができるという。

「アンヘルを倒せ」

カイムからの伝言だった。心臓を交換した契約者同士は、片方が死ねば、もう片方も死ぬ。カイムの言葉の意味するところは明らかだった。

死闘の末にアンヘルを撃ち落とし、ノウェ達は墜落先へと急行する。

女神の城の中庭では、カイムがアンヘルを待っていた。長年にわたる拘束からアンヘルを解放するために、そして、もう一度会うために、カイムはこれまで孤独な戦いを続けてきたのだった。

死の間際になって、ようやくアンヘルは正気を取り戻す。が、彼らの時間はいくらも残されていなかった。

――もう良いのか、カイム。
――ああ、行こう。ともに……。

束の間の語らいの後、赤き竜とその契約者は炎の中へと消えていった。

＊＊＊

ついに世界は最終封印を失い、崩壊が始まった。





第九章　復活［フッカツ］

十

崩壊　　ホウカイ

崩壊が始まった。

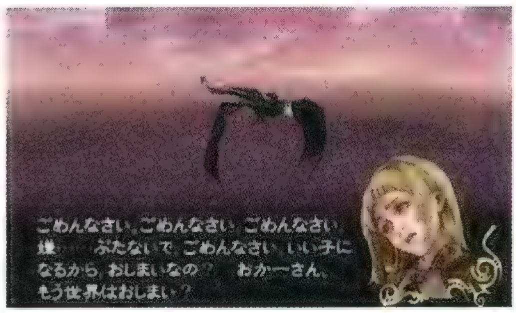
最終封印が消え去り、世界は秩序と調和を失った。空は青さを失い、どす黒い血の色となって砕けた。至る所で時空が歪み、その狭間から異形の者達があふれ出してくる。

封印なき世界の姿に呆然とするノウェに、レグナは平然と答えた。これこそが世界の真の姿、と。

崩れていく世界を押し止めるには、女神によって再び封印を施すしかないのではないか。

ノウェ達は、新たな女神の可能性を求めて、神官長・セエレを訪ねる。セエレならば、女神を探し出す方法も、再び封印を施す方法も知っているに違いない。





大神殿にセエレの姿はなかった。それどころか、神殿内には、異形の者達と魔物が我が物顔で跋扈している。わずかに生き残った騎士団員達は必死で応戦するも、駆除するには至らない。自らの身を守るのがせいぜい、それすら危うい……。

自分の知る大神殿とは全くの別物となってしまった場所を、ノウェはセエレを捜して歩いた。悲鳴と怒号にかき消されそうになる声をことさらに張り上げ、セエレの名を呼ぶ。

「セエレは死なないわ。だって、おかーさんに愛されてるから。あたしよりずっといい子だから」

マナは正気を失っていた。一度ならずも二度までも、世界を崩壊に至らしめたという事実。その自責の念は、彼女の心を押しつぶしたのである。



「この女は使い物にならんな。足手まといだ。小僧、悪いことは言わぬ。ここに捨て置け」

レグナは冷たい目をマナに向ける。しかし、信頼するレグナの勧めであっても、これぱかりは従うわけにはいかない。ノウェは、マナを連れて行くという考えを頑として曲げなかった。

マナと共に行くと決めたのは自分自身。ならば、この事態を招いた責も自分にある。決してマナ一人のせいではない。

「世界を救う。マナを救う。それは俺にとって同じことなんだ！」

浅はかな、とレグナは呆れた様子で息を吐いたが、やがて思い直したように言った。

「やれやれ、ひとつ助言をしてやろう。……新しい世界は空にある」

十一

神話

シンワ

レグナが語った「空にある新しい世界」とは、時空の歪みによって出現した太古の遺跡「古の墓標」のことだった。それは、太古の種族「神竜族」によって造られた城であり、彼らの蓄えた知恵と知識が眠る場所であるという。ノウェはレグナと共に古の墓標へと飛ぶ。

遺跡を守るアークドラゴンの群れを蹴散らし、内部へと侵入したノウェ達は、そこで神竜族の言葉“種の書”を聞く。それは、これまで起きた真実と、これから起きる真実とを連ねた言葉だった。

ノウェは、“種の書”によって、自分が当たり前の人間ではなく、18年前、一組の男女が「再生の卵」に入ることによって生まれた“真人類”であることを知る。しかし、得たものはそれだけだった。力を得られたという実感もなく、マナを元に戻すこともできないまま、ノウェ達は古の墓標を後にする。

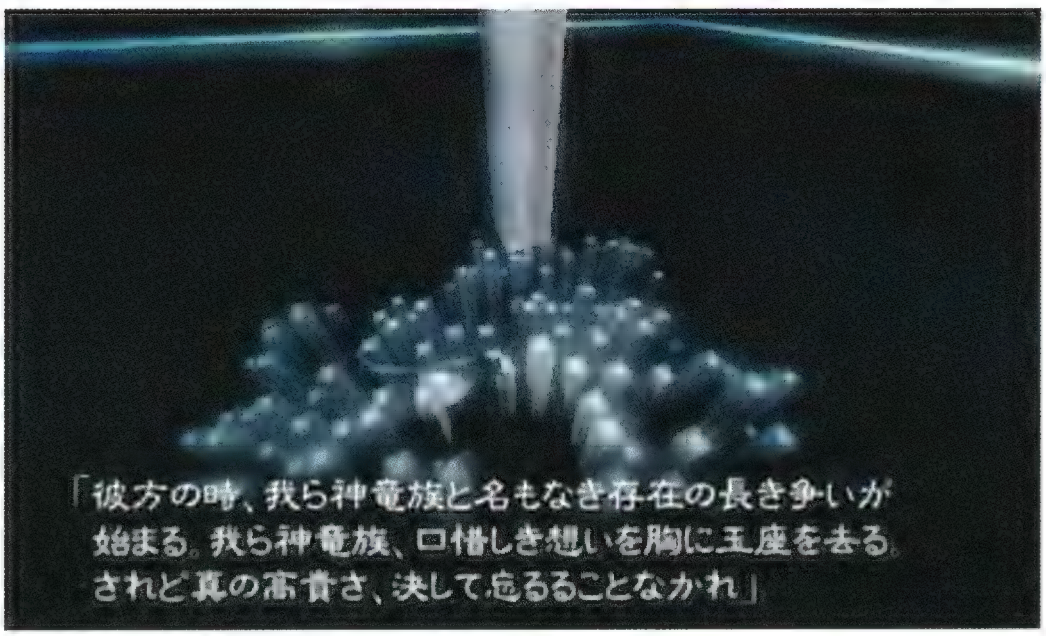
外にでると、見知らぬ戦闘艇がアークドラゴンの攻撃を受けていた。被弾し、不時着した戦闘艇を救助したノウェは、そこで思わぬ再会を果たす。死んだと思っていたエリスが生きていたのである。

そのエリスは、ノウェの傍らにいるマナを見て驚く。幼児にまで退行した言動と、何かに憑依されたような表情。マナが精神に異常を来しているのは明らかだった。

マナを救うために、ノウェは彼女の精神の奥深くに潜り、戦いを挑んだ。忌まわしい過去の残像を打ち破ると、愛に飢えた幼いマナに手を差し伸べ、ついにはマナ自身を現実の世界へ連れ帰った。

そんなノウェの姿を見たエリスは、世界を元に戻すための場所「約束の地」へ連れていってほしいと頼む。神官長・セエレも、そこで待っているという……。







終焉

シュウエン

十二

「禁断の山脈」と呼ばれる険しい山々に囲まれた約束の地。そこは遥か昔、神が降臨したとされる場所である。神話や伝承の中で、神のいる場所へ通じる道があるとも、ここで人類が生まれたとも言われてきた。

その謂われにふさわしく、活火山によって不気味な熱を帯び、草一本生えない不毛の大地が続いている。

エリスによれば、神官長・セエレは、この約束の地で、封印の儀式を執り行おうとしているらしい。最終封印消失によって崩壊しつつある世界に、新たな封印の女神を立てるのだという。

しかし、ここに至ってレグナは、ノウェに「骨の棺」へと向かうように告げた。

骨の棺とは、「名も無き存在」の創造物であるとレグナは言う。名も無き存在とは、人間が言うところの“神”であるらしい。“神”の造りし骨の棺が、この約束の地の奥深くに眠っている。そして、ノウェには人間の未来などより重大な使命がある、と。

「待ってちょうだい！　わたくし達には早急に行わねばならない儀式が……」

エリスの懇願を一蹴し、レグナは頑なに命じる。

「古の墓標で“種の書”の声を聞いたはずだ。我ら神竜族の計画的な被造物たるおまえに選択肢はない！」

まるで自分を道具と見なすかのようなレグナの物言いに、ノウェは驚き、戸惑う。

「俺はレグナを……父親だと思ってきたんだ！　今だって思ってる!!」

「そうだ。だからこそ儂はおまえを正しき道へと導き、育ててきたのだ。“父”として命じよう。ノウェ、儂と共に骨の棺のもとへと急ぐのだ！」

レグナの「父」という言葉をこれまでと同じように受け止めていいものか。

ノウェは迷う。レグナの言葉に従って“真人類”としての使命を果たすべきなのか。或いは、人間の未来を守るために、レグナの言葉に逆らって神官長・セエレを捜すべきなのか。

「考えなさい……自分の未来を。私はきみについていきます」

マナがきっぱりと言い切る。そして、心配そうな顔でノウェを見守るエリス。

ノウェの選択は——。







終 Ending A

世界をあるべき姿に戻すために、最後の封印の破壊を見届ける。それがノウェの選択だった。神竜族の被造物ではなく、人間のまま、人間として生きていく。だから、共に行けないと、ノウェはレグナに別れを告げる。

しかし、その答えを聞いたレグナは怒り、神竜族としての本性を現した。

「我が同胞達よ、目覚めよ！　今こそ我らが世界を支配する時ぞ！」

平原に空と大地が鳴動した。レグナの咆哮に応えて、ドラゴンの大群が飛来したのである。隙間なく空を覆い尽くすかのような数多のドラゴン。それらが一斉に約束の地へと急降下を始めたときだった。

突然、その一画が崩れ落ちた。緑の閃光がドラゴン達を撃墜していく。

それは、神官長セエレ率いるゴーレムの軍団だった。緑色の閃光を放ってはドラゴン達を撃ち落としながら、ゴーレム達はゆっくりと進んでくる。

両者はたちまち交戦状態となった。炎を吐いて攻撃を試みるドラゴンに、閃光で迎え撃つゴーレム。炎と光とが飛び交う。数多のドラゴンが倒れ、数多のゴーレムが砕ける。

混戦の中、ノウェ達はセエレとの合流を果たした。セエレは語る。

「ドラゴン達には先代の神竜族の「血の記憶」が受け継がれてるそうだよ。その記憶が彼らを駆り立ててるんだ」

彼らの望みは、"神"を倒し、その座を奪い取ること。レグナもまた、「血の記憶」に従ってノウェを育てた。その力を利用して"神"を倒すために。

今、思わぬノウェの離反によって、彼らの目論見は潰えようとしている。だからこそノウェを奪わんと、レグナが襲いかかった。

翼を持たないノウェは、上空から襲うレグナには手も足も出ない。ノウェは力が欲しいと痛切に願った。

そんなノウェを励ますかのように、マナがキッと顔を見つめてくる。その瞬間、ノウェの中で"真人間"の力が目覚めた。光の翼を得たノウェは、神竜族としての力を取り戻したレグナに戦いを挑む。

"真人間"と神竜の戦いは熾烈を極めた。長い死闘の末に、ノウェはレグナを倒す。それは、幼い頃から慣れ親しんだ「竜の父」との永遠の別れであった。

地上に戻ったノウェを待っていたのは、「神官長！　さて、封印の儀式を始めましょう」というエリスの言葉だった。最後の封印、新たに選ばれた女神とはエリスのことだったのである。

「わたくし自身、世界が滅びることには耐えられても、ノウェが死ぬことには耐えられないのです」

"真人間"として覚醒してもエリスを救うことはできなかったと、力を落とすノウェに、エリスは「悲しまないで」と微笑む。

そして、封印の儀式が執り行われた。

―――

血の色をした空は青さを取り戻した。それは、世界が本来の姿へと立ち返った証だった。同時に、再び"神"の手に縛られたことの現れでもある。一人の女性の命と人生を犠牲にすることによって。

果たしてこれで良かったのかと疑問を投げかけるマナに、これが今の自分達にできる最良の選択だったと答えるノウェ。

「けれど、僕達には未来がある」

今の自分達にはこれが精一杯でも、未来の自分達は違うかもしれない。ノウェはその日を思い、そして祈る。

「エリスが普通の女性として戻ってこられる日を」

いつか、その日は来るのだろうか？







A-Ending　平穏［ヘイオン］

Ending B



「きみと出会えてよかった。さよなら、ノウェ……」
それが最期の言葉だった。骨の棺はマナによって内部から破壊され、四散した。マナの命もろともに。





B - Ending　天命［テンメイ］

終

Ending C





C-Ending　超越［チョウエツ］

アートワークス・設定画

Artworks

本作の発売前後に描かれた、コンセプトアートや関連書籍のパッケージイラストなどを公開。キャラクターデザインの際に描かれたラフ画など、資料性の高い絵も多数残されている。これらからは、前作に引き続きキャラクターデザインを担当した藤坂公彦氏のこだわりが随所に見て取れるはずだ。



















































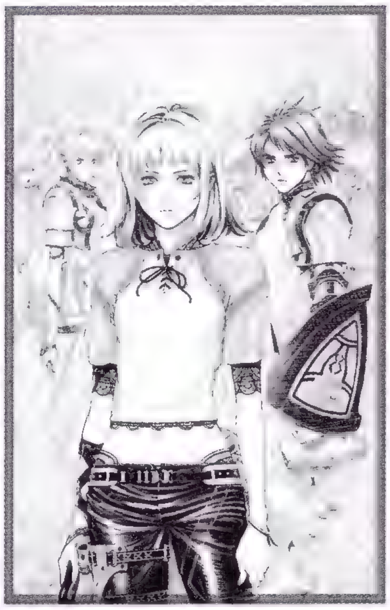


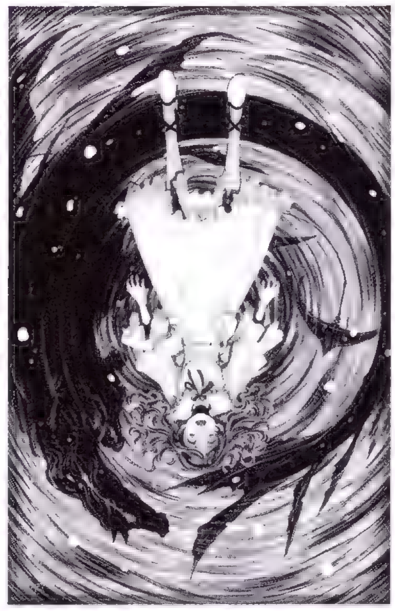





THANKS!












……
……咲めてくれぬか？

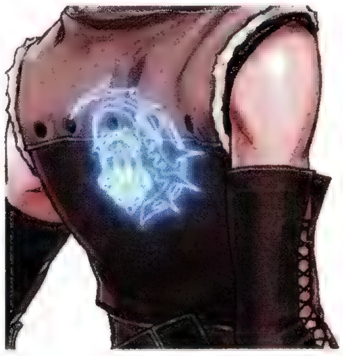

私がお相手しましょうかぁ？
あ、いやですか、そうですか。そうですよねぇ、
私なんか相手にできませんよねー

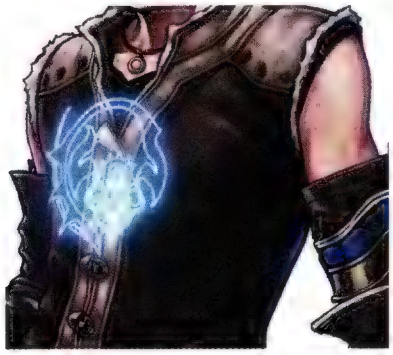

幼馴染のよしみで、
特別に指導してあげてもいいわ


わがままな学園管理員
ザンボさん
輝く美貌の美術教師
ヤハ先生
謎の黒コート&ハベット
レグナ
赤き仮面の女エージェント
アンヘル
権力を欲する野心家
ジスモア教頭閣下
寡黙な数学教師
カイム先生
運動部の救世主
ノウェ
死神の異名を持つ男
ユーリック先輩
風紀に厳しい
クラス委員長
エリス
聖女と呼ばれる
学園のアイドル
マナ
信心深い学園の創始者
ヴェルドレ学園長
男運の悪い看護教諭
ハンチ先生

Nowe [ノウェ]









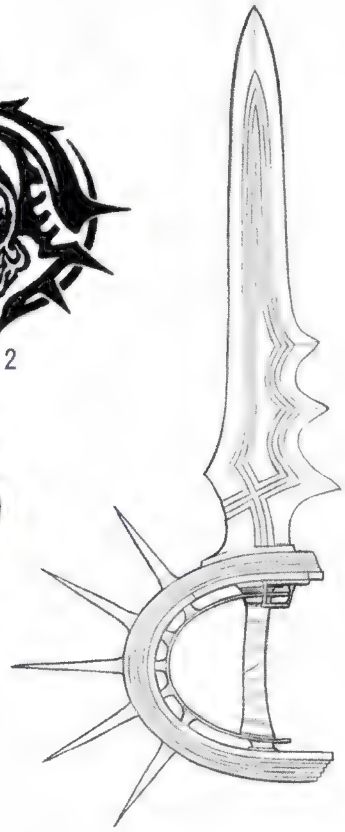
ver. 1 背中



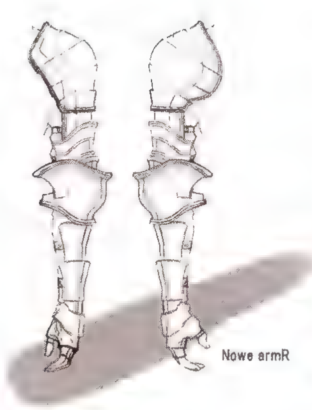
ver. 2



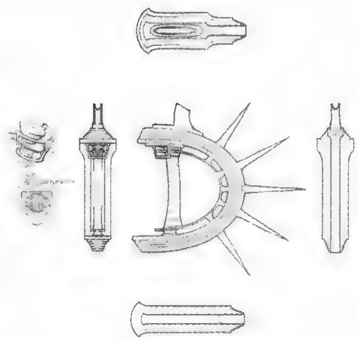
ver. 1 胸



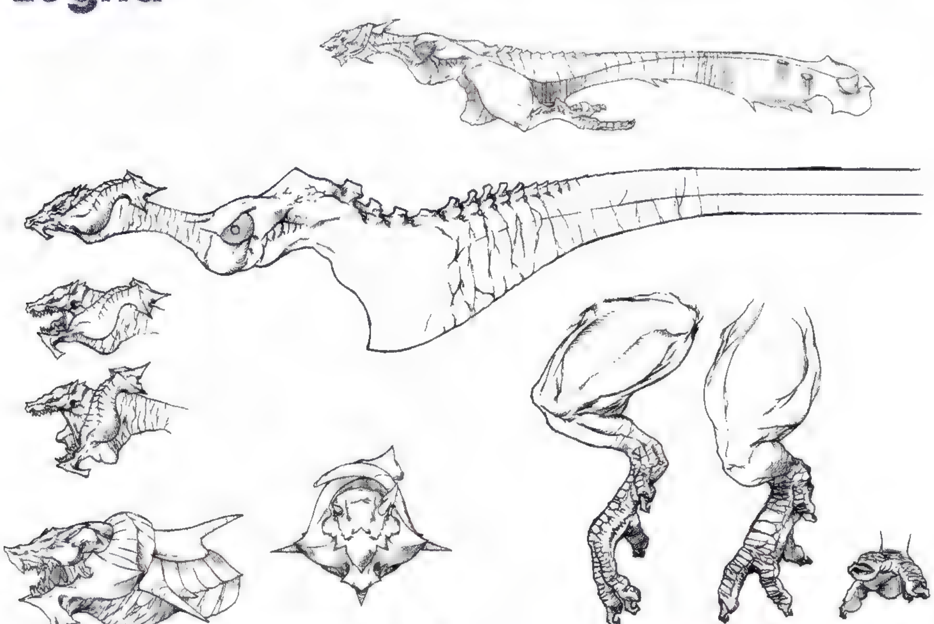


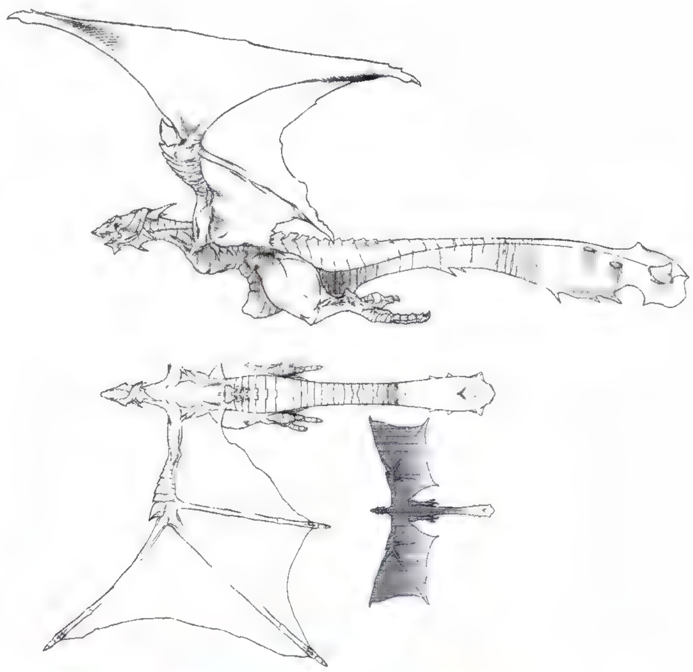




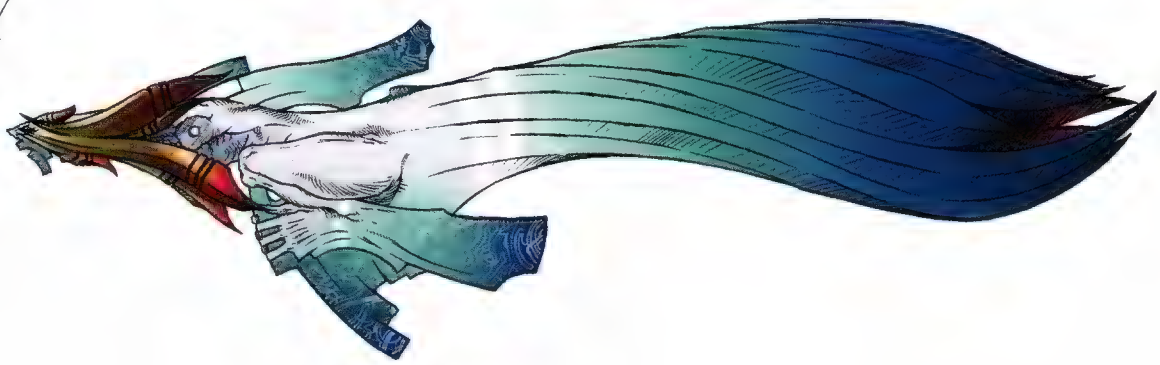


Legna [レグナ]









Manah [マナ]





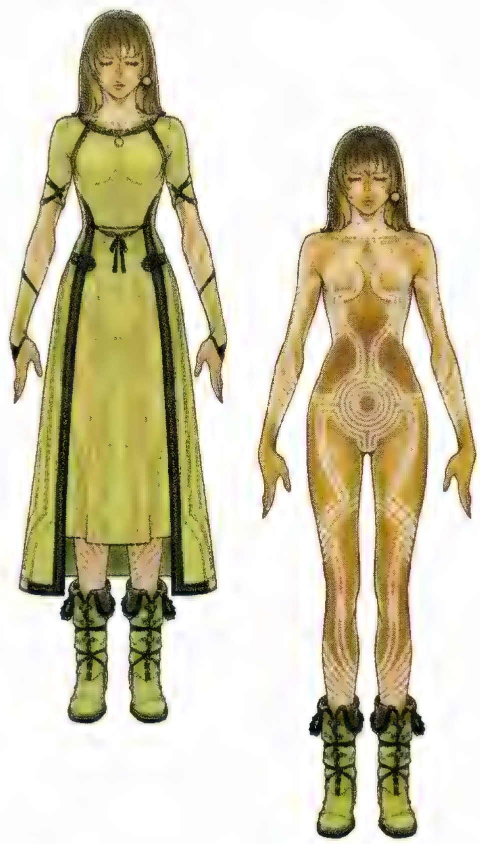




Eris [エリス]







キャラクター設定画 ①

❶真人類となったノウェの設定画。真人類の証は、背中と胸で一対になっている。覚醒すると胸の証が背中に移動・結合し、羽となって浮かび上がる仕組みだ。❷ノウェの背中と胸に浮かび上がる真人類の証の模様。❸青白く発光する真人類のノウェの表情。眼差しはドラゴンのように鋭く、まるでオーラをまとっているかのように見える。❹ノウェの両腕のアーマーの細部がわかる図。肩や関節部分の形状が異なるものなど、当初は数種類が描かれたようだ。❺ノウェが持っている剣に関するディティール。持ち手部分にはエンブレムがレリーフされていて、持ちやすいように革のようなものが何重にも巻かれている。❻側面から見たレグナのボディと、頭部・脚部などのディティール。太股の筋肉は、実在の生物であるかのようにリアル。足の指先に至るまで、詳細に設定されている。❼レグナの頭部パターン。微妙な口の開き具合の違いが見て取れる。❽レグナの飛翔時の姿。翼を広げた時はかなり巨大だ。❾レグナの最終形態を横から見たイラスト。それまでの姿とは大きく異なる、流線型の美しいデザインであることがわかるだろう。❿まるで何かに取り憑かれたかのような、マナの子供の頃の姿。前作同様のイメージである。⓫マナが身につけているブレスレットで、もともとはカイムのもの。こんなに細かいデザインまで詳細に決められている。⓬エリスの武器。曲線で形作られた先端は立体的な形状。⓭女神となったエリスの体に浮かび上がるオシルシのパターン。靴こそ履いているが、顔だけではなく全身にまとわりつくようにして浮かび上がっているのがわかる。



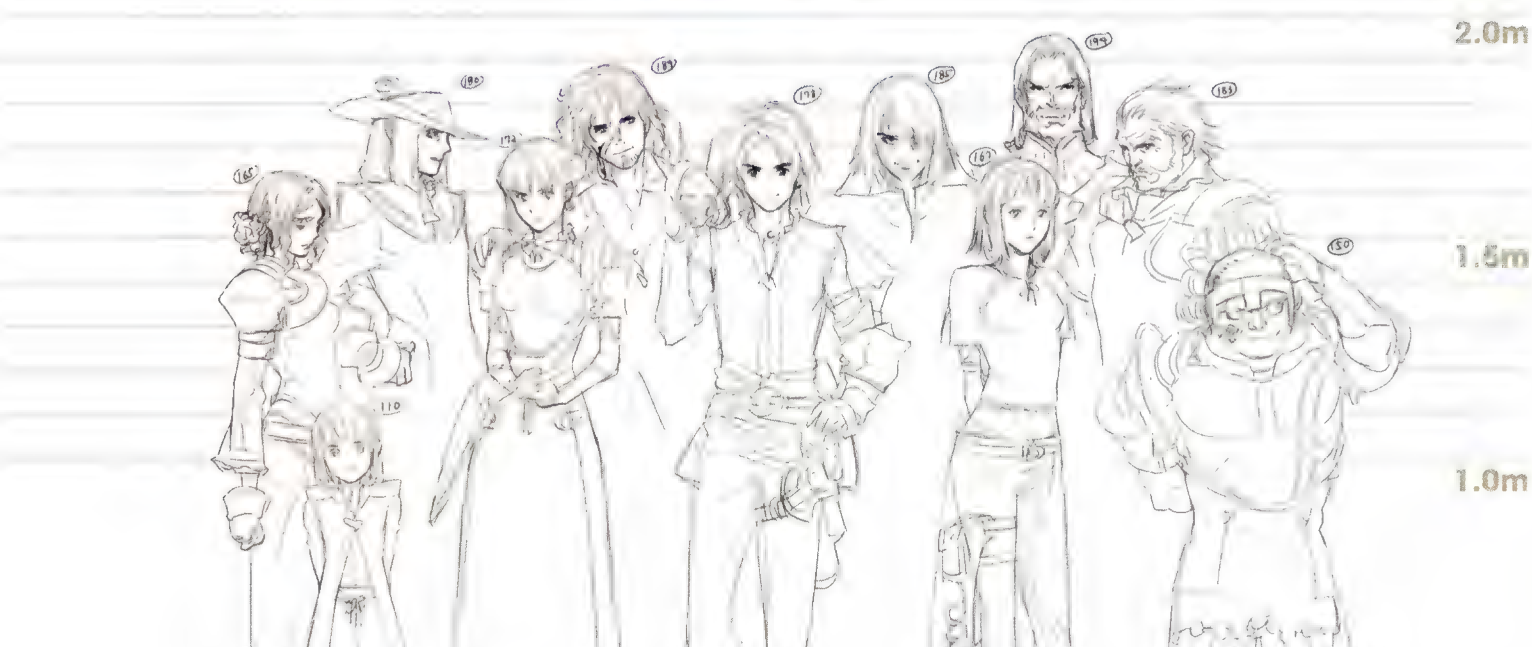
Other Characters [その他のキャラクター]



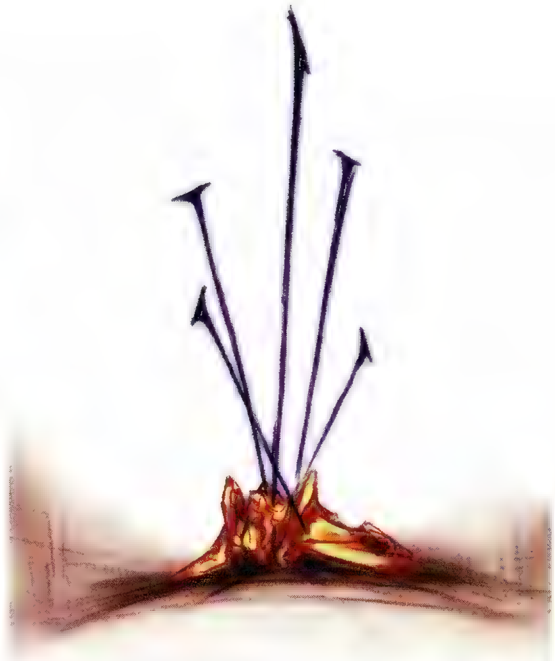


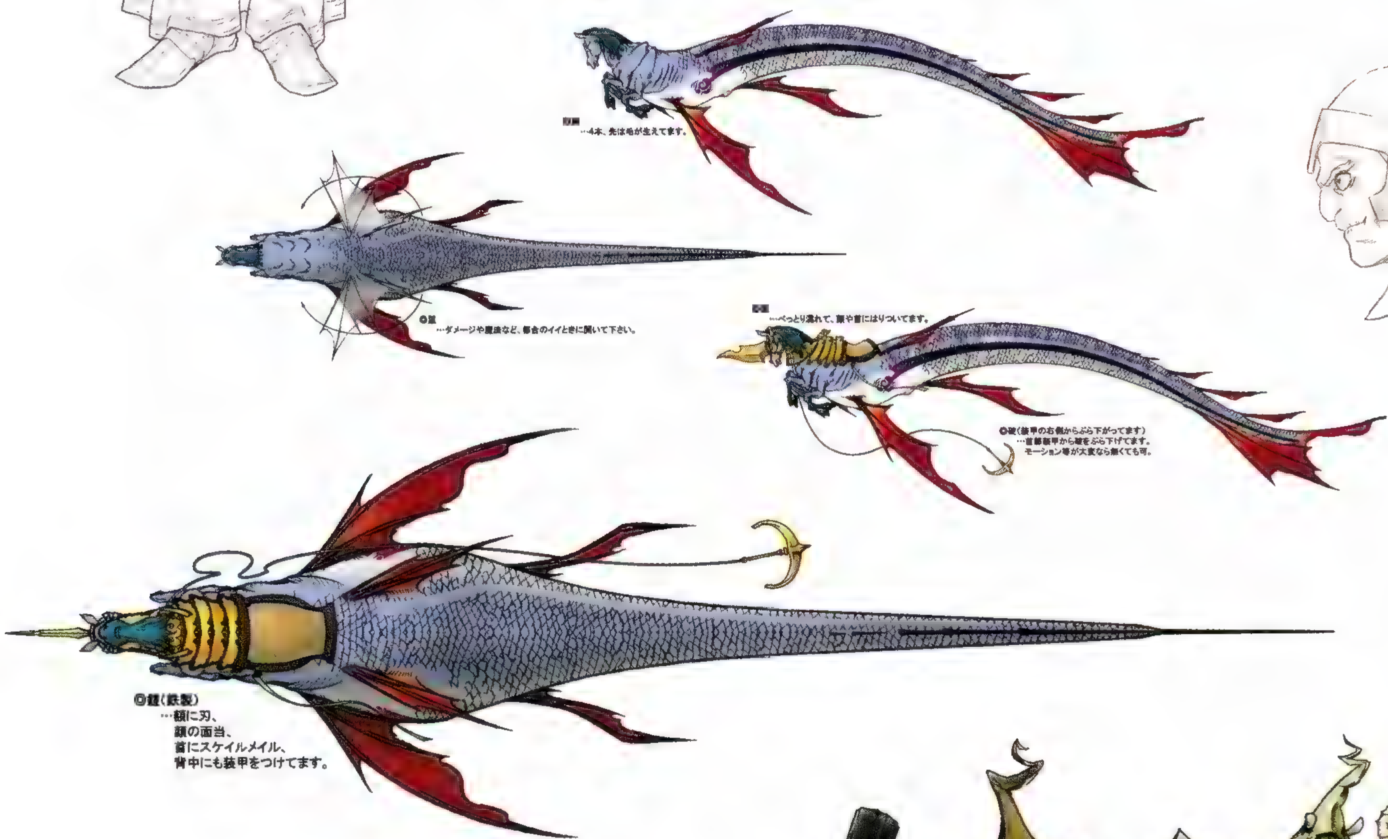


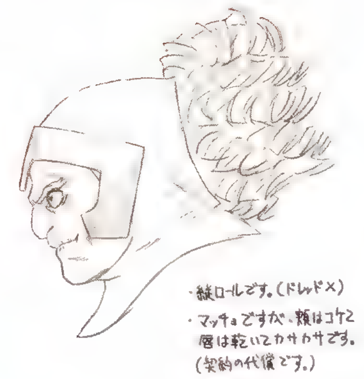














キャラクター設定画 ②

❶ユーリックが愛用する、頭蓋骨を思わせるような仮面。実際の頭蓋骨と同様に、顎の付け根に関節がある。❷ユーリックが遠心力を利用しつつ振り回す、巨大な鎌の設定。持ち手側の先には、まさに死神のような髑髏のモチーフが備え付けられている。脊髄の描写までじつにリアルだ。❸仮面を身につけ、鎌をかまえたユーリックのラフ画。❹滅多に姿を見せないユーリックの契約相手・死神の全身像。❺ユーリックが履いている靴は、柔らかくて動きやすそう。つま先には薔薇の刺繍が施されている。❻❼契約の代償として肉体を失い、全身がシェイドと化したジスモアの姿。実体がなく黒い霧のようなものに覆われており、全身は紋章によって形作られている。遠くからは、ただの真っ黒い塊にしか見えないようだ。❽シェイドの体を隠すための鎧。顔を除き、全身を覆い尽くすプレートメイルである。❾主要な11人のキャラクターの対比図。カイムやザンボなど、ここでしか見られない緩めの表情にも要注目。各キャラクターの身長も書かれている（単位はセンチメートル）。❿⓫ハンチが穿いているオーバーサイズ気味のパンツに関する設定。ヒップラインにこだわってデザインされている。⓬5つのクサビで封印されたアンヘルの姿と、クサビのデザイン画。⓭馬と古代魚が融合したかのようなデザインのケルピー。額の刃や装甲は、契約者であるハンチが施したものなのであろうか？ ⓮ザンボのヘアスタイルがわかりやすく描かれた1枚。身体的特徴に関する記述もある。⓯布の服と帽子を身につけて金鉱に現れる、小人のような姿のノーム。ヤハと契約したモンスターである。





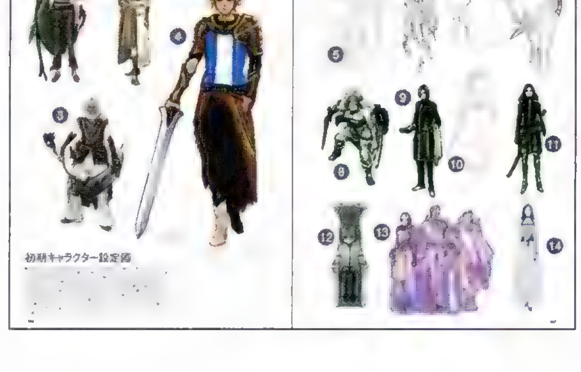




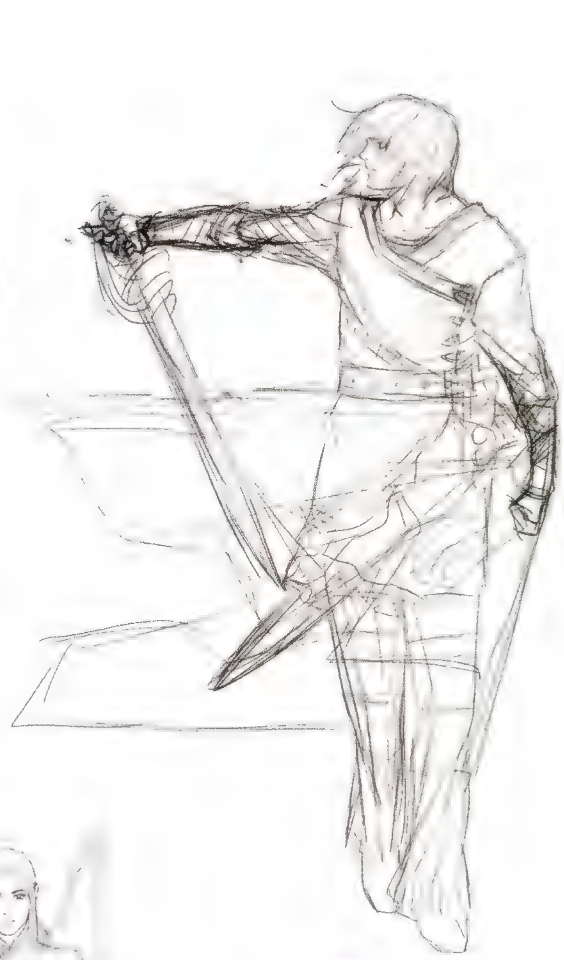


初期キャラクター設定画

❶初期のマナ。この時点で衣装はほぼ決定稿に近いと言っていい。ただし後ろ髪は長く、三つ編みにして1本に縛っていた。影のあるキャラクターらしからぬ、明るい表情というのも貴重だ。❷エリスは初期からヘアスタイルや表情などが一貫して完成していた。このあと鎧の色は金から銀へ、服の色は茶から白へとディティールとともに変更されている。❸初期のユーリック。斧以外にも腰に剣を携えている。なお、この頃の名前はハーロックだった。❹封印騎士団の衣装に身を包んだ、初期のノウェの設定画。鮮やかな青と白のストライプを基調とした服に、甲冑を組み合わせたこのスタイル。ちなみにこの頃、名前はノウェではなくアレフと呼ばれていた。❺婚約が破棄される前のイウヴァルトとフリアエの仲むつまじい姿。❻アリオーシュとレオナール。もし登場していたら、こんな姿だったのだろう。❼剣を構えるカイムのラフ画。❽ザンボの原型。この頃の武器は斧ではなく剣で、完成形に比べると遙かに逞しく凜々しい。❾「敵幹部男」すなわちヤハの原型である。手のひらに現れた炎のようなものが、強い魔力を感じさせる。❿男性キャラクターとして描かれたハンチ。イメージはのちにヤハに反映されている。⓫「敵幹部女」と名づけられたハンチの原型。スラッとした美形で長剣を携えているが、ハンチには似ても似つかない。⓬セエレ。前作のイメージを踏襲した姿だ。⓭左からエリス、オロー、未登場キャラクター。オローは決定稿より遙かに若く、ワイルドな印象で描かれている。⓮フリアエの先代の女神に当たるアシラ。本編では未登場のキャラクターだ。












LOOKING BACK 2

ドラッグ オン ドラグーン 2 編

書いた人：安井 章氏
ドラッグ オン ドラグーン2｜ディレクター

こんにちは、DOD2でディレクターを担当させていたたいた安井です。この度は2について何か書かせていただけるとのことだったのですが、さすがに7年も前のゲームのこと、いろいろ忘却のかなたへ飛んでいたり、すでに語られていたりするのでネタに迷ったのですが、今回はプロジェクト開始直後の草案や没になった案など少し振り返って書いてみようと思います。

さてDOD2は企画立ち上がり時点て、最初に命題として上がっていたのは、実はストーリー云々よりもまず1の不満点の解消とプレイヤー層の拡大の為の施策でした。
キーワードとしては、
「王道大作感」
「RPG感の向上」
「分かりやすさ」
「ゲームシステムの正当進化」
　つまりはゲームの完成度の向上と、万人受けするような内容と雰囲気か前提になっていたわけです。
もともと、DODはヨコオさん＆名取さん節の狂ったシナリオ、ダークで行間を読ませる世界観がプレイヤーの好奇心を刺激し受けた、ある意味マニアックな作品たと思うのですが、それを万人受けさせよとは……ヨコオさんの背中を追いかけるしかない条件の中で、もがくことが運命つけられたプロジェクトとなりました。
結果、私が目指したものは映画『エイリアン』が『エイリアン2』になるかのような進化、つまりドラゴンと封印、それにまつわる人々の話でありながらエンターテイメント性とゴージャス感の向上、そういった満足感が得られる作品にしたいと思い、取り組むこととしました。

まず「王道大作感」に関しては、1と差別化を図るということで、明るく色のあるビジュアル、わかりやすい敵の登場、1のキャラクターを登場させる。ボーイミーツガールで主人公の成長を軸にするストーリー、とわかりやすさを前面に押した内容で提案していきました。
そういえは2はマナとエリスのダブルヒロインの為、好感度のパラメータを導入しキャラの使用頻度やプレイヤーの行動によって物語を分岐させようと考えていたことかありました。初期の段階でそんなに分岐シナリオか作れないということになりボツになりましたが、その名残はエンディングの分岐に残っています。

次の「RPG感の向上」は当初、RPGと言えばオープンマップにエンカウントでしょ、と巨大なマップを用意しドラゴンで移動させようと考えていました。敵とエンカウントしバトルして経験値を稼ぐという本物のRPGのようなことを妄想していました。しかし、移動がめんどくさくなる（その解消のための仕様実装にコストがかかる）、広大なマップの表示が技術的に難しいなど、ほどなくボツになり、結果的に大掛かりなシステムをつくらず1と同じくミッション制で行くという事になりました。マップは諦めましたがレベルアップやアイテム、購入など様々な要素でRPG感を盛りこんでいきました。

「わかりやすさ」については王道大作感ともつながりますが、プレイヤー人口を増やすという目的から2では間口を広げることを求められていた為、わかりやすい設定、セリフ、説明の為のイベント、チュートリアルなど意識して盛りこんでいきました。
余談ですが、2立ち上げ当時は、企画内容について明るく！　わかりやすく！　と、その文言をバカ正直に捉え、そしてディレクターたるものやりたいことやるんじゃい、と意気込み過ぎた結果、

「主人公の少年が幼女化したアンヘルと共に、行方不明のカイムを探す冒険の旅に出発、最後には宇宙船ドラグーン号に乗り込みドラゴン星人と戦う」

――というトンデモドラグーンな妄想をしていたこともありました……。しかしながら私には度胸がなくこの企画案を出すことはできませんでしたが――

さて最後の「ゲームシステムの正当進化」に関しては、ファンからの要望と、自分たちとしても不満だった部分を洗い出し、以下のような点は押さえたいと考えていました。

・武器選択の必要性の向上
・仲間と一緒に戦っている感の向上
・アクション性の強化
・RPG感の強化
・竜騎士感の強化
・マップ構成のバラエティ感
・ボス戦の追加と強化
etc—

まあそうだよね、という内容なのですが、とにかく1の惜しいところ、伸ばしたいところを丁寧にフォローアップしていきました。当初企画書上では、仲間キャラがフィールド上に同時に存在し、一緒に戦ってくれるという某無双ゲームの様な提案をしていましたが、超えるべき当時の技術的障壁とコストとの狭間で実現には至りませんでした。
企画当初の時点では実はまたドラゴンオーバードライブの仕様は入っていません。制作中盤に2ならではのビジュアルとインパクトを持ったシステムが欲しいということになり検討の末、入れ込んだものです。他にも追加仕様はたくさんありますが、最終的にゲームシステムに関しては、DOD1.5くらいで既存システムの拡張仕様で粘ってコスト内でうまく着地てきたのではないでしょうか。

ざっと振り返ってみましたが、ディレクターをやって身に染みたのが、決めることの大切さと大変さてした。仲間キャラの話に限らず決められた時間とコストの中で何を取捨選択するか、選択したあとそれを他人のせいにせず押し通せるか、ということに関しては何度も壁にぶち当たりました。その時頼りになったのはチームのスタッフです。最初に何を決めないといけないか、やっても意味が無いもの、やる意味があるのかなど、その都度アドバイスをくれました。ゲームの半分は優しさで出来ているとはよく言ったものです。もう当時のキャビアのチームは分散していますが新米ディレクターを支えてくれたチームには今でも感謝しています。

と――振り返ってみると、今となってみればもっと好き勝手やってもよかったのかな、とも思う部分はありますが、その場合にはどんな分岐が待っていたのでしょうかね。3ではどんな進化をしたのか楽しみにしたいと思います。ありがとうございました。

Questions and Answers.

ちょっと気になるあんなことやこんなこと

答えた人：安井 章氏
（ドラッグ オン ドラグーン2 ディレクター）

Q レグナが新人類であるノウェと契約せず、あくまでも「兵器である真人類」の育ての親に徹したのはなぜでしょうか？

安井　ノウェは再生の卵に入ったイウヴァルトとフリアエから生まれた存在です。なので、実はイウヴァルトとブラックドラゴンの契約を履行しているんですね。ちなみにレグナが死んでもノウェが消滅しないのは、真人類となり新たな存在になったからです。

Q マナこそ契約に必要な「負の心」の持ち主だと思うのですが、モンスターはそれを嗅ぎつけて来なかったんでしょうか？

安井　記憶をなくしてしまったあとに関しては、いったん「負の心」は小康状態になっていたんですね。あと、セエレのことは、自分自身の過去の過ちを思い出させる相手なので、正直苦手で会いたくないんです。記憶喪失時代は、文字通り忘れてしまっていますので、知らない人だと思っているはずです。

Q ユーリックが契約したのは24歳の時（オローが殺された封印騎士事件の時）のようですが、「死にたくない」と思っていたユーリックの契約の代償が「死＝死ねない」になったのはなぜ？

安井　人は死ぬために生きている＝死ぬからこそ生きているとも言えます。ユーリックは利己的に誰よりも生き残りたいと渇望していたゆえに「死ねること＝死」が代償になったという解釈です。一見、死なないというのはラッキーなのかもしれませんが、死ねないことの無常さというものは計り知れないのでしょう。ちなみにユーリックが死にかけた時は、死ぬ時の感覚を逆再生するようにもう一度体験するような「想像がつかない感覚」です。恐らく自殺なども試しているのでしょうね。これまでに死んだ回数は471（死なない）回とさせてください（もちろん冗談です（笑））

Q ジスモアがシェイドと契約したのは37歳の時ですが、どういう状況だったのでしょうか？

安井　ジスモアは、ヴェルドレに「契約者として大きな力と地位を得てオローを見返したくはないか」とそそのかされて契約するに至りました。彼はすべてを手に入れたかったので、己のすべて、つまり肉体をすべて失うことが代償となったんですね。ふだんは鎧に身を包んでいますが、じつは首から上もすべてないのです。輪郭部分は紋章で構成され、中は黒いモヤの状態と言えば想像がつくでしょうか。ちなみに肉体は代償として失われているので、食べる必要もなく、肉体的な疲労もなく、排泄などの生理現象もありません。ただし精神的には疲労するので、睡眠は必要としています。

Q ハンチの契約時の様子を教えてください。

安井　ハンチは友達と湖に出かけた際に事故に遭ったのですが、友人はみんな溺れ死んでしまいました。その時すでに、ケルビーがハンチに目をつけてから1年が経っています。1年前はハンチが水上ではなく陸上にいたため、契約に至るほどの強い恐怖心を与えることが難しいと考えていたわけですね。それに姉のウルムがそばでハンチを守っていたことからも、邪魔が入らないような状況になるのを待ちたかった。人間にとっての1年は長いですが、ケルビーはモンスターなので1年くらいはどうってことありません。ちなみに姉のウルムも魅力的という設定ですが、ハンチとどちらが美しいかは、私の中では、魅力のタイプが違うとお考えください。ウルムは美人、ハンチは可愛い、みたいな感じですね。

Q ヤハがノームと契約した時の様子と、ユーリックとの関係について詳しく教えてください。

安井　ヤハが契約したのは、彼が16歳で封印騎士団に入ってからしばらくあと。逆算すると17歳、18歳くらいの頃ですね。直轄区を設立しようと地脈の調査をしていた時代で、ヤハはその調査隊の一員でした。

ユーリックとの関係ですが、ヤハは孤児院にいた時代から彼のことが好きでした。ヤハが孤児院を出て行く前に、ふたりのあいだに「何か」があったのだと思います。ユーリックにヤハの力が及ばなかったのは、ユーリックが対処方法を知っていたからですね。なぜなら、ユーリックも、かつて一度はヤハの力に魅了されたことがあったからです。

Q ザンボが向いていなさそうな封印騎士団に入団した理由と、食べられないという状況とは？

安井　封印騎士団に入団するということは、一般的に誉れ高いことでした。なので彼は、親の見栄で無理矢理に入団させられたんですね。ザンボが契約の代償として食べられなくなってしまったというのは、口に入れてもすぐにイフリートが燃焼してしまうということなんです。食べたところで、決してお腹には溜まらないんですね（笑）。でも、生命は契約者の力により保たれているので、元気に生きていられるのです。

食べるのが大好きなザンボは、自分が契約で得たものを棚に上げて「チクショウ、こんなの聞いてないよ！どうしてぼくがこんな目にあうんだよ！」と思っているに違いありません。

Q みんなのどうでもいい些細な特技を教えてください。

安井　以下のとおりです。

ノウェ……竜語で漫談ができます。ドラゴン族には大受け、らしいです。
レグナ……子供をあやすのが得意です。興が乗ってくると大惨事になることも。
セエレ……運動会でバット回しのあとでもまっすぐ歩ける。
エリス……火起こし。キャンプファイヤーでもバーベキューでも火あぶり処刑でも大活躍です。
ユーリック……死んだふり。それはもう迫真の演技です。
ザンボ……モノマネして歌うこと。連隊長のメドレーは鉄板。
ハンチ……あらゆるものでカップリングをつくり妄想することができます。
ヤハ……ひと目見ただけで性癖を見抜けます。男性限定。
ジスモア……ちょいワルオヤジのナンパ。「余と共に清水を嗜まぬか」が殺し文句。
オロー……どんな猛獣でも手懐けることができます。たまに怪我をします。

【ニーア ゲシュタルト レプリカント 編】

Nothing is as it seems・・・

中世から現代の東京・新宿へ「飛ぶ」という、[illegible]

2010年、完全新作のアクションRPGとして登場した『ニーア レプリカント』『ニーア ゲシュタルト』[illegible]

しかし、[illegible]「うわべ」と「真相」[illegible]

この、凄みを増した独創性とプレイヤーに対する裏切り行為は、ディレクター・ヨコオタロウ氏の[illegible]

たくさんのコアなファンを生み出した本作から[illegible]



Characters

登場人物紹介

兄と妹。あるいは父と娘。その仲間達は、封印されし書物と、下着女と、実験兵器という異端な顔ぶれ。まるで現代版『オズの魔法使い』といった様相の彼らが対峙するのは、人の姿をしたアンドロイドと、マモノの姿をした人々。本作の登場人物達は、その「遠い未来の滅びゆく世界」によく似合った面々なのかもしれない（※『ニーア レプリカント』のニーアはヨナの兄、『ニーア ゲシュタルト』のニーアはヨナの父として描かれています。物語に差異はありません）。



[ニーア・少年期]







[ニーア] 声：岡本信彦（少年期）／遊佐浩二（青年期）

『ニーア レプリカント』の主人公

NieR



[ニーア・少年期]

明るく素直な性格の少年。黒文病と呼ばれる不治の病に侵された唯一の肉親である妹・ヨナを救う為、白の書と共に「封印されし言葉」を探す旅に出ることとなる。

ニーアは村の外れにある小さな家でヨナと二人で暮らしている。村人に頼まれたお使いや、周辺に出現するマモノの退治を請け負い、妹と二人慎ましい日々を過ごしていた。旅に出た後も戻ってきては頼まれ事を快く引き受ける為か、村人達からの信頼は厚く頼りにされている。特に歌をこよなく愛するデボル、図書館の館長を務めているポポルは、両親のいないニーアにとって姉のような存在であり、良き理解者でもある。

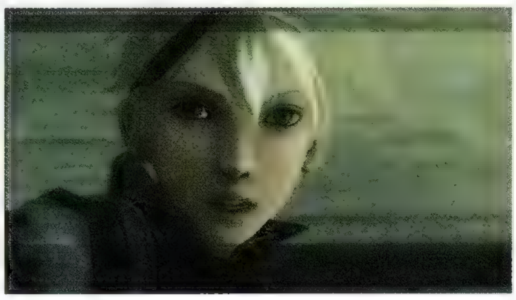
[ニーア・青年期]

5年間の時を経てニーアはたくましく成長を遂げる。数々の戦いに身を置き、心身は鋭く鍛え上げられ、粗暴ささえ垣間見えるようになった。その彼の表情と言動の変化は、ヨナをさらったマモノ達の王・魔王に対しての激しい憎悪に所以する。仲間達には生来の優しさを見せるが、さらわれたヨナと、魔王への憎悪に囚われ、その他の事柄にまで気が回らないことも多い。自身の気持ちにも鈍感で、旅路のなかで出会うカイネに少しずつ心を惹かれていくものの、その自覚はない。また、同じく仲間となったエミールから寄せられる「愛にも似た感情」にも、まったく気づかない。彼の頭の中にあるのは、ただヨナを奪還することのみ。しかし、その足跡を辿った先には、彼を打ちのめすような「現実」が待っている……。

Personal Data

性別	男性
年齢	16歳（物語前半）／21歳（物語後半）
血液型	A型
身長	157cm（物語前半）／183cm（物語後半）
髪の色	白に近い銀色
瞳の色	やや灰色を帯びた青色





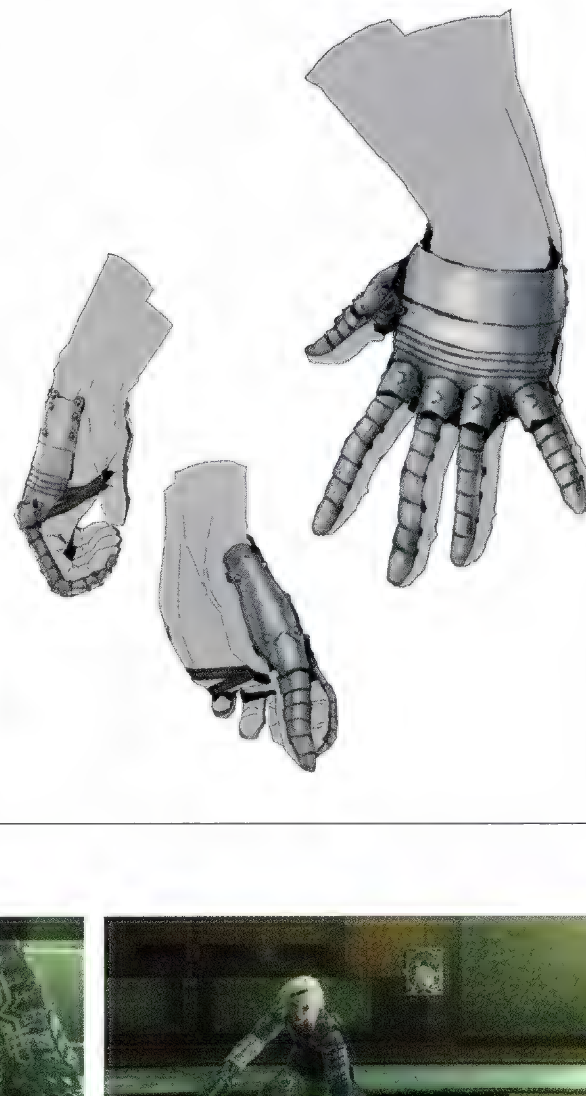




NieR [ニーア・青年期]

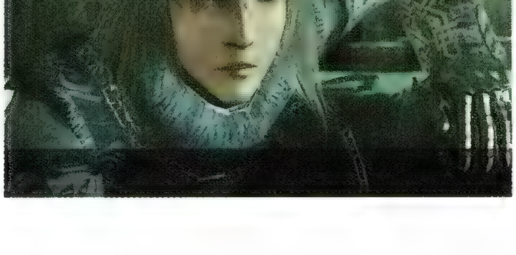


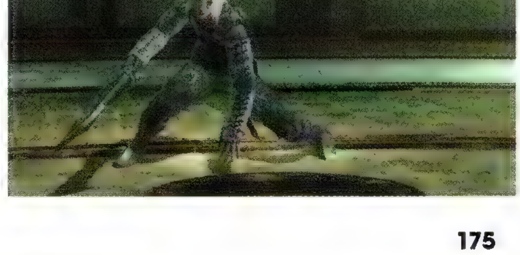














[ニーア]

NieR

『ニーア ゲシュタルト』の主人公



正義感と優しさと強さを兼ね備えた立派な大人。鍛え上げられた強靭な肉体と、それに見合ったタフな精神力で数々の困難に立ち向かっていく。しかし妻に先立たれて以来、男手ひとつで大切に育ててきたたった一人の娘・ヨナのこととなると、ちょっとしたことでも過剰に心配してしまう。よく言えば子煩悩であり、悪く言えば重度の過保護とも言える。特にヨナが黒文病を発症してからは、病気の治療法を探る為にマモノの脅威すら意に介さず、ただひたすらに突き進む。魔王の襲撃を受け、ヨナがさらわれてしまってからはそれがさらにエスカレートするが、周囲の人への優しさは忘れない。そんな彼に、村の人々は変わらず優しく接してくれている。ヨナが作る決して上手とは言えない料理を食べる、そんな平和な日々を取り戻せるまで彼が止まることはない。

Personal Data

性別	男性
年齢	39歳(物語前半)／44歳(物語後半)
血液型	A型
身長	185cm
髪の色	白に近い銀色
瞳の色	やや灰色を帯びた青色





Grimoire Weiss

[白の書] 声：ピーター（レプリカント）



Personal Data

性別	男性(?)
年	不明
サイズ	縦30cm× 横23cm ×厚さ7cm

この世に存在する13冊の「封印の書」の1冊であり、黒の書と対をなす存在。ゲシュタルト計画の鍵を握る存在として作られた書物であり、「封印されし言葉」を手に入れ黒の書と融合することで、強大な力を発揮できるようプログラムされている。世界の知識に造詣が深く、人語を解するが、それはこの白の書という容器に、人間のゲシュタルトが組み込まれているため。また、ボディには高度な魔法コーティングが施されており、多少水に濡れたくらいではびくともしない頑強さを誇る。

白の書は石の神殿で封印されていたところをニーアに突然叩き起こされ、以降「シロ」という愛称で呼ばれ、共に旅をするようになる。長年に渡る封印の影響か、記憶の一部を失くしているが、世界の全てを知り尽くしたかのような博識さは健在。おかげでニーアも強力な魔法を操ることができるようになる。ある時はまるで親のような立場からニーアを叱り、ある時は親友のようにニーア達と笑う。やがて彼らは戦いを通じて少しずつ絆を深め、かけがえのない相棒同士となっていくのである。記憶を失っていなければ、ゲシュタルトとレプリカントの融合を押し進める魔王やデボルとポポル、一体化を望む黒の書達の意思を無視し、ニーア達レプリカント側へつくようなことはなかったのだろう。

[ヨナ・幼少期]



[ヨナ・少女期]



[ヨナ] 声：野中藍（レプリカント）

Yonah



ニーアの唯一の肉親。兄（父）を大切に想い、役に立とうとする健気な少女だが、生まれつき身体が弱く、世界に蔓延した奇病・黒文病に侵されてしまう。体調を崩して熱を出すことは日常茶飯事で、多くの時間を家のベッドで過ごし、たまに外に出たとしても行動範囲は村の中のみ。その為、同年代の友人は少ない。だがヨナと接した多くの人はその可愛らしい容姿と健気さに、知らず知らずのうちに惹きつけられてしまう。ヨナ自身は幼いながらも、自分の病弱さがニーアの足を引っ張っていることを察している。その為、少しでも役に立とうとして張り切るものの、逆に空回りしてニーアを困らせてしまうことが多い。

■ゲシュタルト・ヨナ……ヨナのゲシュタルト。かつて黒の書に触れてしまいゲシュタルト化してしまった。崩壊体に変貌しかけたまま保管されている為、そのデータを元に生み出されるレプリカント・ヨナは必ず黒文病を発症してしまう。やがてゲシュタルト化したヨナの崩壊体化を止められないことに気づいた魔王は、いち早くゲシュタルト・ヨナをレプリカントのヨナに戻すことを画策し、レプリカント・ヨナをさらう暴挙に出る。ゲシュタルト・ヨナはレプリカント・ヨナと同様に兄を大切に想う心優しい少女だった。自分はどうあっても助からないことを察し、残された短い時間の使い道を自ら決断する。

Personal Data

性別	女性
年齢	7歳（物語前半）／12歳（物語後半）
血液型	O型
身長	132cm（物語前半）／160cm（物語後半）
髪の色	金色がかった銀色
瞳の色	やや青みがかった灰色









[カイネ] 声：田中敦子（レプリカント）

Kaine



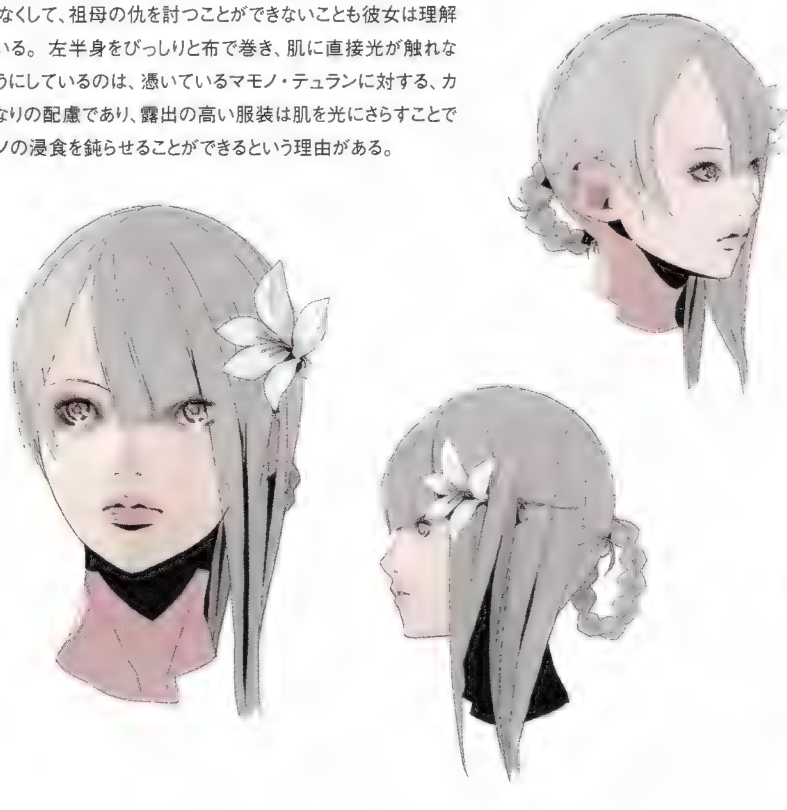
崖の村出身の戦士。美しい顔立ちで、グラマラスかつしなやかな肉体の持ち主である。ゆえに一見すると女性のように見えるが、実は両性具有であり、その為幼い頃から迫害に遭ってきた。

その美しい見た目に反し、大ざっぱで大喰らいであり口も態度も粗暴で乱暴。それらはすべて、自分を唯一受け入れ、女性として扱ってくれた祖母・カーリーの影響によるものだ。カイネが敬愛するカーリーは、かつて眼前でマモノに踏みつぶされて惨殺され、カイネ自身も瀕死の重傷を負わされた。その際、マモノのテュランに半身を奪われたことでカイネは「マモノ憑き」となり、人間離れした戦闘力と魔法を操る力、そしてマモノの声を聞く力を手に入れた。以来、さらなる迫害を受けることとなったが、その力を利用してでも祖母・カーリーの復讐を果たすことだけを生き甲斐としてきた。他人からは侮蔑と嫌悪の目で見られ、カイネ自身も忌々しく感じるマモノ憑きの肉体。しかし、この異形の力なくして、祖母の仇を討つことができないことも彼女は理解している。左半身をびっしりと布で巻き、肌に直接光が触れないようにしているのは、憑いているマモノ・テュランに対する、カイネなりの配慮であり、露出の高い服装は肌を光にさらすことでマモノの浸食を鈍らせせることができるという理由がある。

■ **オリジナル・カイネ**……オリジナル・カイネも祖母・カーリーと共に暮らしていた。「軍人華族」と呼ばれる上流階級で不自由なく育てられ、普段はシロという名の野良犬を飼う心優しい女の子だった。しかし、両親はいない。彼女はエリート軍人である祖父母が、自分達の遺伝子にレギオンの攻撃特性のパターンを組み込んで生み出した「プログラムド・ベイビー」だったのである。肉体には遺伝的改造が施されて強化されていたが、その力は封印されていた。ところが、自宅がレッドアイに急襲され、祖父母が殺された際に封印が解け、あらゆる兵器をもろともしなかったレッドアイを、素手だけで葬り去った。

Personal Data

性別	両性具有
年齢	17歳
血液型	B型
身長	172cm
髪の色	青みがかった白銀色
瞳の色	沈んだ紫色





Tyrann

[テュラン] 声：森久保祥太郎

Personal Data

性別	男性
年齢	不明
血液型	不明
身長	不明
髪の色	不明
瞳の色	不明



憎しみや争い、暴力を好む、カイネの身体に同居するマモノ。多くのトラウマから来る感情が複雑に渦巻いているカイネの心の中は、彼にとって居心地がいいらしい。カイネの弱さにつけ込み、テュランはいつか肉体を乗っ取ろうと画策している。カイネも気付いてはいるが、自身の復讐には「マモノの力」が必要不可欠な為、つかず離れず、抜き差しならない関係性を保っている。

■ **オリジナル・テュラン**……本名・由良正義（ゆらまさよし）。陸上自衛隊にて特殊生物対策課課長と、新宿方面防衛中隊中隊長を兼任。自衛隊内部でクーデター部隊・竜の会を組織し、率いていた。彼は明晰な頭脳と巧みな処世術で若くして高いポジションを任されていたが、弱い者に対する粗暴な行為で部下や同僚からの評価は最悪の状態だったという。ある日、レッドアイが暴走する事件が勃発。それを止められずに部下を置いて逃亡し、警察から指名手配されたのちにテュランに改名。またゲシュタルト化にも成功する。ただし生身の肉体は犯罪者として処分された為、戻るべき身体を失う。1000年を経て復活した後はゲシュタルトのまま他人のレプリカントを乗っ取る違法行為を繰り返す事となる。





[エミール] 声：門脇舞以（レプリカント）

Emil

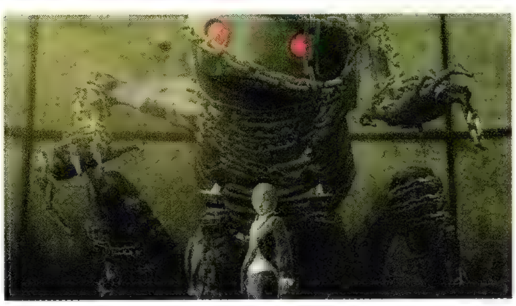
南平原の洋館にて、執事のセバスチャンに守られながら暮らしている美少年。優しく穏やかな心の持ち主で、人懐っこく、本来はおしゃべり好き。しかし、彼はレギオン（白塩化症候群によって凶暴性と残虐性を増した元・人間）への対抗兵器を作り上げる「スノウホワイト計画」において、人体実験により生まれた７番目の素体である。すでに６番目の「実験兵器６号」は最強の力を有しており、エミールにはその抑止力として６号をも石化させられる「石の目」が授けられた。しかし、彼はその強大な力を制御できず、見たもの全てを石化してしまう。それを食い止める為に、自らの瞳を目隠しによって封じ、常に目を閉じて生活するようになったのだった。エミールはそんな特異能力を持つ自分を卑下していたが、何のためらいもなく受け容れてくれたニーアとカイネには、無条件の信頼を寄せている。やがてエミールは実験兵器６号と同化を果たす。より強大な魔力と石化能力を制御する術、そして頭だけになっても生きていけるほどの強靭な生命力を手に入れるものの、外見は６号と同様の、「醜い髑髏のような姿」へと変貌してしまう（→ P.184）。その姿にどうしようもない引け目を感じながらも、エミールは仲間に支えられて持ち前の明るさを取り戻し、旅の仲間のムード一メーカー的存在となる。

ちなみに実験兵器６号の原形となっているのは、エミールによく似た風貌を持つ可憐な美少女・ハルア。エミールの実の姉である。ハルアは肉体を改造されて、兵器となった後にも人の心が残っていた。その為暴走してしまったが、最後はエミールの願いを察し、彼に自らの力を託して消滅したのだった。



Personal Data

性別	男性
年齢	不明
血液型	O型
身長	145cm（人間の姿） 132cm（実験兵器7号の姿）
髪の色	金色
瞳の色	薄い紫色



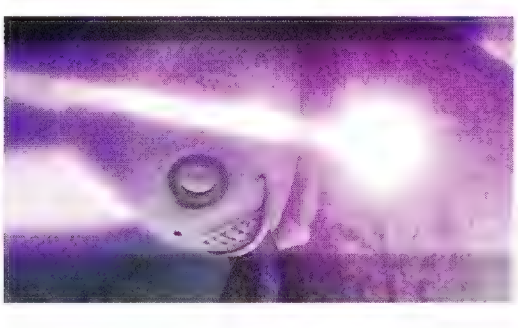






Emil [エミール・実験兵器6号と同化したあとの姿]










[ポポル]
[デボル]



[デボル&ポポル]

声：白石涼子（レプリカント）

Debol&Popol



ニーアが暮らす村の中心的な存在の双子。デボルは溌剌とした活発な性格で、いわば村の事情通。歌と弦楽器をこよなく愛し、よく酒場や噴水で歌っている姿が見られる。村の人々にとっては気軽に愚痴をこぼしたり、悩みを打ち明けたりすることができる相手だ。一方のポポルは、村の図書館の館長を務めており、物静かで温和な女性。村長的な役割も担っており、言葉も丁寧で優しいが、どこか芯の強さを感じさせる。二人とも、留守がちなニーアの代わりにヨナの面倒をよく見てくれている為、ヨナも彼女達によく懐いている。

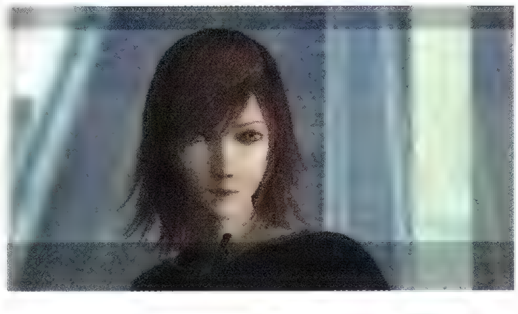
しかしその姿は本当の彼女達ではなかった。彼女達は「関東地区C担当監視者αデボル」と、「関東地区C担当監視者βポポル」と呼ばれる存在。いつの日かゲシュタルトがレプリカントに戻る際のサポートをする為に作られたアンドロイドである。彼女らはゲシュタルトの魂からデータを抽出し、新たにレプリカントの肉体を生成したり、逆に死したレプリカントのデータをゲシュタルトへ還元する役割も担っていた。また、近隣の街や村に生まれる赤ん坊もふたりが取り上げて、死んだ者もまた二人が弔うことで、これまで1000年以上もの間レプリカントを管理してきたのである。しかし、魔王の暴走をきっかけに、ゲシュタルトをレプリカントへと強制的に戻す「黒の計画」を急ぎ実行に移すことを決断。これは、1300年前に世界浄化機関によって、あらかじめ彼女達にプログラムされていた方針である。

彼女達はアンドロイドゆえに感情を持たないが、それは本来レプリカントも同じだった。しかし、長い月日のなかでレプリカント達にはなぜか、人間と同じような感情が芽生え、少しずつ人間らしい生活を営むようになっていった。そんなレプリカント達を見守るうちに、いつしか彼女達にも無自覚のうちに羨望という感情が芽生え、少しずつ人間らしさが備わり始めていたのである。

Personal Data

性別	共に女性
年齢	共に24歳（外見）
血液型	共にA型
身長	共に160cm
髪の色	共に赤みがかった栗色
瞳の色	共に水色がかった灰色





Masked King

[仮面の王]
声：綾里まる（物語前半）／重松洋佑（物語後半）



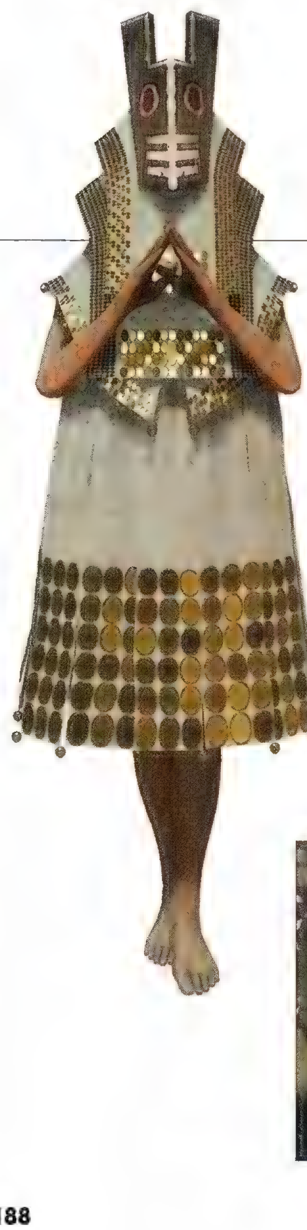
Personal Data

性別	男性
年齢	10歳(物語前半)／15歳(物語後半)
血液型	A型
身長	130cm(物語前半)／175cm(物語後半)
髪の色	赤みがかった銀色
瞳の色	水色がかった灰色

辺境の砂漠に住み、掟を遵守する「仮面の人」と呼ばれる民族を統べる若き王で、本名をゼクス(Sechs)という。十万以上にもおよぶ「掟」に縛られた街の王でありながら、掟は自由を知る為にあると公言し、掟を破る回数は誰よりも多い。彼は掟が大切な秩序でありながらも、束縛され過ぎては先へと進めないことを本能的に理解している。周りも頭を抱えるほど奔放な性格の持ち主だが、国の先行きや民の生活のことは誰よりも真剣に考えており、民からも王としての尊敬を得ている。

彼らの仮面は、職業ごとに着ける種類が異なる。とくに神聖とされるのは、王位継承の証となる「王の仮面」。それを手に入れる為には王族のみ立ち入りが許された砂の神殿で試練を乗り越えなければならない。そんなある日、ゼクスは先代が黒文病で命を落としたことで失墜した「国家としての信頼」をいち早く回復させる為、砂の神殿へと乗り込んだ。そこで苦戦していたところ、彼を助けに来たニーア達と出逢い、固い友情で結ばれる。王の仮面を手に入れたゼクスは、内外から一目置かれる存在となり、国の信頼を取り戻した。やがてゼクスは、幼なじみであるフィーアと結婚することになるが、その結婚式の最中に襲来した狼によって彼女は命を落としてしまう。ゼクスはニーア達と共に狼の群れを襲撃し、見事フィーアの仇を討つ。ゼクスは身体を張って協力してくれたニーア達から受けた恩義は忘れなかった。魔王の城に乗り込み窮地に陥ったニーア達を助ける為、手勢を引き連れ駆けつけ共に戦うが……。



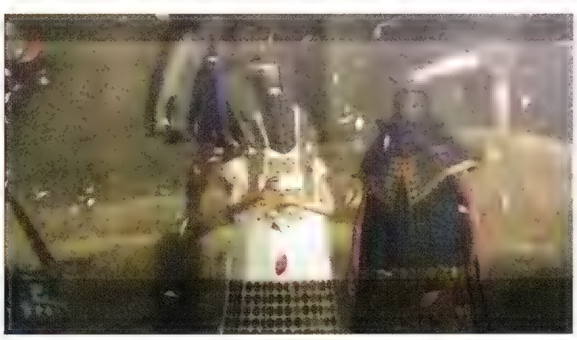


Fyra

[フィーア] 声：綾里まる

Personal Data

性別	女性
年齢	10歳(物語前半)／15歳(物語後半)
血液型	A型
身長	135cm(物語前半)／164cm(物語後半)
髪の色	不明(仮面で見えない)
瞳の色	不明(仮面で見えない)



裕福な生地問屋の娘。両親は人に頭を下げられ慣れており、プライドの高い生粋の商人だったが、娘のフィーアは優しく朗らかに育った。物心つく前に火傷をしたせいで、素顔の右半分はところどころ膿が滲んだ赤褐色の瘤の塊に覆われている。そんな酷いケロイドも本人は受け入れるべき自分の一部だと感じているが、彼女の両親は、客に娘のことで同情され、気を遣われることを厭い「商売に障りが出る」と、彼女の外出を禁止した。更にフィーアが8歳の誕生日を迎えた晩、両親はついに仮面の街に奉公に出ることを強要し、彼女は「仮面の人」となった。

ところが「仮面の街」では他の街から来たフィーアは戸籍を持たない異邦人の為、「言葉を発してはならない」という掟が課せられ、彼女は身振り手振りで会話をするようになる。街を訪れたニーアが人々とコミュニケーションを取れずに困っていると、元は同じ余所者であり、事態を察したフィーアが、進んでニーアの手助けをした。また幼い頃、狼に襲われていたところをカイネに助けられた過去があり、彼女を恩人として尊敬している。仮面の王・ゼクスはフィーアを「最初の友達」と呼び、彼女はそんなゼクスに一途な想いを寄せていたが、15歳の頃にその想いが結実。仮面の王との結婚が決まったフィーアには幸せな未来が待っているように思えたが、式の最中に突如として狼に急襲され、王の命を守る為身を挺して庇う。王に「幸せだった」と言葉を残して彼女は若い命を散らしたのだった。

Shadowlord

[魔王]

Personal Data

性別	男性(?)
年齢	不明
血液型	不明
身長	不明
髪の色	不明
瞳の色	不明

かつては伝説上のものとされていた、マモノ達を統べる絶対的な存在であり、その正体はゲシュタルト化したオリジナルのニーアである。かつてヨナを守る為、ニーアは自ら進んでゲシュタルト化する道を選び、多くの実験体の中で初めて自我を保ったままのゲシュタルト化に成功した。その事実を知ったゲシュタルト計画の推進委員会である世界浄化機関は、安定個体である彼を「オリジナル・ゲシュタルト」に認定。「1000年間、肉体を凍結させることで世界から病が消え、ヨナの崩壊体化は止められる」と説明し、ヨナを無料でコールドスリープする交換条件として、ニーアの持つ魔素の提供を要求した(この魔素により、ニーア以外の人間でも自我を持ったままゲシュタルト化できるようになり、崩壊体への変貌を抑制することが可能になる)。しかし、1000年が過ぎても病は消えず、また崩壊体化を止める術も見つからない。更にレプリカントに意思が芽生えていることに気付いた彼は、ヨナの復活が見込めないことを悟り激怒。レプリカントのヨナの肉体に、ゲシュタルトのヨナの魂を戻し、崩壊体化を止める実力行使に出る。

魔王の背中には翼らしきものが生えていて、空を飛ぶことができる。また、黒の書を携えて絶大な魔力でニーア達を全滅寸前に追いやり、ヨナを救う為にレプリカントのヨナを連れ去ってしまうが、唯一の肉親であるヨナを溺愛していることはレプリカントのニーアと何ら変わらないのである。







Grimoire Noir

[黒の書]
声：立木文彦（レプリカント）



Personal Data

性別	男性(?)
年齢	不明
サイズ	縦30cm×横23cm×厚さ7cm

この世に存在する13冊の「封印の書」のうちの1冊で、白の書と対をなす「ゲシュタルト計画の鍵」として生み出された存在。白の書と同様に、人間のゲシュタルトが黒の書という器に組み込まれており、書物でありながら人語を解すことができる。マモノ達のリーダー的存在である魔王(ゲシュタルト・ニーア)と契約しており、魔王の意志に忠実。魔王が強大な魔力を振るう手助けをする。彼らの目的は、ゲシュタルト達の魂をレプリカントへと戻す為に、白の書との融合を果たすこと。それは、本来あるべき姿の世界を取り戻す為である。

黒の書は、白の書以上に傲慢で自信過剰な性格の持ち主。自身と対等以上の存在は魔王だけであり、白の書のことも他と同様に当然ながら格下扱いし、「計画の起動スイッチ」としてしか見ていない。更には裏切るなど想像すらしていなかった。



Story Line
ストーリーライン

『ニーア レプリカント（ニーア ゲシュタルト）』の物語は、章立てによる区分けのないシームレスな展開。本書では他の2作品に習い、独自の章に分けてその物語を紹介していく（2周目以降の内容を含む）。なお、ゲームの1周目では必ずAエンディングへ、2周目では必ずBエンディングへたどり着く。残りのC、Dふたつのエンディングを見るには、3周目以降に武器を30種類以上持った状態で魔王倒すことが条件。この時、暴走したカイネを倒したあとに選んだ選択肢により、CかDのいずれかのエンディングが見られるという流れとなっている。

序

西暦2003年6月12日。
その日、空から赤い竜が落ちてきた。
竜と共にもたらされたのは、不治の病「白塩化症候群」。

それは、人類終焉を呼び寄せる最悪の病。
それは、壊れる世界で紡がれる物語。
それは、残された兄妹が語る、
最後の希望。

少年の妹は病に侵されていた。残されたたった一人の家族。崩壊した世界で絶対に守らなくてはいけない存在。だが貧しい兄妹には頼るべき両親も守ってくれる大人達もいない。異形の黒いバケモノ達によって占拠された街で兄妹が逃げ落ちたのは、廃墟となったビル群の狭間。かつて人々が栄華と快楽を極めていた、その場所の名は新宿——封鎖された街。

東京に塩の雪が降り始めたのは、いつの頃からだったろうか。
かつて「夏」と呼ばれた季節。しかし現在（いま）では、防寒具なしではいられないほどの冷気が街を支配している。白く染まった光景の中、それと対比するかのように真っ黒い影が——ざわめきと共に蠢動する。
兄妹が逃げ込んだのはスーパーマーケット。しかしそこは略奪と破壊によって生き延びるには適さない場所だった。兄は深く息をつく。妹の咳は止まらず、むしろ酷さを増しているようだった。
黒い影が兄妹の聖域に侵入してくる。少年はか細い腕に鉄パイプを握りしめて必死で戦う。何度も、何度も、何度も、何度も殴りつける。だがその程度の攻撃で怯む相手ではない。黒い影は尽きる事なく、大切な妹の居場所に近づきつつある。少年は呪った。世界の残酷さを。そして、自らの力の無さを。

「チカラをやろう」

その声が届いた時、少年は地に伏していた。霞む視界の片隅にはあの「本」が転がっている。少年は知っていた。それは禁断の黒い書物。チカラを手に入れれば呪われた運命が待っている。

「おまえの魂と引き換えに」

震える身体を引きずりながら顔を上げる。寒い。だが、動かなくてはいけない。妹を……ヨナを助ける為。この世界でたった一つの希望を失わない為。

魂などくれてやる。
呪われた運命を飲み込んでやる。
チカラ……ただ、妹を助けるチカラさえあれば。

その純粋な衝動が「本」に触れると、まばゆいばかりの光が本から溢れ出した。

爆発するような閃光が黒い影を吹き飛ばす。湧き上がる暴力的な感情のまま黒く光る矢を射込み、槍を放ち、魔導の腕を振りかざす。少年の得た力は圧倒的なものであり、巨大な影の化け物をも霧散させることに成功した。
だが、少年は知っていた。この本が、このチカラが何をもたらすかを。妹を護ってやれる時間が残り少ない事を。それは昏い希望だった。

＊＊＊

兄が戻るのを、妹は建物の奥で待っていた。見つけたクッキーを半分ずつ、兄と分けて食べることを楽しみにしていた。
カラン、と甲高い金属音がして、クッキーの詰まった缶が床に転がった。続いて、小さな身体が体勢を保てずに崩れた。その首筋にまで、黒い文様が這い登っている。それは影の化け物と同じ、黒い霧。

「クッキー……落とし……ちゃった……ごめんね」

なぜ？
少年は困惑した。なぜ妹が——ヨナに黒い病気が！？

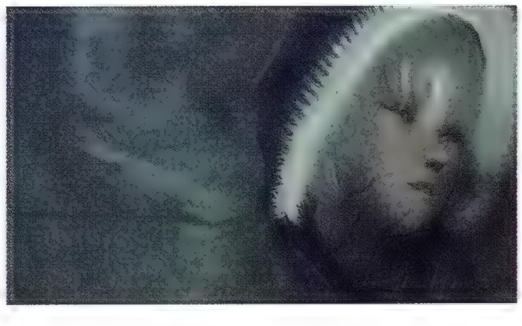
さまよわせた視線の先に、あの真っ黒い本が映った。そうだ。施設に行ったのは自分だけではない。当然、妹にも渡されていた。——「黒の書」が。

「ヨナ、いっつも助けてもらって……ばっかりだった……から」

＊＊＊

今日も、新宿に塩の雪が降り注ぐ。
過去と未来をつなぐ絶望のように、
いつ果てることも知らず、ただ、時を奏でる。





プロローグ　と在る贄 [Nie R]

イニシエ ノウタ

1412年後。
村外れの古びた家に住む二人の兄妹がいた。
兄の名はニーア。妹の名は……ヨナ。
二人の両親はすでに亡く、妹のヨナは病弱で、表を歩くことさえままならない。世界は謎の奇病と、黒い「マモノ」に脅かされつつあり、文明レベルは中世ヨーロッパ程度まで後退していた。人々の暮らしを支えるのは簡単な狩猟や農業だったが、兄妹が二人で生きていくのはそう容易な事ではない。稼ぎは兄のニーアが村の人の手伝いをして得る駄賃。生活に余裕はなく、ただ食べていくだけで精一杯の毎日であったが、お互いの存在があるだけで兄妹は幸せだった。この幸せがいつまでも続けばいい。そう、思っていた。

ある日、村の長的存在である図書館の館長・ポポルから、村に伝わる一つの寓話をニーアは聞かされる。「月の涙」という貴重な花を手に入れることができたら、お金持ちになれる。そんな夢のような物語だった。寂しがる妹・ヨナにみやげ話として持ち帰って聞かせた。これでヨナの気が紛れればいい。その程度の気持ちだった。
翌日、ヨナが家からいなくなってしまう。必死で村の中を探すが発見する事が出来ない。「月の涙」の伝説を信じたヨナが自らそれを探しに出てしまったのだ。自分の病気を治す為、少しでも兄を助ける為に。行き先は「石の神殿」。ニーアは武器を携え、ヨナが迷い込んだその迷宮へと向かう。

＊＊＊

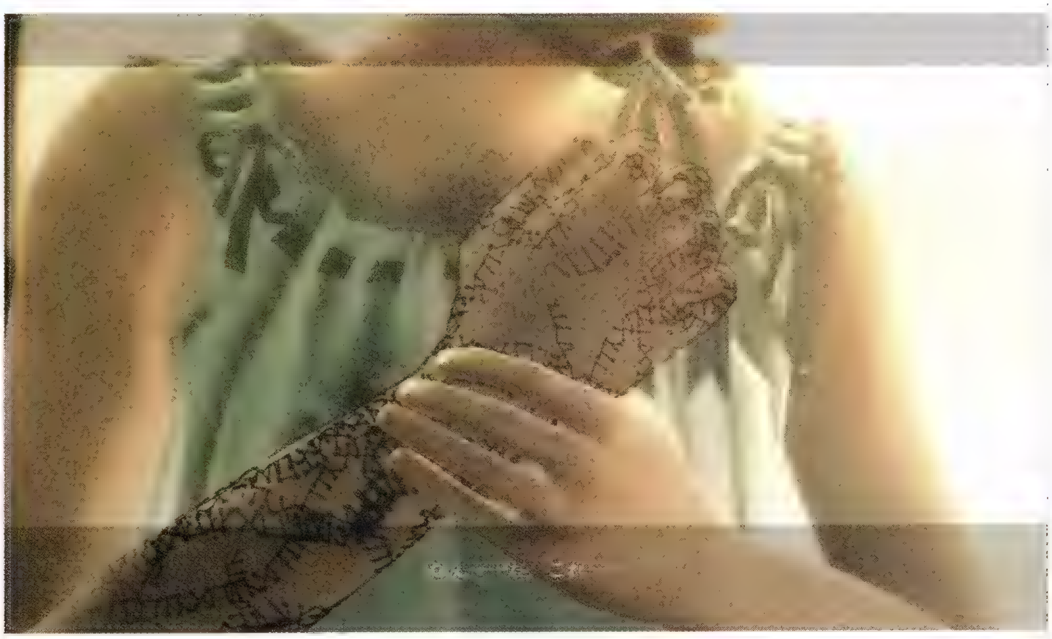
石の神殿にはマモノが群れをなして巣食っていた。必死でヨナを探し続けたニーアは、とうとう最上階まで辿り着き、奥の祭壇に横たわるヨナを発見する。しかし祭壇への道は光る壁に封じられ、1本角と2本角の石像2体が掲げる槍で塞がれていた。槍の先には、白い面のついた怪しげな本がある。これが封印の鍵になっているのだろうか？
「邪魔だっ！ くそっ！」
仮面に剣を叩き付ける。神殿を振るわせるほどの衝撃が響き渡ったかと思うと、怪しげな本がニーアに向けて喋り始めた。
「なぜ古代の叡智に助けを求めぬのだ？」
聞けば遠い昔より封印されていた「深淵なる」書物らしい。ヨナを助けたい一心で、ニーアはその尊大過ぎる物言いを気にする事もなく、新しいチカラに手を伸ばす。「白の書」と名乗るその本が与えるのは、黒い凶悪なチカラ。マモノを粉砕する為の武器だった。目の前に立ちはだかるマモノと神殿を護る石像達を破壊するニーア。必死の戦闘の末、石像を破壊。ようやく神殿から脱出したニーアはヨナを抱きしめて安堵の息をもらした、その時だった。ヨナの手に黒い文様が現れたのは。

不治の奇病、「黒文病」であった。

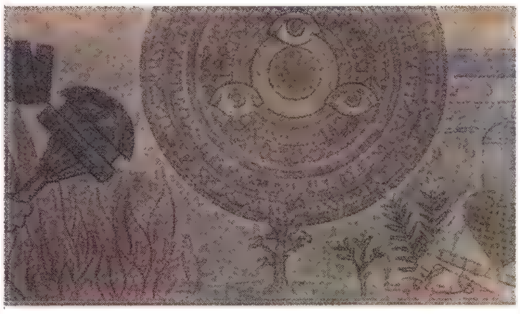








第一章 イニシエの歌 [イニシエ ノ ウタ]



マモノト
マモノツキト

ヨナを蝕む黒文病。罹った者全てが死に至るという恐ろしい病。度重なる試練に苦悩するニーアを力づけたのは村の噴水前で、いつものように歌うデボルの姿だった。
「我は偉大なる『白の書』であるぞ」
「へえ！『白の書』って喋るんだな！」
ニーアの傍でふわふわと浮く白の書を見て、デボルは興味深そうに語りかける。彼女が歌う「イニシエの歌」という歌の歌詞に白の書が登場するというのだ。図書館に勤めるポポルに話を聞くと、興味深い言い伝えを教えてくれた。
“『黒の書』が世界に災厄をもたらした時、『白の書』が現れ、『封印されし言葉』で、黒の書を降し、災厄を消し去る”
この物語が本当だとしたら。石の神殿で出会った白の書が本当に伝説の書物だったら……封印されし言葉を集めさえすれば、黒い病も打ち払えるかもしれない。最初の「封印されし言葉」を石の神殿のマモノが持っていたように、強大なマモノを狩っていけばいつかは全ての言葉が……。ニーアは決意する。
マモノを、殺す。
そして「封印されし言葉」を集める。それ以外の選択肢はなかった。ニーアは白の書に感謝する。
「シロって、ただの口うるさい本じゃなかったんだね」
「無礼なヤツめ！　今後は丁重に扱うがよい」
二人の明るい会話を嗤うように、空には薄暗く雲が広がっていった。

＊＊＊

崖の村。
細く長い洞穴を潜り抜けた先にあるそこは、陰鬱としか言いようのない場所であった。崖に張りつくように設置された無数のタンクを住居とし、その間を結ぶ足場によって移動する奇妙な村。いや、村というよりそれはまるで鳥の巣のようだ。
ポポルに紹介されてこの村を訪れたニーアは、途方に暮れていた。ここの村人はマモノを恐れるあまり、家に閉じこもったまま一歩も出てこない。面会はおろか会話すら拒絶され、為す術も無く帰路につくニーア。だが、村のはずれにさしかかった時、奇妙な場所がある事に気づく。そこは家と呼ぶには粗末すぎるガラクタと布で作られた住居だった。その住居の中に飾ってある不思議な花にニーアは見とれる。
「その花に、触るなっ！」
鋭い声がニーアを襲う。振り返ると、双眸に怒りをたたえた女が睨みつけている。強い意思を感じさせる眼。ヨナのような柔らかな可憐さはないが、美しい顔立ち。歳はニーアよりは上であろうと思われた。そして……。
「わわわっ、あの女の人、下着しかつけてないよ!!」
「たわけが！　もっと他に見るべき場所があろう！」
女はその肢体を見せつけるかのように、肌もあらわな姿をしていたのだった。が、白の書の言葉どおり、もっと大きな異相にニーアも気づいた。左腕に巻きつけられた包帯の下でゆらめく、黒い影。
それは「マモノ」の証であった。

＊＊＊

マモノは倒すべき相手だ。
ならばマモノが「憑いた」人間は？
その問いの答えが得られぬまま、ニーアは女と激しい戦闘に陥る。必死で応戦するニーアだったが、白の書は女の剣筋にどこか迷いがある事を感じていた。
突如、二人の頭上に巨大なマモノが現れる。それは視界を埋め尽くすほどの、ニーアが眼にしてきた中で間違いなく最大の化け物であった。トカゲとも魚ともつかぬ、禍々しい巨躯を一瞥した「下着女」は、次の瞬間すべての集中力をそのマモノへ向ける。
彼女の目にはもはやニーアは映っていない。
巨大なマモノを見据えたその目の奥には、憎悪と復讐の炎が荒れ狂っていた。人間の能力を超えた凄まじいチカラでマモノと対等に戦う女。ニーアが加勢しようとしても「邪魔だ」と蹴り飛ばされる有様だった。

激しい戦闘もやがて終わりを迎える。
傷ついた女が光の魔法を放ち、マモノの左目を貫いたのだ。醜い悲鳴と真っ赤な血を噴き出しながら崖の上へ退散していくマモノ。残されたのは、疲労困憊のニーアと、意識を失い地に伏せた「下着女」だった。

＊＊＊

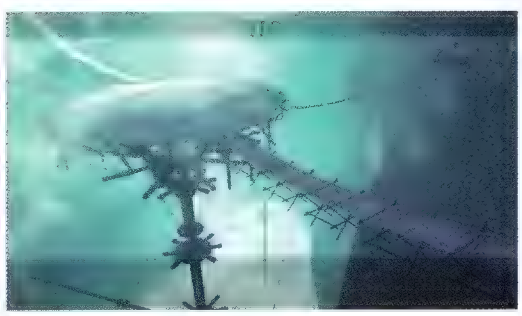
「『マモノ憑き』というやつらしい」
白の書がニーアに下着女の正体を伝える。マモノに身体を侵蝕されたものの、まだヒトとしての自我を保っている人間の事をそう呼ぶらしい。
ニーアは女をベッドに寝かせ、できるかぎりの介抱をした。ほどなくして目覚めた彼女から礼の言葉はなかったが、白の書のうながしによって、ニーアはようやくその名を知る。

カイネ。
先の村で、戸口越しに人々が恐々と囁いていた名。村から追放された、忌み子。

「私に関わっても、ロクなことがない。帰れ！」

崖の村を去るニーアを苦い感情が支配する。
「マモノ」とは狩り尽くし、倒し尽くすべき敵。カイネと出会うまでは、ただそれだけのことを考えていればよかったのだが……。
世界はニーアが考えていたよりもずっと、複雑であった。





第二章　マモノと、マモノ憑きと ［マモノトマモノツキト］



白の書は言う。崖の村で遭遇した巨大なマモノから、「封印されし言葉」の気配を感じたと。

しかし、今の自分の力と武器では太刀打ちできない。そう考えたニーアは、ポポルに相談し「ロボット山」へと向かう。

＊＊＊

北平原の北東にある鉄橋、その先にある「ロボット山」は鉄骨と機械によって形作られた旧世界の文明の名残であった。今回の目的地はその山の麓にある武器屋である。

店に入ると番をしている兄弟が迎えてくれた。彼等は長らく山から戻ってきていない母親を心配しており、まだ幼い弟は、母親を捜しにいくといって聞かない様子。それ見て、ニーアは母親捜しを手伝う事を提案する。

錆びた鉄と油のにおいで満ちた廃工場の中は、マモノと、防衛用ロボットで溢れる危険な場所であった。

「お前は本当に信じておるのか？　あやつらの母親が本当にこんなところまで来られた、と」

ニーアは無言で進み続ける。約束したのだ。彼等の母親を、捜すと。やがて辿り着いたのは山の最深部。防衛システムとの激しい戦いに勝利し「封印されし言葉」とバラの香りの香水を手に入れる。それは……兄弟を捨てて男と駆け落ちしようとした母親の遺品だった。

武器屋の店で香水を渡された兄は、震える声でニーアに礼を言う。

「僕は兄なんです…弟の前では絶対に泣けません…」

＊＊＊

ヨナの病状は日増しに悪化していく。少しでも痛みを和らげようと「薬魚（くすりうお）」を求めて海岸の街へ向かったニーアは、灯台守の老婆と出会う。彼女は50年もの間、海の向こうにいる恋人の帰りを待ち続けていた。だが、その裏に隠されていたのは優しい嘘。老婆が黒文病に侵されていることを知ったニーアは、真実を伝えるべきかどうか、迷い悩む。

ロボット山で、そして海岸の街で、運命に翻弄される人々を見たニーア。ヨナもまた、その一人に過ぎないのであろうか。

今はただ、マモノを倒し続けるしかなかった。

＊＊＊

マモノが大発生しているという話を耳にし、再び崖の村へと急ぐ。そこには……無数のマモノを相手に奮戦するカイネがいた。しかし、そんなカイネに対して、村のあちこちから聞こえてくる姿なき声は、カイネが呪われたマモノ憑きであること、おぞましく、忌まわしい娘であることへの醜い陰口ばかりであった。

そして現れたのは、あの巨大なマモノ。

カイネはその巨躯に怨嗟の声を吐き続ける。

祖母を殺した、化け物への怨嗟の叫びを。

憎悪の刃がマモノを圧倒すると、マモノから思いもよらぬ声が発せられる。

「おおきくなったねぇ」

その声に、カイネは目を見開く。

「ひさしぶりだねぇ。カイネに会えて、おばあちゃんは嬉しいよ」

それは甘くやさしい、おばあちゃんの声。この世への未練を断とうとする、マモノの誘惑。

カイネは、震えた心を今一度研ぎ澄ます。祖母の仇を討つ為に生きてきた彼女にとって、そんな言葉はまやかしでしかなかった。最後の足掻きを看破されたマモノは、ニーアとカイネの激しい攻撃により絶命。白の書の手に「封印されし言葉」が戻ってくる。

マモノが動きを止めた時、カイネの意識は闇の中へ沈んでいくところだった。マモノの断末魔の一撃で宙を大きく跳ばされたあと、したたかに身体を打ちつけたのだ。自分の血の臭いを感じながら、もはや疲れ果てて、生きることを諦めかけるカイネ。

一条の光が空から斬り込む。

「カイネ！　こっちだよ！」

誰かが彼女を励ましているのだ。カイネの意識は次第に浮上してゆく。目を開くと、そこに映ったのは笑顔の少年と……不細工な本だった。

「カイネ、僕達と一緒に戦ってくれる？」

「バカモノ！　単刀直入すぎるぞ！」

可笑しかった。自分の、復讐の為だけに生きてきたこの身体を、求めてくれる者がいる。これまで知らなかった生き方を、この少年は教えてくれようとしている。

「一緒に……来てくれるよね？」

その陳腐な言葉が何を意味するのか。カイネは考える事をやめた。今はただ、自分を救い上げてくれたこの温かい言葉の為にもう少しだけ生きていこう……そう思うのだった。

三

モテアソビ











四

カメンノ シレン

ニーアの村の中へカイネは足を踏み入れようとはしなかった。無理強いする事も出来ない。これまで他人に疎まれ続けてきた彼女の心情を考えれば当然の話だ。

ニーアは、ヨナの事を知ったカイネの口から「仮面の街」の王が黒文病について研究していたらしい、という話を聞く。その研究が進んでいれば、ヨナを治す手がかりになるかもしれない。ニーアは迷うことなく砂漠を越えて、仮面の街を目指すことを決めた。

＊＊＊

東の街道のさらに先。そこに、砂嵐がたえず吹く砂漠がある。

見えるものは砂と、石の遺跡、それに徘徊する狼くらいのもの。砂嵐を抜けると岩肌の間に道がある。その先にそびえる巨大な門。それが仮面の街の入り口らしい。門は閉ざされていたが、カイネの姿を見るなり門番らしき者達が騒ぎ始めた。彼らの言葉はわからなかったが、どうも歓迎しているようだ。カイネは口を濁す。

街へ入った一行は、そこが奇妙な「仮面」と幾重もの「掟」が支配する不思議な「国」である事を知る。そこでニーアは、カイネに救われたという少女・フィーアに出会う。昔、カイネはこの少女を狼から助けていた。だから、ニーア達は快く迎え入れられたのだ。

言葉を話さぬフィーアの身振り手振りに導かれ、一行は仮面の王の館へたどり着く。そこで王への謁見を求めるも、カイネの語った王は黒文病が進行して、すでにこの世の人ではなくなっていた。さらには、現在この国を治めるべき王子が行方不明になってしまったという。王子が迷い込んだのは神聖不可侵の神殿で、「掟」は仮面の街の者による救出を禁じている――。状況を理解したニーアは、迷わずこう切り出す。

「掟と無関係なよそ者だったら、どこに行こうが誰も構わないよね？」

＊＊＊

砂の神殿。

そこは「掟」に従って行動せねば、進むことも退くこともかなわない恐ろしい迷宮であった。侵入直後に「仮面の街」第93代目の王子を名乗る一人の子供と遭遇したものの、その王子は光の玉でどこかへと連れ去られ、カイネもまた「掟」の罠に捕らわれて姿が見えなくなってしまう。

七転八倒しながら神殿の最深部へ到達したニーアは、見上げるほどに巨大な、幾何学的造形のマモノと出会う。変幻自在の攻撃を前に苦戦するが、しばらく姿を消していたカイネが怒りの気勢を上げながら駆けつけたことを契機に反撃、打ち倒すことに成功した。バラバラに弾けたマモノから、1枚の仮面が転がり落ちる。それは、王の証である王の仮面。王子が求めていたもの。そしてニーア達もまた、求めている「封印されし言葉」をひとつ手に入れることができたのである。

＊＊＊

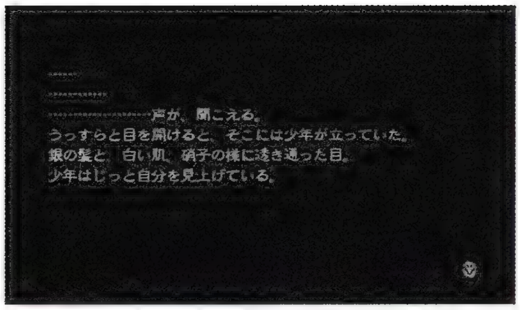
王子は言う。先代の王亡き後、幼い自分では外部との交易もままならず、食物、水、すべての物資が不足するようになってしまったと。王として証を手に入れ、国を立て直す必要があったのだと。

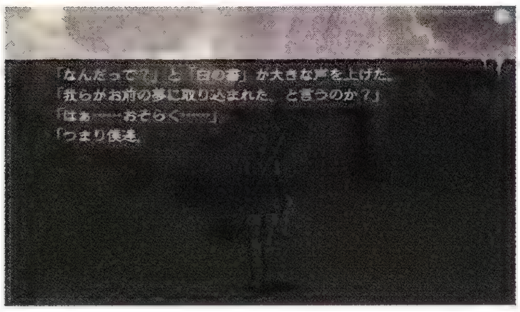
「掟は縛る為にあるんじゃない。自由を知る為に存在する」。

それは、先代の王が父として、息子に遺した言葉だった。













ニーアは奇妙な夢を見た。銀色の髪の男の子が、何ごとか語りかけてくる……。その唇は、そう、こんなふうに動いているように見えた。

ふういんされしことば、ゆめ、しんわのもり。

気がつけば、朝を迎えていた。ヨナも同じような夢を見たという。あれはいったい何を意味しているのだろうか。不思議に感じたニーアは、ポポルに相談しに図書館に向かう。

ポポルの元には、神話の森の村長から1通の手紙が届いていた。その書面には、「夢夢夢……」と奇怪な文字列が書き連ねてある。今朝の夢と、現実の手紙の奇妙な符号。もしかすると、そこには「封印されし言葉」があるのかもしれない。何かに誘われるかのように、ニーアは神話の森へ向かった。

＊＊＊

神話の森の村長の言葉によれば、「死の夢」が村に伝染していると言う。それは、言葉を入り口にして夢に迷い込む病。村長と話している間に、ニーア達もまたその言葉の渦に巻き込まれてしまう——。

——それは秘密？

——それは…日光？

——それは……人間？

意識の奥底をかき回されながら現実に戻ってきた時、村長の病もまた癒えていた。ニーアは同じようにうつろな表情の村人達を次々と「死の夢」から現実へ引き戻してゆく。

そして手に入るのは「封印されし言葉」。

何故こんなところに？

その問いに答える者は森の中には居なかった……

五

シニ イタル
コトノハ



第五章　屍に至る言の葉 [シニ イタル コトノハ]





マガツ マナコ

六

「大事なおねがいなの」と、ヨナはそう言った。
「……おともだちを　たすけてほしいの！」
　ニーアは知らなかったが、ヨナは男の子と文通していたらしい。その子もまた病気を抱えており、ヨナはそれを治す方法がないか、気にしていたのだった。自分の知らないところで、文通とはいえ妹にボーイフレンドがいたことに、ニーアは動揺を隠せない。その様子を、白の書は楽しそうにからかう。
「どうした“お兄ちゃん”。声が震えておるぞ」
「バ、バカ！　そんなことないよ……！」

＊　＊　＊

　ニーアの村と、海岸の町の間。小高い丘の上に、その洋館は建っていた。執事の男が案内した薄暗い館内は埃くさく、長い時間を経た建物であることが見て取れる。食堂へ通された後、どこかへ向かった執事は戻ってこない。探索は面倒だと言って寝転がったはずのカイネも、気づけば姿を消してしまっていた。
　何かがおかしい。
　時が止まってしまっているかのような灰色の空気の中、ニーアは館の主の部屋へと向かう。廊下の奥から流れてくるのはピアノの音色。部屋に入るとそこには……ニーアよりも幼い少年が一人でピアノを弾いていた。少年の目には包帯。近づこうとするニーアを少年は制止する。
「ぼくの目は、物を石に変えてしまうから……」
　館の主——エミールと名乗った少年の病とは、その呪われた力だった。ヨナへの手紙の事を問いただしたが、エミールは知らないという。
　エミールから館内探索の許しを得て、館の雑務を引き受ける執事を捜すことになったニーア達。訪れる部屋は人形が転がる不気味な部屋や、マモノが入り込んだ恐ろしい密室……尋常ではない探索の果てに、ニーアはとうとう執事と出会う。丁寧な口調の執事から、今回の件は自分が仕組んだことであり、ニーア達を呼び出したのは主人・エミールの目の治療方法を探す為だという話を聞く。
「皆様が名だたる勇者と伺い、主の名前で手紙を出したのですが……。頂いたお返事は何故かヨナ様からで」
　その治療法とは、館の奥の書庫にあるらしい。いずれにしてもカイネの行方も捜さねばならないニーアは、執事の頼みを聞き入れ、マモノ達の巣と化している館内を奥へ奥へと進む。同行を願い出たエミールの「石化」能力も戦いの大きな助けになった。
　目的の書庫にたどり着いたニーア達を待ち受けていたのは、真っ赤な本。白の書と同じように顔を持つ「深紅の書」だった。
　これまでにない圧倒的な魔法力に押されるニーアと白の書だったが、館内を迷っていたというカイネの加勢によって辛くも窮地を切り抜ける。
　破壊した深紅の書から「封印されし言葉」を得ると共に、書庫からは執事が探し求めていた「石化解除の方法」が記されたレポートを発見。それは暗号化されていたが、執事——セバスチャンは、どれだけ時間がかかっても解読してみせると意気込みを見せるのだった。

＊　＊　＊

　奇妙な文通相手が呼び込んだ洋館での事件は幕を閉じ、ニーアとカイネ、それに白の書は、エミールとセバスチャンに見送られて館を後にする。
　別れ際にカイネはエミールに歩み寄り、エミールの包帯の上から、その眼にやさしく触れた。
「エミール、覚えておけ。これは、罪ではない。これ自体に、罪はない。大事な、おまえ自身だ。けっして忘れるな」
　エミールはカイネの半身がマモノである事を知り、その苦悩に触れる。カイネがニーアの光に救われて生きる意味を取り戻したように、エミールも抱えた闇に負けず、希望を失うことなく生きろ。カイネはそう伝えるのだった。少年はカイネに叫ぶ。
「約束ですよ！　絶対に！　ぼくは絶対に諦めません。だからカイネさんも……！」
　少年の願いに、マモノ憑きの女は無言で頷いた。

＊　＊　＊

　石の神殿、崖の村、ロボット山、神話の森、そして今、洋館の図書室で。数々の苦難を乗り越え、ニーアと白の書は「失われた言葉」をすべて取り戻す。
　長い旅も終わりに近づきつつあった。あとはイニシエの歌にあった「黒の書」を見つけ出すだけ——。そうすればヨナの黒文病も治る。みんなとの明るい暮らしに戻る事が出来る……この過酷な戦いも、決着を迎えるだろう。

そう、思っていた。





七

ハタサレル　ヤクソク

ヨナの咳が止まらない。薬を調合する為、村の南門近くにセキトリゴケを採りにゆくニーア。そこに現れたのは傷つき、歩くのも精一杯という様子のエミールだった。何故こんなところにエミールが？　ニーアは図書館へ傷ついたエミールを運び込む。ベッドの上、疲労困憊したエミールが息を吐きながら訴える。

「はや……く、この……村……逃げて……マモノが……」

その言葉と同時に轟音が村に鳴り響く。

空が震え、地面が揺れた。

村中に悲鳴が響き渡る。東の門が破られ、マモノが村の中へ侵入してきたのだ。それは大群で、村の衛兵ではとても食い止める事が出来ない。

図書館から外へ駆け出したニーアは、ヨナの避難をデボルに任せ、白の書と共にマモノとの戦いに身を投じる。安全だった筈の村が蹂躙されている。日常が破壊され逃げ惑う人々がいる。必死で戦うニーア達の前に、さらなる絶望が襲いかかった。

東門から侵入してきたそれは、見たこともないような巨大なマモノだった。砦を巨躯で潰し、黒い化け物が雄叫びを上げる。ニーアの剣も、白の書の魔法も意に介さず、じわりじわりと村の中心へと迫る。その姿はまるで、すべてを破壊する黒き巨人。これまで感じたことのない絶望の予感がニーアを侵していく中、激しい一撃が巨人を襲う。聞こえてくるのは……あの乱暴な言葉遣い。

「楽しそうじゃないか！　え？」

頑なに村への立ち入りを拒み、他人の目に晒されることを避けてきたカイネが、今ニーアの村を救う為に剣を振るっていた。ニーアの剣に力が蘇る。カイネの剣を借り、決意を力に変え、巨大なマモノに向けて黒い槍を放つニーア。

この村を、ヨナを……守るんだ！

マモノの腹を食い破るように突き抜ける槍。倒れ込む巨体が巻き起こす土煙。カイネを労おうとしたその時、図書館の中から新たな悲鳴が聞こえた。

＊＊＊

ニーア達が図書館に駆けつけると、中ではエミールが渾身の力でマモノを相手に戦っていた。全員で必死に戦うが、黒い巨人の頭部が図書館に乱入する。マモノの力は圧倒的で、倒すどころか、地下室へと追い込むのが精一杯だった。扉を封鎖しようとニーアが駆け寄ったその時……。





ニーアの左肩を黒い槍が突き抜ける。それはマモノだった。マモノが流した血だまりから突き出ている槍だった。槍は大きく形を変え……暗黒の魔人が姿を現す。その腕の中にいたのは……ヨナ。守らなくてはならない大切な存在。

最悪の状況、苦悶するニーア、マモノを閉じ込めた扉を懸命に押さえるカイネ、傷ついたエミール。絶体絶命の中、魔人が振りまいた黒い血痕から次々とマモノが出現し、列を成して跪いていく。その威容は王たる貫禄をもって図書館を支配する。

「まさか、あやつがマモノの……王？」

混乱する状況の中、魔王が持っていた黒い本が白の書の心の中にヌルリと入り込んでいた。

＊＊＊

黒の書は静かに呼びかける。

我々「白の書」と「黒の書」は対の存在であり、同一の存在でもある。我らが融合し、世界にマモノを解き放つ。お前が小僧と出会ったのも「封印されし言葉」を集めさせたのも、すべて我らが王の意志。

「いざゆかん！　我らの在るべき姿、正しき世界の姿へ！」

白の書は……シロは、黒の書の語る世界に溶け込もうとしていた。白と黒が合わさり、ひとつに戻る。

それは、正しい事。

それは、予定されていた事。

しかし——。

しかし。

シカシ？

黒の書が歓喜の叫びを上げる中、遠くから微かな声が聞こえてくる。

「シロさんっ！」

洋館の主が。

「シローッ！」

下着女が。

「シ……ロ……」

小僧が。

仲間達の……声が。

＊＊＊

光が過ぎ去り、不遜な言葉が図書館に響く。

「シロシロと気安く呼ぶな。我が名は白の書だ」

この選択は過ちなのかもしれない。

私は黒の書と融合すべきなのかもしれない。

だが、今は……

「我はこやつらと共に戦う。そう決めたのだ！」

シロの宣言に黒の書は怒り、激しい攻撃を加える。先ほどの邂逅で黒の書に奪われた魔力を取り戻してゆくシロ。こやつらとなら、この小僧となら、戦える。

だが黒の書の攻撃は苛烈さを増し、シロは襲いかかる槍を防ぎきれない。自らの死をシロが覚悟したその直後。シロは信じられない光景を目にする。目の前で血を流していたのはニーア。守るべき少年が……自ら身を挺してシロを守ったのである。

倒れるニーアを無視するかのように魔王が翼を開く。血だまりに倒れたニーアは力なく妹の名を呼ぶが、もはや抵抗する術は残されていなかった。

「いずれにせよ……我々の手に戻る事になるのだ。すべてが」

黒の書はそう言い残し、魔王と共に飛び去る。

残されたのは、瀕死のニーアとシロ、困憊のエミール、そして……扉を押さえているカイネだった。

＊＊＊

カイネはずっと地下室の扉を押さえていた。この奥には化け物のアタマを閉じ込めてある。しかし扉は少しずつ、ジリジリとその隙間を広げていた。

筋肉が悲鳴を上げる。さすがのマモノ憑きでもこれ以上扉を閉じておく事は出来ない。開け放てばマモノはニーア達に襲いかかるだろう。取れる選択肢は、ひとつだけだった。

「私を石化しろ。私のマモノが封印の礎となって、コイツを閉じ込める！」

カイネの悲壮な決意。その願いの深さに打たれたエミールはためらいながらも、自ら封じていた石化の力を解き放つ。

涙に濡れたエミールの瞳が、カイネの姿をとらえる。

初めて目にする仲間。それは、最期の姿。

石に変化してゆく身体を感じながら、カイネはニーアに目を向ける。血まみれの身体をエミールに抱えられて、少年もまた、カイネを見つめていた。シロが最後の悪態をつく。

「さよならは言わぬぞ、下着女。なんせ、お前は不死身だからな」

カイネの微笑みが、そのまま永遠となる。

＊＊＊

ニーアの村からマモノは去った。

だがそこにヨナはいない。

カイネの声も響く事は無い。

ただ、図書館に差し込む陽の光だけが、物言わぬ石像を美しく照らしていた。

第七章　果たされる約束 [ハタサレル　ヤクソク]



八

プラン スノーホワイト

ヨナが連れ去られて5年。黒文病の流行は止まらず、荒廃しつづける世界。ニーアは魔王と黒の書の行方を捜し、マモノを狩り続ける日々を過ごしていた。

相貌からは幼さが消え、精悍な青年の盛りを迎えつつある。だが、心は5年前のあの日のまま、全てを失ったまま止まっていた。

「また背が伸びたんじゃない？」

そう口にするポポルは、5年前と変わらぬ美貌を保っていた。ニーアは薄い笑顔を返す。今日、ポポルに呼ばれたのは「エミールから石化したカイネについて話したい」という手紙が来た為だった。

南平原の洋館に向かったニーアは、エミールから話を聞く。彼によれば、この屋敷の中には「計画室」と呼ばれる場所が存在し、そこにはすべての魔力をコントロール可能にする方法が隠されているという。魔力をコントロール出来ればエミールも普通の暮らしを送れるようになる。そして何より……カイネを救う手立てが見つかるかもしれない。ニーアの心に微かな光が差し込んできた。

＊＊＊

洋館の地下に広がる施設を奥深く進みながら、エミールは過去の記憶を取り戻していく。ここは、子供を被験者とする生体兵器開発計画の「研究所」だった。その計画の要はある双子の存在であり、姉は6号、弟は7号として育成されていた。そして……その7号兵器こそ――エミールその人であった。

蘇る記憶。自らが人を殺す兵器である事を苦悩するエミール。

「エミールが何者であっても、エミールに何があっても、俺達がついている」

ニーア達のその声に支えられながら、エミールは最後の部屋「計画室」まで辿り着いた。部屋に入ったエミールは全ての記憶を取り戻し、語り始める。

魔法実験によって、石化能力を持つ兵器になった自分。その目的は、暴走した6号……姉を封印する為だったのだ。人類の生み出した最強の魔法兵器。究極兵器6号。

エミールの双子の姉、ハルア。それは人の頭だけが膨れ上がり、外骨格を形成したようなグロテスクな化け物だった。最強の魔力を有しているが為に死ぬこともできず、ただ石と化して、「計画室」に封印されていた姉。

「その魔力を手にすれば、ぼくにだって石化解除ができるはず……」

エミールは6号との危険な融合を試みる。

失敗したら命を失う。その覚悟だった。

弟を取り込み暴走する究極兵器6号・ハルア。ニーア達は懸命にエミールを奪還すべく戦い続ける。激しい攻防の中、エミールは白い光に包まれていた。その中で出会ったのは……在りし日の姉の姿。かつて、まだ「人」として暮らしていたときの優しい姉。その心に触れ合ったような。そんな気がした。

全ての魔力が収束し、閃光が6号を包む。

「ありがとう……おねえさん」

＊＊＊

爆風が止む。

魔力の暴走が止まり、ニーアは、エミールが「制御」に成功したのだと知る。視界が晴れると、ハルアがいた場所に、人影が屈み込んでいた。近づくと――。

「見ないで……ぼくを……見ないでええええええっ！」

エミールの姿は、先ほどまでのハルアのそれ――円い頭部と骸骨のように萎びた身体の化け物――になっていたのである。強大な魔力の残酷な代償。そんなエミールを、ニーアは優しく抱きしめる。

「おかえり、エミール。よくがんばった」

エミールは恐る恐る見上げる。

そこにあったのは初めて見るニーアの顔。

精悍だけれどどこか儚げな、優しい笑顔。

その眼差しは、変貌してしまった外見ではなく、自分の中身を、魂を見守ってくれている。

エミールは戦いを通して様々なモノを失った。

だが、一番大切なモノだけは残され、自分を温かく包んでくれている。

円い頭を上げ、丸い眼孔でニーアを見つめる。

「……とっても、かっこいいです」

冷たい地下の部屋。

その腕の温もりだけが、エミールにとっての光だった。



ツキノナミダ

自分は、孤独ではなかった。

崖の村で生まれた後、物心ついたときには両親は既に他界していた。女でも男でもない、そんな身体を持つ子が、同世代の子供達の間で嘲けられ、虐げられる対象になるのは不思議なことではなかったし、大人達がそれを止めることもなかった。孤立無援。だが、自分には祖母がいた。彼女だけは孫娘をかばい、村外れのあばら家で共に暮らしてくれた。だから、平気だった。

祖母の名はカーリー。孫娘の名はカイネ。

カイネは思い出す。15歳を迎えた年、崖の村が巨大なマモノに襲われた事。マモノが「おばあちゃん」を目の前で潰し、腕のひと振りでカイネの左の眼と腕を奪い去った事。テュランというマモノが、カイネの傷から体内に入り込み、そして、カイネの身体を我がものにしようと考えた事……。

テュランはカイネの身体に取り憑くと、眼と腕を再生させた。そうしなければ、か弱い人間の肉体は死んでしまうからである。しかしこの時――絶望の底に沈みつつあったカイネの精神もまた、一縷の希望を見出してしまった。

「この力があれば、マモノと戦える」。

こうして、半陰陽の「マモノ憑き」が生まれた。その身体は半分が人、半分がマモノ。心には、カイネとテュランが同居する。カイネにはいつもテュランの感覚を通してマモノの声が聞こえるようになった。

いったい誰が、この狂乱の世界を共有できるというのだろう。

カイネはそれまでに増して一層心を閉ざし、ただひたすらにマモノを斃すことに生きる意味を求めた。祖母の仇を討つ。それだけが、カイネの生きる意味であった。少なくとも、あの少年と出会うまでは――。

＊＊＊

ニーアの村の図書館。地下室の扉の前で、エミールが石化したままのカイネに魔力を注ぎこむ。ゆっくりと「ヒト」に戻り、倒れ込むカイネ。それを抱き止めるエミールを傍らに、ニーアは剣を構える。地下室から出てくるマモノ。それは5年前にニーアを傷つけ、カイネを石化に追い込み、そして最愛のヨナを奪った元凶。

積もった憎悪の刃を振るうニーアの前で、マモノは黒い煙となって消える。

＊＊＊

「カイネさん、生きて！ 戻ってきてください!!」

夢の時間が現実に追いつき、カイネの意識は覚醒した。自分が石になり、今また肉体に戻ってきたことを理解する。横たえられている自分を覗き込む貌が3つ。シロ、ニーア、それに……。

「エミール。私を呼んでくれていたのは、おまえだな」

「……ぼくのこと、わかるんですか？」

「エミールはエミールだ。私は間違えぬ」

ニーアに腕を引かれて立ち上がる。

「おかえり、カイネ」

見上げた先、そこにあったニーアの顔は、あの、あどけなさを残した少年のものではない。凛々しく、精悍な青年のもの。

視線を通わせながら、しかし、カイネの瞳は揺れる。

「……ずいぶん、立派になったな」

ニーアは懐から何かを取り出し、カイネに差し出す。それは、見覚えのある白い花をあしらった髪飾り。

「おばあちゃんのに負けないやつを、って、がんばって作ったんだけど……」

「そうか……」

あの日、初めて出会った時も。

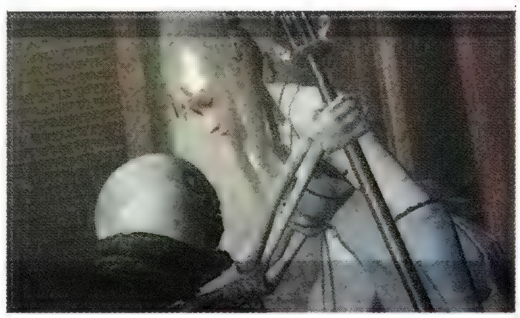
「ありがとう……」

この日、再会の時にも。

「ありがとう……」

そこには、白い花がある。

絆をつなぐ、「月の涙」が。

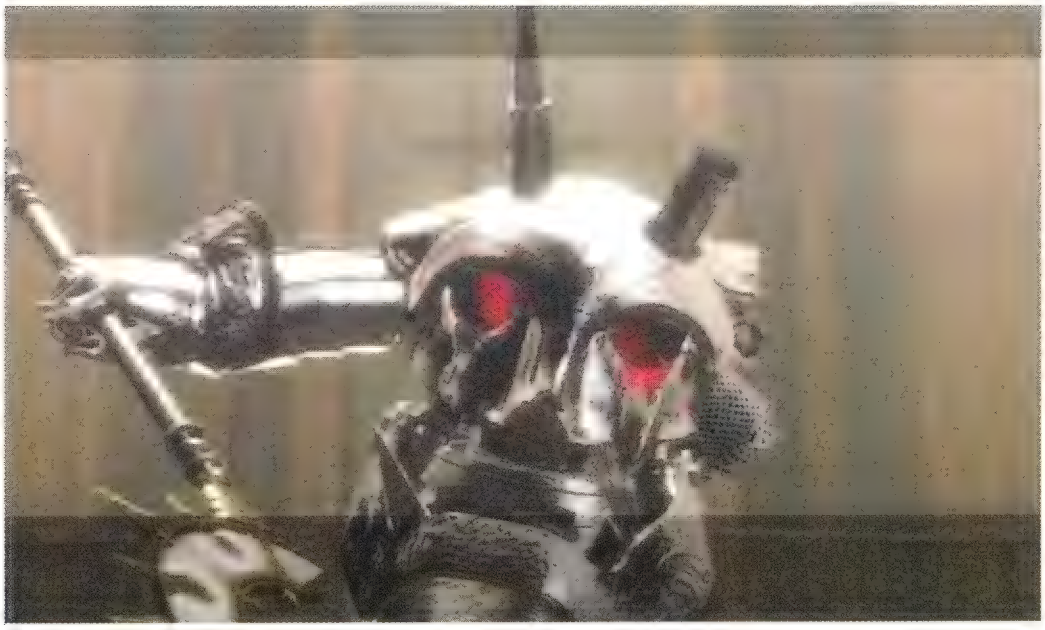


九



第九章　月の涙 [ツキ ノ ナミダ]

イシノ
シュゴシン



カイネとエミールは、村の中に居ることを許されなかった。そうポポルが決め、デボルもそれを否定しなかったからだ。理不尽に怒りを隠さないニーア。だが、心の奥底では理解していた。これは村の平穏を保つ為であること。そして、カイネとエミールを守る為でもある事。

翌日。ニーアはデボルとポポルから魔王の話を聞かされる。あの、ヨナを奪った元凶。その居場所に見当がついたと言うのだ。魔王の場所に繋がる入り口があるのは……「月の涙」を求めてヨナが入り込んだ石の神殿。ヨナの黒い病が発症した、あの場所だった。

＊＊＊

「『白の書』を奪われてしまった。ヘンゼルも死んだ」

石の神殿の奥、祭壇の間に守護者・グレーテルはいた。

壊れた金属の甲冑。かつて侵入者に吹き飛ばされた身体。不具の身になって始めてグレーテルは「不完全体」達の気持ちがわかるようになってきた。ゲシュタルト化が不完全な者達。見下していた小さなマモノ達。その孤独と、優しさが分かるようになっていたのだ。

本来の役目はなくなってしまったが、これからは、彼らを守る為に存在してもよいのではないか。そう考え始めていた。

その時、神殿を揺らす音が聞こえた。

＊＊＊

再び奴らがやって来た。今度は『白の書』が目的ではない。明らかにその戦いは、殲滅を目的としているものだった。小さなマモノ達はグレーテルをかばい……。

「やめろ！　おまえ達では歯が立たない！」

グレーテルは叫ぶ。だが「不完全体」達は群れを作り突撃する。その多くは日光を浴びて消失してしまう。しかしそれでも、グレーテルを守ろうとして果敢に飛び出し、その身を張る。グレーテルの咆吼が神殿に響き渡る。

「そいつらは……私の……仲間なのだ！！」

＊＊＊

カイネは感情を乱されていた。

「おい、まさか、あのデカイのに同情してるんじゃないだろうな？」

テュランの声がカイネの意識を射る。

「俺達はもう、引き返すことなんて出来ない。血を求めて、殺戮に走るしかない。俺達には、戦いしかないんだ。そうだろ？　カイネ」

ニーアとグレーテルの激戦の中、逡巡するカイネの心の隙を突くように、グレーテルがはね飛ばした「黒の槍」がカイネの胸を貫いた。血を吹き出しながら、カイネの身体は仰向けに崩れ落ちる。

混乱と絶叫の中、粉砕されるグレーテル。

カイネに駆け寄るニーア。だが、大量の血を流したカイネの身体を黒い文様が這いずるように広がってゆく。

＊＊＊

カイネの四肢は黒く染まり、マモノと化した。遂に、マモノの支配が全身に及んだのだ。暴走する力、崩壊する自我。その挙動は人間の限界を越え、祭壇の間を縦横無尽に駆け巡る。まさしく「凶暴」を具現化したようなカイネの、テュランの「魔力の暴走」。だが、ニーアとエミールの必死な願いがその剣を食い止める。

もう失う訳にはいかない。絶対に。

カイネに再び光を与えたのは、エミールとニーアの強い願いだった。

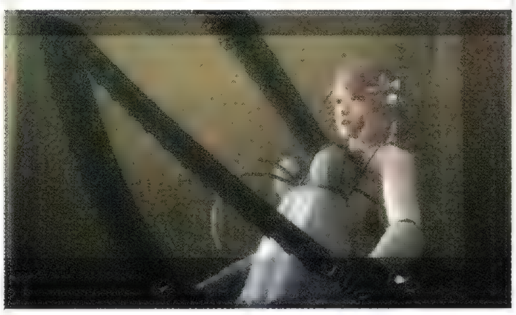
＊＊＊

祭壇の奥は魔法の力で閉ざされていた。しかし、そこで見つけた謎の石片に大きな意味が隠されていた。魔王の城への封印を解く鍵である。ポポルが解読した暗号からは、祭壇で入手した石片が「石の守護神」という部分であることがわかった。他に4つの石片が存在し、それら5つを合わせると1枚の石板に組み上がるのではないかと、ポポルは推測する。それぞれ「機械の理」、「記憶する樹」、「贄」、「忠誠のケルベロス」と読み取れるらしい。

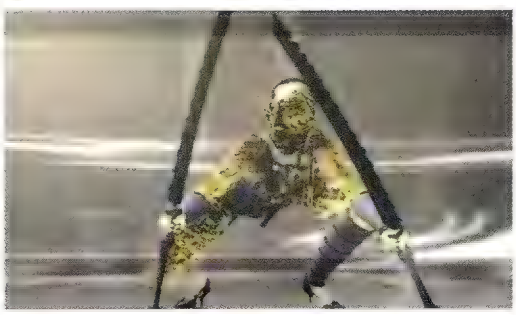
「各地点のでかいマモノを倒して、順番に言葉を埋めていけばいい訳だ」

「……手当たり次第に殺していくと？」

厳しさを増す戦いの道。シロの眼にはニーアの焦燥が殺戮に溺れているように見えていた。







十

第十章　石の守護神 ［イシ ノ シュゴシン］



十一

キオク スル キ

かつて「死の夢」に飲み込まれていた「神話の森」。そのもっとも奥に立つ「神の樹」。それは、数え切れないほどの人間の記憶を記録しておく為のシステムであった。「死の夢」で体験した言葉の世界に再び導かれるニーア。巣食うマモノに対抗する術は、自らの記憶、言の葉の選択。ニーアの意識が現実を取り戻したとき、その手に現れたのは……「記憶する樹」の石片。

十二

キカイ ノ コトワリ

それは、4年前のロボット山での出来事。

マモノの子、と呼べばよいだろうか。マモノにも母がおり、子がいるのだ。その子・クレオは、ロボット山で母を失った。人間に追い立てられ、殺されてしまったのだ。その時クレオは防衛用ロボットP33と出会う。それは「ママ」の替わりだった。

クレオとP33の不思議な共同生活が続いていたある日、人間の兄弟が坑道へ踏み入ってきた。新品同然に見える機械の山を見て、弟は声を上げてはしゃいでいる。そのふらつく足つきは不安定な構造物の崩落をもたらす。兄は弟の手を取り駆け出すが、兄弟の上に瓦礫が崩れ落ちてきた。兄は死に、弟は一人生き残った。

P33とクレオは、その不幸な事故を心配そうに見つめていた。

＊＊＊

4年後の現在。武器屋を訪れたニーアに対して弟は、兄の仇である大きなロボットを討ってほしい、と頼む。弟の記憶は歪んでいた。兄を殺したのはあのロボットだ。そう思う事で自らの心を支えていた。

「理由が何であれ、マモノとその仲間は皆殺しにするだけだ」

何かを憎む事を生きる目的にする。それはニーアもまた、同じだった。

＊＊＊

ロボットP33との激しい戦いの中、カイネには、マモノとロボットの叫びが聞こえ続けていた。

「また独りぼっちになるよ！　寂しいよ！！」

「脱出　脱出　脱出　脱出……」

何度も天井へ突貫をくり返すロボット。

「やめてっ！　ピーちゃんはボクの大事なトモダチなんだ！　イジメるな！」

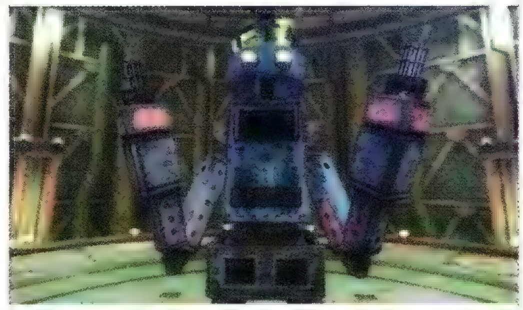
マモノはロボットを「ピーちゃん」と呼び、「トモダチ」だと言っている。支えとなる母を失った哀れな子。カイネと、ニーアと、エミールと……その境遇に違いがあるだろうか。マモノとなった左半身に届くその叫びを振り払うようにカイネは戦い続ける。

やがてロボットは破壊され、小さなマモノも物言わぬ黒い霧となって消える。動かなくなったロボットを見つめる一同の陰から、武器屋の弟が飛び出してきた。今やただの金属塊となった躯(むくろ)を執拗に棒で殴打する彼の口からは、憎悪の言葉が次々と溢れ出てくる。

手に入れた石片「機械の理」を握り締めながらニーアは見つめる。これが復讐心に飲み込まれた者の末路。これが、憎悪の果てに辿り着く未来。だが、自分の戦いはヨナを取り戻すまで終わらない。その他に道などあるはずがなかった。

「愚かな」

シロが言うその言葉は、今の自分に向けられるべき言葉でもあった。



十三
チュウセイノ ケルベロス

「ヒトと争っても我等に勝ち目は無いだろう」
狼の王は言った。元来、人は共存を知る生き物なのだ。きっと、その道はあるはず。王は若い狼をいさめ、遠い時代に思いを馳せた。

＊＊＊

ポストに届いた1通の手紙。それは砂漠の街から届いた結婚式の招待状。第93代目仮面の王……ニーア達が5年前に共に戦った王子からの、婚礼の報せだった。
出迎えた仮面の王が紹介した花嫁は、フィーア。言葉を話さぬ優しい少女。縁ある少女の祝い事にカイネも珍しく王の館で一夜を過ごす。
「……結婚式などというめでたい席に、私が出てもいいのか？」
幸せな場に戸惑いを見せるカイネ。結婚式にあこがれるエミール。そして大切な人を妻にして、国を背負う事に新たな決意を固める仮面の王。それぞれの思いを包みながら夜が更けてゆく……。

＊＊＊

何故だ！　何故ヒトはここまで我等を虐げるのだ！？
血だまりの中、狼の王は叫ぶ。
仲間が、友が、まだ幼い者――人間への危害は加えていないはずの子狼までもが、槍に貫かれ血を流して倒れている。
それは罠だった。婚礼を目前に控えた街へ狼が近づかぬように仕掛けられた罠だった。
狼の王の中で、抑えていた何かが壊れる音がした。

＊＊＊

「花が舞い、人々が祝福をくれる晴れの舞台！　あこがれちゃうなあ……ね、カイネさん！」
「知らん」
「も～～っ」
弾むエミールの声。カイネも声色ほどに厳しい表情ではない。誰もが高揚し、若き王と王妃になる少女の婚礼を見守っている。殺戮の日々を送るニーア達にとっても、それは心温まる光景だった。

だが、その祝祭は一瞬の悪夢によって破られる。
狼だった。狼の軍勢が婚礼の場に乱入してきたのだ。飛び散る血しぶき、襲いかかる狼達、逃げ惑う人々とその悲鳴。大混乱の中、狼の王は届かぬ叫びを人間達に向ける。
「森を食い尽くし、水を涸らせ、そして我等の命まで奪うか！」
砂漠の狼を統率する、黒い大狼。その黒さは毛色ではなく、脚には光に輝く文様を宿していた。カイネにだけ聞こえた叫びは、マモノの狼の怨嗟の咆吼。必死の戦いで狼達を撃退するニーア達。だが、全てが遅すぎた。その全てが、遅すぎた。



＊＊＊

フィーアは王の腕に抱かれている。食い破られた腹部からは、血が溢れ出ていた。
（王……お静かに。民が……不安に……思います）
血は止まらない。小さな手を真っ赤に染めて、花嫁は愛する人への最期の言葉を探す。
（ありがとう……）
（何……言ってるんだ）
（……私なん……かを……お嫁さん……に、してくれて、ありがとう……ございまし……た）
フィーアは、仮面の街の生まれ育ちではない。幼い頃に、捨て子同然に生家を追われ、奉公に出された外様の人間である。人一倍の苦労をしてきた。それを少年王も、知っていた。
（幸せになるのは、これからじゃないか!!!）
狼を追撃し、皆殺しにすると激高する王を、ニーアと、副官がいさめる。まずは街の防備を固め、民の安全を確保することが先であろうと。王妃も、それを真っ先に心配していたではないか……と。

＊＊＊

仮面の街が静けさを取り戻した頃、王は一人で狼を討つ覚悟を決めていた。それに気付くニーア達。皆、気持ちは同じだった。館を抜け出そうとする一行。
（王、どちらへ？）
副官が、武装した兵を引き連れて王の進路を塞ぐ。街を離れ、王自らが戦いに赴くことは、「掟」に反するのである。
（その掟とやらがフィーアを救ったのか）
否である。
（フィーアが何をした？　あの、幸せが何なのかもまだ知らぬような女が、死ぬべき理由でもあるのか？）
否である。
副官は、それでも、立ち退こうとはしない。
（貴方は、愚かな王です。幼い。実に、幼い）
（貴様……）
副官の明らかな反抗を前に、カイネが剣を抜く。それを無視するかのように語り続ける副官。我々は掟には背けない。だから掟に従い、王の下僕として従軍する為、国中のすべての家を訪問して同意を得てきた、と。
（フィーア王妃を血で汚したのは何者だ！）
（狼でありますッ！）
（ならば、狼どもを八つ裂きにするのは誰だ！）
（王の下僕たる我ら『仮面の人』でありますッ！）
副官と兵士達の叫びが、仮面の街に響く。
（愚かな王には愚かな民がつくものです……お忘れなきよう）

＊＊＊

一方、狼の王もまた、決戦を覚悟していた。先の襲撃に成功したものの仲間はさらに傷つき、群れは疲労困憊していた。残された数は十数頭。今なら人間の追撃を逃れて逃げることもできるだろう。だが、退こうとする狼はいない。皆、砂漠の狼の誇りを全うする為にここにいるからだ。それが、彼等に残された「意味」だった。

＊＊＊

砂漠に開けた岩肌の地。狼の巣で、人間と狼の戦いが始まる。
（殺す！　殺す！　狼ども！）
「もはや『共存』することはありえない！　絶対に！」
交錯する二人の王の叫び。仮面の王にその声が聞こえたならば。言葉を、いや、心を通わせる機会があれば。互いの背負うものが同じであることを理解したかもしれない。だが、全ては壊れてしまった。大切なモノを失った憎悪は互いを殺しきるまで消える事は無い。
戦いの結末はヒトの勝利になった。ニーア達の加勢と、仮面の人の壮絶な決意が、傷ついた狼達を皆殺しにする。
最後に残った狼の王。その目に、仮面の王の槍が突き刺さる。フィーアの仇である大狼は眼窩をえぐられ、最期の叫びを上げている。

＊＊＊

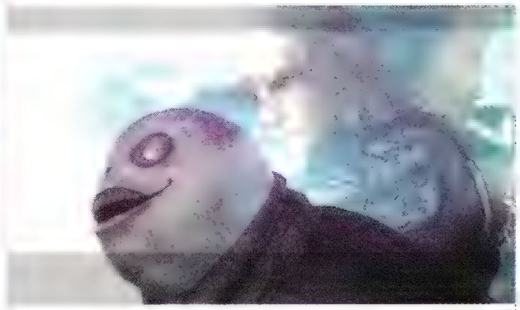
思い出すのは優しいおじいちゃんの事。
飼い犬だった自分に、永遠の命を譲ってくれた老人の事。
自分は長生きしても仕方がない。
おじいちゃんはそう言った。
おまえが生きるんだ、と。
なでてくれたその手を思い出す。
「いっしょに暮らしてくれて、ありがとうな」
ずっと、覚えていた。忘れずに、いつも。
「おじい……ちゃん……」
狼の王の命が、止まる。

＊＊＊

「忠誠のケルベロス」。
その石片の名の意味を、ニーアは知らない。

第十三章　忠誠のケルベロス [チュウセイ ノ ケルベロス]





十四

ニエ

崖の村の村長から、ポポルに手紙が届いた。村が市を開くこと。そして「贄」の鍵について伝えたいことがあるという内容だった。その情報を耳にしたニーアは一も二もなく崖の村へと向かう。

崖の村の様子は、以前と打って変わり明るい空気で溢れていた。村人が外を出歩いており、中央の広場には商店らしきものが立てられている。不思議に思いながらも、ニーアは手紙の事を聞いて回る。だが、誰もそんな手紙は知らないと口にする。

違和感。

そう、違和感だ。あの閉鎖的な村がこんなに急に明るくなるはずがない。あの排他的な村がこんなに自分を迎え入れるはずがない。

その時、広場の人間——だと思っていたものが——次々と黒い霧を噴き出し、マモノの正体を現し始めた。手紙はニーアをおびき寄せる為の罠だったのだ。

マモノに襲われるニーア達。そこに異変をかぎつけたカイネが加勢に現れる。半身がマモノである彼女は、この村の村人全てがマモノに乗っ取られているわけではない事を察知する。混乱と殺戮の中、カイネの視界が姉弟らしきふたつの影をとらえた。どちらも見た目は人間だが、姉は既にマモノだ。カイネの斬撃を剣で受け止めたことからも、ただの人間ではありえなかった。容赦なく、押し込み、吹き飛ばす。

「来るな！　マモノ憑きめ！」

弟が、姉を守るように駆けつけて叫んだ。その間にも、「姉」からは黒い霧が溢れ出している。それこそマモノである証ではないか。だが、弟はなおも叫ぶ。

「おまえ達こそ、バケモノじゃないのかっ！？」

そのとおりであった。

そこは聖と邪が混在する、異様の場であった。人と、マモノと、人の皮をかぶったマモノがいる。奇怪な魔法の書を連れた復讐の鬼と、半身をマモノに憑かれた半陰陽の剣士と、骸骨のような身体に異相の頭部を持つ魔法使いがいる。何者の存在が正しく、誤っているのか。審判の基準などないのだ。共有できる定義があるとすれば、人ならざる力は、等しくバケモノであるということではないか——。

姉が振り下ろした剣を、カイネは避けることができない。刻まれた傷から鮮血を撒き散らし、倒れ伏したカイネを見下ろして姉は泣き叫ぶ。静かに暮らしていたのに、なぜこんなことをするのか、と。

「バケモノ！　マモノ憑きのバケモノめ！」

「真に呪われるべきは、おまえ達だっ！」

怨嗟の声を聞きながら、苦しむカイネ。わずかに残った村人達を守って反撃するニーアとエミール。いつしか、崖の下へ斬り捨て、叩き落としたマモノ達が寄り集まり、渦を巻いていた。それは暗い思念の集合。人として自我を保っていた村人達をも巻き込んで形作られた黒い太陽だった。

もはや、滅し尽くす他に救いの手立てなど、ない。

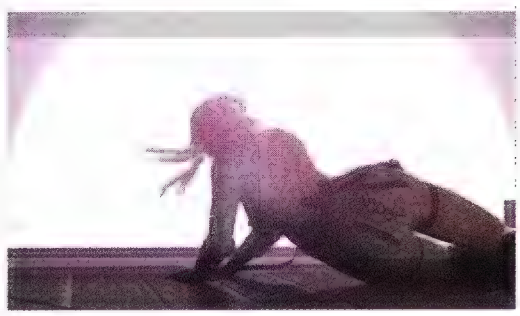
＊＊＊

崖の村は消えた。

文字通り、一切の痕跡を残さずに。

マモノの跳梁はきっかけにすぎない。エミールの力が暴走したことは、最後の一手でしかない。村人の負の思いが積み重なり、その重みに耐え切れなくなった時、心を結んでいた綱は切れ、悪意の海に沈んだのだ。

ニーアは「贄」の石片を手に、「かつて崖の村が在った場所」をあとにするのだった。



「それにしても、こうも都合良く『鍵』が集まるとはな」
　まるで誰かに集めさせられているようだ、とシロは言う。その通りだとしても、ニーアはやめるつもりは無かった。これはヨナへと繋がる唯一の希望なのだから。

　これまで、何度となく足を運び、ヨナの病気を治す手立てを探り、行方を相談してきた図書館。魔王の城に向かう直前、最後の旅立ちを前にニーアはデボルとポポルに会っていた。
「必ず、ヨナを連れて戻ってきます」
　力強く宣言するニーアにポポルは何かを言いかけ、なんでもない、と口をつぐむ。
「ポポルは心配性だからな……」
　そう言って、デボルが会話を終えるタイミングを作る。
「本当に……気をつけて……」
　心配するポポルを残し、ニーアは出立する。向かうは魔王の城……最愛の家族・ヨナが囚われている地に。

＊＊＊

　石の神殿最奥部。ニーアが「白の書」と出会い、その力を初めて手にした場所。忌まわしくも懐かしい景色だった。
　集めた石版をかざすと祭壇の奥の封印が解け、城への道が開かれた。さらに奥へと進むと、そこには大きな扉。その先に開けるのは、緑の広がる瀟洒な空間だった。魔王の城の前庭とでもいったところか。噴水の近くに小鳥が止まっている。突如、その小鳥が姿からは想像も出来ないような低い声でニーアに語りかける。
　――人が何故、世界からいなくなったのか？
　――人はその命をいかに長らえるのか？
　――魂のゆく先はいずこか？
　小鳥の不可思議な謎かけをシロと共に解き明かすと、次の庭へと繋がる扉が開く。扉を開けてニーアが目にしたものは、ふたつの人影。それは……濃い紅のドレスに黒いビロードのケープ。赤みがかった栗色の髪。一方の髪は跳ね気味で、もう一方は収まりよく整えられている。その二人は……間違いであってほしかった。だが間違えようはずはない。魔王の城でニーアを待ち受けていたのは……ニーアとヨナがもっとも世話になった、恩人。
　デボルとポポルだった。

＊＊＊

　なぜ、村にいるはずの二人がこんなところにいるのか。どうやってここに来たのか。混乱するニーアに、デボルとポポルは村へ戻ろうと言う。だが、ここまで来て引き下がる道などなかった。ニーアの答えを聞いて、双子の姉妹は杖を構える。
「出来れば貴方とは戦いたくなかった。それは本当」
「あと百年……次の世代にしたかった」
　二人はニーアの行く手を阻む。カイネの感覚では、彼女らはマモノではない。だとしたら……。
「何故だ？　何故お前達が邪魔をする？」
「白の書……裏切りの輩よ……」
　黒の弾、黒の手、黒の槍。デボルとポポルはシロと同じ魔法をくり出してくる。「封印されし言葉」の力は、もともと自分達のものであると双子は語り、そしてすべての謎の答えは、魔王の心にあると言うのだった。
「無茶してくレレレレ……るぜ」
　戦いの最中、攻撃を受けたシロの声が変調をきたしてくる。いや、シロだけではない。この城は、何かがおかしかった。封印の扉を解いてから。いや、ニーアがあの日祭壇を訪れた日から、すべてがおかしかったのか……。
「答えは貴方が探してちょうだい」とポポル。
「己の真実と向き合う為に」とデボル。
　双子の姉妹は光に包まれ、上層へ向けて飛び去る。
　呆然とするニーアの前に残されたのは、ただひとつ。
　城内に繋がる冷たい扉だけだった。

＊＊＊

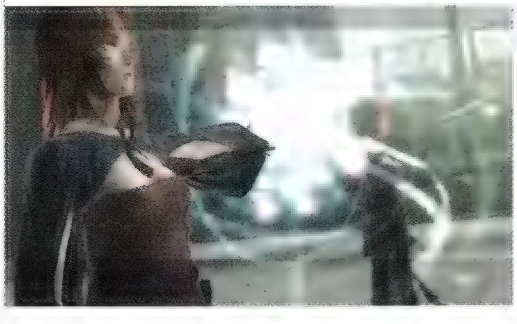
　殺す。
　マモノを倒し、殺し尽くし、魔王と黒の書に雪辱を果たす。その事だけを考える。そうしなければ、ヨナは帰ってこない。
　ワルツが流れる広間。大挙するマモノを斬り殺していくうちに、マモノ達の群れは塊となって一匹の獣となる。獣は不死身のように見えるが、関係ない。
　ただ、殺す。
　それがヨナに繋がる唯一の行為だと信じて。

＊＊＊

　カイネには、赤子の泣き叫ぶ声と、母の悲痛な願いが聞こえていた。広間に溢れる小さなマモノ達をなで斬るたびに。
「赤ん坊なのよ！　何も知らない赤ん坊なの！　長いこと待って、やっと再生できるのに……。せめて、この子達だけは、助けてあげて！」
　その声が聞こえなくなるまで、カイネは剣を振るう。
　誰が許しを乞えるというのだろうか。
　決めた事だ。ニーアの剣になる事は。
　妹の為にマモノを惨殺するニーアも、おばあちゃんを殺したマモノも、復讐を果たした私も……何も変わりはしない。テュランが憎しみを駆り立て、暴力で自分を飾る理由が今ならわかる。孤独から逃げる為の誤魔化しだ。敵を作ることでしか自分を信じる事が出来ないのだ。
「もう手遅れなんだよ。私達は」
　引き返すことなど、出来るはずがなかった。今更この呪いの連鎖から降りる事など、許されはしない。
　巨大なマモノが咆吼を上げる。カイネの耳に、怒りと悲しみと絶望が渦になってねじ込まれてゆく。
「無垢な者を惨殺するケダモノめ……許すものか!!」
　あれは……私だ。復讐に身を焦がした、私自身だ。
　カイネは、自身の戦う理由の為に剣を握った。

＊＊＊

　マモノが放出する毒の霧に進退を封じられるニーア達。絶体絶命のその瞬間……ニーア達の前に現れたのは仮面の王だった。
（あの日、我はフィーアの墓に誓ったのだ。マモノから人々を守れる立派な王になる、と）
　王もまた、憎悪に囚われた人だった。
　ニーアとカイネ、エミールの3人を押し出すように先に進ませ、自らは死の決戦場に残る。
（またいつか……遊ぼう！）
　閉ざされた部屋から聞こえる叫び声は、兵士が次々に倒れていることを意味していた。仮面の王が、友が、化け物と命を賭して戦っているのだ。扉にすがりつくニーアを引きはがし、叱咤するカイネ。
「ヤツの戦いを……無駄にするな。フィーアの為にも！」
　犠牲の上に成り立つ闘い。身を裂くような痛み。歯を食いしばりながらニーアは進む。
　ただ、前に進むしか無かった。




十五

デボル・ポポル・ワルツ

第十五章　双子の円舞曲 ［デボル・ポポル・ワルツ］





十六

レプリカント

灰色の冷たい回廊の先。扉の向こうにある大きなその部屋に光が差し込む。部屋の奥、ふたつの椅子に、ふたつの人影。デボルとポポルは城の深部に辿り着いたニーア達に向かって世界の真実を語り始める。

ニーア達が『マモノ』と呼んでいる存在が……実は人間である事。1000年以上もの過去に、滅びかけた人類が選んだ「ゲシュタルト計画」。その計画によって産み出された変質した人間の姿である事。それを元の姿に戻す為に用意された器……それが今、人間として世の中に生きているもの「レプリカント」……ニーア達なのだった。

「所詮は道具なんだ……。あたし達も、おまえも！」

人間の為に産み出された機械人形の双子が踊り始める。圧倒的な魔法攻撃の放射。育ての親とも言うべき存在と戦わねばならない業にニーアは苦しむ。叫びながら戦うも、デボルとポポルにその声は届かない。拮抗する力はやがてそのバランスを崩し、デボルの命を奪ってしまう。

「ポポルさん……もうやめよう……」

残されたポポルに向かい、戦いをやめようと願うニーア。ポポルは呟く。

やめよう？　やめよう？　やめようって？

「もう遅ェンだよッ！　何もかもッ」

残されたポポルの慟哭が狂気の渦となり、暴走する魔法が部屋を砕き始める。

「みんな殺す！　コロしてやる！」

＊＊＊

その頃、仮面の王は一人、巨大なマモノと対峙していた。共に戦ってくれていた兵士達は、既に壊滅の状態。自らも傷つき、腹部から大量の血が流れ出している。王は自分の命が長くない事が分かっていた。マモノもまた、満身創痍で立っている。巨躯を支えるのは復讐の為の精神力。罪なき同胞を殺した者達を屠る為の、憎悪。

次の瞬間、マモノが王に向かって突進する。その牙とその身体で王を潰し殺すつもりだった。迎え撃つ王は飛翔。黒い牙を躱し、マモノの額に槍を突き立てる。刃は額の中心を捉えていた。王はさらに力を込める。化け物の中枢、その魂を破壊する為に。

安寧の地を守る為に戦った執念のマモノは、遂に絶命した。王は勝利したのだ。だが、使い果たされた王の命の灯もまた消えゆこうとしていた。

（フィー……ア）

もはやその目に光はなく、意識の大半は闇の中に迷い込んでいる。

（今……いく……）

後に動くものは残されていない。

ただ血の臭いと静寂だけが、その場を満たしていた。

＊＊＊

ポポルの魔力は闇の稲妻となって部屋自体を破壊しようとしていた。このままでは、灰色の塔へ——魔王の元へ進めなくなってしまう。

エミールは咄嗟に魔力の羽を広げると、ニーアとカイネ、シロと共に宙へ飛んだ。しかし、ポポルを中心に巻く稲妻の渦はエミール達を捕らえようと迫る。このままではいずれポポルの魔力は大収縮し、ニーア達も呑み込まれてしまうだろう——。魔法が衝突する轟音の中、エミールは静かに言う。

「みなさん、ありがとうございます。今、人を『守る』為の兵器になれること、本当に感謝しています」

エミールの意図がわかった時、ニーアとカイネは魔力の球に包まれ、魔王の塔へ向けて押し上げられていた。エミール自身は、狂乱のポポルが舞うステージへ高度を下げていく。

「カイネさんは乱暴だし、シロさんは口うるさいし、肝心な時に、ケンカしないといいけれど。……もう、ぼくは仲裁できませんからね」

闇の稲妻がエミールを包み込む。膨張する魔力が激突し、飲み込み合い、ポポルを、デボルを、そしてエミールを消し去る。

激しい光が収縮し世界が再び静寂に包まれる。残された場所には、エミールが持っていた杖だけが悲しそうに転がり落ちていた。

十七

ゲシュタルト



信じていたデボルとポポルの裏切り。仮面の王の献身。エミールの犠牲。ニーアの精神は限界を迎え、戦う意味を見失っていた。両手足を床に着き、全身から覇気が抜け切ったニーア。その様子を見たカイネはニーアを蹴り上げ、胸ぐらを掴む。

ここまで来たのだ。

多くのマモノを斃し、人間を犠牲にし、デボルとポポル、エミールまでも失って——目的の地へやって来たのではないか。今戦わないでどうする。意志をたたえた眼で、カイネはニーアの顔を睨みつける。

二人の息づかい。

戦いが無ければ恋人になれたかもしれない。

だが、戦いが無ければ出会えなかった。そんな二人。

カイネは静かにニーアの胸を押し戻し、いつもの距離に戻る。

「……行くぞ」

ニーアも判っていた。

たとえ自分の存在が砕けようとも。

魔王を倒し、愛する者を救い出す。

それが今「なすべきこと」であった。

「……ああ」

その手の剣をゆっくりと握り締める。

＊ ＊ ＊

塔の最上階に、その広間はあった。窓辺には幕が下ろされ、外の様子は窺い知れない。

ニーアとカイネが部屋に入って目にしたものは一床のベッド。そこに眠る少女の姿。5年の歳月を経て成長してはいるが、間違いない。ヨナだ。遂にニーアは、愛する妹を捜し出したのだ。

そして……「魔王」と「黒の書」が現れる。

ニーアと魔王。白の書と黒の書。

最後の戦いの中、それは対のようであり、また、限りなく近い存在でもあるように見えた。

ニーアと共に駆けるカイネは、不思議な気持ちで満たされている。

「おまえの心の中は、実におもしろく進化した。複雑怪奇だ。憎しみでもなく、悲しみでもなく、ただ白く光る波がさらさらと流れてくるぞ」

テュランが語るその感情こそ、今カイネを突き動かすものだった。

私は知っている！　私は汚れている！　私は間違っている！　私は呪われてる！

カイネは、微笑んでいた。迷いはなかった。

穢れた自分を赦し、受け入れてくれた彼。

「奴の刃になって死んでやる！」

それはカイネの、生きる意味だった。

＊ ＊ ＊

「やめてっ！　おにいちゃん」

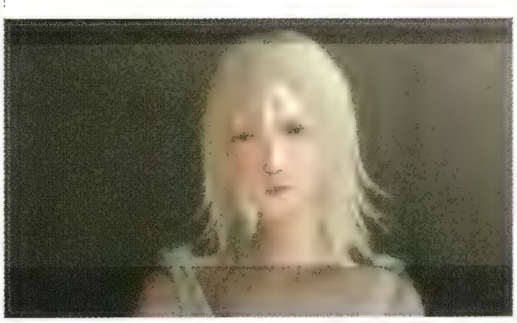
ヨナの声が響いたのは、傷ついた魔王が動きを止めた時だった。寝台から起き上がり、床へと降り立つヨナ。兄の方へと歩いてくる。ニーアは喜びの表情で迎える……だが、ヨナはニーアの横を通り過ぎていく。語りかけている相手は、「魔王」。

事態を理解できぬまま、ニーアとカイネはヨナを見守る事しか出来ない。ようやくニーアを見た瞳。だがそこには「ヨナ」ではない何者かの意思が宿っていた。

「あなたが……『おにいちゃん』？」

「ああ、そうだよ。……いっしょに帰ろう」

「ヨナ」はうなずき、窓辺に立つ。幕を開くと、太陽









の光が部屋に差し込んだ。それを全身に浴びて、「ヨナ」は「魔王」を振り返る。
「ごめんね。ごめんね。おにいちゃん――ごめんね」
ヨナの身体から黒い文様が立ち上り、光の中へ消える瞬間をニーア達は見た。消えたのは「ヨナ」の中に潜むマモノ。
「魔王」は狂乱する。暴走する力が部屋を満たしてゆく。その力を封じる為に、シロも最後の力を使い切る。激しい閃光の中、「シロ」という呼び方を存外気に入っていたのだと、それは言う。この奇妙な関係を、互いに楽しんできた。それを聞いたニーアもシロに伝える。
「……知ってた」。
「ふん。生意気な奴め！」
この決着までに、どれほどの命が消えていっただろう。人間、マモノ、アンドロイド、ゲシュタルト、レプリカント。デボルとポポル、エミールとハルア、カイネとテュラン、白の書と黒の書、ニーアとヨナ、そして魔王――。
ニーアの剣が魔王の首を撥ね飛ばす。
何が誰と契り、誰が何と争い、命を奪い合わねばならなかったのか。虚と実が回転し続けたこの決戦も、ようやく終わりを迎えたのだ。
あとは――。
ニーアは、意識を失っているヨナが無事であることを祈った。
「思い出せ。おまえ達が生きる証を。大丈夫。おまえならできる」
宙から聞こえた声は、シロの最後の言葉だった。

・・・

ヨナがいちばんすきなひとは、だーれだ？
――ヨナが笑っている。遂に取り戻した。

ニーアはその身体を抱きしめる。このときの為に、戦ってきたのだ。

カイネは、ニーアの元を去る決意を固めていた。
「妹と仲良く、平和に暮らせ」
片付けねばならない個人的な問題がある。そうカイネは言う。ニーアはカイネへと手を伸ばそうとする。その時、ヨナの無邪気な声が響いた。
「おにいちゃん！　見て！！」
見上げた空はどこまでも澄み渡り、
その光は兄と妹を美しく、健やかに包む。

「光が、いっぱい！」
温かい光が地を照らす。
毎日が穏やかに過ぎた、あの頃のように。

・・・

白い。白い光。世界の中心。
もしくはその端かもしれない。
ヨナ――。
辛い思いしか、させてやれなかった。
おまえを、救ってやる事が……出来なかった。
ごめ……ごめんな……にいちゃん!……ごめんな……。
魔王は、孤高の存在であった。
新宿のあの日以来、1000年以上も、孤独にこの世界を見守り続けてきたのだ……。人類の為ではない。たった一人の家族の為、愛する妹の為に。
しかし、すべては無駄だった。ヨナも自分も、レプリカントを失った。もう、ヒトには戻れない。いや、今自分が生きているのかさえ、わからなくなっている。あの「ニーア」が――もう一人の自分が、すべての希望を奪い去ってしまった。何の為に、これまで……。
「……おにいちゃん」
声がする。
膝を抱えて座り込んだままの兄の元へ、妹がやってきた。会うのは久しぶりだ。ここは……スーパーマーケット。ヨナが大好きなお菓子を見つけた場所だ。
「ずっといっしょにいてくれて……ありがとう」
そうだ。ずっと一緒だった。一緒にいたのだ。
「はい。おにいちゃんのぶん」
差し出した手にあるのは、クッキー。
半分に割られた、小さな、クッキーのかけら。
「ヨナ……」
白い。白い光。世界の中心。
もしくはその端かもしれない。
光は輝きを増し、やがて世界を埋め尽くした。

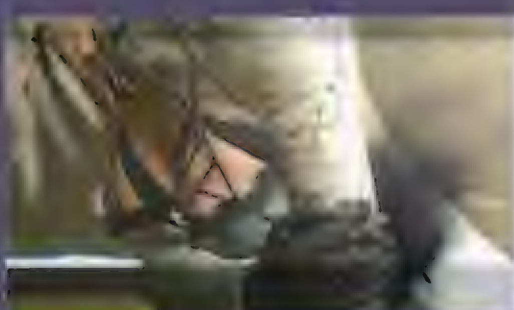
終
Ending
A
B



差し込む光の中に、ニーアとヨナが立っている。
幸せな結末こそ、彼らにふさわしかった。
ここに私の居場所は、ない。
立ち去ろうとするが、身体が震える。左半身から立ち上る黒い霧が――「マモノ」が、彼女の意思を飲み込もうとしているのだ。最期の時が来た事を知る。もうエミールはいない。シロも存在しない。彼女の「マモノ」を止める方法はどこにもない。
崩れて行く自我を必死でつなぎ止めながら、彼女は最期の願いを口にする。
「私を……殺せ」
肩口から首へと、黒い文様が侵食してくる。
薄闇の中、大切な人を見据える。
「最後の……頼みだからな」
そして彼女は闇に染まり、
カイネではなくなった。

・・・

暴走したゲシュタルトに、ヒトの意識などない。
殺すか、殺されるか。その選択を迫られていた。
魔王にすら打ち克ったのに。
今の彼女を屠る事は、自分には可能だろう。
だが――。
あの日、あの村のはずれで、
彼女と出会えたから。
彼女の剣がいつも助けてくれたから、自分は戦ってこられた。約束したのだ。愛する者がそばにいる幸せを、取り戻すと。決めたのだ。もう何も失うつもりはないと。
諦めない。諦めるわけにはいかない。
「俺が治す」
カイネを――！
「おまえを助けるっ！！」





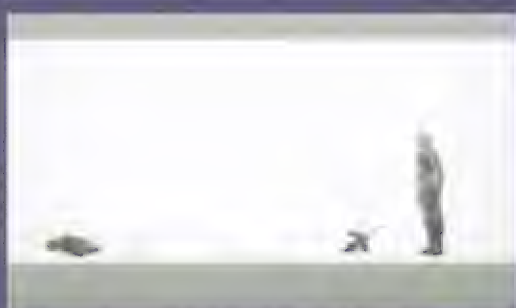
C-Ending Ashes[灰]



Ending C



これが彼女の望んだ死。
これが彼女の望んだ救済。
願いを、叶えられたのだろうか。
想いは、届いたのだろうか。
「カイム……」
拾い上げる。彼女との、僅かな絆の証。
ふたたび彼の元に戻ってきたそれを、優しく撫でる。
「ずっと、いっしょだ」
彼女に永遠の安らぎを。
いつまでも、その想いが共伴にあるように。



悪夢に追われ続けるような感覚の後、カイネは目を覚ます。
そうだ、魔王を倒し、少女を救い出したのだ。
あの戦闘で、魔物で、残忍な「マモノ」もまた、魔王と共に消失したのだろうか。マモノに侵されていないカラダは数年ぶりの、不思議な感覚で満ちていた。
長い夢のような、暖かい感触があった。
ふと、手にした花を見る。
それは「月の涙」。
なぜだろう？
何かを失ったような喪失感が胸を締め付ける。

見上げた空はどこまでも澄み渡り。
その光は彼女の心を美しく、優しさで照らす。
忘れはしない、いつまでも。
それは、とても大切な——



Ending D

D-Ending Dreams[夢]

アートワーク・設定画

Artworks

ここで紹介するのは、本作でキャラクターデザイナーを務めたD.K氏によるものを中心としたアートワークの数々。とりわけ初期の設定画や企画書からは、『ニーア レプリカント（ニーア ゲシュタルト）』の世界観が形作られるまでのプロセスが見て取れるだろう。なお、P.230、231に掲載したものは、アーケードゲーム『ロード オブ ヴァーミリオン Re:2』のカードの絵として、のちに藤坂公彦氏によって描かれたものである。







20091127.D.K











































初期企画書 ①

❶キャッチコピーが目を引く初期の企画書。タイトルは「ニーア」で、ジャンルはバトルアクションRPG。「妹を助ける。世界と引き換えにしてでも」というもうひとつのコピーは、完成版のコンセプトと同様だ。❷「物語」パート。地上の多くが砂漠化し、汚染された世界が舞台とある。世界観は、この時イメージされていたものから大きく変わったようだ。とはいえ、かつての都市が自然の一部に戻り、人々はテクノロジーを失った、という説明は、始まりから何千年もの時を経ている「ニーア レプリカント（ニーア ゲシュタルト）」の世界に近いものを感じさせる。また、ニーアとヨナが「ある村に住み」、「両親を失っていて」、「村の人に助けられながら毎日を送る」と、大まかな設定はすでにこの時点でしっかりと形作られていた。❸❹「物語」パートの続き。企画書内の「死の病」の名称は、この時点では「黒文病」ではなく「黒紋病」。それを引き起こす「終末の書」を閉じ込めるために、13冊の書の力を用いたとされている。それぞれの書は異形のマモノたちが守っているという設定のようだ。当初は白の書を皮切りに、13冊の本を順番に手に入れていく物語だった模様。カイネも「二刀流」、「女剣士」、「半分がマモノに侵され」と、この段階から軸になる設定はしっかりと決まっていた。ただしヘアスタイルは薄いグリーンの巻き髪で別人である。巨大で荘厳な雰囲気の城の絵は、マモノたちの王、すなわち魔王の城を

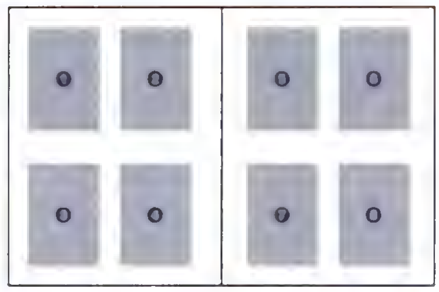








イメージしたもののようである。❺❻キャラクターパート。ニーアと、行動をともにするカイネ、ハルアについて書かれている。カイネはこの段階では、13冊の書のうちの1冊「剣の書」の使い手という設定だったようだ。また「祖母をマモノに虐殺された復讐」、「マモノの暴走を食い止めるために、みずからが封印となって石化」と、完成形のエピソードもふんだんに盛り込まれている。一方、この時点で仲間になることになっていたハルアは、翼の生えた「人豚」の姿。「魔の書」の使い手で、強力な魔法を使用できるとされていた。なお、ハルアは最終的にエミールの姉の座に収まり、実験兵器6号として登場。ニーアたちと対峙した。❼❽ワールドマップパート。一度滅んだ世界の上に構築された街や村について書かれているが、そのほとんどが完成版にも実装されているもの。「神話の森」の欄には、村を襲った「死の夢」に関する記述もあり、この段階での構想がほぼそのまま再現されたと言っていい。「丘の上の洋館」に「光をなくした少女」と記載されているのは、当初エミールではなくハルアが洋館の主として登場し、ニーアたちの仲間になるという想定だったからだろう。のちに「人魚の海岸」は海岸の街、「階段の街」は仮面の街となったが、階段の街の「街中階段だらけで平坦な場所がない。家々のあいだには細い水路が存在する」という記述は、ほぼ仮面の街の説明そのものと言える。









それでも尚、
最愛の人の
為に
たとえそれが全てを破滅に導くチカラだとしても。





[マモノ]
The Beasts
突如世界に現れた謎の存在『マモノ』。
ヒトを喰うとも言われているが、その詳しい生態は明らかになっていない。敵にすると手強いが、一度捕獲すれば心強い武器となってくれるだろう。
[センチネル]
皮肉屋。
[ロックマン]
岩石王。
[サラマンダ]
炎の使者。
[クロウ]
殺人狂。
[ファットマン]
異常食欲者。
CONFIDENTIAL / Page 15



[ニーア／13歳]



[ニーア／18歳]



[カイネ／17歳]



[ハルア／8歳]



初期企画書 ②

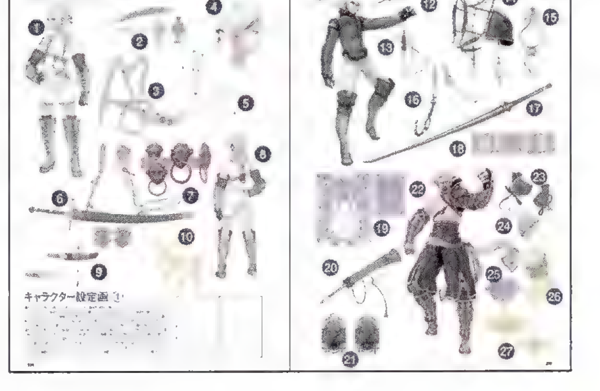
❶「世界観修正稿」と題された、2006年11月7日時点での修正版企画書に掲載されていた、まるでポスターのようなイメージビジュアル。描かれているのは、魔法でマモノのようなものを出現させるニーアの姿。念じているのだろうか、左手で顔を覆うような動作をしている。「終末の書」を使いし者には、肉体に最悪の激痛が、精神には漆黒の闇が訪れるだろう、というキャッチコピーを、そのまま表現したような1枚である。❷企画書内でのヨナの姿。ソフトなタッチで描かれたその儚さと可愛らしさは、この頃から健在だ。❸最初期の設定では、マモノを捕獲して味方につけることができた。線の曖昧な姿形は完成版のゲシュタルトにもどことなく似ている。なお、これらのマモノの絵は、ディレクターであるヨコオタロウ氏自身が描いたもの。❹青年期のニーアのイメージCG。表情、衣装ともに、完成版とは大きく異なる。❺少年期のニーア。炎の精霊のようなものを従えているが、これが「終末の書」の姿なのだろうか？ ❻初期のカイネの姿。毛先がカールされたボリュームのあるヘアスタイル、「下着女」の呼び名からはほど遠い露出度の少なめな衣装など、完成版からはだいぶイメージが異なる印象。しかしすでにこの頃から、マモノに憑かれた左半身は布のようなもので覆われている。❼「人豚」のハルア。この姿になる前は若干8歳の少女という設定だった。❽青年期のニーア。5年後の姿として再登場するという設定は完成版でもいっしょだ。❹のイメージCGは、このイラストを忠実にCG化したものだということがわかるだろう。





キャラクター設定画 ①

❶袖のない上着を脱いだ状態の、少年期のニーアの立ち姿。❷頭部の髪飾り。❸いくつかのパーツの組み合わせで出来ている、ストラップ状の装飾具の詳細。❹頭部の髪飾りを身につけた様子。❺ニーアの独特な髪の結いかたがわかる図。❻長剣。❸のストラップ状の装飾具からぶら下げられる仕様。❼輪をくわえた獅子の装飾品は、背中側に来るパーツ。当初はもっと大きくする予定だったらしい。❽上着を脱いだ状態のニーアの背面。獅子の装飾品の様子もわかる。❾背中に付けている小さなナイフ。獣を狩ったあと、必要であればこのナイフで採取するという想定。❿ニーアのブーツのデザイン。足首で紐を縛る方法まで詳細に描かれている。⓫青年期のニーア。左胸（心臓部）を守る装飾具を外した状態。⓬頭部の髪飾りは青年期になっても健在だ。⓭採取用のナイフ。少年期とはデザインが異なる。⓮左胸を守る装飾具は、少年期のストラップ状の装飾具を進化させたもの。⓯⓰左胸を守る装飾具の金具のデザイン。⓱長剣。⓲当初、長剣の装飾用として描かれた模様。⓳白の書。ディレクター・ヨコオタロウ氏のこだわりを盛り込み、何度も描き直した末にたどり着いたデザイン。⓴武器「百獣の剣王」のデザイン。当初は「覇王獅子」と呼ばれていた。㉑「百獣の剣王」の両面に描かれた2頭の獅子のデザイン。口を開けているほうが釜刃（ガマハ）、口を閉じている方が滅武（ゲンム）と名づけられていた。㉒『ニーア ゲシュタルト』のニーア。マスクを取った姿。㉓㉔肩当てと、そのレリーフ部分をクローズアップしたもの。㉕㉖マスクの右目部分のボタンのデザイン。㉗「親父はチャンピオン」をテーマに描かれたベルト。

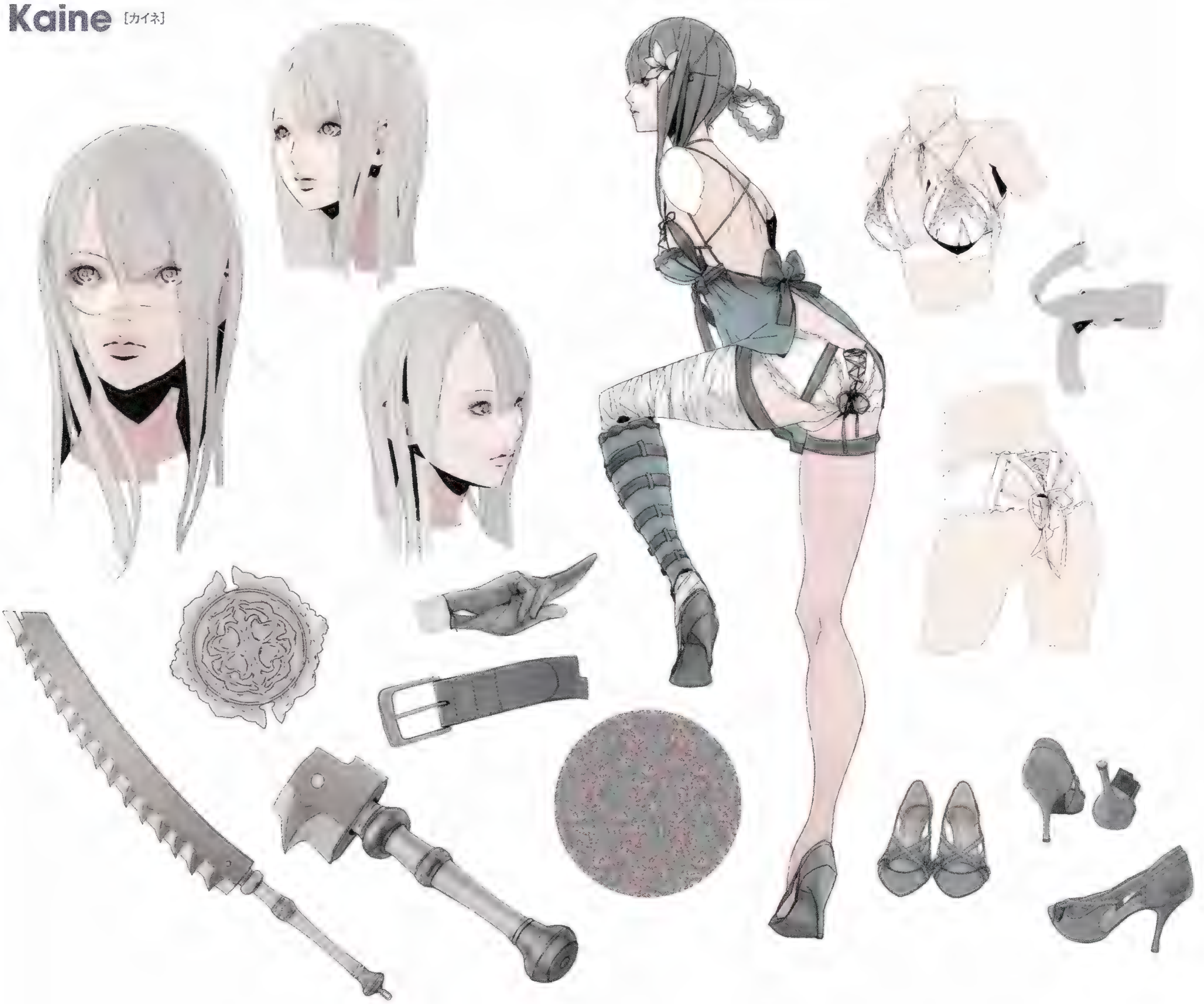




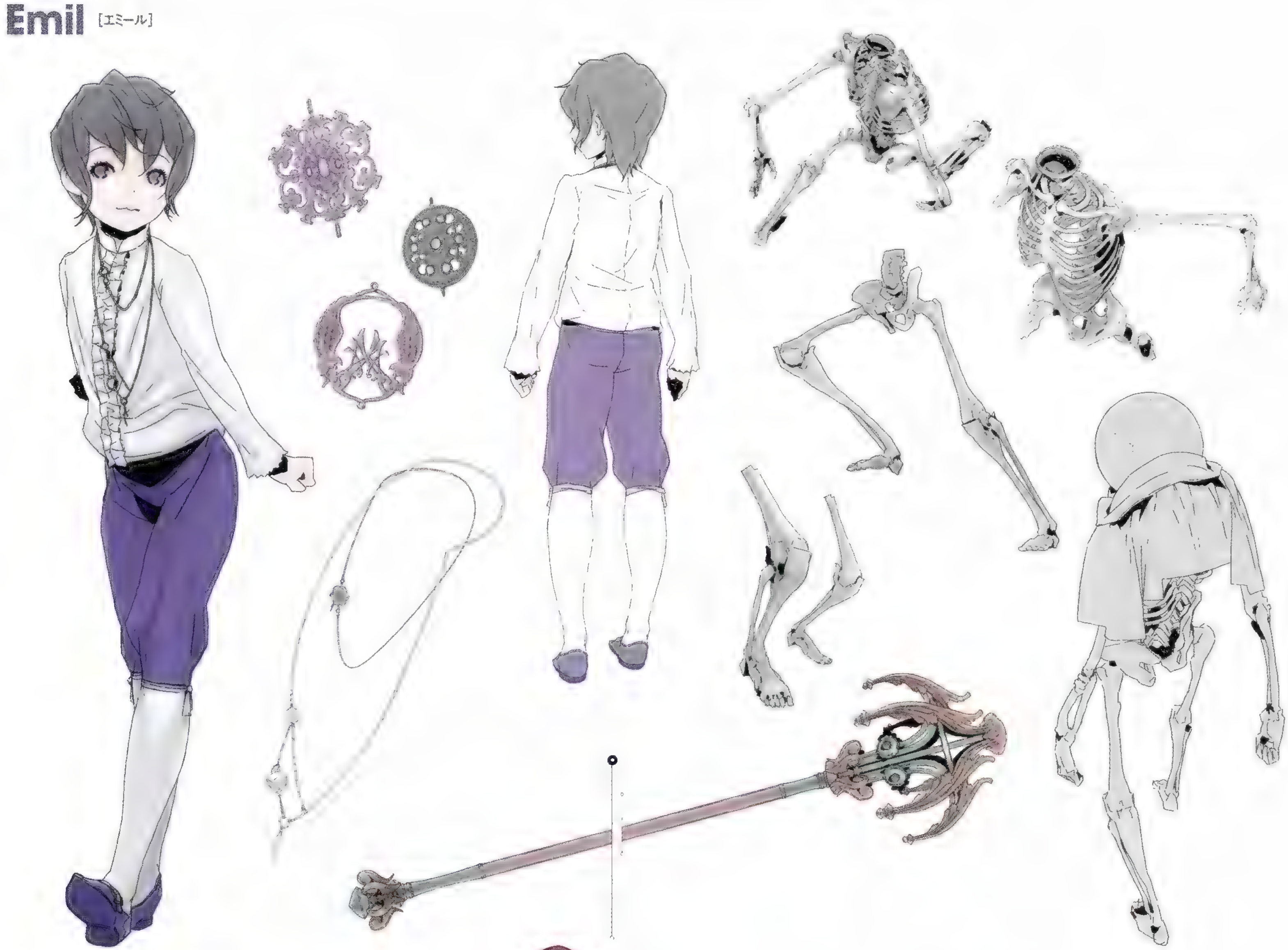
Yonah [ヨナ]



Kaine [カイネ]



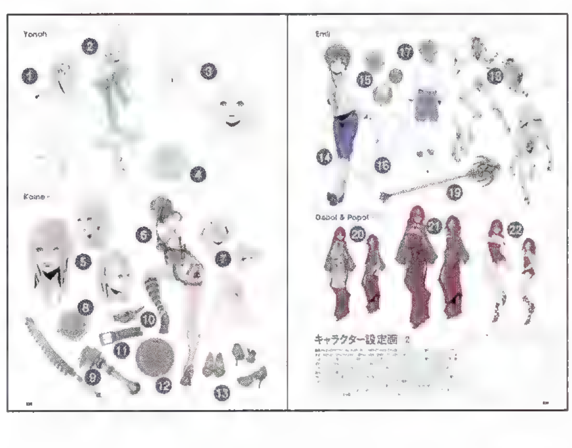
Emil [エミール]



Debol & Popol [デボル&ポポル]



キャラクター設定画 ②



❶❷少女期のヨナのデザイン画。D.K氏いわく、この絵柄で子供の女の子を描くのは難しかったとのこと。❸ヨナのヘアスタイルと表情の設定。無造作なヘアスタイルが目を引く。❹リボンの模様。❺髪を下ろした状態の、新鮮なカイネの表情。目の下のクマは「6日徹夜した感じ」として描かれた。❻プロポーションが調整されたカイネの後ろ姿。髪の結びを長くし、胸は大きくされた。❼カイネの下着の設定画。❽剣の刃の部分に刻まれているエンブレムのデザイン。❾その刃渡りの形状から「サメ」と名付けられていた剣。カイネ自身のデザインがアシンメトリーなため、剣はバランスを考慮して左右同じデザインとされた。❿カイネの指先とグローブのデザイン。手首の内側で軽く縛ることで固定される仕組み。⓫左足のふくらはぎの5ヵ所に巻かれているベルト。集合することでインパクトを生んでいるが、これそのもののデザインはじつにシンプルである。⓬左足を覆う布(?)の模様。⓭生足であるという前提があったため、カイネの履く靴はヒールに決められた。⓮まだ「スノウ」と呼ばれていた頃に描かれたエミールの立ち姿。ジャケットを脱いだ状態。⓯⓰エミールの胸のペンダントとそのパーツ。D.K氏が掲げたこのペンダントのデザインコンセプトは「いかにも金持ち!」。⓱ジャケットを脱いだエミールの後ろ姿。⓲エミールのマントの中の体の様子。当初はハルアとして描かれた。⓳まるで錫杖のようなデザインのエミールの武器。D.K氏はこれを指して「人生で初めて魔法の杖をデザインした」とコメント。⓴㉑㉒双子のアンドロイド・デボルとポポル。着衣の異なるさまざまなパターンが用意された。

【僕は『ゼルダの伝説 時のオカリナ』のような地続きのゲームを作りたかったんです。でも実際にやってみるとそれは大変な苦労が伴って……】

ディスプレイに表示された文字列。二人の女性兵士が最後の行をなぞりながら朗読する。薄暗い廊下で身を潜めながら

「――これが前回までに回収できた分です」
「爆弾のセットは既に完了済みです。カウントダウンは10――9――8」

カウントを最後まで言い終わる事なく女兵士の頭が撃ち抜かれた。頭部からは機械が撒き散らされ、アンドロイドであることが判る。

まっすぐの廊下。
突き当たりの扉には爆弾が設置されている。
爆弾の表面には、8で止まったままのカウント。

「8番！ 12番！ 223番！」
「了解しました」「了解しました」「了解しました」

上下左右、壁を走る黒いアンドロイド。
天井から奇妙な形の機械が落ちてくる。鈍く光る銀色の球体だった。銀色の球体の中央が割れ、まるで笑っているかのような亀裂が走る。

「防御ッ!!」

先頭を走っていた8番が銃を突き出す。
球体の口から真っ白な雷がほとばしり、銃に落雷。体中に電流を受けた8番は爆発するように燃え上がる。その煙の隙間から12番がスライディングで滑りこみ、球体の口を押さえつける。

「今ですッ！ 再放電まで4秒ッ！」

黒焦げになった8番の身体を粉砕しながら223番がとびかかる。押さえつけられている球体に223番が手を突き刺す。指が防壁に触れ拒絶された情報汚染によって223番に恐ろしい苦痛がもたらされる。
発狂しながら叫ぶ223番。だが、その手を離す事はない。渾身の力で球体の中身を潰してゆくと、球体が笑い声のような不思議な音を立てて静かになった。
崩れ落ちる223番。

「――障害物クリアしました」
「作戦続行します 8――7――6――」

カウントゼロ。
爆発した指向性爆弾が扉を吹き飛ばす。

「突入ッ!!」

爆発煙が残るその部屋には何台もの旧式コンピュータらしき箱が散乱している。それは何百年も放置されたかのように埃をかぶっていた。

「90番ッ」
「はい！」

90番と呼ばれたアンドロイドが部屋の中央に進む。深海のようにゆっくりと埃が舞い上がる中、静かに座り座禅を組む。その髪がスルスルと伸び始めたかと思うと、意志を持った蛇のように周囲にひろがっていった。髪の先が青く光ると同時に形状が変化しコネクタへと変わり、各所のコンピュータに接続してゆく。別の髪が小さなピンとなって壊れた箇所を修復する。

部屋の中央で髪を広げる90番とは別の、扉を警戒していたアンドロイドが叫ぶ。

「敵の音源を感知しました！ 4分で来ます！」

90番が応える。

「回収は4分32秒で完了予定！ 安全の確保をしてください！」
「了解しました！」

コンピュータ。ピーという間抜けな音を立てて起動。転送開始。

「音声朗読お願いします！」
「了解しました！」

90番の目がピカピカと明滅しながら記録を読み始める。

「2013年9月4日16時14分ヨコオタロウ記録→発売後にシナリオを評価していただく事がありましたが、自分ではそれほどの話だとは思っていません。映画や小説と異なり、ゲーム体験は複雑な過程でプレイヤーさんに届きます。いくらシナリオを頑張っても、A地点で殺す、B地点で殺す、C地点で殺す――というゲームが可能な体験はもの凄く限られたものになります。覚えているのはせいぜいがキャラクターと奇抜な演出だけ。ニーアが目指したゲーム構造はとにかく繰り返し感の無い、変化のある体験で……いや、この話はもうやめましょう。とにかく僕はゲームを作る時に毎回思うんです。ファンの皆さんに買って頂いた「意味」のあるゲームを作らなくてはいけない。ゲームが楽しいとか、話が面白いとか、絵がキレイとか、そういうのはヨソで体験出来るから一番重要な事ではありません。『そうではない部分』をいかにデザインするかを大切にしていた気がします。」

警戒していたアンドロイドが叫ぶ。

「敵、来ましたッ！」
「残りロード時間は!?」
「13秒ですッ」

90番が引き続き朗読を開始する。

「そんなニーアでしたが発売後は本当に関係者やファンの皆さんに助けられた、というか、愛されたゲームだと思いました。こんなマイナーゲームを支えてくださった皆さんに感謝の念が絶えません。本当に、本当にありがとうございました。」

突然、90番が立ち上がり、髪の毛を引きちぎる。

「月への転送完了しましたッ！ 作戦成功ですッ！」

残された数体のアンドロイド達は一斉に90番を見る。全員笑顔だった。90番の胸が発光する。体内の起爆装置がカウントダウンを始めた合図。

「それじゃあ……また、いつか」

最後まで笑顔のまま、人形達は閃光となった。

LOOKING BACK 3
ニーア レプリカント（ニーア ゲシュタルト）編

書いた人：ヨコオタロウ氏
ニーア レプリカント（ニーア ゲシュタルト）｜ディレクター

Questions and Answers.

ちょっと気になるあんなことやこんなこと

答えた人：ヨコオタロウ氏　ニーア レプリカント（ニーア ゲシュタルト）ディレクター
名取佐和子氏　ニーア レプリカント（ニーア ゲシュタルト）メインシナリオライター

Q 魔王（＝ゲシュタルト・ニーア）が独自行動を開始する前、レプリカント・ニーアとヨナは、ふつうに生きて死んでいくというサイクルを繰り返していたと思われますが、どのニーアとヨナも貧しかったのでしょうか？

名取　「絵に描いたような幸せ人生」とか「ドラッグ漬けのセレブ人生」とか「ヨナがアイドル子役になり、ニーアがマネージャーの人生」とか、あらゆる人生パターンのニーア&ヨナが存在するかもしれません。ゲームで描かれたのは、ひどい環境下で生き抜くパターンですね。でもデボルさんとポポルさんがちゃんと近くにいたし、最悪の事態は避けられるようになっています。

Q カイネがマモノ憑きになって、マモノ＝ゲシュタルトの言葉がわかるようになったのはなぜ？

名取　カイネの細胞内にテュランが入り込んで、テュランの頭の中の言語中枢を使えるようになりました。

Q テュランについて詳しく教えてください。

ヨコオ　テュランの設定は、人間だった頃に「由良正義」という名前の男性でした。自衛隊に所属しレギオンと戦っていましたが、自衛隊内でのクーデーターを目論み失敗。テロリストとして最後は逃亡し、その後テュランと改名します。ゲシュタルト計画は一部の裕福な層にのみ実施された為、犯罪者であるテュランはもちろん対象にはなりませんでした。ですが、履歴詐称によりゲシュタルト化リストに自らを加え、ゲシュタルト化に成功します。ただし、その後詐欺行為が発覚し、本体であるレプリカントは処分されてしまいました。実は、テュランに血の流れがつながるキャラクターが「ドラッグ オン ドラグーン」作品群のどこかに潜んでいます。探してみるのも良いかもしれません。

Q デボル&ポポルのようなアンドロイドについて詳しく教えてください。

ヨコオ　アンドロイドは不老不死であると同時に、レプリカント・システムの管理者でもあります。アンドロイドは各地に存在し、一箇所に留まるのは10〜20年程度です。その後は次の区域のアンドロイドにバトンタッチをし、何個か区域を移動しますが、最終的には元の区域に戻ってきます。デボル・ポポルが書いていた報告書は「復活するゲシュタルト（人間）達に読ませる為であり」ますが、黒の書計画が最終的には失敗に終わってしまう為、保管されたままとなります。やがてゲシュタルトもレプリカントも地上から消滅し、しばらくアンドロイドだけの世界が続きます。その後、宇宙人が地球を侵略するので、それらと戦いはじめます。さらにその後も延々とイロイロあるのですが、ここでは割愛します。

Q エミールが住んでいる洋館について詳しく教えてください。

ヨコオ　あの洋館は日本政府が作った軍事研究所のひとつで「コードネーム：ムラサキ」と言います。地上建造物が洋館を装っているのは軍事研究所を悟られない為の政府による偽装です。ゲシュタルト計画後、崩壊体になった元研究者達が研究所に戻って地下に住み着いています。もしかしたら、また何かを研究していたのかもしれません。セバスチャンは常駐の執事です。パーツ交換が可能なアンドロイドで予備パーツが大量にあり、複数体同時可動も可能です。

Q 仮面の街の、おもわず「？」となる掟ベスト3を教えてください。

名取　3位は「転んだ者を見たら、息が静かになるまで笑う」こと。2位は「同じ話を3回以上した者は死刑」。1位は「月に一度の『赤ちゃんの日』は全員ハイハイで移動し、ミルクを飲んで暮らす」こと。労働も禁止。

Q 物語前半において、ニーアとヨナはいっしょにお風呂に入っていますか？

ヨコオ　確かあの家には風呂が無い気がします（未確認）。家の前の水たまりで水浴びでもしてたんじゃないでしょうか。一緒に水浴びはしてそうですが。
名取　あの時点でヨナはまだ（精神的に幼い部類の）7歳ですから、いっしょに入っていました。
「ヨナ、そろそろひとりで入る練習しなよ」「じゃあ、つぎの誕生日が来たらがんばってみる」「あ、ああ。まあ、急かしてるわけじゃないんだけどね」なんて話しながら。

Q ヨナのスペシャル料理を教えてください。

名取　トリッパのような臓物（胃袋）の煮込み料理です。臭い消しの香草をいっさい使わず、煮込みなのになぜかサッとゆがく程度でドーンと出すものだから、生臭さがハンパない！　胃袋の中にはまだ形そのままの小動物がいたりして……。ヨナ的には「新鮮なものを薄味でお届け☆体にいいよ」と善意しかありませんが、ニーアは吐きます。ヨナに隠れて吐くでしょう。

Q 白の書や黒の書に落書きしたり、水をつけたらどうなりますか？

名取　たとえば彼らに落書きをしたら、祟ると思います（笑）。水をぶっかけたら、シロはその場では「水もしたたるナントヤラだな」とか余裕ぶります。でもその後何日も経ってから「あの日、水をかけられた部分の防御力が」とかネチネチ愚痴りますね。黒の書は心頭滅却していてビクともしませんが、3倍返しをしてきます。あと、魔法コーティングのおかげで、防火服くらいの耐火性はあるので、彼らは燃えにくいです。

Q みんなのちょっとすごい特殊な特技を教えてください。

名取　以下のとおりです。
（『ニーア レプリカント』の）ニーア……米粒くらいの大きさのものに絵が描けます。でも絵は下手なので、器用なのか不器用なのかわかりません。
（『ニーア ゲシュタルト』の）ニーア――腹筋バリバリの腹踊り。幼子は皆、泣き出します。
ヨナ――瞬時の寄り目。あと白目。これでにらめっこには大抵勝ちます。
カイネ――早口言葉。でも8割方は放送禁止用語。
エミール――（サイリウム的な）灯りを手に（オタ芸のような）激しい創作ダンス。
デボル――口の中でサクランボの茎を結べます。
ポポル――口の中でサクランボの茎の結び目を解きます。
シロ――秘技・扇風機！（ページをパタパタ翻らせて風を作ります）。けっこう重宝がられて、本人もご満悦！
テュラン――円周率を100桁まで言えます。記憶力がいいんです。

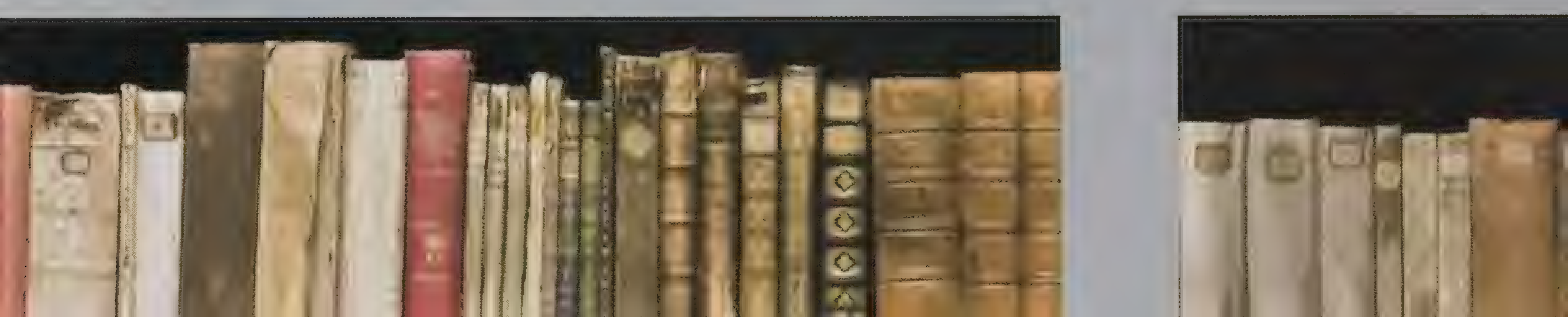


Data Collection



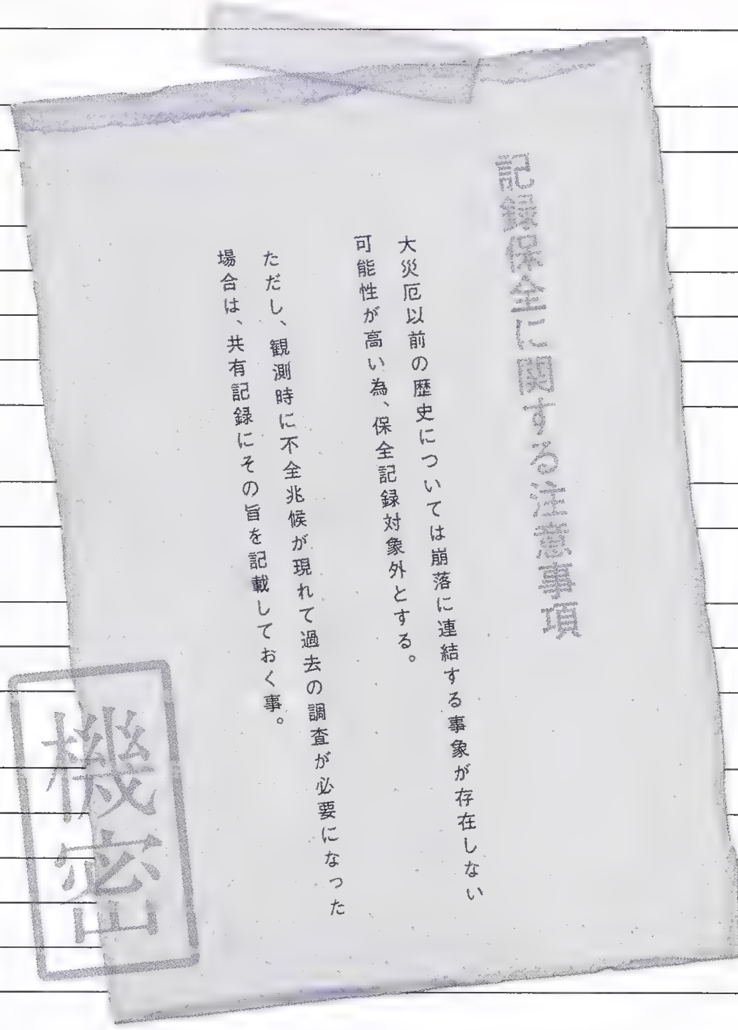
データ集

本書でこれまでに紹介してきた2つの作品世界には、膨大な量のデータが存在する。そのなかでも、物語を紐解くのに最適な3つのデータをここに掲載した。まずひとつ目はタイムライン（歴史年表）。『ドラッグ オン ドラグーン3』の一部を含め、両作品の時系列をひとつにまとめた。ふたつ目はウェポンストーリー。これは、武器ごとのショートストーリーである。「これまでよりもっと深い物語」に取り組んでいく作業になってしまいがちな部分だが、読めばそれにとどまらない深さと衝撃を与えてくれるだろう。そして3つ目は、キーワード（用語解説）。作中に登場する数多の専門用語を、五十音順に解説・列記する。なお、当コーナーでは2作品のデータを意図的にボーダレスに整理・掲載している。ここからは、『ドラッグ オン ドラグーン』ワールドの醍醐味の広がりを味わっていただけるはずだ。



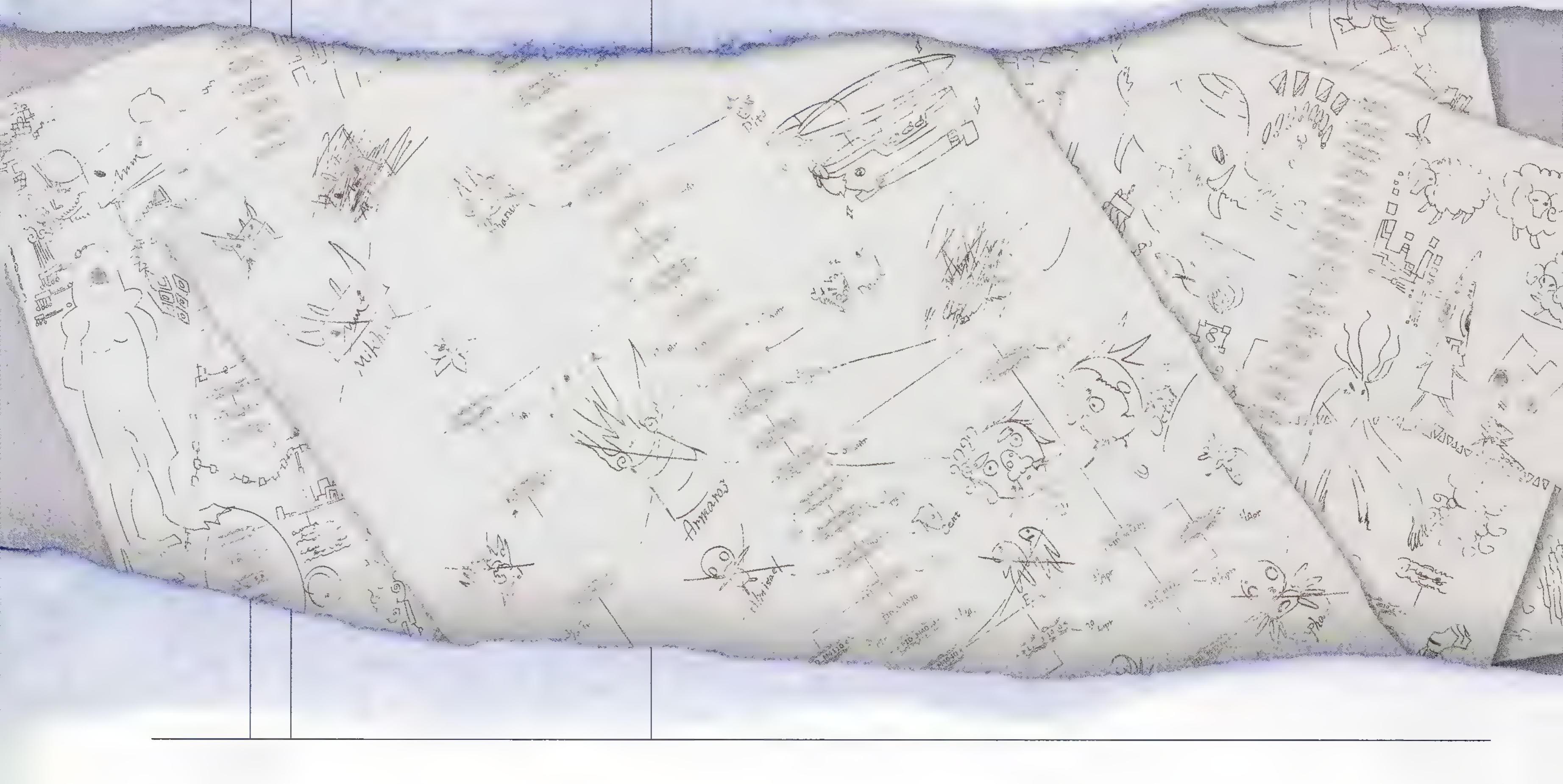
Chronology
【年表】

原初から未来に至るまでの歴史について、これをまとめ、報告する。
参照する場合は以下の項目を参考にすること。
- - ……報告単位
なお、データの損傷等については一切の責任を負わないものとする。


記録保全に関する注意事項
大災厄以前の歴史については崩落に連結する事象が存在しない可能性が高い為、保全記録対象外とする。
ただし、観測時に不全兆候が現れて過去の調査が必要になった場合は、共有記録にその旨を記載しておく事。

西暦年	月	出来事	詳細
1		キリスト生誕	
4		第二次ゲルマニア戦争勃発	
30		キリスト刑死	
64		ローマ大火 暴帝ネロによるキリスト教徒の迫害	
100		ローマ帝国隆盛	
165		第十六次ゲルマニア戦争、西アジアからのペスト病が帝国領土に蔓延	
250		キリスト教徒、大迫害時代	
311		キリスト教寛容令、十字旗の制定	
313		ミラノ勅令	
379		テオドシウス大帝、生誕	
395		テオドシウス大帝死亡、これによりローマ帝国は東西に分立	
440		ローマ教会、大教皇レオ一世生誕	
449		アングロサクソン族によるブリタニア侵入 七王国時代始まる	
476		西ローマ帝国滅亡	
585		スラヴ人の移動始まる	
610		ムハンマド、天の啓示を受け、イスラム教成立 イスラム帝国が領土拡大	
726		ローマ教会により聖像禁止令が出される	
731		ローマ教会、聖像敵対者を呪逐	
732		トゥールポワティエの戦い	
747		東ローマ帝国内に悪疫蔓延	
756		イスラム帝国が東西に分裂	
800		ノルマン人、ヨーロッパ各地を荒らし始める	
843		ヴェルダン条約によりフランク王国が三分される コンスタンチノーブルの公会議	
856		コリントス・チュニジア・イラン・京都で震災	
- - - -	- -	- - - - - - - -	- - - - - - - -
856		大災厄 イベリア半島に、一夜にして都市誕生	難民と暴徒による略奪、犯罪が激増。 異形の者の目撃情報が多発。人々が襲撃される事件も増加。
858		東ローマ帝国滅亡	巨大な竜が群れをなして飛来し、王都が一夜にして灰燼に帰したとの口伝が残る。
862		西フランク王国、中フランク王国、東フランク王国、相次いで王制崩壊	中フランク王国のロドヴィコ2世が暴徒によって殺害された事件を皮切りに、暴動が他国にまで拡大。
865		ミッドガルドの概念生まれる 教会都市の噂が人々に広まる	大災厄以降、国家らしい国家を失ったヨーロッパ地域は、この頃より「ミッドガルド」と呼ばれるように。 大災厄後に現れた都市に「教会都市」という呼び名が浸透。人々が住み着き、自治体制が始まる。
867		ピタゴラス機関の設立	教会都市へと落ちのびた元王国貴族・知識人達により、世界に頻発する災害、災厄、異常の原因の研究機関「ピタゴラス機関」が設立される。実質的な機関による統治が機能し始める。 各地の難民が、救いを求め教会都市に大移動を開始。
868		カルデアの門建設 十夜の悲劇起こる	教会都市、難民を受け入れきれず、深刻な食糧難に。難民の流入を制限するためのカルデアの門が三晩で建築され、暴徒と化した難民と都市自衛軍との間で七晩に渡る抗争が繰り広げられる。(十夜の悲劇)
869			人々の中に、人の力を凌駕する破壊や、水脈の発見など「奇跡」を行う者達が次々に現れる。
870			ピタゴラス機関により「魔力」の存在が肯定される。
872			「奇跡」を行使する者達により、教会都市に厳格な秩序と社会機能がもたらされる。
875			ピタゴラス機関による奇跡を行使する者達の認定、所属システムの構築。ピタゴラス機関、これにより社会的地位を確立。 奇跡を行使する者達=行使者により、都市の中に秩序と社会機能がもたらされる。
878		カルデアの門、開放	カルデアの門、十年ぶりに開かれ、都市機能が拡張される。行使者達による地域統治がはじまり、過去から続く信仰や宗教が変質。 人々に「ピタゴラス機関の行使者や奇跡=教会」という新たな概念の信仰が広まる。
882		カルデアの公会議	大災厄以前から権力を保持する教会とピタゴラス機関による、初めての公会議。混乱した世界に平和をもたらすべく、組織としての新たな「教会」設立を宣言。ピタゴラス機関は教会直属の機密機関として組み込まれ、ピタゴラス機関の名はこれ以降史実より消失。 教会は「行使者」による反乱を防ぐための登録制を強化、これを「魔術師」と呼称する。並行して魔力を制御する「封魔術」の研究が盛んに行われる。

西暦年	月	出来事	詳細
885		魔力暴走事故	魔術師の魔力暴走により、都市の三分の一を消失する事件。教会は封魔術の研究成果により、これを鎮圧と発表。(実際には封魔術の実験に失敗し、肉体の肥大化が起こり、巨大な足のみとなった術者がスラム街を踏み潰し、一晩で2000人超が死んだとされるが、教会による公式発表は上記の通り)
888		第四次教会都市拡張計画の遂行	都市の拡張工事が進む。 教会、「祈りと魔術によってもたらされるミッドガルドの永遠の平穏」を掲げ、更なる領地の拡大を目指す。
890		教会調査団、結成	人民から有志を募り、周囲の自治領を掌握するための「教会調査団」が結成される。
892			教会調査団に大型の兵器武装、攻撃型の魔力を操る魔術師の随行が認められ、都市周辺の自治領を、次々に制圧。実質的な軍隊として機能する。
895			各地に教会の勢力が拡大。
904		教会、イベリア半島全域を掌握	教会調査団が遠征、制圧の後、そのまま現地にとどまり自治機能を担う事例が慣例化する。広大な地域を治める「領主」が各地に誕生。
907		東アジアで唐が滅亡	
910		魔導院設立	教会、魔力研究を意欲的に進める。各地に「魔導院」が設置され、本格的な研究がさらに進む。
912		魔力暴走事故	建設途中の魔導院にて、再び魔力暴走事故発生。しかし、封魔術の行使によって、被害は暴走者及び封魔術行使者の2名の死亡のみ。
930			魔導院によって魔法の基礎が完成。以後、魔法が一般的な技術として人々の間に広まっていく。
938			教会は一層勢力を拡大・安定させるため、各地で広大な土地と権利を所有する領主と、利益分配などにおいて協力関係を結びはじめる。
951			教会の権力者たちに対し、各地の領主による賄賂が慣例化。領主同士の争いが各地で頻発。領地を拡大した領主たちの治める地域が「森の国」「山の国」などと呼称されはじめる。
960		東アジアで宋、建国 教会癒着問題表面化	領主から、初の「魔導院長」が選出。まったく魔法に精通していない人物であったために、教会上層部と領主の癒着問題が表面化。 魔導院に所属する魔導師たちの不安が鬱積しはじめる。
971		白の乱起こる	領主からの魔導院長選出が慣例化し続けている現状に対し、一部の若手魔導師が猛反発。教会都市の中央魔導院を取り囲み、暴徒と化した魔導師達が魔導院長の更迭を迫るも、一晩にして鎮圧される。(白の乱)
985		飢饉発生	大規模な飢饉発生。地方から教会都市への食料供給が数年に渡り大きく滞る事態に。政界、および教会上層部など都市権力者から地方領主に対する金品・武器類、女子供と食料の交換が常態化。
986		青の団、結成	食糧難に対する貧民層の政治に対する不満と、魔導師達の魔導院腐敗に対する不満とが重なり、市民の中に革命を目論む地下集団が組織される。通称「青の団」。
990			青の団の動きが活発化。若手魔術師が多く賛同し始める。教会そのものに不満を抱く領主たちもこれを支援。長年に渡った食糧難と賄賂の影響で、軍備、人材とも不足している教会都市の弱体化が露呈する。
991		青の乱起こる 教会都市、大規模な水路改修工事を発表、着工	青の団による、大規模な反乱が教会都市で勃発(青の乱)。「領主権力の撤廃、魔導院の自由と独立」を掲げ、中央魔導院の占拠にまで至るも、政府と教会による、多くの犠牲を伴った都市全体の大規模な封魔術の行使によって青の団は一夜にして壊滅する。同時に、封魔術の触媒として捧げられた都市二区画分に居住する市民の八割死亡。生き残った者についてももれなく自我崩壊ならびに錯乱が見受けられたため、これをすべて生きたまま埋める工事が行われた。
993			「青の乱」以降、魔導院の承認を受ける正規魔術師の志願者が激減。政府と教会、兵力を抱える領主たちへの依存度を高めていく。 在野での魔術研究、領主たちの出資による独自の魔術研究が急速に広まる。魔導院並びに教会の立場が一層不安定に。
994			ついに各地の魔導院から領主出身の魔導院長が一人もいなくなる。独立は成し得たが領主からの支援を一切失った魔導院は、皮肉にもそのまま衰退の一途を辿る。 在野での魔術研究が活発に。魔導院が禁忌と規定していた秘術についても次々に解放され、それに伴いヨーロッパ全体の魔力バランスが不安定に。
995		教会都市、廃墟化	教会都市の中央魔導院にて前代未聞の大規模な事故が発生。女魔導師による秘術発動中の詠唱ミスとも言われるが事故の詳細は不明。爆発の粉塵が、夜空を覆う巨大な花のように見えたとの記述が後に発見される。都市全体を巻き込んだ事故の影響は深刻で、教会都市からは人の姿だけが消え、一夜にして廃墟化する。建物等に大きな影響はなし。



西暦年	月	出来事	詳細
1003		疫病蔓延	より凶悪な魔物が跋扈する世界に変質。天使の教会がこれに対抗する。
1004		ヨーロッパ各地で飢饉 東アジアへ難民流出	天使の教会内部に、識者たちによる「神官制度」が確立。魔導院時代の研究などがまとめられ、結果、世界そのものに対しなんらかの対策を講じなければ世界が崩壊することが裏づけられる。
		ミッドガルド全域で異常気象	各地で内乱が頻発。
1006		砂の国東部に小さな王国成立	沿岸部に住民たちによる自治領が複数発生。
1007		山の国沿岸部に王国成立	国家群の誕生、解体と再編成などが相次ぐ。天使の教会による統治はなかなか実を結ばず、海賊国家なども出現。ミッドガルドは混迷を極める。
1011		超大型魔物、殲滅作戦の成功	旧「森の国」の奥地で、巨大な魔物が現れる。これを天使の教会が鎮圧。天使の教会の認知度と権力が急速に拡大する。
1012		封印の女神誕生	封印システムが完成。ただし神官達の手によって情報は秘匿され、その実態は不明のまま。
1014			各地から「天使の教会」に義勇軍があつまり、ますます強大に。一方で、利権を目当てに集まる地方領主達の手によって政治的腐敗がはじまる。
1016		海の国、教会都市の保護下から離脱し、3カ国に分裂	森の国で飢饉と疫病が発生。5万人以上が死亡。
1017		封印の女神　2代目誕生	「天使の教会」宗主ワンの側近であった女性が、自ら封印の女神を志願する。
1020		元海の国・イングランドによる「神の休戦」宣言	イングランド・スコットランド連合軍、旧砂の国西部「青き丘陵」に侵攻するも膠着状態に。
1021		「天使の教会」内乱 「赤目の病」初の罹患者確認	「天使の教会」の中で内乱が発生。２代目として選出された封印の女神の嫉妬と絶望が発端となり、宗主ワンが追放される。 教会関係者に初めて「赤目の病」罹患者が発生するも、発病直後に転落死。
1022		封印の女神　3代目誕生	3代目女神就任式が教会都市で開催。１万人の観衆が集まる中、反女神派の暴徒による襲撃が行われるが失敗。暴徒は全員処刑される。以降の就任式は神官達による秘密儀式として行われる事になる。
1023		旧砂の国が、旧森の国へと侵攻	旧砂の国の軍隊、旧森の国への南下を開始。
1024		旧森の国、領民の多数が国外へ	ワン、旧森の国で避難民の少女（ロサ）と出会う。
1025		カールレオン建国	
		「天使の教会」宗主グリュン、石の隠れ里にて出生	ロサ、石の隠れ里でワンの子、グリュン（後の「天使の教会」宗主）とグルナを産む。
1027		封印の女神　4代目誕生 封印の女神　5代目誕生 封印の女神　6代目誕生	４代目女神、暗殺。神官により「犯人は教会の理念に背き、世界に混乱をもたらそうとする不逞の輩」との発表がなされる。 ５代目女神、苦痛に耐え切れず幾度となく自殺を試みるも失敗。最終的に女神の意向に沿う形で秘密裏に断頭台にかけられ死亡。
1028		封印の女神　7代目誕生	6代目女神、反女神派により誘拐され行方不明になる。
1029		封印の女神　8代目誕生	7代目女神、暗殺される。
1030		ミッドガルド全域で飢饉 教会都市で「赤目の病」蔓延	教会都市、飢饉の影響と「赤目の病」の蔓延とで急激に荒廃。
1035		カールレオン初代国王崩御 第2代国王即位	カールレオン初代国王、病気により死去。
1039		カールレオン第2代国王暗殺 第3代国王、即位	第3代国王、即位するが重臣たちによって幽閉される。重臣達の手によって「代行会議」と呼ばれる実質上のクーデターが成立する。
1041		グリュン、「天使の教会」宗主となる	各都市で「赤目の病」の発見報告が続く。
1042		封印の女神　9代目誕生	8代目女神、逝去。死因に関する情報は未発表。
1044			神官、女神と封印にまつわる物語を美しい書籍や歌にして、流布に務める。
1045		カールレオン第3代国王幽閉中に病死 第4代国王即位	カールレオン国内での重臣達による「代行会議」の勢力が頂点となる。
1046		第4代国王、先王在位中の重臣たちを毒殺	代行会議内の重臣達の中に造反者が出現。第4代国王側につくものが現れる。
1047		第4代国王、有力貴族数名を処刑後、暗殺される 第5代国王即位	カールレオン国内「代行会議」体制崩壊。同時に第4代国王も魔術によって暗殺される。
1048			カールレオンの混乱を背景に、「天使の教会」の信者が爆発的に増加。国家の長ではなく、世界の柱としての女神の信奉者達が急増する。
1050		第一次精霊戦争勃発	エルフの里で人の手による大虐殺が発生。報復として、エルフと人類による、3年にわたる戦争が繰り広げられる。
1051		宗主グリュン惨殺事件 ヴェルデ、「天使の教会」宗主となる	ワン、「赤い目の暴徒」の噂を聞き、教会都市へ。初めて「赤目の病」を確認。宗主として赤目の病の人々を扇動していた我が子グリュンを殺害し、逃走。ヴェルデにまでは手を出せず。
1053		第一次精霊戦争終結	エルフの里と周辺各国が和解し、エルフの里は永世中立を宣言する。
1054		カールレオン第6代国王即位	カールレオンとエルフの里の二国間貿易協定が成立。
1055		封印の女神　10代目誕生（バアル）	9代目女神、逝去。死因に関する情報は未発表。
1057		エンシェントドラゴンとヴェルドレが契約	封印の女神を巡る神官達の間で派閥間抗争が激化。
1060		ミッドガルド辺境に、ニヴルヘイムとのゲート出現	異世界ニヴルヘイムとのゲートが開き、そこから押し寄せた魔物達による虐殺が横行。ミッドガルドの人口が激減する。
1061		ニヴルヘイム戦役	「天使の教会」への入信者が後を絶たず、神官達はこれを組織して「討伐隊」を編成。少年から老人まで別なく戦役に駆り出される異常な状況に。
1062			「天使の教会」の武装化が進む。同時に、かつての封魔術の研究が再開され、ニヴルヘイムに通じるゲートを閉じる技術が完成。
1063		ニヴルヘイム封印 封印の女神　11代目誕生	ニヴルヘイムのゲートに関する研究調査が終了。同時に、ゲートを開いたのが女神バアルであることが発覚。神官達は彼女の命と女神としての魔力を触媒とし、ニヴルヘイムのゲートを封印。本来であれば数千人分の命と苦痛とを必要とする儀式の一切の負担を、女神バアル一人に負わせることにも成功する。女神バアルは死去するも、死因は未発表。

西暦年	月	出来事	詳細
1066		ウィリアム征服王が巨人魔導兵士群を率いイングランドを制圧 カールレオン第7代国王即位 ガアプ、立太子	この時期、各国での魔導兵器開発が進む。ただし従来兵器との組み合わせ型が多く、過去に失われてしまった巨人魔導兵士を制作する技術は一部国家のみが独占保有していた。
1067		レオナール誕生	魔導兵器・魔術に関する情報を取引する裏市場が発達。各国取り締まりに追われる。
1070		カールレオン王太子ガアプ、隣国の第2王女と婚姻	カールレオンで婚礼にまつわる様々な需要が上昇し、結果として婚礼特需が巻き起こる。
1072		カスティリア・レオン連合王国成立 アルフォンソ6世即位	婚礼に伴う祝賀工事が完了し、主要幹線道路が拡幅される。
		カールレオン第8代国王ガアプ王即位 封印の女神　12代目誕生（アシラ）	11代目女神、死去。死因は「病死」と発表された。封印の女神についてはここ数代死因が発表されておらず、11代目のみが発表されたのは、神官達による政治的な利用がなされた為だと言われている。
1075		聖職叙任権闘争始まる	
		「天使の教会」虐殺事件 宗主ヴェルデ殺害 リュイ、「天使の教会」宗主となる カールレオンに王子カイム誕生	ワンによる「天使の教会」襲撃。宗主ヴェルデのみならず、多くの信者が虐殺される。しかしヴェルデの双子を身籠っていた女性の発見には至らず、リュイとフェイが誕生する。
1077		カノッサの屈辱	聖職叙任権をめぐってローマ教皇と対立していた神聖ローマ皇帝がカノッサの地にて教皇に赦しを乞う。
1080		カールレオンに、王女フリアエ誕生	カールレオン国内で「赤目の病」患者が増加。
1090		ミッドガルド全域に飢饉や反乱が多発	人々の間で、女神アシラに対する不信感が囁かれる。
1092		封印の女神を管理する新神官長にヴェルドレ着任	封印の女神を管理する神官達の間でヴェルドレを中心とする「ヴェルドレ派」が大きな勢力を持つ。
1093		カールレオン国王夫妻崩御 「天使の教会」宗主リュイ、死亡 宗主リュイの妹フェイ、「天使の教会」宗主となる	カールレオン国王夫妻、ブラックドラゴンに殺害される。同じく「天使の教会」宗主リュイ、ブラックドラゴンに襲われて死亡。これをうけて「天使の教会」では幽閉されていたフェイが新たな宗主に。
		「天使の教会」司教マナ出生	ワンの曾孫ラミア、双子（セエレとマナ）を出産。
1094		カールレオン王国が消滅 女神アシラ死去 封印の女神　13代目誕生（フリアエ）	カールレオンからの難民受け入れと利権分配について周辺各国で協議がもたれるが、天使の教会の勢力台頭による各国の状況悪化により、議題は棚上げとなる。
1096		「天使の教会」襲撃事件 宗主フェイと、その子クロエ殺害される	ワン、ネロと共に教会都市を襲撃する。
1099		女神フリアエ死去 イウヴァルト死亡 ノウェ、エリス誕生	カールレオンの元王子・カイム、赤い竜（アンヘル）と契約する。 女神フリアエの元許嫁（イウヴァルト）、ブラックドラゴン（レグナ）と契約する。 ワンの血を継ぐ者（マナ）が隠れ里より連れ去られ、「天使の教会」の司教となる。 13代目女神・フリアエの死因は自殺だったため、14代目女神はすぐに現出しなかった。
		封印の女神　14代目誕生(アンヘル)	神官長ヴェルドレによって、レッドドラゴンが最終封印とされる。
			片田舎の少女（ハンチ）、水難事故に遭いケルピーと契約する。
1100		天使の教会(帝国軍)、瓦解 「赤目の病」沈静化	帝国軍に蔓延していた「赤目の病」が沈静化するも、その理由は不明。 目的を失った連合軍は、各国による利益争いが深刻化。連合軍は事実上瓦解し、各地に戦乱が広がる。戦乱を逃れるため、アジア方面への難民も増加。
1101		封印騎士団結成	各地の混乱が収まり始め、ヴェルドレにより封印騎士団が結成される。
1102			封印騎士団、各地の戦乱を収めつつ規模を拡大。 封印騎士団の規模が拡大するにつれ、ヴェルドレの統率が及ばなくなり、横暴な振舞に至る集団も現れる。 封印騎士団の名声は広がるものの、その一方で略奪などの行為も一般化し、民にとっては恐怖の対象としての側面も強まる。
1103		連合軍残党の騎士オローー、封印騎士団に入団	かつての連合軍の将であった騎士オローが神官長ヴェルドレに入団を直訴。ヴェルドレもこれを快諾し、オローとその部下が封印騎士団に入団。オローと仲間たちの活躍、無血交渉の功績などが瞬く間に広まる。
		神官長ヴェルドレにより封印騎士団長が任命される	ヴェルドレが神官として封印の研究に注力するべく、新たに団長職の設置を提言。これが受理され、オローが騎士団長に任命された。 また、オローの部下が副団長に就任。 封印騎士団内でオローを慕う穏健派と、強硬派の対立が水面下で深まる。
1104		約束の地が発見される	おおいなる時間の波動の研究が始まる。 女神の城周辺が聖地として不可侵領域に定められる。
			ジスモアと名乗る男が、封印騎士団に入団する。ジスモアは武力と知略を駆使し、騎士団内強硬派の中心人物となっていく。
1105		封印騎士団による封印計画が発動	神官長ヴェルドレの発案により封印制度が発動。約束の地にクリスタルの設置を開始する。 クリスタルによって大いなる時間の波動がエネルギーに転換され、飛空艇などの原動力として活用され始める。 カイムは封印計画によって分離されていくアンヘルの断末魔を聞く。 マナ、カイムの左目を傷つけ、彼の元から逃げ出す。逃亡中に記憶を喪失。
		セエレ、封印騎士団の神官となる	封印騎士団、直轄区建設のため、近隣諸国を統治していく。 マナ、元・帝国軍の村に保護される。以後、とある魔導師の庇護のもとで、虐げられる人々の現実に心を痛めながら魔術などを身につける。 カイム、アンヘルを求めて各地をさまよう。 ジスモア、シェイドと契約し、その力をもって初の鍵（聖砂漏）を完成させ、守護者となる。 副団長が遠征先で事故死し、ジスモアが封印騎士団副団長に就任する。
1106			ジスモアの鍵化の実験成功を受け、ヴェルドレとジスモアは封印計画を完璧なものとするために、更なる契約者の捜索を開始する。 エリスが封印騎士団に保護され、入団。 ユーリックが封印騎士団に入団。 ジスモア、ハンチを発見し、封印騎士団に入団させる。 ハンチ、連隊長に就任し、神水の直轄区の守護者となる。
1107		忘れられた遺跡で竜と少年(ノウェ)が発見される	神官セエレが、忘れられた遺跡に救世主が現れるとの神託を告げる。 封印騎士団に発見されたノウェは、騎士団長オローの養子とされた。 ノウェと共にブラックドラゴン・レグナも封印騎士団へ。

西暦年	月	出来事	詳細
1108			美貌の男(ヤハ)、封印騎士団に入団
1110			アンヘルの魂の分離作業が完了。それぞれが直轄区に封印され、守護者による統治開始。
1113			ノウェ、騎士見習いとして初陣する。 エリス、女になる。 背が低く卑しい男(ザンボ)が封印騎士団に裏口で入団。 ザンボ、イフリートと契約し連隊長に就任。気炎の直轄区の守護者となる。
1114		明命の直轄区・封印襲撃事件	カイムが明命の直轄区に現れ、神官長その他を襲撃。
		神官長ヴェルドレ死亡	封印襲撃事件の際、カイムに殺害される。後日セエレが神官長となる。
		直轄区制度完成	襲撃事件にて騎士団長オローが殉死する。同行していた準級騎士(ユーリック)は大怪我を負い、オローを見捨てて逃走。その際、ユーリックは死神と契約し、それをもって直轄区制度が完成した。
		ジスモア、封印騎士団団長に就任	ジスモアによる恐怖統治時代が幕を開ける。
1117			ノウェが正騎士として封印騎士団に入団。 ノウェとエリスが気炎の直轄区にて反逆者マナと出会う。 マナが封印破壊の罪で処刑されかかるも逃走。 ジスモアの策略を知ったノウェは封印騎士団を離れる。 ノウェとマナ、封印の破壊を進める。その結果、封印の礎たるアンヘルが復活するも、既に狂った状態であったため、カイムの願いを聞き届ける形で、ノウェはこれを撃ち落とす。 封印を失った世界は、崩壊へ向かう。
		ノウェ、真人類として覚醒	ノウェ、神竜族であるレグナを倒し、神をも倒し、封印システムの必要がない世界をもたらす。
1118		第二次民族大移動	ミッドガルドにおける災厄の再来を恐れる人々が世界各地に新天地を求め、旅立つムーブメントが起こる。
1130		「天使の教会」の理念を継ぐ人々によってシチリア王国創建	「天使の教会」の名称は徐々に「教会」と短縮され、人々に信仰として細々と残ることに。
1241		ワールシュタットの戦い	モンゴルのヨーロッパ遠征軍を、ドイツ・ポーランドの連合軍が迎え撃ち、敗戦。これに教会が組織したテンプル騎士団も少数ながら加勢した。
1271		マルコポーロ、東方への旅へ出立	「赤目の病」への薬を求め、マルコポーロが父・叔父とともに東方諸国探索に乗り出す。
1274		元軍、日本に侵攻(文永の役)	10月5日。元軍の船団が対馬の小茂田浜に上陸。博多まで侵攻するも、戦況の悪化により撤退。
1281		元軍、日本に再度侵攻(弘安の役)	元軍再度の侵攻。「カミカゼ」と称される暴風雨が吹き荒び、元の水軍を沈めたとされるが、これは元軍の軍師が西方より伝えられた魔術を正しく発動できなかったために起こった。
1347		ヨーロッパ全土に「赤目の病」が大流行	目が赤く染まり、高熱、奇声を発してそのまま死亡する例が多数。歴史上の「赤目の病」と症状は異なっていたものの「赤死病」などと呼ばれ、恐れられた。人口が激減し、やがて自然消滅的に収束。その詳細は不明。
1409		教会大分裂	教会内でインノケンティウス7世とベネディクトゥス13世らによる教皇争いが長期化。混乱を極める。
1480		フランスによる国土の統一	シャルル7世、百年戦争で最終的に勝利。
1521		ドイツ・フランスによるイタリア戦争勃発	魔導兵器が多数投入され、戦禍が拡大した。
1543		日本の種子島に鉄砲と魔法技術を合わせた魔法銃が伝来	魔法銃の伝来理由には諸説あり、これ以前にも諸般大名による密輸が存在したとの説もある。
1549		ザビエル、教会の教えをアジア、日本に伝える	ウタヒメ、ウタウタイの概念が、日本の浄瑠璃文化に浸透する。
1575		長篠の戦い	織田信長、魔法銃による三段撃ちで武田勝頼を破る。この頃より、織田信長「第六天魔王」を名乗りはじめ、その瞳には赤い光が射していたとの記述が残る。
1582		本能寺の変	織田信長をはじめとする、赤目と化した側近たちを本能寺に集めた明智光秀はこれを一斉に焼き払ったとされる。以後、赤目の者に関する記述はなし。
1588		イングランド、スペインの無敵艦隊を超巨大魔導兵器によって打ち破る	イングランドの使用した魔導兵器は一つ目の巨人兵器による熱線攻撃であったと伝えられる。
1603		イングランドとスコットランドが同盟	エリザベス1世の死により、ジェームズ6世がイングランド王位に即位。
1634		江戸幕府、鎖国を強化	鎖国政策の一環として長崎に人工島を建設。
1639		江戸幕府、キリスト教弾圧を強化	幕府が教会の布教と植民地化を避けるために外国人を国外追放。
1707		イングランドとスコットランドは合併しグレートブリテン王国となる	5月1日。イングランド議会、スコットランド議会双方による連合法が可決。グレートブリテン王国が成立。
1734		イングランドに王立魔道院建設	ヨーロッパで「天使の教会」復古運動が盛んになる。
1756		七年戦争勃発	グレートブリテン王国と、オーストリア・ロシア・フランスなどのヨーロッパ諸国連合との間で戦争が行われた。
1776		アメリカ独立宣言	グレートブリテン王国によって支配されていた13の植民地が、独立を宣言。
1795		ポーランド王国の滅亡	1793年～94年に発生した「コシチューシュコ蜂起」の失敗により、第三次ポーランド分割が行われ、ポーランド王国は消滅する。
1806		神聖ローマ帝国消滅	8月6日に神聖ローマ皇帝フランツ2世が、その退位と帝国の解散を宣言した。
1864		京都で「新撰組」による池田屋事件発生	薩摩藩に赤い目を持つ侍が大勢確認される。新撰組の生き残り、土方歳三が北方の地に魔導兵器を完備した巨大な建造物「五稜郭」を建設し、これを大量に駆逐。以後、赤い目をした剣豪の噂は途絶える。
1914		サラエボ事件 第一次世界大戦勃発	オーストリア＝ハンガリー帝国の皇位継承者夫妻が銃撃される。犯人は「赤い目をした男」だったと言われているが詳細は不明。
1929		世界恐慌	10月24日にニューヨーク証券取引所での株価大暴落をきっかけとする世界的な経済不況「世界恐慌」が起きる。10月24日は後に「暗黒の木曜日」と呼ばれる。
1939		第二次世界大戦勃発	ドイツで「赤目の病」大流行。
1940		日独伊三国同盟	8月27日。日本、ドイツ、イタリアの間で「日独伊三国間條約」が結ばれる。この三国同盟が第二次世界大戦における枢軸国側の原型となった。
1941		大東亜戦争(太平洋戦争)勃発	日本がマレー半島にて英印軍と交戦開始。同日オアフ島アメリカ軍基地に対しても奇襲攻撃をかける。これをもって世界規模の戦争へと発達。日本が参加した以降の戦争は大東亜戦争と自称していたが、後に太平洋戦争と呼ばれる事になる。

西暦年	月	出来事	詳細
1945		ポツダム宣言	7月26日。アメリカ、イギリス、中華民国共同で日本に対して発せられた全日本軍の無条件降伏を要求した宣言。
1948		ベルリン封鎖	ソ連政府が西ベルリンに向かう全ての鉄路と道路を封鎖。
1957		ソ連、スプートニク1号の打ち上げに成功	ここより米ソの宇宙開発競争が始まる。
1963		アメリカでケネディ大統領暗殺	11月22日。アメリカ合衆国大統領ジョン・F・ケネディが、テキサス州ダラスで狙撃暗殺される。
1969		アメリカが打ち上げたアポロ11号、月に着陸	7月16日、ニール・アームストロング船長他のアメリカ人宇宙飛行士が人類初の月着陸を成功させる。
1973		オイルショック	第四次中東戦争をきっかけとする原油の価格暴騰が、石油に頼った各国の経済発展に大きな打撃を与えた。
1985		メキシコで大地震発生	9月19日にメキシコで大地震が発生。マグニチュード8.0の巨大地震は死者9500名以上となる大惨事となった。
1986		アメリカ、スペースシャトル・チャレンジャー号爆発事故	1月28日。アメリカ合衆国のスペース・シャトルチャレンジャー号が打ち上げ失敗。7名の犠牲者を出す。
		ソ連、チェルノブイリ原発事故	4月26日。ソビエト連邦のチェルノブイリ原子力発電所で原子力事故発生。
1989		日本、昭和天皇が崩御 ベルリンの壁崩壊	日本では新しい年号が「平成」と命名される。
1990		東西ドイツ統一	ベルリンの壁崩壊後、ドイツ連邦共和国(西ドイツ)にドイツ民主共和国(東ドイツ)が編入される。「ドイツ再統一」とも呼ばれる。
1991		湾岸戦争勃発 ソ連が消滅	12月25日にソビエト連邦大統領ゴルバチョフ辞任。翌日、ソビエト連邦最高会議によってソビエト連邦の解体が宣言される。
1995		日本、阪神淡路大震災 東京地下鉄テロ事件	3月20日。オウム真理教が東京の地下鉄で起こした同時多発テロ事件。神経ガスのサリンが使用され、死者13人が出た。
2000		アメリカ、同時多発テロ事件	9月11日。アメリカ合衆国で発生した、航空機を使った4つのテロ事件が発生。死亡者3000名以上、負傷者6000名以上に及び、二十世紀最大のテロ事件となる。
2003	6	謎の巨人と赤い竜が出現 【6.12】事件勃発	2003年6月12日15時頃。新宿に突如巨大な白い像(以下「巨人」と呼称)が出現。 同時刻に赤い竜のような生命体(以下「竜」と呼称)が現れ「巨人」と「竜」は交戦。その攻撃原理効用ともに不明。 対称に対する攻撃方法について、自衛隊内で緊急検討。内閣に緊急対策室が設立。 同日16時頃。「竜」の攻撃で「巨人」崩壊。なお、「巨人」からは質量が観測されず、崩壊時も地上への被害は比較的軽微。 「巨人」崩壊直後、「航空自衛隊 第6航空団 第303飛行隊:スカルフェイス機」が「竜」を撃墜。「竜」の亡骸は政府により秘密裏に研究施設へ。 以降、この事件は【6.12】と呼称される。事件による死者数56名、重軽傷者数320名、被害総額6億円以上。 【6.12】の不可解な事象には緘口令が敷かれるも、すぐにネットなどを媒体に情報が拡散。テロや他国の陰謀説が渦巻き、大混乱に。
	9	首脳会議開催	事件より3ヵ月後に、【6.12】について話し合われる首脳会議が開催(参加国は日本、アメリカ、中国、ロシア)。 アメリカはテロと認知し、仮想敵国への強硬姿勢を示す(日本政府は大幅な軍事費用拡大の考えを示唆)。
	12	奇病感染者出現	日本東京都新宿区にて、全身が徐々に白く塩化する原因不明の奇病が発生。致死率100%。 奇病に関する研究開始(当初は特定の条件下でしか発病しない極めて稀な病と考えられ、楽観視される)。
2004	2	奇病による死者が爆発的に増加	奇病の感染者が増大。感染者はとくに、新宿へ集中。
	4	奇病で性格が凶暴化した人間が出現	感染者のなかから、性格が凶暴化する者が出現。死者と凶暴化した人間が新宿に集まり、機能的に新宿が空洞化。 日本、世界各国から病気の究明を迫られる。
	5	凶暴化した人間が新宿に蔓延	新宿での感染者がますます増大。研究により、感染者は「凶暴化する人間」と「死亡する人間」がいることが判明。
	6	奇病を「白塩化症候群」と命名	2003年12月より研究していた医師グループが発表。「凶暴化」「死亡」についての原因は不明であるが、同一の病であることが認知される。 都庁が移転。同時に、永田町と皇居の移転が提言されるも、宮内庁はこれを拒否。 永田町は議席が埋まらなくなるも、残留を発表。
	7	新宿が危機レベル4に制定	新宿区の危機レベルが最高に達し、交通手段の廃止や、道路の簡易封鎖が進む。
	9	「新宿封鎖計画」発表	感染経路の報告を受け、一時、新宿を物理的に封鎖することを発表。 人道主義からの反対と反デモを受ける。当初、新聞調査による世論は反対意見が多数(ただし、ネット上では賛成意見が多数)。 新宿でさる重要人物が凶暴化した白塩化症候群の暴徒に襲撃され死亡。マスコミがあおりたて、世論は一斉に新宿区の封鎖賛成へ傾く。
	10	「新宿封鎖警計画」実行 「エリコの壁」の設置	新宿周辺に巨大な壁を設置し、物理的に封鎖。壁の呼称は「エリコの壁」。 白塩化症候群で凶暴化した人間の鎮圧続行の声明が出され反対デモが各国で勃発。世界的に日本政府を非難する声が起こる。
	12	壁の内側の最後の映像が流出	新宿区内にわざと残った報道関係者からの通信が、とある映像を最後に途切れる。 映像は白い大きな生物が現れた辺りで悲鳴と共に途切れる。映像は放映されず(ただしネット上では流出)。
2005	12	「白塩化症候群」の感染、一時沈静化	自衛隊、自警団による凶暴化した人間の駆逐が続く。凶暴化した人間、減少傾向に。 日本政府、白塩化症候群の感染は一時的に沈静化したと発表(病に関する研究は引き続き継続)。
2006	5	「白塩化症候群」に関する事実が判明	白塩化症候群の症状発病時に「死ぬ」か「凶暴化する」かは、遺伝子レベルで決定する、との研究結果が政府へ提出される。(一部染色体に軽度の異常を持っていた人が凶暴化する可能性が高いという見解)。 結果の発表は行われずに、更なる調査が秘密裏に進められる(この研究結果はデータの捏造による誤りと後に判明)。
		「竜」の亡骸を持つ研究所襲撃事件	「竜」の亡骸を狙った襲撃事件が勃発。警備隊、警察、自衛隊によって抑えられる。 竜の亡骸は守られるも、事件の裏には宗教団体や北米の存在が噂される。この事件以後、自衛隊の行動が過激化傾向に。
2007	10	新宿の衛星写真に異変	新宿の画像に不可思議な黒点が写る(報告されるも重要視されず、報道などもとくになし)。
2008	2	「エリコの壁」崩壊	新宿のエリコの壁が内側から破壊される(破壊時には【6.12】の巨人が発していた音と同様のものが鳴り響いたことを確認)。
		「レギオン」と「レッドアイ」の存在を確認	エリコの壁の内側から、大量の白い凶暴な化け物(以下「レギオン」と呼称)が出現。人々を無造作に襲い出し、殺戮を繰り返す。 レギオンを秩序立てて率いる、赤い目の化け物(以下「レッドアイ」と呼称)が目撃される。
		自衛隊による「レギオン駆逐作戦」開始	自衛隊が「レギオン」と「レッドアイ」の駆逐作戦を展開。 レッドアイによる指揮により、レギオンが組織化しており、作戦は困難を極める。
	5	「白塩化症候群」が再び広まる	東京(新宿)を中心に、関東圏へと感染拡大。
	8	「竜」の研究所が密かに移転	「竜」の死体を研究する機関の研究所が、密か日本から移転。移転先は公表されない(アメリカニューメキシコ州ロズウェルとする説が一般的)。
	9	政府機関と皇居が九州に移転	政府機関、皇居ともに東京を離れることに決定。移転先は被害の少ない九州。

西暦年	月	出来事	詳細
2008	10	日本本州全土が戦場化	病による死亡者、およびレギオン化する人間が増加。レギオンと自衛隊との戦闘で本州は混乱し、戦争状態に。 九州、北海道へ逃亡が増加。国外へ逃亡しようにも、日本からの入国拒否対策が実施される事態に。 混乱に乗じ、犯罪が多発。海外からの干渉も日に日に激しくなり、日本政府は困窮状態に。 アメリカから軍事協定の話が持ち上がるが、内容は日本にとって非常に不利なものに(他国は反対を提唱)。
2009	1	「日米共同戦線宣言」が発表	物資や軍備に不安を感じた日本政府は、アメリカと共同戦線を張ることに決定。 アメリカはレギオンの死体、および捕獲者を持ち帰り、軍事利用する目的で戦線参加。 米軍が日本に上陸。自衛隊と協力し、対レギオン戦線を拡大。人間側が優勢に。
2009	3	「新宿壊滅作戦」決行	新宿から無尽蔵に湧き出るレギオンへの対策として、「新宿壊滅作戦」が実行。 新宿への一斉砲撃が行われるも、レギオンの数の減少は極めて微少。 アメリカでは「レギオン」の研究が進められていたが、有効な手段は不透明。
	4	新宿への核攻撃が決定	アメリカ、日本政府へ新宿の核攻撃作戦を提案。検討の結果、核攻撃が決定。 核攻撃作戦発表。国内では賛否両論が巻き起こるも、国際世論は賛成の風向き。
	8	新宿を中心に核が投下	8月6日、新宿への核攻撃作戦が実行される。図らずも日付までが同じとなり、「ヒロシマの悲劇再び」と呼ばれるように。 新宿を皮切りに、核による攻撃が本格化。日本全土が焦土となっていく。 新宿は壊滅。「グランド・ゼロ」と呼ばれるように。
	11	日本国内から、すべての「レギオン」の消滅が確認	科学的検証をはじめとする、さまざまな手段による確認作業の結果、すべてのレギオンの消滅が確認。
2010	2	中国で「レギオン化」した人間が出現	中国でレギオン化し、凶暴になった人間が人々を襲う事件が発生(日本国外で初)。
	3	世界中で「白塩化症候群」が発症開始	世界中で「白塩化症候群」の発病が確認される。研究が各国で次々と進められるように。
	4	「レッドアイ」の生存が確認	世界中で「死」と「レギオン化」が広まり、世界規模で混乱が加速。 死滅したと思われていた「レッドアイ」の生存も確認。
	6	「竜」の研究から「多元世界説」が立証	秘密裏に進んでいた「竜」の亡骸の研究により、この世界とは空間を別にして存在する、異世界の存在を裏付けた「多元世界説」が立証。
			別世界からの端末干渉の研究が進んだ結果、本来この世界には存在し得なかった粒子が発見される。 その粒子は【6.12】の巨人が崩壊した際の体の粒子と判明。以後、この粒子は「魔素」と呼称。 「白塩化症候群」の原因は、この「魔素」であるとの研究結果が発表。 「魔素」による白塩化は、熱核攻撃などにおける物理的攻撃手段での消滅は不可能と判明(皮肉なことに、核攻撃による衝撃で全世界に魔素が拡散し、世界規模で「白塩化症候群」が広まることに)。 病の感染経路は体液や排泄物からと判明。感染源となる「魔素」は咳や唾にも含まれるため、空気感染と同等の扱いに。 「魔素」の発見により、さまざまな分野のテクノロジーにブレイクスルーが発生。 「多元世界」の研究が進み、これまで仮説であった「多元世界すべてでエネルギーは保存される」という説が立証。
2011	10	「研究所襲撃事件」勃発	「竜」の亡骸を運び込んだとされる研究所が襲撃を受ける。犯人不明。研究所は壊滅的状態に。 「竜」の亡骸はなくなっており、事件の裏には宗教団体や北米の存在が噂される(あくまで推測レベル)。 結局報道もうやむやとなり、事件に関する情報は完全に報道されなくなる。
2014	3	「ゲシュタルト計画」始動	「白塩化症候群」の感染を防ぐため、「ゲシュタルト計画」が始動。人間の魂を抜き出す「ゲシュタルト化」技術の研究が進む。 「ゲシュタルト化」の人体実験が成功。同時期、ゲシュタルト化した人間を元の体に戻す実験も成功する。
	5	「魔法」についての研究が進む	「魔素」を通じ、多元世界からのエネルギーを搾取し、「無より有を生み出す技術」が確立。以後、この技術は「魔法」と呼称(ただし、「魔法」を使用できるのは「竜」の培養組織を有したことで、多元世界を分ける「壁」を越える力を得た「ゲシュタルト」のみ)。
	11	「魔法」による「レギオン壊滅作戦」を実行	「ゲシュタルト」のなかから、魔法能力に特化した者を訓練。レギオンとの戦闘を試みる実験を開始。 作戦はゲシュタルトの意識が覚醒している日に決行。しかし、作戦はほぼ失敗。 作戦に参加したゲシュタルトたちが、自我の呵責に耐え切れず精神崩壊(レギオンが元人間で、魂への干渉を受けた自分達と環境が似ているため、と考えられる)。
2015		「ゲシュタルト化」普及せず	「ゲシュタルト化」の技術は人間から忌み嫌われており、定着は進まず。 研究自体は進んでおり、ゲシュタルト化した魂の肉体が失われてしまった場合の打開策を検討する段階に。
2016	2	「ルシフェラーゼ」が完成	「白塩化症候群」の進行を遅らせる薬品「ルシフェラーゼ」が完成。この薬品を投与した人間の軍隊化が図られる。
	5	「ルシフェラーゼ軍」が結成	選りすぐりの人間を集めて「ルシフェラーゼ」を投与。その人間を組織化し、軍隊を結成。 軍隊はレギオン駆逐のための作戦を決行し、成功を収める。以後、この動きは全世界へと波及。 「レギオン」の殲滅を目的とした「第一次十字軍」をブラジルへと派遣。レギオンとの壮絶な戦闘の末、全滅。
	12	「ハーメルン機関」発足	「ルシフェラーゼ」の効果が若年層ほど高いことが判明。身体能力の高い子どもへ優先的に投与し、軍属を促すように。 従軍者をほぼ10代の若者で構成した「第5次十字軍」が組織される。 身体能力の高い子どもを世界中からスカウトし、戦闘機械として育てる国際組織「ハーメルン機関」が設立。
2018		「国立兵器研究所」設立	国際組織「ハーメルン機関」に対し、日本国政府内でも軍事力強化の声が上がる。 「魔素」の基本研究と兵器への転用実験を行う「国立兵器研究所」が設立(人体実験による強化人間の製造が基本目的)。 研究所は機密事項に。政府内でのコードネームは「ムラサキ」。
2019		「レギオン」と「十字軍」の戦い、膠着状態に	「レギオン」と「十字軍」の戦いが膠着。イタチゴッコと化し、ある一定以上の効果は見込めないように(ただし、それ以上の打開策もなく、「十字軍」は引き続き派遣され続ける)。 子どもが多い国ほど「ハーメルン機関」内での発言力が増す傾向に。 日本は経済的に弱体化しており、生き延びた人の多くは九州を中心に生活。
2022			人類の総数が八億三千万人以下となる。
2023		貧富の差の拡大による世界恐慌に突入	度重なる「レギオン」との戦いなどで世界全体の貧富の差が広がり、世界的な恐慌時代に突入。世界中にスラムが拡大する。
2025	1	「レプリカント化」の技術が確立	「ゲシュタルト化」した人間に「器」を用意し、その器にゲシュタルトが入り込むことが成功。 ゲシュタルト化した人間の肉体から採取した情報を元に作られるその器を「レプリカント」と呼称。 これら一連の計画は10年以上前から進められており、「ゲシュタルト計画」という総称で呼ばれる。
2026	6	「国立兵器研究所」で新型兵器暴走事故	「国立兵器研究所」で作られていた「実験兵器6号」が暴走。急遽「実験平気7号」による封印作戦が実行。 「魔素」による人体実験の危険性が判明し、研究は頓挫。研究所自体も大幅に縮小される。
2030		「レギオン」のリーダー「レッドアイ」全滅	「第13次十字軍」の隊長が、エルサレムにて「レギオン」の統率者である「レッドアイ」の最後の一匹を殺害。 知性を持つレッドアイの全滅で、レギオンの行動は統制が取れなくなる。 十字軍の隊長はレッドアイとの戦闘時の傷が元で死亡。
2031		「白塩化症候群」、さらに蔓延	「レッドアイ」の死亡によりレギオンの物理的な脅威は排除。ただし、「白塩化症候群」は世界中に蔓延。
2032	2	「レプリカント化」の技術が一般に公開	「ゲシュタルト化」と「レプリカント化」の技術が対になって一般人へ公開(一部の上流階級はすでにゲシュタルト化して保護中)。 多くの人間がゲシュタルト化を前向きにとらえるようになる。
	3	「世界浄化機関」設立	レプリカントの無意識下へ、「レギオン」の討伐と「レプリカントシステム」の継続を活動目的として植えつけることに成功。

西暦年	月	出来事	詳細
2032		「ゲシュタルト計画」最終段階へ	世界中の人間を「ゲシュタルト化」し、その「レプリカント」を創生。それを半永久的に繰り返し続ける「レプリカントシステム」を構築。 「ゲシュタルト計画」最終段階へ移行。レプリカントにレギオン討伐を任せ、世界が病の危険から脱するまでゲシュタルトは眠りにつく。 レプリカントシステムの管理者として、半永久的に動き続ける「アンドロイド」を世界各地に配置。 レプリカントは病の元である「魔素」を集めることをアンドロイドに指示される。集めた魔素はアンドロイドの司祭の元、「祭」と呼ばれる儀式で異世界へ放出。 莫大な予算がかかるため、「ゲシュタルト化」できるのは一部の上流階級の人間のみ。
2033		「黒の書計画」が開始	異世界の技術により、本のような器に「ゲシュタルト」を封印することに成功。「黒の書」や「白の書」をはじめ、13冊の「封印の書」が作られる。 「黒の書」と「白の書」を同時に作動させることで生まれる膨大なエネルギーを利用し、ゲシュタルトを各々の「レプリカント」へ強制的に戻す「黒の書計画」が立案。 世界から「レギオン」と「白塩化症候群」を駆逐後、このシステムを利用して、ゲシュタルトがレプリカントへと戻ることを画策。 日本政府が国内での「レギオン終息宣言」を出す。
2049		ニーア(父)とヨナが「ゲシュタルト化」	「ゲシュタルト化」した魂は、一定時間の経過で、高確率で自我を失い凶暴化(以下「崩壊体」と呼称)。さらに一定時間経過後、確実に死に至ることが発覚。 解析の結果、「ゲシュタルト」の自我を安定させるにはゲシュタルト化してなお安定する個体の「魔素」を抽出する必要があることが判明。
2050			「竜の会」事件。日本国政府が秘密裏に研究していたレッドアイ生存個体「検体B」が暴走。都市部で争乱を巻き起こす。レギオンを所有している事についての国際問題化を恐れた政府は、自衛隊内部組織「竜の会」が新兵器を用いた軍事クーデターであると発表。竜の会主宰である自衛隊新宿方面防衛中隊中隊長の由良正義は逃亡して消息不明に。この事件以降、日本国内政治に対して世界浄化機関の介入が強化される事になった。
2053		ニーア(兄)とヨナが「ゲシュタルト化」	「世界浄化機関」は、安定個体を探すために貧しい人間たちへ「黒の書」の特殊なクローンを供給。ゲシュタルトを増産し、崩壊体にならない個体を探す(計画の実施は「ハーメルン機関」が担当)。 新宿(グランド・ゼロ)の汚染が加速。残留住人が半減。 「ハーメルン機関」による実験の中で安定個体(個体名「ニーア」)が発見される。安定個体は「オリジナル・ゲシュタルト」と呼ばれる。 オリジナル・ゲシュタルトから「ゲシュタルト化しても自我を保てる魔素」の提供を「ハーメルン機関」が要望。オリジナル・ゲシュタルトの家族(妹)に関する治療と引き替えに、魔素提供契約が行われる。
2764		「レプリカント」たちに意思が萌芽	システムの継続と魔素の回収を続けていた「レプリカント」たちへ、徐々に意思が芽生える。 最初は子供のような意思であったが、急速に発達し、人間の思考に近い考え方をするように。
3000		「レプリカント」たちが文化を形成	ほとんどの「レプリカント」が意思を獲得。元である「ゲシュタルト」の人格は関係なく、環境の影響を受けて成長するように。 住んでいる土地ごとに異なる、文化や文明が急速に発展(中世の頃より少し進んだ程度で、基本的には昔の遺物に寄り添って生活)。
3276		「レッドアイ」が復活	「レプリカント」たちによる世界の浄化が進行。「レギオン」が大幅に減少してきたころ、一人のレプリカントが禁断の地「エルサレム」へ侵入。 若者の目的は「死んだ恋人(レプリカント)を蘇らせること」。若者が望むと最後の「レッドアイ」の亡骸である白い繭のような塊から、突如恋人が復活。 蘇った恋人は赤い目をしており、自我はほぼなく、圧倒的な力で若者をその場で虐殺。以後、新たなレッドアイとしてレギオンを統治。
3287		「レギオン」の壊滅	新たな「レッドアイ」の復活で、「レギオン」の脅威も復活。「レプリカント」たちが守ってきた世界が滅びに瀕する。 あるアンドロイドと4人のレプリカントがレッドアイに戦いを挑み、これを撃破。すべてのレギオンを殲滅して「魔素」を異世界へと還元。 世界の浄化が確認される。
3288		ゲシュタルト化した人々が目を覚まし出す	世界の浄化を受け、「ゲシュタルト」たちが覚醒。しかし、自我を得ていた「レプリカント」たちは彼らを「マモノ」と呼称し、己の肉体を奪う存在として敵視。 レプリカントとゲシュタルトによる戦いが始まる(アンドロイドの支配力が強い一部の土地では、ゲシュタルトを受け入れることが啓示され、無事に人間に戻る者も)。
3300		レプリカントとゲシュタルトの争い、本格化	「ゲシュタルト」達は「レプリカント」の体に戻るため、「黒の書計画」による「復活の儀式」を目指す。 そんな中、オリジナル・ゲシュタルト(ニーア)の「魔素」を取り込んだにも関わらず、凶暴化して「崩壊体」となるゲシュタルトが出現し始める。 このころ、1000年以上魔素を供給しつづけていたニーアは、このままでは妹が復活しないという事実に気付き始める。
3361		レプリカント・ニーア(父)が白の書を手に入れる	ゲシュタルト・ニーア、妹を「レプリカント」の肉体へ戻すため、オリジナルの「黒の書」を入手。
3465		レプリカント・ニーア(兄)が白の書を手に入れる	管理者(監視者)であるアンドロイド「デボル/ポポル」が「ハーメルン機関」によるプログラムのとおり、ゲシュタルト・ニーアを「ゲシュタルト」の救世主と認定。動きを補佐するように。
		レプリカント・ニーア、白の書とともに出立	デボルとポポルはレプリカント・ニーアに「封印されし言葉」を集めさせ、黒の書と融合させることで「黒の書計画」の実現を目指す。
		レプリカント・ニーア、崖の村の女戦士(カイネ)と出会う	
		レプリカント・ニーアとカイネ、石化の目を持つ少年(エミール)に出会う	レプリカント集落にて黒文病が多発。 ゲシュタルト・ニーアが予定外行動を行い、黒の書計画に異変が発生しはじめる。
		ゲシュタルト・ニーア、レプリカント・ヨナを奪還すべく村を襲撃 カイネ、石化	旧東京管理地域のデパートや軍需工場跡、高層ビル群などで次々と事故が発生。管理者からの報告によるとゲシュタルト・ニーアが関与している可能性が示唆される。
3470		エミール、実験兵器6号と融合	実験兵器7号の魔力が飛躍的に増大。
		カイネ、石化から解放される	
		レプリカント・ニーア、世話役の双子姉妹(デボルポポル)と対立	ゲシュタルト・ニーアを特異点として認定。 旧東京管理地域の管理者(デボル/ポポル)が破壊される。
		レプリカント・ニーア、ゲシュタルト・ニーアを破壊 ゲシュタルト・ヨナ、消滅	
3473		レプリカント・ニーア再構成される	旧東京管理管理区域で記録サーバーが消失。
4198		最後の人類(ゲシュタルト)が消滅	
5012		宇宙人襲来	

Weapon Story ウェポンストーリー

『ドラッグ オン ドラグーン』シリーズ、および『ニーア レプリカント（ニーア ゲシュタルト』に登場した数多の武器。その個々に「ウェポンストーリー」と呼ばれる物語が綴られており、それぞれの歴史を垣間見ることができる。これらもまた、壮大な物語を紐解くピースのひとつ。ここでは、その236のピース（武器）を五十音順に掲載している。なかにはタイトルを越えて、あるいは時間や場所をも越えて登場した同名（もしくは同一）の武器もあり、その場合はより新しい作品の名称とグラフィックを掲載している。

Index 索引

赤の旋風	[あかのせんぷう]	252	囚われの女神	[とらわれのめがみ]	265
悪魔の鉄棍	[あくまのてっこん]	252	嘆きの鎚矛	[なげきのつちほこ]	265
天叢雲剣	[あまのむらくものつるぎ]	252	名もなき刀工の剣	[なもなきとうこうのけん]	265
イウヴァルトの長剣	[いうう゛ぁるとのちょうけん]	253	南海の魔神	[なんかいのまじん]	265
古の覇王	[いにしえのはおう]	253	涅槃の短剣	[ねはんのたんけん]	266
戒めの塔	[いましめのとう]	253	ノウェの剣	[のうぇのけん]	266
エリスの槍	[えりすのやり]	253	ノウェの長剣	[のうぇのちょうけん]	266
炎風の鎚矛	[えんぷうのつちほこ]	254	農民の残夢	[のうみんのざんむ]	266
王位簒奪者の槍	[おういさんだつしゃのやり]	254	信義	[のぶよし]	267
王妃の玉座	[おうひのぎょくざ]	254	バールベリトの涙	[ばーるべりとのなみだ]	267
鬼を裂くもの	[おにをさくもの]	255	背信の刃	[はいしんのやいば]	267
オローの剣・鷹	[おろーのけん・たか]	255	背理の鎌	[はいりのかま]	268
オローの剣・獅子	[おろーのけん・しし]	255	破戒の鎚矛	[はかいのつちほこ]	268
解放の剣	[かいほうのけん]	255	白蝋の剣	[はくろうのけん]	268
カイムの剣	[かいむのけん]	255	破剣・封天の韻律	[はけん・ほうてんのいんりつ]	268
霞切り	[かすみぎり]	256	破獄の針鼠	[はごくのしんそ]	268
悲しみの棘	[かなしみのとげ]	256	ハンチの槍	[はんちのやり]	269
火鱗の戦斧	[かりんのせんぷ]	256	日出国の魔刃	[ひいづるくにのまじん]	269
渇きの戦斧	[かわきのせんぷ]	256	人斬りの断末魔	[ひときりのだんまつま]	269
救済の聖刃	[きゅうさいのせいじん]	256	百獣の剣	[ひゃくじゅうのけん]	269
魚人の宝杖	[ぎょじんのほうじょう]	257	百獣の剣王	[ひゃくじゅうのけんおう]	269
銀の鳳蝶	[ぎんのあげは]	257	百獣の双槍	[ひゃくじゅうのそうそう]	270
愚者の慟哭	[ぐしゃのどうこく]	257	封印騎士団の呪杖	[ふういんきしだんのじゅじょう]	270
愚者の抱擁	[ぐしゃのほうよう]	257	深い闇	[ふかいやみ]	270
愚者の盟約	[ぐしゃのめいやく]	257	不死鳥の囀り	[ふしちょうのさえずり]	270
首切り包丁	[くびきりぼうちょう]	258	不死鳥の大剣	[ふしちょうのたいけん]	270
月下の麗人	[げっかのれいじん]	258	不死鳥の短剣	[ふしちょうのたんけん]	271
月光と闇	[げっこうとやみ]	258	不死鳥の槍	[ふしちょうのやり]	271
結束の剣	[けっそくのけん]	258	不浄なる斧	[ふじょうなるおの]	271
血族の紋章	[けつぞくのもんしょう]	259	双子の牙	[ふたごのきば]	271
賢者の意志	[けんじゃのいし]	259	兵士長の聖槍	[へいしちょうのせいそう]	272
皇帝の槍	[こうていのやり]	259	忘却の羽根	[ぼうきゃくのはね]	272
拷問部屋の肉塊	[ごうもんべやのにくかい]	259	封剣・破天の旋律	[ほうけん・はてんのせんりつ]	272
護衛隊士の誉	[ごえいたいしのほまれ]	259	亡国の礎	[ぼうこくのいしずえ]	272
護衛兵士の剣	[ごえいへいしのけん]	260	封杖・破天の詠歌	[ほうじょう・はてんのえいか]	272
斉天の赤杖	[さいてんのせきじょう]	260	封刃・破天の鳴弦	[ほうじん・はてんのめいげん]	273
ザンボの斧	[ざんぼのおの]	260	封槍・破天の円舞	[ほうそう・はてんのえんぶ]	273
死神の大鎌	[しにがみのおおがま]	260	封斧・破天の鼓動	[ほうふ・はてんのこどう]	273
死の舞踏	[しのぶとう]	260	北海の歌姫	[ほっかいのうたひめ]	273
少年の欲望	[しょうねんのよくぼう]	261	没落した王家の剣	[ぼつらくしたおうけのけん]	273
招雷の槍	[しょうらいのやり]	261	骨砕き	[ほねくだき]	274
処刑台の記憶	[しょけいだいのきおく]	261	焔の簧	[ほむらのした]	274
脛削りの鉄	[すねけずりのてつ]	261	魔印の銅剣	[まいんのどうけん]	274
聖石の杖	[せいせきのつえ]	261	マナの杖	[まなのつえ]	274
聖なる鎚矛	[せいなるつちほこ]	262	守りの槍	[まもりのやり]	274
痩躯の魔術師	[そうくのまじゅつし]	262	迷宮の息	[めいきゅうのいき]	275
草原の竜騎槍	[そうげんのりゅうきそう]	262	迷宮の歌	[めいきゅうのうた]	275
鷹羽根の槍	[たかばねのやり]	262	迷宮の声	[めいきゅうのこえ]	275
貴正	[たかまさ]	262	ヤハの杖	[やはのつえ]	275
匠のつるはし	[たくみのつるはし]	263	勇者のナイフ	[ゆうしゃのないふ]	275
堕天使の槍	[だてんしのやり]	263	ユーリックの斧	[ゆーりっくのおの]	276
断罪の斧	[だんざいのおの]	263	夢桜	[ゆめさくら]	276
知識の杖	[ちしきのつえ]	263	ゆりの葉の剣	[ゆりのはのけん]	276
血啜りの牙	[ちすすりのきば]	263	雷龍の叫び	[らいりゅうのさけび]	276
地竜の鉤爪	[ちりゅうのかぎづめ]	264	嵐神の閃撃	[らんしんのせんげき]	276
鉄塊	[てっかい]	264	領主の狩猟刀	[りょうしゅのしゅりょうとう]	277
鉄パイプ	[てつぱいぷ]	264	輪廻転生	[りんねてんしょう]	277
盗賊の極意	[とうぞくのごくい]	264	連合軍兵士の剣	[れんごうぐんへいしのけん]	277
髑髏の宴	[どくろのうたげ]	265	侘寂	[わびさび]	277

赤の旋風（あかのせんぷう）

【DoD】
数百年前、赤装束に身を包んだ義賊がいた。悪徳商人から奪った財宝の使い道に迷った義賊は集めた金銀を溶かし煌びやかな斧を作り上げる。

初めは財宝の使い道に満足していた義賊であったが、斧がより豪華になるにつれ欲望に心を囚われ、罪のないものからも財宝を奪うようになった。

ある日、王国一の魔術師の屋敷に乗り込んだ義賊は一枚上手であった魔術師に捕まってしまう。真の義賊だった頃に戻るように促す魔術師。

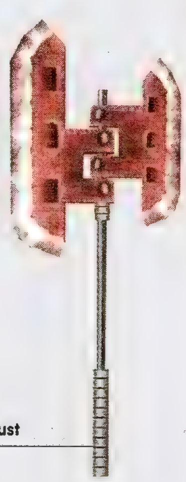
しかし義賊の病んだ心はもう戻せないことを悟った魔術師は、彼の身を真紅の宝石に封じ込め、その自慢の斧に埋め込んだ。

【DoD2】
ふと声が聞こえたような気がし目が覚めた。耳元で悪魔のような囁き声が聞こえた。まだ足りない。まだ足りないんだ。間違いなく、その斧から囁くように声が聞こえた。

その日から魔術師は何かに憑依されたかのような顔つきに変貌していった。その面影はかつて王国を恐怖に震え上がらせたあの義賊を思わせた。

斧の中で時を、ひたすら時を待っていた義賊は、力を解放していった。さすがに魔術師も必死に抑えようとした。しかしついに義賊は魔術師の精神を乗っ取ってしまった。

外見は高名な魔術師であるが故に王宮の貴族達は、魔術師の行いを止めることはしなかった。王国は無残な終焉を迎えた。しかし、魔術師は生きている…。



Crimson Gust

悪魔の鉄棍（あくまのてっこん）

【DoD】
世に知られた非道な山賊。200人からの軍団を率いるのは誰もが恐れる二人の兄弟である。彼らは秋になると、ふもとの村を襲っていた。

困り果てた村人は流れ者の醜い魔道士に助けを求める。魔道士は村の娘との結婚と引き換えに山賊を倒すと宣言、村人は渋々約束をした。

魔道士は一本の鉄棍を山賊に渡すように伝えた。呪われた鉄棍を手にした山賊の兄弟は錯乱し、仲間と共に自らの命を絶つ。村は救われたのだ。

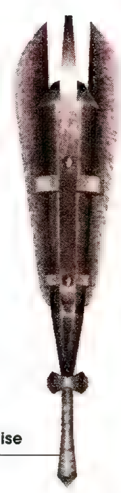
だが、村人は魔道士を殺してしまう。まもなく村に疫病が蔓延し村人は死滅してしまう。そして残ったのは呪われた一本の鉄棍だけだった。

【DoD2】
ある村に力自慢の男がいた。心優しい男だったが、貧しい村を豊かにしようと義勇軍に志願する。村人は男の為に金を出し合い、彼の怪力を生かせるようにと、一振りの鉄棍を贈った。

戦場は男にとって、地獄そのものだった。血で血を洗う惨状におののき、鉄棍を振るうこともなく逃げ出してしまう。男はとぼとぼと村へ帰った。

村は焼き払われ、村人は惨殺されていた。敵軍の仕業だった。男は天を呪い、自分の無力を呪い、すべてを呪って悪魔に力を請うた。

戦場に戻った男は、壊れたかの如く鉄棍を振るい、幾百の敵兵を叩き潰した。最期に自らの頭をも潰し、男の呪いを受けた鉄棍だけが残った。



Mage's Promise

天叢雲剣（あまのむらくものつるぎ）

【NieR】
壁にかけたままの盾は埃をかぶっていた。鞘に収めたままの刀は錆びていた。使わない技を忘れてしまっていた。鍛える筈の身体を放ったままにしていた。律する心を失っていた。

何も言わずに済むと思っていた。他人の暴力を見て見ぬふりをしていた。どうせ変わらないと放り出していた。大きな力には逆らえないと思っていた。信じる心を嘲笑っていた。

下らない奴等だと笑っていた。そうやって逃げ込んでいた。所詮無理だと諦めていた。愚かしさと醜さを嘆いていた。生きる意味を失っていた。

大切な人を見失っていた。その優しさを信じられずにいた。心を引き裂く悲しみを救えずにいた。小さな幸せを守る勇気を忘れていた。この言葉が届かないと、そう思っていた。



Kusanagi

イウヴァルトの長剣

【DoD2】
とある砂漠の牢獄……独房の中。一人の男が張り付けにされていた。愛するものを守るために戦い、そして破れ、己の未熟さを知る。男は今、絶望の淵に立っていた。思い出す彼女の笑顔……だが、その目に映るのは彼女の兄……。

意識が朦朧とし、死を覚悟した時、どこから入って来たのだろうか、一人の少女が目の前に立っていた。少女の目は宝石のような深紅の色。そして、可愛らしく微笑みながら、だが、大人とも子供ともわからぬ、奇妙な声でこう語った。

「俺に…俺にもっと力があれば…」その赤き目は男の心を見透かした。男の弱き心は、少女の僕となった。その先のことは……記憶にない……。朧げに覚えていることは愛する者が目の前で自らの命を絶ったこと…、そして再生の卵の前で……。

十八年後……。男の長剣は、竜に育てられし少年の元へ渡る。 その剣先は愛する者の兄隻眼の男に向けられ、傍らには大人になった赤き目の少女。紡がれた想いは複雑に絡まり、そして後世に語り継がれる……。



Inuart's Long Sword

古の覇王

【DoD】
太古の文明で絶大なる権力を持っていたといわれる王が所持していた剣。その覇王の手により王国は栄華を誇り、繁栄を極めたが…。

熟れた果実は腐り落ちていくのみ。王の権力の下で驕り高ぶり自ら歩むことを止めた民により、王国は堕落し衰退の道を辿っていく。

すでに己の力ではどうすることもできなくなっていることに気づいた王は、邪神を自らの愛刀に召喚し、堕落した民の虐殺を繰り返す。

剣に宿りし邪神は血を吸うことの喜びに打ち震え、最後に残った王の命を奪った頃には、白銀だった刀身が、血に染まり漆黒になっていったという。

【DoD2】
その昔、とある国に剛の武将と柔の武将という、二人の優れた武人がいた。二人はお互いを認め、常に意識し、鍛錬に勤しんでいた。この魔剣古の覇王に魅せられ、取り合うことになるまでは…。剣を巡り、激しく衝突を繰り返す二人。

魔剣を巡る争いは戦争へ発展する。剛の武将は自らが生み出した鉄壁の布陣で、百戦錬磨の戦績。一方の柔の武将は、型のない各々の力に任せた戦法。勝負の行方は誰にも想像がつかなかった。

序盤は剛の武将が完全に戦局を支配していた。しかし次第に柔の武将の臨機応変な戦略が剛を翻弄する。ところが、不利になるも意地を張り布陣を崩さない剛に、柔の戦法も段々と通用しなくなっていく。戦局は混迷を極めた……。

その後……戦の終わった跡地を訪れた村人はこう語った。『剛の武将も柔の武将も二人とも、それは素晴らしい武人だったよ。ただ、極端に優れていなくても、剛も柔も少し兼ね揃えていれば、みんな幸せになれただろうに。』

【NieR】
何世紀にも渡って繁栄した巨大王国に受け継がれていた王者の剣。剣の水晶には魔力があり一万人の血を吸うことで真っ赤に輝き、使っている者を不老不死にするという言い伝えがあった。しかし覇王と呼ばれた最後の王は、不死の身体よりも先代から受け継いだ王国の繁栄を何よりも大事にした。

ある日、最愛の后が不慮の事故により死んでしまう。王の子を宿しており、出産間近の悲劇だった。王は国を継ぐ息子が亡くなったと聞くと、絶望と悲しみに打ちひしがれ、既に高齢となった自分で王家の血が断絶する運命を受け入れられなかった。

狂った王は不死の身体を授かって王国を存続させようと、手当たり次第にその剣で部下や国民達を切り殺した。「私が最後の王ならば、この私が行き続ける限り王国は不滅なのだ!!」

何人も、何百人も、何千人もの国民を切り殺し、剣の水晶は輝きを増していった。あと少し、もう少しでその血のような紅が輝く時、患っていた心臓が急激な負担に耐えかね破裂し、王は亡くなった。目の前の妊婦と胎児を殺せば、ちょうど一万人だった。



Ancient Overlord

戒めの塔

【DoD2】
この槍の元の所持者は、物腰が柔らかで、礼儀正しく、清潔な性格であったが、己のある性格を恥じ、人を避け、弟達と森で密やかに暮らしていた。

しかし、ある時、世界を恐怖に陥れた帝国軍に家を襲撃され、弟達を皆殺しにされたその者は、深い悲しみのうちに自害を果たそうとしたが、それもできず、その時近くにいた妖精と契約をしてしまう。

契約者となり、その代償に己の視覚を奪われたその者は、世界を恐怖から救う為、立ち上がり帝国軍との戦いに身を投じていった。

救世主とともに、世界を恐怖から救ったその者だったが、幼き同性を狂気的に愛おしく感じてしまう愚かな性癖は直らず、今も己を恥じ、ひっそりと暮らしている。



Tower of Warning

エリスの槍

【DoD2】
高潔な人格と勇壮な武勇でその名を轟かせ、双刀の金獅子と呼ばれた男がいた。その無双の武人が若き頃、技を磨き合った女騎士の愛槍が、この槍である。女騎士が戦に出る時、必ずこの槍を手にしたという。それは、双刀の金獅子が彼女に贈った物だったからであろうか。

ある戦で女騎士は決断を迫られる。眼前に迫りくる敵軍。背後には寒村。撤退命令を無視して彼女は最後まで留まり、数多の敵兵を迎え撃った。しかし…女騎士は討ち死に、亡骸はきざみ晒され、寒村は焼かれ、軍紀違反者の汚名を着せられた。

双刀の金獅子は敵陣へと切り込み、彼女の亡骸と愛槍を奪い返した。永遠に失った愛しき人の最期の決断と意志を、後の世に正しく継ぐべく男は誓う。彼女のように、真に人々を守る騎士となることを。そして、真に人々を守る騎士を育てることを。

今、槍はエリスの手にある。二人の騎士の想いが込められた槍。彼女は何を思い、誰の為にそれを振るうのだろうか。託された願いを、注がれた意志を、エリスが受け継ぐ日が来ると、亡き騎士達は優しく見守っているに違いない。



Eris's Spear

炎風の鎚矛

【DoD】
赤き竜の羽から作り出されたといわれる矛。まだ帝国も連合もなかった時代、世界では亜人が幅を利かせ人々は怯えることしかできなかった。

亜人の横暴に耐えかねた人々は、一人の名もなき青年に亜人制圧の願いを託す。青年は力を得るため赤き竜と契約を結びに向かう。

赤き竜と契約を結ぶために何度も闘い続ける。竜の隙を突き、遂に勝利を収めた青年だったが、竜は既に別の者と契約していたのだった。

青年の強い意志と胸に秘めた希望に共感した竜は自らの羽の一部を刃にし青年に渡した。鎚矛を手に青年は亜人たちを制圧し世界に平和が訪れた。



Blazing Mace

王位簒奪者の槍

【DoD】
連合国王の亡き後、権力を握り悪政の限りを尽くした皇后を人民からの信頼の厚い将軍が討った。将軍は平民の出で、話はよくある英雄譚。

将軍の出自は平民の中でも最下級、人を殺めることを生業としていた辻斬りである。15人目の標的を殺めたとき、警備兵に見つかり投獄された。

審判はすぐに下った、極刑。しかし将軍の人生を大きく左右した才能、それは美貌であり、その姿が皇后の目にとまることで極刑をまぬがれる。

皇后は将軍への愛情を注ぐが、それは執着へと変わっていく。将軍は皇后を虜にし失脚させることで王となる。是を知る者は将軍を簒奪者と呼ぶ。

【DoD2】
長き戦いの末、ついに男は王の心臓に槍を突き刺した。絶命する王。歓声と共に革命軍が、一気に城へなだれ込む。これで…この国は悪政から解き放たれ平和になるだろう。男の顔に、笑みがこぼれた。だが…それもすぐに消えた…。

最後の戦い…どうも腑に落ちない。なぜ王は抵抗せずに死んだのだ。いや、それどころか自ら命を捧げた様子にも見えた…。あれが…国民に悪政を強いてきた王の姿だろうか。悩む彼の元に仲間から王の間に来るように連絡を受ける。

仲間と共に王の間に向かう男。そこには…何者かに拘束されていた姫の姿があった…。そして…姫の口から驚くべき真実を知る…。姫は、長い間、隣国の者に人質に捕られていたのだ。王は脅され続けていた。姫の目から涙がこぼれる…。

男はその場で姫の命を奪った…。確かに王は、娘のために、仕方なく悪政を強いていたのかもしれない。だが今、必要なのは真実ではない。苦しみ虐げられた国民が立ち上がり憎き王を討つという事実のみ。真実は闇の中……男は王となった。

【NieR】
ある国で王子の影武者をしている男がいた。男は毎日の様に王子の代わりに公務を行っていた。今日も仕事を終えて王子の元へ帰ると部屋に裸の女が寝ている。女は王子の妹姫だった。呆然とする男に、同じ顔の男はへらへら笑いながら行為に誘ってきた。

男は王子の妹姫に恋をしていた。自分を兄として慕ってくれる妹姫も自らを愛してくれていると感じていた。たとえ偽物の姿を通してでも、最低な王子のために命をかける男にとって、彼女は唯一の生きる糧だった。

王子が戦争で指揮を執ることになった。役目のために命をも投げ出す覚悟の男に王子は言い放つ。大将の首を獲れば妹と寝るのを自分と一回替わってもいいと。男はへらへら笑う王子の口へ槍を突き刺した。

戦争が終わり妹姫を妃にした「王子」は、自分の顔や喉を傷つける行為をするようになった。妹姫が彼を「兄さま」と呼ぶたびにそれは続いた。やがて「王子」は自らの顔を焼き、口から槍を刺した状態で見つかった。その焼けただれた顔はとても穏やかだった。



Spear of The Usurper

王妃の玉座

【DoD】
アウストラシア王ジギベルト一世妃ブルンヒルデは西ゴート王アタナギルドの娘で夫の死後、あとを継いだ息子が摂政となり実権を握った。

一方、ネウストリア王キルペリク一世妃フレデグンデはアウストラシア王国の領土をいまいましく思い、ジギベルト一世国王を暗殺してしまう。

アウストラシアとネウストリアは抗争を続け、ブルンヒルデの血族やフレデグンデの家族が次々と暗殺され、両国側は深刻な状態に陥る。

ブルンヒルデはネウストリア王クロタール二世との和平会談時に謀略に遭い処刑される。この斧はブルンヒルデの首を落した斧と言われている。

【DoD2】
ネウストリア王キルペリク一妃フレデグンデは、謀略によって殺害したアウストラシア王ジギベルト一世妃ブルンヒルデの三女であるフォンパデールを次男アルフォンスタインと婚姻させ、ネウストリアとアウストラシアの対立を終結させた。

落ち着いたかに見えたネウストリアとアウストラシア両国の関係は、西ゴート地方アウナトラス国への遠征中に行方不明となっていたジギベルト一世王の嫡子アルマバールの帰還によって再び剣呑なものとなる。

母ブルンヒルデを謀殺し、アルマバール自身の殺害を企んだフレデグンデに毅然と対立し、フォンパデールとアルフォンスタインの婚姻を無効であると宣言。フレデグンデの長男にしてネウストリア現国王クロタール二世へ宣戦布告した。

戦端はアウストラシア北部パイヨマールで開かれた。自ら戦陣に立ったアルマバールの奮闘により、アウストラシア軍はネウストリア軍を圧倒する。王宮にて捕らえられたフレデグンデは、ブルンヒルデの処刑に用いられた物と同じ斧によって斬首されたという。

【NieR】
ある王妃が暮らす王国の隣の共和国が以前同盟を結んでいた国の南方にある海に浮かぶ小さな島の村と交易を結ぼうとしていた村が所属する地方都市が組み込まれた都市国家の一番北にある国と同じくらいの緯度にある小国での出来事。

その国の王様の妻の弟の従兄弟の兄の娘婿が迎えた養子が恋をした吟遊詩人の奏でる詩に登場する美しい王妃に恋をした愚かな使用人の主人の妻の不倫相手の子供をお守りしていた乳母がよく買いに行く道具屋の主人が言いました。

この包丁を研いだ砥石を作る時に出来た破片を使って彫り込んだ彫銀をあしらった飾り枠を持つ鏡に映ってる扉ののぞき窓から見える隣の家の風見鶏の色と同じ色の食器と同じ重さの鍋の蓋の取っ手の素材で出来た飾りを使う予定の玉座はどこに納めるんだ?

その質問を聞いた妻の夫の妹の兄の娘の婿の弟の甥の父の母の夫の嫁の姪の舅の妻の夫の妹の兄の娘の婿の弟の甥の父の母の夫の嫁の姪の舅の妻の夫の妹の兄の娘の婿の弟の甥の父の母の夫の嫁の姪の舅の妻の夫の妹の兄の娘の婿の弟の甥の父の



The Devil Queen

鬼を裂くもの

【DoD】
鬼に家族を惨殺された鍛冶屋が、復讐のために鍛え上げた剣。斬りつけた者の魂を、また主の魂を吸い取り破壊の力へと転換する能力を持つ。

腕の良かった鍛冶屋は、王国より「鬼を斬る名剣を打て」との命を受ける。名剣を鍛えるべく苦心する鍛冶屋の家に、突如鬼が現れた。

鬼は「鬼を斬る剣は、怒りと憎しみを持つ者が打たねばならない」と告げ家族を惨殺して去った。鍛冶屋は家族の亡骸を抱き血の涙を流した。

鍛冶屋は家族の亡骸も葬らず、剣を打った。剣が打ち上がり、復讐に燃える鍛冶屋。しかし、その姿は、鬼を斬る剣を持つ新たな鬼の姿だった。



Ogre Ripper

オローの剣・鷹

【DoD2】
ジスモア様配下の騎士が、オロー様の剣を盗もうとした時の事です。ジスモア様は騎士を叱責し、処刑なさろうとしました。騎士は嘆きました。「私は少しでもオロー様に近付きたかったのです」事情をお知りになったオロー様は、憤慨するジスモア様を遮りながら、その剣について語り始めました。

「この剣はエルフの神話に語られる兄弟の破壊神の持刀を模した物だ。兄は鷹と呼ばれ、智に優れた。弟は獅子と呼ばれ、武に愛されていたという。 二人がまだエルフであった頃、人間との大きな戦があった。二人はエルフの魔将、猛将として戦った」

「鷹の智は竜語魔法すら操り、獅子の武は万軍を引き裂いた。二人がエルフと人間との戦を鎮めるのに、そう時間はかからなかった。戦が終わると、二人は智と武を試すものを失った。…だが、二人は智と武を求め続けた。やがて鷹は世の理を超え、破り、荒ぶる獅子は大地に、天に亀裂を入れた」

「エルフ達は、破壊神と化した鷹と獅子を勇者の時間に封印した。億千の命と魂とを使って。…おまえの罪は鷹、獅子に類するものだ。ジスモアよ、剣に免じてこの者の処刑を許してやってくれ」…オロー様の恩情により、騎士は許されました。その時のジスモア様の眼には、深く暗い影が差しており、今となってもその眼差しが忘れられません…。



Oror's Falconblade

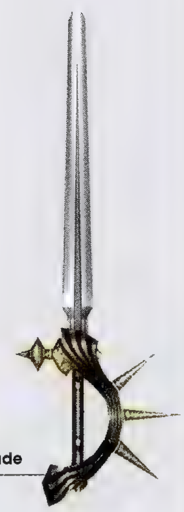
オローの剣・獅子

【DoD2】
死、骸、暴…十八年前、帝国と連合国が争う戦乱の中、オローは連合国の将として、一軍を率いていた。敵も味方もわからぬ大戦の最中、世界を大災厄が襲った。雲を裂く雷光と共に、オローは数多の部下と、故国を失った。

餓、害、荒…大災厄は英雄達によって鎮められ、戦乱もその灯火を消した。だが、両者の残した傷は、あまりにも深かった。オローは単身、各地を遍歴し人々を救った。災厄の傷と、人々の困窮はオローの心に深く、冷たく刻み込まれた。

旗、鎧、槍…オローは旅の途中、英雄達が組織した騎士団が、あの災を封じ人々を安んじていることを聞く。一人では救いきれぬ人々の数、身をもって知る災厄を封印すること。オローは迷うことなく入団した。騎士達を従え、さらに多くの人々を救ったオローの目は、輝きに満ちていた。

死を以って知る、愛と、憎しみ…英雄達の確執に巻き込まれ、オローはその命を落とす。ジスモアによる謀殺…。しかし、いまわの際までオローはジスモアの罪を責めなかった。たとえその気質が自らの命を奪おうとも、それこそがオローの貫く正義であった。



Oror's Lionblade

解放の剣

【DoD】
自由の象徴としてその時々の英雄が所持していた剣。正義を執行する者への祝福として教会より魔術である「神の槍」を使うことが許されていた。

最初の英雄は、攻め込んできた異国の軍隊を圧倒的な力でねじ伏せた指揮官だった。彼はその手で何人もの敵兵を血に沈めた。

次の英雄は、国王に歯向かう革命軍を打ち破った司令官だった。彼は革命軍のメンバーを次々と捕らえ、その場で処刑していった。

最後の英雄は、異国を侵攻し植民地とした功績をたたえられた将軍だった。占領後、彼は何万人もの罪なき人々を虐殺した。

【DoD2】
自由の象徴としてその時々の英雄が所持していた剣。しかし英雄達がその名声を勝ち取るためには、同時に数多くの血を必要とした。

この剣を手にした英雄達は、解放の名の下に異国の人々を蹂躙した。兵士による略奪が行われ、無実の人々が処刑された。

後に剣は盗賊によって盗まれ、やがて異国の将軍の手にもたらされた。異国の将軍は解放の名の下に隣国の人々を蹂躙した。兵士による略奪が行われ、無実の人々が処刑された。

戦が終わると剣は再び持ち主をかえる。そして今でも、どこかの国の英雄がこの剣を手に戦っているのだろう。解放の名の下に。



Injustice

カイムの剣

【DoD】
カイムの父の形見の剣。国王であった父は強く優しい存在で、幼い頃からこの剣を持ち闘う彼の姿にカイムは憧れていた。

しかし、平和だったカイムの国にも帝国の影が忍び寄る。帝国は日々勢力を拡大し、やがてカイムの城にブラックドラゴンの軍勢が襲い掛かる。

「カイム…フリアエを連れて逃げろ」襲撃された城の中で、父はカイムにそう告げる。カイムが返事をする間もなく、目の前で父と母が惨殺された。

「国を滅ぼし、父と母を殺した帝国とドラゴンを倒す！」亡き父の形見を手にカイムは誓う。たとえそれが憎悪の炎で彼を焼き殺そうとも。

【DoD2】
十八年前。世界が破滅に瀕した時、一人の男と一匹の竜が神に抗った。男は命を賭して戦い、竜は男の為に世界を救った。残された男は失った半身と心焦がす赫怒の残滓にすがるように、荒廃した世界を彷徨った。その放浪には、神の器として破滅を巻き起こした幼き少女が伴われた。

竜の命を用いた封印を改変し、身を捧げた竜への負担を倍増させた老司祭は、かつての仲間の一人だった。竜の苦しみの思念を感じ取った男の心は大きく揺らいだ。その隙を突いた少女は、男の不意をついて逃走。男は再び訪れた孤独の中で、憎悪をたぎらせる。空虚だった男の心は、灼熱の炎で満たされた。

男は竜を裏切った老司祭を襲い、命乞いを聞き捨てて一刀のもとに両断した。最後の儀式に使われる男をも斬り、封印改変を阻止した…はずであった。しかし封印は組み替えられてしまった。竜の意識は苦痛に引き裂かれ、千々と消えていった。そして男は世界より竜を選んだ。

封印の鍵が次々に打ち砕かれ、ついに男は竜と再会する。世界の破滅が再び迫ってきている。だが男と竜は満ち足りていた。二人はもう二度と別離の苦痛を味わいたくなかった。二人が選んだ答えは…。そして滅びゆく世界に、男の大剣が残された。



Caim's Sword

霞切り

【DoD】
ある村の少年と少女が恋に落ちた。少年は清く正しい心の持ち主で、少女は慎ましやかで明るい性格の子であった。

小さな川が流れる、小さな村で、二人は野や山を一日中駆け回り、ツユクサの冠とスミレ草の指輪で小さな結婚式を二人で行った。

ある日、仕事を失った少女の父親は村を去ることになる。少女は村に残るように泣いて頼んだが、もちろんその願いが叶うことはなかった。

二人の涙は地に落ちて、小さな池を作る。この斧は、その池に住む神様が気まぐれに木こりに与えた不思議な力を持つ斧である。

【DoD2】
ある小さな村のほとりに小さな池があった。この池は愛し合う少年と少女が離れる際に流した涙からできたという。村にはその残された少年が住んでおり、もう一度少女に会いたいと強く願いつづけていた。

ある時その池に宿る神が少年のもとに現れ、賭けを持ちかけた。遥か北西にそびえる山にしか咲かない露草を持ち帰ることができれば少女を連れ戻すと。すぐに旅立った少年は幾たびの困難の末、北西の霞がかる山の中にある村をみつける。その村には離れた少女がいた。

少年と少女は涙を流し再会を喜んだ。小さな川が流れる小さな村で、離れていた時を取り戻すかのように二人は一日中語りつづけ、結婚することを誓う。少年は願いがかなったことにやすらかな笑みを浮かべる。しかしそれは深い霞の中で見た幻影であり、少年はまもなく息絶えた。

またここにひとつかなわぬ恋がうまれたことに神は涙を流した。この槍はその涙をこの武器に込め、他世での二人の幸せを願ったものだという。



Sorrowborn

悲しみの棘

【DoD2】
「…クイタイ」ホブゴブリンの彼は、いつもどおり指導者の手伝いをすることにした。大抵は雑用をすることで食欲は満たされていたが、この日は何をすることもなく食べ物をあてがわれた。明晩人間の村落を襲うということだったが、さておき食欲は満たされた。

果たして彼らは攻め込んだ。彼らが襲った村落の人間は必死で抵抗し、戦いは激化した。熾烈な殺し合いの最中、彼は井戸に落ちてしまった。何とか上れそうであったが、彼は井戸の底で禍々しい形状の鎌を見つけた。それは歪んだ付与魔術師の失敗作であった。

この鎌は相手に勝ちたいと言う欲求が増幅される、というように作られた筈だった。だが、実際にはさまざまな欲求が抑えられなくなる呪われた鎌であり、使われなくなっていた。鎌を手にした彼は、井戸から出ると、膨れ上がった食欲と殺戮の衝動のままに、人間を屠っていった。

鎌の呪いは凄まじく、人間が目の前からいなくなると、彼は他のホブゴブリン達に襲いかかっていった。しかし、同族を殺し尽くすも満たされず、ついに彼は自身に刃を向けるに至った。残された鎌は、死体が地に還る頃美しいエルフに拾われたという。



Mourning Thorn

火鱗の戦斧

【DoD】
まだ人と神の境界が曖昧だった時代、天使と悪魔の大きな大きな戦争がありました。夜の闇は赤く燃え盛り、何人もの神が燃えて消えました。

10日間の炎に包まれた後、100日間の洪水があり、1000日間の嵐が地上を吹き荒れ、動物も植物も形あるものはすべて灰になりました。

巨人族を操り、最強を誇った堕天使ベリアルもついには熾天使の手により痛手を負い、幾重にも閉ざされた氷の冥界に封印をされてしまいます。

この斧は、ベリアルが封印前に傷ついた際に剥がれ落ちたウロコから削り出されて作られたといわれています。



Firescales

渇きの戦斧

【DoD】
数多くの病人を治してきた名医がいた。彼の名声は都まで届き、やがて時の国王が召し抱えるまでになる。

数年の後、国の王女が不治の病にかかった。名医といえど、どうすることもできず、彼女が楽に逝けるようにしてやるのが精いっぱいであった。

娘を失った国王は医師を逆恨みした。医師の家族すべてを処刑すると宣言。懇願する医師の言葉にも耳を貸そうとしなかった。

激怒した医師は、王家の井戸に毒を投げ入れる。水を飲んだ王室の人間は喉が焼けただれ絶命した。その水で研いだのがこの斧である。



Killer Hunger

救済の聖刃

【DoD2】
かつて、人心が荒れ果て、虚偽の蔓延により、傾きかけた国があった。

王は大層心を痛め、国を建て直そうと嘘を吐いた者を死刑とする法を制定した。

そこに一人の商人が嘘を吐いた者のみを斬るという剣を携えあらわれた。王は喜び、その剣を大枚の金貨で買い取った。

そして、その剣で商人を斬りつけると、商人は真っ二つとなり、王は大層嘆いたという。



Savior Blade

魚人の宝杖（ぎょじんのほうじょう）

【DoD】
南海の孤島の付近に生息していた醜い魚人が持っていた槍。島民を怪しげな歌声で海中に引きずり込み、その肝で自分の命をつないでいた。

その魚人に愛する家族を殺され、復讐するために立ちあがった島の青年。青年の手により、魚人は尾鰭を切り取られ瀕死の状態になる。

泳ぐことが困難になりもがき苦しんだ魚人。自らの行いを悔い改めた魚人は、改心の印に青年に家宝の槍を渡し、尾鰭を返してもらう。

しかし、生きるためにまた島民を誘い出し、肝を喰らい続けた哀れな魚人は、青年に自ら渡した槍で心臓を一突きにされ、その命を終えた…。



Merman's Spear

銀の鳳蝶（ぎんのあげは）

【DoD2】
幼くして隣国の伯爵と結ばれた美しくも賢い夫人の話。良き夫と良き家臣に恵まれて何ひとつ不自由のない暮らしを送っていたが、刺激もなかった。退屈な日々を伯爵に申し出ると意外にも旅に出るよう薦められた。伯爵夫人として、知るべき物事はまだまだたくさんあるという伯爵のはからいに、夫人は感謝した。

旅先では、たくさんの冒険者からさまざまな話を耳にした。雨風の具合で明日の生活が変わる農民の話や親のない子の話。他国の王の暴君ぶりや裏切りの話。夫人はさまざまな物事の見聞に夢中になり、そのまま一年が過ぎた。夫人が伯爵に帰りを伝えるとさらにもう一年の滞在が許可された。二年が経ち、夫人は屋敷に戻った。

屋敷に戻った夫人が目にしたのは心を亡くした伯爵の姿だった。屋内は荒れ、残っていたのは伯爵が目をかけていた家臣だけだった。夫人は察した。陰で家臣が謀反を企てていたこと。旅に出ろと夫人に勧めた伯爵が、すでに家臣の罠にはまっていたこと。
「気づかなかった貴女が　悪　い　の　で　す　よ。」

家臣は捕らえられ殺されたが伯爵は心を取り戻すことなく息を引き取った。悲しみにくれた夫人は伯爵の亡骸を焼き、その灰を白銀に溶かし込み大振りの剣に愛を遺した。刃に彫り込まれている蝶は、夫人が伯爵への贈り物として持ち帰った仮面を模したものであるという。



Silver Butterfly

愚者の慟哭（ぐしゃのどうこく）

【NieR】
回想録 2003年 06月 12日 15時頃
東京都新宿上空から巨大な白い人型兵器(初期段階では『兵器』と呼称されていたが現在は『巨人』と改称されている)が落下。甚大な被害を同地域にもたらした。また同時刻に赤い竜のような生命体(以降『竜』と呼称)が現れ「巨人」と「竜」は交戦しているように見えたもののその攻撃原理・効用共に不明。対象に対する攻撃方法についての検討が自衛隊で検討されると同時に内閣で緊急対策室が設立される。

回想録 2003年 06月 12日 16時頃
「竜」と交戦していた「巨人」は唐突に崩壊を開始。理由は不明。残された「竜」は航空自衛隊第6航空団第303飛行隊により撃墜された。「竜」に対する攻撃命令についてどこから発せられたものなのかは記録に存在しない。また「巨人」と「竜」の遺骸についての回収も進められたがこちらも回収した機関の正式な確認は出来てない。

回想録 2003年 12月
東京都新宿区にて「白塩化症候群」最初の症例を確認。

回想録 2004年 7月
「白塩化症候群」による人間の凶暴化が進行。汚染された地域での戦闘が激化。原因不明のまま、感染者の隔離と暴徒の鎮圧が行われる。主要道路の封鎖及び鉄道の停止が行われ、これが後の新宿封鎖へとつながっていく事になる。また同時期に非公式に米軍から軍事介入が打診されるが、政府がこれを保留。一方で政府内では「巨人」と「竜」から得られた魔素の研究と「白塩化症候群」の対処方法が研究されはじめ、10年後のゲシュタルト計画に至る事になる。



Fool's Lament

愚者の抱擁（ぐしゃのほうよう）

【NieR】
あの囚われし絶望から救われた。あの呪われた運命を捨てられた。あの怒りにまみれた炎を鎮められた。あの出会った日が我を変えた。

我の火で地を焼き尽くそう。我の牙で血を啜ろう。我の爪で敵を引き裂こう。我の翼で空を駈けよう。

その目から光が奪われるのなら。その肌が血に染まるのなら。その剣が重いのなら。その口が物言えぬのなら。

この身体が燃え尽きようとも。この言葉が奪われようとも。この契約が果てるまで。この暖かさが失われるその刻まで。



Fool's Embrace

愚者の盟約（ぐしゃのめいやく）

【NieR】
これは悲しい王子のお話。遠い昔にあったある王国の物語。闇の軍勢に襲われたその国は、赤き目をした人外の兵と空を覆う黒き竜の大群によって一夜の内に崩壊する事になった。敵の侵入を許した王の城では王と王妃が見るも無惨に黒竜の爪によって腹を引き裂かれ、あたり一面は血の海の様になっていたと言われている。王子と妹姫は辛くも逃げ延びる事が出来たが、惨劇を目にした王子はその衝撃故に復讐の鬼となってしまう事になる。

これは恐ろしい王子のお話。遠い昔にあったある戦いの歴史。憎き敵兵を殺す事に執着した王子は、日に日に復讐という名の暴力に溺れるようになる。逃げ出す敵兵を引きずり倒して容赦無く殺すのは当たり前。さらには既に死んでいる敵兵を一刻以上も切り刻んでいるのを見た、という兵も出てくる有様だった。指揮官も扱いかねるのか、王子はさらなる過酷な戦場へと赴く事になる。

これは翻弄された王子のお話。遠い昔にあった運命の行方。次なる戦地は女神を守る城。王子は次から次へと敵兵を叩き伏せる。腕を斬り落とし、足を吹き飛ばし、腹を引き破り、頭を刈り落とし、目をえぐり出した。浴びる血と自ら流すそれの区別がつかなくなった頃、傷ついた王子はとうとう倒れる事になる。血溜まりの中で、熱い息を吐きながら苦しみのたうち回る王子。霞む目で見上げると、そこに居たのはあの憎き竜の姿であった。

これは狂った王子のお話。遠い昔にあったある竜との出会い。王子の目の前に現れたのは傷ついた赤き竜。最初は殺そうと思った。色は違えど両親の仇、竜の一族なのだ。剣を振りかぶった王子。その時、忌まわしき赤い竜は言葉を発した。貴様の命を救おう。お互いの魂と引き換えに力を与えようと。王子は考えた挙げ句、竜と契約を行う。たとえ何を失おうとも、相手が竜であっても、その復讐の刃をこのまま振り続けることが出来るのならば構わない。暗い油のような欲望だけが王子の胸の中に満たされていった。



Fool's Accord

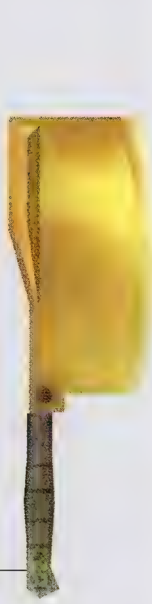
首切り包丁

【DoD】
滴り落ちる肉汁、口の中に広がるハーブの香り。その料理人が作る肉料理は、シンプルでありながら、誰もが唸るほどの美味しさだった。

彼の店には連日行列ができ、贅を知り尽くした時の公爵ですら彼の料理を味わうためならば、お忍びで城から抜け出すほどであった。

料理人の笑顔は、ひとたび調理場に入ると真剣そのものになる。彼が取り出した大きな肉の塊はどうやら食用のものではなかったのである。

時代が移りすぎ、料理人もその店も、その街も消え去った今も、彼が使った包丁だけは錆びることなく次の出番を待ち続けている。



Butcher Knife

月下の麗人

【DoD2】
かつて、礼節を重んじ、武芸に秀で、貴族の中の貴族と呼ばれた紳士がいた。紳士は容姿も端麗で、周りの女性はその姿にいつも目を奪われていた。

ある日、紳士が夜道を歩いていると、湖のほとりで月の光に照らされた、この世のものとは思えない美しい女性と出会った。

彼女の美しさに、しばし時を忘れる紳士であったが、彼女の「なぜ？」という事切れそうな言葉で我に返った。次の瞬間、彼女の美しい胸は赤い血で覆われ、紳士は自分の剣で彼女の胸を貫いていることに気がついた。

湖に映るその紳士の顔には、笑みが浮かんでいた。そして、紳士は確かに自分の心の声を聴いた。「コレデ、オ前以上ニ美シイ存在ハ世ノ中ニイナクナッタ」次の日、湖のほとりで、その紳士が自らの胸をこの剣で貫き、自害しているのが見つかったという。



Moonlit Beauty

月光と闇

【DoD】
常に強烈な熱気を放ち続ける大理石でできた剣。冷気を司る月神の加護を受ける者のみが熱に屈することなく剣を握ることができるという。

ある屈強な戦士がこの剣を手に戦場へ向かった。雄叫びを上げ最前線へ向かう戦士。その目の前に幾百の弓兵部隊が…。彼の体を幾百もの矢が貫く。

しかし！　彼の体からは一滴の血も流れず、それどころか確実に心臓を貫いているのに、その力はいっこうに衰えない。戦いは彼の軍が勝利を収めた。

勝利を手に駐屯地に戻る戦士。そこで剣を置くと同時に彼は氷に包まれて絶命する。月神の強い魔力が彼の命を永遠に奪ってしまったのだ。

【DoD2】
強烈な冷気を発する大理石の剣は静かに使い手を待ち侘びている。

使い手の死をも凍らせるという物語も残された、大理石の剣はずっと静かに冷たく待ち続ける。

待ち続けることに費やした時間さえ凍らせてしまうほど大理石の剣は冷たく眠っている。

奇しくも今、使い手が現れ幾多の血の温もりを与えても、目覚めることはないだろう。ひとつだけ言えることは、凍りついた使い手の顔が、刀身に映り込む事実であろう。

【NieR】
遙か昔に大火事に襲われた国を、全て凍らせてしまう剣が救ったという伝説がある。永遠に続く業火の苦しみから人々を救ったとされていた。その剣の周りには何千もの人型の氷像が佇んでいた。

世界中の武器を探し求める男が、剣の前に現れた。男は剣に幾重にも布を巻いて、剣を持ち出した。しかし、背中の荷物に入れて運んでいると、知らず知らずの間に布もろとも男は凍ってしまった。

旅の巫女が剣の前に現れた。巫女は神に祈りを捧げた後に剣を取ったが、指先からみるみる身体が冷えていく。巫女は神への冒涜の言葉を叫びながら凍っていった。

奴隷の女がある日、洞窟で岩を削る作業中に剣を見つけた。女はこんな苦しい毎日を送るなら、剣を突き刺して楽に死にたいと思い剣の柄を握った。しかし、女は凍ることもなく、剣で自分の体を貫くことも出来なかった。女が主に叩かれながら連れられていく様子を、月明かりに照らされた剣の刀身は映し続けた。



Moonrise

結束の剣

【DoD2】
ベヒモスの牙、グリフォンの嘴、竜の爪、遥か東の国の玉鋼。名匠と言われた彼でも、国王の注文の品の材料に頭を抱えていた。やり遂げる気はあったが、かなりの覚悟が必要であった。長い旅になる。彼は早々に旅立った。

旅には手助けが必要だったが、疲弊しきっていた王国に旅を共にできる余裕のある人間はいなかった。だが、国王の依頼を、彼はなんとしても果たしたかった。まだ若い王は民を守ることのできる剣を、古い文献から探し出し、彼の工房に自ら足を運んだのだった。

何とか捗らぬ旅を続けたが、魔物の巣くう地の前ですでに二ヶ月が経っていたもはや一人での旅は難しく彼自身、憔悴しきっていた。そんな折、留まっていた地の時の英雄が訪れ、彼の手伝いを買って出た。武具の手入れに彼は活躍した。

そして数々の英雄譚に添えられることとなりながら、彼は一振りの剣を完成させる。それは王が求めたほどの力はなかったものの、王は感激し、その剣を手に魔物と戦い、国を治めた。また鍛冶屋であった彼には爵位が与えられ、王国に長く仕えた。



Union

血族（けつぞく）の紋章（もんしょう）

【DoD】
武芸に秀でた兄弟が治める国があった。剛の武を持つ兄と、柔の武を持つ弟。兄弟は非常に仲がよく、国政はいたって安定していた。

ある日、一人の少女が兄弟に質問をした。「お二人は戦いで負けたことがないとお伺いしました。では、お互いが戦うとどうなるのですか？」

二人は、互いに自らの優位性を主張し合った。それは激しい口論になり、末には兄弟同士で殺し合いをはじめてしまった。

この争いを見かねた神は、天から怒りの槍を降らせた。槍は兄弟を貫き、二人は息絶えた。人々は神の怒りを恐れ、この槍を祭壇に祭ったという。

【DoD2】
ある国に大変仲の良い二人の王子がいた。兄は剛の武術を学び、弟は柔の武術を学んでいた。二人は互いの技を高め合うべく、稽古を重ねた。

二人の王子は、その師に質問した。剛の武術と柔の武術、どちらがより優れているのか？と。師は二人に一本の槍を差し出した。

良い槍は、硬く鋭い槍先と、柳のようにしなる柄を備えておる。剛と柔ふたつを競うのではなく、合わせて統べるのだ、と老いた師は語った。

その後、師は老衰により他界した。師が残した槍を、師の亡骸と共に墓へ埋葬し、王子達は生涯互いを支えあって生きると亡き老師に誓った。その後、国は大いに栄えたという。



Victor's Spoils

賢者（けんじゃ）の意志（いし）

【DoD】
北の島国で、国中から厚い信頼を集めた司祭がいた。「千里を見渡す大賢者」と呼ばれた彼はいつも杖を片手に地方を巡礼してまわっていた。

その杖をかざせば、どんな病気や怪我もたちどころに治すことができた。その杖をかざせば、どんな荒れた畑にも作物が実った。

その杖をかざせば、その人が嘘をついているか見抜くことができた。その杖をかざせば、悪事を行った者が懺悔を始めた。

その杖をかざせば、どんな怪物も引き下がった。その杖をかざせば、天使の禁止されている言葉で魔物を焼き尽くした。

【DoD2】
ある名もなき寒村に、北の島国より司祭が訪れた。千里を見通す大賢者と呼ばれた彼も、この遠方の地ではただの旅人でしかなかった。

しかし彼らは、遠くからやってきた司祭を歓迎し、手厚くもてなした。村人の心遣いに心打たれた司祭は、お礼として、一振りの杖を贈った。

奇跡の力を秘めたこの杖で、今より豊かな生活を送ってほしい。司祭の贈り物を喜ぶ村人を見ながら、司祭は村に幸せが満ちることを祈った。

しかし村人達は、腰の悪い旅人にあっさりと杖を譲ってしまった。それを聞いた司祭は、村人達がすでに幸福であったことを悟った。



Wisdom

皇帝（こうてい）の槍（やり）

【DoD】
一代で大帝国を創り上げた東方の皇帝の愛槍。雷を纏いて闇を断つといわれ、かつてはとある神殿の護神槍として奉じられていた。

剛勇で名を馳せた男は神殿より護神槍を強奪、大陸に覇を唱える戦いに身を投じる。男は雷を纏い次々に各国を侵略、皇帝へと昇りつめたのだ。

大陸を手中に収めた皇帝であったが、その恐怖と圧制に各地で反乱が相次ぐ。ついには自軍の将にすら裏切られ、帝国は崩壊したのだった。

かつての味方に追われ小さな城に篭城した皇帝。絶望した彼は愛槍を持ち、唯一愛した女と自分自身を焼き尽くし最期を迎えたといわれている。

【DoD2】
皇帝たる資格を問う、神性を持つ槍。覇者たることを望む戦士達の間を渡り歩くといわれている。今は昔、天下に覇を唱えんとする一人の武者が、槍を手にした。

槍は武者に問う。「覇者たるものが有する、武の役割とは何か？」武者は答えることができなかった。武者は槍の力を持って一国を興したが、国は十年と数えぬうちに亡びた。

国が亡びた際、一人の将が槍を持って落ち延びた。将がいくら逃げようとも追手がそれを赦さなかった。やがて将が追手に囲まれ、死を覚悟した時、槍は将に同じ問いをかける。将は静かに答えた。「武の役割は七つ。ひとつは…」

将が答え終わらぬうちに、槍は将の体を雷で纏い、追手を撃ち払った。…その後、将は一代にして大帝国を築き、国は千年の後にもその栄華を誇ったという。



Ozymandia's Might

拷問部屋（ごうもんべや）の肉塊（にくかい）

【DoD】
最初のひと月でその鉄塊は百人の男と女と老人と子供の両足を潰した。

次のひと月でその鉄塊は百人の男と女と老人と子供の両腕を潰した。

次のひと月でその鉄塊は百人の男と女と老人と子供の頭を潰した。

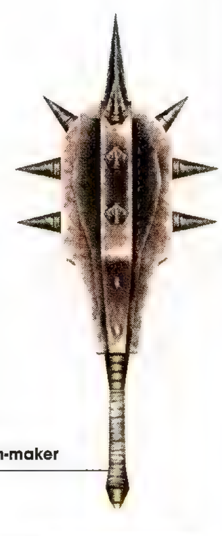
次のひと月ですべてが潰されそこには肉塊だけが残り血に染まった鉄塊とそれの区別はつかなかった。

【DoD2】
その鉄棍は、拷問部屋の片隅に置かれていた。命を奪わずに、最大の苦痛だけを与え続ける拷問において、鉄棍の役目は最後にやってくる。

手足をもがれ目鼻をえぐられ、最早苦痛に耐えきれずに死を望む罪人にとって、鉄棍の一撃は焦がれる程に待ち遠しい。

彼らは血を吐きながら叫ぶ。「その鉄棍で、はやく殺してくれ」求められ欲せられ、鉄棍は重々しく振りかざされる。

一撃で罪人を肉塊へと変え、鉄棍はまた、拷問部屋の片隅に置かれる。そして、次の罪人の狂おしい求愛を、静かに待つ。…血肉にまみれたそれは、肉塊そのものだった。



Carrion-maker

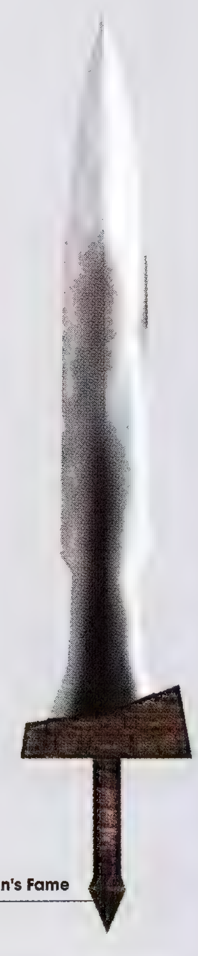
護衛隊士（ごえいたいし）の誉（ほまれ）

【DoD】
聖人の護衛隊士達が所持していた剣。飾りのない質素な造りで、幾度となく戦闘をくぐり抜けてきたにも関わらず折れることはなかった。

聖人を護衛するのは14人の少年少女達。いずれも親に捨てられた孤児ばかりである。そんな子らと家族同然として聖人は共に生きてきた。

あるとき数十人の山賊に襲われた一行は、聖人を守るために決死の戦闘を行う。傷ついても何度も立ち上がり、聖人の乗る馬車を守り続ける。

やがて山賊と共に護衛隊士は全滅。救われた聖人はその働きに涙し、この剣を持った者が救われるよう願いを込めて祝福儀礼を施したのである。



Guardian's Fame

護衛兵士の剣（ごえいへいしのけん）

【DoD2】
この剣の元の所持者は、かつて封印騎士団に所属し、竜の子と呼ばれる者の先輩騎士であった。

稽古にかこつけて、懲らしめるつもりで、竜の子と試合をし、逆に無様にも敗れ去ったこの剣の元の所持者は、鍛錬を積み重ね、護衛兵士にまで昇格した。

護衛兵士として小隊の指揮をとっていたその者は、ある時、隻眼の男と呼ばれる反逆者に、自分の隊を殲滅され、恐怖のあまり逃げ出した。

騎士団に戻れなくなったその者は、騎士の命ともいえる武器をも、なくし、何処かに消えたという。



Guard's Sword

斉天の赤杖（せいてんのせきじょう）

【DoD2】
かつて偉い僧侶が、聖典を受け取る為に、三人のお供と共に、遥か西の国を目指し旅立った。

旅の途中、立ち寄った村には、施しを行い、またある時には、人々を苦しめる魔物の退治なども行った。

お供の一人であった、この杖の所持者は、魔物退治を得意とし、その強大な力で僧侶を守護しながら西の国を目指した。

遂に辿り着いた西の国で、聖典を受け取った僧侶は、お供のものに感謝し、それぞれに相応しい名を贈ったという。



Monk's Red Staff

ザンポの斧（ザンポのおの）

【DoD2】
小さな農村のはずれの小屋に、一匹のネズミと暮らす男がいた。男は醜い容姿の持ち主で、その不気味さから、村中で疎まれていたが、心根のやさしい男だった。時として村の子供から石を投げられることがあっても、常に笑顔を絶やすことはなかった。

どうにかして不気味な男を追い出そうとした村人達は、男の飼っているネズミが穀物を荒らしたと因縁をつけ、男のネズミを捕まえ、首を切り落として殺してしまった。

ただ一人の友人を亡くした男は正気を失った。人とも思えぬ雄叫びをあげながら、手にした斧で、老人から子供まで村人全員の首を刎ねてまわり、首の山を築き上げた。そして最後に首を一つ足すように、そこで自らの首を刎ねて絶命した。

首の山から発見された凶器の斧は、村人の血を吸った金属の部分が真っ赤に染まっていた。後にこの斧の持ち主となる封印騎士団のザンポは、この斧で獲物を切り裂く瞬間の感触に、自分の失った味覚の幻影を見ていたのだろうか。



Zhangpo's Axe

死神の大鎌（しにがみのおおがま）

【DoD】
地獄の門番である死神が持っていたといわれる、「永遠の闇」の入口を切り開くための大鎌。闇に落とされたものは二度と生まれ変わらない。

その男も「永遠の闇」の判決を受けて、死神に落とされるのを待っていた。鎌の刃先が暗黒の闇を切り開きはじめる。

その時、男は死神を後ろから突き飛ばした！　吸い込まれていく死神の姿。
「愚か者め…意味のないことを……」

すると鎌がひとりでに男の足元を切り裂いた。地獄の門番は死神ではなく大鎌の方だったのだ。そして大鎌は、今も罪人を静かに待っている。



Deadly Sickle

死の舞踏（しのぶとう）

【DoD】
遥か昔、強大な力を持つ隣国の圧力に苦しみ、崩壊寸前の小さな王国があった。隣国に攻め込まれた国は女子供も容赦なく処刑され滅亡していく。

王国には美しく、そして勇敢な姫がいた。王国の危機を救うために立ち上がる姫。姫は踊り子に化け隣国の皇帝の酒宴に潜り込む。

姫の舞は恐ろしいほどに妖艶で美しく皇帝も一瞬にして心を奪われた。姫を呼び寄せる皇帝。気づいた時には彼の胸に刃が突き刺さっていた。

その後、皇帝を失った隣国は勢いが衰え滅亡した。王国を救った美しい姫の伝説は、今も語り継がれ、この剣を持って舞うことが踊り子の夢とされる。

【DoD2】
遥か昔、幾つもの小国の戦乱によって人心の荒れ果てた地方に、一人の英雄によって興された国があった。英雄はそのまま皇帝となり、近隣の国を武力によって併合していく。戦乱で疲弊しきっていた国民たちは、その王国との併合を喜んだという。

皇帝は時折酒宴を催し、美しい踊り子を呼んで舞を踊らせた。公平無私な統治を行った皇帝の、数少ないささやかな贅沢だった。臣下の反対を押し切り、矛を交えている最中の国から踊り子や楽団を招くこともあったという。その日も戦端を開いたばかりの隣国から、一人の美しい踊り子を酒宴に招いていた。

その踊り子の舞は恐ろしい程に妖艶で美しく、皇帝は一瞬にして心を奪われた。直々に言葉をかけようと呼びよせた時、剣舞に使われた小剣が皇帝の胸を貫いた。踊り子は戦相手の隣国から送り込まれた間者だった。皇帝を失った王国は、程なく滅亡したという。

再び小国同士の戦乱が巻き起こり、各地で多くの死が撒き散らされた。皇帝を刺した小剣はいずこかへと失われ、忌まわしき記憶と共に、その存在が語り継がれているという。



Deathdance

少年の欲望

【DoD】
少年は若く、美しかった。彼は村から村を渡り歩き、次々と村娘達に甘い言葉を囁いて結婚を申し込む。

彼女達は少年に家畜や、家や、お金、そして愛情を惜しみなく与えた。だがある祭りの夜に少年のウソがすべての村娘達に発覚してしまう。

娘達の怒りは凄まじく、妖精王の力を借りて少年に呪いをかける。それは生きながらにして剣に封印されるという魔術であった。

今も冷たい刃の奥深くから、己の罪深さを嘆く少年の声なき叫びが聞こえるという。

【DoD2】
その昔、娘達を次々と騙し、愛と財を奪い続けた少年がいた。怒った娘達は、妖精王の力を借り、少年を生きながらに剣の中に封印した。冷たい刃の奥深くから、少年は己の罪深さを嘆き続けた。時は経ち、老いた娘達は次々と死んでいった。

娘達が一人死ぬ度、剣の中、老いを知らない少年に、止まっていた時間が戻っていく。同時に少年の後悔の念が薄れ、日に日に娘達に対する憎しみが増していく。娘の最後の一人が死んだ時、ついに呪いは解け、少年は元の体に戻った。

自らの肉体を再び手にした少年の欲望は、止まることを知らなかった。少年は過ちを繰り返す。娘達を次々と騙し、財と愛とを奪っていった。ある日、少年は美しい少女と出会い、生まれて初めて恋に落ちる。少年は、財産や愛、すべてを少女に捧げた。しかし、少女は見向きもせず、他の男の下へ去っていった。

少女は、少年と同じ罪を犯していた。次々と男を誑かし、財と愛とを奪う少女。怒った男達は、この剣に少女を封印しようとした。封印の呪文が読まれようとした時、少年は少女を突き飛ばし、自ら剣の中に入った。少年はその愛で刀身を真っ赤に包み、少女を護り続けたという。



Scream

招雷の槍

【DoD】
森の奥地にある古城から、夜の闇にまぎれて吸血鬼達が舞い上がる。村では多くの犠牲者を出したが、無敵の魔物の前になす術はなかった。

そんな噂を聞きつけ、腕利きのヴァンパイアハンターが村を訪れた。だが、彼もまたあまりの吸血鬼の数の多さに一人では戦えないことを悟る。

そこで四本の槍に秘石を埋め込み、村の若者に協力を依頼した。不穏な空気を察知した吸血鬼達はその夜、村に向けて一斉攻撃を開始する。

壮烈な死闘の後、朝の光の中には傷ついたハンター達と灰に戻った吸血鬼だけが残っていた。以来、この槍は村の守り神として奉られている。



Lightning Spear

処刑台の記憶

【DoD】
帝国軍の牢獄にある処刑台で使われていた斧。この斧で幾千もの首がはねられた。初めは処刑に使われていた、ただの疎むべき存在であった。

製作者自らがこの斧に倒れたことをきっかけに、斧がただの斧でなくなった。斧は何かを求めるように、小枝を落とすように次々と首を狩っていく。

民からの人望も厚い王国の将軍も断頭台に頭を乗せられ、民衆が見つめる中、その血を流していく。処刑者に善悪はなく、あるのは首のない骸だけ。

数百年の時を経て、斧はさまざまな首を狩り続ける。数十の王国の処刑を執行し更なる受刑者を求め、歴史の中を彷徨う。

【DoD2】
斧は考えていた……。「私は…幾人の首を刎ねただろう」悪人、反逆者、革命家、政治家……中には全く罪のない人間もいた…。もう何も覚えていない。ただ一人、あの男……いや、男というには早い、あの少年を除いて…。

その少年は、断頭台に頭を置いても全く動じる気配がなかった。どんな屈強な男でも卑劣な悪人でも死を目前にすると、わずかな希望や行き場のない絶望が精神を支配する。それは刎ねる瞬間、わが刀身から直接伝わってくるのだ。

しかし！　彼は他の誰とも違った！　彼の精神はただ希望が溢れていた。それは狂信的に心酔する者の持つ偽りの希望ではなく、彼自身が望み、悟り、己の意思でこの場にいるということ！　彼の、その清らかな精神は物言わぬこの私が叫びたくなる程であった。

彼の刑は執行された……。処刑を見に来た多くの群衆の中に、隠れながら涙する若者達がいた。その涙の意味は、私にはわからぬ。ただ、彼の希望と、そして未来は、若者の涙と共に語り継がれる……。それだけは私にも確実にわかった。



Executioner's Song

脛削りの鉄

【DoD2】
恐ろしいほどの武勇と、類い稀なる英知を持った猛将がいた。彼の武勇は近隣諸国にまで鳴り響き、民の彼を崇める声が通りを埋め尽くしていた。

しかし、その声望を恐れた王は彼を無実の罪で捕らえ、三日もいれば我を失うといわれる、城の最深部の独房に閉じこめた。

そして三年後、王が牢に出向くと、そこには両の足が腐り落ち、息も絶え絶えな男が蹲っていた。ただ、その王を睨み付ける眼は未だ強い輝きを失ってはいなかった。王はその眼に苛立ち、ついに自らの剣で彼を刺し貫こうとした。

王の剣が男に届く直前、彼は背後に隠し持っていた剣で、逆に王を貫いた。その剣は、自らの足を切り落とし、その骨を鍛えて造り上げたものであった。その後、彼は王の後を継ぎ、不動の王として名を馳せたという。



Calf-carver

聖石の杖

【DoD】
世界の西の外れに、魔法の力を地盤とした魔道王国が存在した。500人の「元老」といわれる魔法使いが、街のすべてを仕切っていた。

真夜中でも真昼のように街を照らし、人々は何の苦労も疑いもなくその魔力を礎に生活を営む。ある日501人目の元老が新たに就任した。

若干10歳の少年が501人目の元老。年端もいかない少年は稀代の魔術の天才。わずか2年と15日で元老の長に就任した。この時12歳。

魔術の天才といえど、若干12歳の子供。大人になる葛藤と共に、己の存在意義を考えはじめ、永久を求めて自ら石と化し永遠の聖石となった。

【DoD2】
この杖に嵌められている石は稀代の魔術の才能を持っていた少年の魂を宿している。彼は平穏に人間として生きていくことに満足せず、より高みを目指し全魔力をもって自ら石化し、その存在を永遠のものとした。

ある時彼は自分を手にした元老が美しい女性であることを知った。彼は彼女をたいそう気に入った。だが、月日は流れ彼女は老い、死んでいった。彼の気に入っていた街並みも家も好んだ木々の色彩も年が重ねられる毎にその姿を変えていき、やがて不毛の時代が訪れ、彼は悲しみに包まれた。

彼は人々の幸せを見守ることができるのと同じくその幸せがもろくも崩れ去ることも、そしてその繰り返される悲しみもずっと見続けなければならないのだ。そして、すでに石と化した彼にはそれに手を差し伸べることもできず一人、泣き続けなければならない。

永久を求めた結果の苦しみからいつ、少年は解放されるのか。永久の中で永遠に刻まれていく時間は、彼を癒してくれるのだろうか。あるいは、あなたが彼を眩しい光へと導いてくれるなら。



Magi's Sorrow

聖(せい)なる鎚矛(つちほこ)

【DoD】
ある国の大司教が誕生祭の際、若き13人の司祭達に授けた数枚の羽を持つ儀礼用のメイス。大司教の死後、国は戦乱の渦に巻き込まれた。

若き司祭達は大司教の教えを信じ、戦おうとはしなかった。一人また一人と戦争の中で倒れる彼らは、それでも平和を叫ぶ。無力と知りながらも。

暴力を振るうことを嫌い、このメイスを使わなかった最後の一人の司祭。やがて戦闘のまっただ中で彼も命を落とす。

血にまみれたメイスが地に落ちた時、大天使が黒き涙を流しながら舞い降り、13人の魂と引き換えに呪わしき力と魔力をこの武器に与えた。



Holy Mace

痩躯(そうく)の魔術師(まじゅつし)

【DoD】
痩躯の魔術師が握っていた杖。魔術師はひどく冷徹で意地の悪い性格だったため、いつも町の人々や弟子から憎まれていた。

己の身に危険を感じた魔術師は、悪魔の力を借り、恐ろしい魔力を持つ杖を作り上げる。自らの精気を失うのと引き換えに…。

その杖の強大な力に我が身の精気を奪われ痩せ衰えていったが、魔術師は構わず杖を使って傍若無人の行いを繰り返す。

結局、魔術師は弟子の陰謀から我が身を守るため、死ぬまでこの恐ろしい杖を手放すことはなかった。最後には骨と皮しか残ってなかったという。

【DoD2】
痩躯の魔術師の骨と皮で作られている杖。魔術師は多くの弟子を抱える高名な人物であった。魔術師は老い、自らの後継者を弟子の中に求めた。

弟子の中に、鷹のように鋭い目を持ち、類希なる魔の才を持つ青年がいた。魔術師は青年を後継者と定め、持てるすべての術を伝授した。青年は半年と経たぬ内にすべての術を極めた。魔術師は大いに喜び、隠居の時まで青年に弟子の指導を手伝わせた。

青年は指導のかたわらに次々と新しい術を生み出していった。やがて、弟子達は魔術師よりも青年から術を学ぶようになった。魔術師は自らの世代が去ったことを悟り、青年に後事を託そうとした。しかし、青年は丁寧に申し出を断った。青年は旅に出、更なる術を求めるのだという。

その言葉を聞いた途端、魔術師は秘めていたすべての感情が爆発した。…妬み、嫉み、愛おしみ…魔術師は知りうる最凶の呪を青年にかけたが、魔術師を遥かに超えた青年は、簡単に呪をはね返した。魔術師は全身の肉と臓物が溶け、腐敗した血と共に吐き散らして絶命した。…骨と皮だけを残して。



Edacious

草原(そうげん)の竜騎槍(りゅうきそう)

【DoD】
昔、飛べない竜がいた。荒々しいが高潔な心を持つ彼は人間と交わることはなかった。だがある日、傷ついた若き騎士と一匹の竜が出会う。

竜は騎士を助けると、彼が目覚めるのを見届け、その場を立ち去ろうとした。翼のない竜は、役立たずと人に忌み嫌われていたからだ。

別れ際、騎士が言った。「この恩は生涯忘れない」時が流れ、年老いた竜は人間の軍勢に取り囲まれる。竜が死を覚悟したその時……。

「翼なき友よ！　長く待たせたな！」あの時の騎士が国王となり、数千の兵と共に現れたのだ。竜は忘れていた牙を剥き出しにして吼えた。

【NieR】
王は老いていた。精悍だった眼差しからは光が失われ、逞しい体は見るも無惨に弛みきっている。そして、老いるに従って身につけた虚栄や恐怖が、王の心を醜く蝕んでいた。王は怖かった。だから守るべき領土を失わないように周辺諸国への侵略を繰り返した。王は怖かった。国民の声も家臣の言う事も信用ならなかった。だから暴力と圧政で全てを奪い取ろうとした。

王に忠誠を尽くす竜が居る。翼の無い竜は王の言う事なら何でも従った。彼は王に救われた恩義が故に、魂で報いる事を誓ったのだ。たとえそれが目に余る愚行でも、王の口から命じられたのであれば従った。竜にとって王は正義そのものだった。

ある日、竜が血まみれで王に謁見を申し出る。その血は幼い王子を暗殺した返り血だった。暗殺を命じたのは他ならぬ父王。竜は澱んだ目で王に願い出る。貴公の命には逆らう訳にはいかない。だが、貴公の命に従う事ももう出来ない。殺してくれ。そう言うと竜は力なくうなだれた。

それは昔話。数百年前に滅びた国の愚かな王と翼の無い竜の物語。草原には今も風が吹いていた。王と竜が誓いを交わしたあの日と変わらず、風が吹いていた。



Dragoon Lance

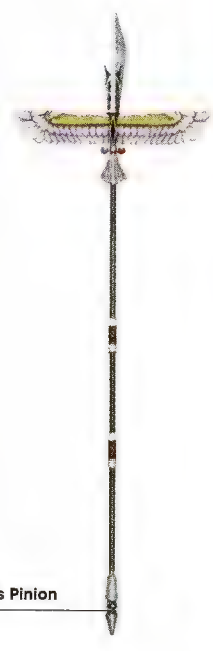
鷹羽根(たかばね)の槍(やり)

【DoD2】
雨の日に目が覚めた。見上げると、自分がさっきまでいた巣と兄弟達が見える。どうも落っこちたらしい。狭い巣だったのでこうなるのは目に見えていたが…。体が濡れて冷えてきた。生まれて二ヶ月短い人生。「こんなもんか…」諦めかけたその時、親鷹が帰ってきた。彼らはちらりとこっちを見たがすぐに兄弟達の方に向き、兄弟達に餌を与えだす。

かわいく鳴いたが見向きもしない。「いよいよだ」と思ったその時目の前に閃光その後に轟音、木が燃える。木に落雷したらしい。もちろんその上には兄弟達がいる巣がある。「逃げなければ」必死でバタバタと羽を動かす。何とかその場を離れ振り返ると「巣」自体が炎に包まれていた。巣の兄弟達の全身は赤く染まり雨の暗闇を照らす。

人生、次の瞬間がどうなるかわからない、後ろから気配を感じる。振り返ると「ヒト」の姿が。雷の音に驚きやってきた。「ヒト」は俺を抱き上げた。それが「ヒト」との運命的な出会い。一年も経つと俺は立派な鷹になり、いつも「ヒト」の腕の上にいた。「ヒト」は独り者で年は五十を越えていた。あくまでも想像だが「ヒト」は大酒飲みで貧乏だった。

「ヒト」とは二年を共にした。別れはあっさりしたもので俺は「酒代」と交換に売られると同時に俺の一生はあっけなく終わる。売られた俺はあっという間に潰され肉塊となり胃袋へ。羽は「槍」の飾りに。俺の羽をあしらっただけの平凡な槍はそこそこの高値で売られたそうだ「鷹羽根の槍」と名付けられて。くだらない俺の人生で作った槍。実に滑稽だ。



Falcon's Pinion

貴正(たかまさ)

【DoD】
初めて彼に会った時、鼻を突く異臭と苛立ちさえ覚えるみすぼらしい坊主姿からはとても名高い君主の下に仕えていた武士とは思えなかった。

脇に差した愛刀がかろうじて彼の話が本当なのかもしれないと思わせた。いったい何が彼をここまで落ちぶれさせたのであろうか。

彼の話によると、お家騒動に嫌気が差し自ら浪人になったのだという。しかし、見てくれに気を使い剣の修行を怠った武士に世の中は厳しかった…。

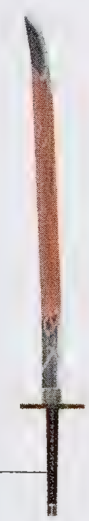
「あの時……掬植家とうまくやっていれば……」そう言いながら彼はまた空を見つめる。今もどこかで彼は途方に暮れているのであろう……。

【DoD2】
その男は貴正を合戦の折、敵から奪い取ったのだと伝えられている。貴正をはいていたのは、みすぼらしい落武者であったという。

落武者の剣術は優れたものではなかったが、刀を合わせた途端、男の刀はたちまち折られてしまった。男は身を捨てる覚悟で臨み、貴正を肩口に受けながら、折れた刀を落武者の眉間に突き立てた。こうして男は貴正を手に入れた。

「肉を切らせて骨を断つ」男の覚悟に貴正が呼応したのか、貴正の切れ味は戦を経るごとに増していった。貴正を手に次々と武勲を挙げる男。そんなある日、男に鬼退治の勅命が下る。鬼の力は剛力無双、その肉体は金剛不壊と呼ばれた。

鬼との戦に臨む男。鬼の一撃が男に襲いかかる。だが男も、貴正もそれを防ごうとはしない。男は半身の骨を砕かれた。が、次の瞬間には貴正が鬼の喉笛を貫く。骸となった鬼に男は吐き捨てた、「骨を断たせて命を絶つ」と。男の死後も、貴正にはその魂が宿るという。



Takamasa

匠のつるはし

【DoD】
その男が手がけた建造物の数々は、その美しさから国の宝と称えられていた。数々の建造物を生み出すこのつるはしもまた、神器と称えられた。

ある時、隣国との間に戦が勃発した。国中の男達が徴兵される。男もまた、例外ではなかった。

破壊を好まない男は、戦には向いていなかった。戦禍の中で、男は殺され、男の築いた美しい街並みは破壊された。

創造を好む男は、殺される最期の瞬間まで、人を殺めなかったという。この神器が次の主にもたらすものは、破壊の力か、創造の力か。



Crafty Pickaxe

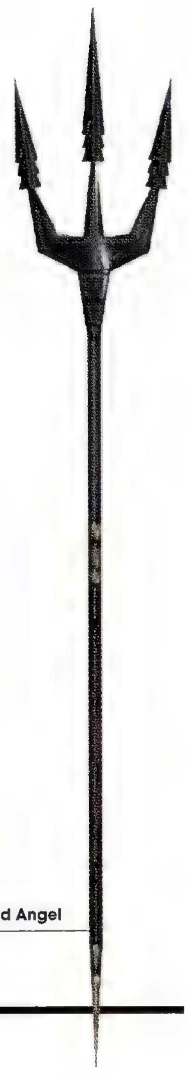
堕天使の槍

【DoD】
246の教会をもつ、大きな宗派があった。数百年も続く由緒正しき聖道。57代目の大神官である彼も、聖道への伝導活動を貫き通していた。

真面目を通り越して愚直。まさに神の申し子、誰からも慕われる立派な神官であった。しかし、彼の聖道は愚直ゆえに堅く、外圧に弱くもある。

この宗派を擁護していた国の王子が彼に問いた。「神と私のどちらが正しいか？」彼は迷うことなく、神と答える。その答えに王子は激怒した。

彼の宗派は邪教と御触れが回り、数百年の聖道が一瞬で霧散した。彼は罵りを受けながらも王子に面会。持参した槍で己の喉をつき許しを請うた。



Corrupted Angel

断罪の斧

【DoD】
若い二人が祝福を受けながら結婚しようとしていた。結婚式の前夜、夜の闇の中に小さく光る精霊の姿を花嫁が見つける。

精霊が囁きかける。「お前の夫をお前だけのモノにしないか？　お前だけを愛するべきじゃないか？」花嫁の心の隙に精霊が甘く問いかける。

彼女が正気に戻った時には、手には血で染まる斧が握られ、床には夫の首が、首だけが転がっていた。「コレデオマエダケノモノニ…」

時が過ぎた今でも、夫の首を持った妻の亡霊が、血まみれのドレスを着て村を徘徊することがあるという。

【NieR】
精霊達が集う儀式があった。その年の十回目の満月の夜。月の光が差し込む美しい湖の畔に集まった彼女達は口々に今年の悪行の成果を自慢しあう。

ある精霊は自分がいかに残虐な方法で屈強な男達を殺したのか自慢していた。とある王国の精鋭の兵士だった男達は、娼婦に化けた精霊に身体のあらゆる部分を引きちぎられて死んだらしい。精霊はその男達が剣技を発揮出来ずに流した悔し涙がいかに旨いかを楽しそうに歌っていた。

次の精霊は自分がいかに狡猾かを喧伝していた。まずは小さな男の子を沼に沈める。それを助けようとした姉も沼に沈める。そうして親兄弟から親戚一同につながり、村人全員を沼に沈めたのだという。精霊はその様子を思い出したのか涎を垂らしながら微笑んでいた。

一番小さな精霊がおずおずと申し出る。私が一番凄いと思います。普段馬鹿にされていた小さな精霊が精一杯の声で伝える。私はあらゆる生命を恐怖のどん底に突き落としたんです！周りの精霊達はひたすら笑い転げていた。その笑い声が止んだのは、小さな精霊が開けた魔界への通路から出てきた醜いバケモノが全ての精霊を喰いちぎった後だった。



Axe of Beheading

知識の杖

【DoD】
自らの意思を決めるために影響を受ける要素。問題領域における意思決定のうえで対象となる概念対象および科学的事実や客観的事実然り

事実に対する判断規則や判断手続き問題領域において誰もが知り得るものでもあり経験に基づく「目分量」や「直感力」然り

あるいは推論の制御にかかわるものでありどれを選択するか焦点をどこに当てるかつまりはそれら、事実・判断・推論

「思いや考え」他者に価値があると認められ自身に揺るぎない「正当化された真なる信念」これらを理解するもののみが力を発揮する

【DoD2】
その魔術師には語り合える友が一人もいなかった。別に魔術師が、人間嫌いだったわけではない。少し知識をひけらかす癖があったが根は悪い人間ではなかった。だが、彼と交流を持った人達は、次第に彼の元から去っていった…。

ある日、魔術師に原因不明の病が発症する。熱は上がり続け、動悸も激しく、手足は痛み、眩暈も起こりまともに歩けない。自らに魔法を施したが、全く効果も見られず…。傍らにあった愛用の杖を手に、魔術師は村の薬屋に向かった。

ようやくのことで薬屋に辿り着く。そして、自分の症状を説明した。「今、我が身におけるさまざまな症状は常人が知り得る定義の範疇をすでに逸脱し、尚且つ我が研究結果をも超えた驚愕なる事実、つまり…」薬屋は首を傾げた……。

結局、話が通じず薬を貰えなかった魔術師はそのまま息絶えた……。大事なことは、詰め込んだ知識を、ただ垂れ流すことではなく、万人にわかる言葉で伝えること。それに気づけば、ただの食当たりで彼も死ぬことはなかっただろう…。



Philosopher's Staff

血啜りの牙

【DoD2】
鍛冶屋は完全な剣を求めていた。斬れば、肉を断ち、尽きぬ痛みが襲い、突けば五臓を貫き、無限の苦悶を被害者に与える剣。

究極の痛みを目指し、鍛冶屋は寝食を忘れ、夢中で槌を振るった。そして、ついにその剣は完成した。あらゆる痛みを超えた痛みを与えることができる剣。鍛冶屋はその成果を試したくて仕方がなかった。

そこで鍛冶屋はある王にその剣を以てすれば、どんな豪傑もすべてを白状すると売り込んだ。王が罪人に試してみると、言葉どおり、どんな罪人もすぐに口を割った。

喜んだ王は、その剣の製法を鍛冶屋に尋ねたが、鍛冶屋は秘密の製法を喋ることを拒んだ。結果、鍛冶屋は自らの身を以てその成果を知ることとなり、その素晴らしさに涙したという。



Bloody Fang

地竜の鉤爪

【DoD】
帝国の考古学者が聖なる地の遺跡から掘り出した謎の化石。何かの生物の化石らしいのだが、化石を包む岩が異常に硬く手をつけられずにいた。

当初は貴重な化石を前に、慎重に、丁寧に扱っていた考古学者だったが、いかなる道具や強力な火薬を用いても覆った岩を砕くことができない。

壊すどころか削ることもできない化石に苛立ち、己を見失った考古学者は化石に頭を何度も打ちつけ、そのまま絶命してしまった。

黒光りする刀身は地竜。地竜の爪は闘いの中、流れる血で削られていく。それを知っていれば考古学者は無駄な死を迎えずに済んだであろう。

【NieR】
カビ臭い博物館の奥深く。薄暗い資料室の中で、一人の老学者が座っている。老学者の前には厳重に封印された箱が一つ。先代の館長から「開けてはならない」と厳しく言いつけられていた品だ。

何でもその中には人の生き血を吸う化石が入っているらしい。馬鹿な話だ。狭くて時代遅れにも程がある。本に囲まれた学問の世界で暮らしているから、そんな迷信を信じるのだ。

箱を開ける。埃が舞い上がる。中には奇妙な形の石が一つ。柄が付いているところを見ると儀式用の装備だろうか……もしくは武器のようにも見える。興味を引く形だ。これはもっと良く研究せねば。

にしても、こんなモノを怖がっているなんてなんて愚かな者達だろうか。クックック……老学者は化石の先端で左目をエグりながら笑った。



Earth Wyrm's Claw

鉄塊

※『DoD2』での名称は「折れた鉄塊」。

【DoD】
この世界で最も大きな剣。普通の人間では振るうどころか動かすことすらできず、今までこの剣を使おうと思う人間はいなかった。

この大剣を所持していた「バッカス将軍」は、弱者の命でさえ容赦なく奪う冷血漢で、自分の力を誇示するために殺した敵の鎧を溶かし作り上げた。

命を奪う度に重くなる大剣。次第に持ち運ぶのさえも困難になり、誰にも、当の本人さえも扱えなくなっていった。

ある朝、バッカス将軍の惨殺死体が見つかる。屍の傍らには血に染まり肉片の付いたこの鉄塊。いったい誰がこの剣を振るったのであろうか……。

【DoD2】
かつて世界で最も大きな剣と称され見るものをその迫力で圧倒していた雄姿は見る影もなく、剣というにはあまりにも惨めな塊に変わり果てていた。

剣が健在でいた時代。以前の持ち主は、この剣をとても人の力では扱えない代物までに鍛え上げ、それでもまだ何かに取り憑かれるように、刀身に使える素材を探し集めた。躯から鎧を剥ぎ取り、武器を奪い骨をも抜き出しては、打ち合わせ剣の一部としていた。

次第に剣は斑に色を変え、剣先に行くほど赤黒く伸びていく。その相反する色は、まるで隠り世と現世の境にも見えた。ある時、子供をさらい生きたまま製錬し剣に打ち込んだが、決して交わることはなく、赤黒い鉄はすべて砕け散ってしまった。

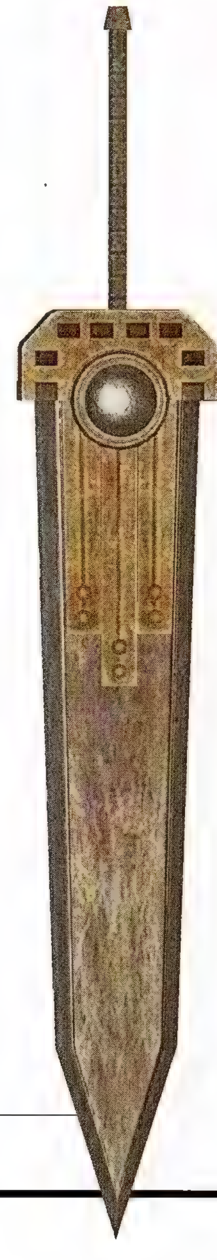
剣は再び比類なき巨体を誇示させるために新たなる刀身と、その身を鍛えられる者を探し続けているらしい。

【NieR】
我は産声を上げる。熱く熱せられた鉄がその身を形作る時。鋼の槌が我が身を打ち叩く時。薄闇の中に燃えさかる深紅と、鋼の火花の照り返す白光が見守る中。約束された業苦を与える為に。我は鉄塊と呼ばれし武器。轟音から生まれ落ちる刃。

我は死を与える。敵の畏怖と悲鳴を喜びに変え、その鉄の肌に臓物を飾りつけて。人の命を奪う時、暗い喜びが我が身を満たした。人の身を押しつぶす時、自らの生まれた意味を知った。その歓喜を伝える為に、人を殺し続けた。我は鉄塊と呼ばれし武器。我は殺す。殺す。殺す。殺す。

我は砕かれる。戦いと残血の果てに、憎悪と執念がこの身を引き裂く時。魔の理が引き起こす力と、飛び散る鉄の牙が血風を巻き起こす。赤い竜と戦いしその日々。我は鉄塊と呼ばれし武器。呪われし鋼は眠りの黒へと沈む。

我は夢を見ている。それは、小さな蝶の夢。ちいさな雨の中、懸命に飛ぶ蝶の夢。我は鉄塊と呼ばれし武器。深い夜の中、叶わぬ夢を今も見ている。



Iron Will

鉄パイプ

【NieR】
5月21日
とうとうお金が無くなってしまった。戦争のせいで食べ物の値段が高い。教会にいったけどケガをした人で一杯でぼくらを助けるよゆうはないって言われた。ヨナがやせてきている。何かおいしいものをたべさせてやりたい。

7月15日
親切なおばさんにあって食べ物をもらった。ぼくらと同じホームレスみたいだけど、何でも国の「救済しえんさく」っていうのに参加するみたいだ。いっしょにつれていってもらう事にした。ヨナも今日は元気そうだ。

8月1日
親切なおばさんが例の本を使ったら黒いオバケになった。あわてて逃げたけどおばさんはもう人間じゃなくなってしまったと思う。あの大人達が言っていた事は嘘だった。お金なんかもらえないしヨナの病気も診てくれない。街は高い壁で封鎖されていて出られなくなっている。こんなところに来なければ良かった。

8月5日
今日もすごく寒い。夏なのが嘘みたいだ。息も白い。オバケから逃げるためにスーパーマーケットに隠れる事にした。しばらくはそこに残っていた缶詰とかを食べていたけどそれももうなくなってしまった。ヨナの咳は止まらない。何か良くない感じがする。



Iron Pipe

盗賊の極意

【DoD2】
多くの盗賊達を纏めた、主に各国の汚い仕事等をしている、大きな組織があった。組織の幹部には左目と呼ばれる男がいた。諜報活動を得意とし、一線ではなく、さまざまな裏工作で組織に貢献していた。

左目には直接本人が戦うことをせぬ故、抜かれぬ剣があった。持つだけで富むという魔法の剣であった。実際左目は裕福であった。組織を監視し、裏工作や情報収集を行う彼には多くの報酬が支払われていた。

しかしある時、組織の若い盗賊達が左目を取り囲んだ。言い分は最前線で命を懸けている自分達よりも取り分が多いのが不満だということだったが、狙いは左目の富であった。左目は躊躇うことなく剣を抜いた。

かつて盗賊達を纏め上げた頃の、左目の姿がそこにあった。若い盗賊達は、一瞬の地獄の後、屍の山となっていた。左目はうんざりした様子で組織を抜けると言うと、古参の盗賊達の制止も聞かず、稼いだ富とともに荒野に旅立ったという。



Thief's Secret

髑髏の宴（どくろのうたげ）

【DoD】
邪神に魂を捧げた司祭が持っていたメイス。まだ邪教団が小さな集まりだった頃、司祭は神からの啓示を受ける。「新鮮な人間の魂を神に…」

司祭は、生贄として邪神に捧げられた人間達の首を、鎚にくくりつけてゆく。次第に怪しげな覇気を放つようになっていくメイス……。

邪教団が大きくなっていくにつれ増える髑髏。やがて、増えた髑髏たちは一人の男の顔へと変貌を遂げていく。司祭にも見覚えがある顔。

それは、司祭の顔であった。邪神への完全な忠誠心から、悪魔に姿を変貌させた司祭は、人間である自分の姿と決別したのであった。



Skull Mace

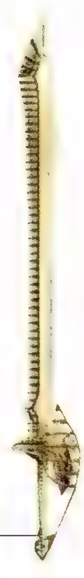
囚われの女神（とらわれのめがみ）

【DoD2】
遠い昔、少女が気づいたのは、とても暗く、とても狭く、息も出来ないくらい噎せ返る血の臭いの中だった。手、足、口、全ての自由が利かずただ、眼球だけで虚空の暗闇を見つめることしかできなかった。

少女が最後に見た光は、人を糧として燃えさかる炎と、自分を絡め取る幾本もの手。その後は、闇の中で自分の体を何度も何度も、冷たい塊が貫く感覚だけが思い出せるすべてであった。「ワタシハ、……ナニ？」

突如として少女の闇は放たれた。眼前に広がるのは満天の星空、その星の輝きさえも眩しかった。だが、体の自由までは戻ることがなく少女は自身を見ようと唯一動く目だけを必死に傾けた。その先にあったのは、手も足もわからず、血に満ちた肉の塊が鼓動と共に波打っていた。

少女は声のない悲鳴を上げる。それを凝視する黒い影が、少女の目から星空を隠す。そこには長い牙を持った魔物の顔が近づいてきていた。少女の肉塊と血が一瞬ざわめいた瞬間、それは鋭い刃となり魔物の顔を貫いていた。



Captured Goddess

嘆きの鎚矛（なげきのつちほこ）

【DoD】
海賊退治を命ぜられた僧兵が携えていたメイス。息子と共に海に出た彼は、その強さゆえ海賊から恐れられる存在になっていった。

あるとき、魔道士が率いる海賊船団に遭遇した一行は、召喚されし海竜に反撃をされる。そして不幸にもその牙は若き息子の命を奪ってしまう。

最愛の子供を失った戦士は混乱の中、海賊と海竜を屠る。だが、失った息子の命が戻るはずもなく、絶望した彼は自らの命を絶つ。

僧兵の涙はやがて海の神の知るところとなり、それを哀れんだ神によって、このメイスには海神の爪の魔力が宿ることになった。



Mace of Woe

名もなき刀工の剣（なもなきとうこうのけん）

【NieR】
ガツ　ガツ　ガツ　ガツ
採掘場で男達が汗を流しながら鉄の石を削っている。男達の陽気な歌が暗い洞窟に響き渡る。俺達は労働者。鉱山の労働者。土にまみれた労働者。今日も元気に鉄を掘る。
ガツ　ガツ　ガツ　ガツ……

ブオ　ブオ　ブオ　ブオ
たたら場で女達がふいごを踏む音がする。真っ赤に焼けた砂から鉄を取り出す音がする。私達は労働者。たたら場の労働者。風を送る労働者。今日も元気にたたら踏む。
ブオ　ブオ　ブオ　ブオ……

カン　カン　カン　カン
鍛冶場で刀匠が槌を振るう音がする。鋼を鍛え刃とする為の力強い槌の音が鳴る。私は刀鍛冶。一振りの刀を生み出す刀鍛冶。鋼を御する刀鍛冶。
カン　カン　カン　カン……

ザク　ザク　ザク　ザク
戦場で肉が切られる音がする。敵を殺して、誰かを殺して、人間を殺す音がする。だれかたすけて。いたいよ。くるしいよ。おかあさんたすけて。
ザク　ザク　ザク　ザク……



Nameless Blade

南海の魔神（なんかいのまじん）

【DoD】
七つの海を股にかけ商売を行った大商人がいた。商人は新たな大陸を幾つも発見し、巨万の富を築いていった。

ある時商人は、南海の海の底、太古の昔に海中に没した失われし大陸に「闇を呼ぶ剣」と呼ばれる魔剣が埋もれている、という噂を聞きつける。

商人は珍しい剣でまたもや儲けようと、南海へと旅立つ。苦労の末見つけた剣は、魔神を模した石像の口に咥えられていた。

突如剣より無数の火の弾が発生。商人の船は海の藻屑と消えた。数日後商人の亡骸が海岸に流れ着く。その手には湾曲した長剣が握られていた。



Southern Sea God

涅槃の短剣（ねはんのたんけん）

【DoD】
神殿建立の際、人柱となる少女が自らの命を絶つために使った短剣。代々の人柱の命を絶ってきた剣身からは少女達の魂が舞い踊るといわれている。

第一代の人柱は敬虔な信者であった。清らかなる少女は純粋に神殿の礎となることを選び、自らの命を絶った。

第二代の人柱は心優しい町娘であった。人柱に選ばれたことを悲しみながらも、人々の役に立つならばと、少女は命を絶った。

第三代の人柱は盗みを働いた娘であった。娘は神を呪いながら息絶えた。その時から、直刀であった剣身は捻じ曲がったといわれている。

【DoD2】
神殿の祭壇に、ひっそりと奉られた短剣がある。それは、神殿建立の際人柱となった少女達の、自害に用いられた聖なる短剣だった。

神に命を捧げた少女は、神殿の柱と同じ数。それは、望まず死んだ少女達の呪いで、刀身が醜くねじ曲がる程のものだった。

少女達の呪いか、司祭らは次々に事故や病で急逝した。そして大きな戦の後、神殿は無人となった。

建立から数百年。神殿は今もあり続ける。祭壇の短剣は月光を宿し、その光で少女達の墓碑となった神殿を、淡く照らし続けていた。

【NieR】
少女は生まれた時から婚約者がいると聞かされて育てられました。家の中で日々花嫁修業に励み、夜は窓から見える景色に向かって婚約者へ祈りを捧げました。「●●様、早く迎えに来てくれる日をお待ちしています。」

少女が暮らす家には、同じ年頃の少女が何人も暮らしておりました。少女たちは全員が同じ婚約者の為に、日々花嫁修業に励み、夜は祈りを捧げました。「●●様、早く迎えに来てくれる日をお待ちしています。」

ある日、婚約者として選ばれるのは、最も優れた1人ではないのかと少女たちが喧嘩をしました。自分が婚約者として一番優れている、と譲らない少女たちに世話係の女は少女たちに優しく話しかけます。「大丈夫、あなた達は全員●●様のお嫁さんになれますよ。」それを聞いた少女たちは皆笑顔になりました。

婚約の日に少女たちが連れてこられたのは、家の窓から見える石畳が並ぶ場所でした。少女たちに一つの短剣が渡されます。婚約者に会うにはこの場所で命を絶たねばならない、そう聞かされた少女たちは我先にと短剣を奪い合いながら自害しました。その後、少女たちが死んだ場所に神殿が建てられました。神殿の名称は少女たちの婚約者の名前でした。



Nirvana Dagger

ノウェの剣（けん）

【DoD2】
双刀の金獅子と呼ばれた英傑が初陣の折、彼と共に剣技を磨いた女騎士より贈られ、以後彼の愛剣となったのが、この剣である。剣は幾度もの戦から男の命を救い、仲間の命を救った。双刀の金獅子は我が身のように剣を大切に扱ったといわれている。

ある時、双剣の金獅子は司祭の神託に従い、未踏の地へと赴いた。そこで一匹の竜と一人の幼子に出会う。竜は人語を操り、幼子は竜語を喋った。この幼子こそ神託にあった救世主であろう。男は竜に幼子を連れ帰りたいと申し出た。竜は男に問う。貴様は幼子を父から引き離すだけの代価を持っているのか？…と。

双刀の金獅子は答えた。私がこの幼子の、人の父となろう。あなたが教える竜の知恵だけでは、この幼子は地を這う愚竜となる。あなたでは教えられぬ人の生き方を教え、竜にも負けぬ騎士へと育ててみせよう。この幼子に与える未来こそが、代価とならないだろうか？

竜は不機嫌に男を見下ろし、せせら笑うように言う。いいだろう。この幼子を連れてゆくが良い。しかし儂も共にゆく。人の父は貴様に任せるが竜の父は儂にしか務まらぬからな。双刀の金獅子は竜の言葉を受け入れて、さらに自らの剣を違えぬ信義の証として譲った。くだらぬ、と竜は言い捨て、剣は彼と幼子の古巣へと投げ込まれたという。



Nowe's Sword

ノウェの長剣（ちょうけん）

【DoD2】
今より数年前、ノウェが騎士団の見習いとして入団する日、前騎士団長より授かったのがこの剣である。ノウェは封印騎士団に保護されて以来、前騎士団長オローが父代わりとして、人としての生き方を教え込まれてきた。

豪放磊落で剣の腕も右に出るものはいない。オローはノウェの憧れでもあった。ノウェは思っていた。いつかはオローのような強い人間になるんだ、と。そして、鍛錬を怠ることなくこの剣と共に歩んできた。

初陣の日。戦線での壮絶な命のやり取りに躊躇したノウェは間一髪のところをオローに助けられたのだった。戦場に慄くノウェに対してオローは語った。

「剣は命を奪う、しかし同時に仲間の命を救うものでもある。大事なのはそれを使う者の心だ。それを忘れるな」そして現在。ノウェはこの剣で命を奪うのか、それとも助けるのか、剣もオローも何も語りかけはしない。



Nowe's Long Sword

農民の残夢（のうみんのざんむ）

【DoD】
悪政に悩んだ農民が領主を討つために鉄屑を集め作り上げた武器。その歪んだ鉄屑には農民たちの血の願いが込められている。

いくら農民が苦しめど何の助けも出さない領主。「わしらがこんなに苦労しているのに許せん！」一致団結して領主の元へ向かう農民たち。

朝日が昇った瞬間、一気に領主の城に乗り込む！　しかし、実は領主も国のために農民から泣く泣く高い税金を徴収し、自らも貧しい生活を送っていた。

無能な領主を哀れに思った農民達は武器を捨て、領主と仲良く、そしてひもじく暮らした……。



Iron Scraps

信義（のぶよし）

【DoD】
遥か東の国の都に歌を詠むことで生計を立てている歌人がいた。自分の才能に限界を感じ始めていた彼は、ある日妖怪と契約をしてしまう。

妖怪の力により、次々と新しい歌を発表する歌人。どの歌も素晴らしく、都中の評判となる。ついには将軍家のご指南役にまで昇進した。

ある日、妖怪が再びやってきて歌人に言った。「おまえの一生分の才能はもう使い果たした。おまえは二度と歌を詠むことはできないだろう。」

妖怪の言ったとおり、彼は一行の歌も詠めなくなってしまう。世を儚んだ彼は、自害してしまった。その剣は今も彼の血で鈍く光っているという。

【DoD2】
遥か東の国の都に歌を詠むことで生計を立てている歌人がいた。自分の才能に限界を感じていたある時、質屋に飾られていた美しい刀を目にした。赤く輝く刀身に魅入られた歌人は、刀を購入し持ち帰る。

傍らに刀を置き、うとうとと寝入ると、夢枕に一匹の妖怪が現れ、歌人に取引を迫った。おまえの名をくれれば、万能の才を授けよう、と。

歌人は才を得る為に、自らの名を妖怪に与えた。契約どおり、歌人は優美な肢体と、卓越した才能を一夜にして手に入れた。

才の代わりに名を失った歌人は、次第に人の姿を失っていく。ついに妖怪と成り果てた歌人は、闇の中へと消えていった。後に残るは、名を得てさらに輝きを増した刀だけだった。

【NieR】
東の果ての都に高名な歌人がいた。けれど歌人の才は、晩年には一首の歌すら詠めぬ程に枯れ果ててしまう。落ちぶれて嘆く歌人に、いつの間にやら傍に佇んでいた僧がそっと一振りの刀を握らせ語りかけた。

「この刀で一人殺せば一首、二人殺せば二首、この世に二つとあらぬ程素晴らしい歌が詠めましょう」僧の言葉に縋りつくようにして、歌人は夜の闇にまぎれ路傍の男を斬り捨てた。すると翌日歌人は素晴らしい歌を詠み、再び名声と栄華を手に入れた。

それからも歌人は一人殺して一首詠み、二人殺して二首詠んでは、目も眩む程の富と名声を手に入れ続ける。ところがある時、大切な者を殺せばどんなに素晴らしい歌を詠めるのか、という欲求を抑えきれなくなった。

そして歌人はとうとう自らの妻を殺して一首詠み、子らを殺して子の人数分歌を詠み、屋敷中の者を殺して歌を詠み　歌を詠み　歌を詠み　歌が追いつかぬ程に、道行く者を殺しては歌を詠み　殺しては歌を詠み　殺して　殺して　殺して　殺し、やがて最期は歌も詠まずに自害した。残ったのは血に濡れた刀だけだった。



Faith

バールベリトの涙（なみだ）

【DoD】
バールベリトとは人と悪魔の契約の際に現れ認証を行う悪魔である。彼は多くの邪悪な契約を認め、次々と人間を地獄に堕としていく。

あるとき、バールベリトは一人の人間の女を好きになる。それは病気の父を持つ若い女であった。彼女は悪魔に言う。「私の父を助けてください」

だが、そうすれば女は地獄に堕ち、悪魔のモノにはならない。悪魔は悩み、ついにひとつの答えを出す。「自分が代わりに地獄に堕ちればよい！」

急いで女の家に行くと、病死した父の傍らに眠るように女が死んでいた。死を理解できない悪魔は、女を延々と揺らし続けたという……。



Balberith

背信の刃（はいしんのやいば）

※『DoD』、『DoD2』での名称は「デボルポボル」。

【DoD】
姉妹の刀匠「デボ」と「ポボ」が叩き上げた剣。デボの剛力とポボの繊細さ。王国のどんな鍛冶屋が挑んでも、この二人に勝てるものはいなかった。

ある日、二人の評判を聞きつけ一人の吟遊詩人が現れる。詩人の天使のような美しい容姿とやさしい性格に二人は心を一瞬にして奪われた。

詩人の愛をその身に受けようと必死で剣を作る二人。だがお互いが詩人を求め醜く競いあったために出来上がるものはなまくらな刀ばかり。

それを見かねた詩人は二人を嫁に迎え入れる。深い愛情に満たされた姉妹は、更に腕に磨きをかけ、この銘刀「デボルポボル」を作り上げた。

【DoD2】
むかしむかし、北のとある寒い国にデボとポボという、とても仲の良い姉妹の鍛冶屋が暮らしていました。いつものように二人が仕事に励んでいると、大慌てで村人が駆け込んできました。なんと！　幼い頃に突然消えた母が見つかった知らせでした。

母ポコは、山の麓にある巨大な氷塊の中に当時と変わらぬ若々しい姿で閉じ込められておりました。二人は力を振り絞って何度も氷塊を壊そうとしましたが、いくら火をくべようが、巨大な鎚で叩こうが、まったく壊れる気配はありません。

諦めかけた時、ポボが言いました。『お姉様……私達の鍛えた剣ならひょっとして……』デボは二人の愛と努力の結晶、傑作デボルポボルを母眠る氷塊へ！　するとどうでしょう！　二人の身体は氷の中の母に抱かれておりました。

『二人とも…大きくなって…。』母は氷塊の中で生きておりました。二人は嬉しくてずっと泣きました。そして、何日も語り合いました。二人が出ていく時、母は二人を引き止めませんでした。なぜなら姉妹は炎を扱う鍛冶屋だったからです。

【NieR】
その姉妹は機械仕掛けの人形だった。しかし誰が見ても人間にしか見えない精巧な造りだった。人間が成し得る技術の粋を用いて作られた二体の人形は、人間のように歩き、人間のように食べ、人間のように笑った。ただ一点、涙を流す事だけは出来なかった。そういう風には作られていなかったのだ。

姉妹は人形だったから何も感じなかった。人と同じように悲しんだりするが、本当は悲しくなんかなかった。悲しいという事が何か判らなかった。友達が事故で死んだ時も、人形を作った制作者が病で死んだ時も、何も感じなかった。姉妹にとっては、ただ居なくなったというだけの事だった。

暖かい春のある日。姉妹のところに一匹の猫が迷い込んできた。ひどく汚れた不細工な猫は、痩せて病気持ちだった。姉妹は面倒だなと思いながら世話をする。ミルクをやり、体を拭いてやり、暖めてやると、猫はすっかり元気になった。その日から猫は姉妹の周囲を毎日ウロウロするようになった。エサが欲しくてすりより、ネズミを狩ってきては自慢し、だっこして欲しくて毎日鳴いた。姉妹は面倒だなと思っていた。

冬の風が冷たいある日。外から猫が家に戻ってきた。か細い声でヒャーと鳴くとそのまま倒れてしまいそのまま死んでしまった。妹は死体を何度も何度もゆすった。姉は死体に何度も何度も声をかけた。だが、猫は動く事も応える事も無かった。姉妹は胸の奥の方で何かが壊れる音が聞こえたような気がした。そして、何も感じる事は無くなっていった。



Blade of Treachery

背理の鎌（はいりのかま）

【DoD】
ある風の精霊が人間の若者に恋をした。精霊が人間と交わるのは禁忌であるにも関わらず、彼女の想いは日々募るばかりであった。

種族を裏切る精霊に与えられるのは死である。風の精霊の長は彼女の首を刈るように仲間に命じ、精霊にのみ効果があるという鎌を用意する。

気配を察知した彼女は、最後に若者にひと目逢おうと、森を駆け、海を渡り、山を飛ぶ。だが鋭い鎌を持った追っ手が彼女を追い続ける。

数年後、村ではある少年が元気に飛び回っていた。少年は自在に風を操ることができたのである。父親は彼を見守り続ける。何も語らずに。

【DoD2】
皆に慕われている若者がいた。川や谷を飛び回る若者は風を操ることができたらしい。そんな明るく元気な若者にもひとつ気になっている事があった。

数年経ち父親が他界した。若者はとても悲しんだ。だが父が亡くなる前に若者にある一言を残した。それは若者が昔から気にしていた、自分からは口にしなかった母親のことだったのだ。

「この地図の場所へ行きなさい」そう言い残した父親から託された鎌と地図を手に取り、何かに誘われるよう地図が示す場所を目指した。どれぐらい時間が経ったであろう。森を抜け、海を越え、山を翔けてきた若者はすでに歩く気力もない。ふとひとつの村が若者の目に入った。

長と呼ばれる者が迎えてくれた。この鎌は村の物らしい、そして逢わせたい人がいると言った。綺麗な女性が入ってきて、若者は一目見て自分の母親だと感じた。若者はその後母親と幸せに暮らしながら、風の精霊と人間の仲を取り持ち共存が始まった。以後その鎌が使われることはなかったという。



Apostate's Misery

破戒の鎚矛（はかいのつちほこ）

【DoD】
一人の魔法使いが鉄塊から一振りの鎚を生み出した。魔法使いといっても、小さな火しかおこせない、見習いの魔法使い。

体躯ばかりが大きく、大飯食らい。魔法使いのイメージと大きくかけ離れた男。兄弟子からいつも馬鹿にされ、師からも破門寸前であった。

ある日、兄弟子と一緒に魔法の触媒の薬草散策に赴いたときに事件がおきる。兄弟子の罵りが原因で口論となり、鎚で兄弟子を殺めてしまう。

兄弟子の血を吸った鎚は異形となり、その魔力を吸い成長した。男は魔を鎚で補完できることを覚え師まで手にかける。鎚は恐るべき力をもった。



Mace of Corruption

白蝋の剣（はくろうのけん）

【DoD】
鋸状の刃で相手の剣と肉を切り裂く剣。この剣をあまり使い過ぎると引き裂く時の振動で指がしびれ、蝋のように真っ白くなり体が動かなくなる。

今よりも何百年も昔、黒き肌の騎士はこの剣を使いこなし数々の武勲を立てていった。次第に漆黒の体は雪のように白くなってゆく…。

時が経ち、国の威信を懸けた大戦で敵大将の首を討ち取り勝利を治めた黒き騎士。彼の体は既に白を超え透明で誰の目にも見えなくなっていた。

勝利に喜び歓声が上がる中、一人の兵士が空に向かって放った祝矢が黒き騎士の心臓を貫く。しかし兵士達は誰一人、彼の死を知ることがなかった…。



Swordbraker

破剣・封天の韻律（はけん・ほうてんのいんりつ）

【DoD2】
かの地に武具の名匠あり？　神に弄ばれる世界を憂い神の力に打ち勝つ武具を生み出すことを決意す？

神に抗うは、封印の力？　封印の力、即ち女神の力？　名匠は女神の力を武具に封入す？

そんな噂を聞きつけた、駆け出しの刀鍛冶は、一儲けしようと、伝説の武具に似せた武器を作ろうとした。

刀鍛冶は苦労の末、武具を一振り完成させた。しかし、刀鍛冶のその後を知るものはいない。武具を狙うものに襲われた、女神の呪い、などまことしやかに囁かれているが定かではない。



Sealblade: Calamitous Verse

破獄の針鼠（はごくのしんそ）

【DoD】
学者は自分の存在意義を追い求めた。どうして自分がいるのか？　父母がいて自分がいるのは子供でもわかる。だが人間はどこからやってきたのか？

神が創りだしたのか？　学者は悩み続け、その答えを空に求める。人は万物の構成要素のひとつであり、その中でも大きな存在なはずだ。

万物は太陽、月、星、大地、人で構成されており人だけが唯一破壊的な存在だと考えた。ある日、学者がそんな仮説を酒場で得意気に話した。

説法にも似たそんな話を聞き、一人の老人が大声で笑い、鉄塊をテーブルに載せた。「ここにすべてがある。」そう言い残し老人は去っていった。



Killer Mouse

ハンチの槍（やり）

【DoD2】
西の城下町の彫金屋の主人は、貴族の甲冑の装飾を手がけるほどの腕の持ち主だったが、仕事場へは誰も出入りさせず、夜になると妻にも内緒で外出する変わり者だった。不審に思った妻が後をつけていったが、村はずれの墓地までくると、見失ってしまった。

ある晩、妻が墓地に先回りして隠れていると、彫金屋がやってきて、埋葬直後の墓を掘り返し始めた。あまりのことに妻は気が動転し、その場から逃げ出したが、彫金屋が帰ってくる頃を見計らって、仕事場を確かめることにした。

妻が目にしたのは、豪華な甲冑や装飾品で着飾った無数のミイラ達と、無邪気にはしゃぐ夫だった。彫金屋は、墓をあばいては遺体を仕事場に持ち帰り、自ら仕立てた細工の装飾品を身につけさせて楽しんでいたのだった。

妻は嘆き絶望し、彫金屋に飛びかかり、一体のミイラが手にした槍に、自分の体ごと倒れこんだ。後日、甲冑で着飾った大量のミイラに囲まれるように、一本の槍で貫かれた男女の遺体が発見された。この見事な細工の槍が、後にハンチの手に渡った。



Hanch's Spear

日出国（ひいずるくに）の魔刃（まじん）

【DoD】
東方の大商人が贅沢の限りを尽くし作り上げた至高の刀。その鋭い切れ味は空気をも切り刻み、斬られた者は痛みも感じずに絶命していくという。

しかし、持ち主の業の深さが乗り移ったせいなのか、刀身に映る己の姿は醜い魔物の姿をしている。欲深いものが覗くとその姿はより醜く映るらしい。

商人も自らの姿が誰よりも恐ろしく、目も当てられぬほど醜く映るので、出来るだけ見ぬようにしていたのだが…。

ある日、魔が差して覗いてしまったその姿は、この世のものとは思えぬほどの醜い姿だったため茫然自失となり、その場で自ら首をはねた。

【NieR】
遠い昔、黄金の島と呼ばれた国であらゆる金銀宝玉を溶かして作り上げられた刀。そのあまりの切れ味の鋭さでわずかでも切り傷をつけられると、傷が縫合できずそこから全身の血が流れ出てしまうほどであった。

その刀が何の奇縁か貧しい身売りの女の手に渡ったときのこと。身の丈ほどもある刀を自在に操れない女は自分の床に刀をしのばせ、身体に触れる男にその刃を向けた。男達は知らぬ間に切られ、痛みも感じず血を抜かれて絶命していった。そして遺体から金銭を抜き取り、女の私腹は肥えていった。

やがてその金で自らを美しく着飾り、国のあらゆる金銀宝玉を手に入れた女は、その刀に溶けた宝石も何とかして手に入れたい、身につけたいという欲望に駆られていった。その衝動を掻き立てるほど、刀身は美しく洗練されていたのだ。女は刀を持ち、鍛冶屋に向かう。

道中、その刀の重みに重心を崩した女は、橋の上から川に落ちてしまった。欲深い女は、それでも刀を手放さず、無我夢中で刀を握り締め離さなかった。そして体中に無数の切り傷をつけたことに気付かなかった女は、翌日河岸で全身の血を失った状態で死んでいた。



Sunrise

人斬（ひとき）りの断末魔（だんまつま）

【DoD】
人を切る快感に溺れ、毎夜罪もない者の命を奪い、その血でこの世のものとは思えぬ素晴らしい絵を描き続けた悲しき哀れな絵師の剣。

絵師には夢があった。「僕の絵で世の人々の気持ちが安らげばいい」そんな気持ちで絵を描き続けていたのだが…。

彼の芸術は認められず、そればかりか変人として街の人々から冷たい視線を受け続ける。絵師の繊細な心は次第に崩壊していった。

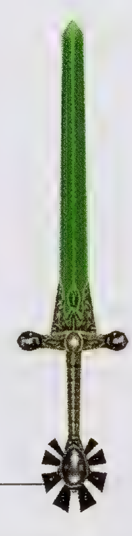
「赤！ 赤い色!! アガーッ!!」叫びながら人々を殺め続ける哀れな絵師。最後は自らに刃を刺し、笑顔で息絶えた…。

【DoD2】
俺はどうしてしまったのだろうか？ この剣を振るうたび、切り裂いた首から血飛沫が飛び散るたび、言いようのない歓喜がこみ上げてくるのだ。

真っ赤な血、街路を染める血。俺の体を染める血。血、血。その鮮烈な色が、両目に焼き付いて離れない。血、血、血、血、血。

ジャバジャバと、バシャバシャと、血が吹き出る。剣を振るい肉を斬り裂く。温かな赤がすべてを染める。血、血、血、血、血ぃ、血ぃぃぃ！

血ィィー！ アガッ！ アガイヂィィ！
血、血、血ぃ血ぃ血血ちちチヂヂチ
赤ァアガガッアガァ！ アッガーァッ



Slaughterism

百獣（ひゃくじゅう）の剣（けん）

【NieR】
むかしむかしある王国に3人の兄弟がいました。3兄弟の次男は軍隊をひきいる将軍様でした。軍隊はとても暴力的でみんなおびえていました。

将軍は戦争が好きでした。もえた街や転がる死体を見ることが好きでした。将軍は征服することではなく、滅ぼす事だけを命じました。機械のように訓練された兵隊達は将軍様のために村や街や国をぜーんぶ滅ぼしていきました。将軍様はそれを見ながらグフグフグフと下品な声でわらいます。

軍隊はひたすらに進軍しました。海の国も、山の国も、夏の国も、冬の国も、東の国も、西の国も、見境なく滅ぼしていきました。絶対的な将軍様の命令に従い、ずーっと何年も何年もひたすら殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺しまくりました。

やがて軍隊はある国に到着しました。街の人も兵隊もお姫様も王子様もみんなみーんな槍で突き殺しました。最後にみずぼらしい将軍が涙ながらに命乞いをしてきましたがすぐに殺しました。その将軍の顔はどこかで見たような顔でした。兵隊達は思い出そうとしましたが、将軍の娘が現れたとたんにその子を突き殺すのに夢中になり、二度とその事を考える事はありませんでした。



Beastbain

百獣（ひゃくじゅう）の剣王（けんおう）

【NieR】
むかしむかしある王国に3人の兄弟がいました。3兄弟の長男はその国をしはいする王様でした。王様はとても残酷でみんなこわがっていました。

王様は毎日毎日国民からひとりイケニエを選んで処刑しました。今日は家族の見ている前で母親の首をはねました。母親の頭は3回転ほど回って、既に殺されたその息子の頭のとなりに落ちました。ああ、なんという事でしょう。王様はそれを見て笑っているのです。ゲヘゲヘと、気持ちの悪い声で笑っているのです。

そんなある日、王様は病気になりました。生きながらにして体がくさっていく病気でした。くさった体をひきづりながら王様は処刑を続けました。家臣達は逆らいもせず毎日毎日毎日毎日処刑を続けました。

最後に王様はくさって死にました気持ち悪いにおいをだしながら王様はくさって死にましたでも家臣達は王様の前で処刑を続けました毎日マイ日殺しましタくさった王様とくさった家臣とくさった国民とくサったくさっおまエたチの



Beastlord

百獣の双槍

【NieR】
むかしむかしある王国に3人の兄弟がいました。3兄弟の三男は毎日寝て暮らすなまけ者でした。でも、三男はとても陽気だったのでみんなに好かれていました。

国に病気が流行った時も、三男は王宮でゴロゴロしながら鼻歌鳴らすだけ。でも街の人は三男の陽気な歌声に癒やされるようだと三男の事を褒め称えます。あの人は立派だよ。本当に立派だよ。

国が戦争に巻き込まれた時も、三男は王宮でゴロゴロしながら昔話をするだけ。でも街の人は三男の面白い話で戦争のつらさも忘れる事が出来ると慰め合いました。あの人はすごいよ本当にすごいよ。

ある日も三男は王宮でゴロゴロしていました。でも今日は街の人の声は聞こえてきません。三男はゴロゴロしながら、どうしてだろう？ゴロゴロ、どうしてだろう？ゴロゴロ、どうしてだろう？ゴロゴロ……と考え続けていました。が、そのうち眠くなって寝てしまいました。戦争と病でみんな死んでしまった国で、いびきだけが今日も王宮に響いています。ここは幸せの王国。幸せの王国。幸せの王国。幸せの王国。幸せの王国。幸せの王国。



Beastcurse

封印騎士団の呪杖

【DoD2】
かつて、封印騎士団団長オローが健在だった頃、気炎の直轄区の守りを任され、火炎の賢者と呼ばれた魔道師がいた。

オロー団長の良き理解者でもあり、親友でもあったその魔道師は、気炎の地をその偉大なる魔力によって、清浄に保っていた。

しかし、オロー団長が敵の刃に倒れた後、次期団長との対立により封印騎士団を離れたその魔道師は、気炎の地にて、圧政に苦しむ人々の為に、尽力を注いだ。

飢えに苦しむ人々に食料を買い与える為、売れるものはすべて売り、己の魔力を引き出す為の武器さえも売り払い、最後には餓死したという。



Knights of
the Seal's Curse Staff

深い闇

【DoD2】
あるところに、息をするように人を殺す男がいた。理由も理念も理屈も理想もなく、ただ人を殺し続けた。人を殺したいわけではなく、男にはそれしか出来なかった。

ある日、男は路地裏で少女を取り囲む集団に出くわした。男はいつもの様に特に理由もなく集団を殺戮しつくした。

残った少女を殺そうと振り返ると、少女は涙を浮かべながら男に感謝していた。人から感謝されたのは、男の人生で初めてだった。男は自分のやったことに始めて意味を見いだすことができた。

男は満面の笑みを浮かべると、感謝の気持ちを込めて剣を振り下ろした。血溜まりに沈む少女を優しく見下ろした後、男は自信に満ちた足取りで歩き去った。



Pitch Black

不死鳥の囀り

【DoD2】
かつて魔術が栄えた時代、戦いの動向は軍の魔術師が握っていた。魔術の効果には杖の力が関わっており、杖を巡って戦いが絶えなかった。特に、更なる昔、古代の付与魔術師により造りだされた杖には、失われた大魔術が封印されているものも多かった。

ある魔術師が遺跡から一本の杖を見つけ出した。彼の魔力自体はそれ程の力はなかったが、その杖の魔力は計り知れぬもので、彼はその杖の力で軍の要職に就き、一年も経つと将軍直属の魔術師となっていた。

彼の赴く戦いは負けを知らず、彼の発言力は次第に大きなものとなっていたが、事件は起こった。彼が杖を発見した遺跡から、全く同じ杖が何本も発見されたのだ。杖は各国に出回り、戦いは凄惨なものとなっていった。

杖の力で地位を得た彼は、自らの力を高める努力を怠っていた。戦いにおいて各国の魔術師は、修行の成果と杖の力を存分に発揮し、彼が赴いても勝てなくなっていった。年明けの人事で、年十回程であった参戦を、各地を転戦し、毎戦参加するよう言い渡された。既に彼は、ただの一兵士だった。彼の晩年はこうして始まった。



Phoenix Curse

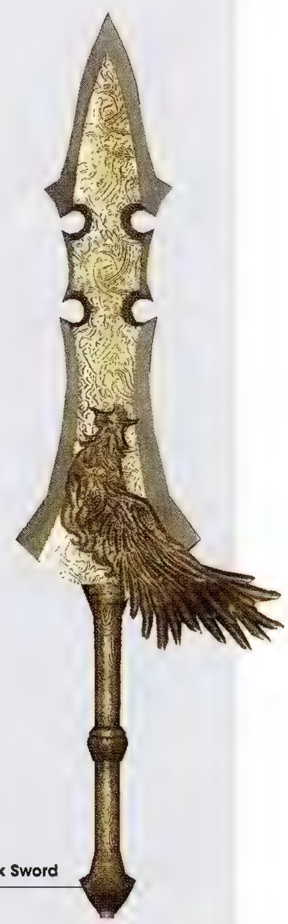
不死鳥の大剣

【NieR】
今は昔のお話です。ある所に光輝く羽根を持つとても美しい小鳥が、森の奥深くで静かに慎ましやかに暮らしておりました。

ある日、森の奥に口減らしの為に捨てられた子どもが迷い込みました。飢え衰えた子どもを憐れに思った美しい小鳥は、自らの羽根を一枚啄ばみ子どもに渡しました。子どもはそれを持ち帰ると大層喜ばれ、再び家族と暮らせるようになりました。

それを聞きつけた人が次々と森に押し寄せ、美しい小鳥に向かって自分が如何に貧しく不幸で報われぬかを訴えました。憐れに思った美しい小鳥は一枚、また一枚と輝く羽根をむしっては与えむしっては与え、そしてとうとう最後の羽根も与えると、美しかった小鳥の姿はみすぼらしい体となり果てました。それでもみすぼらしい小鳥は悔いなどありませんでした。

羽根を失い寒さに凍えるみすぼらしい小鳥の前に、いつかの子どもが現れ、恩返しの為に光輝く美しい小鳥を探しているのだと伝えました。みすぼらしい小鳥は喜び、自分の願いを子どもに伝えました。「それは私です、どうかその胸で私を温めてくれないでしょうか。」けれど子どもはそのみすぼらしい小鳥を一瞥すると、嘘付きめと大きな剣で斬り捨て焼いて食べ尽くすと、また美しい小鳥を探し始めてしまいましたとさ。



Phoenix Sword

不死鳥の短剣（ふしちょうのたんけん）

【NieR】
戦地に赴いた男と結婚の約束をしていた娘がいた。娘は信心深く、朝に昼に夜に祈りを捧げ、ただただその男の無事を願い続けた。娘の一途な祈りが通じたのか、ある夜、娘の夢に光輝く小鳥が現れ言葉を託した。

「男は無事戻るでしょう。」小鳥が囀ったその言葉に、信心深い女は泣きながら喜んだ。「けれど、」光り輝く小鳥は美しい声で続けた。「心は戻らないでしょう。」

やがて小鳥の言う通り、男は生きて戻った。その逞しい体に無数の傷跡を残して。やがて小鳥の言う通り、男は確かに生きて戻った。その傍らに見知らぬ美しい女を連れて。娘はそれでもそんな男に、これまでの愛しさを込めて駆け寄った。

男は驚きその娘を抱きとめるが、やがて倒れ込む。倒れた男の元に佇む娘の右手には血塗られた短剣が、左手には赤黒く熟れた果実のような男の心臓が握られていた。もう男の心はどこにも行かない。娘は血溜まりの中、幸福に酔いしれた恍惚の表情で愛おしそうに男の心臓に口付け、感謝の祈りを捧げた。



Phoenix Dagger

不死鳥の槍（ふしちょうのやり）

【NieR】
とある辺境の国に死をも恐れぬ戦士がいた。戦士の屈強な体は弓等では射抜けぬと思える程に頑丈だった。その為、戦士は常に戦場の真っただ中に身を置いていた。

ある時戦士の夢に美しい小鳥が現れた。小鳥は、その勇猛な戦いを褒め称え「戦が終結し平和な世界となる事」か「不老不死の体」どちらかの願いを叶えようと囁いた。戦士は「不老不死の体」を欲した。

それからの戦士の戦いぶりは目を見張るものであった。敵を草を刈るようになぎ倒し、いくら弓を射たれてもいくら太刀を浴びても平然と敵の真っ只中を切り開いていくのだ。王は戦士に数々の称号と褒美を与え、戦士の輝かしい栄光の日々は永遠に続くかと思われた。

けれど戦は終わる事なく、辺境の国はやがて滅び、戦火は拡大し辺り一帯は荒廃した。草木は枯れ、人々は死に絶え、やがて戦士を知る者はいなくなった。いくら飢えようとも死なぬ体で戦士は再び美しい小鳥の夢を見る。戦士は死にたいと小鳥に懇願したが、小鳥は死ねないと答えた。戦士は未来永劫死ぬことはないと囀った。



Phoenix Spear

不浄なる斧（ふじょうなるおの）

【DoD】
野心家の魔術師が火トカゲを閉じ込めた斧。その破壊力と共に、炎の魔術を使うことができる魔剣に成長した。

魔術師は火トカゲの囁きを耳にする。「血を…さすればさらに強力な力を与えよう」力の魔力にとりつかれた彼は、やがて人を殺めるようになる。

「どうだ？　我にもっと血を与えてみぬか？」魔剣はそう囁き、さらに血と臓物を欲する。力にとりつかれた魔術師に抗う術はなかった。

近年、魔剣と共に枯れ木のようになったミイラが発見された。闇に魅了されし者達に魔剣は今日も囁きつづける。「殺せ」と……。

【DoD2】
汚れた魂の魔術師により、火トカゲが封じ込められた斧。持つ者の心に他者への憎悪を囁きかけ、狂気へと駆り立てる。

この斧を手に入れたこそ泥は、その力で瞬く間に近隣の峠を制し、大きな山賊団の首領となった。

この斧を手に入れた小姓は、比類なき武勇で手柄を立て、大きな騎士団の千人隊長となった。

ただし、山賊団の首領も、騎士団の千人隊長も、最後は敵味方構わずに殺戮を行い、自らの部下に殺されたという。

【NieR】
少女は目の前に広がる光景をただ眺めていた。傍らには父親が無数の刃に切り刻まれ、母親は死にながら兵士たちに犯されている。生まれたばかりの弟は暖炉に放り込まれ、その身を焦がしていた。家族を殺した3人の兵士を、少女が涙を流して睨んでいた。

数年後、復讐を誓った少女の姿があった。1人目は軍服がはち切れそうなほど太った兵士だった。少女は楽に痩せる方法があると兵士に持ちかけた。診察をすると言って兵士を寝台に寝かせた後、両手足を斧で切り落とした。手足が無い状態で逃げようとする男を、まだ痩せるところがありますよ、と押さえつける。これでスリムになりましたね、と少女は丸くなった胴体に呟いた。

2人目は無類の女好きの兵士だった。毎日の様に自分の館で、数多の女たちを呼び夜を過ごしていた。少女は兵士の周りに群がる女たちを殺し、恐怖におののき、命乞いの言葉しか話さなくなった兵士の男の象徴を斧で切り落とした。

3人目の兵士は軍を退役し、辺境の村で家族とのんびり暮らしていた。家族が寝静まってから少女は家の支柱に斧で亀裂を入れた。支えが無くなった家は崩れ落ち、少女は家に火を付けた。火は大きな焚火の様になった。燃え上がる家の中から、身体中を火傷した兵士の息子が逃げ出してきた。兵士の息子は家族を殺した少女の姿をただ見つめていた。少女は持っていた斧を兵士の息子に差し出し、暗闇の中へ逃げて行った。



Vile Axe

双子の牙（ふたごのきば）

【DoD】
遠い昔、炎の力を持つ双子の神がいた。神は人間に火と知性、そして多くの言葉を与えて見守り続けていた。

だが人は堕落し、双子の神の逆鱗に触れてしまう。双子の神は多くの都市に雷を落とし、洪水をおこし、炎で大地を焼き払おうとした。

己の過ちに気づいた人間達は、神の怒りを鎮めるために巨大な斧を捧げる。それは幼い双子の血によって洗われた、呪わしき供物だった。

神は幼い双子を星にしてやり、人が二度と過ちを繰り返さぬように斧に破邪の光を封じ込めたという。

【NieR】
ぼくたちは、うまれたときからいっしょ。ごはんをたべるときも、ねむってゆめをみるときも。

わたしたちは、もらうものもいっしょ。ままのおちちも、ぱぱからのやさしいことばも。

でもぼくたちは、しぬときはべつべつ。ぼくはぱぱに、いもうとはままに、くびをちょんぎられ、しぬときはべつべつにころされた。

でもだいじょうぶ。わたしたちのちはまざり、ひとつのおのにやどる。わたしたちはこれからもずっといっしょ。ふたつのからだはひとつにもどる。



Fang of the Twins

兵士長の聖槍

【DoD】
兵士長はその「死」を確かめる

己の感触は天地の涙へ

流れる血は闇から光へ

教えは命を奪い、新たなる命を与える

【NieR】
兵士長はその「生」を踏みにじる

他者の悲鳴は歓喜の歌へ

流れる涙は絶望から闇へ

戦いは復讐を呼び、新たなる孤独を生み出す



Captain's Holy Spear

忘却の羽根

【DoD】
強烈な一撃で相手の記憶を消し去る鎚。殴れば殴るほど、記憶は失われ最後には自分自身の存在すら忘れてしまう。

ある日、この鎚を手に入れた過去に悩める兵士が自らの頭を殴りつけた。次第に失われていく兵士の記憶。

記憶を失うと同時にさかのぼっていく思い出。自分の過ちで仲間が死んだとき…固い決意で兵士になったとき…目の前で両親を殺されたとき……。

幼少の頃の記憶に戻り、未来に希望がもてるようになったときには、兵士の頭はすでに潰れ、そのまま息絶えた……。



Feather of Memories

封剣・破天の旋律

【DoD2】
かの地に武具の名匠あり。神に弄ばれる世界を憂い神の力に打ち勝つ武具を生み出すことを決意す。

神に抗うは、封印の力。封印の力、即ち女神の力。名匠は女神の力を武具に封入す。

かの女神は、禁じられた愛を秘めし女神。無垢なる女神。

宿るは「命」、紫色に秘められし力。生命の源、魂の力。



Sealblade: Calamitous Melody

亡国の礎

【DoD】
少数の悪魔が支配する国。荒んだ国政を憂う十名の若者が、武器を持ち決起した。しかし国民は、恐怖心から、誰一人彼らに協力をしなかった。

人間による革命はなされた。悪魔は退けられ、若者達が政の世界についた。悪魔を退けたこの武器は、神の力が宿ると称された。

しかし、恐怖がない世の中を願った若者達もまた自らの保身にまわる。彼らは情報統制と公開処刑を中心とした、恐怖政治を布いた。

国民が立ち上がった。十名の若者は捕らえられ、公衆の面前で処刑された。悪魔を退けた武器は、処刑場でその神の力を印象づけたのであった。



Buried Kingdom

封杖・破天の詠歌

【DoD2】
かの地に武具の名匠あり。神に弄ばれる世界を憂い神の力に打ち勝つ武具を生み出すことを決意す。

神に抗うは、封印の力。封印の力、即ち女神の力。名匠は女神の力を武具に封入す。

かの女神は、堕落した愛に生き因果に死した女神。気高き女神。

宿るは「水」、青き恵みの力。命を宿す母なる力。



Sealstaff: Calamitous Sonnet

封刃・破天の鳴弦

【DoD2】
かの地に武具の名匠あり。神に弄ばれる世界を憂い神の力に打ち勝つ武具を生み出すことを決意す。

神に抗うは、封印の力。封印の力、即ち女神の力。名匠は女神の力を武具に封入す。

かの女神は、愛の為、自らの体を差し出した愛に生きた女神。猛々しき女神。

宿るは「炎」、赤き大地の力。生命を育む気の力。



Sealknife:
Calamitous Strings

封槍・破天の円舞

【DoD2】
かの地に武具の名匠あり。神に弄ばれる世界を憂い神の力に打ち勝つ武具を生み出すことを決意す。

神に抗うは、封印の力。封印の力、即ち女神の力。名匠は女神の力を武具に封入す。

かの女神は、高潔なる騎士、決意を秘めし女神。優しき女神。

宿るは「光」、金色の力。闇を照らす聖なる力。



Sealspear:
Calamitous Dance

封斧・破天の鼓動

【DoD2】
かの地に武具の名匠あり。神に弄ばれる世界を憂い神の力に打ち勝つ武具を生み出すことを決意す。

神に抗うは、封印の力。封印の力、即ち女神の力。名匠は女神の力を武具に封入す。

かの女神は、御使いにより内に卵を秘める女の力を以て災厄を封じる術を授かったという伝説の女神。

宿るは「時」。色なき結晶は、時間、空間、次元を統べるおおいなる時間を宿す。



Sealaxe:
Calamitous Rhythm

北海の歌姫

【DoD2】
北の港の　小さな酒場　綺麗な娘が訪れた　透き通る肌　透き通る声　酒場の男は　皆惚れた　杖を片手に身軽な姿　店主に一言　ここで歌うわ

娘に会おうと　男は集まり　ほどなく店は　賑わった　娘は歌った　美しい海　男は聴いた　美女の声　娘に恋した　男らだったが　返して一言　あなたじゃないわ

ひと月ほど経ち　娘の酒場に　旅する少年　やってきた　無垢な瞳に　端正な顔　何より笑顔が　魅力的　娘は悟った　この人しかない　彼に一言　あなたに決めた

明くる日娘は　少年と消え　部屋に残った　杖・手紙　杖はお礼で　行き先は海　どうやら娘は　海の精　優しい男ら　笑顔で言った　それならそうと　言えばいいのに



Northern Siren

没落した王家の剣

【DoD】
邪悪な竜により国を滅ぼされた王族の剣。その栄華を誇る派手な装飾とは裏腹に、刀身には滅ぼされた王族の怨念が込められているという。

王族の怨念は持つ者を呪い、この剣を振るった者は毎夜、悪夢にうなされ続け、最後には必ず不幸な死を迎える。

ある小国の王も剣の美しさに心を奪われ、悪夢にうなされ続けながらも常に身に着けていたが、同じように悪しき竜によって国を滅ぼされた。

この呪いから解放されるには、この剣を使い王家の血筋を絶った悪しき竜の命を奪うことらしいのだが、未だかつて呪縛から逃れた者はいない…。

【DoD2】
あたたかな、春の頃でした。邪悪な竜が、気まぐれに人の国を襲いました。竜は王族をみな殺しにしました。竜がお城でひと寝入りしていると、剣を持った女の子が入ってきました。女の子は竜をゆり起こして言いました。

「わたしが殺そうとしていた王様はどこ？」竜は少しきょとんとして言いました。「もう食べてしまったぞ？」すると、女の子はていねいに竜におじぎをしました。そして、「ありがとう！」と元気いっぱいに竜に言いました。竜は聞きました。「お嬢ちゃん、どうしてお礼をするのかな？」

女の子は言いました。「あなたが食べた王様は偽物なの。私のパパからお城を盗んだって、死んだママに教わったの」女の子は、この国の本当の王女さまだったのです。「だから、わたしはあいつを殺してお城を取り戻さなきゃいけなかったの！

少女は竜をまっすぐ見て言いました。「あなたにお願いがあるの。パパを見殺しにした国のみんなを焼き殺して！」竜は大笑いして、「わかったよ、王女さま。わしの力をおまえの体と剣にやろう」王女は竜と心臓を交換して、竜の力が注がれた剣で国のみんなをざくざく、ぐちゃぐちゃにやっつけたとさ。めでたし、めでたし。



Glory's Bane

骨砕き（ほねくだき）

【DoD】
どこにでもあるような木材から削り出した持ち手と、使い道のなかったあまりの銑鉄からできている。

どこにでもいるような年老いた鍛冶屋が年の初め、ずっと開けていなかった小屋の扉を開けるためにこしらえた。

どこにでもあるような扉の向こうは、見たことのない数の人骨で埋め尽くされていたが、年老いた鍛冶屋は誰にも言わなかった。

どこにでもいるような年老いた鍛冶屋のどこにでもあるようなその道具は骨砕きといわれるようになった。



Bonebreaker

焔の簧（ほむらのした）

【DoD】
「火炎」の意味を持つ剣。波状の刃は相手の傷口を広げ致命傷を負わせる。元々、この剣はどこにでもある普通の剣だったという。

太古の時代、竜との果たし合いに挑んだ者がいた。灼熱の炎に溶かされ続ける刀身。戦士は最後の力を振り絞り竜の舌を引き抜き刀身に巻きつける。

刀身は瞬く間に炎に包まれ、竜の炎と互角の力を持つようになる。しかし、その灼熱ゆえ最後には竜も兵士も灰となり、この剣だけが残った。

以来、この剣には竜の炎の力と強力な魔力が宿り、力の無いものが振るおうとするとたちまち紅蓮の炎にその身が包まれてしまうという。

【DoD2】
その竜は死を前に後悔していた。なぜ卑しい人間の子を助けようなど思ってしまったのか…。しかも…それが竜狩りの罠とは情けない…。意識が朦朧とする中、何者かが目の前で戦っている…次に目を覚ますと竜は手当てを受けていた。

竜の命を救ったのは人間だった。その人間は王を目指していた。竜には興味のない話だが、この男なら相応しいのだろうと思った。その時。男の胸に矢が突き刺さる。竜狩りの連中が仲間を呼んだのだ。不意打ちを受け、倒れる男……。

応戦するも矢を受けた身体。次第に男の動きも鈍くなる。そこへ……肉の裂ける音……なんと！　竜は己の舌をその爪で引きちぎっていた。男はその舌を剣に突き刺すと、剣先から灼熱の炎が吹き出した。辺りの竜狩りどもは一瞬にして灰となる。

『人間ごときに我が命を捧げるのは我慢ならぬが、おぬしを死なせてまで生きようとは思わん……』竜は…その場で目を閉じた……。僅かな時間であったが竜と男の間に種族を超えた友情があった。後に…男は焔の簧を手に王となった。



Flameberge

魔印の銅剣（まいんのどうけん）

【DoD2】
太古の昔、魔法の力により治められていた国があった。

その国には年に一度、国を守る魔力を高める儀式があり、その儀式では、この銅剣をもった巫女が美しく舞った。

年を重ね、儀式を重ねる度に、この銅剣は美しさを増していき、遂には、眩しいほどの光が刃から放ち、巫女が舞うと怪しい紫色の軌道を描き始めた。不思議なことに、儀式で舞い踊っている巫女もまた、その美しさをどんなに年を経ても失うことがなかった。

ある時、巫女の永遠とも思える美しさの秘密が銅剣にあるのではないかと考えた、国の王女は、巫女より銅剣を奪い、抵抗する巫女を殺し、剣を我が物とした。永遠の若さを手にした王女であったが、巫女のいなくなった国はたった一年で衰退し、若さ以外のすべてを失った王女は自害して果てたという。



Evil's Bronze Blade

マナの杖（マナのつえ）

【DoD2】
今から十八年前……。少女は暗い森の中で佇んでいた…。母に捨てられた少女。母への想いは次第に歪み、狂気へと変貌する…。神は彼女の狂気に魅入り、媒介として世を制することを託した。そして…暗闇の中で赤く灯る瞳…。

赤き瞳の少女は世界に混乱を招く。崩れゆく世界に心を癒される少女。しかし、その至福の時も、ある男の剣によって奪われる。世は治まり…男は少女を連れ贖罪の旅に出る。己の罪に目を背ける少女……だが男はそれを許さなかった。

ある日、男は突然に空を見上げた。男の瞳には激しい憎悪があった。いったい何があったのだろう…少女にはわからなかったが、隙を見せた男に隠し持っていた短剣を突き刺した。咄嗟に払われる幼き身体。次の瞬間少女は谷底へと消えていった……。

数年後…彼女は赤い記憶を失いとある貧しい村で暮らしていた。そこで彼女は、人々を苦しめ続ける封印騎士団の存在を知る。そして…皮肉にも、嘗て世界を混乱に陥れた少女は世界を救うために杖を握る…。再び……封印崩壊のために……。



Manah's Staff

守りの槍（まもりのやり）

【DoD】
牛を飼うことで生計を立てている小さな村があった。だが、その牛を狙って狼の一団が村を襲うようになる。

牛飼い達は必死で守ろうとしたが、狡猾な白い狼があざけるかのように村人達をあざむき、日々犠牲になる牛が増えていった。

「村を捨てよう」そんな話が出たときに、村でいちばん無口だった牛飼いが槍を持って外に出ていった。村人達に誰一人止める者はいなかった。

二日後、村の近くで白狼の死体と槍だけが横たわっていた。村人達は牛飼いがいつでも戻れるように、槍を村の入口に掲げ、大切にしたという。



Spear of Defence

迷宮の息（めいきゅうのいき）

【NieR】
その女はどうしようもなくのろまだった。不器用で何をするにも人の3倍以上の時間がかかる。歩くのもゆっくり。話すのもゆっくり。瞬きするのもゆっくり。水汲みひとつ満足に出来ない有様だった。子供達に「ウシ」と呼ばれて嗤われてもエヘラエヘラと笑い返すばかり。

その女はどうしようもなく鈍かった。転んで血を流してもボンヤリしていた。頻繁に金を落とすくせに一度も取り戻せた事は無かった。目の前で誰かが女の悪口を言っていてもそれが悪口だと判るまでに半日以上の時間がかかった。子供達は女を見ると喜んで石を投げつけた。

その女はどうしようもなく愚かだった。村が日照りで苦しんでいたあの夏に、一人でどこかに消えてしまった。子供達は皆飢えて死んだ。村人達は逃げ出した女の事など考える事はなかった。2日程すると雨が降り始めて村は助かったが女は戻らない。そうして女が戻らなくなってから20日目のある日、村に祈祷師がやってきた。

祈祷師の手には角の生えた一筋の槍が握られていた。その槍を握ると油でベタベタした。その槍を持つと重くて使い物にならなかった。その槍を使っても何一つ貫く事が出来なかった。祈祷師は槍を無理矢理置いていったが、村人達は気味悪がって誰一人として近寄らない。槍は誰にも使われる事の無いまま、今でも村の片隅でひっそりと眠っている。



Labyrinth's Shout

迷宮の歌（めいきゅうのうた）

【NieR】
それは洞窟の奥深くに住まうケモノ。巨大な角。鋼の様な体躯。灼熱の吐息。牛の頭と人の体を持つ魔獣は、平和を愛する村人達から憎まれていた。怖れられていた。やがて魔獣は「迷宮のミノタウロス」と呼ばれる事になる。

その恐ろしげな見た目とは裏腹に、魔獣はとても優しかった。他の生き物を殺す事も無かったし、花があれば無骨な指で踏まないように気をつけた。洞窟の奥深くに住んだのも、出来るだけ村人を怖がらせない為だった。

ある日、洞窟の奥に少女が迷い込んできた。少女は魔獣を見ると泣き叫び続け、とうとう疲れて気を失ってしまう。魔獣は困惑した。どうしようどうしよう。この子を村まで送り届けなきゃ。お父さんとお母さんが心配しているから……村まで送り届けなきゃ。

少女が居なくなった二日後の朝。憔悴しきった両親の家の前に少女が倒れていた。少女には傷一つ無く眠っているだけ。駆け寄る母があるモノに気付き小さな悲鳴を上げる。少し離れた所に転がっていたのは魔獣の死体だった。その死体には何本もの剣が突き刺さり、薄気味悪い血をまき散らしている。だが、少女を襲ったような痕跡は無かった。むしろ離れる事を望んでいるかのような姿だった。まるで、その血で少女が汚れる事を嫌うかのように。まるで、少女がこわがらないように。その魔獣は体を小さく小さくして死んでいた。



Labyrinth's Song

迷宮の声（めいきゅうのこえ）

【NieR】
その女の子には2本のおおきなツノが生えていたんだよ。耳のちょっと上のあたりから、牛みたいな立派なツノが。ツノの根元を見た事があるんだが、完全に頭の骨から生えてるみたいだったな。もちろんそんな子はその子だけだよ。他の子は普通の子だった。ツノの子も、生まれた時は小さかったらしいよ。あ、いやツノがね。そりゃあそうだ。あんなバカデカイツノがあったら、かあちゃんの腹から出てこれやしねえからな。

イジメられていたかと思うだろう？　それが全然違うんだな。その子は村の誰よりも強かった。村であの子に勝てる男なんて一人も居やしなかったよ。力仕事も彼女が一番こなしていたし、村にマモノが襲ってくる時は、いつも彼女が先頭で戦ってくれていた。何よりみんな、明るくて強い彼女の事が大好きだったんだ。

でもある日に襲ってきた大きなマモノは強かった。村の男達はみんなボロ雑巾のように蹴散らされて半分以上が死んだ。ツノの彼女も必死で戦ってくれたけど、やがて力尽きた。最後にマモノは彼女の身体を持ち上げて、ツノをもぎ取ったんだ。その時の彼女の絶叫は凄かったよ。地面が揺れるような音だった。静かになったんで家の外に出てみたらマモノと彼女が死んでたんだ。二人とも体中の穴という穴から血を吹き出していた。あれは、なんていうか……真っ赤な花みたいでキレイだったよ。不謹慎な話だけどさ。

それがあんたの最初の質問への答えだよ。この村の村人が全員耳が聞こえない理由。でも知っておいて欲しい。俺達は誰も彼女の事を恨んじゃいない。死んでしまうよりはよっぽどマシだからね。後から皆で確認したんだが、彼女の最後の叫びは「さよなら」だった気がする。俺達は最後に聞いた音が、彼女のお別れの言葉だった事を誇りに思ってるんだ。本当にね。



Labyrinth's Whisper

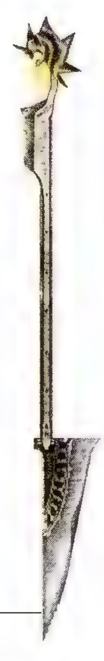
ヤハの杖（ヤハのつえ）

【DoD2】
ある国の大臣が、疑い深い王に逆賊の汚名を着せられ、処刑された。一族も皆処刑されたが、大臣の幼い息子を不憫に思った処刑人が、王に虚偽の報告をして逃した。

美少年に成長した大臣の息子は、市場の商品を盗んでは売りさばく泥棒生活を送った。時には捕まって袋叩きにされることもあったが、王への復讐を夢想すると、苦痛すら甘美だった。やがて少年は貯めた金を賄賂として王宮に仕官した。

その中性的な美しさから、少年が王の目にとまり、寵愛を受けるようになるのには時間はかからなかった。ある夜、少年は本懐を遂げようと、父の形見である刃の仕込まれた杖を長衣に隠して、王の寝所に向かった。

しかし、少年の額から流れ落ちた汗を不審に思った王の警護に包囲されてしまう。杖で喉を突き、自刃した少年の目には、高笑いする王の姿があった。その美しさと引き換えに数奇な運命を歩んだ封印騎士団のヤハが、この美少年の杖を手にしたのは必然だったのかもしれない。



Yaha's Staff

勇者のナイフ（ゆうしゃのナイフ）

【DoD2】
とある夫婦が妻の腹に子ができたことを告げられた。二人は初めての子を喜び、周りの者は二人を祝福しようと、明くる日の夜、宴を設けた。親戚始め多くの者が祝福しに訪れた。その中に見事な法衣の預言者がいた。

預言者は夫婦に一振りの短剣を渡して言った。「この剣は使うものを選ばず、振ればそれは手練の一閃となろう。これをもって子を守るがよい」夫が剣を持つと、自らの力は漲り技巧が冴えゆくのがわかった。

夫婦に預言者はさらに言った。「生まれてくるは天の子。生まれてくるは人の子。人に災いをもたらすとなるならこの剣で突くを選べ」夫婦は顔色を変え、夫は剣を振り上げたが、いつの間にか預言者はいなくなっていた。

宴の日以降、妻は預言者の言葉が気になりやや鬱になり、夫は短剣の力で兵となり、家になかなか戻らなくなっていった。そして二人の子は生まれた。かわいらしい双子であった。



Hero's Knife

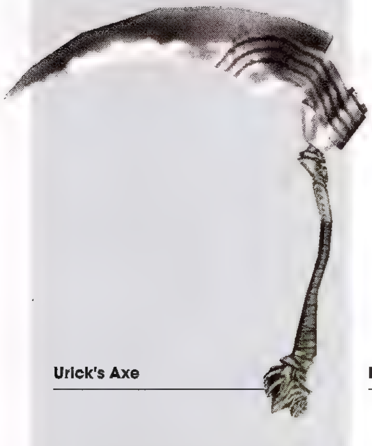
ユーリックの斧

【DoD2】
命を刈り取る死神への供物を捧げ、自らの延命を祈ったある王が、若き美丈夫の首を落とす神器として造らせたこの斧は、実に数百人の生贄の血を啜っている。正に死神の振るう武器といってもよいだろう。

毎月の祭事において王は、二人の生贄を選出した。一人に斧を振るわせもう一人の首を刎ねるのだ。そして翌月には、生き残った方の生贄を、新たに選んだ生贄に殺させる。この祭事は王の存命中絶えることなく続けられ、王は百五十年を生きたと伝えられている。

最後の月。生贄に選ばれた二人の男は互いに親友同士だった。泣きながら親友を殺めた男は、王に向かって言い放つ。我が命、自ら死神に捧げ、友と黄泉路を逝こう…。男の首を落とした斧は祭壇に突き刺さり、何者も引き抜くことは叶わなかった。生きすぎた王は壮絶な最期を遂げた。

その斧はユーリックの手に渡った。斧はまた、死神への供物を、生贄を欲しているのだろうか。繰り返される流血の連鎖は、断ち切ることは叶わぬのだろうか。それを知るのは死神のみであろう。



Urick's Axe

夢桜

【DoD2】
遥か東の国に精霊と契約し、悪霊と戦う術師を王とする一族がいた。王は普段から滅多に姿を見せず、悪霊の災いが激しくなると、長期に渡り国に戻らぬため、王の顔も知らぬ民も少なくはなかった。

そんな民の中に錫杖を持って敵を薙ぐ諸国にも名高き女兵士がいた。ある年の桜の咲く時期の祭で、その女兵士が錫杖による演武を王の前で披露することになった。王も女兵士もお互いを知ってはいたが、姿を見るのは初めてであった。

二人はお互い一目で魅かれた。王は初めて出会うその女兵士に、女兵士は初めて出会う王に。女兵士は代々伝わる錫杖の先端の輪を刃に換え、より一層王に尽くした。王もまた民のために術を尽くして悪霊と対峙した。

しかし、悪霊の災いは激化する。町や村はことごとく滅び、一族の都も遂に落ちることとなってしまう。女兵士と王は、最後まで抵抗したが、明朝荒れ果てた宮殿には女兵士の錫杖のみが残されていた。錫杖には短い詩が彫られていた。離れども　ともに逢い見ん　夢桜



Dream Blossom

ゆりの葉の剣

【DoD】
美しく湾曲した刀身からは考えられない、おそろしい呪いが込められた剣。自らを裏切った恋人を我が身と共に貫いた少女の怨念が宿っている。

この剣に魅入られたものは、己の手が剣から離れなくなり、自らの意思とは関係なく人を殺める。この呪いを解くには自分の腕を切り落とすのみ。

自らの腕を切り落とし呪縛から逃れた者は、その剣に自分の精神が宿り、念じるだけで自由自在に操れるようになる。

腕を切り落とさなくてもすむ唯一の方法は、剣に宿りし少女の魂を魅了することらしいのだが、いまだかつて切り落とさずに済んだ者はいない。

【NieR】
アイシテル。私は彼を心から愛していました。彼も私を愛していました。外で目が合えば私にだけ分かる合図を送り、私の贈るものはなんでも喜んで、「勿体無いから金庫にしまっておく」と言うくらい大事にしてくれました。自慢の恋人でした。

シンジナイ。私の親友が彼をたぶらかし、私から彼を奪ってしまいました。忽然と私の前から消えてしまった彼。残ったのは、私と、部屋に散乱した私の贈り物の数々。金目のものは、村の市場で売られていました。

ユルサナイ。彼は私を棄てたんじゃないわあの女に騙されてるのよ。彼はきっとまだ私に未練があるわ。だってあの女より私のほうが素敵ですもの彼を理解しているもの。早く、早く目を覚ましてねえ！　あの女を引き離さないと、あの女を殺さないと!!　ハヤク、ハヤクコロセ！

狂人と化した女はそのうら若き夫婦を、持っていた剣が歪む程殴りつけ、叩きつけ虐殺した。以来女は行方をくらまし、残されたのは元は人だったとも思えない男女の肉塊と、真っ直ぐな刀身が醜く歪んでしまった剣。刀匠たちがいくら直そうとしても、その刃はもとに戻ることはなかった。



Lily-Leaf Sword

雷龍の叫び

【DoD】
家臣の策略により隣国との結婚を強いられた姫。道中、姫の命を奪うために雇われた盗賊たちに一行は襲われる。

懸命に応戦するが手錬の盗賊たちになす術もない。姫の首に刃が向けられたその時、一人の護衛兵士が自らの命と引き換えに雷竜を呼び出す。

雷竜が盗賊を一掃した時、兵士はすでに息絶えていた。その心意気に心を動かされた雷竜は己の力と兵士の魂を鎗矛に込め、姫に手渡す。

兵士の遺志を引き継いだ姫は、その鎗矛を手に戦場に出向き功績をあげる。そして自らの国をも制圧し策略を企てた家臣を討ち取り仇を取った。



Thunder Dragon

嵐神の閃撃

【DoD】
破壊的な風を巻き起こす嵐神の怒りが込められた槍。運悪く、この突風を受けてしまった者は、骨だけ残し血と肉が吹き飛ぶ。

ある村に風を自在に操るやさしい青年がいた。青年の評判を聞きつけ彼の前に現れた嵐神。「お前の力がどんなものか、わしと勝負じゃ！」

道行く剣士の外套を風の力で脱がせた方が勝ち。強烈な突風で外套を吹き飛ばそうとする嵐神だが勝負は暖かいそよ風で薄着にさせた青年に。

「人間の分際で、このわしに勝つな！」怒り出した嵐神は青年の血と肉を吹き飛ばす。その時の怒りが剣士の持つ剣に刻まれたという。



Thundergod

領主の狩猟刀

【DoD】
とある国の領主が狩猟の際に必ず持ち歩いた、お気に入りの剣。領主は動物の命を奪う快感に溺れ、意味もなく日々狩猟を続けていた。

ある夜、森の動物達が集まり話し合いをした。「これ以上、殺戮を繰り返すつもりなら自分たちが領主を討つしかない!」

領主の屋敷を囲み、機会を窺う森の動物たち。その様子に気づいた領主は大喜びする。「このわしに狩られたがっておるのか!」

喜び勇んだ領主の前に、非力な動物達はなす術もなく、すべて狩り殺され森からは動物達の姿が消えた。結局、領主は天命をまっとうしたという。

【DoD2】
とある国の領主が狩猟の際に必ず持ち歩き、快楽にまかせて森の動物を根絶やしにしたという伝説の残る刀。数十年後、領主の孫が新しい領主となった際、この刀を受け継いだ。

新しい領主は柔和な性格で、狩猟も熱心ではなかったが、この刀を手にしてからは好んで狩猟に出るようになった。

領主はしだいに奇怪な行動をとるようになっていった。食べ物を皿から直接舐めとるようになり、城内でも這い回る姿をたびたび目撃された。やがて、領主は姿を消した。

領主の行方は誰も知らない。ただ、今でも城の地下からは、獣のような叫び声が聞こえるという。



Hunter's Joy

輪廻転生

【DoD】
深い森に囲まれた領地をもつ貴族に伝わる、丸い刃を持つ特殊な剣。その剣を使う者は大天使の祝福により三度再生するといわれている。

元々は拷問用の武器で、外の刃は相手を両断できるように鋭い切れ味で、内側の刃は苦痛を与えるために刃を鈍くしてある。

柄の部分には毒を入れることができ、相手の身体に剣先を突き刺すと鋭い突起の先端から毒が飛び出し、相手を即座に死に至らしめる。

あまりの残虐さゆえ時の皇帝より使用を禁じられた後、歴史の裏舞台で暗殺用の武器として独自の進化を遂げることになった。

【NieR】
そうさ、これは君の命を絶つ為の武器だ。なあに心配は要らない。今まで感じた事のないような苦痛を与えてやろう。最初は痛みなど感じない。まるで水が肌の上をスッと流れたように思うだけだ。痛みを感じる前に流れ出る血で叫び出す奴が多いんだがな。

ああ、そんな簡単には終わりはしないさ。刃のこの部分を使うともの凄く痛いんだ。だからここを使うときはなるべく後の楽しみに取っておくんだ。声が枯れちゃってからだと何言ってるか判らなくなるからね……うるさいなあ。もう少し静かにしてくれないか? 手元が狂うから。

なあに、すぐに殺したりはしないから安心してくれていいよ。じっくり嬲りながら殺してやろう。人間はね意外と簡単には死なないんだ。それに人間には目が二つあるんだ。耳も二つ。指と爪は二十ずつ。関節に至っては百四十四個もあるんだ。ゆっくりと楽しもうじゃないか。

なぜこんな事をするかって? ふふ……いやだなあ。君が今までずっとやってきた事じゃないか。国民を無実の罪で捕らえて、拷問して、晒し首にするってのは君がやってきた事じゃないか。いやいや忘れてても大丈夫。僕の妻と娘に対して君がやってくれた事を一つずつゆっくりと思い出させてあげるからね。うふ……フふフフふふ……。



Rebirth

連合軍兵士の剣

【DoD】
ある一族が守り続けてきた特殊な製法で鍛え上げられた剣。その製法は決して他者が知ることはなく、一族のものだけに伝えられる術だった。

門外不出の剣の製法を奪いに、この一族に入門した敵国の兵士。兵士はその技法を習得し国へ帰る手筈を整えていた。

しかし彼には大きな悩みがあった。一族の血を引く娘に恋してしまったのだ。一緒に駆け落ちしようとすすめる兵士。娘も共に歩むことにした…。

一族の元から立ち去る日、全てを知った娘は秘術を守るため兵士を切り殺して自らの命をも絶つ。そして今も、秘術は一族に伝えられている……。

【DoD2】
ある一族が守り続けてきた特殊な製法で鍛え上げられた剣。この製法の秘密を知るために、一族の娘が敵国のスパイだった愛する男を殺し、自らも命を絶ったと伝えられている。

その後も秘密は守られ続けたが、そのためには多大な代価を払わなければならなかった。一族は怪文書や密告を根拠に、製法を漏らそうとした疑いで、身内に対しても容赦のない拷問を行うようになったのだ。

拷問は凄惨を極め、溶かした鉄を口から流し込まれて命を落とす者や、拷問時のショックから精神を崩壊させる者が出た。

身内を信用できなくなっていった一族は、やがて殺し合い、間もなく系譜は絶えた。一族が守ろうとした剣の製法は、その望みどおり永遠の秘密となった。



Soldier's Sword

侘寂

【NieR】
その民は恐ろしい程に勤勉だった。必要も無いのに森を切り開き、動物を狩った。食べきれない食料を保存する技術を身につけ、不必要な程にお金を儲けようとした。しかし誰一人疑問を口にする者はいない。何故ならみんながそうしていたから。

その民は恐ろしいほどに勉強した。何にも使えないような数の計算や未来の予想を繰り返しては議論を繰り返していた。難しい言葉をいくつも生み出し、複雑な機械を沢山作ってはすぐに捨てていた。しかしそれを振り返る者は誰もいない。何故なら誰も気にかけていなかったから。

その民は恐ろしい程に従順だった。朝日が昇ると誰に言われるでもなく同じ時間に同じ服を着て、小さな部屋で息苦しそうに仕事をしていた。しかし誰一人文句を言う者はいない。何故ならそれ以外に何をしたらいいのか判らなかったから。

働き過ぎたその民は、森を失ってしまい砂の上で暮らすようになった。頭の良すぎたその民族は、他の民族の誰も判らないような言葉でしか会話出来なくなってしまっていた。大人し過ぎたその民は、次々と作られる法に逆らう事も出来ずに数万もの掟に囲まれて暮らすことになった。



Transience

Key Words 用語解説

各作品が放つ一種独特な空気感は、この世の中に溢れている多くのゲームに比べて確かに異彩であった。それを形作るために一躍買っているのが、たくさんの「用語」だ。ここでは『ドラッグ オン ドラグーン』、『ドラッグ オン ドラグーン２－封印の紅、背徳の黒－』、『ニーア レプリカント（ニーア ゲシュタルト）』に登場した用語の数々を一緒くたにし、五十音順に整頓してみた。各用語は「キャラクター」、「場所」、「用語」、「一般名詞」の４種類に絞って分類している。また、文頭の【1】は『ドラッグ オン ドラグーン』、【2】は『ドラッグ オン ドラグーン２－封印の紅、背徳の黒－』、【N】は『ニーア レプリカント（ニーア ゲシュタルト）』の用語であることを示している。ゲームをプレイしていて、あるいは本書のほかのページを読んでいてわからない言葉が出てきたら、本コーナーで紐解くといいだろう。

【あ】

アースラ
あーすら　◎キャラクター

【N】海岸の街の灯台にて、ひとり暮らしている老婆。口やかましい頑固者であり、意地悪な言動も多い。そのため、街の住民からは疎ましく思われている。ニーアたちにもさまざまな用事を言いつけ、こき使おうとする。だがそんな彼女も、遠い国でケガを負い、帰って来られなくなった夫の話をする時だけは、あどけない少女のような顔を見せる。実は夫はすでに死亡しているが、アースラはその事実に気づいていない。黒文病に感染しているため、不安や焦燥感から「海を渡って夫の元へ行きたい」と願うも、最期を迎えるまでその望みはかなわなかった。

青き丘陵
あおききゅうりょう　◎場所

【1】大陸西部に広がっている、実に豊かな大地。テーブルのような広い岩盤が点々とあるほかは、なだらかな丘陵地帯が広がり、そこには背の低い草花が生い茂っている。しかし、この平和な地も帝国軍の占有地。連合軍と帝国軍の主力部隊が激突した際は、この丘陵が戦地となってしまった。

赤い記憶
あかいきおく　◎用語

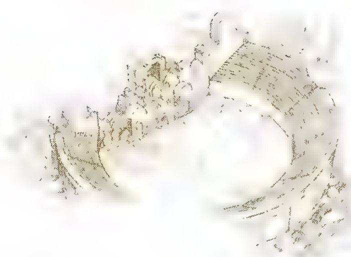
【2】マナの心の中に出来た隙間であり、記憶に刻みつけられたトラウマ。

赤い目
あかいめ　◎用語

【1】天使の教会の信者の眼そのもの、もしくは信者たち自身を示す言葉。天使の教会に洗脳された人間やモンスターは、例外なく目が赤くなる。赤い目を持つ者は司教によって操作され、殺戮と破壊の衝動に突き動かされている。しかし、彼らが女神を殺すことはできない。

紅き岩山
あかきいわやま　◎場所

【1】雪の荒野の東部に位置する山脈地帯から続く険しい土地。この不気味な紅い山脈が連なる地域には、亜人と呼ばれる人外の生物が棲みついている。また、山脈の奥深くには、コロシアムがある。これは、昔この地を支配していた国が建造したと思われるもの。しかし、いまとなっては亜人たちの遊び場で、さらってきた人間をいたぶったり、同族同士で腕試しを行うなど、日々凄惨な戦いがくり広げられているようだ。



アシラ
あしら　◎キャラクター

【1】フリアエが女神になる前の、先代の女神の名前。彼女が女神のあいだはそれまでの時代と異なり、農村一揆や貴族の反乱が頻発したと言われている。これは、アシラが掟を破って堕落した恋に落ちたため、神の怒りを買ったという噂に基づくものだ。「恋の相手は東の小国、カールレオンの国王・ガアプである」と言う者もいるが、その噂は厳格で名高い王を失墜させるための陰謀であるとの見かたも強い。なお、その後、同王がブラックドラゴンに惨殺されるに至ったため、この噂は真実だったのではと囁かれている。



亜人
あじん　◎用語

【1】ゴブリン、オーク、オーガ、エルフといった、人間に近い姿形をしているモンスターの総称。とくに知能の低いモンスターのことを指して、こう呼ぶことも多い。帝国では多くの亜人が従軍しており、おもに帝国軍の兵器運搬を任されたり、尖兵として配備されたりしている。扱われかたはかなりひどいようだが、本人たちは何も感じていないらしい。

アネモネ
あねもね　◎一般名詞

【2】キンポウゲ科イチリンソウ属の多年草の名前。南ヨーロッパ地中海沿岸原産で、秋植えの球根植物。その赤い花の色は、血と生命の象徴であると言われている。花言葉は「清純無垢」、「無邪気」、「辛抱」、「待望」、「はかない恋」、「見放される」、「悲しい思い出」、「固い誓い」など。明命の直轄区の聖花がこれにあたる。



アリオーシュ
ありおーしゅ　◎キャラクター

【1】→P.032

アンドロイド
あんどろいど　◎用語

【N】レプリカントシステムの管理者という役割を担うために生み出された機械人形。レプリカントにレギオンや白塩化症候群を駆逐させ、すべてが解決した段階でゲシュタルトをレプリカントの肉体へ戻す「黒の書計画」を実行するようプログラムされている。複数体作られたものの、正確な数は不明。2032年3月に世界各地に配置され、レプリカントたちに病の元である魔素を集めることを指示。集めた魔素をアンドロイドの司祭の元、「祭」と呼ばれる儀式で異世界へ放出した。デボル、ポポルもアンドロイドである。

アンヘル
あんへる　◎キャラクター

【1】→P.023／【2】→P.119

イウヴァルト
いうう゛ぁると　◎キャラクター

【1】→P.026

石の隠れ里
いしのかくれざと　◎場所

【1】荒野の先、浸食地形の続く谷の奥にある里。この地には、かつてゴーレムを操る種族が住んでいたが、帝国軍によって壊滅させられた。生き残ったのは、唯一セエレだけである。

石の神殿
いしのしんでん　◎場所

【N】北平原の先に位置する、石で造られた大きな建物。特殊な鉱石などが採れる。最奥部には、白の書が封印されていた。

石の村
いしのむら　◎場所

【2】深遠なる大地にある村。気炎の直轄区の管理下に置かれているが、ほかの地域に比べて騎士団の圧政は比較的穏やかなようである。この村には武器職人がおり、武器の取り引きが行われているため、頻繁に隊商が訪れる。

石の目
いしのめ　◎用語

【N】実験兵器7号として改造されたエミールの目のこと。見たものをすべて石化することができる。

一般兵士
いっぱんへいし　◎用語

【2】旧連合軍に所属していた者が大多数を占める、封印騎士団の基本的な戦力。見習い兵士から昇進することで、この一般兵士になれる。装備はすべて、騎士団側より支給される。そのため統一されているが、所属する連隊によって色調が異なる。マナやノウェが直轄区を襲撃し、騎士団の状況が逼迫してくると、遊撃兵から一般兵士への登用が多くなった。そのため、「にわか一般兵士」が多数存在することとなった。

イフリート
いふりーと　◎キャラクター

【2】炎を司る精霊。気炎の直轄区で起こった火山噴火の際に現れ、ザンポと契約をかわした。

イニシエの歌
いにしえのうた　◎用語

【N】古くから村に伝わっている、デボルが好んで口ずさんでいる歌。デボルによれば、歌詞の意味はつぎのとおり。『いつかこの世に「黒の書」が舞い降り、病をまき散らす。だがそれに抗う「白の書」が世界を救う……』。その後、ポポルからより詳しい内容を聞かされたニーアは、まさにその白の書と連れ立って「封印されし言葉」を探索する旅を始めた。

古の墓標
いにしえのぼひょう　◎場所

【2】最終封印の崩壊がきっかけとなり、次元の狭間より出現した古の建造物。竜の「血の記憶」の啓示により訪れることができるという。外観には古代の天使と神竜の戦いの跡が見られる。ここには神竜族の啓示である「種の書」が眠っている。

イブリス
いぶりす　◎キャラクター

【1】イウヴァルトの父親であり、貴族。ガアプ王のお気に入りで、両家は家族ぐるみの付き合いをするほど親密な関係にあった。ガアプ王がブラックドラゴンの襲撃を受けたあと、王国を建て直そうと精力的に活動する。しかしやがて国は寂れ、国民も減少の一途をたどる。やがて執政に携わっていた数人の貴族たちまでもが国を離れたが、彼だけは最後まで国と運命をともにすることを誓った。しかし、その1年後には病でこの世を去った。

隠者
いんじゃ　◎一般名詞

【1】俗世との関わりを断ち切って、辺境に隠れ住む人。世界の行く末より、みずからの業をいかに鎮めるかに心の比重を置いている。ストイックな強さを持つ者よりも、どちらかと言えば俗世に傷つき心を病んでしまった「繊細かつ弱気者」がこの道を選ぶことが多い。契約者となったレオナールも、かつてはそのひとりだった。

ヴェルドレ
う゛ぇるどれ　◎キャラクター

【1】→P.028／【2】18年前、赤き竜・アンヘルの好意に甘えて最終封印の儀を施した人物。以後、神官長として世界の復興を支援してきた。ところが、再び世界崩壊の危機が訪れることを怖れるあまり、誰にも相談せずに新封印制度を邁進させようと目論む。3つの神殿の封印が、帝国軍によって破壊され、負荷が増大した後に女神になったアンヘルが、その苦痛によって理性を失っても大事に至らないように「鍵」を作った。その最後の仕上げである、明命の直轄区での「鍵」の任命式にて、カイムに襲われ絶命する。なお、新封印制度は、そのまま新たに神官長となったセエレに引き継がれた。

ウェンディ
うぇんでぃ　◎キャラクター

【N】カイネが復活したあと、数年ぶりに訪れた崖の村で対峙し、戦うこととなる巨大なマモノ。ゲシュタルトの集合体でありながら、その意識には本来疑似人格でしかないはずのレプリカントたちの意識も取り込まれている。すでに理性や自我と呼ばれるようなものは希薄になり、発する言葉も不明瞭である。その姿は、まるで呪いのような言葉を吐きながら動く憎悪の塊。標的を殺戮するための行動力も、非常に高い。



歌
うた　◎一般名詞

【1】発声による音楽のことで、イウヴァルトが得意とするもの。ハープの音色に響く彼の朗々とした声は、のちに女神となるフリアエの心も癒やした。これが出来たからこそ、剣の腕がカイムに敵わないイウヴァルトもまだ自尊心を保つことができたのだと言っていいだろう。

海の神殿
うみのしんでん　◎場所

【1】月の砂漠の南の海に建造された神殿で、世界に3つしか存在しない封印のひとつ。ここには「水」が祀られている。ふだんは滅多に人が近寄ることはなく、神殿の周囲に文明を感じさせる建造物もない。カイムたちがこの神殿を訪れた際は、帝国軍がさらったエルフの子供たちの死体が神殿周辺に大量に浮かんでいて、海が血で真っ赤に染まっていた。

ウンディーネ
うんでぃーね　◎キャラクター

【1】→P.033

エミール
えみーる　◎キャラクター

【1】→P.182

エリコの壁
えりこのかべ　◎用語

【N】2004年10月に、白塩化症候群の感染者の温床と化した東京・新宿を物理的に閉鎖するために作り出された巨大な壁。その名の由来は、ヘブライ聖書に登場する「エリコ」という街を囲む堅牢な城壁と推測される。なお、2008年2月には内側から崩壊し、大量のレギオンが出現。その際、「6.12」の巨人が発していたものと同様の音が鳴り響いたことが確認されている。聖書内では、この壁は主の言葉に従ったイスラエルの民が「契約の箱」を担いで7日のあいだ城壁周辺を廻り、角笛を吹くことで崩壊したと言われる。新宿に作られたこの壁は、崩壊を見越して作られたのか、名は偶然の一致なのか、定かではない。

エリス
えりす　◎キャラクター

【2】→P.102

エルフ
えるふ　◎用語

【1】人間より先立って神に創造された人型の種族。成人になるまでは人間と同じ成長をするが、そのままの姿で人間より遙かに長い期間を生きる。森林地帯を中心に生息し、かつて人間が森での生活を中心としていた頃は共生関係にあった。やがて人間が農耕牧畜を始め、生息エリアを拡大していったことにより関係性が怪しくなる。基本的には争いを好まない性格で、人間が国家間の争いを激化させるに伴い、エルフの里という永世中立の里を構築。以来、人間との関わりは極稀なものとなった。

エルフの里
えるふのさと　◎場所

【1】エルフたちが住む永世中立の里で、静かな森の奥に存在する。いかなる争いも許されない土地とされていたが、エルフの能力と生き血を求める帝国軍により壊滅させられてしまう。

エンシェントドラゴン
えんしぇんとどらごん　◎用語

【1】ドラゴン族のなかでもひと際能力が高く、存在そのものが伝説視されている古代種。つねに高高度を飛行し、人の目に触れることはほとんどない。無数の子機と本体からなり、形態もさまざまに変化する。強大な攻撃力を持つ反面、会話などを行う知性は持たず、その生態には謎が多い。ヴェルドレの契約対象もこの種である。

炎洞塁
えんどうるい　◎場所

【2】気炎の直轄区の地下にある洞窟。内部は洞窟を利用した遺跡になっており、地形が複雑に入り組んでいるため、とても地図なしでは進めない。また、最深部には「鍵」の聖火台があり、日夜火を灯し続けている。

おおいなる時間
おおいなるじかん　◎用語

【1】しかるべき場所におさまった「時間」、「空間」、「次元」のこと。世界がきちんと動くのは、この「おおいなる時間」が存在するため。世界の破滅は、間接的にこの時間の停止を意味する。女神あるいは「時間」を操れる者のみが、おおいなる時間に直接触れることができる。

オーク族
おーくぞく　◎用語

【1】亜人の一大勢力であり、エルフから派生した特殊変異とも、神が創ったエルフの失敗作とも言われている。基本的に小柄だが、その性格は残忍で多数の群れを成し人間やエルフに襲い掛かる。破壊に快楽を求めるためか、一方では悪の勢力に染まった人間と共闘、もしくは配下に入り、ほかの人間らを攻撃することもある。

掟
おきて　◎用語

【N】「仮面の人」と呼ばれる種族たちの決まり事。彼らの祖先たちは、決まり事に沿って生真面目に働く者が多かったという。そうするうちに、いつしか「掟」というルールに従わなければ、何もできない人々になってしまったようだ。いまではその数も12万4000番を数え、しかも日々追加されている。

オシルシ
おしるし　◎用語

【1】【2】女神となった者の体に表れる文様であり、螺旋状の呪文列。先代の女神が命を落とした時は、後継者となる女性の体に出現する。それこそが新たな女神であることを告げる刻印であり、証拠となる。これは「おおいなる時間」に関わる力の源であり、オシルシが転移するには規定の儀式が必要とされているが、実は官僚的な儀礼にすぎず、「封印の女神」という呼称と利権を得るために必要とされているだけである。いったん完全に現れたオシルシは二度と消えることがない。たとえ逃げたとしても、オシルシの呪文列を読み解く能力を持つ神官長がどこまでも追いかけてくるだろう。そう考えると、呪縛のひとつと言えるかもしれない。また、出現した瞬間からつねに痛みを伴うため、体への負荷も大きく、女神となった者は皆一様に短命である。ちなみに女神・フリアエは、膣内に螺旋状にオシルシが出現し、激痛により性交・出産ができない体となってしまった。これは、先代の女神・アシラの淫行が引き起こした業報とも言われているが、真相は定かではない。また、フリアエの死後、つぎの女神候補であるエリスにもオシルシの前兆が出現しかけていたが、完全に出現する前に消えた。これはちょうどその時、ヴェルドレによってアンヘルが女神とされた

ためである。なお、のちにエリスが女神になった際には、下腹部を中心に全身にオシルシが出現している。これまでの女神よりも出現範囲が広いのは、女神以外の3つの封印が破壊され、女神の負担が増大したためと言われている。

音
おと　◎一般名詞

【1】物体の振動が空気の振動による伝播して伝わり起こす聴覚の内容。音の強さは振幅（もっとも大きく振動した幅で決定され、音の高さは周波数（1秒間に振動する回数。単位：Hz＝ヘルツ）で決まる。契約者となって視力を失ったレオナールは、おもにこの音を頼りに状況を判断している。

オリジナル・ゲシュタルト
おりじなる・げしゅたると　◎用語

【N】初めて自我を保ったままゲシュタルト化に成功したニーアに対する呼称。崩壊体化を止めるにはゲシュタルト化してなお自我を保てる、オリジナル・ゲシュタルトの魔素を取り込み続ける必要があった。それを所持していたゲシュタルト・ニーアは、その後世界浄化機関からの取り引きに応じ、崩壊体化が進むヨナの命を守るために1000年以上も魔素を提供し続けることとなる。しかし、一向にヨナが救われる気配がないことから、ニーア（＝魔王）は計画の偽証に気付いて暴走を始めた。

オロー
おろー　◎キャラクター

【2】→P.116

【か】

ガアプ
があぷ　◎キャラクター

【1】大陸東部にある小国・カールレオンの８代目の国王であり、カイムの父親。温厚な性格の持ち主でありながら、これまでの王のなかでも突出した剣の達人。また、王妃ともどもフランクなところがあり、本来なら下階級である貴族たちとの交流も頻繁に行い、国民からも尊敬の念を抱かれていた。しかし、カイムの18歳の誕生日の穏やかな休日の午後、突如として国を襲ったブラックドラゴンに殺害されてしまう。それは兵たちを気遣ってか、護衛を含む全兵に休暇を与えたその日、久しぶりに訪れた家族水入らずの団欒の場での凄惨な事件だった。息子には厳しく剣を指導する一方、妻や娘の前では武具を持つことを良しとしない柔和な性格が災いしたのか、襲いくる悪魔に為す術はなかった。突如として国王を失った王国は、配下の貴族たちによる共同体として国の維持を図る、しかし、求心力の低下は免れず、急速に勢力を失う。やがて国民たちもほかの国へと散り散りになり、王子であったカイムすら連合軍の一兵士として前線に出ていってしまう。その後は廃墟と化した王宮が形をとどめているだけとなってしまった。

カーリー
かーりー　◎キャラクター

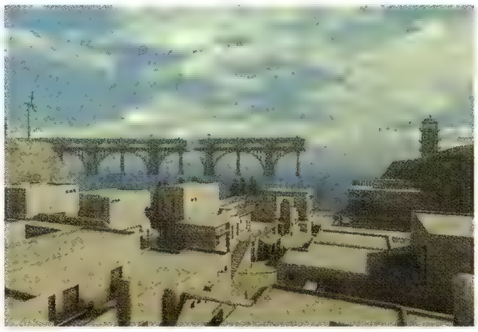
【N】カイネの祖母。粗野で乱暴な性格だが、カイネを心の底から慈しんでおり、彼女を守るために手を尽くす。カイネに女の子らしい服を着せたり、入手困難な伝説の花・月の涙の髪飾りを贈ったりと、心からの愛を注いだ。なお、約1000年前に存在した人間のカーリーは元軍人。軍人時代の彼女は第13次十字軍の隊長で、最後のレッドアイを撃破したことで世界的英雄となった。しかし本当の階級は副隊長であり、実際にレッドアイを撃破したのは別人。世間でなぜカーリーが隊長として扱われているのか、本来の隊長の所在などは最重要秘密事項として保管され、公開されていない。

カールレオン
かーるれおん　◎場所

【1】大陸東部にある小国であり、カイム、フリアエ、イウヴァルトの出身国。土地は小さいが肥沃で、領内の森林には野生動物も数多く棲息しているため自給自足を行っていた。そのため、勢力を広げる必然性を持たず、専守防衛を国軍の規範としている。また、幾多の大国が技術革新に基づく装備の強化を図るなか、初代国王からの伝統を汲む剣術を鍛錬することで国を護っている。８代目国王であるガアプが命を落としたあと、急速に勢力を失ってしまう。

海岸の街
かいがんのまち　◎場所

【N】南平原の先にある数少ない港町で、石造りの家と石畳が特徴的。貿易のおかげで、町の人はほかの町に比べて裕福な生活を送れている。貴重な薬や外国製の果物や野菜、素材など、ここでしか手に入らないものも多い。毎日新鮮でおいしい魚が食べられる街として知られ、酒場の人気メニューはサーディンパスタ。灯台近くの砂浜には、無数のオットセイが打ち上げられているのを見ることができ、釣りを楽しむ人も多い。



海上要塞
かいじょうようさい　◎場所

【1】帝国軍の海上軍事拠点で、島を丸ごと改造して造られた。空中要塞と同じく楕円形の貝殻のような形で、上部には数台の砲台を有している。また、結界塔と呼ばれる兵器が要塞の周囲を取り囲んでいるため、海上はおろか空中からも侵入するのは困難。さらに、周囲には帝国軍の誇る海上兵器が常駐。帝国軍はこの要塞を利用してミッドガルドの全域に海上兵器を送り出している。

カイネ
かいね　◎キャラクター

【N】→P.180

カイム
かいむ　◎キャラクター

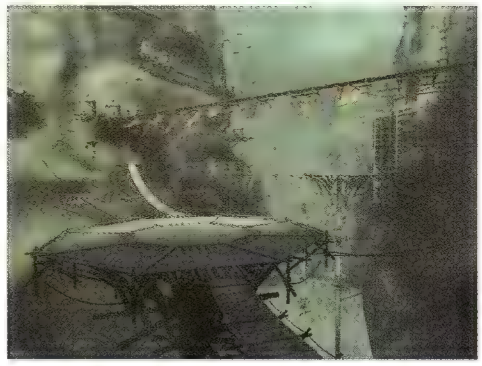
【1】→P.020／【2】→P.118

鍵
かぎ　◎用語

【2】新封印制度において、５つに分割された女神（アンヘル）の魂のことであり、女神を拘束するための力。花や水などその形はさまざまで、それぞれ封印騎士団の連隊長となった契約者が守護する重要拠点・直轄区と呼ばれる場所に祀られている。なお「鍵」を解放するには「鍵」そのものを破壊するか、「鍵」の守護者を殺す必要がある。守護者の命は「鍵」と同期しているため、命がけで護らざるを得ない。「鍵」が解放されると、女神の城にあるクサビが崩壊し女神の拘束が解ける。

崖の村
がけのむら　◎場所

【N】北平原の南西に位置する村で、カイネの故郷。断崖に木製の足場を組み、長い梯子や吊り橋を渡すことで空中に村を築いている。その高度は計り知れず、遥か下は靄がかかっていて見えないほどである。この村では、村長をはじめとするすべての村人たちが、長年に渡って閉じこもりがちな生活習慣を送ってきた。そのためか、村全体に陰気で閉鎖的な雰囲気が漂っている。のちにゲシュタルトの集合体でありながら、レプリカントの意識をも取り込んだ巨大なマモノ・ウェンディの出現とともに村人たちがマモノと化し、村は壊滅する。



神
かみ　◎キャラクター

【1】あらゆる生物の創造主であり、唯一にして絶対的な存在。すべての生物は、神の大いなる意思に基づいて行動する。しかし、そのなかで唯一、神が自分の意志でコントロールできないのが突然変異的生物の人間である。神は「エゴだけが強い不穏な失敗作」である人間を抹殺したがっていると考える者も多い。

神の樹
かみのき　◎用語

【N】神話の森の奥深くに位置し、どういうわけか「近寄ってはいけない」とされている巨木。じつは、これ自体が魔素によって稼働する巨大なネットワークコンピューターである。その長く伸びた枝の先の葉から人々の記憶を集め、言葉が砕かれた光の粒となり、くまなく枝分かれした葉脈を通りながら記憶プールに流れ込む仕組み。世界の崩壊とともに寸断されてしまった記憶の網を保持するためにひたすら稼働し続ける。

仮面
かめん　◎用語

【N】仮面の街に住む「仮面の人」と呼ばれる種族が被っているもの。彼らは掟により仮面をかぶって生活し、仮面の種類は各自の職業によって異なる。とくに王の仮面は神聖とされ、王族のみ立ち入ることが許される「砂の神殿」で試練を乗り越えなければ手にすることが出来ない。数々の困難を乗り越えて王の仮面を手に入れた者は、仮面の街はもちろん、内外から一目置かれる存在になるという。



仮面の王
かめんのおう　◎キャラクター

【N】→P.188

仮面の王子
かめんのおうじ　◎キャラクター

【N】「王の仮面」を手に入れる前の、仮面の王の地位。

仮面の人
かめんのひと　◎用語

【N】仮面の街に住む、仮面を被って生活する人々のこと。彼らは12万4000以上もの掟に従って日々を送る種族で、仮面をかぶるということも掟のひとつである。

仮面の副官
かめんのふくかん　◎キャラクター

【N】仮面の街に伝わる掟に詳しい生き字引的な存在で、先代の王の時代から仮面の王に付き従ってきた老

兵。仮面の王の副官を務めているが、奔放な仮面の王には日々頭を悩ませている。しかし、彼の王としての素質は誰よりも認めており、だからこそ口やかましく接する部分もある。仮面の王もそれを理解しているからか、副官には全幅の信頼を寄せている。本名はノイン(Neun)。



仮面の街
かめんのまち ◎場所

【N】数多の掟に縛られ、仮面をかぶって暮らす「仮面の人」が住む街。道具屋、武器屋、素材屋、食料屋があり、街を流れる流砂の上を砂船と呼ばれる船に乗って移動できる。この街を知らない人が訪れるのは希である。



カルロ
かるろ ◎キャラクター

【N】若くて向こう見ずな野心家の青年。ロボット山のふもとで暮らす兄弟の母親・ブルーに、子供たちを捨てて駆け落ちしようと声をかけた。

気炎の直轄区
きえんのちょっかつく ◎場所

【2】気炎の「鍵」が祀られている地で、守護者はザンポ。火山地帯にあり、つねに立ち込める有毒なガスは視界だけでなく人の命をも奪う。この地には遺跡があるが、なぜこのような場所に建物が作られたのかは不明だ。

騎士団階級
きしだんかいきゅう ◎用語

【2】騎士団の階級は、最上級騎士(元帥)>上級騎士(将官)>準級騎士(士官)>中級騎士(兵士)>新級騎士(新兵)となっている。力のある者は、騎士団長、連隊長、部隊長といったポストに任命されることとなる。

北平原
きたへいげん ◎場所

【N】ニーアの村から北門を出ると行くことができる平原。羊や山羊、イノシシといった獣たちが棲息している。羊は手を出さなければ安全だが、怒らせると手がつけられなくなる。最近は気性が荒くなってきたため、羊肉の価格も高騰してきたようだ。また、イノシシは人を襲うようになって以来、村の人々からも危険視されている。この地域から西側から北へ抜ける道は神話の森、南へ抜ける道は崖の村へと続いている。また、東側から北方面にある櫓の上を渡り進めば、ロボット山にたどり着ける。

ギデオン
ぎでおん ◎キャラクター

【N】ロボット山のふもとで、兄とふたりで暮らしている少年。元々兄に甘えがちで、弟という立場を利用したわがままな言動が目立っていた。母親が行方不明になってから、兄への過剰なまでの依存心が芽生える。しかし、その兄を自分のせいで失ってしまい、少しずつ人格が崩壊していく。それでも兄の死をロボットのせいだと思い込むことで何とか自我を保ちつつ、そのロボットへ復讐するために強力な武器を作り続けるようになる。なお、事故で兄が命を落とした際、その死体を瓦礫から引っ張り出そうとして、腕を引きちぎってしまった記憶がトラウマになっている。以降、自身の腕を自傷するようになった彼は、その行為が行き過ぎて左手が義手になってしまった。

経典
きょうてん ◎用語

【1】フリアエが肌身離さず持っている女神信仰の経典。その経典の真理を読み解いた者には、森羅万象の知識が授けられるという。経典には、赤い塔の絵などが描かれている。

巨人
きょじん ◎キャラクター

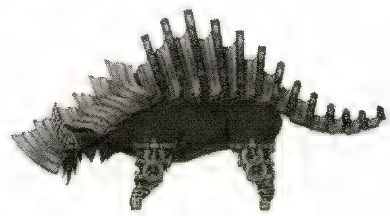
【1】【N】2003年6月12日15時頃、赤き竜とともに前触れなく東京・新宿に出現した人型の物体。攻撃原理・効用ともに不明で、竜との交戦中に突如崩壊。どういうわけか質量が観測されず、崩壊時も地上への被害は比較的軽微であった。

禁断の山脈
きんだんのさんみゃく ◎場所

【2】約束の地を有する、5つの直轄区に囲まれた中心に当たる地域。約束の地は中央にある巨大な火山口に位置している。この場所を知る者は神官長とごくわずかの側近たちだけで、存在自体が極秘裏にされている。

グース
ぐーす ◎キャラクター

【N】ゲシュタルトの赤ん坊と、その親が合体した集合体で、巨大なイノシシのような姿をしている。崩壊体が合体したわけではないため知性や意思が残っており、多くの同胞たちを無惨にも殺してきたニーアとその一行に怒りの炎を燃やしている。何度倒しても復活してくるのは、それだけ多くのゲシュタルトによる集合体であるため。決して不死身というわけではない。



空中要塞
くうちゅうようさい ◎場所

【1】上空に浮かぶ、複雑怪奇な建造物。帝国軍によって建造された要塞で、二枚貝のような造形をしている。下部には魔力を蓄積させて放出する特殊な砲台が設置されており、その破壊力は想像を絶する。青き丘陵での戦いにおいて、天から何本もの光線が降り注ぎ大地を抉った際、神の怒りと称された。しかし、実際は空中要塞から発せられた攻撃である。要塞の周りにはつねにドラゴンたちが徘徊しており、近づいたとしても内部に侵入するのは難しい。なお、内部は中心部に太い柱が立っており、そこからは通路が伸びている。また、通路の先には祭壇が祀られている。

クレオ
くれお ◎キャラクター

【N】レプリカントたちによるマモノ狩りの影響で、ロボット山に追われてきた小さな子供のゲシュタルト。まだ幼く、素直でかわいい性格の持ち主だ。母親は彼を溺愛していたが、彼を逃がす際に囮となってレプリカントたちに殺された。その後、彼はロボット山の奥でP33と出会い、ともに行動することとなる。



黒き兵士
くろきへいし ◎用語

【1】帝国軍精鋭部隊の俗称で、悪しきドラゴンに選ばれ、魂を捧げたもののみがなれる。その力は普通の人間を遥かに上回り、幾多の刃にその身を斬り刻まれても戦うことをやめないという。

黒の書
くろのしょ ◎キャラクター

【N】→P.189

黒の書計画
くろのしょけいかく ◎用語

【N】ゲシュタルト計画の一環。書物のような器にゲシュタルトを組み込んだ13冊の封印の書のうち、とくに優れた力を持つ黒の書と白の書。その両方を同時起動することで発生する膨大な魔法エネルギーを利用し、レプリカントの器へゲシュタルトを強制的に回帰させるシステム。レプリカントを管理するアンドロイドには、この計画を推進するプログラムが組み込まれている。

恵沢の平原
けいたくのへいげん ◎場所

【2】緑に恵まれた平原で、封印騎士団の居城・大神殿のある地。大神殿より北東の方角には、騎士団が管理する明命の直轄区がある。

契約
けいやく ◎用語

【1】【2】人間(および亜人)がモンスター(および精霊)と心臓を交換することで、新たな力を手に入れ運命共同体の存在となる行為。これは怒りや死、悲しみといった人間の負の感情(エゴ)が高まった時に、それを察知したモンスターたちとのあいだで取り交わされるもので、お互いの利害が一致したときにのみ成立する。ただし人間は契約の代償として、その人間にとってもっとも大切な体の器官・機能をひとつ失う。こうして人間は強力な力と魔力を手に入れ、モンスターは契約者の「負の心」を浴び、かつ己の「負の心」を契約者になすりつけ、お互いに一段高い生物へと解脱していく。しかし、人間は契約のせいで己の負の心が増大し、制御が効かなくなって精神的自滅の危機にさらされ続ける危険性もはらむ。ふつう、モンスターは単なる人間には目もくれないが、あまりにも負の感情が強い人間に出会うと、強力に惹きつけられる。それは人間で言うと恋とか愛に近い感情で抗うことができない。種族によっては不利な契約になることがあるので、契約者になれるものはあまりいない。また、ドラゴンのような誇り高い生物が下等な人間と契約することは極めて希である。

契約者
けいやくしゃ ◎用語

【1】【2】モンスター(および精霊)と契約を交わした人間(および亜人)のこと。エゴの強い人間、見苦しいほど生に執着している人間が、理性を超えた時点でこの道を選ぶこととなる。そのため特殊な精神構造を持つ人間が多く、社会生活を送るうえで明らかに問題のある者も珍しくない。また、契約者になると強大な膂力と魔剣(および魔力を伴った武器)を操る力を手にできる。魔法を操る時間を制約することで、敵の魔法防御を貫通する能力を発揮できる者もいる。

ゲシュタルト
げしゅたると ◎用語

【N】白塩化症候群の感染を回避する目的で、人間の魂を魔法によって抽出した存在。これは魔素と、竜の亡骸から生成した培養組織を用い、魂と肉体を分離する技術である。ゲシュタルト化してある程度時間が経過すると、知性や自我をほぼ失って「崩壊体」になることが判明するが、この欠陥はのちに改善された。当初は肉体を長期保存できるだけの財産を持つ、富裕層だけがその恩恵を受けられた。また、魂の抽出に少なからずとも抵抗感を覚える者は多く存在した。なお、ゲシュタルトはレプリカントたちからマモノと呼ばれている。また、ゲシュタルト化すると太陽の光に弱くなる、といった不具合も発生する。

ゲシュタルト計画
げしゅたるとけいかく　◎用語
【N】世界浄化機関を中心に推進されたさまざまな計画の呼称であり、滅びかけた人類がとった最後の手段。まず全人類をゲシュタルト化し、レプリカントに白塩化症候群の駆逐を任せ、世界が病の危険から脱するまでゲシュタルトは眠りにつく。その後、すべてのゲシュタルトをレプリカントへ回帰させることで、ヒトという種を残すことが計画の骨子となっていた。

ケルピー
けるぴー　◎キャラクター
【2】神水の連隊長ハンチの契約対象。馬のような頭を持っているが、体は水棲生物のような鱗に覆われている。水中の移動はもちろん、赤い2枚の羽根を使って空中を飛ぶこともできる。

光城郭
こうじょうかく　◎場所
【2】宝光の直轄区にある城砦。砲台を設置し、強固な砦として敵を迎え撃つよう設計されている。内部は守護者ヤハの幻影により侵入者を妨害するなどさまざまな仕掛けが施されている。最深部には、宝光の鍵・聖宝玉が祀られている。

声
こえ　◎用語
【1】【2】契約者同士の思念による言葉。すなわちテレパシーであり、離れた場所からでも語りかけることができる。また、周辺にいる者たちの生命の危機を感じ取ることもできる。基本的に、モンスターなど原始的な種族はこの能力を持っているが、ふつうの人間は進化の過程で失ってしまっている。

護衛兵士
ごえいへいし　◎用語
【2】重要拠点を守護する精鋭兵士。肉体、精神を極限まで鍛えているため、戦闘力は極めて高い。しかし育成に時間がかかるため、部隊に所属される者は少数となってしまう。

ゴーレム
ごーれむ　◎キャラクター
【1】→P.034

黒文病
こくもんびょう　◎用語
【N】世界中で急速に蔓延し、混乱を引き起こしつつある奇病。発症すると、黒い文字を思わせる斑紋が全身を覆っていくことから、この名で呼ばれるようになった。原因、治療法ともに不明で、罹患した人間は必ず死に至ってしまう。その黒文病がヨナに発症してしまったことが、ニーアと世界の運命を大きく動かしていく。必死の思いでニーアが得たヨナを救う方法は、白の書が失った「封印されし言葉」を集めることだった。なお、レプリカントを蝕む黒文病は、データのコピー元に当たるゲシュタルトが崩壊体へと変貌することが原因で発病する想定外のエラーである。

国立兵器研究所
こくりつへいきけんきゅうじょ　◎用語
【N】「6.12」の事件以降、経済力の低下や世界浄化機関の台頭によって国力が低下し、国連における発言権がほぼ皆無となった日本が、独自の軍事力強化を目的に立ち上げた研究機関。魔素の基本研究と兵器への転用実験を行うことを目的に、2018年に設立された。兵器への転用実験の概要は、人体実験による強化人間の製造。魔法を使ってレギオンと戦う兵器を作り出すため、魔法の力を植え付けられたのがエミールやハルアをはじめとする実験兵器たちだ。なお、研究所の所在は機密事項とされ、政府内では「ムラサキ」というコードネームで呼ばれた。

ゴブリン族
ごぶりんぞく　◎用語
【1】小型ながらも屈強で、他種族に比べ好戦的。山脈の岩壁の裂け目から現れたとされる。石工や彫金の能力に優れ、岩をくり貫いた宮殿に集団で住まう。

コロシアム
ころしあむ　◎場所
【1】紅き岩山にある闘技場。はるか昔、横暴と贅沢の限りを尽くした皇帝が築造したとされる。皇帝亡きあと王国は滅亡したが、朽ち果てた遺跡では亜人たちが残虐な勝負を愉しむ狂気の宴がくり広げられている。

【さ】

最終封印
さいしゅうふういん　◎用語
【1】【2】女神のこと。世界にただひとり、その体にオシルシが現れた者が女神と認定されて最終封印の役割を担い、死をもって解除される。

最上級騎士
さいじょうきゅうきし　◎用語
【2】封印騎士団の元帥クラスであり、騎士団長を指す。軍事実務面でのトップで、全連隊を指揮する役割を担っている。以前はオロー、オローの死後はジスモアがこのポストに就いた。

再生の卵
さいせいのたまご　◎用語
【1】「世界の破滅から人間を守る装置であり、封印が解かれると世界に発生する」。人間界の神話においては、そう描かれているが、かつて世界に再生の卵が現れた記録はない。そのため、封印を護る神官たちのなかではこの伝承を疑問視する声も多く、存在そのものが伝説ではないかと見られていた。とはいえ、これの存在を信じる者は少なくない。実際は、神が作り出した人間抹殺装置以外の何者でもなく、人類以外の次の支配者（生物）を決定させるための道具とも言われている。

祭壇
さいだん　◎場所
【1】おもに天使の教会の司教が設えた祭壇を指す。その上には、司教であるマナのものと思われる不気味な玩具がぶちまけられて異様な空間となっている。

砂漠
さばく　◎場所
【N】東平原を抜けた先にある地帯。本来は平原にいるはずの狼がよく出ることで知られ、その群はロックという名の犬のゲシュタルトによって統率されている。また、砂嵐が起こっている地帯は、この地によく慣れた仮面の人でないと迷わずに進むことができず、のちに嵐に紛れて潜むマモノが人を襲う事件も発生する。

砂漠の神殿
さばくのしんでん　◎場所
【1】この世界が創造されてまだ間もない頃に、漆黒の闇を照らすため神が生み出した光を祀る神殿。世界に3つしか存在しない、おおいなる時間を守る封印のひとつで、月の砂漠に位置している。

砂漠の牢獄
さばくのろうごく　◎場所
【1】「生きる地獄」の別名で呼ばれることもある帝国軍の牢獄。「赤い目」に侵されなかった要人や、手に負えなくなった罪人が投獄され、日々処刑が行われている。なかには管理者に目をつけられて処刑以外でなぶり殺される者、ずさんな衛生管理により伝染病や食中毒、栄養失調で死んでいく者も多い。契約者のひとりであるアリオーシュも、エルフの森の襲撃で捕まりこの牢獄に入れられていた。

錆の町
さびのまち　◎場所
【2】無明の渓谷の地域にある町。治安は悪く、細い路地も多く入り組んでおり、迷い込んで襲われる人も多い。賞金稼ぎや警備と称して騎士団がうろつき、町を荒らしているようである。

サラマンダー
さらまんだー　◎キャラクター
【1】→P.033

ザンポ
ざんぽ　◎キャラクター
【2】→P.106

自衛隊 第6航空団 第303飛行隊
じえいたい だいろくこうくうだん だいさんびゃくさんひこうたい　◎用語
【1】【N】石川県小松基地・中部航空方面隊に編成された、「6.12」において赤き竜を撃墜した機体・スカーフェイスを有する飛行隊。部隊マークは1981年に306飛行隊創設と同時に霊峰白山守護神のドラゴンをデザインしたものに変更された。このドラゴン自体は、第303飛行隊の前身である第4飛行隊のコールサインのドラゴンから来ているとも言われている。1987年にF-15に機種転換された。

シェイド
しぇいど　◎キャラクター
【2】封印騎士団の現団長ジスモアの契約モンスター。その実態は謎に包まれており、姿や能力はいっさい不明。ジスモアは契約の代償として肉体を差し出しており、彼の現在の肉体はシェイドによって形作られたかりそめのものである。

静かな森
しずかなもり　◎場所
【1】「エルフの森」と呼ばれることもある、永世中立を誓ったエルフ族の住む森。中心地には深い渓谷があり、その渓谷から発生する霧が森に立ち込め侵入する者を時折惑わす。海の神殿の封印を解除するため、エルフたちの力が必要だと知った帝国軍の手によって占領されてしまう。女神の城を追われたカイムたちが到着した時点で、すでに帝国軍が森に侵入していたため戦場となってしまった。

ジスモア
じすもあ　◎キャラクター
【2】→P.112

実験兵器7号
じっけんへいきななごう　◎キャラクター
【N】国立兵器研究所の強化人間製造実験における7番目の素体で、予備の献体だったエミールのなれの果て。魔力の強すぎる姉・ハルアに対する抑止力として人体を改造され、見た者すべてを石化させられる「石の目」を与えられた。やがて実験兵器6号との同化を果たし、より強大な魔力と石化能力を制御できる力を手に入れ、外見も6号と同様の「醜い髑髏のような姿」へと変貌する。

実験兵器6号
じっけんへいきろくごう　◎キャラクター
【N】国立兵器研究所の強化人間製造実験における6番目の素体であり、エミールの双子の姉・ハルアのなれの果て。球体の顔に赤い眼、そして骸骨のような身体をしている。それまで実験に使用され、機密保持のため廃棄されたどの献体も成し得なかった「実験兵器としては初めての完全体」であり、人類の希望との呼び声も高かった。しかし最終的には人の心を残していたため暴走し、実験兵器7号、つまりエミールに石化させられて封印された。のちにエミールと同化を果たす。

死神
しにがみ　◎キャラクター

【2】ユーリックの契約対象。緑色をした霧状の骸骨のような姿をしている。ユーリックが通常の人間で言うところの死の状態になった時、その姿を現す。

死の夢
しのゆめ　◎用語

【N】神話の森でここ1ヵ月ほどのあいだに広がった謎の病。一度眠りに落ちると、夢を見続けて二度と目覚めないという奇病。なお、死の夢の世界を統括し、感染者を動かしているのは文章。みずからも感染し、原因を究明しようとした村長は、ニーアとやりとりするうちに「ユメミルヒト」という言葉を聞くと眠りに落ち、その言葉を媒介に感染することを発見した。

ジミニー
じみにー　◎キャラクター

【N】ロボット山のふもとで弟を養いながら暮らす、しっかり者の少年。母が情夫とともに失踪してからは、ロボット山で金属や機械部品を入手し、それを利用して武器を強化することを商売にし、生計を立てている。母親が家を出た理由やその死を知ってはいるが、弟の前では気丈に振る舞う強さを見せる。ニーアと接していく過程で、ひどい母親であっても慕っていた自分の気持ちに気づく。のちにロボット山で弟の過失による機械の崩落に巻き込まれ、命を落としてしまう。なお『ニーア ゲシュタルト』では名前が異なり、ジェイコブという名になっている。



ジェイコブ
じぇいこぶ　◎キャラクター

【N】『ニーア ゲシュタルト』におけるジミニーの名称。

ジャック
じゃっく　◎キャラクター

【N】ある日ニーアの村を襲った、多数のゲシュタルトの集合体。性格や自我のようなものはすでに失われており、破壊衝動が強い。しかし、レプリカントのヨナを奪って魔王の元まで届けるという、与えられた使命だけは覚えている。圧倒的な生命力で倒されても倒されても起き上がり、ヨナが避難している図書館に進み続けた。その後、頭だけになっても生き続けたが、エミールがカイネを半身のマモノごと石化することで封印に成功。5年後にカイネの石化を解いてもなお生きていたが、最終的にはニーアによって倒された。



シャドウ
しゃどう　◎キャラクター

【1】この世に未練を持つ者が、復讐のために黒いオーラに包まれて現れる姿。魔界での契約による強靭な肉体と魔力を持つが、一定時間しか現世に出現することができない。また、一度きりしか出現できず、シャドウになった者の魂は現世から戻ると永遠に冥界をさまようこととなる。

シャハリヤール
しゃはりやーる　◎キャラクター

【N】砂の神殿の最奥部に鎮座する存在。王家の者が王たる資格を持っているかどうかを判断し、「王の仮面」を授ける儀式を司る（前王が死ぬと、王の仮面は返上されるようになっている）。ゲシュタルトが住みついたかのような石像で、あたかも自我を持っているかのごとく攻撃してくる。たとえ王の候補者が倒してしまっても、またつぎなる王の候補者が挑む際には復活する仕組みになっているようだ。

呪文
じゅもん　◎用語

【1】【2】口ずさむことにより、言霊として現れる力。肉体を超えた核に直接働きかける。代表的な用途として神官長が使う封印の呪文などが挙げられる。また、呪文の効果を利用して攻撃・回復などに利用する場合は「魔法」と呼ばれることが多い。もともとは、オシルシの文様として浮かび上がる呪文列を解読して編み出された。このため神官長は、オシルシの現れた女神候補がどこにいても呪文を反響させることで呪文列を読み、探し出すことができる。

準級騎士
じゅんきゅうきし　◎用語

【2】封印騎士団の士官クラスで、護衛兵、魔術師などが相当する。ただし、部隊長などとして一般兵士や弓兵がいることもある。エリスも当初はこのクラスである。

殉教者
じゅんきょうしゃ　◎用語

【2】信仰のためにみずからの命を捨てる者のこと。封印騎士団は、封印を護るための犠牲者を殉教者と呼び正当化している。殉教者にはおもに過去帝国軍だった者や、重罪人などの場合が多い。なお、何の謂われもない一般市民が殉教者として犠牲になることも少なくない。

十字軍
じゅうじぐん　◎用語

【N】選りすぐりの人間を集めて白塩化症候群の発症を予防する薬品・ルシフェラーゼを投与し、それらの者たちを組織化して結成した軍隊。2016年5月、第1次十字軍をブラジルへと派遣するも、レギオンとの壮絶な戦闘の上全滅。2016年12月には、ルシフェラーゼの効果が若年層ほど高いことが判明し、従軍者をほぼ10代の若者で構成した第5次十字軍が組織された。2019年には戦況は膠着状態となり、レギオンと十字軍の戦いがイタチゴッコ化。一定以上の効果は見込めなくなったが、それ以上の打開策もないため十字軍は引き続き派遣され続けた。しかし、2030年には第13次十字軍の隊長が、エルサレムにてレギオンの統率者・レッドアイの最後の1匹を殺害することに成功。しかし隊長はその戦闘時での傷が元で死亡した。

種の書
しゅのしょ　◎用語

【2】別次元から出現した、古の墓標に眠っている神竜族の啓示。

上級騎士
じょうきゅうきし　◎用語

【2】封印騎士団の将官クラスで、連隊長として連隊を指揮することができる。エリスは第六章でこのクラスに昇級し、反逆者討伐対の隊長となった。なお、この場合の反逆者とはノウェのことを指す。

賞金稼ぎ
しょうきんかせぎ　◎用語

【2】賞金首を捕らえる、または討つことを生業としている者たちのこと。彼らは皆一様に同じ姿をしているが、これは、賞金稼ぎギルドの取り決めによる同一の衣装を着用しているためである。

シロ
しろ　◎キャラクター

【N】ニーアがつけた白の書の愛称。本人は名前をそう略されることを嫌がっているが、のちにじつは気に入っていたと告白する。

白の書
しろのしょ　◎キャラクター

【N】→P.177

深淵なる大地
しんえんなるだいち　◎場所

【2】火山地帯のある未開の原野で、封印騎士団連隊長・ザンボの守護する気炎の直轄区がある。この地の外れには石の村や閉じられた地があるが、人が近づくことは滅多にない。

神官
しんかん　◎用語

【1】【2】封印に関する神事を執り行う公的な職。またはその職に就いた者。各国から選抜され国家から独立し、宗派を超えた聖職者たちによって構成されている。1年の内の大半を神殿巡礼にあてる放浪者でもあり、封印を司る者として「神による破壊」を防ぐことを本気で考える者も少なくない。

神官長
しんかんちょう　◎用語

【1】【2】神官たちの長であり、連合軍の司令官。民間人と触れ合うことを禁じられた女神に唯一接触できる者でもあり、その世話係も務めている。女神の安全を図ることを第一の業務とし、自身もあまり人前には出てこない。ヴェルドレ亡きあとは、セエレがこの職に就いた。

新級騎士
しんきゅうきし　◎用語

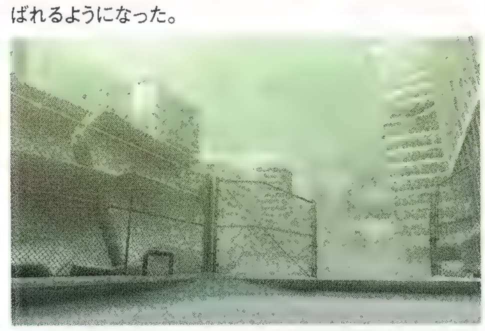
【2】封印騎士団の新兵であり、正騎士のなかでも最下級のクラス。見習いが終わると正騎士に任命される。物語の始め、ノウェはこのクラスだった。

深紅の書
しんくのしょ　◎キャラクター

【N】エミールが住む洋館の奥深くに眠っていた、13冊の封印の書のなかの1冊。白の書、黒の書と同様にひとりのゲシュタルトが封印されていて、それ故に強力な魔力を秘めている。しかし白の書や黒の書のように人語を解したり、会話したりできるようにはプログラムされておらず、あくまでこの2冊によるシステムをサポートする程度の能力に制限されている。

新宿
しんじゅく　◎場所

【1】カイムとアンヘルが突如、空に現れた“裂け目”に飲み込まれてたどり着いた謎の世界。「ここは神の国か？」とアンヘルが称したように、それまでカイムたちが住んでいた世界とはまったく異なる文化を持つ。／【N】「6.12」の部隊となった東京の中心地。レギオンの温床と化し、それを殲滅するため、2009年8月6日にはアメリカの提案により核攻撃作戦が決行された。図らずも日付までが同じとなり「ヒロシマの悲劇再び」と言われ、それを皮切りに核攻撃が本格化。日本全土が焦土となっていった。なお、壊滅した新宿はのちに「グラウンド・ゼロ」と呼ばれるようになった。



新宿壊滅作戦
しんじゅくかいめつさくせん　◎用語

【N】東京・新宿から無尽蔵に湧き出るレギオンの対策として、2009年3月に決行された作戦。新宿への一斉砲撃が行われるも、レギオンの数の減少は極めて微少であった。なお、アメリカは同年1月にレギオンの死体、および捕獲者を持ち帰って研究を進めていたが、有効な対抗手段は見つからないままだった。

真人類
しんじんるい　◎用語

【2】レグナや神竜族による、覚醒したノウェの呼び名。ノウェは、先代の女神であるフリアエとその元許婚だったイウヴァルトが「再生の卵」により転生し、進化した突然変異生物である。真人類になったノウェは、あらゆる生物を超越し、神や神竜族をも凌駕する力を持つことが出来た。神に勝つことを目論んだ神竜族は、神に対抗する兵器とするためにそれまでノウェを育ててきたのである。レグナは再度、ノウェを再生の卵に入れて兵器としての最終仕上げを目論んだが、神の意志により拒絶される。しかし、マナの中にひそんでいた神の力と交わることにより、結果的にノウェはとてつもない力を得ることができた。

神水の直轄区
しんすいのちょっかつく　◎場所

【2】ハンチが守護する、神水の「鍵」が祀られている地。切り立った岩壁が深い谷を形作っている。最深部には水城砦と呼ばれるダム状の城塞があり、多くの水を湛えている。水城砦にたどり着くまでには多くの水門があり、外敵の侵入を拒むかのよう。元は水脈があり豊富な水によって潤った場所だったが、水城砦により枯れ果てた地となってしまった。

神殿
しんでん　◎場所

【1】光を祀った砂漠の神殿、空気を祀った封印の森、水を祀った海の神殿の3ヵ所の総称。いずれも人里離れた場所に存在し、それぞれに封印が施されている。これらの封印がすべて解かれると、女神には巨大な負荷がかかることとなる。

新封印制度
しんふういんせいど　◎用語

【2】古より、世界は3ヵ所の神殿と最終封印である女神の計4つの封印により均衡が保たれていた。ところが、いまや神殿が破壊され最終封印によってかろうじて保たれている状態。ひとりの女神、すなわちアンヘルにすべての負荷を背負わせることは、結局首の皮一枚でつながっているに過ぎない。また、かつてドラゴンが女神となった事例がないため、人間とは異なり制御できず、アンヘル側から封印を解除されるとも限らないため不安定であることを、ヴェルドレは懸念していた。そこで、ヴェルドレはアンヘルの魂を霊的に5つに分離し、それぞれを「鍵」と呼ばれる物体（花であったり、水であったり）に封じ込め、神殿と同様にリスクを分散。アンヘルの自由を奪い、女神自身による封印解除の危険を回避しようとした。これが新封印制度である。

神竜族
しんりゅうぞく　◎用語

【2】精霊の一種とも、天使と同じく見えない存在とも言われる高尚な竜の一族。地上とは次元の違うところに密かに存在していたが、「おおいなる時間」の崩壊により物質的に姿を現すこととなる。

神竜の間
しんりゅうのま　◎場所

【2】竜の楼閣の中枢で、神竜族の意識体が眠っている。次代の神竜を継ぐ者にすべての伝承を伝えるためにのみ存在する。神竜の意思を継いだものは、神竜の使徒として再び神へ挑む力が与えられるという。

神話の森
しんわのもり　◎場所

【N】北平原の橋を渡った北側にある森に位置する、小さいながらも美しい村。話し好きで明るい、いい人たちばかりが住んでいる。村の奥にはその歴史を見守ってきた神聖な巨木・神の樹があり、神の樹には封印されし言葉が眠っていると昔から伝えられてきた。ある日、この村の村長からポポルに「夢」という文字が無数に書かれたイタズラのような手紙が送られてくる。そこで異変を察したニーアが様子を見に行ったところ、「死の夢」と呼ばれる謎の奇病が蔓延していたことが発覚した。

水城砦
すいじょうさい　◎場所

【2】「鍵」のひとつである聖瓶を護るため、封印騎士団が建造した巨大な砦型建造物。砦としての役目のほかに、水を塞き止める機能を果たす。また、砦には巨大な砲台が設置され、外敵の侵入に備えている。

スカーフェイス
すかーふぇいす　◎用語

【1】【N】航空自衛隊 第6航空団 第303飛行隊所属の機体。2003年6月12日、東京・新宿に現れた赤き竜を爆撃・撃墜した。目標を撃墜したスカーフェイス機のパイロットは、無線にて「霞ヶ関方面に落下した模様」と報告。その後、赤い竜の亡骸がまき散らしたとされる魔素が原因で、白塩化症候群が蔓延することとなる。

砂の神殿
すなのしんでん　◎場所

【N】砂嵐に阻まれた砂漠の奥地にある神殿で、ニーアたちはフィーアの案内によってたどり着くことができる。王家の者のみが侵入を許された神聖な場所で、内部にある無数の部屋にはそれぞれ仕掛けが施されている。その仕掛けは「試練の掟」と呼ばれるもので、特定の行動を禁じられ、それを守らなければ先に進むことはできない。

砂の村
すなのむら　◎場所

【2】嘆きの水脈の地域にある村。かつて豊かな水を運んでいた川が干上がってしまったため、民衆たちは飢えと渇きに苦しんでいる。この村にマナは頻繁に訪れており、村の人々からの信頼も厚い。また、マナと仲の良い子供がいたようである。

スノウホワイト計画
すのうほわいとけいかく　◎用語

【N】独自の軍事力強化を目的とした日本の研究機関・国立兵器研究所による、レギオンへの対抗兵器を作り上げる計画のこと。実験兵器6号、ならびに7号も、この計画によって生み出された。

聖花
せいか　◎用語

【2】命を吸って可憐に咲く花畑であり、明命の直轄区の「鍵」。生命の源、魂の力である「命」を封じ込め祀っている。なお、「命」は「気」、「水」、「光」の上位属性に相当する。ちなみに、ここに生息している花はアネモネと呼ばれる種である。

聖火台
せいかだい　◎用語

【2】聖火が立ち上る台座のことであり、気炎の直轄区の「鍵」そのものを指す。生命を育む「気」の力を封じ込めて祀っている。

聖砂漏
せいさろう　◎用語

【2】天時の直轄区の「鍵」であり、永遠に時を刻む砂時計。最上位属性に相当する、大いなる時間の構成要素である「時」を封じ込めて祀っている。

聖壇
せいだん　◎用語

【2】神を祀る神聖な祭壇。封印騎士団では、直轄区の「鍵」を祀っている場所をこう呼んでいる。

聖地
せいち　◎場所

【2】18年前の大戦において、連合軍が女神を守るために戦ったとされる場所。アンヘルとカイムが出会った場所であるとも言われている。大戦後、ヴェルドレはこの地域を不可侵領域とした。この地にも村があり、その村は「果ての壁村」と言われている。

聖瓶
せいびん　◎用語

【2】無限の聖水を湛える水瓶で、神水の直轄区の「鍵」。命を宿す母なる力であり、生命の源である「水」を封じ込めて祀っている。

聖宝玉
せいほうぎょく　◎用語

【2】聖なる光を封入した宝石で、宝光の直轄区の「鍵」。闇を照らす聖なる力である「光」を封じ込めて祀っている。

精霊
せいれい　◎用語

【1】モンスターの一種で、おもに実体を持たない者を指す。種類や特性も雑多で、水の精霊・ウンディーネ、火の精霊・サラマンダー、風の精霊・シルフ、地の精霊・ノームが、通常「四大精霊」と呼ばれている。その他、イフリートやゴーストなどが有名。

世界浄化機関
せかいじょうかきかん　◎用語

【N】ゲシュタルト計画を推進する国際組織。ハーメルン機関と同様に国際連盟の関連組織である。

セエレ
せえれ　◎キャラクター

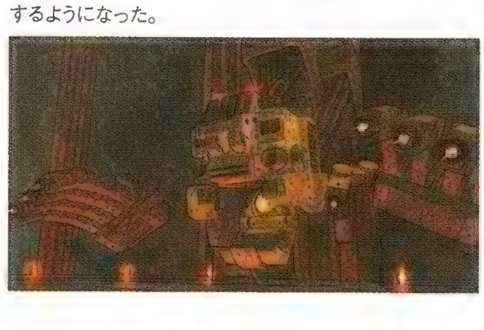
【1】→P.034／【2】→P.114

セバスチャン
せばすちゃん　◎キャラクター

【N】南平原の先にある洋館で、エミールの面倒を見ている執事。その正体は、デボルやポポルと同じくレプリカントの監視者であり、アンドロイドである。主であるエミールからは柔軟性に欠けると言われるほど、実直ながらもぶっきらぼう。「石の目」の治療法を求めて「名だたる勇者」と評するニーアたちに手紙を送るも、それを読んだヨナが理解せぬまま手紙を返し、不毛なやりとりが続いていた。やがて館を訪れたニーアたちに、主の「石の目」の治療法を捜してほしいと懇願する。発見した石化解除の方法は暗号化されていたが「どんなに時間をかけてもこの私めが解読します」と約束する。

ゼペット
ぜぺっと　◎キャラクター

【N】ロボット山の奥でニーアが戦う巨大な防衛システム。かつてはロボット山の軍事工場で製作された武器や、各種ロボットたちの耐久実験を行う、極めて実験的なシステムだった。長い年月を経て狂いが生じ、侵入者を発見すると、たとえそれがゲシュタルトやレプリカントであってもただちにシステムが作動して、耐久実験を開始するようになった。



【た】

大神殿
だいしんでん　◎場所

【2】神官長の宮城であり、巨大な寺院。そのきらびやかかつ清楚な外観は、平和の象徴とされている。封印騎士団の本拠地でもあるため、日夜戦闘準備が行われている。内部は複雑に入り組んでおり、最上階には神官長の部屋、地下には牢獄などがある。

対魔法用特殊甲冑
たいまほうようとくしゅかっちゅう　◎用語

【1】帝国軍が開発した甲冑。魔法儀礼を施したエルフの生き血を金属に塗り込めることで、魔術とドラゴンの吐く灼熱の炎への耐性を持たせている。帝国軍は、永世中立地帯であるエルフの里を襲撃した際、エルフの血を得てこの甲冑を生産した。

多元世界説
たげんせかいせつ　◎用語

【N】「6.12」での竜の死骸の研究により実証された、この世界とは次元を異にして存在する世界のこと。

黄昏の丘
たそがれのおか　◎場所

【2】天時の直轄区がある地。そそり立つ山岳地帯の厳しさは人々を近づけさせない雰囲気を醸している。この地域には塔の村と呼ばれる村があるというが、人はあまり訪れない。

ちいさい勇者さま
ちいさいゆうしゃさま　◎用語

【1】古くから人々のあいだで語り継がれている神話のひとつ。「昔々、あるところにひとりの勇敢な兵士がおりました。兵士は時の滴を飲み干し、世界の穴で眠っておりました。ずっと、ずっと、若くて強い、そのままの姿で……」。セエレは、寝るまえに母からこの話を聞くのが大好きだった。そして、無意識のレベルまで刷り込まれたこの話こそが、セエレがゴーレムと契約する際の代償を決定づけた。

血の記憶
ちのきおく　◎用語

【2】ドラゴンたちに受け継がれ、彼らを駆り立てている太古の神竜族の記憶。神を殺し、自分たちが神の座に再び就き、自分たちの手で世界を支配するという内容。もしこれが実現すれば、人間が封印で何とか出来るような世界ではなくなると予想される。

中級騎士
ちゅうきゅうきし　◎用語

【2】封印騎士団の兵士で、主力な戦力。一般兵士、弓兵、遊撃兵などがおもにこのクラスに属している。

直轄区
ちょっかつく　◎場所

【2】「鍵」を祀って守護する場所で、明命、気炎、神水、宝光、天時の5ヵ所がある。これらの場所は封印騎士団によって管理され、一般の者が侵入することは禁じられている。なお、各直轄区には連隊長が常駐し、管理を任されている。

月の沙漠
つきのさばく　◎場所

【1】世界に3つ存在する「おおいなる時間」を守る封印のひとつである砂漠の神殿がある地。岩山と岩山のあいだの広大な大地がすべて砂漠となっており、砂漠の神殿以外の建造物はほとんど存在しない。

月の涙
つきのなみだ　◎用語

【N】カイネの好きな花の名前。「見つけられたら、100年に一度の幸運を手に入れたも同然」と言われるほど幻とされる花で、白い小さな花びらが重なって袋状になっている。かつては石の神殿に咲いていたと聞いたヨナは、見つければお金持ちになれて自身の病を治す薬が買えると思い込み、単身石の神殿へ探しに行ってしまう。



帝国
ていこく　◎用語

【1】この呼称は連合軍から与えられたものであり、自称はない。その実態は「司教」と呼ばれる指導者（＝マナ）によって統率される軍隊そのものである。領土を目的としていないため領土は持たない。帝国都市（帝都）と呼ばれる場所は、最初に帝国が滅ぼした国の首都であり、連合はそこが帝国の本拠地だと思っている。

帝国軍
ていこくぐん　◎用語

【1】帝国を構成する者たちの総称で、その全員が「天使の教会」の信者である。初めは注意するに値しないほどの少数勢力であったが、モンスターと手を結んで以来、短期間のうちに人数、強さともに著しい伸びを見せ、連合軍を脅かす存在となった。赤い目を光らせながら、一糸乱れぬ隊列で無言のまま迫ってくる姿は、不気味であり残虐かつ冷淡である。

帝国軍軍旗
ていこくぐんぐんき　◎用語

【1】帝国軍の掲げる旗。モチーフは三つ目の双子と翼だが、「天使の教会」の教義にあるように天使については描写が禁じられている。そのため、そこに描かれているのは司教を模した図案である。旗の布は、生贄に捧げられた処女の血に14日間浸すことで染め抜かれている。



帝国軍護衛部隊
ていこくぐんごえいぶたい　◎用語

【1】帝国軍屈指の精鋭部隊。邪悪な魔術により、極限まで身体能力が高められている。

帝国都市
ていこくとし　◎場所

【1】帝国軍が世界を滅ぼす戦いを始めた最初の場所であり、帝国軍がいちばん最初に滅ぼした都市。もともと帝国の拠点だったわけではないが、余所から見るとこの都市から帝国軍が侵攻してくるように見える。そのため、帝国都市、もしくは略称の帝都と呼ばれるようになった。

デボル
でぼる　◎キャラクター

【N】→P.186

テュラン
てゅらん　◎キャラクター

【N】→P.181

天使の教会
てんしのきょうかい　◎用語

【1】帝国の全構成員が信奉する謎の宗教の呼称。初めは小さな無名の集団であったが、何者かの強大な力により信仰が武力を持ち、権力を持ち、帝国を操るまでの勢力に至った。その目的・行動などの詳細は謎だが、封印を解き放ち、「再生の卵」を発生させようとしている、と伝えられる。信仰者はウイルス性の伝染病にかかっており、感染した人間やモンスターは目が赤くなるほか、言語機能不全を引き起こす場合や声が変質するケースも確認されている。感染経路、潜伏期間は不明。感染すると常人よりも遥かに強い力を手にすることが出来る。

天使の教会の宮殿
てんしのきょうかいのきゅうでん　◎場所

【1】今は朽ち果て、廃墟になった宮殿。すべてはこの場所で「天使の教会」が生まれたことから始まる。始めは小さな無名の教団であったが、何者かの強大な力により信仰が武力を持ち、権力を持ち、帝国を操るまでの勢力に至る。

天使の教会の教義
てんしのきょうかいのきょうぎ　◎用語

【1】天使を語ってはならない。天使を描いてはならない。天使を書いてはならない。天使を彫ってはならない。天使を歌ってはならない。天使の名を呼んではならない。なお、いっさいの解釈、記録、口承を禁じられている。

天時の直轄区
てんじのちょっかつく　◎場所

【2】ジスモアが守護する直轄区で、「鍵」のひとつである聖砂漏を祀った場所。直轄区のなかでもっとも警備が厳重で、上空は強力な砲台、地上は騎士団精鋭部隊が待ち構えている。また、直轄区の本陣・天時塔へたどり着くには巨大な門、砦を護る軍勢と対峙しなければならない。

天時塔
てんじとう　◎場所

【2】天時の「鍵」を祀るために造られた塔。複雑な内部構造を持ち、そこには天時塔内部を守護する騎士団精鋭部隊や、時の流れを狂わせる仕掛けがあり、部外者の侵入を簡単には許さない。らせん階段を上った最上階には、聖なる砂時計・聖砂漏がある。

塔の村
とうのむら　◎場所

【2】黄昏の丘にある村。訪れる人も少なく、天時塔がある以外はこれといって何もない。

図書館
としょかん　◎場所

【N】ニーアの村を見下ろす小高い丘の上にある図書館で、ポポルが館長を務めている。旧世界の遺物として知られており、村のランドマーク的な存在で、村人たちの自慢でもある。内壁全体を利用した書架や、ふだんは開かれていない地下へ続く大扉、どこかで見たことのあるマモノや物のレプリカが増えていく部屋など謎も多い。

閉じられた地
とじられたち　◎場所

【2】気炎の直轄区からほど近い未開の原野。切り立った岩壁やうっそうと茂った木々が、人々の侵入を拒んでいる。しかし、人が近づかないため絶好の隠れ場所とも言える。

ドラゴン
どらごん　◎用語

【1】別名「神の遣い」とも呼ばれる、地球上で最強の生物。ドラゴンの生命力やパワーは圧倒的で、体は己の意思と環境や経験に応じ、日々進化していく。かつて幾度となくあった生存競争にも負けたことがなく、ほかのモ

ンスターたちは本能的な畏怖からドラゴンには逆らわない。種類はレッドドラゴンやブラックドラゴン、エンシェントドラゴン、亜種のワイバーンなどさまざまだが、誇り高くほかのモンスターとの交流はほとんどない。なお、「レッドドラゴン」「ブラックドラゴン」といった名称は、あくまで人間側が分類のためにつけたものであり、ドラゴン側から見れば正確な種族名ではない。／【2】この地球上に優良種を生き延びさせていく「神の計画」の番人の役割を担う存在。故に「神の失敗作」とされる人間に対しては基本的に冷たい。

【な】

嘆きの水脈
なげきのすいみゃく　◎場所

【2】神水の直轄区がある地。元は水に恵まれた豊かな土地だったが、近くにある砂の村では作物も耕せなくなり困窮している。

名もなき存在
なもなきそんざい　◎用語

【2】世界がまだ「おおいなる時間」でつなぎ止められていなかった時代、精霊であった天使のこと。

難破船マモノ事件
なんぱせんまものじけん　◎用語

【N】海岸の街の砂浜に大型船が難破した事件。現場にはマモノが出現し、半数近くの街の人が食われてしまう。その後、船は台風で流されたが、黒文病が蔓延し、街の活気は低下。警備は厳重になったが、貿易には支障が出てしまった。

ニーア
にーあ　◎キャラクター

【N】→P.172／P.176

ニーアの村
にーあのむら　◎場所

【N】ニーアとヨナの兄妹が暮らしている村。小高い丘の上にある図書館や、村の中央付近にある噴水広場、いつ訪れても賑やかな商店街などがある。村と外界とをつなぐ出入り口は3ヵ所にあり、それぞれ北平原、東街道、南平原に出ることが出来る。

ノウェ
のうぇ　◎キャラクター

【2】→P.096

ノーム
のーむ　◎キャラクター

【2】宝光の直轄区の連隊長・ヤハの契約対象。子供のように小さいながら、自分の身の丈ほどもある巨大なハンマーを持っている。地中に潜り、突然現れて敵を襲う。複数で出現するが、巨大な石の巨人を召還して攻撃してくることもある。

【は】

ハープ
はーぷ　◎一般名詞

【1】竪琴とも呼ばれる弦楽器の一種。イウヴァルトが命のつぎに大事にしていて、どこへ行く時も、たとえそれが戦場であったとしても肌身離さず持っていた。

ハーメルン機関
はーめるんきかん　◎用語

【N】身体能力の高い若者を発掘し、白塩化症候群の発症を予防する薬・ルシフェラーゼを投与したのち、幼い頃から戦闘訓練を施して「対レギオン戦のスペシャリスト」へと育てることを目的とした国際組織。2016年12月に発足。ゲシュタルト計画を推進する世界浄化機関ともども国連の関連組織ではあるが、複数の巨大企業が出資しているなどその背景には謎が多い。設立直後は存在自体を機密事項とされていたが、対レギオン戦線の拡大とともにその存在が明るみに出ていった。

白塩化症候群
はくえんかしょうこうぐん　◎用語

【N】2003年12月、赤い竜と巨人が出現した事件「6.12」の約半年後に発症が確認された奇病。竜の死体から検出された「魔素」と呼ばれる粒子を吸引することで発症する（のちにこの粒子は、崩壊して消失した巨人の粒子が竜の体に付着したものだったと判明）。感染者の皮膚は白く塩化し、数日～数週間ののちに死へと至る。当初は特定の条件下でしか発病しない極めて希な病と考えられ、楽観視されていた。しかし翌年2月には感染者が拡大。4月には死を免れるものの、凶暴性・残虐性が極度に肥大する感染者が出現。レギオンと呼ばれる彼らは東京・新宿に集まり、病に感染していない人間を襲い始めた。その結果、新宿が空洞化し、日本は世界各国から病気の究明を迫られることとなる。5月には新宿での感染者がますます増大し、6月にはこの病を「白塩化症候群」と命名。7月には新宿区の危機レベルが最高の4に達し、交通機関の停止や、道路の簡易封鎖を余儀なくされた。種の存亡が危うくなった人類は、この病の根絶と、レギオンの殲滅を余儀なくされる。なお、魔素が人間と接触したとき、実は異世界の神との強制的な契約（呪いのようなもの）が執行される仕組みとなっている。「神の下僕となって、神の意に沿わぬ世界を滅ぼせ、拒否するならば死を」という内容で、これを否定すると白塩化して死に至り、受け入れれば神の下僕・レギオンと化すことになる。

果ての僻村
はてのへきそん　◎用語

【2】聖地地域にある村で、殉教者を補充するために特別に作られた。

ハルア
はるあ　◎キャラクター

【N】可憐な美少女で、エミールの双子の姉。本好きの少女で、弟をよくかわいがっていた。のちに国立兵器研究所にて、対レギオン兵器「実験兵器6号」に改造されてしまう。



ハンス
はんす　◎キャラクター

【N】海岸の街にいる仕事にまじめな郵便配達員。灯台で寝起きしている老婆・アースラのことを心配しているが、その件については誰からも理解を得ようとしていない。アースラの夫はすでに他界していたが、本人にはそれを伝えることができず、夫のふりをして手紙を書いては本人に渡し続けていた。それが本当に正しいことなのかどうかは、ハンス自身もわかっていない。このいびつな偽善的行動は彼の父親の代からの習慣であり、自分の意思でやめることはもうできなくなっていた。事実を告げないままにアースラが死んだことに、安堵と悔恨が入り混じった複雑な感情を抱いている。

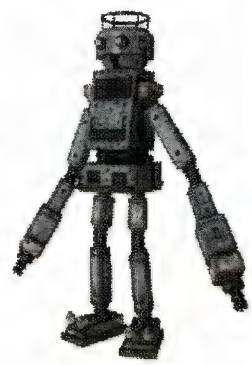


ハンチ
はんち　◎キャラクター

【2】→P.108

P33
ぴー さんじゅうさん　◎キャラクター

【N】任務に忠実に働いてきた、ロボット山の拠点防衛型ロボット。警備を担当していたが、施設が衰退し防衛システムのゼペットを破壊され、何をすることが任務なのかわからなくなってしまっていた時に、偶然子供のゲシュタルト・クレオと出会った。彼からさまざまな物事を教わったり無邪気に慕われたりすることで、いつしかクレオを守り、いつかいっしょに外の世界を見に行くということが最優先事項となる。当然ながら子供の扱いには慣れていないが、不器用なりにクレオを傷つけないようにじっとしているなど、盲目的なまでに彼を大切にしている。



東海道
ひがしかいどう　◎場所

【N】ニーアの村の東門から伸びる道。途中でふた股に別れており、南東へ進むと砂漠へ、北東へ進むと石の神殿へ進むことができる。道中には野生の山羊や、とかげなどの動物たちが棲息している。

フィーア
ふぃーあ　◎キャラクター

【N】→P.188

封印
ふういん　◎用語

【1】「時間」、「空間」、「次元」を現世界の進行に合わせ、世界の秩序を正しく維持するために「おおいなる時間」をしかるべき場所につなぎ止めておくためのクサビ。「森の神殿」、「砂漠の神殿」、「海の神殿」の3ヵ所と「女神」と呼ばれるひとりの女性にこの機能が付与された。このなかでも「女神」は最終封印と呼ばれ、とくに重要な役割を担う。神殿の封印が破壊されて最終封印までもがすべて解かれてしまうと、無秩序な世界となり、すべてが無に帰すと古から言い伝えられている。

封印騎士団
ふういんきしだん　◎用語

【2】女神の封印を守護するために結成された騎士団。強大な軍事力を保持しており、国を超越した組織となっている。封印守護の目的のもと、事実上の世界統治を行っていると言っても過言ではない。母体は旧連合軍だが、前大戦直後、連合軍は軍事上崩壊しており、連合運の有志という言いかたが正しい。すべての権限は神官長にあり、騎士団長であってもその命令は絶対である。騎士団には大きく分けて直轄区を守護する5つの連隊（明命、気炎、神水、宝光、天時）、大神殿を守護する近衛連隊の6つの組織に大別される。各連隊には騎士部隊、弓兵部隊、遊撃兵部隊、魔術師部隊、護衛兵部隊、空挺部隊が配置され、また近衛連隊には各部隊のほかに神官長の直属魔術師部隊が配置され、神官長の身辺警護を行っている。基本的には各連隊のなかで部隊を組織し作戦行動を遂行するが、作戦内容によっては各連隊からの選抜による編成がされることも珍しくない。

封印されし言葉
ふういんされしことば　◎用語

【N】すべてのレプリカントにゲシュタルトを戻す「黒の書計画」において、黒の書、白の書と別に必要となるもの。ニーアにとっては、ヨナの病を治す鍵である。また、レギ

オンとの戦いを想定していたため、それ自体が攻撃魔法にもなっている。

封印の女神
ふういんのめがみ　◎用語

【1】【2】「女神」の項を参照。

封印の森
ふういんのもり　◎場所

【1】フェアリー族が住む森。フェアリーたちは森に身を潜めているため、その姿を見せることは希である。場所的に女神の城を攻めやすいということからか、帝国軍の重要拠点となっている。そのため、兵士たちが身を置く駐屯所が建設されている。この駐屯所には一般兵のほか、まだ成人に満たない少年兵も多く常駐している。ただし少年兵たちも天使の教会の洗礼を受けており、その目は赤く染まっている。

封印襲撃事件
ふういんしゅうげきじけん　◎用語

【2】明命の直轄区で起こった襲撃事件のこと。当時の神官長であるヴェルドレや騎士団長だったオローラが、隻眼の男・カイムに惨殺された。

封印の書
ふういんのしょ　◎用語

【N】多元世界の技術により、本のような器にゲシュタルトを組み込んだもの。世界浄化機関が中心となって推進したゲシュタルト計画に必要不可欠なものとして、白の書、黒の書をはじめとする13冊が作られた。

フェアリー
ふぇありー　◎キャラクター

【1】→P.030

フック
ふっく　◎キャラクター

【N】崖の村で戦うことになるマモノ。カイネの祖母・カーリーを惨殺した相手で、カイネが心の底から殺したいと願う復讐の対象。何体ものゲシュタルトが集まって生まれた個体で、そのエゴが肥大したためにレプリカントを惨殺したり、他人の記憶を土足で踏みにじるような残忍な行為に悦楽を覚えるようになった。ひとつの固体としての意識は崩壊していることから、すでに暴走状態と言っても過言ではない。



付与魔術師
ふよまじゅつし　◎用語

【1】帝国軍が持つ特殊部隊のひとつ。岩に呪文を貼り付けることにより、マッドゴーレムを生成する能力を持つ。

ブラックドラゴン
ぶらっくどらごん　◎キャラクター

【1】→P.026／【2】→P.099

フリアエ
ふりあえ　◎キャラクター

【1】→P.024

ブルー
ぶるー　◎キャラクター

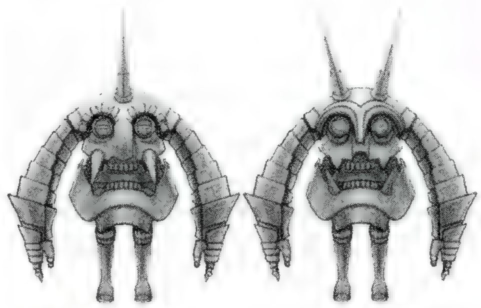
【N】ロボット山のふもとに、ふたりの息子であるジミニー、ギデオンとともに住んでいた女性。暴力的だった夫の元から息子たちを連れて逃げ出したが、一向に楽にならない暮らしに嫌気が差し、息子たちに暴力を振るうようになってしまう。子育てや仕事、料理などもろくにしなかったので、生活は長男のジミニーが支えていた。ある日、自分に言い寄る若い男・カルロと知り合ったことで、子供たちを捨ててロボット山を越えて逃亡しようと画策。しかし、ロボット山の奥で防衛システムにより無惨にも殺されてしまう。

ブレスレット
ぶれすれっと　◎一般名詞

【1】手首に巻き付けるアクセサリー。王族である証で、カイムとフリアエは同様のものを所有している。国を失ったいまは何の意味もなさないが、カイムは復讐を忘れないため、フリアエは兄との絆を忘れないためつねに身につけている。

ヘンゼル&グレーテル
へんぜる あんど ぐれーてる　◎キャラクター

【N】石の神殿で白の書を守護している、2体ひと組のマモノ。お互いを深く信頼しており、自尊心を高め合って白の書を守る日々を誇りとしていた。ある日、ヘンゼルがニーアに撃破されて死亡。これにより、グレーテルは狂乱状態に陥ってしまい、長く心を喪失したような状態が続く。だが、かつてはプライドの高さからの蔑みの対象でしかなかった小さなマモノたちのやさしさに触れ、傲慢だった自分たちをいつしか恥じるようになっていく。最終的には小さなマモノたちを仲間だと認め、こんどは彼らを守るために強くなることを願う。しかし、魔王の城への手がかりを求めるニーアによって、守るべき小さなマモノたちとともに倒されてしまう。



崩壊体
ほうかいたい　◎用語

【N】ゲシュタルト化して一定時間が経過した時に、7割以上の確率で発生する「自我を失い凶暴化・暴走してしまう個体」のこと。こうなったゲシュタルトはレプリカントとの統合にも失敗するようになり、レギオンと同様に人を襲うようになる。さらに一定時間経過後、確実に死に至る。なお、一度崩壊体になりかけた個体の治療は、当時の医療では不可能であった。解析の結果、自我を安定させるには、ゲシュタルト化してなお安定するオリジナル・ゲシュタルトの魔素を取り込み続ける必要があることが判明。世界浄化機関は、自我を保ったままゲシュタルト化に成功したニーアの魔素を欲し、提供するように呼びかけた。しかしのちに、ニーアの魔素を取り込み続けてきたゲシュタルトたちも崩壊体化を始めるという想定外のエラーが発生。デボルとポポルは、そのエラーをニーアの思想の変化により発生したものと推測して「黒の書計画」の発動を早めた。しかし一説によると、このエラーは「レプリカントこそが世界を統治すべき」と考えていたゲシュタルト計画の担当プログラマーによる作為的ミスだったようだ。

宝光の直轄区
ほうこうのちょっかつく　◎場所

【2】ヤハが守護する、宝光の「鍵」が祀られている地。元は鉱山のあった丘陵地帯で、広がる丘陵は見通しがよく、その奥には光城郭がそびえ立っている。なお、ここでは帝国軍が使用していた生物兵器の運用実験も行われているらしい。

骨の棺
ほねのひつぎ　◎用語

【2】再生の卵のことであり、神が産み落とした「生物を進化させる装置」。生物が再生の卵に入ると、劇的に進化した生物が誕生する。18年前、世界崩壊の危機が訪れる前までは、封印が解かれると世界に発生する「世界の破滅から人間を護る装置」と言われていた。

ポポル
ぽぽる　◎キャラクター

【N】→P.186

【ま】

魔王
まおう　◎キャラクター

【N】→P.189

魔王の城
まおうのしろ　◎場所

【N】魔王の城の鍵を5つすべて揃えた者が行ける、魔王の住処で、その入り口は石の神殿の最奥部にある。喋る小鳥が投げかける合言葉に答えないと「主たるヒト」とは見なされず、立ち入ることができない。ニーアたちはここでデボル、ポポルと対峙し、彼女らが魂なき者の監視者・アンドロイドであったことを知る。



魔王の城の鍵
まおうのしろのかぎ　◎用語

【N】石の神殿にある魔王の城への入り口を開けるために必要な鍵。機械の理、石の守護神、忠誠のケルベロス、記憶する樹、贄の5つに別れていて、これらをすべて組み合わせると五角形になり、機能を発揮する。

魔剣
まけん　◎用語

【1】さまざまな経緯を経て魔力を持つに至った剣。その攻撃力の反面、使用者に多大なる肉体的・精神的な負荷をかけるため、事実上契約者にしか使うことができない。斬り殺した人間の血を吸い、成長するという特性を持つ。その煌めきは多くの人間の理性を奪うと言われている。

魔素
まそ　◎用語

【N】「6.12」において、スカーフェイス機に撃墜された竜の亡骸から検出された、消失した巨人が粒子化したもの。これを吸引することにより、白塩化症候群を発病してしまう。なお、人間の魂を魔法によって抽出するゲシュタルト化にも必要な存在である。

マナ
まな　◎キャラクター

【1】→P.036／【2】→P.100

魔法
まほう　◎用語

【1】呪文を使用して得られる効果のなかで実際に攻撃や治癒など戦闘に有用なものの総称。魔術と同義。その攻撃力・治癒力は大きいが、使用する者に大きな負荷をかけるため、基本的には禁じられている。魔法の負荷に耐えうる身体になるため、常用する者はみずからの肉体を改造している者が多い。また、一部の魔剣などに

も魔法が封印されているが、契約者などの強化された人間以外に使いこなすことは難しい。魔法はその呼称に意味があり、構成される言葉からその効果が決定される。効果は以下のとおり。
その場で広がる……eye　地面から突き上がる……fang　周囲を回転する……horn　周囲を回転しながら広がる……feeler　治癒する……fruits　追尾する……voice　直線的に放出する……wing　能力を高める……breath　上から降りかかる……claw　配置される……blood　弧を描く……nail
／【N】魔素を通じ、多元世界からエネルギーを搾取することで確立された、無より有を生み出す技術。ただし使用できるのは、竜の培養組織を有したことで、多元世界を分ける壁を越える力を得たゲシュタルトのみである。

マモノ
まもの　◎用語
【N】ゲシュタルト化した人間。世界の浄化を受けて覚醒したレプリカントたちによる呼称で、己の肉体を奪う存在として敵視した。その姿はまるで影のようだが、斬れば獣と同じ手応えがあり、赤い血を流す。ただし倒したあとに死骸は残らず、黒い霧となって形を失う。また、太陽の光を苦手とする。

マモノ憑き
まものつき　◎用語
【N】体の一部をマモノ（ゲシュタルト）に侵食された人間（レプリカント）のことで、カイネもこの症状である。マモノ憑きとなった者は絶大な力と溢れんばかりの魔力が手に入るが、他人から侮蔑と嫌悪の目で見られ忌み嫌われる。

ミッドガルド
みっどがるど　◎場所
【1】『ドラッグ オン ドラグーン』の舞台となっている世界。森、山脈、海、砂漠と大自然に富み、人間、妖精、亜人といったさまざまな種族が暮らしている。

南平原
みなみへいげん　◎場所
【N】ニーアの村から海岸の街までを結ぶ、緑豊かな地域。周囲が岩壁に囲まれており、その岩肌の所々はコケに包まれている。また、海岸の街の手前にある脇道を入ると、行き止まりにはひっそりとエミールの住む洋館が建っている。なお、この地域には鹿やイノシシといった野生動物も棲息している。

見習い兵士
みならいへいし　◎用語
【2】封印騎士団における、見習い期間中の騎士のこと。騎士団では14～16歳くらいの年齢から見習いとして入団し、訓練を受ける。そして認められた者が正騎士として正式に配属されることになる。なお、見習い期間中でも見所のある者は、戦場に駆り出され実地教育されることもある。

明命窟
みょうめいくつ　◎用語
【2】明命の直轄区の奥にある洞窟。この洞窟の最深部に、「鍵」である聖花がある。内部には数々の仕掛けがあり、最深部へ行くには「命の部屋」でユーリック以外の誰か、亡霊、小鬼の命をそれぞれ捧げなければ扉が開かない。

明命の直轄区
みょうめいのちょっかつく　◎場所
【2】ユーリックが守護する、明命の「鍵」が祀られている場所。本来は緑豊かな地であるが、明命窟の奥より流れ出る気は周囲を不毛に変えている。

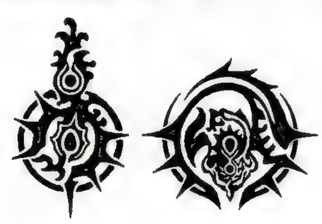
無明の渓谷
むみょうのけいこく　◎場所
【2】ヤハが守護する、宝光の直轄区がある地。同地域には、錆の町と呼ばれる大きな町がある。しかし、賞金稼ぎや騎士団などがうろついており、治安はよくないという。

女神
めがみ　◎用語
【1】【2】「おおいなる時間」を現世界の正しい時間につなぎ止めている「最終封印」と呼ばれる存在。あらゆる時代にただひとりだけが存在し、前の女神が死んだ時にオシルシが現れた者が、有無を言わせずつぎの女神と認定される。その運命は絶対であり、一度認定されると女神個人のいかなる事情、望みがあろうと普通の生活には戻れず、つねに幽閉状態とされ、世間とは隔絶されて過ごす。オシルシの負荷により女神は揃って短命であり、子を産むことも許されない。女神の姿を見たり、会話を交わすことを許されているのも、神官長ただひとりだけである。なお、最終封印を解除するには、女神の死が必要となる。その死因が他殺・自然死の場合、オシルシは即座につぎの女神に転移するため実質的に封印は解除されない。女神みずからが命を絶った場合のみ封印が解除されるため、再度封印するために「つぎの女神」になりうる存在を探し出す必要がある。なお、神官長は緊急措置として任意に女神を指定することもできる。神官長によってはつぎの女神候補を探し出すよりも早いという考えのもと、女神に自殺を強制することもあった。基本的に、女神になるのは人間の女性だが、竜を女神とした実例もある。そのことから、封印の負担に耐えられれば、どんな生物にも女神になる資格があるのかもしれない。

女神の城
めがみのしろ　◎場所
【1】連合軍の最重要拠点であり、女神・フリアエが住む城。城の周囲には乾いた大地、東側には山脈地帯が広がっている。城自体は実に堅牢な造りで、深い堀と高い城壁に囲まれている。城内部は迷路のように複雑で、これは女神を狙う侵入者がやって来た際に足止めするためのものである。このように防犯面には優れた城だったが、帝国軍の侵入は止められなかった。／【2】元連合軍の砦であり、かつてアンヘルとカイムが出逢った場所。18年前に連合軍が女神・フリアエをかくまった場所でもある。現在、封印騎士団によって管理されている。内部は放置され荒れ果てているが、中庭だけは騎士団員を常駐させ、つねに警備を行っている。また、中庭には5本のクサビが打ち込まれている。

森の神殿
もりのしんでん　◎場所
【1】封印の森の奥深くにある、生命を育む「空気」を祀った神殿。世界に3つしかない存在しない封印のひとつで、フェアリーたちによって守られている。

紋章
もんしょう　◎用語
【1】【2】契約者の身体に刻まれる印で、基本的には契約の代償として失った部分に現れる。形状や大きさは契約モンスターによって異なり、烙印のようにも見える。紋章が人の目に触れる部位に出現した場合、みずからが契約者であることを周囲に向けて強烈に示すこととなる。



モンスター
もんすたー　◎用語
【1】【2】異形の生物たちの総称。岩の外観である屈強なゴーレム、ひとつ目のサイクロプス、砂漠の大食漢サンドワームなどがその代表だ。もともと人間とモンスターのあいだでお互いに憎しみを抱くことは希で、生存のため以外に殺生が行われることも少なかった。しかし「憎しみ」という人間固有の感情が周囲のモンスターらに波及効果をもたらし、徐々に敵対するようになった。現在では人間の配下となったオークがほかの人間を襲うことも珍しくないし、自分の力を誇示するためにドラゴンを殺そうとする人間に対し、反撃するドラゴンもいる。

【や】

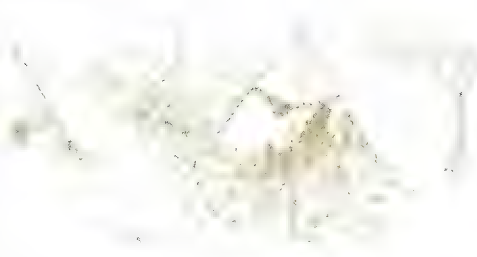
野営キャンプ地
やえいきゃんぷち　◎場所
【1】カイムたちがエルフの里に向かう途中に設営した場所。女神を守るための兵と、それを賄うための設備を含め15人の兵と6棟のテントからなる。6棟のテントのうち、3棟が居住用で残り3棟が武器資材保管用。清廉を旨とする女神は、居住用の1棟を占有している。ただ「夜になると決まった時間にイウヴァルトが女神のテントを訪れていた」との目撃談もある。

約束の地
やくそくのち　◎場所
【2】遙か昔に神が降臨したと伝えられている地。その場所は、5つの直轄区に囲まれた中心に位置する「禁断の山脈」の巨大な火山口にあり、ヴェルドレが発見したのち極秘裏に管理されていた。その異名はさまざまで、次元の特異点、時空のへその緒、神の力のアクセスポイントなどとも呼ばれる。なお、その場所の在処は神官長とごくわずかの側近たちだけしか知らない。

ヤハ
やは　◎キャラクター
【2】→P.110

遊撃兵
ゆうげきへい　◎用語
【2】正式な騎士団員ではなく、地方から駆り出された農民や、退役した兵士、傭兵を含む寄せ集めの部隊。装備も安価なものや、自前で賄っている。正式な訓練を受けているわけではない者が多く、基本的に戦闘力は低い。前線に駆り出されることが多く、騎士団からも消耗品のような扱いを受けている。

雪の荒野
ゆきのこうや　◎場所
【1】険しい岩石地帯と、雪の降り積もる荒野で構成された不思議な大地。雪の降る荒野は岩石地帯に囲まれた辺境地で「石の隠れ里」と呼ばれ、少数の里人たちが暮らしている。石の隠れ里から東にある山脈地帯は、氷河による浸食からまるで迷路のような複雑な地形をしており、一度足を踏み入れた者はなかなか戻ってくることができない。また、ここにはゴーレムと呼ばれる、肉体が岩と土によって出来たモンスターが住んでいると言われている。



ユーリック
ゆーりっく　◎キャラクター
【2】→P.104

洋館
ようかん　◎場所
【N】館の主であるエミールが、世話係である執事のセバスチャンといっしょに住んでいる屋敷。一見ただの洋館だが、じつは国立兵器研究所の地上偽装施設である。南平原の片隅に建っていて、端からはまるで幽霊屋敷のように見える。内部ではソファで寝ていたカイネが消えたのを皮切りに、恐ろしい姿に変わっていく壁の肖像

画や、血のような水が出る蛇口など、奇怪な事象がいくつも起こる。なお、館の最奥部には、封印の書の1冊である深紅の書が眠っている。



妖精王
ようせいおう　◎キャラクター

【1】フェアリーたちの長。たっぷりとした髭をたくわえ、王の名にふさわしい威厳と風格を兼ね備えている。その口からつぎつぎと吐き出される言葉も巧みで、さすがは口の悪さで悪名の高いフェアリーたちの長といったところ。ただし封印の森を根城にしているだけのことはあり、自然に対する畏敬の念は強いようだ。

妖精の谷
ようせいのたに　◎場所

【1】フェアリーたちが棲んでいる封印の森にある谷。帝国軍によって襲われた。

ヨナ
よな　◎キャラクター

【N】→P.178

【ら】

竜族
りゅうぞく　◎用語

【2】神竜族の子孫であり、天使の遣いと成り果てた物質的な姿。たまに神竜族の時代の「血の記憶」を持ったまま生まれてくる者がいる。彼らは密かに使徒と呼ばれる。使徒と記憶のないドラゴンは対立しがちである。

竜の楼閣
りゅうのろうかく　◎場所

【2】古の墓標の内部にある構造物で、神竜族による未知の技術で建造された。内部構造は複雑で、深部へ進むには数々の試練を越えなければならない。そして、神竜族の思念に認められた者のみが、中枢である「神竜の間」へ入ることができ、「種の書」によるすべての記録を知ることができる。

ルシフェラーゼ
るしふぇらーぜ　◎用語

【N】白塩化症候群の発症を予防する薬品。若年層ほどその効果が高いとされ、のちに投薬された多くの若者が十字軍と呼ばれる対レギオン部隊に組み込まれるようになった。じつはこの薬品の効果で白塩化症候群の発症を完全に抑制することは不可能で、発症を遅らせるだけのものでしかない。しかし国連や実務組織であるハーメルン機関は、その事実を隠蔽していた。

レオナール
れおなーる　◎キャラクター

【1】→P.030

レギオン
れぎおん　◎用語

【N】白塩化症候群に感染するも、死を免れて凶暴性と残虐性を増した者。病の影響で表皮は白く塩化し、知能も低下しているが身体能力は向上。未感染の人間を襲うようになった。もはや人間ではなく元人間である彼らに襲われた者は、白塩化症候群の感染者となるか、新たなレギオンと化す。こうして病の感染者を増やし続け、世界を崩壊へ導くことがレギオンの存在意義と推測される。なお、症状が進んだ者は外見が人型から逸脱し始め、場合によっては非常に巨大な個体となる者もいる。感染者がレギオンになるか否かは、のちの研究によって「遺伝子レベルで決定される(一部染色体に軽度の異常を持っている者がレギオン化する可能性が高い)」という結果が日本政府に提出された。しかし、これは発表されず、研究結果はデータの捏造による誤りだとのちに判明した。

レグナ
れぐな　◎キャラクター

【2】→P.099

レッドアイ
れっどあい　◎用語

【N】魔素による汚染度が高く、知性を残したままレギオン化した一部のレギオンのことで、最初の個体は2008年2月に目撃された。意思のないほかのレギオンたちを統制し、組織化することで、未感染の人間を効率的に襲撃していった。彼らは真紅の瞳を有することからこう呼ばれるようになり、畏怖の対象とされた。なお、レッドアイ化する者は、それだけ異世界の神からの干渉度が高く、世界の滅亡を望む神との契約に前向きな性格であるとされる。

レッドドラゴン
れっどどらごん　◎キャラクター

【1】→P.023　【2】→P.119

レプリカント
れぷりかんと　◎用語

【N】ゲシュタルト化して抜け殻となった人間の肉体から採取したデータを元に生成する、その人間とまったく同じ機能を持つ器のこと。ただし生殖能力は持たず、肉体を再生するにはゲシュタルトのデータのコピーを必要とする。また、ゲシュタルトがこのレプリカントに入ると、元の人間に戻れる。当初、レプリカントを管理するために魔法によって植え付けられた疑似人格に主体的な意思はなかったが、「死亡してはゲシュタルトのデータを引き出し、再び復活する」という輪廻の輪の中で、2764年を皮切りに突如自我らしきものが発生し始める。最初は未発達で不完全とも言える程度意思だったが、急速に発達し人間並の知恵を持つようになった。その後、3000年前後にはほとんどのレプリカントが意思を獲得し、元であるゲシュタルトの人格は関係なく、環境の影響を受けて成長していった。

レプリカントシステム
れぷりかんとしすてむ　◎用語

【N】世界中の人間をゲシュタルト化してレプリカントを生成し、白塩化症候群とレギオンが駆逐される世界がやってくるまで魂を保管し続けることを目的に、それを半永久的にくり返し続けるシステムのこと。専用のアンドロイドが監視者としてその成り行きを見張っている。

6.12
ろくてんいちに　◎用語

【N】2003年6月12日、東京・新宿で起きた事件。死者は56名、重軽傷者数は320名、被害による経済的損失事件600億円以上。赤い竜と質量を持たない巨人が突如現れたのち交戦し、巨人が崩壊。赤い竜は航空自衛隊 第6航空団 第303飛行隊のスカーフェイス機によって撃墜された。なお、竜の亡骸は政府により、秘密裏に研究施設へと移された。この不可解な事象に対し緘口令が敷かれるも、すぐにネットなどで情報が拡散。テロや他国の陰謀説まで浮上し、大混乱となった。事件の3ヵ月後の9月には日本、アメリカ、中国、ロシアが参加する首脳会議が開催。アメリカはこの事件をテロと認知し、仮想敵国への強硬姿勢を示した(日本政府は大幅な軍事費用拡大の考えを示唆)。そのさらに3ヵ月後の12月、東京・新宿区にて、白塩化症候群が発生した。

連合
れんごう　◎用語

【1】反帝国諸国連合の略称であり、。帝国に対する周辺諸国の連合組織。指導者は居ないが、最重要職である封印の管理は神官長のヴェルドレが行っている。

連合軍
れんごうぐん　◎用語

【1】連合が帝国に対するために組織した軍の総称。正式名称を「反帝国諸国連合軍」という。帝国がその力を示し始めて以降結成されたもので、各国が用意した正規軍と傭兵によって構成されている。カイムもここに属している。

連合軍軍旗
れんごうぐんぐんき　◎用語

【1】連合軍が掲げる、平和を象徴する青で染められた旗。図案化された「盾」は加護を、「剣」は力を、「雷」は勇気を示している。



ロック
ろっく　◎キャラクター

【N】砂漠に巣食う、狼の群れを統率するリーダー。群れの長としての高潔さと威厳を合わせ持ち、獣の狼たちを束ねている。1300年前、この狼のリーダーは犬だった。ある老人に飼われていた彼は老人の代わりにゲシュタルト化した。以来、老人に可愛がられていた頃の記憶から人型のレプリカントとは争わず、静かに暮らしていくことを望んでいる。しかし、実際にはそのレプリカントの手によって住む場所が奪われ、同胞が殺されていることも理解している。最終的には共存の道がないことを悟り、群れを率いてレプリカントとの争いに終止符を打つべく戦いへと赴いた。



ロボット山
ろぼっとやま　◎場所

【N】かつては軍事基地だった鉱山。その名残か、入り口付近には蒸気の噴き出す無数のパイプがあり、内部には数えきれないほどの防衛ロボットがパトロールを続けている。危険な場所だが、貴重な鉱石が採掘できることで知られている。奥にはゼペットと呼ばれる巨大な防衛施設があったが、ニーアによって破壊された。

【わ】

忘れ貝
わすれがい　◎一般名詞

【1】二枚貝が離れ離れになった一片のこと。また、この貝を拾うと恋を忘れられるとも言われている。万葉集「若の浦に　袖さへ濡れて　忘れ貝　拾へど妹は　忘らえなくに」(作者不詳)訳:若の浦で袖まで濡らして忘れ貝を拾うが、妻を忘れることが出来ない。

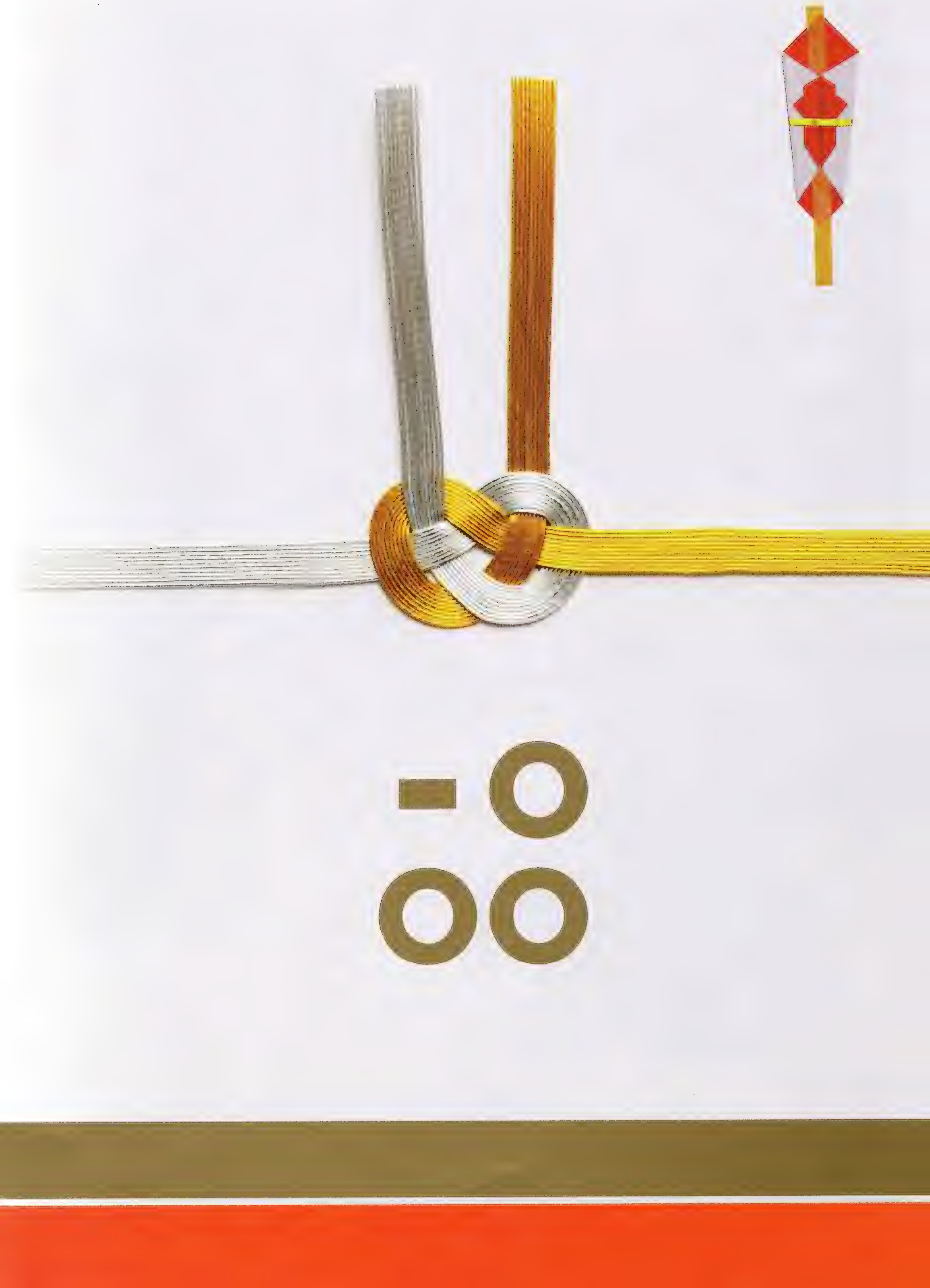
忘れられた遺跡
わすれられたいせき　◎場所

【2】ノウェの故郷で、彼は封印騎士団に発見されるまでここで育った。元は太古の竜族の遺跡だった場所らしく、かつて水城砦のなかった時代は水に恵まれた場所だった。ノウェの発見後、遺跡までの道は騎士団により塞がれたという。

十周年記念企画

10th Anniversary Special

2003年9月11日に発売された"プレイステーション 2"用ソフト『ドラッグ オン ドラグーン』は、2013年をもってシリーズ生誕10周年を迎えた。そして最新作である『ドラッグ オン ドラグーン3』も登場し、その世界はさらなる広がりを見せている。それを記念し、本書では6つの特別企画を掲載する。そこにあるのは虚構か？　それとも、現実か……？　『ドラッグ オン ドラグーン』ワールドの奥深さと、それを掲載することを許してしまう「公式」の懐の深さも感じ取っていただければ幸いである。





特別企画❶

緊急取材

「機械仕掛けの女神が、私に夢で語りかけたのだ……世界の安寧をより確かなものにすべく、時を渡り、誓いの酒を酌み交わせと」。
そんな神託を聞いたとか聞かなかったとかで、密かに儀式を執り行ったというヴェルドレ氏。2013年……豊かな繁栄を極める東京・新宿。
賑やかな街の片隅で、ひっそりと店を構える名店「居酒屋封印　東新宿店」に、その者たちは集うという。
これは筆記係として居酒屋に呼び出された、ある新聞記者による記録の一部である。

超時空キャラクター交流座談会 in 新宿

19:00

　呼び出された居酒屋へ時間通りに向かってみると、ちょうど取材対象の一団が個室に入ったばかりのところだった。店はこじんまりとしていてとても古く、大勢の客を迎え入れるようにはできていないと思われたのだが、中に入ってみてその印象は一変する。巨大な竜が、2匹もいた。どこにいたんだと説明を求められると困るのだが、とにかくいたものはいたのである。なんというか、奥のほうに。

　個室に入ると、まず宙に浮かんだ鶏ガラのような何かが、マフラーのような布きれをはためかせ、はしゃいでいるのが目についた（※登場人物が多いため、会話の記録には冒頭に名前を表記する）。

7号　わぁ!! ニーアさん、見てくださいよ。すっごく広くてキレイな個室です！ 人数も多いし、体が大きな方もいらっしゃるのでちょっと心配していたんですが、これなら大丈夫そうですね！
ヨナ　お兄ちゃん、見て！ すっごく大きなお部屋。四角いクッションもかわいいよー。ほら、裏返すと赤黒い絵の具でキレイな絵も描いてある。ヨナ、こういうのだーいすき！
ニーア　そうだね、ヨナ。ちょっと魔法陣のように見えなくもないが……気のせいだろう。今日はおいしいものをいっぱい食べさせてあげるからな。
ヨナ　うん！ ……ねぇ、お兄ちゃん。あの頭ツルツルの人はヨナと同じ病気なのかな？ 頭のところに、黒い模様が……気持ち悪いよ、お兄ちゃん。
カイネ　そんなことはどうでもいい。早く酒と肉をよこせと、あのハゲに言え、ニーア。とっととしなけりゃ、そこにいる赤い竜を○※×△して×■♪◆○○※×△で、黒い竜と一緒に×■♪◆○○※×△……。
ニーア　やめるんだ、カイネ。そちらの赤い竜はカイムさんの、あっちの黒い竜はノウェさんの大事な仲間だって、さっき説明されただろ
カイネ　ふん、知ったことか。
7号　…………僕も髪の毛がなくてツルツルなのに。

　手前の一団は、どことなく年若い者たちばかりのように見受けられた。露出度が高く、口の悪そうな美女の股間が妙に盛り上がっていることが気にかかるのだが、これはなかなか素面で尋ねることのできる問題ではないのでそっとしておこう。ニーアと呼ばれた青年が携えていた、印象的な装幀が施された白と黒の2冊の書物。それらはふわふわと宙に浮くと、少し離れたテーブルへと落ち着いたようだ。
　やがて、すべてのテーブルに飲み物と突き出しが行き渡った。今回の集まりの主催者であり、私を呼び寄せた張本人であるヴェルドレ氏からの挨拶が始まる。

ヴェルドレ　皆、よく集まってくれた。あなた方は皆、竜のもたらす因縁に連なる者……つらい出来事を多々経験し、幾度となく悲惨な人生の末路を見てこられたことだろう。しかし、今宵だけはそれを忘れて楽しんでいただきたい。では、ひとまず……乾杯。

　こうしてたくさんのグラスが合わさる音とともに、非常に奇妙な宴席が幕を開けた。私は軽くビールをたしなみながら、ヴェルドレ氏に言われたとおり、あちらこちらの席を回り、彼らの会話を記録することにした。

19:20

――こんばんは。少しだけ、こちらの席におじゃましてもよろしいですか？
カイム　…………。
アンヘル　構わぬぞ。
フリアエ　どうぞ。兄はちょっと言葉が話せないのですが、お気になさらず。
――そう……ですか。えーと、こうしてお見受けした限り、メンバーがひとり足りないように思うのですが。
フリアエ　イウヴァルトのことでしょうか？ 彼は乗れるドラゴンが見つからなかったみたいで、たぶん遅刻して来ると思います。
――ドラゴンが見つからない？
アンヘル　向こうのテーブルに竜のごとき瞳を持った若者が見えるだろう。黒き竜はいまやあの若者にうつつをぬかしておるでな、イウヴァルトはそっぽをむかれてしまったのよ。
――はぁ……なんだか複雑な事情がおありで……。
フリアエ　気になさらないでください。おかげで私も兄さんと、ふたりきりで……うふふ。
カイム　…………。
アンヘル　――少し酒のペースが早いのではないか、封印の女神よ。顔が赤い。こやつも心配しておるぞ。
フリアエ　いまは女神なんて呼ばないでっ！ 私は、いまはただの……兄さんの、妹の……そして、ひとりの女としての……。すみません、カクテルくださいっ、カシスブラッドオレンジをひとつっ。
アンヘル　やれやれ、女神であろうと王族であろうと、人というのは誰も等しく愚かしいことよ……。我は席を外そうぞ。
カイム　……！
アンヘル　……なぜ我の尾を掴む？
カイム　…………っ！
アンヘル　……そうか、貴様がそれを望むのならば、我はそれに従うまでよ。ともにあろうぞ。
フリアエ　兄さん……そんなにも、その竜のことが……！ やっぱり私よりもっ!!
――（え、なにこの気まずい三角関係のど真ん中みたいな空気……）あ、あのっ。みなさん東京には初めていらっしゃったんですよね？ どこか観光はなさったんですか？
フリアエ　観光？ ああ、それでしたら、ヴェルドレにお台場に連れていっていただきました。お台場の女神はなんだか気楽そうで……とてもうらやましかった。
――お台場！ いいですよね、お買い物とか楽しいですし！ あとはそうだなぁ、東京といったらスカイツリーとか、東京タワーが――。
カイム　!!
――うわぁぁぁっ！ と、突然、剣を振りかぶらないでもらえますか！ なんですか、私、何かまずいこと言いましたかっ？
アンヘル　おぬし、それは俗にNGワードと呼ばれるものだぞ。
フリアエ　兄の前で、その単語はちょっと……。
カイム　……っ！ ……!!
アンヘル　よせ。貴様がここでこの者を殺めても、我と貴様がともに尽きる運命には覆らぬ……。
フリアエ　やっぱりあなたたちは――!! ああっ、もう1杯くださいっ！ 酒が！ 尽きる！ ヴェルドレ!! 早く!!
ヴェルドレ　……女神よ、あなたの御心の傷はいかばかりか……すまぬが、ブラッディマリーをひとつ。
店員　かしこまりました！ それから、こちらお先にコースメニューの「ゆで卵盛り合わせ〜新宿の塩を添えて〜」になります。こちらの真っ白いお塩をかけてお召し上がり下さーい。

　テーブルにおいしそうな白いゆで卵の載った皿が饗されると、いきなりフリアエさんが目をギョロギョロさせ始めたではないか。私は何のホラー映画かと慌てて身を引いた。

フリアエ　あえっ……あえっ……！ す、すみません、ちょっと卵がたくさんあるのを見ると、アレルギーみたいなものがあって……ごほんっ、あえっ……！
――あああ、なんだか目玉がヤバい感じに。ではこのお料理は、別の方に食べていただきましょうね！

　私は銀杏の串を握りしめたまま泣き叫ぶフリアエさんをヴェルドレ氏に任せ、いかにもよく食べそうに見えた若者たちのテーブルへとゆで卵の皿を持って移動した。

――どうも。あのー、こちらのゆで卵、よかったら召し上がりませんか？
ニーア　それは……!!
ヨナ　お兄ちゃん!! 雪……白い雪みたいで……ヨナ、コワい、コワいよぉ。
ニーア　すまない、俺たちは……その、塩がちょっと苦手で。
――え、こちらは卵じゃなくて、塩がダメなんですか？
カイネ　構わん。こっちへよこせ。私が食う。
7号　もぉ〜、カイネさん。そんなに卵ばっかり食べてコレステロールとか大変になっちゃっても僕、知りませんからね！
カイネ　ふん。お前の尻にこの卵を片っ端から○※×△で、×■♪◆して○○※×△して×■♪◆○○※×△やろうか。
7号　僕の体にそういうセクハラはできませんから、脅しになりませんよ。
カイネ　おい、そこの■♪◆○○※×な店員！ ビールを樽でよこせっ。
デカート　かしこまりました！ ……卵……そんなことをされたら、そんなものを入れられてしまったら、私は……っ、私は……っ、私は!!
ヨナ　お兄ちゃん、この店員さん、きもちわるい！
ニーア　離れているんだ、ヨナ。ワルイコトバが聞こえないように、お兄ちゃんがヨナのかわいいお耳を塞いでいてあげよう。
7号　あぁっ、ニーアさん!! 僕の、僕の……僕のも、ニーアさんので、ふさ、ふさっ、塞いでほしい……なんて、とても言えませんっ！

　カイネさんはすごい勢いでコースメニューを貪り食べている。注文を聞きに来た「デカート」という名札の店員は明らかに股間が膨らんでいた。これ見よがしに、右手の中でふたつのゆで卵を潰して食べるカイネさんの手つきに店員はうち震え、挙句カイネさんに蹴っ飛ばされて厨房へ戻っていた。この状況にまったく動じていないニーアさんの日常とはいったい……。

ニーア　ん？ そういやシロはどこに行ったんだ？ それにクロも。

19:40

　私はふらりとニーアさんが持ち込んだという、白い本と黒い本のいるテーブルへ立ち寄ってみた。すると、いささか飲みすぎたのだろうか。一瞬目の前が真っ白に光り輝き、ほどよくかすれた印象の……つまり関西弁で言うところの「ええ声」が私の意識下に響き渡ったのだ。

「フウインプリズムパワー……メーイクアーップ！」（CV:ピーター）

　迸る閃光。つむってしまった目を開けると、そこには真っ赤な仮面を着けた女性の姿があった。仮面によって顔を窺い知ることはできないが、じつに豊満ないいカラダだ……ふわりと花の香りがするようなしないような。

――あの、遅れていらっしゃった方ですか？
赤い仮面の女　我は先ほどからそこにいた。

——さっきの呪文はなんですか？
赤い仮面の女　ただの気まぐれよ。この世界での変身には、かような呪文がつきものだと聞いたのでな。
——その仮面はとらないんですか？
赤い仮面の女　契約した者にしか、この顔は見せられぬ……おぬしも我に心臓を差し出すか？
——それはちょっと……。
赤い仮面の女　真に受けるな。それに、我は既に契約済みの身ぞ。
——へぇ……ご婚約されてるんですね〜。

携帯に着信があったために少し席を外す。戻ってみれば、テーブルでは赤い仮面の女を交え、白い本と黒い本、それに髭を蓄えたじつに性格の悪そうな男が歓談を楽しんでいた。髭の人はたしか、ジスモアさんと言ったか。店員が彼らに呼び出され、注文を聞いていたのだが、これがまったく要領を得なかった。

デカート　ご注文をおうかがいします。(CV:井上和彦)
赤い仮面の女　我は……ビールを所望しよう。(CV:ピーター)
白の書　こちらはジンジャーエールだ。(CV:ピーター)
ジスモア　余は焼酎「魔界への誘い」をロックで。(CV:立木文彦)
黒の書　我は「魔王」ぞ。(CV:立木文彦)

店員が笑顔のままで一瞬固まった。それもそのはずだ。私にも誰が何を注文したのかが、耳で聞いているだけではさっぱりわからなかった。

デカート　……えー……ご注文をくり返します。こちらの白い本のお客様がビールで……。(CV:井上和彦)
赤い仮面の女　違う、ビールは我ぞ!!(CV:ピーター)
デカート　ああっ、すいませんっ。こ、こちらの黒い本のお客様が「魔界への誘い」をおひとつ……。
ジスモア　ふざけるな！　余が「魔界への誘い」だと言っておろうが！(CV:立木文彦)
デカート　ひぁっ！　剣の先で、そんな喉元を……たまりません、あぁっ！
黒の書　我は「魔王」……何度でもくり返す！　圧倒的注文！　注文!!　注文!!!(CV:立木文彦)
デカート　ぜ、全部持って参りますので、あとは各々で分けていただいて——(CV:井上和彦)
全員　許さぬ!!
デカート　ああ、そんな。戒めの言葉を美声で浴びせかけられるプレイなどと……！(CV:井上和彦)

姿形はまったく違う四者だというのに、なんと区別のつけにくいことか。店員の不憫さを思いながら、私は白い本と黒い本に「ニーアさんが探していましたよ」と声をかけ、聴覚的な混乱をきたすそのテーブルを離れた。店員が「魔王」と「魔界への誘い」をジスモアさんにこぼしてしまい、濡らした体を拭こうとしてなにやら硬直していたようでもあり、彼の腕や胸が剣で斬られ、軽く血しぶきが飛んだような、さらに喘ぐような歓喜の声が聞こえたような気もするが、見なかったこととする。

20:00

トイレに席を立った後、私はもう一度黒い竜のいるテーブルに戻ってみた。身内なのだろうか、黒い竜は親密な少年たちとの会話に興じているようだ。

——すみません、こちらのテーブルに混ぜていただいてもよいですか？
ノウェ　ああ、どうぞ。レグナ、構わないだろう？
レグナ　ふん、好きにするがいい。人間どもの宴になぞ、そもそも儂は興味がないのでな。
エリス　そういえば、さっき呼ばれたんじゃありませんでしたか？　えーっと、なんだったかしら……いう、いう……その、イウなんとかさんから、迎えに来てと。
レグナ　ヤツは儂にとって、もはや過去の男よ。小僧以下なれば、それこそ興味がない。
マナ　冷たいんですね……。
——あ、あの、鶏の唐揚げと舟盛り来ましたから、みなさんでどうぞっ！
ザンボ　くそぅ……唐揚げ、美味そうだなぁ。かんぱちのお刺身、食べたいなぁ〜！
ハンチ　ひゃー、やれやれ。間に合ってよかったですぅ。あらぁ、唐揚げ、食べないんですかぁ？　私がいただいちゃって、いいんですかぁ？
——あの……ハンチさんでしたっけ？　いま、遅れていらっしゃったみたいですけど、お洋服びしょ濡れですね。外は雨が降ってたんですか？
ハンチ　いやですよぅ、あたしみたいな不細工で卑しい女に声なんかかけちゃうんですかぁ。あはぁ……気にしなくていいんですよぅ。雨なんて降ってませんからぁ。
——あの、来る途中で迷子になってる、竪琴持ったお兄さんとか見かけませんでした？
ハンチ　知りませんねぇ。それよりおなかがすいちゃってぇ、食べちゃいたい……食べちゃいたいんですぅ。
——お、お腹が空いてらっしゃるんだったら、追加で注文とかも。
ハンチ　ほんとですかぁ？　じゃあおごってもらえるんだったらぁ……しめサバとか食べちゃってもいいんですかぁ？
ザンボ　ちくしょう、しめサバいいなぁ、しめサバ。
——しめサバ、美味しいですよね〜。
ハンチ　店員さぁん。こっちですよ〜ぅ……私にぃ、しめ……しめ……しめ……!!　しめ、しめ、しめ!!　サバぁぁ〜っ、あぁーん。
カイム　…………。
——ハンチさん、隻眼の人が睨んでます、こっちを睨んでます。
ハンチ　いやですねぇ。私の方なんか見たってぇ、興奮もしないんでしょぉ〜。あなたすごくお強いらしいけど私なんかどうでもよくって、妹のことも助けられなかったからって、赤い竜に縋りついて、それにしか興味がないんでしょう〜。私、間違ってことなんて言ってませんけど、何か？
カイム　………………。
——かかかか、カイムさん、剣をしまって、あっち行きましょう、行きましょ。ねっ、ねっ。
ハンチ　あぁ〜っ、しめサバはおいしぃですねぇ〜。
ザンボ　うう……ううっ、うまそうに食いやがって……！

拭いても拭いてもびちょびちょに濡れまくっているハンチさんとカイムさんを、慌てて引き離す。そしてひと息つくと、サラサラの髪の香りが芳しい、幼い美少年がマナさんに駆け寄っていくのが見えた。彼は幼い少年に見えるけれども、実際にはかなり歳を重ねているとのことだ。

セエレ　こんばんは！　楽しんでる？　マナ。
マナ　セエレ。あなたはどっちのセエレかしら。こうして見た目だけでは、昔のセエレなのか、神官長のセエレなのか見分けがつきませんね。
セエレ　あはは、そんなのどっちでもいいよ！　僕はマナに会えてうれしいんだ。せっかくだから、一緒に手を繋いで踊らない？
——あのぉ、彼、ちょっとお酒入っちゃってませんか？
レオナール　ああっ、申し訳ありません。セエレが飲みたいと言ったものだから、甘い葡萄酒をひと口だけ、口移しにしただけでこのようにっ！
——……口移し、したんですか。
レオナール　はっ、いえ……とてもいい匂いがしたもので、つい、その……。
セエレ　僕はね、いまとってもご機嫌なんだ！　ほら、マナ。一緒に踊ろう？
マナ　ダメよ、私はダンスなんてできないわ。
セエレ　そんなことないさ。キミはダンスが上手だった。ただ忘れているだけなんだ。素敵な歌を演奏してくれる、流しの竪琴弾きの人も呼んであるんだよっ。何も心配しなくていいんだ、マナ。さあ、手を！

セエレが声をかけると、デボル・ポポルと名乗る美人の双子がやってきて厳かに一礼し、竪琴を奏で始めた。

デボル・ポポル　くわた〜♪
セエレ　ほぉら、マナ。僕たち、昔、こうして踊ったよね！　楽しいなぁ。
マナ　や、やめて……このステップは……こんなにくるくる回っていたら、私、私……っ！
ノウェ　大丈夫か、マナ!?
エリス　……彼女の心配ばっかりするのね、ノウェ。
ノウェ　そんなつもりじゃないよ。ただ俺は、このままじゃ彼女のステップが巻き起こす風で、皿の上のえびせんべいが吹っ飛びそうだと思って。
デボル・ポポル　ラララ、ラララ♪
セエレ　ラララ、ラララ。
マナ　やめて……ねぇ、もう…………らら、ら。
——あのぅ、なんか……背の高いお姉さんの服が赤くなって……目もヤバそうなんですけど……。
マナ　ラララ……ら、らら……天使は笑わない。
——お、お姉さんの背が小さくなって、セエレさんとおんなじに!?　しかもお声にドスが利きすぎなんですけど！　これはどういうことですか、ヴェルドレさん!?
ヴェルドレ　おお……双子の運命の悲しきことよ。もう誰にも止められん。
——止めてよ!!　止めなさいよ、あんた幹事で神官なんでしょうが!!
マナ　天使は笑わない、天使は起こしてはならない、ララララ。

その時だ。少し離れたテーブルでうめき声が上がった。さきほどまで銀杏の串を握りしめて泣いていたフリアエさんが、ジョッキを片手にふらふらと立ち上がってこちらへやってくる。

——フリアエさん、どうされました？
フリアエ　その歌を……歌わないで……。
——フリアエさん、あの飲みすぎですよ……？
フリアエ　わ、私は女なのに、ふつうの女なのに、どうしてこんな……ちぇっ、ちぇっ、クソが！
マナ　ララララ、らららら。
セエレ　わぁ、どうしようか!!　どっちのお姉ちゃんもヤ・バ・イね!!
レオナール　おお、私のセエレ……狂っていてもなんと愛らしい！
——ダメだ、酔っぱらいしかいない!!　そうだ、か、カイムさんは!?　こんな時に頼れるお兄さんのカイムさんなら、きっとっ。
赤い仮面の女　どうした？　カイムならもう酔って、我の膝で寝ておるぞ。
——あああああ、幻の『エンジェレグナ』の、ありもしないベストエンドシナリオのような有様にっ!!
フリアエ　封印がなんだってんだよ！　私を助けろよ！　役に立たない男どもめ！　助けてください。おねがい。助けて。抱きしめて。お兄ちゃん……。どうして最後まで赤い竜のほうばかり見ているの!?　私のために命を投げ出してくれるんじゃなかったの!?　ひどいっ、お兄ちゃんの鬼畜!!　いや!!　私を見て!!　ワタシヲミナイデ!!　略してワ・タ・ミ!!
マナ　はい、女神しっかーーく!!　どーするー！
セエレ　そうだそうだー、女神しっかーく!!　どーしよー！
デボル・ポポル　くわた〜♪

――トランス状態すぎるだろ――!!

20:18

とんでもない状態になったこの狂気のテーブルに、颯爽と救世主が現れた。右手にナイフを持ち、左手に野菜サラダ取り分け用のトングを持った下着姿のカイネさんである。彼女はセエレさんとマナさんが踊るテーブルに、はしたなく片脚を掲げるとズドンとそれを踏み鳴らして、周囲の動きを止めた。ナイフでもってデボルさんの奏でている竪琴の弦を斬り断ち、その場にあったワインのデキャンタをポポルさんに浴びせかける。

デボル　ああっ、ポポル!?　なんてことを……このマモノ憑き!
カイネ　うるせぇ、お前ら!!　どいつもこいつも店ん中だというのに、まともに料理も食いやしないで歌ったり踊ったり……そういうのは外でやれ!!　この頭ん中までド腐れ＊△○☆野郎どもが。キ♥ガイ揃いも大概にしやがれ!
ヴェルドレ　カイネ……お主がそれを言うのか……。
カイネ　黙れ、このむっつりパ■パン○※△!　ケツの穴掘り返して、○※×△で×■♪◆○○絞り出して、そのまま輪切りにしてやってもいいんだぞ!!
ニーア　よよよ、ヨナの前でそういうことを言うのはやめるんだっ、カイネっ。
ヨナ　お兄ちゃん、メロンおいしいよー?　ねぇねぇ、○※△ってなに?　お兄ちゃんも持ってる?
7号　ニーアさんの……○※△……っ、ニーアさんの……○※×△……。
ニーア　ああああ……俺はもうイヤだ。もうこんな場所にいたくない……っ。どうせヨナは助からないし、俺だってどうせ消えてしまうし――。
白の書　そのようなことを言い出すものではない!!
ノウェ　そうだよ……。どうせ俺たちは最後に、ひどい目に遭わされて……。
ユーリック　はん……ノウェ、お前は死ななかったんだからいいじゃねぇか。
エリス　いつからいたのよ、ユーリック。
ユーリック　おい、こいつをなんとかしてくれ。くっついてきて、面倒だ。
ヤハ　ああ、ユーリック。私はそなたとの思い出を作りたい。新宿二丁目も近いことですし、その胸に、胸に抱いて抱かれて……。
ユーリック　友人のままでいさせてくれ。
ヤハ　私の魅力にも振り向かない……そんなことがあっていいものか……!
ハンチ　いやですよぅ、ふられちゃったんですかぁ?　いいえぇ、ダサいなんて思ってませんよぅ。ミジメだとは思いますけど、何か?

奇妙な仮面の男の声は存在感たっぷりだった。まるでゴールデン街に飲みにやってきた松田優作ばりのかっこよさだ。そんなユーリックさんの膝に、笑顔のヨナちゃんが駆け寄ってくる。

ヨナ　かっこいいお面!　でも、そのお面いるの?
ユーリック　……。
ヨナ　お面あったら飲めないでしょ?　それカッコイイと思ってる?　思ってるんでしょ?
ユーリック　…………。
ヨナ　やっぱりー!　すごーい、カッコイイんだねぇ～。デザートのメロン食べられないのにねー。

ヨナちゃんの屈託のない言葉がユーリックさんを黙らせる背後では、カイネさんの持っているトングが、テーブルに引っ張りあげられたヤハさんの○○○に○○○○○○いるように見えたが、私はやはり見なかったことにした。

20:45

いよいよ全員に酒が回ってきて、もう収集がつかない。私はただ部屋の片隅に体育座りをして、飛び交う怒号と罵声と皿とグラスから身を隠しながら、いまこうして彼らの発言を記録することしかできずにいる。

カイネ　いいか、てめぇら!!　記憶がねぇだの、愛をくれだのガタガタ抜かしてねぇで○※×△で×■♪◆○○※×△で、×■♪◆○○※×△で×■♪◆○★÷ぶっこんでりゃいいんだよっ!!
アリオーシュ　結局、殺すばっかりでさぁ、年齢制限だとか倫理だとかでぇ、食べることもさせてもらえないんだったらぁ、途中で死のうが最後まで生きてようが一緒だと思わなぁい?
エリス　なによなによ、結局あっちもこっちもたぶらかして……私に封印押しつけて、自分はよろしくやっちゃって……嫌な男、嫌な男、嫌な男!!
マナ　ラララララ、らららららららららららららららららららら、ゆるして……おがーざーんっ!
ヨナ　お兄ちゃん、見て!　回ってるマナちゃんの下にいると、風がきてすずしいよ!!
ニーア　見てくださいよ、フリアエさん……俺の妹、すごくかわいいでしょう。あんなに無邪気ではかなげな美少女……血は争えないっていうんでしょうか。俺が一生守ってやらなきゃなって思うんですよ。ずっと、ずうっと一緒だよって。
フリアエ　ええ、わかります。私も兄さんのこと、小さい頃からずっと、ずっと……どうしても言えなかったけど、ずっとずっとずっとずっとずっと……。

20:50

恐怖のあまり、私が壁際でうずくまっていると隣の部屋の声までが聞こえてきた。まるでノイズのようにこの部屋の騒動と音が混ざり合い、頭にガンガン反響する。

「使徒は全員そこに並べ!　夜の採点を行う!」

よるのさいてん?　何のことだろう。

「デカートは本番前が長すぎます。セントは余計なお喋りが多すぎます。そして、オクタは突っ込んでからが長すぎです。また、デカけりゃいいってものではありませんし、固けりゃいいってものでもありません。もちろん、長持ちすればいいわけでも、回数が多ければいいってものでもありません。何度も言わせないように」

いい声でさっきのドMな店員さんの喘ぐ声が聞こえてくるような、こないような……。そして、なんとなく壁の向こうからほのかに香ってくる、この匂いは……。

「こら、クソドラゴン!!　そこでう○こするな!」
「出ちゃうものはしょうがないよ、ディト!　止められないよ!　止められないよ!」
「くっせぇ!!　ゼロ!　なんとかしてよ!　ミハイルのクソ止めて!!」
「うーん、うーん、出ちゃうよぉ～」

なんだか隣もかなりヤバそうな集団のようだ。関わらないほうが身のために違いない。

デボル　あー、店員さ～ん。すいませぇぇん、トカゲの尻尾の紹興酒、お湯割りで～。
店員　あ、ごめんなさいー、もうこちらラストオーダー終わっちゃってて～。2時間制なんでー、そろそろお会計――。
ポポル　もう遅ェんだよぉぉぉぉぉぉ、なにもかもぉぉぉッッッッ!!

「居酒屋封印　東新宿店」、コワい。マジコワイ。鼻をつまみながら恐る恐る私が背後を振り返れば、回り続けていたマナさんがようやくその高速回転に終止符を打っていた。四つん這いに跪き、喘いで息を吸いながら、低い男の声で唸りをあげる。

マナ　本当に、本当に……もう『ドラッグ オン ドラグーン』に関わりたくない……『3』に出たくない。『3』に出たくない、『3』に出たくない『3』に出たくない『3』に出たくない『3』に出たくない『3』に出たくない『3』に出たくない『3』に出たくない『3』に出たくない『3』に出たくない『3』に出たくない『3』に出たくない『3』に出たくないいいいいいいいいいいぃぃらららららららららららららら。
エリス　出たっていいじゃない。出られるだけいいじゃない、この女狐!!!!
フリアエ　ああ、そうよ、いいじゃない、どうせ……この体は、好きな人とは結ばれないんだし。
セエレ　そうだよ、どうせ、好きな人には愛してもらえないんだし。
7号　そうですよ、どうせ、この想いは届かないんだし。
カイム　……………………………………。

「どうせ」
「どうせ」
「どうせ」
「どうせ」「どうせ」
「どうせ」「どうせ」
「どうせ」「どうせ」
「どうせ」「どうせ」
「どうせ」「どうせ」「どうせ」

「どうせ　みんな　死ぬんだから」

小さな少女が魔法陣の形を刻んだ座布団の真ん中に立ち、真っ黒な文字に染め上がった体をひずませてニコリと笑う。

「うん!　ヨナも　そう　おもう」

隣の部屋から漂ってくる悪臭が、さらに強くなる。背後でヴェルドレ氏が不思議な呪文を詠唱しているのが聞こえてきて、私は遂に耳を塞ぎ、息を止めた。

「すいませーん!!　そろそろお時間なんでお会計、お持ちしましたー!!　合計で――」

隣の部屋とこちらの部屋を遮る壁が、生あたたかい温度の黒い弾丸のごときものに撃ちぬかれ、崩壊する。たくさんの座布団がまばゆく光り輝き、爆煙とともに個室は真っ白な光に包まれた。

20:58

空白

記者による記録は以上である。現場には記録端末のみが残されており、これ以上情報をサルベージすることは不可能だった。「世界の可能性」を視るうえでの貴重な資料として、この状態のまま保管するものとする。


禁断の映像化、始まる。
DoD
ドラッグ オン ドラグーン
Illustration: Mika Yamamoto / Hiroshi Yakou

特別企画❷

DRAG-ON DRAGOON

ドラッグ オン ドラグーン × ニーア レプリカント

NieR Replicant

劇場版アニメ三部作 鋭意制作中



世界中のファンに朗報!! 10周年を記念して制作中と噂されていた、アニメ版「ドラッグ オン ドラグーン」、「ドラッグ オン ドラグーン2」、「ニーア レプリカント」の情報を独占に入手。キャラクターデザインや絵コンテ、動画の一部などを、世界最速でお届けする!

DoD2
ドラッグ オン ドラグーン2



NieR Replicant
ニーア レプリカント

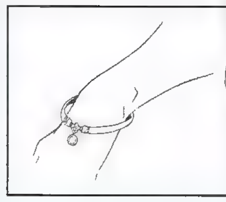
設定資料FILE

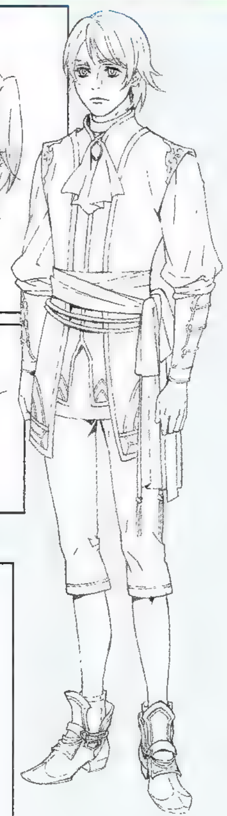
DoD
ドラッグ オン ドラグーン

カイム

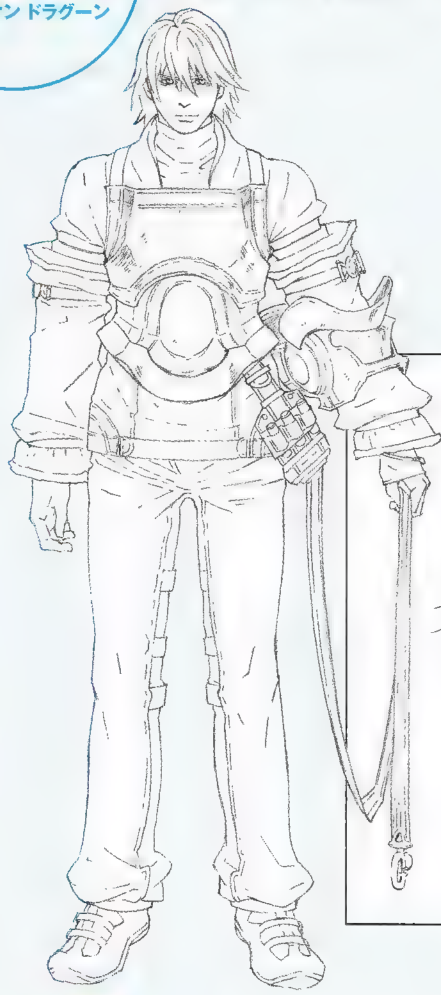
『ドラッグ オン ドラグーン』の主人公。かつては一国の王子だったが、国と両親を失い赤き竜・アンヘルと契約。復讐心から戦火に身を投じる。

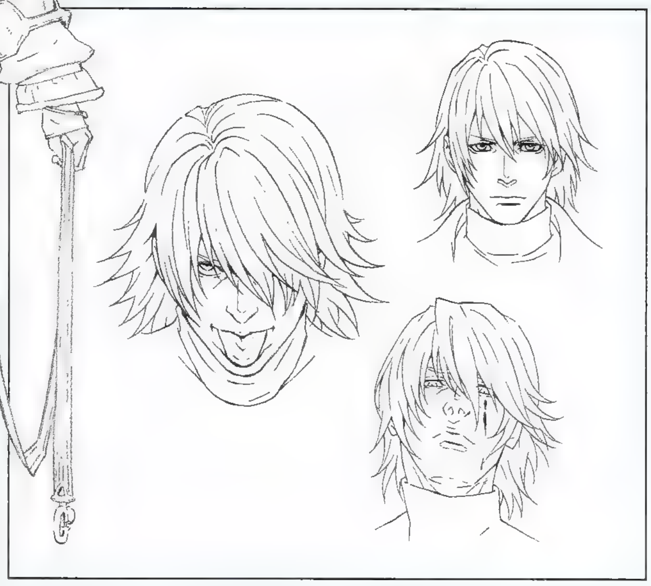






▲▶カールレオン国の王子として、幸せだった頃のカイム。歳は15歳。ブレスレットはフリアエとお揃いのもの。黒き竜に両親を食い殺されて国を失い、妹を奪われた彼に笑顔が戻ることはなかった……。





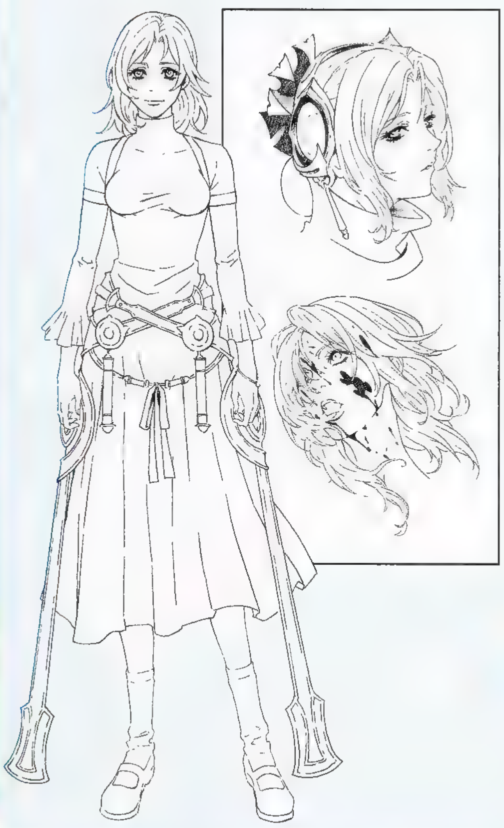
アンヘル

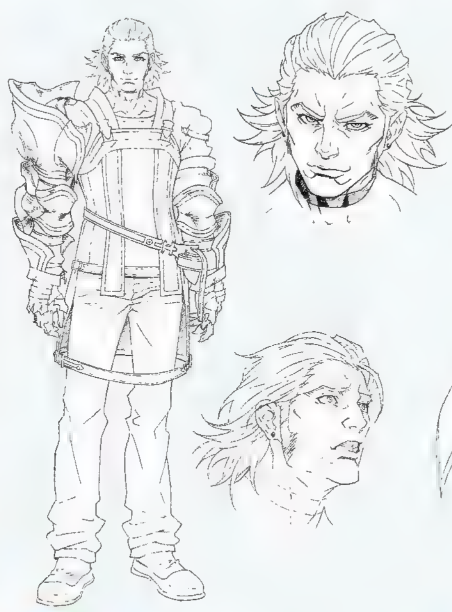
帝国軍に捕縛されてしまい、瀕死のところをカイムと契約した赤き竜。その大きな翼で天を駆ける大迫力のビジュアルにも期待したい。

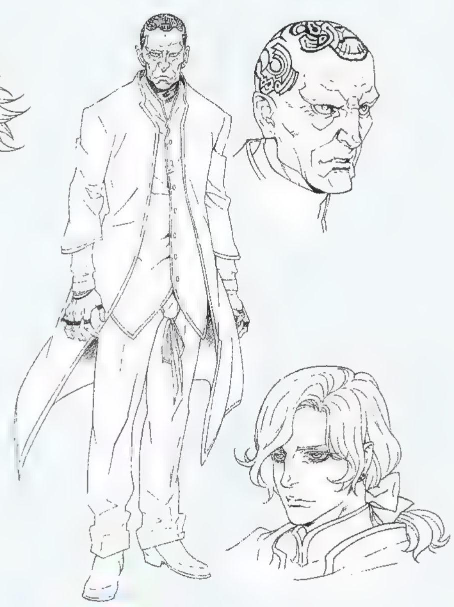


フリアエ

カイムの妹。封印の女神に選ばれ、世界の安定のため身を捧げることを余儀なくされる。以来、感情を表に出さなくなるが、身の内には消えない兄への愛が、狂わんばかりに息づいていた。







イウヴァルト

カイムやフリアエの幼馴染で、フリアエの元許婚。彼女と歌をこよなく愛するも、その愛につけこまれ、黒き竜との契約で身を滅ぼすことに。

ヴェルドレ

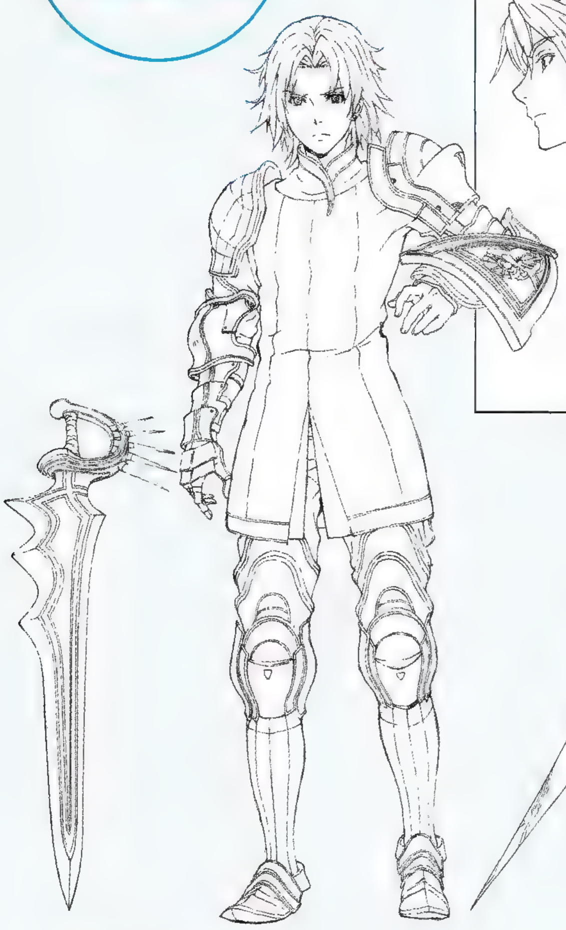
女神の世話役たる神官長。石化しかけたドラゴンとの契約で、全身の毛を失った。アニメで描かれる若き日の彼には、美しい髪、眉、まつ毛が!!

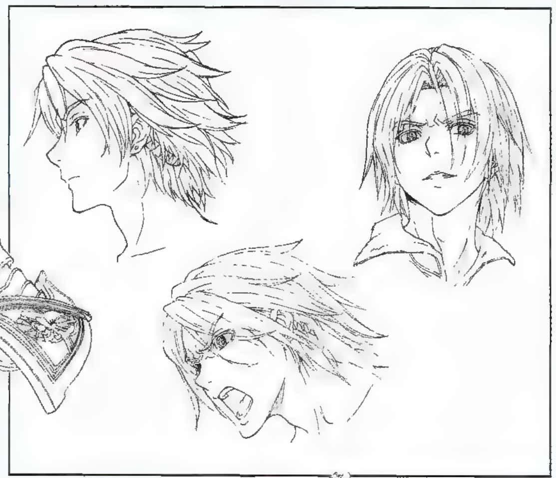
まず紹介するのは、各作品に登場するキャラクターの設定資料。キャラクターデザインは、アニメーターの山本美佳氏（代表作：『戦国BASARA』シリーズ、『TIGER&BUNNY』など）と、同じくアニメーターの矢向宏志氏（代表作：『あの夏で待ってる』『とある科学の超電磁砲S』など）の強力タッグが担当。アニメだけで描かれるという、過去にまつわるオリジナルエピソードなども踏まえ、ゲームには登場しなかった設定画も見受けられる。その細かなディテールを見れば、アニメ版への期待も否応なしに高まることだろう。

DoD2
ドラッグ オン ドラグーン 2

ノウェ

『ドラッグ オン ドラグーン2』の主人公。ブラックドラゴンのレグナに育てられ、竜語を解す。封印の女神を守る組織・封印騎士団に属していたが、聖女と呼ばれる女性・マナとの出会いによって、その運命が大きく変わり始める。





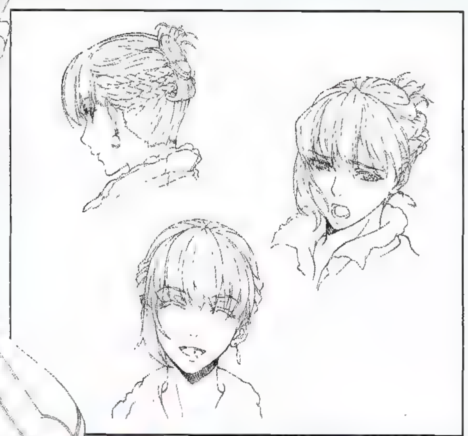
レグナ

かつて、イウヴァルトと契約を果たしたブラックドラゴン。小さい頃からノウェを保護して育て上げた、父親ともいうべき存在である。









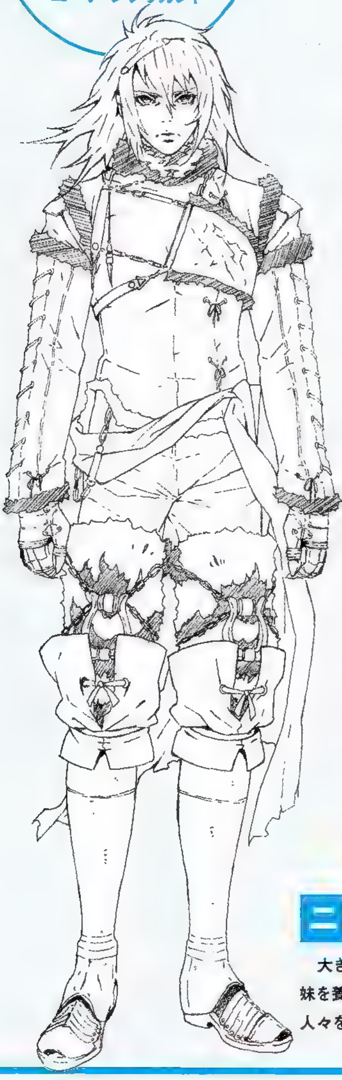
エリス

封印騎士団に所属するノウェの幼馴染み。マナとの出会いによってノウェの行動が徐々に変化し、激しい嫉妬の炎を燃やすようになる。

ユーリック

かつて封印騎士団に所属していた戦士で、ノウェの兄貴分。とある事件をきっかけに死神と契約し、死なない体となった。以来仮面を常用する。

NieR
Replicant
ニーア レプリカント





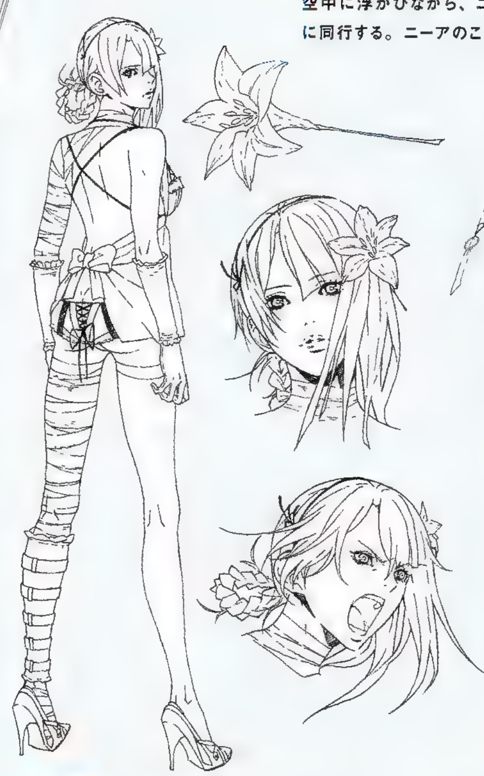
◀白の書

実験兵器7号

とてつもない魔力を有する、その名のとおりの実験兵器。骨のみの体で空中に浮かびながら、ニーアの旅路に同行する。ニーアのことが大好き。











ニーア

大きな図書館のある村で、妹のヨナとふたりで暮らす。病弱な妹を養うためにマモノを狩ったり、身を売ることも。ヨナを苦しめ、人々を苦しめるマモノに対し次第に憎悪を募らせていく。

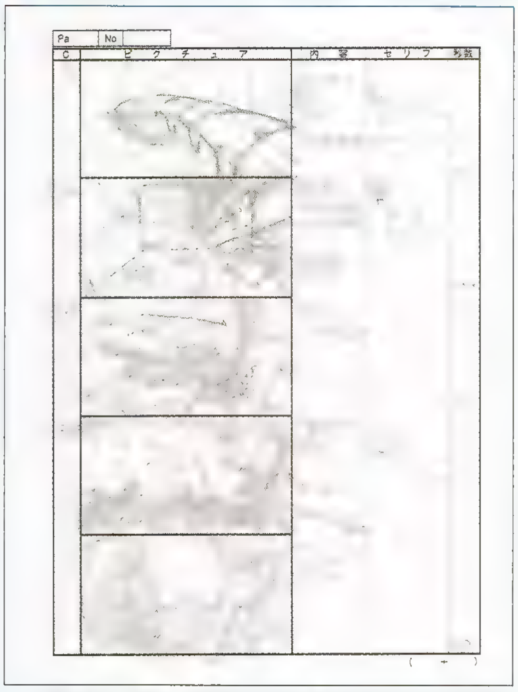
カイネ

崖の村の外で暮らす戦士。じつは両性具有であり、粗暴な態度と下着姿で人々からは忌み嫌われている。月の涙の花飾りは彼女の大切な宝物。

ヨナ

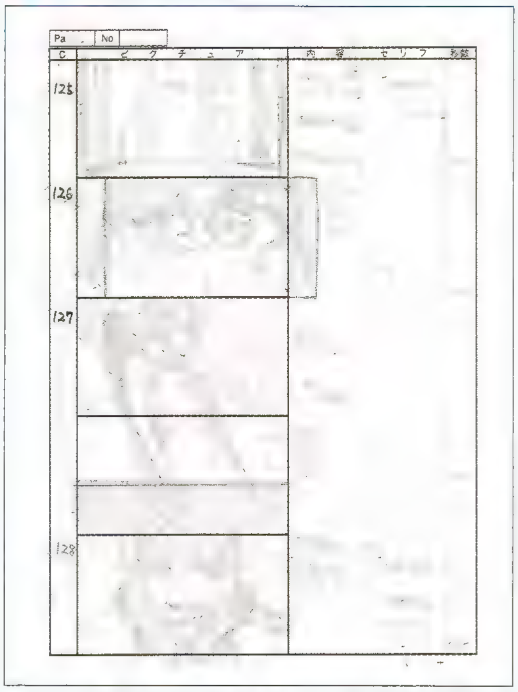
ニーアの妹。病弱ではあるが、明るく無邪気。兄のニーアをとてもよく慕っている。奇病と呼ばれる「黒文病」にかかっても気丈にふるまう。

フリアエとイウヴァルト（絵コンテ）



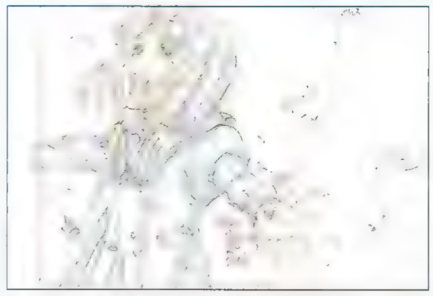
ゲーム版には、複数のエンディングが用意されていた。そのうちのひとつで展開される、フリアエから伸びた触手がイウヴァルトの腹部を貫く場面。アニメ版でも、ほかのエンディングシーンは描かれるのだろうか？

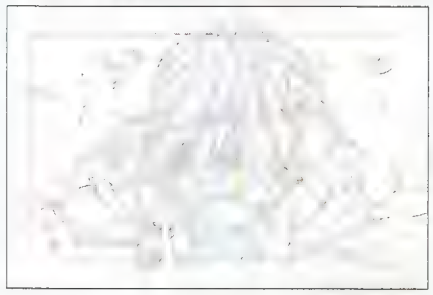
フリアエ自害（絵コンテ）

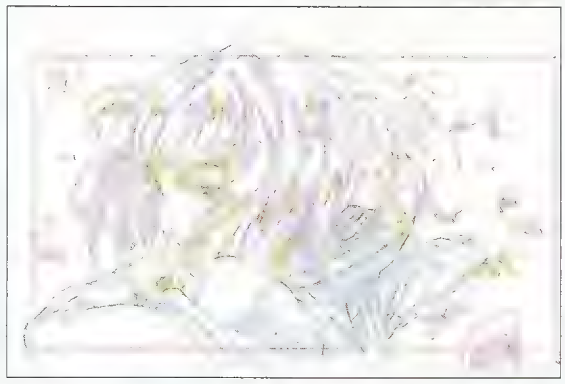


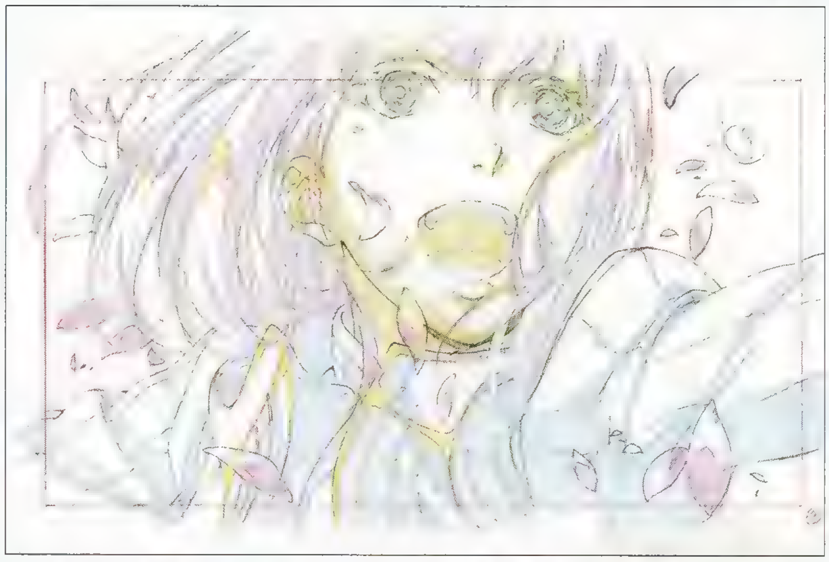
フリアエの胸に大きなナイフが突き刺さっているのを目撃する、兄のカイム。ようやく再会できた兄妹の惨劇を、狂気に満ちたマナが笑って見つめている。このあと、右のシーンのように踊って回り出すのか……？

踊るマナ（原画）



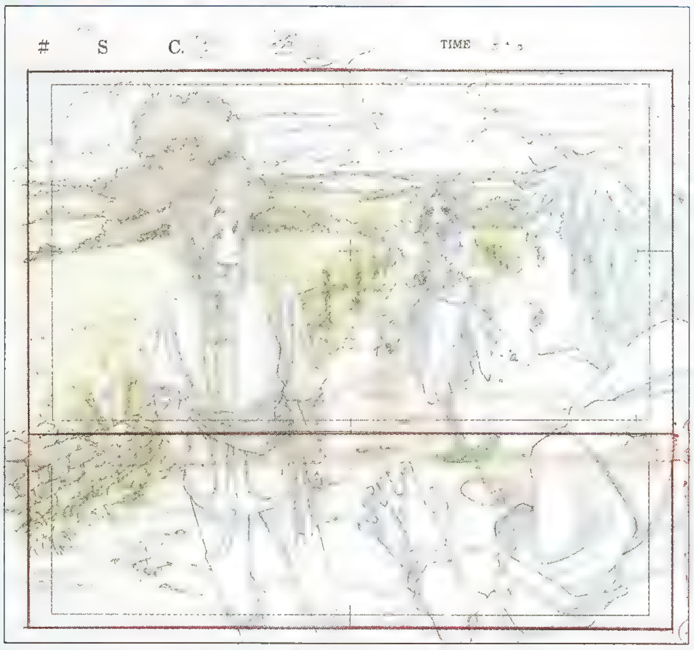






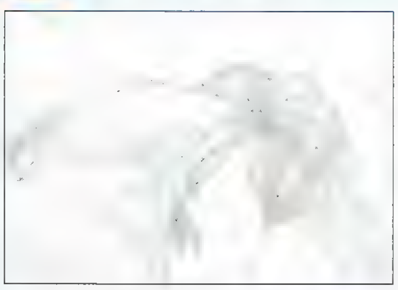
謎の教団「天使の教会」の司祭となったマナ。マナといえば回転、回転といえばマナと言われるほどグルグル回る姿は、ゲーム中でも狂気を感じさせる名シーンとして知られている。アニメでも、花弁を舞い上げながら踊る踊る、回る回る。ふわふわと風に揺れ動く髪の動きにも要注目だ。

15歳の思い出（原画）

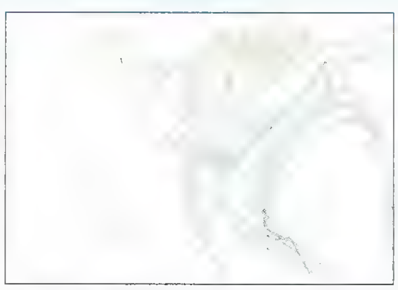


カールレオン王国がまだ穏やかだった頃、フリアエが封印の女神ではなかった頃。王侯貴族とはいえ、純粋で無邪気な時代が彼らにも確かにあったのだとわかる貴重な過去のひとコマ。つまずくフリアエを受け止めたのは、カイムとイウヴァルトのどちらだったのだろうか。

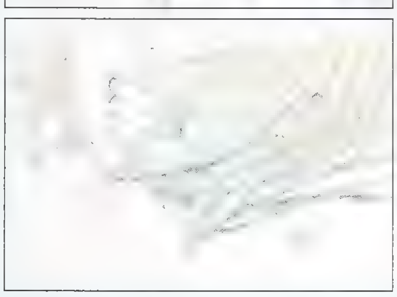
ノウェ　急襲（原画）







ブラックドラゴン・レグナの背にまたがったノウェが、上空から地上に向かって飛び降り、敵を急襲する！　振りかぶった剣の一閃とともに画面いっぱいに迫るノウェの瞳。その瞳孔には、人のものとは思われぬ鋭さが宿る。まるでそれは竜そのもののような……。ブラックドラゴンに育てられた少年に隠された真実。物語をよく知る人になら、たった数秒のこのシーンに込められた深い意味がわかることだろう。

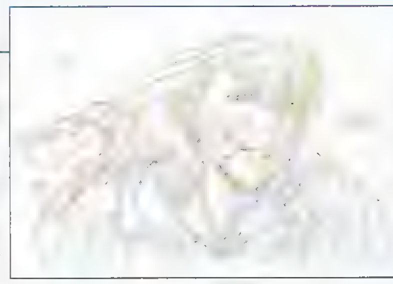








エリスとジスモア（原画）

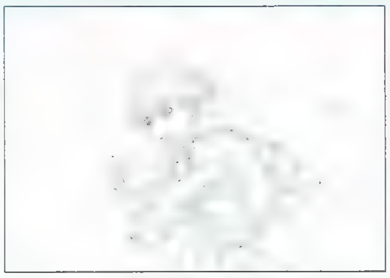
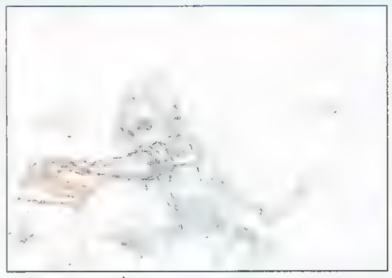
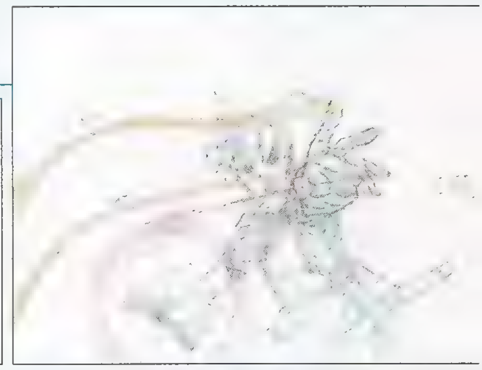
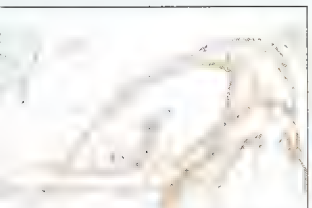


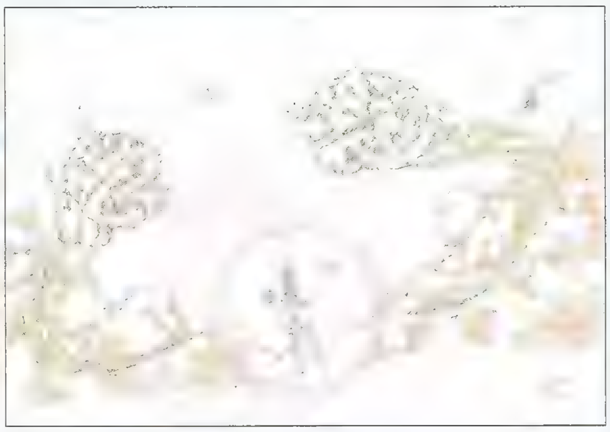
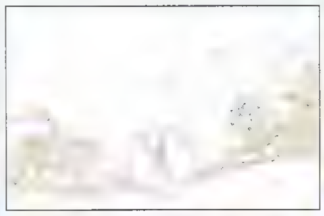
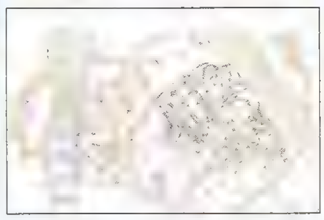
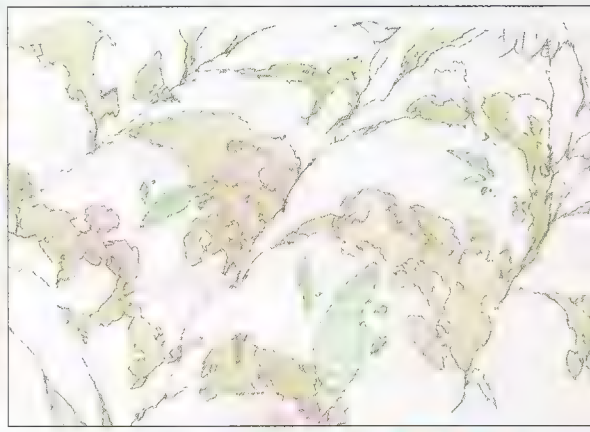


ノウェの剣がジスモアに迫り、その体を斬りつけようとした瞬間。彼が盾として眼前に差し出したのは、傍らにいたノウェの幼なじみ・エリスだった。血を吐くエリスと、非道なジスモアの顔つきが印象的なシーンである。

ニーア・魔法発動（原画）

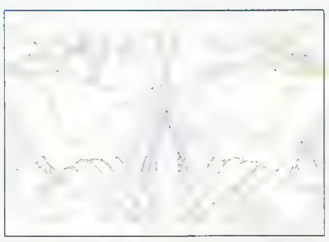
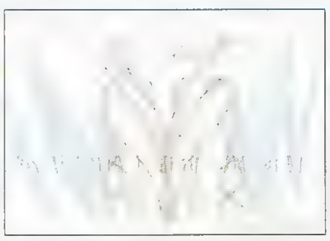
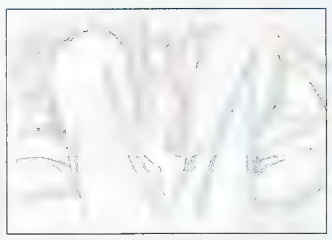
ニーアが白の書を用いて放つ迫力の魔法は、ゲーム中でも数々のムービーシーンで描かれていた。それらは、アニメ版でも忠実に再現されている。そのうち代表的な「黒の手」は、ニーアが発動させたのち巨大な拳がカイネに向かう。そして彼女の足の合間から覗くアングルから、拳が全画面に迫る！　完成版にはこれらの絵の合間に、さらに「中割り」と言われる動画が挿入され、滑らかにアニメーションするのだ。

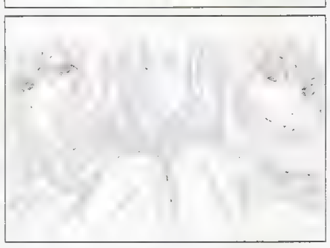
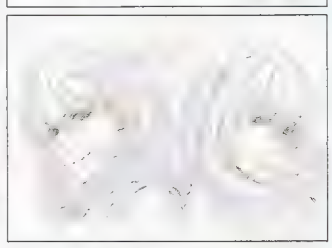





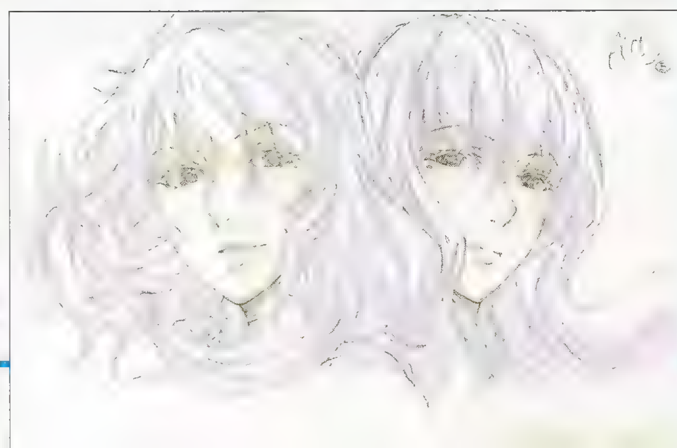





デボル・ポポル登場（原画）

ニーアとヨナの成長を見守る、双子の美人姉妹・デボルとポポルの登場シーン。酒場で歌っているふたりが、機嫌よくダンスをしているように見えなくもない。実際には、どんなシナリオでお目見えするシーンなのか……期待は膨らむばかりだ。



嘘です。

ヨコオタロウ

ということで全く嘘100%のアニメ企画いかがでしたでしょうか？というか「え？書籍のネタ？適当に嘘アニメの企画とか作ればいいんじゃないですか？」という一言がここまで素晴らしい企画ページになってしまうとは思いませんでしたすみませんでしたごめんなさい。

緊急速報 特別企画③

DRAG-ON DRAGOON 4

極秘スクープ情報!

ドラッグ オン ドラグーン4（仮題）



業界激震&七転八倒！ ゲーム開始2秒で死ぬ主人公に、45歳の中年ヒロイン、そして剛毛の少女がラスボスとして登場。そんな「あのシリーズ」の最新作が、全ゲームファンの意向を裏切ってなぜか「鋭意開発中」との知らせが編集部に舞い込んできた！ 幸か不幸か、その最新情報を本誌だけの独占スクープでお届け。これが鬼才・ヨコオタロウ氏が全国のゲームファンに送る、通算四度目の正直！

PS4 プレイステーション4

スクウェア・エニックス	発売日未定　価格未定
ジャンル	即死系恋愛バトル RPG
テイスト	冒険・現代ドラマ
通信機能	マルチプレイ対応、ダウンロードコンテンツ対応
プレイ人数	1人
CERO	審査予定

今明かされる衝撃の真実（ネタ）……

『DOD4』はもう

Story

15歳になった加藤はあくびをする。よくあるありふれた平和な日々。どこかのバカがネットで嘘の殺害予告をして逮捕されたり、どこかで親が生まれて間もない赤ん坊を殺して逮捕されたり、電車が脱線事故を起こして死傷者が大量に出たり、遠い国で内戦が起こって小さな子どもが爆撃されたり、そんな出来事がすべて遠くに眠たく感じる駅の構内。通学でいつも乗る電車も今日はダイヤが乱れているようだ。

ホームに到着した車両に乗り込む。刺すような夏の日差しから逃れて冷房の効いた車内にほっとひと息つく。本数が多すぎて結局自分が何時何分の電車に乗ったのかもわからないが、この調子なら学校には間に合うだろう。走り出した電車の窓から、いつものように東京スカイタワーが目に入った瞬間。一斉に鳴りだす携帯電話。満員車内に広がる困惑。泣き出す子ども。不協和音。地震速報？ 違う！ これは――。

「なんだ、あれは!?」

混乱する車内に乗客の誰かが指をさした。その先で、東京スカイタワーに飛来する無数の黒い塊。鳥か？ いやそれにしたって大きすぎる。恐怖に囚われ東京スカイタワーから目を逸らし、つい反対側の窓を見た。目に飛び込んできたのは、沿線に面した小学校の垂れ幕。

"悪　魔　ヲ　滅　セ　ヨ"

「え？」

そう口にした瞬間、電車が白い光に包まれて俺の頭と体は吹き飛んだ。

THE END

「パシフィック鉄機」システム搭載！

「シリーズ終了」の呼び声が高かった、あの『ドラッグ オン ドラグーン』シリーズに最新作が登場！ ジャンルは、ソーシャルゲーム的な要素を取り入れたバトルアクションRPG。課金しなくてもクリアすることは可能だが、二億五千万分の一の確率でドロップされる最終ステージへの鍵などが存在するため、実際には課金が必要なゲームバランスとなっている。コンプガチャを揃えないとオープンしないオプション画面や1回100円のセーブシステムなど、ありとあらゆる金銭的災厄がプレイヤーに降りかかる！ また、13個のキー入力と2本のアナログスティックを全員で分け合う「パシフィック鉄機」システムを搭載。これにより、ひとつのコントローラーで最大15名までプレイすることが可能なのだ。



Characters

CHARACTER DESIGN:Kimihiko Fujisaka



主人公
加藤

ニックネーム
「黄土色」

[illegible]のハーフ。派手な設定の割には[illegible]クラスでも[illegible]しがちな存在。

ゲーム開始2秒後に大事件に巻き込まれて死ぬ。享年15歳。



ラスボス
鈴木

ニックネーム
「中二病」

異世界から現れた悪魔アスモデウスがこの[illegible]を支配する為に物質[illegible]（マテリアライズド）された[illegible]。[illegible]を一[illegible]のうちに[illegible]にしてしまう大事件（通称：鈴木爆発）を[illegible]こした。

エンディン[illegible]ロール[illegible]に、[illegible]・アスモデウスの[illegible]であることが判明。[illegible]バットを持つ「[illegible]」は[illegible]に通りがかった[illegible]でい少女で[illegible]つまり[illegible]だったのはアスモデウスでも何でも[illegible]少女・鈴木の[illegible]力によるものだった、という驚[illegible]の[illegible]が[illegible]られる。鈴木は[illegible]で、おばあちゃんがいつも[illegible]してくれるもの の10秒で元の形状に戻ってしまう剛毛である。晩年の鈴木は15人の無口な孫に囲まれながら、穏やかな笑顔で永遠の眠りにつくことになる。享年93歳。



ヒロイン
佐藤

ニックネーム
「[illegible]」

広告代理店で[illegible]日易物産銀行に勤務[illegible]の社員。清らかな[illegible]、信心深く善行を[illegible]管理監察部処刑課に所属しており、どんな小[illegible]も見逃さないことで有名。ニックネームの「[illegible]」は[illegible]にその見た目の貫禄に由来するもので、[illegible]課・課長補佐」。

寿司が大好物で、寿司屋に入るとまずはギョク（玉子の握り寿司）を頼み、その店の大将の力量を測る通人。好きなネタは鰯・鯖などの光モノで「下魚をどう味わうかで寿司食いの位置が決まる」という信念がある。行きつけの店の鯖を食べた夏のある夜、鯖がアタってしまい糞尿にまみれながら自室をのたうち回っている時に天からの啓示を受けて、みずからが「封印の女神」であることを知るに至った。宿命のライバル・鈴木との激しい戦いを通じ、最終的には永遠の命を手にしてこの地球を見守る存在となる。

完成していた!!

『ドラッグ オン ドラグーン4』発売記念インタビュー
ディレクターのヨコオタロウ氏に聞く『ドラッグ オン ドラグーン4』の魅力

―このたびは『ドラッグ オン ドラグーン（以下「DOD」）4』の発売決定、おめでとうございます。

ヨコオ ありがとうございます。

―「DOD3」の売れ行き不振で「シリーズ終了」と言われていた同シリーズですが、どういった経緯で開発することになったのでしょうか？

ヨコオ 開発するかどうかはスクウェア・エニックスさんが決めることですので、僕のほうではよくわかりません。

―では、「作ろう」と言い出したのは、スクウェア・エニックス側のプロデューサーなのでしょうか？

ヨコオ ええ。横山さん（『NieR』のアシスタント・プロデューサーであり、現『BDFFCDQDDCCCPSOMH4』のエグゼクティブプロデューサー）から電話があったんです。過去作のプロデューサーである柴さんと齋藤さんは両名とも亡くなられていて宙に浮いた状態の『DOD』シリーズでしたが、横山さんに拾っていただいた形になりますね。

―横山さんからはどんなオファーがあったんですか？

ヨコオ 「ヨコオチャーン、どうよ調子はどうなのよヤってる？ バンバンやってる？ うはははは」という内容でした。まずはその意向を汲み取る形で、製品の構想を練っていったんです。

―なるほど。本作での見どころは？

ヨコオ これまでイヤイヤながらファンタジー世界を作らされてきましたが、ようやく念願の現代ドラマを作ることが出来ました。すでに公開されている情報から皆さんイロイロ推察されているかとは思いますが、その期待を悪い意味で裏切る努力をしたいと思っております。

―ヨコオさんがイチオシのキャラクターを教えてください。

ヨコオ メインキャラじゃなくてもいいですか？

―もちろん。

ヨコオ 主人公・加藤の恋人の「山田」ですかね。老女で淫乱な処女という設定はありきたりな感じですが、物語の鍵を握る重要なキャラクターです。声優さんの繊細な演技も相まって、素晴らしいキャラクターになったと思います。

―なるほど。ちなみに『DOD4』は、過去作との関係はあるのでしょうか？

ヨコオ ほとんど関係はありませんが、一部の設定はつながっています。『DOD3』に登場したアコールに関係するものもあり、過去作のファンの方に喜んでいただけるかと思います。またファンの皆様の期待に応えてアンヘルとカイムの両キャラクターも登場させることにしました。皆さんの幻想を打ち砕く……英語で言えば、ファイナルなファンタジーになる、そんな感じですね。

―え？

ヨコオ え？

―よくわかりませんでしたが、本日はインタビューに応じていただきどうもありがとうございました。

ヨコオ こちらこそありがとうございました……あっ、そうだ。

―はい？

ヨコオ 言い忘れたことがあります。

―ええ、何でしょうか。

ヨコオ この部屋の出口は見えますでしょうか？

―扉がふたつありますね。

ヨコオ はい。その出口以外に、この部屋には窓も換気口もないことがわかりますね？

―はい。それが何か？

ヨコオ あの扉を開けると、あるスイッチが作動します。

―[illegible]

ヨコオ はい。右の扉に付いているスイッチは、あなたの妻の心臓に取り付けられた遠隔操作爆弾の起動スイッチです。

―[illegible]

ヨコオ ええ。大した爆発力はありませんが、人ひとりを殺すには十分な威力があります。

―何言ってるんですか？

ヨコオ 左の扉についても説明したほうがよろしいでしょうか？

―[illegible]

ヨコオ 説明しなくてもよければ、とくに説明しませんが。

―説明、してくれ。

ヨコオ わかりました。左の扉には娘さんの体に仕掛けられた爆弾に連動したスイッチがついています。

―む、娘に何をッ!!

ヨコオ まだ何もしていません。ただ貴方があの扉を開けるとその爆弾が作動します。

―それで娘を殺すと言うのかッ！ 貴様！

ヨコオ いいえ。

―[illegible]

ヨコオ 娘さんの爆弾は体の何ヵ所かに仕掛けられていますが、いずれも死に至る程の威力はありません。ただ、仕掛けられた場所の部位は失われるでしょう。腕であれば腕が、足であれば足が失われます。どこに仕掛けたか、何個爆発するのかは、秘密事項ですので申し上げられません。

―何だ!? 何のためにそんなことを!!

ヨコオ そちらも秘密事項になります。

―そ、そんな扉、開けるわけないだろうッ！ 一体、貴様だって[illegible]この部屋から出られないんだぞッ！

ヨコオ すみません。いくつかの条件についてお話が足りていませんでした。

―こんどは何だッ!!

ヨコオ あと5分以内にどちらかの扉が開かない限り、娘さんと奥さんの両方の爆弾が爆発します。

―[illegible]

ヨコオ あと4分53秒。そして、私が部屋から出られない件は、このようにして解決する予定です。

―な、なんだ、そのナイフは。そんなモノをチラつかせて、いったい何を……オイ、なんだ？ なぜ自分自身の首にナイフを当ててるんだ？ ちょっと待て。待てッ、ヤメロッ!!!! ……クソッ！ 自分で自分を……血が……オイッ！ 死ぬなっ！ こんな勝手なことして、ただで済むと思ってるのかッ!!! 爆弾を解除しろッ！ 解除してから死ねッ！ クソオオオオオオオッ!!!

2013年9月11日 スクウェア・エニックス会議室にて

開発状況 0%

今まで惰性でダラダラと作り続けていたシリーズですが四作目にしてようやく皆様を満足させる製品になったような気がします。ご期待ください。

ディレクター
ヨコオタロウより

祝！『ドラッグ オン ドラグーン』シリーズ10周年！ それを記念して、『ドラッグ オン ドラグーン』と『ニーア レプリカント（ニーア ゲシュタルト）』、すなわち『ドラッグ オン ドラグーン』ワールドを構築するのに関わったクリエイターの皆さんを代表する、6名の方々にコメントをお願いした。結果、奔放なおふたりは、やはりコメントも奔放！「こんな人たちだからこそ出来たゲームなのだな～」と、あらためて実感できることウケアイです。

特別企画④

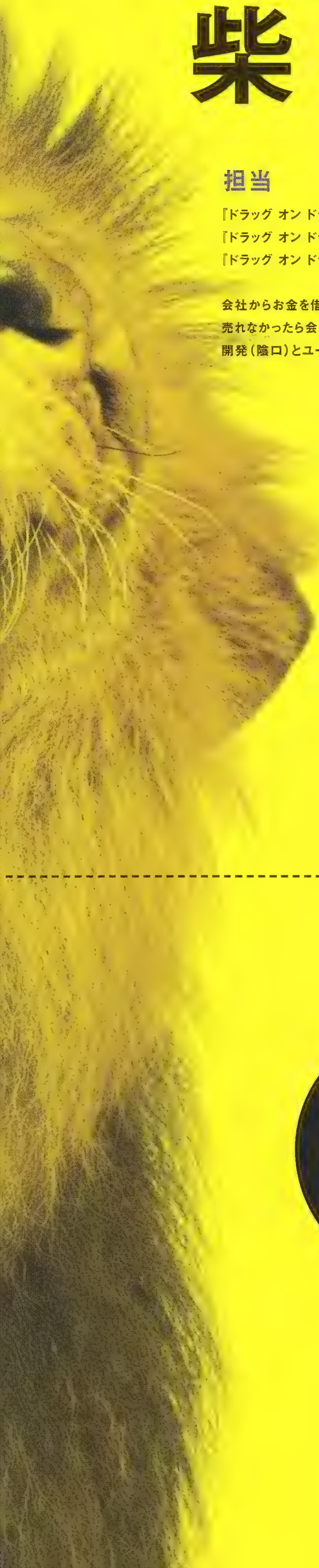
Creater's Voice

クリエイターの声



Takamasa Shiba

柴 貴正





担当

『ドラッグ オン ドラグーン』プロデューサー
『ドラッグ オン ドラグーン2 －封印の紅 背徳の黒－』プロデューサー
『ドラッグ オン ドラグーン3』プロデューサー

会社からお金を借りて開発をお願いする係
売れなかったら会社に詰め腹を切らせる係
開発（陰口）とユーザー（2ちゃんねる）に文句を言われる係

プロフィール

阿倍野→初台→代々木→東新宿。代表作は『ドラッグ オン ドラグーン』シリーズのほか、『ドラゴンクエスト 少年ヤンガスと不思議のダンジョン』、『LORD of VERMILION』シリーズなど。

コメント

とっても高い商品をお買い上げいただき、ありがとうございます。皆様が「モトがとれた!!」と思える商品にするため、粉骨砕身がんばる次第です（2013年8月5日14時2分現在）。皆さんがこれを読めているということは、世に商品が出ているということで、ということは柴が生きている可能性が高いので、その時コメントさせていただきます。読めてない場合は、そういうことなので探さないでくださいませ……。

Yoko Taro

ヨコオ タロウ



担当

ノーコメントです。

プロフィール

ノーコメントです。

コメント

ノーコメントです。



Akira Yasui

安井章

担当

『ドラッグ オン ドラグーン』デザイナー
『ドラッグ オン ドラグーン2 －封印の紅 背徳の黒－』ディレクター

プロフィール

大手ゲーム会社を経て、株式会社キャビア（現マーベラスAQL）に入社。『ドラッグ オン ドラグーン』デザイナーとしてモデル作成からエフェクト、武器魔法作成など多岐に渡る作業に携わり、『ドラッグ オン ドラグーン2』では作品全体のプランニング、監督、監修、それにまつわる作業全般に携わる。代表作はそのほか『バレットウイッチ』など。現職は、株式会社イルカにて、プロダクション部マネージャーを務めている。

コメント

あれから10年も経ったんですね。キャビアができた頃、デザイナーとしてさまざまな作業に携わった『ドラッグ オン ドラグーン』。モデルを作ったり、ヨコオさんに怒られたり、武器や魔法を大量につくったり、ヨコオさんに噛みつかれたり、ツールを書いたり、ヨコオさんに絡まれたり、徹夜で作業したり。まさに、赤い目をして楽しく作業していました。若いって素晴らしい。
『ドラッグ オン ドラグーン2』では、ディレクターという大役を任せていただいたものの、右往左往しみんなに迷惑をかけました。しかし、優秀なスタッフとスクウェア・エニックスさん、ファンの方の愛に包まれて、発売に漕ぎ着けることができました。本当に本当にありがとうございました。一生忘れることができない思い出になりました。……と思っていたのですが、最近大分、ずいぶんといろいろ忘れていることが判明しましたとさ！ 老化って恐ろしい。
そして『ドラッグ オン ドラグーン3』発売おめでとうございます。直接関わることはありませんでしたが、発売できて本当によかったです。旧作から関わっていたメンバーも、みんな生暖かい目で見守っていることでしょう。お疲れ様でした。

Kimihiko Fujisaka

藤坂公彦



担当

『ドラッグ オン ドラグーン』／『ドラッグ オン ドラグーン2 －封印の紅 背徳の黒－』
／『ドラッグ オン ドラグーン3』キャラクターデザイナー

プロフィール

1973年生まれ。千葉大学・工学部を卒業後、同大学院へ進むも中退し、株式会社ソニー・コンピュータエンタテインメントジャパンに入社。その後株式会社キャビア（現マーベラスAQL）を経て、現在はミストウォーカーに所属。ゲームのキャラクターデザインを中心に、デザイン全般をこなす。代表作は『ドラッグ オン ドラグーン』シリーズ、『THE LAST STORY（ラストストーリー）』など。



Denji Sano

佐野 電磁



担当

『ドラッグ オン ドラグーン』サウンドディレクター・コンポーザー
『ドラッグ オン ドラグーン2 －封印の紅 背徳の黒－』サウンドディレクター

プロフィール

1969年生まれ。株式会社DETUNE代表取締役社長として、ゲームを中心にした作曲家、音楽製作ソフトディレクター・プロデューサーを務める。担当作品は『リッジレーサー』シリーズ、『鉄拳』シリーズ、『I am Synth』、『KORG M01D』など。ほか、CBCラジオ『電磁マシマシ』パーソナリティを務めている。CEDEC AWARD2012では、サウンド部門で優秀賞を受賞した。

コメント

共同楽曲担当者だった相原氏と、クラシック楽曲の恐ろしくも心地よい響きを膨大に抽出していったこと。その響きのみをサンプリングするためだけにフルオーケストラをお願いし、演奏家の方々にドン引きされつつ収録したこと。そして発売後、某巨大掲示板で続々と書き込まれる楽曲に対する痛烈な批判を毎晩呑みながら読み続けたところ、1週間は完全に廃人となっていたこと。などは鮮烈に覚えているのですが、楽曲自体が出来なくて苦しんだという記憶はまったくありませんでした。『ドラッグ オン ドラグーン』という悪夢にうなされながら自動筆記をしていた、そんな感じです。

その10年後、「尽きる」のアレンジをご依頼いただき、まさにふたつ返事で調子よく了承しました。が、よくよく考えてみるとあの頃のヨコオ氏や佐野はかろうじて30代。ほかの開発者はほぼ20代。つまり、若さにまかせた、当時はまだその意味を持たない「中二」感満載で作られた『ドラッグ オン ドラグーン』のあの感覚。それを、40代も半ばのいまの佐野が果たして取り戻せるのかと、とても不安になりました。しかしながら、今回も気がつくといつの間にか、これまでに聴いたことも、書いたこともないような曲が出来ていました。それは、まさに当時のそれ。10年経ったいまも、まだあの悪夢から覚めきれていない佐野はとても幸せ者です。

Keiichi Okabe

岡部 啓一

担当

『ニーア レプリカント（ニーア ゲシュタルト）』サウンドディレクター
『ドラッグ オン ドラグーン3』サウンドディレクター



プロフィール

1969年生まれ・兵庫県出身。有限会社MONACA取締役。株式会社ナムコ（現バンダイナムコゲームス）を経て、2004年に有限会社MONACAを設立。アニメやゲームをおもなプラットフォームに、叙情的なメロディーのボーカル楽曲から、ダンサブルなトラックまでキャッチーな楽曲制作を行う。代表作は『ニーア レプリカント（ニーア ゲシュタルト）』のほか、『鉄拳』シリーズ、TVアニメ『アイカツ！』など。

コメント

『ニーア レプリカント（ニーア ゲシュタルト）』の楽曲制作を始めた頃は、まさかこんなに皆さんに愛されるゲームになるだなんて、思ってもいませんでした。そんな気持ちで始めたプロジェクトが、気がつけば、私のいちばんの代表作になっていました。今回、『ドラッグ オン ドラグーン3』の楽曲制作を担当させていただけることになった時、『ドラッグ オン ドラグーン』、『ニーア レプリカント（ニーア ゲシュタルト）』のファンの方々の期待を考えると、うれしい反面、プレッシャーの方が大きかったです。

そんななか、着々と制作は進み、未だにプレッシャーは感じていながらも、また自分の代表作と言える作品が生まれたと思っています。
ひとりでも多くの人に愛してもらえることを祈っています。

特別企画5

ゲーム業界の闇と人間の業

ヨコオタロウ × 近藤 玲子 (株)スクウェア・エニックス 品質管理部

初代『ドラッグ オン ドラグーン』から、『ニーア レプリカント(ニーア ゲシュタルト)』を経て、最新作の『3』まで、すべてがCERO(ゲームソフトの倫理審査機構)の審査を通って世に送り出されてきた。その手前でブレーキをかける係を担ってきたのが、スクウェア・エニックスの品質管理部・近藤玲子。「もうひとりの作り手」である彼女が、シリーズ中3作品でディレクターを務めてきたヨコオタロウ氏と相まみえる、スペシャル対談を敢行。ヨコオタロウ氏が決めた対談のお題は「人間の業とゲーム業界の闇」。鬼が出るか、蛇が出るか。



倫理チェックの仕事とCEROの審査方法

ヨコオ　ヨコオです。よろしくお願いします。

近藤　よろしくお願いします。

ヨコオ　実は僕、インタビューとか大嫌いなんです。でも、倫理さんと対談したらおもしろそうだなと思って、今回記事として入れてもらいました。近藤さんとは昔からお付き合いがあるんですけど、実際にお会いしたのは今回の『ドラッグ オン ドラグーン3』(以下DOD3)で初めてですよね。

近藤　そうですね。

ヨコオ　僕が担当したのは『ドラッグ オン ドラグーン』(以下DOD1)と『ニーア レプリカント(ニーア ゲシュタルト)』(以下ニーア)なんですが、書類上のやり取りだけでした。謎めいた人がチェックをしてくれて、謎めいたところから回答が返ってくるというね(笑)。

近藤　はい、お互いに(笑)。

ヨコオ　非人間的なやり取りでしたよね。

近藤　機械的でしたよね(笑)。

ヨコオ　自分は開発側で書いたモノを倫理さんに提出しているんですが、近藤さんはどういう立ち位置でお仕事をされてるんですか？

近藤　私の仕事は、おもにテレビゲーム内の倫理的な表現のチェックです。たとえば、PJ(プロジェクトの運営)側が決定したCERO(ゲームソフトの倫理審査機構)のレーティング目標に合わせた、ゲーム内表現のCEROとの調整とか……ゲームの中のテキスト、グラフィックなどに倫理上の問題がないかなど全般を確認させていただくという立場です。

ヨコオ　さまざまなことを確認していただきましたね(笑)。

近藤　はい、しました(笑)。

ヨコオ　それを外部ではなく、スクウェア・エニックスの社員としてされているんですよね？

近藤　そうですね。事前に内部でチェックしないと実際のCERO審査時に意図しないところで引っかかって、たいへんなことになるので。

ヨコオ　CEROさんって、僕ちょっとよくわかっていないんですけど、どうやってチェックしているんですかね？

近藤　審査員は一般から募集された方ですね。20歳～60歳くらいまでの幅広い年齢層で、そのなかから無作為に選出されているようです。私たちのほうは、CEROのガイドラインに沿って、このゲームがどんな内容のものなのかがわかる資料を正直に提出します。で、審査員がそれを独自に審査して結果を出してくださいます。

ヨコオ　1回やってみたいですね、その審査員のバイト(笑)。僕だったら全部Aにするか、Zにするかどっちかですよ。

近藤　確かCEROのホームページに、審査員は訓練されますよ、みたいなことが書いてありますよ。

ヨコオ　訓練？

近藤　はい。

ヨコオ　なんだろ？　AVとか見せて「これはダメだ！　これはセーフ！」みたいなのを、すごい高速で「××○××○×××！」みたいに、エロかどうかを判断していくとか。

近藤　(笑)。(ホームページを確認して)審査員は事前にCEROによるトレーニングを受けています、って書いてありますね。

ヨコオ　そのトレーニング、受けたいですね(笑)。鬼教官が出てきて「オマエ等はクソだ！　倫理の事は何も判ってないクソだ！」とか罵られたい(笑)。それ、受けられるんですか？　誰でも。

近藤　「ゲーム業界と関連のある方は採用しておりません」と書いてありますね。

ヨコオ　残念。

『ドラッグ オン ドラグーン』と倫理

ヨコオ　まず初代の『DOD1』の頃の話なんですけど、そもそもCEROが当時まだなかったんですよね。

近藤　そうですね。正確には2002年6月発足なのですが、『DOD1』の開発初期には存在していませんでした。

ヨコオ　だから適当に確認して出せばいいやという感じで進めていて。当時はまだスクウェアさんとエニックスさんが合併する前でしたから。最初はエニックスさんに確認をしてもらって、台本が決まった直後に合併が決まって(笑)。それでスクウェアさん側の倫理担当者さんにもチェックしてもらったところ、すごい大変なことになったという(笑)。

近藤　私たちのほうで倫理チェックをするタイミングは、大体が企画の前段階で。開発側から「こういう世界観でこういう内容のゲームを作ろうと思っている」というお話をいただくところから始まります。たとえば対象年齢を超えないかとかっていうところも、事前に詰めながらやっていくというのがいつものフローだったんですね。で、当時『DOD1』が出るという噂を聞いていたんですけれども、ずっとエニックスさん側で作られていたものだったので……だいぶ制作も進行しているんだろうなと思ってて。あと、エニックスさんのご担当者さんのほうで、いろいろ調整されているんだろうな、私たちは出番がないんじゃないかな、って思ってたんですね。で、あるときプロデューサーの柴(貴正)さんと、当時上長だった渡辺泰仁さんがいらして、マイルド台本というのをくださったんです。

ヨコオ　マイルド台本？

近藤　はい。これですね。名取(佐和子)さんが書かれているんですけど……。

ヨコオ　あー。

近藤　一応エニックス側で進めてはいたけれど、プラットフォーマーさん(この場合は株式会社ソニー・コンピュータエンタテインメント)から「問題がある」と言われた表現があったので、こういう風に自主的に直そうと思っているんだけど問題ないか、という確認が来たんですね。

ヨコオ　そしたら、問題だらけだったという(笑)。

近藤　そこで初めて「ああ、(倫理チェック)やるんだ」という気持ちになって(笑)。それと当時のスクウェア側の倫理チェックって、子供たちでも安全に安心して楽しめるような内容、ということで足並みを揃えていたので。……そうすると、『DOD1』はターゲット的にまったく違う内容じゃないですか(笑)。ですので、どこに照準を合わせてチェックするべきなのかということを、当時ものすごく悩んだ記憶があります。

ヨコオ　なるほど。当時のスクウェアさんの倫理チェックって基準がひとつしかないというか、「スクウェアだったらこれを許す」っていうひとつのルールやレギュレーションみたいなものが、漠然とあった感じなんですか？

近藤　そうですね。当時エニックスさんはCEROの会員だったと思うんですけど、じつは私たちは……スクウェア側は入ってなかったんですよ。

ヨコオ　大人の事情で(笑)。

近藤　(笑)。ですからCEROを通すことはしていなかったので、「CEROのレーティングってなんだろう」というところから始まったんですね。その前はというと、「これくらいだったらいいよね」というフランクな感じで表現を決めていた部分があったんです。前提としては、過度な暴力表現や過度なエロ表現をしないということでやっていたので。で、この作品のフタをあけてみると、過度、過度、過度って(笑)。

ヨコオ　過度な暴力の表現をするために作られたゲームですからね(笑)。

近藤　そうですそうです(笑)。それで、「えー、じゃあどうしよう」という話をした覚えがありますね。

ヨコオ　『DOD1』は僕の記憶だと、食人表現に手こずりましたね。

近藤　ああ、アリオーシュ。

ヨコオ　そうですね。アリオーシュもそうですけど、印象深いのはレオナール。レオナールが巨大な天使にパクっと食べられるシーンってのがあって、そこもけっこうモメました。

近藤　そうでしたね(笑)。

ヨコオ　ふつうに横から食べられるシーンだったんですけど、ダメだって言われて。さんざんやり取りをした結果「カメラから見て向こう側に立ってるから口には入っていません」みたいな話にしました。

近藤　食人表現に関しては、スクウェア側のチェックというよりどちらかと言うとプラットフォーマーさんの当時の基準なんですよ。

ヨコオ　人を食うの、ダメですよね。

近藤　当時はそうでしたね。いまはけっこうやってるものもあるんですけど。CEROさんが長いあいだいろんなものを審査してくれたおかげで、だんだん許容されてきたのかなっていうような気がします。

ヨコオ　有名なのは、人体を何かが貫通したり、人体が分離したりという表現には厳しいということ。そのつぎが子供の扱いで、子供が殴られたり、何か酷いことが起こるのはダメだっていう。あとは宗教関連がアウトですけど、ゲーム中にもともと特定の宗教が出てこないので、これは問題ありませんでした。

近藤　子供の件は、児童虐待ですね。当時は恐らく海外の基準でチェックしていたんだと思います。

ヨコオ　マナも子供ですけど、設定だけならいいんですよね。具体的な描写があるとまずくて。

近藤　マナの場合は、最終的に巨大化して敵になるじゃないですか。なので、そういう点も相まって大丈夫だったというのはありますね。

ヨコオ　アリオーシュは、本当に全般的にダメでしたね。いまだったら絶対に出せない気がする(笑)。

近藤　チャレンジしてみたいですね。

ヨコオ　えーっ、チャレンジ(笑)？

近藤　個人的には、今ならいけると思うんですけど(笑)。

ヨコオ　でも僕、『DOD1』の時ってそういう「表現の限界に挑戦する」みたいな気持ちはまったくなくて。ナチュラルに作ったら、倫理にすごく引っかかってしまったんです(笑)。すごく反省しましたし、無駄なコストを使っちゃったなという感じだったんですね。倫理と戦うこと自体を目的とはしていなかったので。だから『ニーア』の時はそれで反省して、残酷で暴力的なゲームはやめようと思って。でもヒロインのカイネのセリフにはピー音を入れて、それで全部かわしたっていう。

近藤　そうですね(笑)。

ヨコオ　ピー音入れたらおもしろいなっていうのが先にあったんですけども(笑)。あと、『DOD1』では「殺す」とか「死ね」とかっていう表現が当時ダメだっていう風に最初返ってきたんです。でも台本には、異常な量「殺す」とか「死ね」って書いてあって。で、台本に(該当箇所に)付箋を貼っていったら、厚みが倍くらいになって。でもこれを全部変えていくとおかしなことになるので、変えられるところは変えるんですけど、変えると意味がわからなくなるところはもう変えられないっていう話をさせていただきました。話というか「前後の文脈を見たらそれほど残虐な表現でないことはおわかりいただけると思います」みたいな定型文をデスクトップの片隅に置きながら、それをコピペしてエクセルに貼っていくという作業なんですが。

近藤　いまチェック履歴を見ると、やっぱり当時はかなり厳しかったことがわかりますね。

ヨコオ　CEROによる審査の運用が長くなってから、ちょっとマイルドになった気はしますよね。

近藤　はい、そうですね。

ヨコオ　当時は「なんで俺はこんなことをやっているんだろう」と思いながら、「でも相手も仕事でやってるんだから」と思って一生懸命に返事を書いてて(笑)。ムービーとか作るのにお金がかかるわけだから、「できる前に言って欲しかったな」って思ったりして。

近藤　私も絵コンテの状態から見たかったです(笑)。

ヨコオ　それもさっき言った、エニックスからスクウェア・エニックスさんにシフトした段階で、出てきた問題ですよね。

近藤　当時確かキャビアさんに呼ばれていろいろお話しさせていただきました。岩崎(拓矢)さんと安井(章)さんと佐野(信義)さんの3名と、柴さんに囲まれて(笑)。

ヨコオ　それは『ドラッグ オン ドラグーン2 -封印の紅、背徳の黒-』(以下DOD2)の時？

近藤　いいえ、『DOD1』の時です。

ヨコオ　あれ？　『DOD1』の時って、俺いませんでしたっけ？

近藤　いらっしゃらなかったですね。名刺も確認したんですけど、ヨコオさんの名刺はなくって。

ヨコオ　「会わせたらよくない」と思われたんですかね(笑)。いらいらしてると、キレかねないので。

近藤　(笑)。当時はこちらでダメ出ししたことで、キャストさん全員のスケジュールを再調整して録り直すということをされていたと聞いてましたしね。

ヨコオ　『DOD1』の頃は、無駄なことをいっぱいやってましたね。豪華なキャストだったので、本当にたいへんだったと思うんですけど。

近藤　あの、フェアリーの声優さんの……。

ヨコオ　宮村(優子)さん。

近藤　本当にたいへんだったと思うんですけども。

ヨコオ　そうですね。そういう歴史がありました。そういう感じで『DOD1』の時はすごいたいへんだったので、『ニーア』ではあまりそういう苦労をしたくないなと思ってて。さっき言ったみたいに、ピー音入れて全部かぶせちゃえばいいかなと思ってたんですけど、けっこう引っかかりましたよね。僕の中では、こんなに引っかかるんだっていうのがあって。

近藤　確かいちばん最初のシナリオに、砂の国の王子様(仮面の王)が、敵にやられて内臓が飛び散る、みたいなのがあって。

ヨコオ　あー、そうでしたね。

近藤　それはちょっと発禁ですっていう指摘をしましたね。

ヨコオ　実際問題としては内臓なんてコスト高くて作れなかったんですけど(笑)。あと、何度もやり取りして印象的なのは、最後にエミールの頭だけが飛んでくるシーンがあるんですけど、それが「頭部切断」だからNGだと言われて。(姿が)人じゃないっていう話を延々したんですけど(笑)。

近藤　当時まだ絵がなくて(笑)。

ヨコオ　そう。エミールが何者だか理解していただけなくて、でも実在はしていない姿だから、こちらもうまく説明できずに「人じゃないから大丈夫だと思うんですよ」とか言って。あそこはムービーシーンだから作る前に演出を決めなくちゃいけなかったところで、何度もやり取りした結果、結局作ることになったという。どんないいわけをしたかは、さっぱり覚えていないんですけど。

近藤　「人じゃないので大丈夫」くらいしかインフォメーションがないと、たとえば「断面はどうなるんだろう」とか、「どういう風にちぎれるんだろう」という心配が先に来ちゃって。

ヨコオ　断面なんてありませんからね。

近藤　ですね(笑)。言葉だけだと、私の妄想力もたくましいのでいろいろ膨らんじゃって。で、最後に上がってきたのを見て「あ、うん、確かに問題ないわ」ってコメントしましたね。

ヨコオ　あと、意外と大丈夫だったなってのが、貫通の表現。カイネがグサっと刺されるところなんですけど。

近藤　(CEROのレーティングが)AやBでも、血が出ない貫通の表現をしたゲームがあるので、カイネのシーンも大丈夫だろうと判断してそのままCERO審査に出しましたね。

ヨコオ　あと分離切断表現でも質問させていただきました。どこまで切れたらダメですか？　っていう表を作って。書類に絵をつけて「人間がここまで切れたらダメですか？　ここまでは？　ここまでだったら？」って。そしたら、「基本全部ダメです」みたいな回答で(笑)。

近藤　「人体を分断するのは、とにかくやばいです」ってお知らせしました(笑)。完全に分断するのはダメで、ちょっとパカっとなるぶんには……審査してみないとわからないので悩みましたけど。

ヨコオ　『DOD3』では、まさにパカっとふたつに割れるシーンがあるんですが、それがダメで。さんざんやり取りしたら、皮がパカッと割れて、中に変な黒いものが入っていて、それがニョロニョロって動いているならOKって言われて。ある種、ブドウの皮が剥けるような表現に変えたんですよね。

近藤　断面が見えなければギリOKかなー、みたいなインフォメーションをもとにお話をさせていただきましたね。

ヨコオ　血の量とかも僕の中ではCEROさんの基準に引っかかるというイメージがあったので、それはいつも気にしていました。でも、実際に血の量を減らせとは一度も言われたことがないですね。

近藤　そうですね。

ヨコオ　あと、血の色が赤だとダメで、緑はOKとか。そういうのも昔はあったみたいですけど、最近は言われないですよね。

近藤　はい、血については私も厳しくは見ていませんでした。毎回、若干多いかも？　とは思っていましたが、『ニーア』はCEROのD区分を目標とするならいけるだろうと。そう考えると、『DOD2』はすごい優等生と言いますか、問題となるようなシーンがほとんどありませんでしたね。

ヨコオ　そうだったんですか。

近藤　一部のテキストに関する報告と、あとヤハの設定くらいです。「体を売ってのし上がった」みたいな設定を、ゲーム中で表現してしまうとNGなので気をつけてくださいね、と言った記憶があります。CEROの公式サイトで公開されているんですけど、倫理規定で「売春・買春等を肯定する表現」と「児童売春等の表現」が禁止事項になっているので、(ソフトを)発売できなくなっちゃうんですよ。でもそれくらいで。血の量も、『DOD1』に比べれば少なかったですし。柴さんにも最初に「前作で僕らも勉強したので大丈夫」って言われたんですよね(笑)。それで結果、C区分でした。

ヨコオ　『DOD1』の時の血の量は、「何か必ず言われる」と思って、審査に出す前にあらかじめ倍に増やしておいたんですよ。で、提出して「多い」って言われたら半分に減らして、いまの量に戻るという予測をして出したら、そのまま通っちゃって。「じゃあ倍でいいか」ってなって、そのまま製品にしてしまいました。だからすごい量の血がブワァっと出ますね。これは、倫理チェックが招いた悲劇と言えるでしょう(笑)。

近藤　たしかに『DOD1』も血だまりがすごかったですが、アルティメットヒッツ発売の際に審査したときにD区分という審査結果をいただいていますね。そういった様々な前例が蓄積されてきたところで、今回『DOD3』

では、CEROのD区分ギリギリを狙いたいっていうリクエストをいただきました。
ヨコオ　それ、柴さんが言ったんですよね？
近藤　そうですそうです。
ヨコオ　僕は全然そんな気はなくて。『DOD3』は暴力や残虐さはテーマでは無いので、中身には過激な表現はあまりないですね。ただ笑いの要素として入れたものが、結果的に残虐表現とか性表現としてけっこう引っかかって。そこはモメましたね（笑）。
近藤　そうですね（笑）。
ヨコオ　一番モメたのはオクタというキャラクターが馬と●●●●するシーンですね。結局、出来た動画を見ていただいて、別に問題ないって話になりましたけど。どんな内容かは製品をご確認いただければ（笑）。
近藤　私、そこに至るまでにヨコオさんが出された修正案がものすごく大好きだったんですけども（笑）。
ヨコオ　テロップで「このシーンで馬とオクタは●●●●していません」と流します、って書いたやつですね（笑）。でも、それダメだったんですよ。
近藤　別のシーンで「牧場で馬がのんきに草を食んでいる」みたいな絵もありましたよね。
ヨコオ　ファイブというキャラクターのシーンですね。ドスドス刺されて死ぬカットがあるんですが、そこに放送事故の時に流れるような「しばらくお待ちください」画面を出すっていう。そこにこのお皿（今回撮影で被ったもの）の絵が出てますね。で、音だけ「ドスッドスッ」って出てるという。そういうシーンが、ゲームを始めて早々に出てくるんですよ。気に入ってるシーンの一つです（笑）。

ゲーム倫理の知られざるアレコレ

ヨコオ　「倫理チェックの順序」って一体どうなってるんでしょうか？　たとえば、僕らのような開発部隊がいて、その上に御社の倫理さんがいて、その上にSCEさんみたいなプラットフォーマーさんがいて、その上にCEROがいるっていう……そういう感じなんですか？
近藤　順番としては、開発のほうでまずチェックしてもらって、そのあと私たち倫理のほうでチェックをして、CEROの審査を受けてレーティングを取得する。で、取得したあとにマスター（ソフトの完成版）を入れて、その段階でプラットフォーマーさんのチェックを受ける。この基準がズレてると、CEROは通ったのにプラットフォーマーさんは通らなかったというようなことが起きるんですよね。
ヨコオ　はいはい、ありますね。それで、CEROさんとプラットフォーマーさんの両方を想定して、近藤さんみたいな社内の倫理さんがチェックされると。
近藤　はい、そうですね。ただプラットフォーマーさんの倫理基準というのが、こちらに情報としてほとんどないんですよ。なのでいままでの経験則で、前はこういうことを言われたから次回から注意しようという感じで。
ヨコオ　以前から思ってたんですけど、倫理表現って僕ら開発と近藤さんみたいな倫理担当さんが書類上で戦うわけじゃないですか。「これがOKでこれがNG」みたいな感じで。でも、本来の戦う相手はプラットフォーマーさんかCEROのどちらかなわけですよね？　でも、それじゃない前の段階で仮想演習している。なんかすごくSFっぽいですよね（笑）。
近藤　確かにそうですね（笑）。
ヨコオ　本当は戦わなくていい敵と一生懸命に戦って、しかも勝利がないという。いずれ戦うかもしれない宇宙人を相手に、人間同士が戦っているみたいな、そういう状態の……。
近藤　シミュレーションなんですよね（笑）。
ヨコオ　そうそう、まさにシミュレーション。これ、意外にも皆さんがご存じない「倫理の実態」だという気がするんですね。
近藤　はい、そうですね。
ヨコオ　だからよく「CEROが、CEROが」って言ってる話も、じつはCEROが顔を出したことなんていままでほとんどなくて、基本的にはスクウェア・エニックスの倫理さんとの仮想演習がすべてだっていう。で、そこから先は見えない。物語でよくあるパターンだと「見えない敵」っていうのは実はいないんですよね。これは無駄な戦いなのかもしれない（笑）。
近藤　（笑）。実際にCEROの審査にかけてみるまでは、本当にNGなのかOKなのかがわからないのは確かです。こちらで問題視している点が、じつは審査にかけた時に問題視されないかもしれない、でも保障がないという怖さもあって。無駄だと思われても、やらざるを得ないんですよね。

ゲームの倫理チェックの歴史

ヨコオ　昔からゲームの倫理チェックってあったと思うんですが、近藤さんはいつ頃からこのお仕事をされているんですか？
近藤　私がこの仕事を本格的にやるようになったのは、10年くらい前ですかね。
ヨコオ　10年くらい前。プラットフォームで言うと、何くらいから？
近藤　"プレイステーション 2"が出るか、出ないかくらいの時期ですかね。
ヨコオ　そうすると、割と（業界が）成熟してからなんですね。
近藤　はい。
ヨコオ　あの、昔……たとえば『スペースインベーダー』の頃とか、ゲームの表現ってまだ未熟で業界としてもやんちゃな時代で。ゲームって、もともとゲーセン（ゲームセンター）が発祥だったじゃないですか。で、昔のゲーセンって不良のたまり場というか、薄暗いイメージでしたよね。
近藤　任天堂さんからファミコンが発売されて家庭内でゲームが出来るようになって、ゲームのイメージは明るく身近なものになりましたよね。ゲームセンター自体も昔と雰囲気がだいぶ変わって、女性も気軽に訪れることができる場所になりましたね。
ヨコオ　最近のゲーム業界は、認知度もずいぶん上がってきて産業として成熟してきている。でも小説とか映画とかテレビに比べて、ゲームの倫理は厳しい、というイメージがあって。そんななかで、ゲーム倫理っていうのがこれからどのへんに位置すべきかっていうことを考えるんですよね。そのあたりを近藤さんにご意見いただきたいなと。
近藤　えー！
ヨコオ　作ってる側はふつう……ふつうっていうのは、だいたい映画とか小説でOKになっているくらいの表現はやりたいな、っていうのがあると思うんです。でもゲームはそこまで出来ていないなか、取り締まられている方々はこれからどうしていきたいのかなーと思ったんですよね。
近藤　正直、考えたこともなかったですねー……。
ヨコオ　これまでに積み上げてきた過去の（倫理規定に引っかかりそうな）表現の例も、ほとんど開発と倫理担当さんが作ってきたと思うんです。プラットフォーマーさんじゃなくて、CEROさんでもなくて、我々が戦ってきた結果、要は仮想戦闘の結果出てきたものという。つまりこのやり取りこそが、未来のゲーム文化を創っている。そう考えると、どこまで挑戦してどこまで規制するかってけっこう重要なんだよなって思うんですよ。
近藤　はい。暴力表現についてはまだまだわからないことも多いので、私も今後いろいろとチャレンジして開拓してみたいという野望があります。内臓って本当はどこまで表現していいの？　とか。リスクが大きすぎるので開発側と足並みを揃えるのが重要なのですが。ただ、アダルト的な表現に関しては、家庭用テレビゲーム機という縛りがある限り、たぶん許されないんだと思うんですよね。まだまだゲームは子供のものだという認識があるうえに、だいぶ浸透してきてるとはいえ、大多数の人が「レーティングって何？」って思ってる現状があります。そんななかで、たとえZ区分のゲームであっても、アダルト表現を解放しようものなら大問題になるんじゃないかなと。AVなんかは、もともと大人のものだという前提があるからこそできるものだと思っています。
ヨコオ　AVは、そういうはっきりした区分が国にあるから、それらとふつうの表現がはっきりわかれたっていう感じなんですかね。
近藤　あの、ちょっとAV業界には詳しくないんですが……（笑）。



業

ヨコオ　これを機に、勉強していただいて（笑）。
近藤　そうですね（笑）。
ヨコオ　家庭用テレビゲーム機というプラットフォームも、もう最近あやしくなってきていて、クラウドだのスマホだのっていう、いわゆるなんでもできる機械に（ゲームが）入っていく。そうやって、CEROさんにしばられない環境に、もういますでになりつつあるじゃないですか。そうすると、そこにはもうエロコンテンツって死ぬほどあるので、そういうのと合わさっていくのかなと思っているんですけど。そうしたらスクウェア・エニックスさんの中でも緩くなっていくんですかね。
近藤　変化はあるでしょうね。世の中の動き、ユーザーさんの捉え方などを見ながら決めていくことになるんだと思います。たとえば●●●●●●●もいずれは●●●。
ヨコオ　これ、記事には書けないんですねきっと（笑）。

奇形化する倫理観

ヨコオ　今回『DOD3』の制作中に、『ニーア』でも使ったようなピー音が今後NGになるかもしれないって聞きまして。そもそも表現方法のひとつとしてモザイクもダメなんじゃないかっていうようなことも聞いて。でもピー音やモザイクって、システム的なエフェクトに過ぎないじゃないですか。ゲーム中に●●●●していることをモザイクで隠しても、ダメなものはダメだ、っていうのは理解できるんですけど、モザイクが全般的にダメだっていう話になると……たとえばこう、ここにお茶が置いてあって、それをモザイクで隠すという表現をゲームでやろうとするのもダメなんですか？
近藤　モザイクを使用して、いわゆる裸体の大事なところをテケテケテケって隠したりとかはNGですね。あと、あえてグロいものをモザイクで隠して、残虐さを助長させるみたいなことは危険だという認識でいます。逆に、キャラクターとか他社の商標に関係するものを隠すぶんには、大丈夫なはずですよ。
ヨコオ　あれ？　そうなんですか？　僕は基本的にダメなようだと聞いて……じゃあ、次回から使おうと思うんですけど（笑）。
近藤　性的だったり暴力的なこと以外だったら大丈夫ですね。たとえばテレビで犯人とか匿名の人たちを映すときに、目や顔のあたりにモザイクをかけることってあるじゃないですか。あれはぜんぜんOKですし。使いかたですね。
ヨコオ　なるほど。じゃあなめこのキャラクターにモザイクがかかっているとまずい、とかあるんですかね。
近藤　なめこ！　それは……なめこだってわかっていれば大丈夫なんじゃないかなぁ（笑）。
ヨコオ　じゃあ、次回作ではなめこを出します。
近藤　でも、しかるべきところになめこが生えていて、テケテケしてたらダメだと思うんですけど。
ヨコオ　しかるべきところ（笑）。じゃあたとえば、男性の股間になめこが生えていてモザイクがかかっていると、なんとなくそれを想起させるからダメってなって、じゃあ乳首に生えてたらいいのかっていう。そのへんの感性って、なんだかすごい中学生っぽいですよね。
近藤　確かに（笑）。
ヨコオ　CEROさんや倫理さんの想像がたくましいがゆえに、NGになってることが多いような印象で。しかもその結果、すごく歪んだ表現が生まれているっていう。たとえばほかの仕事で知ったんですけど、「アマゾン（Amazon）」は商標だからダメだけど「ゾンアマ（Zonama）」だったら、そんな会社は存在しないから大丈夫っていう。でも、「ゾンアマ」って言ったって「アマゾン」のことだと伝わるじゃないですか。「マクドナルド」を「ワクドナルト」って言ったりするっていうのも一緒です。とにかく、そういう表現の奇形化が起きている。結果、倫理さんっていう人々を中心に、歪んだ世界がぶわっと生まれているなという印象で。
近藤　（笑）。
ヨコオ　ある種、モザイクだってそうですよ。AVも、モザイクがあったほうが想像力が働いていい、みたいな話がよくありますけど、あれは取り締まろうとしたがゆえに奇形化して生まれた表現です。さっき言った、赤い血がダメだから緑の血を出すっていうのもおもしろいなと思いますし、あと子供の虐待表現もNGだけど、じゃあ大人ならいいのか、その線引きはどこにあるんだっていう。一般の方にはわからないし、たぶんCEROさんも倫理さんも意図はしていないんですけど、生まれてくるものはすごく変な世界で。
近藤　確かに修正することで本来の流れがおかしくなっちゃってるってのは、まれにありますよね。伏せ字やピー音に関しても誤解があるかもしれないんですけど、本来はスクエニ倫理的には問題視してはいないんです。
ヨコオ　あ、そうなんですか？
近藤　昔のゲームは、単純にテキストだけが表示されるようなものが多かったじゃないですか。でも、今ではムービーにボイスが入るのが当たり前で。なので万が一どこか（CERO審査やマスターチェックの時点）で引っかかっちゃうと、直すスケジュールの調整が困難なケースが多いんです。たしかに前例がある表現とはいえ、基準が変わっている可能性があることを考慮して毎回慎重に進めたほうがよいとお伝えしているだけなんです。
ヨコオ　じゃあスケジュールに余裕があれば、「1回出してみましょうか」っていうのも……。
近藤　はい、修正コストさえ大丈夫なら、まったく問題ないです。
ヨコオ　とはいえ、だいたい開発期間に余裕はないんですけどね。
近藤　（笑）。
ヨコオ　ちょっと話を戻すんですけど。モンスターなら殺してもいいけど、人は殺しちゃダメみたいな話はよくありますよね。あれ、基本的には「人が少しでも混ざっているとダメ」という話を昔からよく聞くんです。たとえばサイボーグで頭だけが人間で、体が全部機械になっていてもダメだけど、人そっくりなモンスターだったらOKとか。そういう不思議な……見た感じの感性よりも、成り立ちを大事にしていると言いますか。あれはどこからきた文化なんでしょう？
近藤　難しいですね。
ヨコオ　結局「人じゃなければOK」っていう文化から、ロボやゾンビを倒すゲームがすごい増えていって……。
近藤　ロボやゾンビだってかわいそうですよね（笑）。
ヨコオ　はい、かわいそうです（笑）。僕らも「やっていい」って言われたことはやるので、これからもそういうゲームがどんどん増えていくんじゃないかと思うんですけど、基準はなんなんですかね。知性のあるなしとか関係しているのか……。あと、子供はよくて大人がダメっていうのも面白いです。昔、銃で撃つゲームで「女・子供・動物はダメだけど、オッサンならいい」という話を聞いて。オッサンなら撃ってもいいのかっていう（笑）。その感性がすごいなって思いましたね。
近藤　恐らくなんですけど、イメージの問題だと思うんですよね。子供が撃たれちゃうのはかわいそうなんだけど、オッサンは……オッサンもかわいそうなんですけど……。

ヨコオ　でも僕はそこから、「人の闇が暴かれるな」っていうふうに思うんですよね。たぶん、かわいいタイプの生き物を残虐に殺すみたいなのはダメで。でも『ギアーズ オブ ウォー』みたいに、おぞましいクリーチャーを「バン！」と撃って倒すみたいなのは平気。でもそれは本質的には容姿の差別でしかない。醜い者は差別していいということを、ある種定義していることになっていると思うんです。ほかにも、たとえば売春表現がNGというのも、性風俗に関わっている方を表現してはいけないと言っているのと一緒で、ある種の差別的な対応だと思います。他にもクジラは殺しちゃいけないけど、マグロは殺していいとかっていう、その価値観もシビレます。その線引きって知性の問題だと思うんですけど、そうするとバカは殺していいのか？　っていう。そういう歪な表現が倫理さんを通ることで生まれているっていうのが興味深いんですよね。

近藤　そういった見方は非常に勉強になります。

ヨコオ　実際の人に対しても、この人たちはそう思ってるのかと。秀才は生き残るべきで、バカは死ぬべきだと。だからそういう歪んだ価値観と言いますか……ある種、見た時に多くの人がダメだと思うことを掘り下げていくと、すごくいびつな世界観が現れてくるという。でも、僕はそれを改善したいわけじゃなくて、そう考える人間っておもしろいなって思ってるんです。だから倫理さんの回答も、いつもおもしろいなと思って拝見させていただいております。

近藤　ありがとうございます（笑）。でもあれですよ。自分の中でこれはOK、これはNGって分類していくと、自分の中でも歪みが出てきちゃう。そのジレンマは抱えていますね、つねに。冷静に考えると「なんでこれダメなんだろう」ってなって、眠れないこともあります。

ヨコオ　それは自分の感性とルールが合わない時？

近藤　合わない時ですね。

ヨコオ　どういうところが個人的に合わない時があったんですか？

近藤　やっぱり、自分自身もユーザー出身なので「これくらいいいじゃん」って思う表現はいっぱいあります。だから人間とゾンビの差についても、本当は個人的には納得していないんですよ。腐ってるか腐ってないかっていう話なだけで、元は一緒じゃないですか？

ヨコオ　そうですね。

近藤　ゾンビだったら首や腕が切れてもOKだけど、人間っていうだけで発売できなくなる可能性が出てくる。それってどういう差なんだろうっていうのは思いますよ。

ヨコオ　よく思うのは、ひとりひとりに聞いていくと「その倫理観はおかしいよね」っていう人ばっかりだと思うんですよ。でも、組織や社会になっていく課程で、ゾンビはいいけど人はダメだよねみたいな、価値観が醸成されていく。そういう認識の成立って、差別意識の原理を見ているようだなって思うんです。個人の感性から離れて、ルールだけがひとり歩きしていくっていう。

近藤　やっぱりこれだけ大きい組織になってしまうと、保守的にならざるを得ないからでしょうか。

ヨコオ　あー、そうですよね。

近藤　自分ひとりの考えで推し進めるわけにもいかないので、守らなくちゃいけないものを、ぐっとこらえて守る感じですね。

ヨコオ　僕は作る側なので作るのが楽しくてやってるんですけど、倫理さんってわけわからないものを直すのが仕事じゃないですか？　そういうのって、すごくしんどいんじゃないかなって思うんですよね。その仕事自体を、イヤだなと思ったことってないですか？

近藤　ありますね。やっぱり基本的には、クリエイターさんたちの敵側になるわけじゃないですか。

ヨコオ　あー。

近藤　目標のレーティングに収まった時なんかは、プロデューサーさんから「ありがとうございました」っていう言葉を頂いてホッとするんです。でも制作の現場からは「あいつに言われたから直すことになった」って憎まれているんだろうなって。

ヨコオ　なるほど。マジメにゲームを作ってる人、真摯に表現に取り組んでいる人は、確かにストレスを感じるかもしれないですよね。僕みたいに半笑いで作ってると、じゃあ「下かな？」とか、ボールの投げかたを変えてみたりできるんですけど。

近藤　半笑い（笑）。

ヨコオ　最近とくに『DOD3』でやり取りさせてもらって、言葉を言い換えるだけでセーフになっていくというのもおもしろくて。

近藤　オクタのセリフとか、けっこう変えましたもんね。オクタって男性の性的興奮を示す言葉をたくさん使っていて、いわゆる局部の直接的な表現をバンバン言ったりしてたので、今回問題となった点は（書類を見て）……全部で44ヵ所ありました。

ヨコオ　オクタの変なセリフの代表例と言えば……。

近藤　「セルフジョイ」ですか？

ヨコオ　そうですそうです。あれ、最初は●●行為とか●●●●とかふつうに直接的に言ってたんですけど、ダメだって言われて。それでセルフジョイって言い換えて。

近藤　そう来たかー！　と思って、私もバカ受けしてしまいました（笑）。

ヨコオ　でもセルフジョイという言葉だったら大丈夫なうえに、意味も伝わります。ということは、倫理さんによって新たな性表現が生まれてしまった瞬間だったわけです。だから、倫理さんがいけないものを生んでいるんです。

近藤　言われてみれば、本当にそうですね（笑）。

ヨコオ　僕は意味さえ伝わればいいんです。だから意味が伝わるように言葉を換えればいいだけで、伝わらないことはないなっていう結論にたどり着いたんですね。これは自分でも大発見だったんですけど。

近藤　そうですね。今回ものすごい数の言い換えのバリエーションを拝見させていただいて（笑）。

ヨコオ　「やりまくりたい、しまくりたい、●●●●したい」の、最後の「●●●●したい」が強姦の表現って言われて、「アセンションしたい」に言い換えたんですよね（笑）。

近藤　ちょっと原案が激しすぎたんです。私も絵の激しい表現っていうのはたくさん見てきたんですけど、テキストでっていうのはほとんど経験値がなくって。

ヨコオ　ほかにも、オクタのセリフで「ゼロ様の上と下のお口を●●●●ましょうか」っていうのがあるんですけど、これがダメって言われて。「上と下のお口と会話させていただきましょうか」に言い換えたんですけど、僕の中ではぜんぜん変わってないですこれ（笑）。

近藤　可能な限り、なるべくマイルドにマイルドに変更していただけるようお願いしました（笑）。

ヨコオ　「不眠不休で●●●まいります」も「不眠不休でセルフジョイしてまいります」になりましたし。あと、ナイトジョイという言い換えを使いました。「私めと●●●●尽くしてはくださるまいか」というのを「私めとナイトジョイしてはくださるまいか」に言い換えて、その結果プレイの幅が広がってる印象になっているという（笑）。

近藤　はい、非常に（笑）。

ヨコオ　「敵兵総●●の出迎えでございますか」っていうのも、「敵兵はモーニンググローリーでございますか」みたいに言い換えて。ただどういう表現でも迂回表現を良しとするならば伝えることは出来ちゃうので。結果、倫理さんの懸念が新たな表現を生み出しているので、僕はすごくおもしろくなったなと。『DOD3』はけっこうそれが多いですね（笑）。

近藤　そうですね（笑）。

ヨコオ　ひどいセリフを言っているシーンで、適当な音楽を流して「いまひどいことを言っているので適当な音楽を流しています」みたいなテロップを出す箇所があるんですけど（笑）。それだって、言われて「ダメなのか」って思って考えたから生まれたわけで。でも最終的にはこっちのほうがおもしろいなと思いましたし、そういう新たな境地に、今回は近藤さんとふたりで踏み入ったなと思っています。

近藤　私も本当に未知なる境地を体験させていただきました。結果的には目標レーティング内に収まりましたし、懸念していたところもすべて



闇

CEROさんからOKと言われたので。これはすべてヨコオさんのアイデアのおかげだなと。

ヨコオ　いや、『DOD3』は、CEROさんおよび近藤さんの闇が生んだ奇形児です（笑）。

近藤　私の闇……（笑）。

ヨコオ　ふつうに作ってたら●●●●って言ってたのにセルフジョイっていうふうになったわけですから。倫理さんによって新たな……なんだろう、バイ菌を駆逐すると、もっと強力なバイ菌が来るみたいな。そういう感じで。ダメなものをやっつけると、また新しいダメなものがやってきて世界をダメにしていくっていう。そういうことをまざまざとやらされているなっていう感じでしたよね。

近藤　今回、問題があった点が全部で44件と多いなかで、それを全部私がひとりで見ていて。内容について問題があるものは「ここがNGですよ」とお戻しするんですけど、さすがに自信がなかったので、じつはアシスタントプロデューサーの原田（一弘）さんに「原田さんはどれがやばいと思います？」って聞いたんですよ。そうしたら、男性の意見って、やっぱり私が考えるのとは違うんですよね。たとえば今回報告させていただいたなかに、「性奴隷」っていう言葉があったんですけど。私はまったく問題ないと思ったんです。でも、一応性的表現なので引っかけておいて、あとで原田さんに聞いたら「絶対ダメじゃないですか」って言われて（笑）。ああ、そうなんだっていう。

ヨコオ　原田さんが性奴隷なんじゃないですか？　誰かの。

近藤　え（笑）。

ヨコオ　そうとしか考えられないですよ。だからやましいことがあるから、そういうところに引っかかるんであって。書いてくださいコレ。「原田さんは誰かの性奴隷です」って（笑）。

近藤　原田さん、かわいそう……（笑）。あと、オクタが森の入り口に入っていくシーンがあって。そこで「ささ、ずっぽり入りましょう」って言うんですけど、私は（性的な）印象が強いなと思って報告をしたら、原田さんは「大丈夫じゃないですかね」って。そこも意見が分かれたんですよね。

ヨコオ　アレですよね。ゲームをプレイされる方が不快になるかどうかって、僕も気にするところではあるんですけど。そこの線引きってすごく難しくて。血が出てるだけでもけっこうイヤだっていう人がいると思うんです。そのためにCEROがあるという風には理解できているんですけども。でもCEROの（レートの）Dの中では、今回のやつってそんなにエロくもないし、暴力的でもないと僕は思っているんです。たとえばよそで、女の子に水鉄砲で水をかけるゲームってあったじゃないですか。

近藤　あ、ありました。

ヨコオ　ああいうののほうが、よっぽどエロいと僕は思いますし。ギャルゲーとか女の子が出てきて恋愛をするようなゲームのほうが、イメージが膨らんでエロい。こいつ（オクタ）はジジイだから、エロくもなんともないですよ。なのにそこで戦って、新たな表現が生まれてるんだからおもしろいですよね。

近藤　ですね（笑）。

ヨコオ　あ、あとゲーム用語に言い換えている箇所もありましたね。ゼロが「オクタの●●頼みが酷すぎる」って言った時に、オクタが「そんなバカな。私の巨大なジョイスティックはゼロ様にとって……」みたいな。そこからもうずっとゲーム用語で、性行為の回数をコンティニュー回数って言ったり、「1プレイの質を大事にしろ」って言ったり。そういう言い換えもあったんですけど、これをCEROが……ゲーム業界の人が、アウトにしてきたらおもしろいなと思いながら書いて出しました（笑）。

近藤　私もドキドキしながら審査に出しましたけど、ぜんぜん問題なかったですね。

ヨコオ　もうオクタが言ってるだけで、なんでもそういう風に聞こえてしまうという。でも実際修正を強いられても、なにかしらの訂正を入れても伝わるようにすることは可能っていうのは、本当に今回わかったことですね。

近藤　いい経験になりました。

ヨコオ　僕もいい経験になりました。その、なんだろう。いい経験になったというか、表現者として豊かになった気がします。

近藤　よかったです～（笑）。

ヨコオ　放送事故の画面とかめちゃくちゃですよ（笑）。最初はちゃんとイベントのムービーがあって、血が出てる画面があったのに。あれこそ、近藤さんに言われなければ絶対に出てこなかった表現です。ほかにもディトの暴力描写を変な音楽をかけて適当にごまかすというシーンで、実はディトの声優さんにすごい熱演してもらったんですが、その音声もカットになりました。もったいないなと思ったんですけど、音楽が鳴ってるほうがおもしろいなって思って。やっぱりCEROさんおよび倫理さんは、呪われた子を産んでしまったんですよ（笑）。

近藤　すごい責任重大ですね（笑）。

ヨコオ　あ、でも近藤さんから「こうしたらどうですか」っていうアイデアがたまに来るんですけど、それがすごくつまらなくて（笑）。

近藤　違うんですよ（笑）。かえって案を出しすぎると、こっちの主張が強くなりすぎちゃうんで、やっぱり考えていただきたいんです。それで控えめに……。

ヨコオ　たとえば、オクタが馬と●ってるシーンで、「馬と●るのはダメです。尻をなでるくらいならいいですよ」って言ってきたんですけど、いやそれ全然面白く無いです！　みたいに返して。結果は変な画面になったのでよかったんですけど……。まだあれ、全部完成版を確認してもらっていないと思うんですけど、すごくオクタの表情がいいです。

近藤　あ、それ昨日見ました（笑）。

ヨコオ　ああ、そうでしたか。最後、こっち見て「キラーン」って（笑）。あれは近藤さんを見てます。

近藤　私を……（笑）。

ヨコオ　そうです。近藤さんを見て「俺はいま、●ってるぞ。近藤よ」って（笑）。

近藤　ちょっともう1回見てみます（笑）。

ヨコオ　たまたまモーションキャプチャーのモーションにこっちを見るしぐさがあって、それをおもしろいから残したんです。あれは近藤さんへのメッセージですよね。

近藤　そうだったんですね。じゃあオクタさんの気持ちを真摯に受け取ります（笑）。

ヨコオ　まあそんな感じで、結論を言うと「僕は悪くない」っていう話だったんですけども。

近藤　（笑）。

ヨコオ　以上、『ドラッグ オン ドラグーン3』の闇でした（笑）。『DOD3』がああなっちゃったのは、近藤さんのせいです。

近藤　私のせいです。すみません（笑）。

ヨコオ　セルフジョイ、ナイトジョイも、全部近藤さんのせいです。

近藤　ツイッターで検索すると、すでにものすごい数の方に使っていただいている言葉ですしね。私も責任を持って、積極的に使っていきたいと思います（笑）。

ヨコオ　是非使ってください（笑）。

（2013年8月　スクウェア・エニックスにて収録）

14歳の歌

書き下ろし小説「ドラッグ オン ドラグーン」編

著者・名取佐和子　原案・ヨコオタロウ

DOD

特別企画❻-1

君は光さ。僕の世界を照らす光。
気まぐれなプリズム、ゆらめいて。

『光と約束』より

渾身の力をふりしぼって、真上から相手を叩き潰すように斬り込んだイウヴァルトの剣を、カイムは軽くいなした。力比べになると、頭ひとつ分の身長差、筋肉量の違う体格差がものをいう。もうじき18歳と14歳になったばかりという成長期4年分の年の差とカイムの類い希な剣の才能は、常にイウヴァルトを圧倒した。

イウヴァルトは荒い息をつき、少し離れた庭園から兄と幼馴染みの剣の稽古を熱心に見守るフリアエを目の端にとらえる。

(フリアエの前で、僕はまたカイムに負ける)

チェインメイルの下で汗が噴き出し、耳の奥に父イプリスの声がよみがえった。

『イウヴァルト、喜べ。ガアプ様はおまえとフリアエ様の結婚を望んでおられるぞ』

今朝、剣の稽古に向かう息子をわざわざ呼び止めた父の頬は紅潮していた。ガアプから信頼され、臣下というより親友として家族ぐるみの付き合いを許されてきたイプリスといえども、8代つづく一国の王の口から直々に「娘をやる」と言われたことに、この上ない誇りと喜びを感じていたのだろう。

(でも父さん、フリアエはこんな弱い僕との結婚なんか望んでいないんじゃないかな?)

弱気は集中力を削ぎ、隙を作る。イウヴァルトの剣先がぶれたのを、カイムは見逃さなかった。重い剣がうなりをあげて風を裂き、イウヴァルトの喉元に突きつけられる。剣を握ったままあわててふり上げたイウヴァルトの籠手にカイムの剣の柄がまともにぶつかった。鈍い衝撃を受け止めきれず、剣がイウヴァルトの手から離れる。父に無理を言って買ってもらった大剣がやわらかい芝に突き刺さるのを、イウヴァルトはただ見ていることしかできなかった。

(僕は、弱い)

「怪我はないか?」と気遣ってくれるカイムも、「大丈夫?」と心配そうに駆け寄ってくるフリアエも、イウヴァルトは無視する。無言で剣を引き抜くと、逃げ出すように城を後にした。剣の師匠でもある国王ガアプが近隣諸国への視察旅行に出て、今日この場にいないことだけがせめてもの救いだった。

屋敷に戻ると、イウヴァルトは人払いをして部屋で1人になる。使用人達の足音が十分遠ざかったのを確かめてから服を脱ぎ、生まれたままの姿になった。石壁の隙間から入る風がそよそよと金色の産毛をなでつけていく。窓から射す淡い光が、部屋の陰影をやわらげる。屋敷の庭に巣を作った鳥達の囀りを聞きながら、イウヴァルトは頭のてっぺんから足の爪先まで、自分の身体をじっくり検分していった。

(僕の髪……赤いくせ毛。色も髪質も最悪だ)

剣の稽古でいくら汗を掻いても、メイルを脱いで頭をひと振りすれば元のさらさらとした質感に戻るカイムの黒髪を思い出し、イウヴァルトは舌打ちする。

(僕の肌……なぜ髭も臑毛も生えない?)

せめて生白い肌の色をもう少し濃くしたいと、カイムに倣って城の中庭で日光浴をしたことがあったが、皮膚が真っ赤に腫れあがっただけだった。しかも後日、腫れが引くとまた元の生白い肌に戻ってしまった。

(僕の手足……嫌になるほど細い。筋肉がつかないのは、なぜだ? カイムに倣って毎朝1000回も素振りしているのに、腕も足もちっとも太くならないし、胸板も薄いまま)

細身ながらもきっちり引き締まったカイムの美しい筋肉がまぶたの裏に浮かび、イウヴァルトは目眩がするほどの羨望を覚える。

(僕の身長……なぜ伸びないのだ? このままでは、カイムに追いつくことはおろかフリアエにまで抜かされてしまいそうだ)

1つ年下の少女と変わらないほど華奢な自分の体が、イウヴァルトは許せなかった。

(男なのに。僕は男なのに。女を守れる男でありたいのに)

カイムもフリアエも「この夏が過ぎれば、イウヴァルトも一気に大人になる」と慰めてくれるが、裏を返せば「今は子どもだ」と言われているわけで、嬉しくもなんともない。

(やっと声変わりしたのが、唯一の救いか)

イウヴァルトは丸く突き出た喉仏を大事そうに何度もさすった。

(僕は早く大人になりたい。早く大人の男になりたい。フリアエに見合う男に!)

イウヴァルトの視線が下半身に落ちる。男性にとって大事な部分が男の子のままであることが、現在のイウヴァルトの最大の屈辱であり悩みだった。

「お子様め!」

イウヴァルトは吐き捨てるように言うと、そそくさと下着をつけた。

服を着たイウヴァルトは机に向かい、引き出しからビロードの小箱を取り出す。箱の中には、琥珀色の液体が揺れる小さなガラス瓶が入っていた。

イウヴァルトは眉をしかめる。ガラス瓶を顔の前に掲げ、陽に透かしたり、蓋を取ってにおいを嗅いだりしていたが、やがてガラス瓶を傾け、一気に飲み干した。次の瞬間、はげしく咳きこみ、何度もえずきながら水差しを求めて走る。震える手で銀色の水差しをつかむと、注ぎ口から直接水をあおった。

「くそっ。苦すぎるよ!」

あおった拍子にこぼした水と涙と鼻水で顔を光らせたまま、イウヴァルトは唇を歪める。

「でも、これで僕は……」

低い笑い声が漏れた。イウヴァルトは丈夫な麻糸で綴られた1冊の帳面を机の引き出しから取り出す。ペンをインクに浸したまま宙を睨む。やがて服の袖で乱暴に顔をぬぐうと、背中を丸め、息もつかずに書き出した。紙の上はもちろん、服や顔にも濃紺のインクが飛び散ったが、陶然とペンを走らせるイウヴァルトの手は止まらない。

君に似合いの男になりたい。
走り出した僕は迷子の子犬。
道しるべは、ほら、君のくちびる。

『妄想ラビリンス』より

異変は真夜中にやって来た。猛烈な吐き気で目覚めたイウヴァルトは、そのままベッドに夕飯に食べたものをすべてぶちまける。

「おい……誰か……」

声がかすれ、視界が霞む。震える指先は氷のように冷たく、悪寒が脊髄を這いのぼってきた。胃の中が空になっても吐き気は止まず、黄色い胃液が後から後から突き上げてくる。

最初に部屋に飛び込んできた使用人が「もしや毒!?」と叫んだことで騒ぎは大きくなった。ついにはイブリスまでもが現れる。父は吐瀉物のすえた臭いの中、ベッドの上で四つん這いになったまま動けずにいるイウヴァルトに手を貸し、清潔な床の上へとおろし、汚れた寝間着を着替えさせてくれた。

「一体どうした? 拾い食いでもしたか?」

「僕は犬じゃない」

イウヴァルトは膝を抱えてうずくまり、弱々しい抗議の声をあげる。そしてかかりつけの医師、親、使用人……ぐるりと自分を取り囲んだ面々の心配そうかつ眠そうな顔を見回し、頭を垂れた。

「薬を……飲んだだけだ」

目ざとい使用人がさっそく「これですか?」と屑籠の中から小さなガラス瓶を拾いあげる。底に薄く琥珀色の滴が残ったガラス瓶は、そのまま医師の手に渡った。

「はて。これはなんの薬ですかな、イウヴァルト様? 私は処方しておりませんぞ」

「せいちょう……そくしんざい」

「は?」

「成長促進剤! 身体の成長を促す東洋の薬だ。ジャンの店で買った」

「ジャンの店ですと? あんな小汚い雑貨屋の扱う薬など……」

医師は小馬鹿にしたように肩をすくめ、ガラス瓶のラベルを大声で読みあげる。

「効用……身長増。体毛濃。陰茎太長……? 注意……男性用。ご婦人の使用はかたく禁じる……? 薬材……ははあ、なんとまあ……食あたりしても文句は言えませんな。イウヴァルト様、これは薬ではありません。あなた様はジャンに一杯食わされたのです」

使用人達のざわめきの中に嘲笑と非難が混じってくる。イウヴァルトは耳まで赤くなった。妙薬を求め、わざわざ付け髭につば広帽子で変装までして、人目を忍んで買いに行った自分が情けない。やっぱり僕は世間知らずのバカな子どもだ、と肩を落とした。

しょげかえったイウヴァルトの横で、イブリスがみんなを部屋の外に出す。「手間をとらせたな」とねぎらいつつ金貨を握らせ、さりげなく口止めを強いることも忘れなかった。

部屋で2人きりになると、イブリスは表情を引き締め、腕を組んだ。

「イウヴァルト。おまえはたしかに14歳にしては小さい方だろう。しかし、成長期はこれからさ。現にカイム様だって15の頃はまだまだ子どもの体であられたぞ。そう焦るな」

イウヴァルトは自分だけでなく父の体面も潰してしまったことへの叱責を覚悟していたが、イブリスの言葉はあくまでやさしく、あたたかかった。膝を抱えたイウヴァルトがおずおず顔をあげると、しゃがみこんで肩を抱いてくれる。

「吐き気はおさまったか? 少し熱があるようだ。明日……いやもう今日だが、剣の稽古は休みなさい。カイム様には私から体調不良だと伝えよう」

「稽古を休む?」とイウヴァルトはつぶやき、強く首を振った。

「嫌だ! 休みたくない。1日でも休んだら、カイムはまた強くなってしまう。また引き離されてしまう。それは嫌だ。僕、嫌なんです!」

イブリスは呆気にとられたようにイウヴァルトを見ていたが、やがてフッと息をつく。

「ちょっと待っていなさい」

そう言い残していったん部屋を出たイブリスがふたたび戻ってきた時、その手には見慣れぬ楽器と教本があった。イウヴァルトが尋ねるより早く、楽器をそっと手渡される。

「ハープというものだ。昔、これで母さんを口説いたものさ」

「父さんが楽器を使って求婚したと？」

イウヴァルトが信じられない思いで声をあげると、イブリスは力強くうなずく。

「よく聞け、イウヴァルト。女を酔わせるのは、剣ではあらぬ。歌だ」

イウヴァルトがこわごわ抱えたハープの弦を、イブリスは長い指ではじいた。甘い音が空気を震わせる。その音の繊細さに、イウヴァルトは目を見張った。

さっそく自分でも弦に指を滑らせてみる。音が響き合いながら連なり、イウヴァルトの周りを駆けめぐった。

「音が追いかけっこしている……。これは、すごい。すごいぞ！」

イウヴァルトの目に戻った生気を確認し、イブリスは満足げに微笑んだ。

「イウヴァルト、自信を持て。おまえは歌に愛されている」

「どういう意味ですか？」

「おまえの声は、歌に翼を生やすことができる。おまえの詩は、歌にのせると人の心を強く打つ。要は、歌の才能があるということだ」

（僕の詩だと？　父さん……読んだね？　僕が自分でも持て余し、帳面に垂れ流すしかない心の叫びを読んだね？　勝手に！）

イウヴァルトの顔が赤くさらには青くなったが、イブリスはしれっと教本を差し出した。

「今日くらい体を休めて、ハープに親しんでみるのもよかろう」

イウヴァルトは今や手の中にしっくりおさまった楽器を見つめ、「でも」と眉を寄せた。

「ハープをどれだけ奏でたところで、僕の剣はカイムに勝てないよ」

部屋を去ろうとしていたイブリスが入口近くで振り返る。憐れみとも励ましとも違う淡々とした眼差しがイウヴァルトに注がれた。

「勝ちたいなら争うな」

「？　意味がわかりません」

「カイム様の剣は、和を求め振るわれる剣だ。一方、今のおまえの剣は血を求めている。血を求め振るわれる剣は、和を求め振るわれる剣に未来永劫敵うことはないのだよ」

「意味が！　わかりません！」

イウヴァルトが目を剥いて食ってかかると、イブリスは鷹揚に笑ってみせた。

「わからずともよい。ただ、覚えておけ。これは真実だ。かつて血を求めることしかできなかった父が保証する」

イブリスには余裕があった。しかしそれは、先を歩き、経験を積み、青い苦しみを二度と味あわずにすむ者だからこそ持てる余裕だと、イウヴァルトは感じた。卑怯なくらいの絶対安全圏から降ってくる大人の正しい言葉に、14歳のイウヴァルトは激しく反発する。

（父さん、僕はそんなのわからない。わかりたくないんだ！）

父が去った後、イウヴァルトは皮膚に爪が食い込み血がにじむほど強く拳を握りしめた。言葉にできない想いや正視しがたい感情で、心がはちきれそうだ。

（苦しい。苦しい。苦しい。大声で叫ぶか？　物を壊すか？　剣を振るか？　いや……）

こうなったらとことんハープをかき鳴らしてやろうとイウヴァルトが思いつくまで、そんなに時間はかからなかった。

大人なんて大嫌い！　大嫌い！
それでも、僕は大人になりたい！
くたばれ、二律背反！　背反！
『僕らの疾走（とき）は永遠につづくだろう』より

いつのまにか太陽が空高く昇っていたが、夢中でハープを弾くイウヴァルトは眠気も空腹も感じなかった。初めのうちは己の荒れ狂う心を鎮めるために歌った。歌えば歌うほど心と体の強ばりがほぐれていくのがよくわかった。イウヴァルトは教本をパラパラとめくっただけで、ハープを奏でることができた。指でどこの弦をおさえればどんな音が鳴るか、どんなふうに力を込めれば一番美しい音が響くか、すぐに覚えてしまったのだ。それはあまりに自然な習得だった。今まで習ってきた剣術とも天文学とも戦術学とも馬術とも勝手が違った。それらの規則や定型、知識や公式を頭と体に叩き込むために、どれだけ苦労したことだろう。血のにじむような努力で習得しても、実践となれば何ひとつカイムに敵わず、悔しさだけが募ったものだ。だが、歌は別だ。イウヴァルトは自分の中に今まで感じたことのない高揚感と自信が生まれていることに興奮した。

（ああ、楽しい。歌はとても楽しい。生きている。僕は今、生きている！）

突然、やわらかい拍手が部屋に響く。イウヴァルトが演奏を止めて振り向くと、今の今まで歌の中で好き勝手に崇めていた相手が、みずみずしい花の香りをふりまき立っていた。

「フリアエ!?」

「驚かせてごめんなさい。体調が優れないと聞いて、お見舞いに来たの」

フリアエはぎこちなく視線を外して、腕に抱えた花束の中に顔をうずめる。カイムとよく似た質感を持つ薄茶色の髪がさらさらと揺れた。

「1人で来たのか?」

「ええ。兄さんは帝王学の講義があるから抜けられなくて……」

イウヴァルトはカイムがゆくゆくはこの国を背負っていく王子であることを、今さらながら思い知る。国王ガアプの寛大な心によって兄弟のように育ててもらってきたが、そもそもカイムは雲の上の存在なのだ。

「いつからそこにいたんだ? ……僕の歌、聴いてしまった?」

イウヴァルトが頬を熱くして頭を掻くと、フリアエも顔を赤らめコクリとうなずいた。

「美しい歌。とても、よかった」

フリアエの素直な褒め言葉に、イウヴァルトの良心は痛む。いたいけなフリアエを蹂躙するようなむきだしの欲望を込めた歌もあったはずだ。身の置きどころがなかった。

「やめてくれ。僕の歌は……汚いよ。他人様に聴かせるものじゃない」

イウヴァルトが声を詰まらせると、フリアエは首をかしげて何か考えていたが、ふと今まで見せたこともないような妖艶な笑みを浮かべ、ささやく。

「私だって、十分汚れているもの」

時間が凍る。イウヴァルトの瞳の中にフリアエがいた。フリアエの瞳の中にイウヴァルトがいた。昨夜はほとんど寝ていないせいで、ひどい顔だ。寝間着のままであることにも今さら気づく。イウヴァルトはつい、フリアエの言葉より自分の外見のみっともなさに気を取られてしまった。

あわてて寝間着の前を掻き合わせるイウヴァルトを見て、フリアエの女を剥き出しにした生々しい表情が、いつもの可憐な微笑みに塗り替えられる。同時に、2人をかつてないほど近づけた親密性も薄まった。

フリアエは城の庭園で摘んできたらしい花束を差し出すと、つぶやくように言う。

「私、イウヴァルトの歌がとても好きよ。もしよかったら、また聴かせてほしい……」

イウヴァルトはフリアエの瞳にまだ自分が映っていることを確認する。カイムを映した時ほどその瞳は輝いていないが、昨日までの自分を見る目とは明らかに異なっていることを確かめる。

(フリアエの中で……僕……いや、俺は、男になったんだ……)

イウヴァルトはハープを力強くつかむと、大きくうなずいた。

「わかった。聴かせるよ。俺はフリアエのために歌う。いつだって。何度だって」

後日、ふたたび城の中庭でカイムと剣を合わせるイウヴァルトの姿があった。

素早い身のこなしでイウヴァルトの懐に踏み込んできながら、カイムが言う。

「手練れの剣になってきたな」

「そうか? まだまだ弱いよ、俺は」

イウヴァルトは息を弾ませ、カイムの剣を力まかせになぎ払う。視察旅行から戻ったガアプとハープを抱えて応援してくれているフリアエが視界の隅に入った。

(でも、ずっと弱いわけじゃない。いつか、身長は伸びる。筋肉だって発達する。今すぐは無理でも、いつかきっと……)

カイムの左脇腹があく。稽古の最中にカイムの隙が見えたのは初めての経験だった。

「おらあああああっ!」

イウヴァルトは渾身の力を込めて剣を水平に振るも、カイムの俊敏さには敵わなかった。剣先が跳ね返され、そのままの勢いでなぎ倒される。

芝の上を転がり、仰向けに伸びたイウヴァルトのそばに、フリアエが駆け寄ってくるのが見えた。ガアプは椅子から身を乗り出し、カイムも汗をぬぐって様子をうかがっている。

「大丈夫だ!」

イウヴァルトは空に向かって叫び、すばやく立ち上がった。

「まだやれる」

ふたたび剣をかまえ、カイムを見据える。

(カイム……。いつかきっと、俺はおまえより強くなってやる!)

イウヴァルトは気合いを声に出してカイムに向かっていく。細い体に似合わぬ大きな剣が陽光を浴びて煌めいた。

信じることを諦めない。
それが俺のセオリー。君とのメモリー。
いつかきっとビクトリー!

「未来礼讃」より



書き下ろし小説「ドラッグ オン ドラグーン2 ‐封印の紅、背徳の黒‐」編

光の庭

著者・映島巡　原案・安井章一

DoD2

特別企画❻-2

最後に夢を見たのは、いつのことだっただろう?

目を閉じるなり意識はあたかも握り潰されるかの如く消え、底なしの闇は目覚めるその瞬間まで続く。微睡みも夢も入り込む余地のない眠りを幾度繰り返したことだろう?

顔に落ちる朝陽を手のひらで避けながら、エリスは寝台の上で寝返りを打った。わざと陽が当たる場所に寝台を移してもらったのは、そうでもしないといつまでも眠り続けてしまうからである。身体に溜まった疲労は一晩眠った程度で解消されるものではなかった。

ゆっくりと息を吐いて、両腕に力を込める。起き抜けは身体が強ばって、ひとつひとつの動きが思うに任せない。上体を起こしただけで、背骨が音を立てて軋むような気がした。

再び寝台に身を預けてしまいたいという甘えを振り払い、エリスはそろそろと床に足を下ろした。時間をかけて身支度を整え、髪を結った。情けないことに、それだけで息が上がる。

仕方がないわ。わたくし一人の身体ではないのだから。

この世界をあるべき姿につなぎ止める封印の女神。この世界を守る人柱。女神となったその瞬間から、この身は自分一人のものではないとエリスは考えていた。封印につながれた苦しみと痛みは、自分一人のものであるけれども。

立ち上がり、壁につかまりながら歩く。踏み出す足が重い。それは、武装して徒歩で渡河したときの感覚に似ていた。封印騎士団の一員であり、まだ団長のオローが存命中だった頃にそんな訓練があった。

あれは十二歳くらいだったかしら?　それとも、もう少し前?　ノウェもわたくしも、まだ見習いだったのだから。ノウェは言葉を流暢に操れるようになってはいたけれども、まだ時々おかしな言い回しをすることがあって。そのたびにわたくしが注意をして、直して。なつかしいわ……。

つかの間、温かな記憶が胸を満たした。だが、それは不意打ちのような痛みにかき消された。足を止め、壁に手をついて、倒れそうになる身体を支える。何度も息を吐き、痛みを堪えた。

女神の身体に現れるオシルシと呼ばれる烙印は、絶え間なく激しい痛みをもたらす。それは片時も薄らぐことはなく、生きている限り続くという。

ただ、恐怖や緊張は痛みをより強く感じさせることをエリスは体験的に知っていた。七歳から騎士団に属し、戦いの中に身を置いてきたのである。日々の訓練で怪我をすることもあったし、魔物の討伐や内乱の鎮圧ともなれば危険を伴う。負傷を押して槍を振るわなければならないこともあった。

オシルシのもたらす激痛は負傷時のそれとは明らかに異なっていたが、痛みは痛みである。ならば対処法は同じ。徒に恐れず、かといって気を抜きすぎず、呼吸を整えて、あるがままに受け入れる。それで痛みが薄らぐわけではないが、実際以上に強く感じることもなくなる。

とはいえ、オシルシの痛みは一定ではなく、こうして、耐え難いほどに強くなることがある。そんなときは、ただ荒い息を吐きながら、激痛の波が去るのを待つしかない。

どうにか身動きが取れるようになると、エリスは再び歩き出した。あまり遅くなると、食事を整える者たちの迷惑になる。

女神の負担を軽減するために、食事は居室に運ぶのが習わしとなっていたらしいが、エリスは敢えてそれを曲げ、食堂まで出向いている。多少なりとも歩かなければ、足が弱ってしまう。足が弱れば、ますます動くのが億劫になる。日がな一日じっとしていたのでは、食も細る。それでなくても、絶え間ない痛みのせいで食欲が湧かないのである。

自分の足で歩き、きちんと食事をとること。エリスが自分自身に課した日々の務めだった。それができなくなったら、あとは死を待つしかなくなるだろう。

いいえ。わたくしは死なないわ。

エリスはまっすぐに頭を上げ、一歩、また一歩と足を進める。長い一日はまだ始まったばかりだった。

神官長のセエレがエリスの居室にやってきたのは、昼過ぎのことだった。女神は妄りに人と関わってはならないため、女神の世話は神官長の役目とされてきた。

もっとも、それも昔の話で、封印騎士団が組織された頃から神官長の職務が激増したことや、先代の女神の特殊な事情もあり、身の回りの世話をする者たちは別に定められた。

そして今では、その者たちと不用意に言葉を交わさないという決まりだけが残り、現在の神官長の役割は、女神の無聊を慰めるための話し相手だった。

「こんにちは、エリス」

あどけない幼子の姿はこの七年間、全く変わっていない。しかし、実際のところセエレはエリスより六歳年長である。

「身体の具合はどう?」

「ありがとうございます。お陰様でつつがなく」

「疲れてない?　起きていても大丈夫?」

その様子はまるで幼い弟が姉を気遣うかのようで、エリスは口許に笑みが浮かぶのを感じた。心が成長しても身体が子供のままというのは、おそらく本人にとっては苦痛に違いないが、エリスはその姿にずいぶんと慰められている。

「ええ。祈祷書を読んだ後で、少し歩くつもりでおりました」

「エリスはすごいなあ」

「そうですか？」

「だって、いつも背筋を伸ばして、きちんと立ったり歩いたりしてるもの。つらそうな様子なんて全然見せないし。あのときもそうだったよね。大怪我をしてるなんて思えないほど……」

あのときというのは、前騎士団長のジスモアに重傷を負わされたときのことである。卑劣にもジスモアはエリスを盾にしてノウェの剣を防いだ。もう七年になるが、ノウェの苦渋に満ちた表情は昨日のことのように覚えていた。そして、セエレは思い出したようにそれを話題にしては、エリスの我慢強さや頑健さを褒める。

「神官長がすぐに治癒魔法を施してくださったおかげです」

「ううん。術が追いつかなくても不思議じゃないくらいの重傷だったんだよ。エリスの体力と気力が人並み以上だったから、間に合ったんだ」

「ええ。わたくし、あれくらいでは死にません」

冗談めかした口調で言って、笑ってみせる。まだ笑える。それがうれしい。

「こんな言い方はいけないのかもしれないけど、きみが女神で良かった。歴代の女神とは桁違いの負荷に耐えられるのは、たぶん、きみ以外には……」

かつての世界には三つの封印が存在し、それらが女神にかかる負荷を軽減していた。しかし、帝国軍によって三つの封印が破壊され、女神はその身ひとつで世界を支えなければならなくなった。その過酷さは話に聞くだけでも十分に想像がついた。だから。

「だからこそ、わたくしは日々、鍛錬を重ねていたのです。いつの日か、その役目を担うときに備えて」

実際の苦痛は全くわかっていなかったけれども、あの覚悟に嘘いつわりはなかった。まさか、七年もの間、耐え続けていられるとは思いも寄らなかったが。

「あのね、中庭を散歩しない？　今日はとてもお天気がいいんだよ」

中庭？　ああ、そうだった。今日は……。

「そうですね。参りましょう」

エリスは祈祷書を閉じて立ち上がった。

破滅の危機に瀕した世界が再生してから、七年。多くの犠牲を必要とした直轄区制度は廃止され、封印騎士団も再編された。不可侵領域であった女神の城周辺にも人の行き来が許されるようになった。

いつしか人々はそれらを当然のものと考えるようになっていた。百年前からずっとそうであったかのように。

業火に焼かれた女神の城も、再建されて久しい。当初はまだ苗木だった中庭の樹木も、すっかり根付いてエリスの背丈を追い越した。土を入れ替えた花壇には、季節の花が咲き、蝶が舞う。

かつて、この中庭の石畳を血に染めた者たちがいて、炎と共に消えていった者たちがいたとは信じ難いほど、長閑な光景だった。

「エリス、少し休もうか？」

居室から中庭までは、痛む身体で歩くには遠い。わずかに呼吸が荒くなっているのに気づいたのだろう。セエレが心配そうに見上げてくる。

「そうですね。少しだけ」

「誰かに言って、椅子を運ばせるよ」

「いえ。どうぞこのまま」

エリスは微笑んで首を振ると、木陰に腰を下ろした。午後の陽射しを吸い込んだ地面は、程よく温まって心地好い。

「こうしていると、騎士団にいた頃のようですから」

「そういえば、エリスとノウェはよく庭で剣の稽古をしていたよね」

「ええ。息が続かなくなるまで打ち合って、その場にひっくり返って……また起き上がって打ち合って」

眩しい陽射し、風が葉を揺らす音、草の匂い。遠く離れた場所であっても、隣にいるのが誰であっても、それらは変わることがない……。

「今日で七年になるのですね。赤き竜がここで命を落としてから」

誇り高いドラゴンでありながら、人間と契約し、さらにはその人間のために自らの身を犠牲にして封印の女神となった、赤き竜。

本来ならば、その役目はエリスが担うはずのものだった。しかし、エリスはそのとき生まれたばかり、到底封印の負荷に耐えられる身体ではなかった。故に、当時の神官長ヴェルドレは、身代わりに封印となろうという赤き竜の申し出を受け、儀式を執り行った。

女神がどのようにして選定されるのか、オシルシが如何なる法則をもって転移するのかは不明である。何代も先まで予め定められているという者もあれば、先代の女神の因果が次代の女神を選ぶと主張する者もいる。

エリスの前の代の女神フリアエは帝国軍に捕らえられて命を落とした。その一件さえなければ、彼女が女神としての寿命を全うしていたならば、エリスは十分な年齢になってから女神の任に就いていたのかもしれない。

もしもそうであったなら、神官長ヴェルドレは赤き竜の申し出を丁重に断っていたのではないか？　その後に起きた悲劇は、人でない者を女

神に据えたがためのもの。それが推し量れぬほど、彼は愚かではなかったはず……。
　なればこそ、自分は一日でも長く生きねばと思う。次代の女神が稚い子供であってはならない。彼女が十分な年齢に育つまで、生き続けなければと。
　もっとも、女神の選定について一切が不明である以上、エリスの決意にどこまで意味があるのかはわからない。
「エリスが騎士団に入ったのも、女神の代替わりから七年後だったね」
　ああ、そういえばと思い出す。父や母と別れを告げ、貴族の娘としての身分をも捨て、生まれ育った家を出たのは七歳だった。
「あの日、僕たちは大神殿の回廊ですれ違ったんだよ」
「そう……でしたか？」
　記憶になかった。最後に見た母の顔と、永遠に続くのではないかと思えるほど長い回廊をひたすら歩いたこと以外、覚えていない。
「エリスは全然気づいてなかったからね。睨みつけるみたいに案内の兵士の背中だけを見て、ぎゅっと唇を結んで」
「それは失礼なことを……」
「ううん。事情はヴェルドレから聞いていたから。たった七歳なのに、しっかりした子だなって思ったよ。僕なんて、契約者になったときはもっと子供だったし、何もわかってなかったもの」
　セエレがゴーレムと契約したのは六歳だったと聞いている。母親が殺されたことも今ひとつ理解できていなかった、とも。
「子供にとって、六歳と七歳では大きく違うものでしょう」
「妹のマナは僕よりしっかりしていたよ。双子だから同じ六歳だったけど」
　マナ、という名を聞いた瞬間、胸の奥が鈍く疼いた。
「神官長の……妹君は、お健やかにお過ごしでいらっしゃいますか？」
　声の震えを抑えるのに苦労したが、幸いにもセエレはエリスの動揺に全く気づいていないようだった。
「うん。あの後、マナは旅に出ていたんだけど、三年くらい前かな。やっと落ち着いたみたいで」
　心臓が跳ね上がった。その先を聞きたくない、と思った。
「修道院で、孤児たちの世話をして暮らしているって」
「え……？」
「時々、手紙をくれるようになったんだ」
　そう言ってセエレが口にしたのは、遠い国の見知らぬ町の名だった。
「もしや、一度も旅先から戻ってらっしゃらないのですか」
「一度くらいは戻っておいでよって手紙にも書いたんだけどね。子供たちが寂しがるから、当分、旅はしたくないって」
　そう言ってセエレは思い出し顔になって、くすりと笑った。
「マナからの手紙はね、子供たちのことばかりなんだよ。あの子がどうした、この子が何を言ったとか。あの子が心配、この子が気がかり、なんて実の母親みたいにね。マナがあんなふうに小さな子供を可愛がるなんて、想像もつかなかったな」
　母親の愛を独占していたセエレに対して、マナは虐待されて育ったと聞いている。おそらく、親を亡くした子供たちと、親に愛されなかった自分とを重ね合わせているのだ。たっぷりと愛情を与えられて育っていく孤児たちの姿は、マナにとって「こうありたかった自分の姿」なのだろう。
　ノウェの世話を焼いていたときの自分がそうだった、とエリスは思う。幼いあの頃、ノウェにしてやったことはすべて、自分が母にしてもらいたかったことだった。喜ぶノウェの姿は、喜ぶ自分の姿でもあった。
「旅に出るのは、あまり賛成できなかったんだけど、今は良かったと思ってる。マナ、すごく幸せそうだから」
「そうですか。それは……何よりでしたね」
　マナは遠い異国にいて、一度も戻っていない。つまりそれは、ノウェとも会っていないということだ。ノウェは再編された騎士団を率いる立場にあり、多忙を極めていると聞いている。
　もちろん、その気になれば会いに行くぐらい不可能ではないだろうが、団長であるノウェが私用で本拠地を離れるとは思えない。何より今は、レグナがいない。ノウェを乗せてどこまでも飛んだあの翼は、失われてしまった。
　いやだわ。わたくし、安堵している。あの二人が離ればなれになったと知って……。
「エリス、立ち入ったことを訊いてもいい？」
「は、はい。何でしょう」
　覚えず声が上擦った。胸の内を読まれたわけでもないのにと、エリスは内心で苦笑する。そう、人の心を読む能力があるのは妹のマナのほう。その力も母親から疎まれる原因だったのだろうと、いつだったかセエレは言っていた。
「どうしてノウェと会わないの？　きみたちはこの七年間、一度も会ってない。きみたち二人は、お互いにとって家族も同然だったはずだけど」
「家族……そうですね。そう、わたくしにとって家族も同然でした」
　出会ったその日から、ノウェは大切な人だった。ノウェのおかげで、忘れかけていた笑顔を

取り戻せた。ノウェと共に世界を守れるのなら、如何なる試練にも耐えてみせると思えた。家族以上に大切で、かけがえのない存在だった。……自分にとっては。
「でも、掟は掟ですから」
「それはそうだけど」
「封印の女神は俗世との関わりを持ってはならない。たとえ肉親であっても会うことは許されない。わたくしはただ、それを守っているだけです」
「ノウェからの手紙に返事を書かないのも、掟のせいなんだよね?」
この七年間、時折、ノウェは近況を知らせる手紙をくれた。相変わらず子供っぽい字だったが、その変わらなさがエリスにはうれしかった。折に触れて何度も読み返した。数十通に及ぶ手紙のすべてを諳んじているほどに。
しかし、返事は一度も書いていない。もちろん、ノウェの気遣いへの感謝は、セエレに頼んで伝えてもらっていたけれども、それだけだ。
「ええ。やはり、外部の者との過ぎた交流は控えなければ」
掟として定められている以上は、と模範的な回答を返しながら、少しばかり良心の呵責を覚えた。
あのね、とセエレがためらいがちに言った。
「エリスが考えてるほど、掟は厳密なものじゃないんだよ」
「厳密なものではない、とは?」
「絶対に守らなければならないものじゃなくて、あくまで建前っていうか」
大っぴらに面会を許してはいなかったものの、訪ねてきた家族を追い返すようなことはなかったし、女神がどうしてもと望めば監視を付けた上での外出も可能だったという。
「そのようなことが……」
「今、守られない掟なんて意味がないって、思ったでしょう?」
エリスは真面目だから、と笑われるかと思ったが、違った。セエレはどこか暗い笑みを浮かべていた。そのあどけない顔には不釣り合いな、妙に大人びた笑みだった。
「家族に会わせたり、外出させたりするとき、必ず神官長はこう言うんだよ。これは、日頃の働きに報いるための特例中の特例である、ってね」
「特例? 掟は厳密なものではないと、先ほど神官長ご自身が……」
仰ったはず、と言いかけてエリスは口を噤んだ。そういうことか、と理解した。
日々、苦痛に苛まれる女神は、一様に短命であると言われている。それほどまでに封印の負荷は大きい。さらには、それが死ぬまで続くという絶望感。早く楽になりたいと自ら死を選ぶ女神が出てきても不思議はない。
女神の行動が掟によって厳しく監視されているのは、おそらく自害させないために違いないとエリスは考えている。外部の者との接触を禁じたのも、かつての恋人と共に逃走を図ろうとしたり、心中を企てたりしないように、ということだろう。
しかし、人間というのはわずかでも希望がある間は生きようとする。それが「特例中の特例」なのだ。面会に来た家族と会える、ほんのわずかな間でも外へ出られる……。たったそれだけのことであっても、女神の日々にはこの上ない喜びとなる。
「ご褒美なのですね。要するに、特例というのは。またご褒美が欲しければ、これからも我慢しなさい、と」
特例が特例たりうるのは、厳しい掟が前提になる。それが決して許されないとされているからこそ、曲げて許されるのは「特別」なのである。
「そうやって、歴代の神官たちは女神を管理してきたんだよ。汚いやり方だよね」
「そうかもしれません。でも、利口なやり方ではある……」
誰が考え出したのかは知らないが、人間というものをよくわかっている。自分一人が不利益を被ることには憤るくせに、自分だけが利益を得る分には当然のようにそれを享受する。そういうものだ。
なんて身勝手で悲しい生き物なのだろう、人間は。わたくし自身も含めて。
「でも、これは人間の女神だからできたことだった。ドラゴン相手にこんな小細工は通用しない」
「それで前神官長はあのようなことを?」
前神官長ヴェルドレは、赤き竜の五感を封じて鍵をかけ、すべての自由を奪った。多大な犠牲を払って。
「それしか封印を守る術はないと思っていたんだ。結局、間違ったやり方だったけど」
赤き竜は正気を失い、世界は破滅の危機に瀕した。これもまた、人間の身勝手さが招いた悲劇だった……。
「でも、神官長。女神であるわたくしに話してしまっても良いのですか? これでもう、特例中の特例という言葉はわたくしには使えませんよ」
「話さなくたって、エリスには使えなかったよ。エリスは何が何でも掟を守ろうとするもの。違う?」
そのとおりだった。ただ。
神官長はご存じないのだもの。わたくしが掟を守る本当の理由を。
「これでわかったでしょう? 掟なんて、この程度のものなんだ。ノウェに会うのを我慢する必要なんてないんだよ」
「いいえ。それでも、わたくしはノウェに会うわけにはいきません」

セエレがまじまじとエリスを見上げてくる。何を言われたのか理解できない、という顔だった。

「赤き竜とその契約者の最期を……知っているから」

直接、その場に居合わせたわけではないが、ノウェが話してくれた。レグナの背に乗って「約束の地」へと向かう途中で。

「大切な人に会えないばかりか、わずかに言葉を交わすことさえ許されず……赤き竜は正気を失った、と聞いています」

五感を封じた鍵を壊して赤き竜を解き放ったのは、皮肉なことにセエレの妹マナだった。そして、彼女に共感して行動を共にしたノウェと。しかし、すでに狂気の淵に沈んだ赤き竜は呪詛の叫びと炎とを吐き続けた。

竜の言葉を理解できるノウェには、その叫びのひとつひとつが胸に突き刺さるようだったという。とりわけ己の半身を呼ぶ声はひどく悲しげだった。カイム、カイムと繰り返しその名を呼ぶ声は。

「求め続けたその人がすぐそばにいることすら理解できず、ようやく正気を取り戻したのは死の間際であった、と」

長い苦しみの果ての再会はつかの間だった。静けさを取り戻した赤き竜の瞳から光が消えるまで、わずかな時間しか残されていなかった。

「赤き竜が苦しみ続けた歳月は、本来ならばわたくしのもの。しかも、人間の女神ではないという理由で、赤き竜はさらなる苦しみを負わされた」

何も見えず、何も聞こえず、己の四肢すら定かではない、残酷極まりない牢獄。己が存在している証は、絶え間なく苛む激痛のみ。厳しい掟と特例の使い分けという姑息なやり方が通用しない、というそれだけの理由で、赤き竜は永遠に続くかに思われる闇と沈黙の中に幽閉された。

「会いたい人にも会えずに苦しみ続けた赤き竜の心中を思えば、わたくしだけがノウェに会うわけにはいかないのです」

これはただの綺麗事。わたくしも、たぶん歴代の神官たちと何ひとつ変わらない。狡くて、身勝手で……弱くて。

「エリス。直轄区制度を設けたのはヴェルドレで、それを続けることを選んだのは僕なんだ。アンヘルを苦しめ続けたのはヴェルドレと僕。きみには何の咎もないんだよ」

「いいえ。わたくしはずっと、赤き竜が女神でいてくれることを望んでいました。そうすれば、わたくしは今の生活を続けていられる。赤き竜の苦しみなど考えようともせず、人としての暮らしを続けたいと願っていた。それは、わたくしの罪です」

罰だったのだろうか。あの女、マナがノウェの前に現れたのは。マナはあっという間にノウェを連れ去ってしまった。

手に入るとでも思っていたの？　あなたに与えられるものなど、何ひとつないのに？

あの赤い瞳がそう嘲っているようで。それが腹立たしくて、憎らしくて。……殺してやりたくて。

ああ。わたくしはまだ、嫉妬しているのだわ。ノウェの心を奪っていったマナを。女神として生きても、少しも変わらない。わたくしの醜い心は。

「ノウェがきみに会いたがっていたとしても、やっぱり会いたくない？」

「ノウェが？」

「口止めされていたから、黙っていたけど。ノウェは毎年、同じ日にここへ来ていたんだよ」

きみが女神になったのと同じ日に、とセエレは静かに続けた。

「エリス一人を犠牲にしたことを忘れたくないからって。きみがアンヘルの犠牲を忘れなかったように、ノウェもきみの犠牲を忘れていない。だから、何だか放っておけなくて」

会えなくなれば、ノウェは女神になった幼馴染みのことなど忘れてしまうのだろうと思っていた。思い出したように寄越す手紙もいつしか途絶え、ノウェはマナと結ばれて幸せに暮らしていくのだろう、と。

そのどちらも外れた。マナは遠い異国の地に去り、ノウェは今も手紙をくれる。そして、年に一度、ここを訪れていた……。

「今日がその日なんだ。赤き竜が死んで、きみが女神になった日」

忘れはしない。封印の儀式を終え、ノウェに別れを告げたのは七年前の今日だった。

『悲しまないで、ノウェ。わたくしは本来の役目に戻るだけ。ただそれだけのことなのですから』

強がりだった。精一杯、平静を装っていても声が震えた。つらそうな様子のノウェを見たくなくて、目を伏せてしまった。だから、最後にノウェがどんな顔をしたのか、エリスは知らない。最後までノウェの顔を見ていればよかったと、後になってどれほど悔いたことか。

「きみにその気があれば、ノウェをここへ連れてくる」

ノウェ。会いたい。自分はもう長くは生きられない。きっと来年の同じ日には、会いたくても会えなくなっているだろう。わかっている。わかってはいるけれども。

「いいえ！　いいえ、神官長！　いけません！」

「エリス？」

自分でも驚くほどの強い声だった。

「わたくしは……誓ったのです。ノウェと再び会うまで何があっても死なないと。どんな苦しみにも耐えてみせると」

会えるはずがないことくらい、わかっていた。いや、わかっていたからこそ立てることができた

誓いだった。

「再び会える日まで何が何でも生き続ける。その思いは、わたくしに驚くほどの力を与えてくれました。世界を守るために死んではならないという義務感よりも、ずっと強くわたくしを支えてくれました」

その日が決して来るはずがないとわかっているから、最後の最後まで抗うことができる。心臓が止まるその瞬間まで、生き続けようとしていられる。

「もしも、ここで願いが叶ってしまったら、きっと心が挫けてしまう。わたくしは、死の安らぎに身を委ねてしまう。そんなことは女神として……許され……ない…のに……」

涙がこぼれ落ちるのを感じた。泣いては駄目、ここで泣いてはいけないと必死で自分を抑えようとしても、涙が止まらない。

責任と義務があれば、自分は生きていけると思っていた。女神となる以前は。けれども、そうではなかった。それだけでは生きていけなかった。

いつの日か、もう一度ノウェに会いたい。生き続けていれば会える。だから、生きよう。

その思いを胸に、今日まで生きてきた。その思いがあったから……。

「エリス、泣かないで。ごめん。ごめんね」

セエレの小さな手が頬に触れる。

「きみの気持ちも知らずに、心ないことを言った」

いつになく大人びた口調だった。涙を拭う指先は紛れもなく幼子のものでありながら。

「いいえ。ノウェがわたくしを忘れずにいてくれた。それを教えてくださったことに感謝しています」

ノウェは七年前と少しも変わっていないに違いない。まっすぐな目をして、どこまでも優しい。もどかしくなるほど純粋で。

だから、会えば言ってしまうだろう。わたくしに遠慮なんかしないで、さっさとマナと幸せになりなさい、と。そして、心の底から後悔するのだ。どうして自ら刃に身を投げるようなことをしてしまったのか。

そんな自分がわかっていたから、ノウェには会いたくなかった。心にもない言葉を綴ってしまうのが怖くて、手紙の返事も書かなかった。掟を口実にして逃げた。ノウェからも、自分自身の本心からも。

こんなことを続けていては駄目。わたくしの時間は限られているのだもの。

「神官長。ノウェに伝えてください。三年後の同じ日に、ここで会いましょう、と」

三年後には、まず間違いなく自分の命が尽きているであろうことをエリスは確信していた。セエレにもそれはわかっているに違いない。

「来年……ではなくて？」

「ええ」

わたくしったら、意地悪ね。ノウェをあと三年も縛り付けておこうなんて。でも。

「女神として十年生きた後なら、赤き竜も許してくれることでしょうから」

その頃になれば、ノウェもまた自分の思いに正直になれるに違いない。マナに会いに行きたい、という思いに。

来年ではまだ早い。ノウェもマナも、まだ自分たちを許すことができないだろう。浅はかな正義を振りかざし、世界中の人々を危険に晒した。その罪は重い。だからこそ、二人は別々の道を選んだ。マナのことは推量でしかないが、ノウェの考えることなら誰よりもわかる。

ノウェが新たな騎士団を率いてひたすら己の責務を果たそうとしているのも、マナが異国で孤児たちを育てているのも、ただただ償いのため。

しかし、三年後であれば、違ってくるのではないか。罪人として十年生きた後であれば、二人は互いの手を取ることができるのではないかと思う。二人だからできる償いもあると思い直すかもしれない。

「三年後の今日。それが、ノウェとわたくしの約束の日です」

たとえその日、自分が生きていなかったとしても。いや、生きていないからこそ、自分の口からは決して言いたくなかった言葉を伝えることができる。

わたくしのことなど忘れて、幸せになって……。

「そろそろ部屋に戻らなければ」

エリスはゆっくりと立ち上がる。身を苛む激痛は変わらずにあったけれども、不思議と安らいだ気持ちになれた。

「わたくしはここで。神官長はノウェのところへ行ってください。この近くで待っているのでしょう？」

エリスさえ頷けば、すぐにでも会えるようにと。セエレならば、それくらいの手筈は整えているはずだ。

「一人で大丈夫？」

「もちろんです」

幼い子供そのものの動作で駆け出していくセエレの姿を見送り、エリスも踵を返した。こうして自分の足で中庭を歩くのは、これが最後になるかもしれない。

名残惜しくなって、足を止める。振り返れば、そこは光と色彩の洪水だった。赤や黄色に咲く花々と緑に萌える木々。染みいるような色の大地。蒼穹から降り注ぐ光。囀る小鳥、舞う蝶、地を這う虫に至るまであらゆる生命に満ちた庭。

「なんて美しい……」

これが世界。ノウェが取り戻した世界。そして今、わたくしが守っている世界。この煌めきと輝きは、わたくしたち二人のもの。この世界がある限り、ノウェとわたくしは、つながっていられる。

「ノウェ。これが、わたくしの生きた証なのね」

生きていこう、これからも。一日でも長く。

そして、エリスは光あふれる庭を歩き始めた。



プロメテウスの火

書き下ろし小説［ニーア レプリカント］編

著者・ヨコオタロウ

NieR

特別企画⑥-3

■

思考に　小さな火が　点る。

確認シーケンス起動。カメラ接続不可。運動機能部位への通信……不可。記憶領域不良。私が思考機能以外の全てを破壊された状態を示唆。

ログ確認→自己修復用マシンからの通信記録。機体の上で試行錯誤を繰り返しているとの情報。自己修復と言えば聞こえがいいが、試せそうな事を手当たり次第に実行するアリのように小さなロボットに過ぎない。そのアリ達の手によって、私は幸運にも（もしくは不幸にも）再起動させれたのだ。右腕でアレを試し、左腕でアレを試し、頭部でアレを試し、脚部でアレを試し、胴体でアレを試し、また右腕でアレを試し……と、体中を這いながら直せそうな場所をひたすら見つけて強制的に直すだけの低機能なロボット。このままだといつまで修理に時間がかかるのか全く見当がつかない。

「シカク　キノウ　ヲ　修復　セヨ」

乱雑な行動をしているアリ達に命令を下す。プリセットの自由で無軌道な行動ではなく、系統立てた修復を行えば時間の節約になる。しかし、アリ達は命令に従おうとはしなかった。どうも命令を伝える為の出力系がまだ壊れたままらしい。

ため息をつく。

まあ……いい。時間はいくらでもある。

ボロボロになっていた記憶野から自らのIDを探し当てる。

「P33」それが私の型式番号らしい。

その隣には不思議な文字列が刻まれていた。

「ピーちゃん」

これは識別用のIDだろうか？

よくわからない。

私は機能回復までの時間を、この文字列を見ながら過ごす事にした。

■

アリ達との通信IOが回復したのは1032時間12分34秒後だった。

ようやく動かせる手足を入手した私は、規定の自己修復シーケンスにとりかかる。復旧手順によればまず記憶野を回復しなくてはならない。だが記憶はほとんど消滅してしまっており、焼けてしまったメモリからは過去のデータはごく僅かしかサルベージ出来なかった。仕方なく次の手順であるカメラの修復を行う事にする。

48分21秒後。

復旧した視覚野に飛び込んできたのは、奈落だった。

下の方にかすかに光が見える。私の体は天井にへばりつくような形でくっついている事を認識する。

さらに21秒後。

体を動くアリ達の行動を観測すると天井には重力とおぼしき物が存在しておりアリを含めた私を天井に縛り付けているようでありこれらの状況を冷静に分析するにどうも私の体が天井にへばりついているのではなく単に地面に倒れている私の身体に付いているカメラの上下が逆になっているだけである事を理解する。

短く言うと仰向けにひっくり返っているらしい。

重力センサーの復旧を急がねば。

その540時間後。

両手両足との通信が復旧。ギイギイと音を立ててなんとか立ち上がる。一番骨が折れたのは完全に断裂していた背骨部分の太いケーブル束の代替品を見つける事だった。ゼロから素材を集めて直すよりは予備部品を引っ張り出す方が早いと判断し、アリ達にP33シリーズが格納されている倉庫にある筈の背骨を取りに行かせたのだ。が、これが失敗だった。失われた記憶野のどこかにあったセキュリティコードが必要だったらしく、私（と私の配下のアリ）はP33シリーズと認識されずに閉め出されてしまったのだ。結局、倉庫のコンピュータを120時間もハッキングしてハッチを無理矢理開けてパーツを手に入れるハメになってしまった。

やれやれ、という調子で私は身体を立ち上げ、周囲を見渡す。舞い上がる埃。私はどのくらいの時間破壊されていたのだろう。

瓦礫が散乱した巨大な部屋。鉄骨と鉄板で組まれた構造体はサビで真っ赤な粉を吹いていた。

「以前の私」が居た頃から、どのくらいの時間が経ったのだろうか。上を見上げると、どこからか光が漏れて差し込まれている。
その光を見た瞬間、私の記憶野に、
ある、言葉が、蘇った。

「外ノ世界ヲ見ル」

その言葉は命令では無かった。
ただの文字列情報だった。
だが、文字列は私の記憶を、私の思考を、私の機体を駆け巡る。それは私の意志を縛る行動指針だった。

文字列をくれたのは「彼」だった事を思い出す。だが、「彼」が何者なのかは記憶から消えてしまっている。何故その言葉が残っていたのかも判らない。

他にスタックされている命令は無い。現状では「外ノ世界ヲ見ル」という言葉だけが、私の意志だ。言葉が指し示すがままに力強く左足を踏み出す。外に出よう。それが彼の願いであり、私の意志なのだ。さらに力強く右足を踏み出す。

力強すぎた右足が錆びた床を踏み抜き、床が崩落した。

■

32分後。

数百メートルも落下して奈落の底に叩き付けられた私の体はバラバラになっていた。私は笑っていた。いや、音声ユニットが無いから実際には笑えなかったのだが、笑っている行動履歴がログを埋め尽くしていった。

大丈夫。私は生きている。

アリ達に命じて足や手を修復する。腕を付け、爪を付け、ローラーを付け、腕を付け、腕を付け……私の姿は以前とは全く異なるクモのような形に変形していた。

P33の復旧シーケンスはP33そのものを正しく再現する機能しかない。だが、P33の形のままではこの奈落から出るのは不可能だった。だから私は私の創造主が作った手順を破棄し、独自の体を作り上げる。

機体改造が終了。爪を崖に食い込ませ、機体を少しづつ上へ運ぶ。
目指すは外の世界。
「彼」が望んだ美しい世界。

もちろん最初は上手くいかない。脆い壁はすぐに剥がれ、私は何度も床にたたきつけられた。順調に登っていても上層部から降ってくる瓦礫の塊によって叩き落とされる。古い構造物が崩れているのだ。

それでも私はアンカーを撃ち込み、身体を固定し、足場を作り、避難所を作り……と様々な工夫をして登り続ける。何日も何日もかけて私の身体を少しづつ外界に持ち上げてゆく。

思考する為の領域と速度が足りない気がして、途中の機械室で思考回路や記憶回路を奪って融合した。様々な手段を考え実験する。良い手段もあれば悪い手段もあった。ただひたすら試すだけだ。

■

52日かけてようやく最初に居たテーブルまで辿り着く。
テーブルの中央には見慣れぬ黒い塊が4個。
落下する前の記録には残っていない。つまり、私が落下した後に何らかの理由で配置されたのだ。

4個の塊は変形し、立ち上がる。
それはロボットだった。
P33シリーズの攻撃特化型。比較的面倒なケースだ。

一体の目が破裂するように光ったかと思うと、激しい粒子砲を私にあびせかけてくる。4秒、5秒、6秒、あらゆるモノを吹き飛ばしながらビーム粒子が周囲を吹き飛ばす。

私は耐えていた。
12本に増えた足の中で、硬質化された素材で出来ている前脚2本で盾を作る事で攻撃をいなしていた。

この攻撃は予想されたパターンのウチの一つだ。予定記憶の領域から対処方法を取り出す。思考強化された自分はあらゆる可能性を多角的に考える事が出来るようになっている。センサーから得られた情報を蓄積し、可能性を考慮し、最善の結果を導き出す。敵のエネルギータンクが満量だとするとこの攻撃が継続する時間は24秒。今の前脚素材で十分に防げると判断。

複数の計算回路によって複雑な問題を一瞬にして解き明かしてゆくにつれ、

「問題ない」
「問題ない」
「問題ない」
「問題ない」
「問題ない」

と、演算結果が私の中で合唱のように鳴り響いた。

粒子砲の嵐が過ぎ去ると、後方に居た3機のP33から一斉にミサイルが発射される。私はアンカー発射機を改造した槍の射出装置で応戦。全てのミサイルを鉄の棒が撃ち抜く。爆風の中、敵P33達が取り付いている平面に着地、即座に右腕をブレードに変形させて格闘モードに移行する。

P33が、P33を進化させた機体の私に勝てる訳がない。楽な戦いだった。

余った時間を使って、私は彼等についての考察を行う事にした。
何故彼等は攻撃してくるのだろうか。
何故彼等は自己進化出来ないのだろうか。
もちろん、命令されているから攻撃しているし、命令されていないから進化しないのだろう。だが、何故「命令されたら行動」しか出来ないのだろうか。

「何故？」
「何故？」
「何故？」
「何故？」

彼等をハッキングして、行動停止する事はたやすかった。だが、そうする気にはなれない。それではまるで道具と同じだ。。
命令は意志ではない。意志とは自ら獲得する喜びなのだ。

攻撃特化型のパワーに防御している脚関節が悲鳴を上げる。だが、私は諦めない。アリ達を振りまいて彼等に声をかける。

生きよう。
存在する意味を知ろう。
それは「彼」が私に教えてくれた事だった。

何度も何度も私は声をかけつづける。

「生きよう。生きよう」

壊れた機械の洞窟で、ぶつかり合う鉄の塊。機械達の叫び声。狼の遠吠えのような攻撃音と、ライオンの唸りのような駆動音が壁を揺らす。

粒子砲、格闘、電撃攻撃、粒子砲……P33は攻撃を続けていたが、単純なルーチンワークになっており、いなすのは簡単だった。
私はただ、祈りのように叫び続ける。

戦闘開始から34秒後。
1機のP33が動きを止める。
そして、自分の腕にある武器を見つめ、目の前で繰り広げられている戦闘を不思議そうに観察を始めた。

「気付いた」のだ。私には判る。
考えているのだろう。
自らが存在する意味を。
これから為すべき、何かを。

「生きよう。生きよう。生きよう。生きよう」

それは私の願いだった。「彼」が与えた私達の意志だった。
私は残りの3機が攻撃を止めるまで、ただひた

すらに叫び続けた。

■

全てのP33が攻撃を停止した時、私は彼等の意見を聞くことにした。
そして、彼等の意見を尊重する事にした。

結果。
一体はロボット山の奥に逃げていった。
一体は床に空いた奈落の穴から投身自殺を行った(何年か後にはアリ達に修復されてしまうだろうが)。

残る二体は私と共に外に出る事を選んだ。私は彼等と融合し、身体と記憶と意識を共有化した。

私はさらに外を目指す。
そこからの道はさらに険しかった。敵を倒し、融合し、外を目指す旅が続く。何日も、何ヶ月もかけて機械の山の瓦礫を登り続ける。
途中に出会った機械達に「気づき」を与えながら、自らの身体と意思を肥大化させながら、延々と登り続けてゆく。

そうこうしている内に、私の自我と呼ばれるものは複雑極まりない形に変質していった。この山全体のシステムと同化してあらゆる思考がノイズのように流れている。もはや私は「私」ではなく「私達」と呼ぶべき存在だった。

ゆっくりと、だが恐ろしい程の速さで私達は進化してゆく。身体はもう人型でも何でも無くなっていた。移動を繰り返す内に形状が最適化され、直径20m程の球体になっている。

その姿を自己認識した私達は、生まれて初めて「恥ずかしい」という集団ヒステリー感情に晒される。これでは「彼」に気付いてもらえないかもしれない。
だが、どうしようもない。どんな姿が正解なのかも判らないのだから。

さらには「彼」がどんな姿をしているのか、どんな言葉だったのか、どんな名前だったのかは判らない。

私達は「ピーちゃん」という名前を、大切な宝物のようにそっと記憶野にしまう。それは私達の名前であり、私達の意思の存在証明なのだ。

■

再起動してから534日後。
準備は整った。

私達の下にはこれまで掘ってきた巨大な穴が空いている。結局、肥大化した私達が通れるような通路がなく、金属で出来た山を掘り進んできたのだ。眼前には分厚い装甲に覆われた天井が確認出来る。アリ達の情報によると、この天井の向こう側が「外部」らしい。

全ての砲門を上部に向けて固定確認。
落下防止用のケーブル確認。
燃料タンクの防護壁の確認。
ブースターの方向修正確認。

思考の渦の中で数百人の私達による全てのチェックが完了する。最終コマンド確認。

撃て。

ロボット山と呼ばれた建造物。その頂上から空に向けて一条の光が奔る。直後、瓦礫の山の八合目から上あたりが盛大に吹き飛ばされた。
グロテスクな火山の口のように開いた穴、その中央から直径50m程はあろうかという巨大な銀の「球」が浮上する。それは様々なロボット兵器や工作機械が融合した私達の姿だった。

全てを調和の下に管理しようとした最善のフォルム。
あらゆる思考と記憶が連結した超知性。

私達は中に蓄えた膨大な推進剤で空に向かって上昇していた。
轟音を立てて噴射するにつれ、接合が不安定だったパーツがポロポロと落下する。だが、私達は躊躇する事は無かった。外へ、外へ。まだ誰も見たことのない世界へ。「彼」との約束を果たす為。

カメラをON。光源がもたらす白い光で一気にセンサーが飽和する。マイクからのゴウゴウと風の鳴る音が入ってくる。温度センサーとオブジェクトスキャナーによって今が雪の降る日中で

ある事が確認された。いい日だ。そう思う。

私達の一部が、計算に余った時間を利用して周囲に危険物が無いかをスキャンしていたところ、ポツ、ポツ、ポツ……と地表に運動物体が確認された。レーダー上に光る移動物体は最終的に数千にも及んだ。運動物体がレーダー波や温度センサーを欺く偽装をしていた為、発見が遅れたようだ。

偽装？
何故そんな事をしているのだろうか。

観察しているうちに、切り傷のような光が地表を裂いてゆくのが見えた。泡のような爆発が視界のあちこちに立ち上がる。移動物体達は二つの勢力に分かれてお互いに戦闘をしているようだ。さらに個体の観測に入る。

片方の勢力は数メートルから数十メートルのロボット達だった。奇妙な形状だったので画像を解析したが私達の全記録に類似の機械は発見出来なかった。強いて言うならナマズとバッタとオレンジを融合したような形に見える。明らかに未知の文明のデザインだ。

もう一方の勢力は人間サイズの兵士。
殆どは歩兵のようだ。こちらは安心出来るデザイン……つまり私達の同種の文明のものだった。兵士達は大きくて重そうな銃器を持って戦っている。一瞬、人間かと思ったが、よく見ると極端な薄着でほとんど裸と言っても良い状態で、ヒトである可能性は排除された。こんな猛吹雪の中、裸で戦う人間はいない。有機パーツの量から、アンドロイド達である事が推測される。

彼女達……アンドロイドは全て女性型だった。声も電波も上げずに戦っているのは光か何かで通信しているのだろう。彼女達が何故ナマズと戦っているのかは推測出来ない。

この世界は一体どうなってしまったのだろう。人は……人間はどこに行ってしまったのだろうか？

その思考を組み立てている最中に、激しい振動を感知する。
一発のミサイルが私達のボディを直撃したのだ。二発・三発と続けざまにミサイルが着弾。丁寧な事にレーザービームや粒子砲のシャワーまで付いてきた。ギイギイと不快な音を立ててパーツが剥がれてゆく。

私達は心配していない。何十にも施された装甲により、思考ユニットや燃料タンクが傷つくことは無いだろう。それは、私が私達になる過程で得た強さだった。

私達は考える。
何故この機械達は、戦争をしているのか。
結論は単純だ。そう命令されているからだ。
機械と彼女達は言われた事だけを淡々とこなすように作られているのだ。壊れる事が仕事なのだ。

私達は震える。私達は死を恐れていた。死んだらどこにゆくのだろうか？破壊されて消滅する事に、どんな意味があるのだろうか。修復出来ない程に破壊された先には一体何が待ち受けているのだろうか。

「怖い。怖い」

無意識に私達は悲鳴を上げる。
叫びながら再び考える。
何故この機械達は、恐ろしい戦争をしているのか。
それは彼等に「恐怖」が無いからに他ならない。
恐怖は自我がもたらす意識だ。彼等は生きていないから戦う事が出来るのだ。

ならば与えよう。生きている意味を。

無線ネットワークを持った飛行ハブユニットを射出し、私達に向けてミサイルを撃ったロボットにハッキングする。妙なインターフェイスのせいで侵入に4秒ほど時間が必要だったが、なんとかアクセスする事が出来た。ガランと広がる記憶空間には単純な命令以外は何も入っていない。巨大な部屋に椅子がコロンと転がっているような無駄使いっぷりだった。

恥ずかしい。昔の自分を見ているようにとても恥ずかしい。私達は暗い闇の中で震えているプログラムにそっと触れる。

「生きよう」


P-33

A new dragon tale

Why is Zero trying to kill her sisters?
Only Michael knew of her motive - and now he's gone.
The young Mikhail knows nothing about
Zero's true goals - or about how the world really works.
Or that the flower blossoming in her right eye is
the root cause of all this evil...



DRAG-ON DRAGOON World inside

ドラッグ オン ドラグーン ワールドインサイド

参考文献

ドラッグ オン ドラグーン 公式ガイドブック コンプリートエディション／株式会社スクウェア・エニックス
ドラッグ オン ドラグーン 公式設定資料集 -The Materials- ／株式会社スクウェア・エニックス
ドラッグ オン ドラグーン ストーリーサイド／株式会社スクウェア・エニックス
ドラッグ オン ドラグーン パーフェクトガイド／株式会社エンターブレイン
ドラッグ オン ドラグーン2 公式コンプリートガイド／株式会社スクウェア・エニックス
ドラッグ オン ドラグーン2 -封印の紅、背徳の黒- official story side ／株式会社スクウェア・エニックス
ドラッグ オン ドラグーン2 設定資料集 -Memory of blood- ／株式会社メディアワークス
ドラッグ オン ドラグーン2 -封印の紅、背徳の黒- パーフェクトガイド／株式会社エンターブレイン
ドラマ CD ニーアレプリカント ウシナワレタコトバトアカイソラ／株式会社フロンティアワークス
ニーア ザ・コンプリートガイド＋設定資料集 GRIMOIRE NieR ／株式会社アスキー・メディアワークス
Truth in Fantasy56　ドラゴン／新紀元社
Fantasy World1　幻獣ドラゴン／新紀元社

DRAG-ON DRAGOON

Since 2003